

ボルドー名誉教会参事会員
マリア会・汚れなきマリア修道会の創立者(1761-1850)

ギヨーム・ヨゼフ・シャミナード伝



マリア会総長 ヨゼフ・シムレル師著
ボルドー大司教ルコ枢機卿の書簡の序文添付

90, rue Bonaparte
Librairie Victor Lecoffre
1901年 PARIS

* 15, Cours de l'Intendance
* Librairie Féret Et Fils
* 1901年 BORDEAUX

松口廣見訳

シャミナード年(2011年1月22日～2012年1月22日)

マリア会日本地区本部

目次

ボルドー大司教ルコ枢機卿の書簡の序文	VII
はしがき	XVII
第1章 幼年時代 (1761—1791)	1
ペリギューの町 ❖ シャミナード家と親戚家庭 ❖ 父親のブレーズ ❖ ペリ ゴル地方の新しい発想 ❖ シャミナード家の信仰 ❖ 子供たち ❖ 二人の兄 の修道召命 ❖ 13 番目の末子ギョーム ❖ 幼児教育と母の影響 ❖ ペリギュ ーでの初期教育 ❖ 堅信の霊名ギョーム	
第2章 勉学 (1771—1785)	10
ミュッシダン ❖ セン・シャルル修道会 ❖ ミュッシダン高等中学校 ❖ 長 兄シャミナード ❖ 同校生徒の兄ルイとヨゼフ ❖ ヨゼフの初聖体 ❖ 聖体 の信心 ❖ 念とうを学ぶ ❖ マリアへの信心 ❖ 事故と不思議な全快：ヴェ ルドレへの巡礼 ❖ 兄兄弟の聖職召命とヨゼフの私誓願 ❖ ミュッシダン高 等中学校の臨時教員 ❖ ボルドーでの勉学 ❖ ノエル・ラクロワ師 ❖ ルネ とヨゼフパリへ ❖ 司祭叙階：ミュッシダンへの帰省	
第3章 初期の宣教活動 (1785—1792)	21
ミュッシダン高等中学校の管理者—セン・シャルル共同体の会則 ❖ シャミ ナード兄弟の評価 ❖ ジョゼット・ラブルスの妄想 ❖ ペリギューの聖職者 選挙人会議代議員 ❖ 長兄シャミナード師の帰天 ❖ ボルドーへ ❖ 聖職者 の市民憲章 ❖ ペリゴル地方の聖職者 ❖ シャルル修道会の模範 ❖ ルイと ヨゼフのミュッシダン滞在 ❖ ヨゼフはボルドーへ、ランゴワラン師との関 係 ❖ セン・ローランの取得と両親 ❖ ランゴワラン師の虐殺 ❖ 新しい芽 生え、平等の宣言 ❖ 兄ブレーズの亡命、犠牲の生涯と帰天 ❖ 兄ルイのス 페인亡命。	
第4章 恐怖政治期の聖職 (1793—1794)	38
恐怖政治初期のボルドーの状況 ❖ 断頭台 ❖ 迫害者に対するセン・ローラ ンでの用心 ❖ 亡命リストに登録される ❖ 市内での聖職 ❖ 策略と逸話 ❖ 亡命リストからの削除の努力 ❖ 憲法改正会議による誓約重視を司祭に 要請。	
第5章 市民憲章宣誓司祭の復権 (1795)	50
市民憲章の不信、宣誓司祭の復権希望 ❖ 教戒師と悔悟司祭の復権 ❖ 宣誓 司祭の実情と失墜の理由 ❖ 宣誓の取り消し、告知、復権式 ❖ バザ教区の 宣誓司祭 ❖ 迫害の再開と密かな聖職活動。	

第6章 未来の宣教活動除幕 (1795—1797) 65

市民憲章の不信、宣誓司祭の復権希望 ❖ 教戒師と悔悟司祭の復権 ❖ 宣誓司祭の実情と失墜の理由 ❖ 宣誓の取り消し、告知、復権式 ❖ バザ教区の宣誓司祭 ❖ 迫害の再開と密かな聖職活動。

第7章 亡命 (1797—1800) 76

スペインへの脱出 ❖ 兄ルイとの再開 ❖ オーシュの大司教 ❖ バイヨンからサラゴサへ、柱の聖母 ❖ サラゴサ市 ❖ オーシュの大司教と亡命司祭 ❖ 亡命司祭に対するスペイン政府のおどし ❖ シャミナード師兄弟の神への信頼。

第8章 亡命司祭の活動 (1797—1800) 87

亡命司祭の苦境 ❖ 祈りと研究、修道院訪問 ❖ セント・シュザンヌのトラピスト会 ❖ ブエ師のトラピスト会入会 ❖ 柱の聖母 ❖ 霊性への進歩 ❖ 柱の聖母の下での宣教活動への啓示 ❖ 亡命の終了。

第9章 バザ教区の管理 (1800—1802) 96

亡命リストからの削除 ❖ ボルドーへの帰省 ❖ 市内の状況 ❖ 最初の活動と改心 ❖ バザ教区管理の委任 ❖ その管理 ❖ バザ司教座の廃止 ❖ 教皇派遣宣教師の資格。

第10章 ミゼリコルド会 (1801) 108

ドゥ・ラムルス嬢の指導 ❖ 悔悟女性の事業 ❖ ミゼリコルド会の上長 ❖ 最初の試練 ❖ 和解の式 ❖ 極度の荒廃 ❖ 事業の強化 ❖ 指導者へのドゥ・ラムルス嬢の率直さ ❖ ミゼリコルド会と他の事業の特徴 ❖ ミゼリコルド会の共同体の移転 ❖ 類似の施設の創立。

第11章 コングレガシオンの創設時代 (1801—1802) 123

当代の各種青少年活動 ❖ 大革命前の信心会 ❖ 無原罪の聖マリアのコングレガシオンの創立(1801年2月2日) ❖ 組織 ❖ 聖フィリッポ・ネリのオラトワール会との類似 ❖ 女子青少年コングレガシオン(1802) ❖ 最初の記念日 ❖ ダヴィオ大司教 ❖ 名誉教会参事会員に任命。

第12章 コングレガシオンの発展 (1802—1803) 135

宣教活動の拡大—ダヴィド・モニエ士 ❖ 父親の会のアグレガシオン(1802年、クリスマス) ❖ コングレガニスト司祭 ❖ 黙想の婦人会 ❖ コングレガシオンの精神 ❖ 混同なき一致 ❖ 宣教の精神 ❖ 無原罪の乙女マリア ❖ 政府への態度 ❖ カプララ枢機卿よりの教皇教書。

第 13 章 マドレーヌの小教会 (1804) 150

1804 年の大赦後のコングレガシオンの発展 ❖ マドレーヌの小教会とその歴史 ❖ キリスト信者の助けなる聖母の教会、コングレガシオンの本拠地 ❖ マドレーヌでの聖務 ❖ 日曜日の集会 ❖ 黙想会 ❖ 指導司祭 ❖ コングレガニストの養成 ❖ 慈善と宣教活動。

第 14 章 コングレガシオンとボルドーにおける信仰の刷新 (1804—1809) 164

コングレガシオンの影響 ❖ ドンネ大司教の刷新 ❖ 女子修道会への召命 ❖ 最初のキリスト教男子校 ❖ キリスト教教育修士会の招致 ❖ 上位聖職者 ❖ セン・ローランの修練院 ❖ 聖職者の召命 ❖ 神学校への教師、生徒の提供 ❖ バザの小神学校。

第 15 章 コングレガシオンの廃止 (1809—1814) 180

1805 年の危機 ❖ 1806 年 ❖ 1809 年の繁栄 ❖ 試練の開始 ❖ 兄ルイ師の帰天 ❖ 皇帝の権限 ❖ 破門教書の漏えい ❖ ヤセント・フォン及びアレクシス・ドゥ・ノアイーその逮捕 ❖ コングレガシオンの解散 ❖ 帝国の晩年 ❖ シャミナード師の逮捕 ❖ 帝国の失墜。

第 16 章 コングレガシオンの再建 (1814—1830) 197

アングレム公爵 ❖ コングレガシオンの再建 ❖ 100 日天下 ❖ 王党派シャミナード師 ❖ コングレガシオンの繁栄 ❖ 組織の改革 ❖ 教区のコングレガシオン ❖ キリスト信者の助け手なる聖母の小聖堂 ❖ マリア・プリマリアへの加盟 ❖ 25 周年記念。

第 17 章 コングレガシオンから生まれた新たな事業 (1815—1830) 214

シャルトロンのコングレガシオン、リガニョン師 ❖ 友の会、ダヴェン師 ❖ 「良書活動」、パロール師 ❖ 刑務所活動 ❖ 煙突掃除少年の事業、デュブシュ師 ❖ 年の黙想会。

第 18 章 加盟コングレガシオン (1815—1830) 230

メール・ドゥ・トランケレオン ❖ その信心会 ❖ 相互の連携 ❖ ボルドーの信心会への加盟 ❖ 教皇ピオ 7 世聖下よりの権限 ❖ ジャクピー司教とアジャン教区のコングレガシオン ❖ 成人男子のコングレガシオン ❖ ボルドー、アジャン、オーシュ、タルブ教区のコングレガシオン ❖ バザ、オーシュ、エール神学校の加盟コングレガシオン。

第 19 章 修道会創立への歩み (1814—1816) 248

父親の会の援助、モニエ士 ❖ 司祭コングレガニストの援助 ❖ マルク・アルノザン、ケンテン・ルストー、アントワン・フエイ ❖ 婦人たちと女子青少年 ❖ その自由な援助 ❖ 修道者養成の使命 ❖ 福音の勧めの実践 ❖ レタの創立。

第 20 章 マリアの娘の会 (1816) 265

修道者の身分のコングレガニスト ❖ アデル・ドゥ・トランケレオン嬢の召命 ❖ シャミナード師との通信 ❖ アジャンでの創立の実情 ❖ マリアの娘の会の将来 ❖ 最初の会憲 ❖ 共同生活の開始(1816年5月25日) ❖ 修道誓願とちっ居の誓願 ❖ 総長の任命。

第 21 章 マリアの娘の会の発展 (1816—1820) 278

終生誓願とちっ居の誓願の解決 ❖ 会憲の改訂 ❖ アジャンでの宣教活動 ❖ 着衣式(1816年クリスマス) ❖ 聖ヨゼフ孤児の会との関係 ❖ 誓願式 ❖ 共同体の試練 ❖ 共同体の移転 ❖ 聖家族の会との合併の問題 ❖ トネンの創立 ❖ 在俗修道女会。

第 22 章 マリア会 (1817) 292

コングレガシオン内での修道生活の試み、15名 ❖ ジャン・バプティスト・ララン ❖ 活動への協力 ❖ コリノー、ブルニヨン・ピエール、ルイ・タギュザン、ドミニック・クルーゼ ❖ 1817年10月2日 ❖ ジャン・バプティスト・ビドン、アントワン・カントー ❖ セギュール通りでの共同生活 ❖ ラポーズとダヴィド ❖ シャミナード師の共同体外の生活 ❖ マリア会。

第 23 章 新生マリア会の特徴 (1818) 305

最初の黙想会と終生誓願 ❖ 会憲草案 ❖ 司祭修道者と信徒修道者の協力 ❖ 修道服 ❖ 修道会の精神、熱誠の精神 ❖ 内的精神 ❖ 修道会の特徴、マリアへの献身 ❖ 信仰 ❖ 謙そん ❖ 家庭の精神 ❖ 黙想会 ❖ ローマからの恩典 ❖ カントー士の帰天。

第 24 章 シャミナード師の面影：精神上の特徴 324

尊敬と好意 ❖ 親切 ❖ おだやかさ ❖ 神への信頼 ❖ 謙そん ❖ 賢明さと節度、神との関係 ❖ 隣人との関係 ❖ 冷静さ ❖ 活動の増加 ❖ 超自然的慎重さ ❖ 確実性 ❖ 最終的な印象。

第 25 章 シャミナード師のプロフィール：知的プロフィールと霊性上の信条 342

研究心 ❖ 観察と考察の精神 ❖ 実践的傾向 ❖ 通信と説教の形式と基本 ❖ モラル問題の権威 ❖ 禁欲 ❖ 信仰 ❖ マリアへの献身 ❖ 念とう ❖ 自己放棄 ❖ 3段階の内的精神 ❖ オリエ師の霊生。

第 26 章 修道者の養成 359

養成に関する見解 ❖ マリアの娘の会の修練院 ❖ マリア会の修練院 ❖ マドレーヌの小神学校 ❖ 修練院視察 ❖ セン・ローランの志願者 ❖ 修練院の指導 ❖ 禁欲の強調 ❖ 清貧 ❖ 半端な修道者 ❖ 司祭への要請 ❖ 院長への要請。

第 27 章 マリア会の主要事業:学校 (1818—1823) 378

マリアの娘の会の最初の事業 ❖ マリア会の最初の事業 ❖ 教育専念の理由
❖ ムニュー通りの中学校 ❖ 教育原理 ❖ セント・マリー寄宿学校の成功と
移転 ❖ マリアの娘の会のトネンとコンドンの寄宿学校 ❖ アジャンのマリ
ア会小学校 ❖ 意外な成功 ❖ ヴィルニュヴの高等中学校と公立学校。

第 28 章 マリア会のフランス北東部地方進出 (1823—1826) 395

メルシアン師との関係 ❖ リボヴィレのロテア士 ❖ コルマルの創立 ❖ フ
ランシュコンテへの誘致 ❖ バルドゥネ師 ❖ ダヴィド士とセン・ルミの取
得 ❖ セン・ルミの共同体 ❖ 試練 ❖ カイエ師の派遣。

第 29 章 新しい教育事業:師範学校と職業学校 (1824—1826) 412

セン・ルミの寄宿学校 ❖ フランスの初等教育の現状 ❖ キリスト教学校の
創立の提案 ❖ 最初の小学校教師の黙想会 ❖ 師範学校設立 ❖ 師範学校普
及への努力 ❖ その原理、宗教教育 ❖ 初等教育の教科 ❖ 職業教育への発
想 ❖ 併設学校、計画 ❖ ブザンソンの聖ヨゼフ病院。

第 30 章 マリア会の法的認可とその使命 (1825) 430

公式承認の危険性 ❖ 承認申請 ❖ 規約 ❖ フレッシヌー司教の好意 ❖ 公
教育審議会の規定 ❖ 国務院の規定 ❖ 11 月 16 日の国王令 ❖ 保護下のマ
リア会の使命 ❖ 各種合併の提案、ノアイ師—ブエ師 ❖ 各種修道会の初等
教育 ❖ キリスト教教育修士会との合併の提案 ❖ フレシヤル師やバイヤル
兄弟との折衝。

第 31 章 王政復興晩年時におけるマリア会の発展(1826—1830) 453

ダヴィオ大司教の帰天 ❖ 実姉リュクレス・シャミナードの帰天 ❖ メー
ル・ドゥ・トランケレオンの帰天 ❖ アジャン訪問 ❖ モワサックとロゼル
トへの創立 ❖ 北部地方の視察旅行 ❖ マリアの娘の会、アルボワ、ライン
ナケルン、アーシェの創立 ❖ マリアの娘の会の法的認可 ❖ アルザスでの
マリア会の発展 ❖ レオン・メイエ師 ❖ 後期中等教育 ❖ グレーの高等中
学校長のララン師 ❖ セン・ルミの校長 ❖ 師範学校に関する創立者の考え
❖ パリに師範学校計画 ❖ クルトフォンテーヌに師範学校設立 ❖ すばら
しい発展。

第 32 章 試練の開始 (1830) 474

1830 年の革命 ❖ ボルドーの反響 ❖ 暴動、シャミナード師の住居の家宅捜
索 ❖ アジャンへの出発 ❖ 革命への態度 ❖ 修練院の分散 ❖ 師範学校の
廃止 ❖ マリア会の財政難 ❖ 修道者の不安 ❖ その不満、統治 ❖ 新会憲
❖ コリノー師とオギュスト士 2 補佐の不満。

第 33 章 より厳しい試練への直面 (1831—1833)

495

アジャンの創立者 ❖ ララン師の反抗 ❖ 1832 年試練の蓄積 ❖ アジャンの特殊学校 ❖ コリノー師とオギュスト士の退会 ❖ ドゥ・シュヴルス司教の偏見 ❖ マリアの娘の会とのトラブル ❖ コリノー師の仲裁 ❖ ジャクビー司教の仲裁と危機の回避 ❖ ララン師の悔悟 ❖ ボルドーのセント・マリー寄宿学校の校長に任命 ❖ オギュスト士との和解 ❖ 第一回回章 ❖ 会則と会憲一部の公布。

第 34 章 施設の最終回総視察 (1834—1836)

514

北部地方への出発 ❖ 正式修練院の組織 ❖ エベルスマンステル ❖ クルトフォンテーヌ ❖ マラストの創立 ❖ 現業修道者の共同体 ❖ レーラックの創立 ❖ ララン師の再度の無謀 ❖ アジャンへの帰省 ❖ ララン師、レーラックの高等中学校を引き受ける。

第 35 章 マリアの娘の会の在俗修道会 (1836)

531

田園地帯での在俗修道女会の必要性 ❖ み摂理の姉妹会との合併計画 ❖ オーシュのシュヴァリエ師 ❖ 在俗修道女会の創立 ❖ その発展 ❖ コルシカ島での創立 ❖ 在俗修道女会の会則 ❖ ドゥ・ラムルス嬢の病 ❖ 創立者のボルドー帰着。

第 36 章 会憲とマリア会賞賛の教令 (1837—1839)

544

当初の会憲 ❖ 会員聖化の規則 ❖ 事業 ❖ 会憲第 2 部の公布を急がなかった理由 ❖ ララン師の新たな反抗 ❖ その最終服従 ❖ 会憲第二部草案 ❖ 会の組織 ❖ その統治 ❖ 中央集権 ❖ 3 部門 ❖ マリアの娘の会の会憲 ❖ 両修道会認可のローマ申請 ❖ その賞賛の教書 ❖ 創立者の喜び。

第 37 章 総長職の辞任 (1841)

566

将来への信頼 ❖ 新規創立、クレラック及びカステルサラゼンー ❖ ブザンソンとフリブール ❖ マドレーヌのコングレガシオン ❖ ドンネ大司教の意向 ❖ セン・フランソワ・レジス活動とセン・ヴェンセン・ドゥ・ポール会議 ❖ 創立者の回章 ❖ 総長辞任の意向 ❖ オギュスト士の問題 ❖ 創立者の辞任。

第 38 章 創立者の晩年、病気と帰天 (1841—1850)

583

創立者の業務と計画 ❖ レアルモンの創立 ❖ セン・ローラン修練院の再開 ❖ 創立者と修練者 ❖ 修練院のセン・ターヌへの移転 ❖ 病弱と良心の不安 ❖ 補佐の当惑 ❖ 司教の勧め ❖ ローマへの上訴 ❖ 聖座の回答 ❖ 1845 年の総会、カイエ師の総長選出 ❖ 良心の不安 ❖ 祈りと犠牲の精神 ❖ 脳卒中 ❖ 帰天 ❖ 葬儀 ❖ 墓地。

後書き

604

ボルドー大司教ルコ枢機卿の書簡の序文

総長様、

本書はまさに好時期に出版されました。大革命に動揺した人々が目標を求めていた時期に案内書として提供され、また、勇敢で気骨のある人々が求められていた迫害の時期に、本書はわたしたちに英雄と聖人の模範を提示したからです。したがって、本書は暖かく受け入れられました。そして、わたしたちの向かう苦悩の時代に靈感と模範を与えることが出来るに違いありません。

シャミナード師はフランス社会のすべてを混乱させずにはおかなかった大革命の悲しい出来事を目撃者でした。師は無信仰の世紀の懐疑論と不信仰の中に大革命が準備されていることを知りました。師は、盲目で血なまぐさい最も激しい行き過ぎた行為によって民衆を刺激した熱狂的な政治の台動を見ました。師は、文明化され、キリスト教化されたこの国で、公然と18世紀のカタコンブとなった離れ家で、人気のない納屋で、そして、地下室の奥で、禁じられた信仰の礼拝がささげられていたこうした邪悪の日々の証人になりました。

しかし、師は何もすることなく眺め、嘆く無気力な証人ではありませんでした。師はその信仰と故国を同時に救うべくあらゆる種類の困難と危険の中で毎日働く勇敢な労働者であり、英雄的闘士だったのです。

I

ペリギューの「貴族市民」とつつましく呼ばれていたペリゴル地方の誇り高いブルジョワ家族の13番目の末子ギヨーム・ヨゼフは、その母から極めて優れた性格とまれにみる諸徳の芽生えを受け継いでいました。

迫害のため還俗させられたイエズス会員の長兄が重責を果たしていたミュシダン高等中学校の生徒になったギヨームは兄ルイと共につつがなく勉学に従事しました。彼が特にキリスト教の信仰と愛の最良の習慣を身につけたのはここででした。また、乙女マリアに対する彼の愛がはぐくまれ、そして、聖母への献身がその生活のすべての計画のライトモチーフになるまで発展したのもここででした。

ギヨームが兄ルイと共にボルドーに行かざるを得なくなったのは神学のリサンスとドクトラの学位を準備するためでした。彼は厳しい努力を続け、もっぱらその勉学に専念しました。彼はモンテスキューが「世界の教育」として示した第3のタイプの教育には無関心でした。それは家庭や学校で受ける教育を破壊するからでした。

彼がその教授たちの中でランゴワラン師に出会ったのは幸いでした。このボルドー人の英雄は革命の世界の憶病者たちの中で大胆不敵な勇気の模範を示していたからです。

彼は当時セン・スルピス司祭団の運営していたパリの神学校で司祭としての養成を終わりました。

このような教師たちによって養成されたシャミナード師は宣教活動の用意が出来ていました。

総長様、ミュシダン高等中学校での教師生活の細部を通してあなた方の英雄的創立者の後をたどってあなた方はどれほどの感銘を受けたことでしょう。少年生徒の養成は極めて重要な問題です。ところがこの問題はしばしばまずく取り扱われました。しかし、家庭の平和と国の将来はこうした問題の解決にかかっているのです。正しく理解された教育は強じんな世代を生み出します。教師たち自身が有能であれば、すべての人々が期待出来る力強い精神を生徒たちに発達させることが出来るに違いありません。「熱心な人々は優れた能力を生み出す。」

シャミナード師の生活の側面はフランスの青少年の教育のためやがて創設することになったすばらしい宣教活動の除幕でした。

ミュシダン高等中学校の3人のシャミナードは3人の聖人のようで、その立派な行いは地域の人々からも認められていました。ペリギューの用心深い司教でさえ彼らの知恵や知識を借りることがありました。それは幻を追うような時代によって作り出された困難を解決するためでした。

しかし、大革命のあらしのとどろきが、すなわち、人民の大きな不平不満の叫びが聞こえるようになりました。ヨゼフ・シャミナード師にとっては大都会のみが熱誠への有益な隠れ家を提供し、宣教活動への熱望を満たすことが出来るように思われました。そこで、彼はまずボルドーに質素な住居を確保しました。次に、ランゴワラン師の勧めによってタランス市の郊外に小さな地所を購入しました。それはここで潜心し、展開して行く世の様々な出来事により役立つことが出来るためでした。

聖職者に対する市民法が既に政治の領域に陰気な影を落としていました。聖職者たちの中に分裂が生じました。最も優れた司祭たちの中でさえ、ある者は、同法の条文にはもちろん疑問はあるが、信仰を裏切ることなくこれに署名出来ると考えました。そこで、善意で署名した司祭たちを教化し、署名に抵抗した司祭たちの勇気を支え迷った司祭たちを教会の教義に連れ戻すために出来る限り彼らとの会話を試みなければなりませんでした。

シャミナード師が亡命の3年間を除く大革命の恐ろしい期間を過ごした市や郊外の質素な住居で師がどのような英雄的勇敢な行為をなしたか、皆さんはその証人となるはずです。シャミナード師の偉大な心が念とうと祈りによって照らされたのは郊外の参詣所でした。師が照らされ、生きた信仰から生じた大胆不敵さに心が満たされるのを感じた時、師は大衆の暴走を阻止し、彼らを導くためにその中に紛れ込んだのでした。

ランゴワラン師の急死はシャミナード師の宣教上の熱誠にとって更に刺激になりました。それはボルドーで最初の処刑が開始された時だったからです。そして、聖職者は大衆の熱狂に対して最高の犠牲者を提供しなければならなくなったからです。ランゴワラン師が大司教館の玄関で惨殺されていたのは革命者たちが日々熱狂するある日のことだったのです。

高德で古風のマナーで鍛えられた性格のこの司祭は立憲議会議員であったシセ大司教の不在の時には教区を管理していました。師は古代ギリシヤのアリシティードの罪のような罪は犯しませんでした。師は独立と流血に酔った民衆の過激な行為に対して自らの考えを正直に述べたことはなかったからです。

聖職の任務に殉じたこの司祭はシャミナード師の友人でした。師はシャミナード師に最も激しいあらしに対してどのように心を強固にしなければならないか、また、自分の良心をあざむくよりむしろ常に死の用意をしなければならないかを教えました。

シャミナード師は師の教訓を立派に学びましたが、その時以来少しずつ死の恐怖に脅かされるようになりました。

ボルドーには約10箇月間、断頭台が常設されていましたが、師はそのことについて少しも不安を感じませんでした。師はこの間ずっとカトリック信者の中で聖職の務めを果たしていました。師の周囲には40名の司祭がいました。彼らはこの人格者の司祭に鼓吹され、愛徳と熱誠の働きを競争し、ミサをささげ、秘跡を授け、病人に最後の救いを差し伸べるなど、毎日死の危険を犯していました。市のその他の司祭は既に牢獄に監禁されていて、その大半は断頭台に

向かう以外にそこから出ることは出来ませんでした。

総長様、自らの聖職を要請するかすかな呼び声にも決して油断することなく耳を傾け、祈りのセンターを増加し、司牧的熱誠とその生涯を熱烈な愛によって至聖なるみ心に委ねたこの宣教師の生涯をあなたはどんなにかすばらしく描写したことでしょう。

大革命のあらしの中に晴れ間が現れると、彼は直ちに公然と姿を現し、教会を開きました。この宣教師の大胆さに勇気づけられた民衆は今度は祈るためにそこに集まりました。

また、軽率にあるいは恐怖にかられて悪名高い市民法上の誓約をなした不幸な司祭たちの誓約を撤回したのもこの教会でした。あなたがその生涯を物語ろうとするこの勇敢な司祭の、迷った司祭たちに対する調停者としての役割は何とすばらしかったことでしょう。天国で、天使たちは、殉教さえなすことが出来たこれらの信仰を捨てた司祭たちの改心した魂に、どのような栄冠を編まなければならないことでしょう。

教会に与えられたつかの間の平和によって、シャミナード師はその潜心の中でしばしばかいま見たすばらしい事業の計画、すなわち、青少年の教育、コングレガシオンの設立、前二者の必要に応ずる男女修道会の創立を実行に移すことが出来ました。

II

18世紀末の若者は当代の顕著な特徴となった軽薄な精神及び風習の継承者でした。これら青少年男女に信仰と共に宗教の知識を教え込むために早急に彼らを教会に導き入れなければ、彼らは迷ってしまうに違いありませんでした。ボルテールの世紀は19世紀にも引き継がれたので、20世紀のフランスは更に没落するに違いなかったのです。

全勢力を傾注して専念した計画を賢明に用心深く導いたこの善意の人をわたしは新鮮な関心を持って追いました。まず、彼は青少年の中でリーダーになる人を捜しました。それは彼をキリスト教精神に養成し、市の中で最も優秀な青少年たちを彼の下に引き寄せ、また、女子青少年たちをみ心の会に委ねるためでした。この最大の効果は彼らが師がいつか創立するはずになっていたコングレガシオンの中核になったということです。

わたしたちは師がキリスト教青少年の養成のためになした配慮にラムルス嬢の事業にやがて実施する援助をつけ加えなければなりません。師はミゼリコルド会の優れた敬けんな創立者ラムルス嬢の指導者となり、新修道会の会則を激励し承認して創立者を支え勇気づけました。そして最後に、師は改心した女子青少年たちの施設のためにすべてをなしました。そのことは教区当局によって任命された長上の職務として師に期待されていたからです。

総長様、本伝記を読む時、青少年たちが師にもたらした気かりや心配で師の心がどんなに深く占められていたかを理解することは容易です。師は絶え間ない献身のあかしを若い世代に示すことを決して怠りませんでした。み心の会やみ心のウルスラ会の共同体の土台が既に準備されていたのは師によって与えられたこの基礎の上だったのです。

しかし、数年前からスペイン国に亡命していた他の多くの司祭同様、師にも亡命が待っていました。師はこの亡命を利用して、いつか革命の危機が過ぎ去った時、フランスの若者たちのために創立することを夢見ていた修道生活の詳細を色々な修道会で研究しました。

そして、特にサラゴサの柱の聖母大聖堂の尊いチャペルで愛する保護者に祈りました。ここで師はその主要な事業、すなわち、マリア会がある日生まれるという全く不思議な伝達を至聖なるマリアから頂いたのです。

亡命の3年が流れ、シャミナード師はボルドーに帰り、そこで既に開始した活動の負担に加えて困難で危険に満ちた管理の業務を引き受けました。

バザの先の司教が帰天されていました。他の教区同様、大革命の風潮の影響を受け、苦しめられたこの教区にも管理者が必要になっていました。バザ首都大司教区のオーシュの大司教はシャミナード師より優れた人物を考えることが出来ませんでした。シャミナード師は引き続きボルドーに居住出来るという条件でこの任務を引き受けました。師はこの聖職がボルドーに極めて必要で、極めて実りある業務であると感じていたからです。

シャミナード師の徳、賢明さ及びその手腕はあらゆる困難な状況処理出来る人にしていました。その信仰はあらゆる計画を可能にし、極めて自然で優れた謙そんはあらゆる必要な協力をもたらし、そして、マリアの保護はあらゆる成功を保証したからでした。

III

ここで、弱く不幸なわたしたちの中に、神の哀れみのすばらしい不滅の労作として起こされたコングレガシオンの事業に触れたいと思います。

総長様、あなたはボルドーのコングレガシオンに関してわたしが望みうる真の、完全な特殊研究をわたしたちに示すことによって今日の世界に最も有益な貢献をしてくださいました。

様々な修道会が四散させられました。ただ教区の聖職者たちがかろうじて公にミサをささげることが出来ていました。信者たちは状況の求めに応じて信仰上の義務を用心して実践しました。だれも過度に興奮した群衆の中で、不信心で裏切り者になるかも知れないとの恐れから、あえて群衆に立ち向かうことが出来なかったからです。

しかし、師は、過激な革命者たちに囲まれながら信仰と熱誠を持ち続けていたボルドーの青少年たちの中で優れた青少年たちに出会いました。シャミナード師はこのことに気づき、まず4人、次に8人、そして12人とこれらの真面目な青少年たちを自分の下に集めました。それは彼らがマリアの兵士となり、他の仲間を自分の下に集めることを無原罪の御宿りの聖母の祭壇の前で約束させるためでした。純真に、誠実に行われたこうした当初の努力の物語に誘われて涙を流すような感動を与えるものでした。このことはあなたがこの件について割いたくぐりで確実に読まれるに違いありません。

わたしは、このコングレガシオンの計画がその設立以来いかに偉大で摂理的であったか今なお魅力を感じています。

本コングレガシオンの二系列には隠遁生活に類似するものは何もありません。あらゆる境遇、あらゆる年齢、あらゆる社会的地位の男女によって構成されたコングレガシオンは、あらゆる家庭やわらぶきの家、職場や会社、工業センターや大邸宅、そして、あらゆる司祭館や司教館にさえ広がることが出来たのです。コングレガシオンのすべての門戸は解放され、すべての人が歓迎されていました。誠実なキリスト教生活と宣教精神の二つの印が、求められたすべての人々がこれに受け入れられることが許されました。

コングレガシオンは生まれたばかりの時期だったので、現実の困難はこのような組織のメンバーを募集することでした。

読者は生き生きとした興味をもってこのすばらしい事業の発展を見守るに違いありません。すなわち、この事業は広範囲の教区に普及し、フランスの南西地域で強固な信仰と国家百年の伝統の精神を維持してきたすべての面影が回復されるのが見られるに違いありません。

その上読者は、コングレガシオンのこのすばらしい組織がどのような賢明さで、ボルドーで少しずつ入念に細部にわたって完成されていったか分かることになるでしょう。この大きな組織は大革命の背教の後、今度は、クロビス王や聖ルイ王のフランスで救いの基礎にならなければならなかったのです。

皇帝は教皇を廃止してサヴォヌの牢獄に幽閉しました。こうして、皇帝はカトリック信者を動揺させることがなくても、政治的迫害による様々な卑劣さや不正義を彼らに対して行うことが出来ました。したがって、ボルドーのコングレガシオンもパリのコングレガシオンも訴追されたり攻撃されたりしました。しかし、わたしたちは残忍な行為をした巨人の失墜の後すぐコングレガシオンが復活するのを見ることになりました。

やがてパリやボルドーのコングレガシオンを模範にしたコングレガシオンがフランス各地に創設されました。こうして彼らはフランス国民の中で最も優れた、最も高潔な人物を取り込んでフランス全土に張り巡らされた広大なネットワークを作りました。わたしたちは、フランスのカトリック信者が大革命の壊滅状態から復活して、キリストの長女としての地位を回復した余裕と迅速さに驚かされました。わたしたちはこれらのコングレガシオンの活動、特に無原罪の御宿りのマリアに信頼して宣教のどんな困難、どんな危険にもたじろくことがなったボルドーのコングレガシオンの活動を研究してこの不思議な秘密を発見出来るに違いありません。

このことは新しいしかも有害な法律の下で厄介事を背負わされる未来のコングレガシオンに、そしてまた、四散した諸修道会に代わってフランスの救いのために、対立することも危険を犯すこともなく、使徒を増加するに違いない未来のコングレガシオンのために示された役割だったのではないのでしょうか。

わたしたちが何とも驚かされることは、このコングレガシオンは一度信仰の危険が去ると、かつてのフランスのすばらしい、崇高な伝統を復興する用意の出来た多くの男女の修道会の基礎となったことです。

シャミナード師の直接の意向は、荒廃した修道院に修道者や修道女たちが再び住みつくことではありませんでした。師は世の男女青年たちの中に理想的な修道生活を教え込みながら静かに未来の修道者や修道女たちを準備して

いたのです。そこで、師はまずコングレガシオオンの若いボランティアの手助けによって要理問答集を作成し、貧しい階層の子供たちのための学校、神学生のための予備校、そして女子青少年たちのための敬けんな学校を設立しました。

修道院の再開の時が来た時、師の率先的な指導と援助の下に、やがて、ウルスラ会、キリスト教教育修士会、トラピスト会、レトナック婦人の娘の会、ロレットの姉妹会等が現れました。

IV

神のみ旨はより正確な形で神の偉大なしもべに示され、新しい二つの修道会の創立がその手に託されようとしていました。

師は柱の聖母の祈とう所での長時間の念とうによって無原罪の乙女マリアから不思議な光と啓示を頂きました。師はスペインからの帰国以来、捨て去ることの出来ない不動の考えに心を奪われていたように思われます。フランスの教会には男女の青年たちのために二つの修道会が必要だったからです。

総長様、極めて敬けんな、極めて賢明な熱情をもってマリアの娘の会の創立を計画し、慎重にこの事業の実現を目指したシャミナード師の足跡をあなたと共にたどることは何とすばらしいことでしょう。

また、マリア会の起源を熱心に回想するくだりでわたしたちはどんなにか感動することでしょう。

わたしは創立の当初現れた人々を知っていました。わたしは彼らのすばらしい能力を評価出来、彼らに対する最高の思い出を持っていました。15名はコングレガシオンによってマリアの栄光のために建てられた新しい修道会の生きた柱、すなわち、その中心人物になり、7名はフランスの若者たちの風紀を刷新するためにつつましく設立された明るい共同体の聡明な指導者になりました。

総長様、あなたはこのすばらしい創立の記述のくだりで、どんなに付随的であっても、彼らの氏名やその詳細を省こうとしなかったことがよく分かります。あなたは彼らの揺らんを十分調べ、その性格を描き、方言を話す彼らの特徴づけた寛大さ、謙そん、愛、そして親切さの諸徳を指摘しました。

本書を読むボルドーの市民は、一方では、彼らの愛する故国アキテーヌの

豊穡な土地に設立されたマリア会の揺らん期を眺め、他方、あらゆる背景や環境の若者に愛の手を差し伸べて今日マリア会が達した発展を当然の誇りをもって眺めるためにここで一息いれるに違いありません。

総長様、わたしはあなたが披れきしたシャミナード師の諸徳、教え、その熱誠を詳述するつもりはありません。あなたの会の発展と、あなたの会と同一時期に設立された諸団体の上に聖人のような創立者が常に大きな感化を与えられたことについて、あなたが割いた本当に興味あるくだりを読んだり観想する喜びは読者に委ねたいと思います。

修道会の歴史のどのようなくだりも、そして、大革命の政策さえも、ただあなた方の英雄的な創立者に関する事実をあなたが述べたくだりより興味あるようには思われません。1830年の革命自体それなりの解釈があるでしょうが、この革命さえもあなた方の敬けんな創立者の賢明さ、寛大さ、精神力をより明白に浮き彫りにするに違いありません。

過去の2世紀の混乱した時代の真の歴史を学ぶには本書のような書籍を頼りにしなければなりません。

わたしたちは特に大革命の動乱の時期に、善悪の意義が群衆のどうしようもない安楽さによって消えていったこと、最も罪悪的な大胆不敵な行為が勝利の条件であったこと、そして、始めは優柔不断でも権威が脅迫的な暴徒の行動によって最も犯罪的な行為にすばやく引きずられたこと、そして、すべての暴力に対して、「そのようにしてはならない」と叫ぶ信仰はこれらの危機的なあらしの中で最初に攻撃されたこと等、これらの悲しい確認の事実によって同意せざるを得ませんでした。

本書には身内の争いで汚された不名誉のくだりが見られますが、シャミナード師やランゴワラン師、その他の人々の勇敢な英雄的行為が生き生きと記述されたすばらしいくだりが見られます。

群衆の熱狂が騒然とそして脅迫的になり、あるいは、正義と権利の意義が曇らされ、そして、カトリック的なすべての事柄が卑劣な人々のからかいと不信心な人々の残忍さの対象になった時代に、これらの激励的な記述をわたしたちに提供した本書は大きな価値があるように思われます。

修道者たちが迫害を経験してから多分それほど遠くないある日、今度は在俗聖職者たちが苦しみ、政府の非常識な攻撃を受けるようになった時、わたしたちは本書を読み、わたしたちの試練を最高にふさわしくするくだりを再読し、今度はわたしたちがそこに勇氣と光りを見いだすことになるに違いありません。

わたしたちの祖国に対する献身は、ある日わたしたちに襲いかかる迫害によって決して弱められるものではありません。シャミナード師と共に無原罪のマリアの眼差しの下で正義と権利のために戦いながら、不道德な勝利のあらゆる喜びに勝る慰めを得ることになるに違いありません。また、前世紀の先駆者たちのように、祖国に対する栄誉と忠誠の伝統の維持に寄与する慰めを得ることが出来るに違いありません。 敬具

1901年9月6日 ボルドー

ボルドー大司教 V.L.LECOT枢機卿

はしがき

わたしたちの関心がマリア会創立者シャミナード師に関する資料に及んだ時、1870年から1871年の長い戒厳令の間、パリに閉じこめられていたわたしたちは余暇をマリア会の資料室をくまなく探すことに費やしました。これらの資料を読むことはわたしたちにとって一つの啓発になりました。

実際シャミナード師はわたしたちが考えていた以上に、師が宣教活動をなした地域ばかりでなく、なおその精神を生き、いわばその指導の下に生き続けていた師の創立になる修道会の中でさえ無名な人であったこと、そしてなおそうであることが分かって来ました。

わたしたちは師が、「無知であること、何の値打ちもないことを愛しなさい」(1)という優れたキリスト教的教訓を常に弟子たちに要請し、自らも実践していたことをよく知っています。そして、この隠れた生活への愛は、大衆の注意を引くことなくいかに生きることが出来、また、大騒ぎを起こすことなく死ぬことが出来るかを説明するものでした。しかし、この熱心な使徒の人格と活動の長い間の見過ごしは弁明されるでしょうか。しかも、この長期の黙認や明かな忘却は今日どのような弁明が見いだされるでしょうか。このことは特に師が創立者であった修道会ではむしろ惜しまれたのではないのでしょうか。み摂理が、それまでダンボールの中にしまっておかれた多くの資料を見いださせてくださったのは、シャミナード師のありし日の人柄が、そして、その手紙や活動生活に表されていた姿がわたしたちに明らかになるよう、これらの資料を公にするよう促されたのではないのでしょうか。確かなことは、創立者に対する子心の愛情によって戦争中始めたこの働きを続けるよう促されたことです。しかし、残念なことに長期の、そして多くの中断に会い、この働きに必要な時間を割くことが出来ませんでした。

わたしたちはこれらの資料を手短に、基本的に分類整理しましたが、満足するにはほど遠い様々な欠落を発見しました。それはマリア会創立当初からの資料がぼう大で、しかも、前世紀との関係資料がほとんど不足していたということです。この時から、わたしたちは本会の資料室に不足している資料を他所で調査する働きが必要になることが予見出来るようになりました。

わたしたちは少しずつ入手した様々な手がかりのおかげで、シャミナード師

の全生涯を通じて師を決して見失うことなく追い求めることが出来る様々な足跡を発見することが出来ました。この成果を達成するため、わたしたちは師の滞在と宣教活動の足跡の再発見が期待される都市に行きました。

わたしたちは、ペリギュー、ミュシダン、パリ、サラゴサ、タルブ、オーシュ、アジヤン、ボルドーの公立や私立の資料室で、人々に創立者のことを尋ね、資料を調査しました。そして、特にボルドーの大司教館は、資料室助手リエール師の協力で真に貴重な資料を提供してくださいました。わたしたちは行く先々で最高の歓待を受けました。ここで、わたしたちはこの紙面を借りて、これらの調査のために忘れることの出来ない献身と無私無欲の協力をくださったすべての方々に心からの感謝を表明しなければならないと思います。

本書はシャミナード師によって創立されたマリアニスト家族の皆様と現代の宗教問題に関心を抱く分野の方々の二つのカテゴリーの読者を目標にしています。本書をすべての人々に役立てるためにはこれらの二つのグループのどちらも完全に満足させられないことも受け入れなければなりません。ある読者は本書にシャミナード師の手紙の長々としたくんだりや多くの抜粋を見いだすことを期待し、他の読者は師の独自の生涯の生活環境を作った歴史的背景の展望の視界が開け拡大することが見られるのを期待するに違いありません。しかし、わたしたちにはすべてにわたってすべての読者を満足させられないという限界があります。

わたしたちが望むことはすべての人々がわたしたちのあかしに好意を持つことです。主要な指針としてわたしたちが選んだのは、ある点で望ましいと思われるものではなく、あるがままの事実を提供することでした。また、先入観による事実の提供ではなく、事実を単純に素直に披れきすることでした。著述の際には、単に事柄を述べるためばかりでなく、なお、善の実践に役立ち、これに励むために、真理に対する配慮が基本にならなければなりません。わたしたちはすべての人々から認められる考えやギッボン枢機卿が述べられた次の言葉によって導かれました。「彼らはそれほど人々の心を知りませんでした。彼らが示したのは、靈化され過ぎて明るくかげりもなく、背景もなく描かれ、人間の弱さが完全に浄化された性格の人々の聖人のような生活でした。したがって、勇気づけや善導による奉仕等、現実離れの人々でした。」わたしたちは選んだ資料の出典を示すよう配慮しました。それはわたしたちの記述の基礎になった証拠の価値を読者が判断出来るようにするためでした。わたしたちは特に注意して読むことに価値のあるくんだりを指摘して読者を導くような意向は持ちませんでした。読者はそのような意図はわたしたちにとって失礼であると言うに違いないからです。

ボルドー大司教ルコ枢機卿は、この伝記をお読みになってボルドー大司教区の使徒シャミナード師の思い出を記念することを望まれ、本書の序文に用いるため前記の書簡を届けられました。ボルドー教区の一司祭について権威をもって話し、また、ボルドーの教会史の意義深い時代の評価を表明出来る方は、この教会の第一人者の称号を持つ枢機卿以外にはだれもないことを考えることが出来ます。 教皇ウルバノ3世聖下の1625年3月13日と1634年7月5日付けの布告に従って、わたしたちは次のことを宣言します。もし、本書である人物に聖人、福者、そして尊者の名称が適用されているとするなら、その称号はその生活の純潔さやそのすばらしい徳、カトリック教会の権威に何ら反することなく、マリアの子供たちの聖化について公言することはマリアにのみ属していることを表明するものです。更に、わたしたちは、たとえ本書で述べた事柄が奇跡的であるように思われても、それはもっぱら非公式の証言によるもので、聖なる教会によって承認されたものでないものとして示したことを言明します。それはわたしたちが心と精神の完全な服従と尊敬をもって常に教会の判断を期待し受け入れているからです。



注 (1) キリストの模範 2巻1-1

1901年9月15日 マリアのみ名の祝日において パリ



マリア会及び汚れなきマリア修道会創立者

1761—1850

ギヨーム・ヨゼフ・シャミナード

第1章 幼年時代 (1761—1791)

ペリギューの町 ❖ シャミナード家と親戚家庭・父親のブレーズ ❖ ペリゴル地方の新しい発想 ❖ シャミナード家の信仰 ❖ 子供たち ❖ 二人の兄の修道召命 ❖ 13番目の末子ギヨーム ❖ 幼児教育と母の影響 ❖ ペリギューでの初期教育 ❖ 堅信の霊名ギヨーム

ギヨーム・ヨゼフ・シャミナードは旧ペリゴル地方の中心都市ペリギューで1761年4月8日に生まれました。イズル川岸に絵のように位置するこの町の人口は当時7800名にしか過ぎませんでした。しかし、この町はスルニー行政官のおかげで既に城壁の外側にまで拡大し、立派な歩道やすばらしい郊外住宅が整備されていました。なお、ボルドー市も同行政官による改良のおかげを被りました。しかし、住民の大半は中世の要塞が築かれていた円い丘の周辺に集中していました。その通りは狭く曲がりくねっていて、建物の灰色がかかった石灰岩の外観はより暗い影を落としていました。あちこちにごく小さな広場が開けているので町の建物はごくわずかな日の光と開放感に恵まれていました。

もちろん、古い教会やルネサンス風の美しい邸宅等大半の建物は暗い露地に囲まれていました。そして、ベニスのセン・マルコ教会やコンスタンティノープルのセント・ソフィヤ教会に似たスタイルでフランスでも特異な建物であり、ペリギューの誇りでもあるセン・フロン司教座聖堂は、このすばらしい建物を覆い隠すように廃屋や屋台等で囲まれていました。

ギヨーム・ヨゼフ・シャミナードの父の家があったのはこの司教座聖堂の正面入り口に通ずる通り、すなわち、タイフェル通りでした(1)。父のブレーズはペリ

ギューの隣村セン・アスティエ出身の彫刻家の子息でした。ブレーズ自身は最初ガラス屋の職業を営んでいましたが、町の商人の娘カトリーヌ・ベトン嬢と結婚したため呉服商人になりました(2)。

ブレーズ・シャミナードはその妻の家柄同様、職人または小市民の穏健な社会に属していました。彼はデフュー家(3)、ラルディディ家、ラシャペル家やモアイエン家、あるいは、ルモアイエン家等、町の旧家の縁続きでした。最後の二つの家族はセン・フロン教区やセン・シレン教区に数人の教会付属の聖歌隊指揮者を出していました。その中の一人ジャン・バプティスト・ルモアン(1751ー1791)はシャミナード師時代の人々の中で有名人になっていました。その芸術的才能がグリュック自身の才能と比較されるほどだったからです。

シャミナード家には歴史的に注目すべきものは何もありませんでした。少なくともわたしたちの関心を引く人は一人もいませんでした。同姓の家はペリギューにもペリゴル地方にもありませんでした。

町の18世紀の記録簿には多くのシャミナード姓の家族が記載されていました。このシャミナード姓の家族は大工や靴屋、そして労働者等、身分の低い家族であったように思われます。もちろん、エギリウリ通りに立派な邸宅を構え、公務で行政機関に関係する資産に恵まれた人々もいました(4)。その時代にはこれらの同姓の家族には相互に何らの親類関係もありませんでした。なお、本伝記関係のシャミナード家の真の分家はシャミナード師の手紙で分かるようにスイスのベルンに移住していました(5)。

ブレーズ・シャミナードの生活は平均的水準でしたが、先祖から町のブルジョワという恵まれた肩書きを受け継いでいました。ペリギューのブルジョワは貴族と同じように尊敬されていました。1789年、ブルジョワ階級の数400名に過ぎませんでした。彼らは王権にしか従属していませんでしたが、町を自由に管理し、彼らの公式文書の文頭には、「ペリギューの市民貴族」という誇らしい肩書きを記述していました。彼らは大革命まで、ボルドーの議会やセン・フロン司教座聖堂の教会参事会の越権に対して執ように自分たちの権利を擁護していました(6)。

もちろん、シャミナード家にとってこの肩書きは家族の遺産の最良の部分ではありませんでした。最も評価された遺産は由緒あるこの家族に維持されていた信仰の徳の栄誉ある遺産でした。こうした遺産のためにこの家族は時代の風潮、そして、少なくとも信仰や教会の権威を激しく攻撃した思想の不健全な影響を少しも受けませんでした。先祖が力強く、誠実に伝えた倫理的な原則に確信をもって執着し、最近の風潮を信用しなかったからです。

いずれにしても、毎日ますます増大する様々な改革の雑音に耳を傾けないことは困難でした。ペリゴル地方がこのことに最も敏感でした。それはこの地方が2世紀以上も前から絶え間なく災害に見舞われていたにもかかわらず、王国から最も見放されていた地域の一つだったからです。こうして改革とフロンド党はペリゴル地方を荒廃させ過疎化してしまいました。更に、ルイ15世の暗い統治の下で毎日貧困が増加していきました。1785年、ペリギューの教会参事会員たちは、「宗教戦争や市民戦争は王国の古い時代の庭園、すなわち、『フランス王たちの庭園』であったペリゴル地方をヒースの生い茂った荒れ野に変えてしまった」と表明しました。第三階級、すなわち、市民階級は1789年の三部会で次のように繰り返しました。「三部会はフランスの地方の土地を国有地と見なさなければならない。そのほとんどが山地で、幹線道路も航行出来る河川もないので、何も、ほとんど何も生産出来ないからである(7)。」したがって、人々は改革をあこがれ、このことを約束した人々に耳を傾けていました。人々は何の悪影響も予想していなかったからです。またたとえ、10分の1税の徴収者に対して何らかの不満があったにしても(8)、そして、地域による階層の不平等が明確になったにしても、社会改革や宗教改革以上に政治的、経済的改革を望んでいたからでした。不幸にして流行を吹き込む風潮はあらゆる種類の意見を乱暴にもたらしました。したがって、正当な判断が中断され、過激の行動が始まる段階を識別するのは容易ではありませんでした。

ブレーズ・シャミナードさえも一時は動揺しました。いわゆる哲学的な思想の進展が信仰の実践にある種の緩みをもたらしたからです。ペリギューの商人仲間の間ではだれも日曜日に店を開くことをためらいませんでした。それはその日多くの田舎の人々が町に買い出しに来るからだということでした。ブレーズ・シャミナードもしばらくこの習慣に従いましたが、時代の風潮への譲歩は一時的に過ぎませんでした。彼はこのことを残念に思い、過去のすばらしい習慣に対する卑きょうな振る舞いとしてその不忠実を反省しました。彼は商売上の危険を覚悟して日曜や祭日には店を閉めました。しかし、その商取引は損害を受けることなく、かえって、彼の正直さがますます評価され、その顧客はこれまでよりもずっと増えたからです(9)。

キリスト教の家庭にはたくさんの子供がいました。それは家庭の昔ながらの習慣でした。彫刻家ジャン・シャミナードには11名の子供がいました。ブレーズは13名の子供を持ち、ギヨーム・ヨゼフはその末の子でした。ブレーズは生き残った6名の子供の内、4名を司祭職や修道生活によって神にささげて、その新鮮で力強い信仰をあかししました。わたしたちは、その子供たちに聖職の召命をもたらした家庭環境からこのことを判断することが出来るのです(10)。

1759年2月、ちょうど彼の二人の子供が2日の内に神に召されたところでした。二人の内一人は二つ年上で、もう一人は6歳でした。長兄のジャン・バプティストが修道生活に入る意向を父に告げに来たのはちょうどこの悲しみの時でした。彼は当時イエズス会士たちによって運営されていたペリギューの高等中学校を卒業したところでした。彼の勉学上の成功はその徳同様学友たちの間で目立っていました。彼は両親の家に帰ったところで、ボルドーのイエズス会士の修練院に入る許可を願い出たわけです。ブレーズ・シャミナードには深い悲しみがなかったわけではないが、あきらめてその許可を与えました。こうして、彼は求められた最初の初穂を神のみ手に委ねたのです。

しかし、父ブレーズの態度は同名を持つ次男のブレーズに対してはそれほど気さくではありませんでした。それは、長男が修道生活に入ったため空きになった後継者の地位を彼に継がせることを考慮する権利があると考えていたからです。しかし、この青年の観想と厳格な生活への目立った好みは彼を修道院に予定しているように思われました。彼はしばしば修道院に入る望みを両親に打ち明けたがこの申し入れは気に留められませんでした。しかし、1762年10月のある日、その勉学を終了した彼は、父の前に出て、もし修道生活への許可が得られなければ家を出る用意が出来ていることを話しました。しかし、この申し出も受け入れられませんでした。その召命が気まぐれとして一しゅうされたからです。

ブレーズ青年は、数回の申し出の試みも効果がなかったので、自分の強い性格をあかす特別な決心をしました。その申し出の成功を勝ち取る配慮を聖母マリアに委ねた後、彼は自分の願がかなえられない限り絶食することになりました。家族の者はだれもその決心が長続きするなどとは考えていませんでした。二日たって母は不安になりました。涙を流しながらの説得でその決心を翻す力のないことが分かった彼女は、子供の訴えを引き受け、次のような厳しい同意を夫から引き出しました。「どこへでもやればいい、彼の顔をみるのもうんざりだ」と、父は大声で叫びました。ブレーズは父の言葉を漏れ聞いていました。彼はやがてだれにも別れを告げず父の家を後にし、改革フランシスコ会の修道院長の下にひざまずき、修道院への受け入れを願いました。彼の代母であった叔母のマリー・ベトンは、その修練院の費用をまかなうに足るダイヤの結婚指輪を彼に与えました。翌年、すなわち、1763年10月、ブレーズはエリー修道士の名で荘厳誓願を宣立しました。彼はこの厳しいデビューの勇気で最後まで忠実でした(11)。

この呉服商が息子のブレーズをささげることがをちようちよしたのは彼を継ぐはずの子供たちがまだ若かったからでした。3番目のフランソワはまだ7歳でしか

ありませんでした。彼も兄たち同様1762年のイエズス会の散開まで、ドミニコ会修士あるいは改革ドミニコ会修士たちによって運営されていたペリギュール高等中学校に通っていました。フランソワは世間に残り、父と協力して働き、結婚しました。その子孫は今日なおペリゴル地方やボルドー地方に存続しています。

末の子供3人のルイ、リュクレース、ギヨームは1歳か2歳の開きしかありませんでした。彼らは一緒に育てられ、そのしつけが同じようであっただけその趣味も似通っていました。このように彼らの生活環境が同じだったので、相互を見分けることが出来ないほどでした。したがって、末の子のギヨームの経歴を語ることによってその兄弟姉妹の生涯をも語ることもなります。

家父長制家庭の末子ギヨームはタイフェル通りからわずかな距離の別の小教区になるフロワ通りの母方の祖父の家で生まれました(12)。したがって、彼はセン・フロンの旧首都教会ではなく、すばらしい古典的様式で、ペリゴル地方の最初の宣教師の一人によって奉獻されたセン・シレン教会で洗礼を受けられました。この教会は司教座聖堂に次ぐ町で最も重要な小教区聖堂でした(13)。主任司祭のアニアン・デュボワ師は自らこの子に洗礼の秘跡を授けました。ギヨームの名は代父を務めた家族の友人でパン屋のギヨーム・モローの名を取ってつけられました。

この子の幼年時代のことについての記述は手短にならざるを得ません。わたしたちの研究もこの点に関してはほとんど明らかに出来なかったからです。その上、シャミナード師の全生涯は、その幼年時代がどのようなものであったかを明らかにするものとして、自からのどのような優れた点も幼少時代のしつけに負っていることを自ら述べられたからです。

師はこのしつけの主要な部分は母によるものとしています。すなわち、師はその優しさ、愛想よさ、節度、慎重さ、そして特に、信仰のしつけを母から受けました。母が祈っている間その側にいました。教会にも母と一緒にいき、母が聖体拝領に行くとき、自分なりにこの聖なる秘跡にあずかるかのように母の衣服につかまって行きました。師は母のひざの上でお気に入りの祈り、使徒信経を唱えることを学びました。師はこの使徒信経を信念の口調で唱えていたので、人々はこれを聞いて感動していました。最後に、師の信心の神髄や宣教の対象、そして、魂を勝ち取る大きな手段となった優しい力強いマリアへの献身を自分の義務と考えるようになったのもその母によるものでした。

他方、母も当然末っ子に与える特別な愛情を師に注ぎました。他の兄弟姉妹たちのねたみなど少しも気にしませんでした。それは、母にとっても他の兄弟

姉妹にしてもギョームはかわいい「坊や」だったからです。この「坊や」のニックネームは師が司祭になってからも親しい間柄では用いられていました。師に接するすべての人々が彼に引かれるのを感じました。すなわち、師の早熟な才能、率直な応答、開放的な表情、すべての人々に対する優しい心遣い等の魅力が既に発揮されていましたが、この魅力が後ほど多くの英雄的献身の実践に値し、多くの魂を神に勝ち取ることに役立ったのでした。

両親は師の余りにも豊かな資質を前にして自分たちに負わされた義務に気づいていました。そこで、両親はあらゆる危険な影響を遠ざけ、早くから大きな決断を約されているように思われた意志を善の方に導くため、毎日のあらゆる生活の実情を考慮しながら、特別の用心をもって育てていきました。わたしたちは、シャミナード師自ら次のように想起されたエピソードにこの家庭のしつけを実際にかいま見ることが出来ました。師は指導の手紙に次のように書かれました(14)。「幼いころ亡くなった母から、ある日、恐らくわたしの顔を洗い、髪をとかすのにわたしが逆らうのを我慢させるためでしたが、『きれいになるためには我慢しなければなりません』と言われましたが、このことをあなたにも繰り返すことが出来るに違いありません。」我慢しなければならないということは、厳しいが、有益な教訓です。犠牲は子供のしつけにとって立派な行いの条件であり、進歩の原則です。また、身分の義務を果たす大人に取っても同じです。ギョームは母のこの言葉に感動し、この言葉を記憶に留め、やがてその意味が完全に分かるようになりました。

母のその他の言葉もいつまでも変わらない印象を師に残しました。師は晩年になってからの講話でもなおそのことを思い出していたからです。「ある日、わたしは母から何かを頂きましたがお礼を言うのを忘れていました。すると、母はさりげなく、『あれはお礼も言えないほどつまらなかったの』と注意しました。それからわたしはお礼を言うのを決して忘れませんでした」とつけ加えました。したがって、師は極端なほどの礼儀正しさで目立っていました。たとえ召使いからであっても、頂いた最もわずかな手助けに対してもていねいな言葉で感謝していたからです。

ギョームは兄ルイと共に母の下から離れて小教区の学校(15)、多分、キリスト教教育修士会の「Petite Mission」、すなわち、小神学校に移りました。この学校は司教座聖堂と隣り合わせでしたので、呉服商の自宅のすぐ側でした。ここで兄弟は取り組まなければならない初歩から神学を含めて、次年度学年までの幅広い教科が課せられました。

古典の勉強を始めることになったギョームと兄ルイは、ペリギューの高等中

学校で兄たちの後を追って勉強するはずでしたが、そこには送られませんでした。それは、この学校が、ボルドー大学から受け入れを拒否されたドミニコ会士の退散によって生じた苦境に陥っていたからでした。1769年から1771年までの2年間、学校には教員の有資格者は一人もいませんでしたが、王政復興期の自由主義反対者たちが学校運営を承諾するまで、神学校の司祭たちによってどうにか運営されました。

二人の兄弟がラテン語クラスで勉強を始めたのはこの過度期であったことは確かです。長兄のジャン・バプティストは彼らを自分の下に呼び寄せました。彼はイエズス会散開の後には小教区に入っていましたし、ペリギューで神学の課程を終え、ミュシダンという地区の小さな町の高等中学校の教師の資格を取得していたからでした。したがって、二人の弟たちの勉学の継続を提案したのがこのミュシダンの学校だったわけです。彼は両親から二人の兄弟を、ルイは1769年に、ギヨームは1771年に引き受ける許可を難なく引き出しました。

この二人のその後の歩みをたどる前に、多分彼らのミュシダンの学校入学前に行われたと思われる堅信の秘跡について述べたいと思います。彼らの使用していた公教要理には、「行いの素直さと純潔さの報いとして(16)」の堅信の秘跡が勧められていました。彼らが既に中学生になっていたことから人々はこの兄弟がこうした報いに値する者であることを判断したのです。彼らは姉妹のリュクレスと共に、老齢で聖人のようなプレモー司教(17)から堅信の秘跡を授かりました。そして、当時の習慣に従って、洗礼名に加えて新しい名を頂くことになり、ルイはクサヴィエを、リュクレスはマリアを、そしてギヨームはヨゼフを選びました。こうして、聖ヨゼフはギヨームの少年時代から好きな保護者となり、ギヨームがマリアに対して抱いた愛に応じてこの聖なる太祖への献身もますます深まっていきました。これ以来、ギヨームのすべての働きはこの聖人の保護の下に置かれることになりました。そして、信頼の外的あかしをこの新しい保護者に示すためにギヨームの名よりヨゼフの名を優先させることにしました。シャミナード師は署名の際、第一名のギヨームを頭文字のGによってのみ連想させ、ヨゼフの名は略さずには書きました。師は生涯にわたってこの習慣と献身に忠実でした。これほど目立った師の意向に従って、わたしたちも師が好まれたこのヨゼフの名で師を呼ぶことにしたいと思います。



注

(1) この家の以前の番地はタイフェル通り6番地でしたが、現行の32番地がその番地であったように思われます。

(2) ブレーズ・シャミナードとカトリーヌ・ベトンとの結婚式はセン・シレン小教区教会で1743年2月19日に行われました。ブレーズは彫刻家ジャン・シャミナードとマルグリット・ルクルールから1712年ごろ生まれました。1720年ごろ生まれたカトリーヌ・ベトン、または、マレン(この家族はベトンとかマレンの二つの名前のどちらかで呼ばれていました)の父は商人のベルナル・ベトンまたはベルナル・マレンで、母はギヨメット・ラヴェーヌでした。わたしたちは教会参事会員ユーゼーヌ・シャミナード師のおかげでシャミナード家の家系に関する大半の情報を得ることが出来ました。改めて師に感謝したいと思います。

(3) フィュー家のチルボーは1654年にプロテスタントの圧制からペリギュールを解放しました。

(4) 市民憲章同意者ポンタル司教の不幸な十字架奉持者で、この無資格就任司教の下で、特に不愉快なこの役割を果たしていたシャミナード家は下層社会の家柄でした。(ピー・ジェー・クレド著『ピエール・ポンタル』 デローム及びブリゲ社出版、1893年、パリ。251ページ。) 他方、立派な公証人であったピエール・シャミナードは1653年に市の管財補佐の役職を果たしました。その子孫の一人ジャン・フランソワ・シャミナードは議会所属の弁護士でした。もう一人のピエール・シャミナードは1789年エギールリ地区の区議でした。(前記ピー・ジェー・クレド著引用 81ページ)

(5) シャミナード師のカイエ師への手紙 1824年3月25日

(6) ジ・ビュッシュェール著、ペリギュール地区における大革命に関する歴史研究、1877年 ボルドー 第1部14ページとそれ以下

(7) ジ・ビュッシュェール著引用 68ページ、110ページ

(8) 聖職者は小作人たちに対して10分の1税の徴収を強化していました。

(9) シャミナード師が自筆の覚書で語った逸話。師は1808年の兄ルイの追悼講話でこのことを話しました。

(10) 生き残った兄弟は次の通りです。

1 ジャン・バプチスト(1745-1790)は、1759年にイエズス会に入り、同会の散開まで会にいましたが、生涯の大半をミュシダンの神学校で送り、同地で帰天しました。

2 ブレーズ(1747-1822)は、1762年に改革フランシスコ会に入会し、大革命の間はイタリーに亡命し、政教条約後小教区司祭として派遣され、ペリギュール近郊のセン・タシエ教会の助任司祭として帰天しました。

3 フランソワ(1755-1843)は、父の職を継承し、多くの子供に恵まれ、その家系を伝えました。

4 ルイ・クサヴィエ(1758-1808)は、ミュシダンのセン・シャルル司祭共同体の会員となりましたが、大革命の間追放されました。政教条約後ボルドーの大神学校の院長になりました。

5 リュクレーヌ・マリー(1759-1826)は、1780年に議会所属弁護士ローラニと結婚しましたが、ローラニ氏は結婚1年後帰天しました。子供もなく未亡人になったマリー

は実家に帰ったが、後、弟ギヨームと共にボルドーに住み、その家を管理しました。

6 ギヨーム・ヨゼフ(1761-1850)は、本伝記の主人公です。

(11) この物語はシャミナード師の弟子の一人ピエール・セルマンの覚書の中に記録されていました。

(12) この生家は現在のフロワード通り20番地と見なすことができます。

(13) 伝説によれば聖シレーンは聖フロンによって改心させられた曲芸師か魔術師でした。彼は聖フロンの後継者に選ばれ、司教になりました。その聖遺物は同名の教会に保管されました。このシレーン教会は大革命の時小教区教会の資格を失い、売却されて壊され、現在の町役場広場に変わりました。(これらの資料及びその他はブリュジェール参事会員の博識によるものです。

(14) 1800年7月26日、ラムルス嬢への手紙

(15) キリスト教教育修士会が当時ペリギュールの小学校を運営していたと書かれていますが事実は不確かです。

(16) 公教要理はジャン・クレチアン・ドゥ・ブレモー司教の命令で印刷されました。(ペリギュールにて、日付なし、司教教書の日付は1750年5月25日)、62ページ。

(17) 1732年から1771年まで、ペリギュールの司教であったジャン・クレチアン・ドゥ・ブレモー司教はリオン教区出身でした。司教は小教区駐在の義務を全うしたこと、当時代の評価に値したこと、そして、その教区を豊かにした多くの修道会を創立したことで注目されました。

第2章 勉学 (1771—1785)

ミュッシダン ❖ セン・シャルル修道会 ❖ ミュッシダン高等中学校 ❖ 長兄シャミナード ❖ 同校生徒の兄ルイとヨゼフ ❖ ヨゼフの初聖体 ❖ 聖体の信心 ❖ 念どうを学ぶ ❖ マリアへの信心 ❖ 事故と不思議な全快：ヴェルドレへの巡礼 ❖ 兄兄弟の聖職召命とヨゼフの私誓願 ❖ ミュッシダン高等中学校の臨時教員 ❖ ボルドーでの勉学 ❖ ノエル・ラクロワ師 ❖ ルネとヨゼフパリへ ❖ 司祭叙階：ミュッシダンへの帰省

18世紀、イズル地方の低地は、陰気なペリゴル地方や森林地帯のノントロネ地方及びサルラデ地方と比較して、その肥沃さと温暖さで評判になっていました。その中でミュッシダンは最も重要な町の一つでした。

ミュッシダンの町はペリギューの下流数キロの川岸に位置し、ペリゴル地方の山脈の山すその丘陵地帯に緩やかに囲まれてうずくまり、豊かな自然に恵まれていました。このため、軍人たちの野望を刺激して政治的、宗教的争いがこの地方にもたらされました。現在ミュッシダンの町の城壁は取り払われ(1)、岩の聖母にささげられた小さな教会がラ・フォルス公爵の旧城塞の代わりになっています。

ヨゼフ・シャミナードが勉学を続けようとした高等中学校はこの小さな町の郊外に建てられていました。そして、この学校は最近創立されたものでした。プレモー司教はその巡回司牧で、「町やその近郊の人々には最大の霊的援助の必要があることを認めていました。」したがって、司教はミュッシダンの司祭ピエール・デュバレル師に、「この地域の司牧に従事し、特に青少年の聖化と教育に専念する在俗司祭共同体の創立を奨励しました(2)。」ラ・フォルス公爵は師を援助し、岩の聖母教会の管理をこの新在俗司祭共同体に委託しました。

この在俗司祭共同体の創立のモデルは聖ヴェンサン・ドゥ・ポールの影響で生まれたペリギューの宣教司祭会でした。プレモー司教はこの在俗司祭共同体を次のように説明しました。「この司祭共同体はこの種のものとしては特異なもので、司教のみに属し小教区外には拡大せず、小教区の司祭のみで構成されたものです(3)。」

ペリギューの宣教司祭会は聖シャルルの保護の下に置かれていました。彼らは説教に専念し、小神学校や大神学校の指導に従事していました。そのた

めに小宣教師会とか大宣教師会と呼ばれていました(4)。ペリギューの宣教師会は小教区全体のためでしたが、ミュシダンの新しい司祭共同体は地域のためであると主張していました。

新しい司祭共同体は前記の宣教師会にならって聖シャルルの名を頂き説教に専念し教育施設、すなわち、ミュシダンの高等中学校を設立しました。新司祭共同体は説教と同じように効果的な教育活動を高く評価しました。それは当時の学校に余りにも一般的になっていた危険を避けるためでした(5)。確かに多くの学校は昔ながらの時代遅れの規律や秩序しか守らず、偏見というより怠慢によって当節の学説から台頭した風潮に侵害されていたからです。このようにこれらの学校に浸透した哲学観は思想をゆがめ、風潮の乱れを引き起こしました。油断のないロレン氏は既に学校への危険の到来を予感し、不敬けんな言動の増大を公然と非難していました(6)。

誤った哲学観、乱れた風潮に抵抗するために特別に創立されたミュシダンの高等中学校はこれらの危険を恐れる必要はありませんでした。本校は1774年の創立以来、幸運にも同地の最も素晴らしいある家庭の出身で、有能で熱心なアンリー・モーズ師によって指導されていたからです。師は本校の精神や傾向を更に明確にするため、1761年に小神学校の名称とその特権を取得したので、以後ミュシダンの神学校と呼ばれるようになりました。このことは本質的にキリスト教の精神を生徒に教え込み、もし、彼らの召命が司祭職に予定されているなら、彼らを司祭職に準備する計画を確立するためでした。

校長は素晴らしいスタッフに恵まれていました。有能な協力者を引きつける才能を持っていたからです。その協力者の一人がジャン・バプティスト・シャミナード師でした。かつてイエズス会士であった師が隠れた生活への熱意をセン・シャルル師祭修道会に求めて来た時、師は申し分のない教育の貴重な援助をこの学校にもたしました。師は神学博士の学位を取得し、当時イエズス会しか与えることが出来なかった宗教的、教育的養成を立派に終了していたからです。ミュシダンで師は、「その深い知識や更にその徳によって、また、絶えずイエス・キリストの尊いみ名を唱えるという独自の方法でキリストに一致していたこと、そして、だれも師の謙そん、清貧、歓待、完全に模範的な生活には及ばなかったこと、そのたぐいえない禁欲によって冬でも決して火の側に近寄らなかったこと」等で評価されていたということです(7)。言い伝えによってわたしたちに伝えられた幾つかの点は、末弟のヨゼフが長兄の指導に託された日から長兄に示した深い尊敬を説明するものでした。

ヨゼフが両親に最後の別れを告げてその祝福を受け、ペリギューから36キロ

離れたミュシダンまで、ペリゴル地方(8)の悪路をたどったのは彼が10歳の時でした。彼の健康と身体的発育はこの変化によってひたすら増進しました。ボルドー街道上のほとんど田舎の真ん中に位置していたこのミュシダンの神学校で、彼はペリギュの狭い露地ではほとんど感じられなかった新鮮な空気を自由に呼吸することが出来たからでした。彼はこの特に恵まれた環境で知的、道徳的教育を受け続けることが出来ました。ここでは家族の生活スタイルとは多少異なり、彼の知性は真面目な勉強によって養われ、その心は聖人のような長兄の指導と模範によって養われていきました。

ヨゼフはこのミュシダン到着後しばらくして初聖体を許されました。その生涯で極めて大切なこの秘跡の拝領の詳細は分かりません。御主との真に親しい最初の出会いがこの少年の魂に深い印象を刻み込んだに違いないということしか分かりません。この御主との出会いが彼の霊的生活の芽生えの特徴の一つとなった信仰の徳を促進させ、聖体の秘跡に対する熱心な信心をもたらしました。ある教会当局の証人(9)によれば、彼は聖体の聖ひつの祭壇の前で、何時間もじっとひざまずいて念とうにふけていたということです。

果たして、彼は既に念とうの実践を徐々に身に着けていたのです。夏休みの間、兄のルイが決まった時間に一人で自室に閉じこもることに気づいたヨゼフは、どのような用事があって一人離れているのかと心配して尋ねると、彼は、「わたしは自分自身を反省しているのだ」と答えました。ヨゼフはその大きな秘密を知り、これを大切にすることで満足するまで自分の考えに固執していました。その日からヨゼフもこのすばらしい修行に熱心に従事し、この分野で優れた教師であった長兄のジャン・バプティストの下でその養成を完了しました(10)。ヨゼフはこの神学校で、念とうが神の道への不可欠の進歩の条件であることを理解し、その後、信心の実践の中で念とうを優先することにしました。

念とうは少年ヨゼフの信心により力強い変化を与えたばかりか、純粋な魂の特性である新鮮な感受性を傷つけることはありませんでした。彼はますます高まる愛でマリアを愛し、子心のあかしを惜しみなくささげました。そして、教師たちによって管理されていた参拝所のある岩の聖母像の下に好んでぬかずき、そこで悲しみの乙女マリアを観想し、生涯体験しなければならなかった十字架の秘義を早くからマリアに学んでいました(11)。

ヨゼフ少年の将来を危うくしかねない事故がマリアと結んだきずなを強固にしました。ある日遠足に行った時、生徒たちは石切場ではしゃいでいました。石切場の岩場を上り始めた数人の軽率な生徒が岩の破片を踏み外し、その一つがヨゼフの足にあたりました。傷は重いようでした。それは熱心な手当の6

週間が過ぎても何の回復も見られず、歩くことも出来なかったからです。人事を尽くした治療も思うに任せなかったので、長兄のジャン・バプティストは弟に聖母マリアに助けを求めるよう勧めました。ヨゼフは毎日の生活であかしていた同じ信頼をもってマリアに懇願し、人々がなし得なかったことを願いました。彼の傷は早急に完全に回復しました。したがって、彼らはこの治癒をマリアへの祈りの結果と見なしました。二人の兄弟はマリアへの感謝の義務を果たし、マリアになした約束を果たすために急いで巡礼に出立しました。

彼らはラ・レオル近郊のヴェルドレの聖母の参拝所(12)への巡礼を約束していたからです。数日後徒歩で出発しましたが、傷の痛みが再発することはありませんでした。シャミナード師は老年になってもヴェルドレの聖母への感謝の念を表していました(13)。

ヨゼフ少年の勉学は聖母マリアへの信心に劣らず進歩していました。しばらくの間に、ヨゼフは中学の2学年上の兄ルイに追いつきました。兄ルイの健康が余り優れなかったからです。この時から、二人の兄弟は当時の学校の教科で求められていた初歩と古典の異なったコースと一緒に勉強しました。彼らは修辞学級を終わって、特にディスカシオン教室や文芸教室での毎日の学習の結果ラテン語に精通するようになりました。そして、フランス語やフランス人作家たちを十分知るようになり、その上、科学や歴史上の何らかの知識に精通するようになりました。

兄弟はミシュダンでの学習課程を終了しましたが、上級課程の一部である哲学はまだ学習していませんでした。したがって、進路の選択が近づいていました。セン・シャルル司祭修道会で彼ら兄弟は「素直で従順、そして勤勉な青年(14)」、一言で言えば信心深い神学生の模範として知られていました。すべての人が、彼らが聖職者の身分を選ぶよう期待していました。果たして、彼らは聖職者になることを願い、1777年には二人とも聖職者になりました。

しかし、ヨゼフの渴望はこのことだけに止まりませんでした。初聖体後しばらくの後、ある日、彼は観想するよう駆り立てられるのを感じました。そこで、兄のジャン・バプティストがいつか、神の声がささやかれたらその声に注意深く耳を傾け、心の潜心を計るようにしなさい、と勧められたことを思い出しました。彼はチャペルに引きこもり、愛情を込めて自分自身を犠牲として御主にささげました。そして、この奉獻が受け入れられたこと、神はご自分の光栄のために自分を使うことを考えておられるのだということが分かりました。この時から、彼は自分自身を神への犠牲として眺め、おきてを守ることで満足せず、福音の勧めを実践し始めました。兄のジャン・バプティストがヨゼフの心に神の恩恵の働きを認め

たのはヨゼフがやっと14歳の時でした。そこで、兄は、み摂理がそのしもべを導くのを望まれる道を示してくださることを待ちながら、弟に清貧、貞潔、従順の私誓願の宣立を許しました。その時のヨゼフは熱意に燃え、長い生涯の終わりまでこの時の新鮮な思い出を持ち続けました(15)。 ミュシダンでの勉学が終わった時、当然修道会の選択の問題が生じました。不幸にして、その地域の修道院では会則の乱れが一般的で、特に清貧は十分守られず、世俗精神は最も厳しい修道会の中にまで浸透していました。改革フランシスコ会士のブレーズ・シャミナード師はその修道院で師を取り巻く様々な模範にもかかわらず、会則を守って非凡な徳をあかししていました。長兄のジャン・バプティストはこうした状況を考慮して、ヨゼフにしばらくの間ミュシダンのセン・シャアルル司祭修道会に止まるよう勧めました。ヨゼフの兄のルイもそこに残ることを既に決めていました。

二人の兄弟はまだ神学校の生徒でしたが、彼らの教師たちの生活を志望する神学校の「入学資格生徒」の中に加えられました。彼らはその資格で外的な修行は何ら課されませんが、より充実した内的生活、よりしばしば刷新する意向の純潔、そして、「文芸教室や食堂、自習室におけるより深い潜心を沈黙(16)」が求められました。入会希望者は16歳で志願者としてこの司祭修道会に受け入れられていました。志願期は1年半から2年になっていました。この期間はそれぞれ8日間の3回の黙想で区切られていました。ルイとヨゼフはこれらの試練を受け、生徒の身分から教師の身分に移っていました。

しかし、彼らの教育課程の修了はほど遠いものでした。司祭になる前に哲学クラスで物理、教義、倫理、そして、法律の教科を履修しなければならなかったからです。そこで、彼らはペリギュの宣教司祭会に送られました。しかし、1年後、兄ジャン・バプティストの指導を受けることがより効果的だと判断してミュシダンに帰り、しばらくそこに止まっていたましたが、ジャン・バプティスト師は、ボルドーに行き、勉学を終了し、学位を取得するよう勧めました。

当時、神学の学位の取得は頻繁に行われていました。それはある特典の取得のために要請されていたからです。もちろん、学位は大学でしか取得出来ませんでした。1747年にプレモー司教は、ボルドー大学での受験を選択する神学生を含めて神学生たちを教区の神学校に居住させるよう奔走しましたが無駄でした。大学総長のアグソー氏が司教の提案に反対したからです。

したがって、学位の取得を望んでいたペリギュの神学生たちは近郊の大学、すなわち、ポアティエ、カオール、そして特に、ボルドーの大学に数年間滞在しました。彼らの知識はそうしたところでしか養成されなかったのでしょうか。し

かし、それらの便宜も重大な不都合で埋め合わされることになっていました。ボルドーのような商業や歓楽の都市の中で孤独の青年たちが遭遇する危険性はプレモー司教を奔走させた主要な動機だったからです。ところで、1780年ごろは、これらの危険性は精神的な動揺に比例して増加していました。ボルドーの市民社会は政治経済の問題、チュルゴ氏やネケル氏の改革、アメリカ合衆国の独立に伴う英国との戦争に熱中していたからです。また、思想家たちの引き起こした問題で動揺していたからです。特に、ジャン・ジャク・ルソーは人々をより混乱させていました。また、モンテスキューが説いた第三の教育の有害な結果を若い学生たちに及ぼすには十分過ぎるほどでした。彼は、「今日われわれは先祖伝来の教育、学校の教師からの教育、そして社会からの教育を受けている。しかし、最後のもの、すなわち、社会からの教育は最初の二つの教育を消滅させてしまった(17)。」と説いたからです。

ミュシダンの二人の若い神学生シャミナード兄弟はこうした有害な影響から自らを守ることを心得ていました。彼らは勉学から気をそらすことのないように決心してボルドーに留まりました。事実、彼らはその教師たち(18)が教えたギエヌ校への道以外の道、また、敬けんな学生たちの集会所となっていたセント・コロンブ教会への道以外の他の道は知りませんでした。

この教区の司祭ノエル・ラクロワ師(19)は若い聖職者たちのために献身し、特にボルドーに家族を持ってなかった神学生たちの世話をしました。師の伝記記者(20)は次のように述べました。「毎年、神学の講義の開始時期には、だれが大学に入った神学生なのかをいち早く知って、すぐ彼に会いに行き、巧みに彼らの心を捕らえ、優しい思いやりと愛情をもってその信頼を勝ち得ていました。師は彼らを見失わないようにしてセント・コロンブ教会、セン・プロゼ教会、または、最寄りの教会の一つで宣教活動に専念させることを約束していました。また、友の会の会員とも関係を持つように指導したので、彼らもやがて友の会の一員になりました。」

ラクロワ師はこれらの青年たちを助けるためにはどのような苦勞にもたじろぎませんでした。師の伝記記者は更に続けています。「ある時は、休みの日に友情のきずなを深めるために散歩を共にし、遊びを準備し、また、ある書籍を紹介してこれを敬けんに興味深く解説して彼らの心を崇高な徳の実践に向かわせるようにしていました。また時には、彼らとの関係を更に深めて教話や黙想によって『正義と聖性の新しい人』を彼らに養成していました。他の場合には、病院や刑務所に彼らを伴い、ちょうど、『わしが翼を広げてひなの回りを飛び交い、ひなの巣立ちを促すように』、慈善事業の模範を示して彼らを指導していました。こうして、師は聖書に述べられたぶどう畑の垣根で彼らを保護したのでした。

それはよく耕されたこれらのぶどうの木が確実に実を結んで豊かな収穫が約束されるためでした。」事実、師の模範的な徳を判断するには、ジャンセン派の人々がラクワ師の友の会の青年たちをどのような憎しみで攻撃していたかを知ることです。彼らは友の会の青年たちを悪ふざけと侮辱を絶えず繰り返しながら、からかって「Béguignons (托鉢修士)」と呼んでいたからです(21)。

こうして、シャミナード兄弟はボルドーで良い教師に恵まれ、立派な教育を受けていました。ただ、ヨゼフは修道生活に入る望みを出来るだけ早く実現したいという考え以外の考えは持っていませんでした。しかし、彼は自分の目指す修道院を市内の多くの修道院の中に見いだすことが出来たのではないのでしょうか。幾つかの修道院を訪れても、彼が抱いていた理想に応ずるものが一つもなかったからです。すなわち、時代の精神がどの修道院にも大なり小なり猛威を振るっていたからでした。

ある晩(22)、ある修道院のチャペルの前を通った時、ちょうど聖体降福式を告げる鐘が鳴っていました。彼はそこに入り、修道者たちの深い潜心の態度を見て感心し、「わたしが落ち着く場所はどこではないだろうか」とつぶやきました。翌日、彼は院長に会い、一週間の黙想をなすため共同体に受け入れてくださるよう願いました。もし神のお望みであれば修道者になることを願おうと考えたからです。願いかなって数日間修道生活を分かち合いました。しかし、それは悲しい失望に変わりました。彼らの態度は外見上熱心に見受けられましたが、内心は修道精神が弛緩し、世俗精神が充満していたからです。黙想を終了する勇気を失った彼は、常にみ摂理のおぼし召しを待ちながら、兄と共に学生生活を再開するために引きこもりました。

この兄弟の青年は学生集団の中では気づかれませんでした。彼らを認められたのは特にヨゼフに好意を抱いた哲学教授のランゴワラン師でした。ジャン・シモン・ランゴワラン師はボルドーで最も尊敬されていた聖職者の一人でした。師はボルドー市の裕福な船主の子供でしたが、神に仕えるために身分も、才能も、財産も、いわゆる最高の職業を放棄したのでした。その後、師はセン・アンドレ司教座聖堂の参事会員のメンバーとなり、そして、大学の評議員、ギエヌ校の哲学教師になりました。1782年にフェルディナン・メリアデク・ドゥ・ロハン司教の後継者になった新大司教のシセ司教は早速ランゴワラン師の人柄に引きつけられ、師を教区の総代理に任命しました。モルタニュ小修道院からの豊かな収益を貧者に分配する任にあたっていた謙そんで親切、寛大な師は、徳の模範であると共に敏感な頭脳の持ち主でした。若いシャミナード師はこのような教授の関心の対象になったことを誇りに思いました。

ランゴワラン師は自らの神学的及び司祭の養成をパリで完了していました(23)。この兄弟に自分のようにしばらくパリに滞在して勉学することを勧めたのはランゴワラン師であったに違いありません。それは、セン・スルピス司祭団の司祭たちの優れた指導の下で、兄弟が学問を通じて自らを完成すると同時に司祭叙階を準備するためでした。果たしてこの兄弟は1782年の春にパリで下級品級を授けられ、同年5月には副助祭の位を受けることを目指していました。

神学科の学生は副助祭(24)から神学校内で生活することが習慣になっていました。そこで、シャミナード兄弟はセン・スルピス司祭団がパリで経営していた小神学校に入ることが許可されました。それはモンターニュ・セント・ジュネヴィエーウ通りにあった旧ラオン校の校舎を1764年来使用していたリジウ高等中学校でした。この学校の校長は聖人のようなプサルモン師でした。兄ルイ・シャミナード師に関する追悼演説でヨゼフがプサルモン師にささげた次の短いくだりを引用することによってしか師をよりよく知らせることは出来ません。「プサルモン師は特に慈善事業に献身していたことでその真価が認められていた人で、当時、師には自宅からの収入以外に年1万2千リーヴルの金利収入がありました。師はこれらのお金を全部慈善事業にあてました。師の喜びはそれらの金を貧者に分配することのみでした。師は共同体で一番身分の低い召使いのように食事をし、質素な衣服をまとっていました。」師は後に9月革命の殉教者の一人になりました(25)。

ヨゼフ・シャミナードのパリ滞在については余り知られていません。師はセン・スルピスの司祭たちとの接触によってオリエ師の霊的教義に対する熱意をくみ取ったに違いありません。師はパリに1年以上滞在しなかったように思われます。それは、1783年の6月以来ミュシダンの幾つかの記録に師の署名が見いだされるからです。

師はいつ、どこで、司祭に叙階されたのかよく分かりません。1783年の終わりが、師はまだ副助祭であったこと、そして、1785年にはその署名に「司祭」という語が書き添えられていたことが分かっています(26)。ヨゼフが神学博士の学位を取得したのは、最もありそうな場所としてボルドーを指摘する向きがありますが、このことも不確実さに包まれています。

兄のルイはパリにヨゼフより長く残っていました。その才能が文壇のメンバー、すなわち、当時有名になっていたパリ博物館のメンバーに受け入れることになっていたからです(27)。ルイは、司祭職の第1歩から謙遜の徳を身につけていたヴェンサン・ドゥ・マルトンヌ師という模範的な聖職者との友情を保ち、生涯変わることはありませんでした。ルイがミュシダンに帰ることになるとドゥ・マルトン

又師も彼に従うことを決心しました。師はミュシダンがとても気に入ったのでセン、シャルル司祭修道会に入り、その財産の大半を神学校に譲渡しました。



注

(1) ミュシダンは宗教戦争中に占領されたが奪回されました。1579年の包囲でコッセ・ブリッサク公爵は町の城壁の下で戦死しました。町の城壁は1591年にカトリック信者たちによって取り壊されました。

(2) 「1744年7月28日付けマシェコ・ペリモー司教の教令」。この資料はその他の資料同様P・J・クレド氏によって伝えられたものです。このことを深く感謝致します。クレド氏は「ピエール・ポンタル」に関する著書で、ミュシダンの高等中学校のことについて述べる機会を得ました。それは、余りにも有名な市民憲章受諾のこのトルドーニュのポンタル司教はミュシダン出身で、この町の学校で学んだからでした。この点についてはこの著書の冒頭を考察してください。ミュシダン高等中学校の起源に関する資料はティリオ氏の後継者メルレ氏の研究にその大半が委ねられました。

(3) ブリュジエール著、「ペリギューとサルラ教区記念サイン帳」17ページ、モンリュイール出版、1893年。

(4) ペリギューの宣教師会は聖ヴェンサン・ドゥ・ポールの友人でジャン・ドゥ・ラ・クロップ・ドゥ・シャンテラクによって1646年に創設されました。同時代には多くの小教区が類似の創立に恵まれました。例えば1636年にはボルドーに聖ヴェンサン・ドゥ・ポールの他の友人ジャン・フォントネイによって「司祭聖職者の会」が設立されたことを記さなければなりません。ペリギューの宣教師会は18世紀に広範に使用された教理神学や倫理神学に関する論文を著しました。

(5) 18世紀の諸学校の実情に関する教育全般の調査に関しては、A・シカール著「大革命前の古典教育」、1887年、パリ、を参照してください。

(6) 前記A・シカール著の引用、5ページ。

(7) 「ボルドー大司教でボワ・ドゥ・サンゼーのシャルル・フランソワ・ダヴィオ大司教の生涯と大司教在位の詳細」に関するリガイニオン師の自筆の覚書、1844年、パリ。この覚書は、これを保管するボルドー大神学校の司書で、極めて親切で博学のベルトラン氏より入手いたしました。前記のくだりはベルトラン氏によって、「ボルドーとバザの神学校史」3巻、2章、30ページ、1894年、ボルドーに記されています。

(8) 1889年、ヴェルニオーの手紙。「わたしは地獄への道もペリゴル地方の道と同様に悪いと思います」。前記ジ・ビュッシュェール著による。105ページ。

(9) セン・クロードの司教ショーモン司教は1841年のクルトフォンテーヌの修道者たちへの講話で知られています。同司教は以前カルカソンで、シャミナード師が親しかったドゥ・ラ・ポルト司教の優れた司教代理でした。

(10) 後ほどの講話で、シャミナード師は、長兄のジャン・バプティスト師が、ある新参の修練者にどのように念とうをなすべきかを教える任務を負わされていたかを語りました。この新参者は司祭になりましたが、若い教師の教えに深く感動していました。その後、シャミナード師はこの新参者が自分自身であったことを話しました。

(11) この教会はまだ健在です。しかし、もうミュシダンの町営劇場という違った目的で使用されています。教会の後陣のイズル川を望む窓の横木の上に、「キリストはわたしの岩である。どのような力もわたしを征服出来ない」とラテン語で記されています。この表記はこの教会の再建の際遭遇した困難を暗に示したものとされています。岩の聖母像はある個人の手に乗っていたものでした。この聖母像は荒削りの木彫で、御子の体をご自分のひざの上に乗せて座っている聖母マリアは、御子イエスを表す一人の子供によって左側から支えられています。このことはこの聖母像の作者が至聖なる乙女マリアの喜びの秘義と苦しみの秘義を同時に表そうとしたもののように思われます。

(12) ヴェルドレはミュシダンから約80キロの地点にあります。

(13) シャミナード師は84歳になっても司教様の病氣回復のためヴェルドレの聖母参詣堂への巡礼をドンネ司教に申し出ていました。

(14) ルイ・シャミナード師に関する追悼演説

(15) シャミナード師の晩年の多くの手紙にこのことへの言及が見いだされます。師は1848年10月18日の覚書で、その誓願についてはっきり話しました。

(16) これらはミュシダンのセン・シャルル司祭共同体の会則の用語です。(マリア会総本部資料室)

(17) 法の精神、4巻、4章

(18) 当時、神学の課程はギエヌ校やカルメル会でしか履修出来ませんでした。イエズス会士が去った後、マドレーヌ校の神学講座も廃止されました。

(19) ノエル・ラクロワ師は1746年1月31日ボルドーで職人の家に生まれました。師はセント・コロンブ教会の助任司祭として主任司祭のM・アルラリー師によって創立された信徒団体の世話を引き受けました。

(20) タイフェル師著、「ラクロワ師の生涯」24ページ、1847年、ボルドー。

(21) M・ベルトラン著、「神学校の歴史」29ページ。ベルトラン氏は、ボルドーの特派員が聖職者の長上や同僚をからかっていた当時のジャンセニスト紙「聖職者だより」に寄稿していました。

(22) この物語はピエール・セルマン士の覚書からの引用です。

(23) 師はアスリーヌ教授のヘプライ語の講義を受講するためまたパリに帰りました。(フェレ著、「ジロンド県の統計と人物伝」ランゴワランの項374ページ、1889年、ボルドー。)

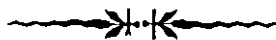
(24) タイフェル著、「ラクロワ師の生涯」15ページ。

(25) 師は1792年9月2日カルメル会修道院で殺害されました。ベルトラン著「セン・スルピス司祭団史」1巻、509ページのピエール・ニコラ・プサルモン師に関する序文参照。ピカール社、1900年、パリ。

(26) パリの聖職者叙階の記録は1780年から1790年の間に紛失しました。ボルドーの記録簿は1783年来外部には出ませんでした。ペリギューの記録簿はトルドーニュの最初の司書プリュニによって行われた教会資料の計画的な破壊によって紛失しました。参事会員ブリュリエール師の覚書によれば、この変わった司書はクロートル広場で3万冊以上の書籍を焼却して自慢していたということです。

(27) 他の文壇「Lycée de Monsieur」が「Musée de Paris」とその名称とその地位を争ったが成功しなかった時のことです。当節フランスの幾つかの都市にはその都市の文壇がありました。ボルドーの文壇は1783年の創立でした。

(28) ノルマンディーのヴェルジュトー侯です。



第3章 初期の宣教活動 (1785—1792)

ミュッシンダン高等中学校の管理者—セン・シャルル共同体の会則 ❖ シャミナード兄弟の評価 ❖ ジョゼット・ラブルスの妄想 ❖ ペリギューの聖職者選挙人会議代議員 ❖ 長兄シャミナード師の帰天 ❖ ボルドーへ ❖ 聖職者の市民憲章 ❖ ペリゴル地方の聖職者 ❖ シャルル修道会の模範 ❖ ルイとヨゼフのミュッシンダン滞在 ❖ ヨゼフはボルドーへ、ランゴワラン師との関係 ❖ セン・ローランの取得と両親 ❖ ランゴワラン師の虐殺 ❖ 新しい芽生え、平等の宣言 ❖ 兄ブレースの亡命、犠牲の生涯と帰天 ❖ 兄ルイのスペイン亡命。

シャミナード兄弟のミュッシンダンの長兄の下への復帰は学校にとってはその繁栄のスタートを示すものでした。そしてこの繁栄は大革命まで続きました。モズ師は学校を離れることはありませんでしたが、学校運営全般の配慮をその協力者たちに委ねました(1)。長兄のジャン・バプティスト・シャミナード師は1784年から学校の校長として公式の資格を取得していました。師は弟のルイに生徒の監督の役を、ヨゼフには管財ないし会計の役を委ねました。

学校の経済事情は余り満足な状態にはありませんでした(2)。新しい管財人のヨゼフが往昔の繁栄を確立するために用いた手段は、物事に対する深い洞察力を持つ驚くほどの慎重さを示したことでした。ヨゼフは前任者よりももっと学校の財政事情を把握し、校舎の改築のための大きな事業を計画することも恐れませんでした。高等法院の弁護士ローラニ氏との結婚後1年にして未亡人になった姉のリュクレースは自らの財産の一部をヨゼフに委ねることに同意しました。ヨゼフはマルトン師からの3万リーヴル、シャミナード兄弟自身とモーズ師よりの分担金で磁器工場や他の幾つかの隣家を取得することが出来ました。こうして大きくなった神学校にはチャペルも造られましたが、このすばらしい建物は最近までミュッシンダンで賞賛の的になっていました(3)。1785年、国王の公式書簡によって神学校への様々な贈与が承認されましたが、同時にその使用も制限されました(4)。

寄宿生はあふれるほどで、寄宿舎の60のベッドはいっぱいになりました。その上通学生も非常に多くなりました。1785年から卒業式は前例のないほど盛大になりました。ペリギュー教区のプレモー司教の後継者グロツソル・ドゥ・フラマラン司教が卒業式を司会しました(5)。文学的な出し物で式を盛り上げること

が習わしになっていましたが、1785年には極めて独創的な悲喜劇「学校と学生の知識の法廷への告訴」を上演しました。この劇は「無知」の女王とその大臣たちの告発に対する勝利の擁護でした。こうして、学校の評判はペリゴル地方にくまなく広がり、大革命までこの地方で最も繁栄した学校の一つになりました。

学校の繁栄に寄与したヨゼフ・シャミナード師は神の召命に応ずる生活の有益な修行に従事していました。シャミナード師がセン・シャルル司祭共同体で守らなければならなかった会則は、師が後ほどその弟子たちに会則を与える土台として役立つほど優れたものでした。その会則の条文は今日まで残っていました。それはセン・シャルル司祭共同体の精神と聖イグナチオの精神の二重の特徴を備え、特に外的な組織より内的生活の促進に配慮したものでした。

この会則は起床後4時半から5時半までの1時間の念とう、お昼の15分間の糾明、夕方の一般糾明、毎月1日の黙想と年間1週間の黙想を規定していました。なお、休息時間外に沈黙を守ることはその他の幾つかの会則同様厳格でした。この会則の詳細は「神には何も拒んではならない」という一語に要約された内的生活の特徴でした。修道生活に関しては誓願の宣立のみがありませんでした。しかし、ある会員たちは私誓願を宣立してこのことを補っていたことが分かっています。

共同体で使用されていた祈りや祈願は当時なお激しい反論を受けていた二つの信心、すなわち、イエスのみ心への信心と乙女マリアの無原罪の御宿りへの信心を主要な対象にしていました。ミュシダンでの慣例の聖務日課はジャンセニズム側から激しい攻撃の対象になっていましたが、17世紀以来ローマによって承認された無原罪の御宿りの小聖務日課でした。これらのいずれの信心もその熱心な普及者シャミナード師の特徴として認められ、そして、無原罪の御宿りの小聖務日課は師のコングレガシオンの特徴の一つになりました。

会則はその地域で実践することが出来る熱誠事業を何ら除外せず、かえって、教育事業を優先させるようにしました。この点に関する会則の多くの要請から、教育活動に示された重要性が判断出来ます。その幾つかを挙げると次の通りです。

「1. 魂の救いを手に入れる主要で基本的な手段の一つとして青少年の教育を考慮しなければならない。－ 2. 説教をし、告白を聞く等、他の熱誠事業に使用されることを切望することなく、青少年の教育に専念しなければならない。－ 3. 生涯にわたってもっぱら青少年の教育に専念することを喜ばなければな

らない。」

会則は教師たちに次のような賢明で正確な意見を与えていました。

「1. 生徒がしばしば秘跡に近づき、要理を理解し、聖堂で行儀よくするよう配慮しなければならない。－ 2. 徳への愛と尊敬が芽生えるようすべてのクラスの生徒に適切な手段を講じなければならない。－ 3. 特別な対話によって生徒を善に導かなければならない。－ 4. しばしば生徒のために、特に授業の前後に直接祈らなければならない。－ 5. 生徒をていねいに扱い、そして、彼らも相互に礼儀正しく振る舞うよう要請しなければならない。－ 6. 決して無教養で短気、余りにもなれなれしい教師と見なされてはならない。－ 7. 教室で指示し、説明しなければならない宿題を忠実に準備しなければならない。－ 8. 生徒間の競争心を養わなければならない。－ 9. 特に処罰に関して、校長の助言なく特別なことを何もなしてはならない。」

ヨゼフは会計の職を預かっていたとはいえ、生徒の知的道徳的指導に関しても重要な役割を持っていました。師自身の告白によればこのことにも成功したということです。後ほど弟子たちのある者が教室管理の難しさに遭遇していた時、師は自分のデビュー時代の記憶で彼らを勇気づけ次のように述べました。「当時の生徒が今日の生徒より素直でなかったことは確かです。」この言葉は師の謙そんの表れですが確かに今日とは事情が違っていて教師の手腕より生徒の気質が勝っていたということでしょう。

ヨゼフ・シャミナード師は神学校でのこれらの役職に、病院や特に管理を委託されていた岩の聖母の参けい所での司牧活動を加えていました。マリアへの孝愛が特にこの快い奉仕を師に与えたのです。こうして、師は信者にマリアへの信心を伝えること、そして、より完全な司祭職を身に着けることに成功しました。

小さなセン・シャルル司祭共同体会員の一致は親密でした。したがって、会則にはいかなる機構の準備を規定する必要もなく、長上への従順を要請することで足りていました。この従順に関して会則は立派に守られていました。シャミナード師の後ほどの次のような手紙のくだりでこのことが判断出来るからです。「わたしは会計の仕事をしていた16年、17年の間、院長と言い争いになったことはありませんでした(6)。」この完全な相互理解は会則の下での彼らの力となり、彼らの宣教活動の成功の主要な要素の一つとなったのでした。

シャミナード兄弟の評判は日々高まっていました。考えられない証人ではありますが、例の市民憲章同意者ピエール・ポントル司教は次のような貴重な証

言をしました。「シャミナード3兄弟は、地域全体の人々から優れた聖徳の人々と見なされていました。．．．したがって、彼らは人々の教化の模範として受け入れられていました(7)。」ドゥ・フラマラン司教も彼らを高く評価していました。1785年には彼らにデリケートな使命を委託することによってこのことをあかししました。

大革命の前触れの不平不満の声は、リベラック村近郊に住んでいたシュゼット・ラブルス嬢の心を特に動揺させていました(8)。彼女には幼年時代から風変わりな常識はずれの様子が見られました。例えば、9歳の時彼女は早く天国に行くことを望んでくも毒で自殺しようとしたことがありました。その後また、ある危険から逃れようとして生石灰で顔を醜くしようとしました。修道院の規則に彼女を従わせようとしたが無駄でした。彼女はこじきをして世界中をめぐり、自分の空想を広めるよう叫びたいと主張していました。基本的には悪意のない彼女の預言は少しずつ教会の攻撃に向けられて来ました。彼女は16世紀の宗教改革者たちのように様々な悪習を痛烈に非難し、天罰の近いことを知らせました。こうして、彼女は様々な評判の対象になっていました。ようやく、ドゥ・フラマラン司教にその仲裁が求められた時、司教はシャミナード兄弟において他の敬けん豊かな人々にこの件の配慮を委ねることが出来ないと考えました。

そこで、シュゼットはミュシダンに2回行きましたが、1785年10月16日に自らの空想をしたためていた10冊の小さなノートを書き手に渡しました。シャミナード3兄弟は彼女と対話し、彼女の神学校訪問の合間には手紙をやり取りし、神学校でなぜ彼女が欠点の多い者であることを指摘したかを知らせて、彼女が祈りを始めるまで感受性を高めるように助けました。彼女の非難のあいまいさ、暴言の激しさ、回答の矛盾、そしてその思い上がりのために、シャミナード兄弟は、神は決してこれらの言動表明の根源ではないことが分かり、彼女にとっては不利な判断を下しました。しかし、シュゼットはこの判断に従う気持ちは毛頭ありませんでした。彼女は預言者の役を演じ続け、市民憲章同意聖職者トルドーニュのポンタル司教の手先の役目を果たしました。同司教にそそのかされた彼女は、シャミナード兄弟が出来るだけつまずきを予防するために保管していた彼女の空想のノートを取り戻すために法的措置を講じました。この妄想家は国会開会の時期にパリに行き、メスメリ会員や特に彼女を自分の邸宅に滞在させたコンデ公爵夫人によって待遇されました。それから、彼女は市民憲章同意聖職者たちによってローマに連れて行かれました。それは、彼女をもう一人のシエナの聖女カタリナとして公にし、教皇と教会を改革するためでした。しかし、彼女はヴァチカン市国の入り口で逮捕され、3年間天使の城に拘留されました。1798年にパリに帰りましたが1821年の死亡まで完全に忘れられて生活し

ました。

久しい以前からシャミナード兄弟は動乱の到来を予感していました。多くの印がその接近の予知に役立っていたからです。彼らに課されたばかりの奇妙な事例の調査はなお彼らの不安をかき立てるものでした。彼らは当代の最も見識ある人々と共に古い時代のフランス社会や聖職者社会でさえも改革の必要があることを考えていました。しかし、どのような人がこうした運動の指導を熱心に、賢明になすことが出来るのか分かりませんでした。彼らは、偶然の出来事、あるいは、政治家や空想家たちの無謀さによって事の成り行きが決められはしないかと確かに恐れていました。彼らの不安は公務への無関心がその動機ではありませんでした。ヨゼフは国会議員の選挙が実施された時ペリギューの聖職者選挙人議会の代議員だったからです。ただ他の観点から事態を考えていた司教は、同会議の議長を差し控えるべきであると考えこれを断りました。いずれにしても聖職者の二人の代議員とその補欠が選出されました。1789年3月24日の報告書にはヨゼフ・シャミナードの署名が記載されていました(9)。

ご存じの通り、国会が召集された時様々な事件が相次いで起きました。その事件の奔流は堤防を破壊し、その進路ですべてのものを破壊尽くした後でなければ止まらないほどでした。年末前に憲法改定会議はあらゆる特権を抹消し、代議員政体の原則を宣言し、聖職者の財産を国有化しました。こうして最も極悪な法律が既に準備されていたのでした。

ジャン・バプティスト・シャミナード師は大革命の残虐な行為を目撃する悲しみを味わいませんでした。師は1790年1月に帰天したからです。その死は師がどのような信仰をもって死を甘受したかを明らかに示すものでした。ボルドーのある司祭(10)は次のように述べました。「師は学校のチャペルで、ミサを終わらせたばかりのその祭壇の下で帰天しました。師の帰天の知らせに、師を聖人のように尊敬していた住民がこぞって駆けつけました。各人ロザリオやその他の信心物を師の遺骸に触れさせようとしていました。ちょうどそこに居合わせた警官は、この感激的な情景を見て感動し、だれもわたしを妨害してはならないとおどしながらサーベルを抜いて群衆をかき分け存分に通路を開きました。そして、遺骸の側に近づくと遺骸の上に乗せてあった司祭の四角の帽子を取り、そのふさを切り取ってこれを会衆に見せてポケットに入れ、『この遺品はわたしのものだ、だれもこれを奪うことは出来ない』と言いながら意気揚々と引き上げて行きました。」

長兄ジャン・バプティスト師の帰天によってヨゼフはまさに最も賢明な指導者を失いました。それは状況がより危機的になっていた時なので長兄の指導がよ

り必要になっていたからです。また、どのような成り行きになるか予測出来ない様々な事件が起きていたからです。そこでヨゼフはそれらの事件に決して驚かされないように決心しました。1790年の春、彼はボルドーに行きました。そこに滞在するためではなく、万一の場合ミュシダンの学校より確実な隠れ家を準備するためでした。ボルドーでは住民の動揺が押し留められ、予期していたより平静でした。ジロンド県の新行政機関が混乱なく組織され開設されていたからです。市長のフメル伯爵はまずまずの人物でした。ただ、国民軍が何らかの不安事態を引き起こしていたのは確かでした。しかし、大革命と宗教はまだ絶縁してはいませんでした。ボルドー市民の落ち着いた性格に助けられて過激な行動が避けられ、秩序が維持されていたからです。

シャミナード師はアバディ通り8番地の友人シャーニュ家に仮住まいを確保しました(11)。この家こそシャミナード師が大革命中登録していた現住所でした。師はボルドーで保護者であり、友人であったランゴワラン師に再会しました。ランゴワラン師は立憲議会の代議員であった大司教の不在の間、教区の困難な管理の役をアントワーヌ・ボワイエ師と分け合っていました(12)。ランゴワラン師は将来の予想に関しては悲観論者で、立憲議会の法案によって聖職者の再組織がもたらされるに違いないとおぼろげな成り行きを若い司祭たちに伝えていました。それは、ジャンセニストのカミュに委ねられた任務は将来に対して受け入れられるものを何ももたらさないに違いないこと、そして、分裂は避けられないこと、また、司祭たちは迫害と追放の時代にあって聖職の務めを果たす用意が出来ていなければならないこと等でした。ランゴワラン師はシャミナード師に、様々な事件が起きてミュシダンを去ることが賢明であることが分かった時、ボルドーの自分の所に来るようにとしきりに促しました。

ミュシダンの学校に帰ったヨゼフは、ランゴワラン師が予測していた事態の実現を長く待つまでもありませんでした。7月12日に国会は聖職者に対する市民憲章を可決し、8月24日に国王はこの無分別で有害な法律に署名したからです。このことは平和的な改革に対する希望を失わせました。すなわち、信仰や表現の自由に混乱をもたらし、法律違反は憎しみや混乱を伴って迫害を引き起こすことが避けられなくなり、義務にまでなってしまったからです。果たして、1790年12月26日には、国会は、権威の強化を図り、すべての公務員の失権を承知の上で、市民憲章への誓約を要求しました。

各司祭には、良心を犠牲にするか危険な聖職の義務を果たすかの選択をしなければならぬ厳しい時が近づいて来ていました。シャミナード師は後ほど自己不信の必要について会員に話した時、こうした様々な悲しい状況の中で目撃した実例を思い起こされました。師は特に許しの秘跡を受けるほど親しく

していたある司祭について次のように話しました。「いずれにしても、わたしが最初師に会った時(13)、わたしはそれほど感銘を受けませんでした。師はその義務を立派に果たしてはいましたが、わたしにはよく分かりませんでした。師にはその失墜を感じさせる何かがありました。わたしはこうした考えにこだわらないようにしこれを追い払うようにしました。幸いにわたしは間違っていないで。彼は大革命の時極悪人の一人になり、悪の坂を転げ落ち、悪の急流に巻き込まれ、ついには完全に破滅したからです。」

ペリゴル地方の聖職者の態度は全般にすばらしいものでした(14)。サルラ小教区やリベラク小教区の大半の司祭たちは市民憲章の宣誓を拒否しました。シャミナード師の友人リュブフ師の属する小教区ベルゼラクでも同様でした。1791年1月に師はシャミナード師に次のように書きました。「拝啓、『聖職者崩れの仲間』の市民憲章への宣誓は日曜日に終わることになります。在俗聖職者の唯一の離脱者、宣誓司祭の一人は、連隊の従軍司祭として任命され、昔の平穏な時代のどれい制度の特徴であった軍旗の下で過ごし、その従軍を誇りにしていました。」

ペリギュールやミュシダン地方の離脱司祭の数は少数でしたがまれではありませんでした。したがって、これらの地方にも醜聞が聞かれ出したので、それだけ信仰に忠実であった司祭たちは健全な教義へのより強い執着の模範を信者に示すことが大切でした。ペリギュールの宣教司祭会は自らの本分に忠実でした。「その神学校は正統派の根拠地だったからです(15)。」ミュシダンのセン・シャルル司祭共同体も信仰に対するより強固な態度を示しました。1791年1月19日、シャミナード兄弟とその同僚は市民憲章への宣誓に関する意向聴取のため市役所に召還されました。しかし、彼らは同憲章に従うことを拒否するだけでは満足せず、その拒否の理由を信者に説明し、立派な説教を通して、計画されたつまづきの拡散を注意深く避けさせるようにしました。

更に、彼らは次のように行動することが義務であると考えました。すなわち、聖職者に対する市民憲章の本質と結果を住民に更に明確に示すためすばらしい「信仰の指針の解説」を各地に普及することでした。ここには30名の国会議員の司教がこの憲章の危険性とフランス教会に同法を強制する人々の権威の乱用を告発していました。この立派な教書の普及は彼らに致命傷を与えました。市民憲章同意の新司教ピエール・ポンタルは司教座取得教書の中で、この教書に触れて次のように激しく非難しました。「信仰の指針の解説とブローニュの司教(16)あての書簡の二つの文書は特にトルドーニュ県に多くの害をもたらした。」

忠実な司祭たちの努力の結果、住民のためらいの証人であった「ミュシダン憲章友の会」は「地域住民の手引き」を公表しました(17)。ここには非宣誓司祭が旧制度やその乱用に対する不屈の保持者として紹介されていました。この手引きは、ミュシダン神学校の長上が公表した市民憲章宣誓に反対する小論文で、恐らくシャミナード師の手によるもので、宣誓司祭の陳情への回答のように思われます(18)。

しかし、多くの同郷人は圧制に苦しむ人々の抗議に耳を傾ける余裕はありませんでした。彼らは宣誓司祭のサッローディ、更に、ペリギュアの選挙人によってトルドーニュの司教に昇進した同郷のポルタンを歓迎することに夢中になっていたからです。ランド県のソーリン司教によって聖別されるためボルドーに赴く途中、ポンタルは同僚からの祝福を受けるため、また、彼を無資格司教就任者と呼んだ人々から浴びせられた手厳しい非難の肩の荷を降ろすためにミュシダンに立ち寄りました(19)。このようなうわさがあったので、彼は当然自らの権威に反抗する神学校の非宣誓祭たちのことを考えていました。彼らの徳が確かなものであっただけにますます彼らの抵抗を感じたからです。

しかも、彼らは宣誓を拒否した時から神学校の方針を堅持する筋金入りの司祭たちでした。彼らがなお神学校に残っていたのは町当局が彼らの代わりを見いだせなかったからでした。1791年6月、ようやく二人の信徒教師が就職しました。しかし、彼らの雇い入れはあらかじめ予定されていたものでした。常々礼儀作法について教えられていた生徒たちは静かに学校を立ち去るよ促されていました。そこで、教室は空き家になっていました。備品や調度品さえも売却されていました。町当局は自らの失敗を隠していました。彼らはシャミナード兄弟が住民からどんなに尊敬されていたかを知っていたし、暴動への対策を彼らに求めることがどんなに不得策であるかも知っていたからです。しかし、町当局が学校に残るよう彼らに懇願したのは、学校の運営に関して行われた変更を彼らの存在によって隠そうとしたからです。その上更に、1791年8月13日の地区会議は次の意向を表明しました。「国家はモーズ師やシャミナード兄弟の待遇を生涯にわたって保証する。それは彼らとその配慮と精勤によって社会になした奉仕の報いとしてであり、また、彼らを良心のためらいから支え続けることが出来なければ彼らの収入が不足するのを考慮するからである。」

この控え目の言葉は学校の以前の教師たちがどのような評価を受けていたかをあかしするものでした。彼らは町当局の要請に応じました。それは何らかの善を行うこと、あるいは、何らかの悪を予防することを期待したからでした。そして、彼らは神学校に小さな部屋を確保しましたが、学校に帰ってきたわずかな生徒たちへの新しい教師たちの授業には干渉しませんでした。既成の体制に

従わない人々に対してもなおある種の寛容さが残っていたので、彼らは信者たちの中で聖職を行うことが出来ました。ヨゼフ・シャミナード師の氏名は、1791年の公式書類に、ある時は岩の聖母堂の管理司祭、あるいは、病院付き司祭、または、セン・ジョルジュ小教区の助任司祭の資格で掲載されていました。師は宣誓拒否司祭でしたが1791年の間ずっと公式の給与を受給していました。

いずれにしても、シャミナード師はランゴワラン師が抱いていた計画を見失うことはありませんでした。師がボルドー市のあちらこちらに姿を現していたのは、様々な事件の成り行きを追い求めるためでした。そして、すべてを検討した師は、その年の終わりごろ、兄のルイや他の司祭たちで活動が間に合っていたミュシダンでの自分の存在が余り必要でなくなっていること、大革命のあらしが吹き荒れる前に避難しなければならない所はボルドーであると判断しました。

ボルドーは革命のあらしに向かって徐々に動いていました。司祭の宣誓の問題に関する討論や批判パンフレット、市民憲章同意者バカロー司教(20)の着座、ドミニク・ラコンブ(21)師のようにじっとしている人々ではなかった市の10人の司祭等、これら様々な状況は多くの人々に動揺をもたらす結果になっていたからでした。しかし、なお穏健派の人々の支配下にあった市当局は平和を維持し、過激な行動を予防することに努力し、メルシー教会、ミニム教会、セン・メクザン教会等、市内の三つの教会でのカトリックの礼拝式の公の実施さえ黙認していました。しかし、市当局は様々な政治結社の扇動にどれくらい絶えることが出来たのでしょうか。それは彼らが、ボルドーの外国人策謀家たちによって非難されていたからです。これら外国人策謀家たちは安易な成果に魅了され、そして、他のあらゆる術策を講じたように祖国愛をうまく利用していたからです。

シャミナード師がボルドーに居を定めに行くことが賢明であることを考えたのは、こうした状況の中ででした。ランゴワラン師は、タランス村に接するトンデュー村の郊外にあった一地所、当時の表現では「bourdieu」を取得するようシャミナード師に勧めました。このひなびた地所は市内よりもっと安全な隠れ家を提供したばかりでなく、なおここからの収入によって貴重な資金が確保出来たからです。すなわち、この地所はグラウ岬(22)の特産ワインの産地で、最も有名なワイン地域の一つである上ブリオン県に位置していたからです。ランゴワラン師は、シャミナード師がミュシダンの神学校でかなりの金額を運用出来るようにしていたことを知っていました。そこで、ランゴワラン師は、シャミナード師の1300フランの年金を担保にするという条件で、当該地所の取得価格の大半の前払いを提案しました。こうした条件が受け入れられ、1791年12月10日、ランゴワラン

師の住居で契約書に署名されました(23)。

シャミナード師が地主となった住居はセン・ローランと呼ばれていました。それは近郊になお廃墟として残っていた往年の同名の教区教会の記念としてでした(24)。

当該地所は1.5ヘクタール以上の広さでしたが、そこにはぶどう畑の外に小さな母屋、プラタナスの並木道、菜園、農業用の小屋とワイン貯蔵庫が含まれていました。トンデュー道と呼ばれる一本の道が地所の外れに沿って敷地まで延びていました。更に完全確保のためシャミナード師は飛び地の一角を購入して塀を巡らしました。

このセン・ローランの住居に公然と定住することは無用心に思われました。そこで、師は既に年老いて疲れ切った両親のことを考えました。セン・ローランは彼らにとって静かで健康的で楽しい住居になり、その上、彼らの存在は、自分が隠れて聖職を果たさなければならない場合、このことを見事に紛らわすことが出来るに違いないと判断したからです。師は1792年4月にペリギューに赴き両親と用件の相談をしました。ボルドーへの転居は問題ないことが分かりました。それは、この年老いた両親がヨゼフに抱いていた親しみやヨゼフの側で生活する喜びは、他の様々な配慮や、その生活習慣を変えたり、年老いた友人知人と別れることの必要性にさえ勝っていたからです。そこで、両親は呉服業をフランソワに譲ってボルドーに行き、セン・ローランを自分たちの所有地としてそこに定住しました。登記上あるいは公式文書上、ヨゼフが常に真の地主でしたが、両親を住まわせるために特別にこの地所を購入したことを隣近所の人々に思わせるようにしました。それは、師が当局者から搜索され、追跡されてもその不在が説明出来るに違いなかったからです。その上、師は常に現住所をアバディ街に置いていました。

このように様々な用心をなした師は、後ろ髪を引かれられないわけではありませんでした。宣教の初穂を収穫したミシュダンの町と最終的に別れました。一方、兄のルイ師は、ほとんど廃墟のようになってしまったこの気の毒な学校を去ることをちゅうちょしていました。町当局は生徒を集めるよう努力しましたが無駄で、学校の成り行きに政府の関心を引くためしばしば懇願を重ねましたがそれも無駄でした。1792年4月6日、町当局が文部大臣にあてた報告書は過去の学校の追悼演説でしかありませんでした。彼らは学校の便利さや衛生面、教育施設としての一定の繁栄、旧教職員の無私無欲の奉仕、勝ち得た成功のみを自慢していたからです。すっかり空き家になっていた学校は4年後ペリギューで競売に付せられました(25)。

シャミナード師は大革命のあらしの前兆に気づくとすぐボルドーに避難していました。急がなければならなかったからです。地方の信者たちは市民憲章非宣誓司祭たちを段々支えることが出来なくなっていました。この信仰の司祭たちは町村のジャコベン党派の人々の迫害から逃れてボルドーへの避難を望みながら各地にあふれていたからでした。ボルドーのジャコベン党もこのことに驚いていました。2000名に上る司祭の避難者が数えられたからです。したがって、市内も危険でした。県議会は彼らに対する追放令を交付し、同時に、カトリック教会が持っていた三つの教会を引き上げました(1792年2月)。

このことはこの都市の愛国者を駆り立てることになったのです。こうしてパリの混乱の影響がボルドーにも及び、1792年7月15日、ついにボルドー市を血染めにした最初の暴動が勃発したのです。それは武装市民団の第2回連盟祭の翌日のことでした。人々の興奮は絶頂に達し、激怒したジャコベン党員は犠牲を要求していました。ずっと以前からランゴワラン師自身がその犠牲の的になっていたのです。師はあらゆる憎しみの標的、非宣誓司祭のリーダー、そして、次のように締めくくられた例の手紙の弁護人だったからです。「5万人にも上る聖職者が宗教の自由を宣言したので、不当な、あるいは、救いようのない苦境の残酷な選択を強いられた。したがって、彼らが『良心の光に対する渴望か、のろいの死か』の最後通牒を突きつけたのは驚くべきことである。」師の言い分は正しかったが、人々はそのような侮辱を許すことが出来ませんでした。暴徒は師が引きこもっていたコーデラン街の小さな市場(26)に師を捕らえに行き、大司教館まで往來を引きずって来て、玄関の石段の上でもう一人の司祭デュブイ師(27)と共に惨殺しました。

この惨殺は恐怖政治の前兆でした。それから数週間後、すなわち、8月10日のその日の内に君主政体が崩壊したからです。政府は政令によって、「わたしは全力を尽くして、自由と平等、個人と財産の安全を保持し、法律の遵守のために必要であれば死ぬことも誓います」(1792年8月26日)、という誓約への同意を拒んだすべての非宣誓司祭をフランス国内から2週間以内に立ち退かせることを全県議会に命じました。

この決定はシャミナード兄弟にも打撃を与えました。ヨゼフは半年前からミシュダンから姿を消していました。しかし、彼がボルドーに行っている地所を購入したという事はよく知られていました。ただ、この法律のことを師に伝えるために師と接触することは出来ませんでした。ところが、兄のブレーズとルイ兄弟はその住居で不意に捕らえられ、亡命を余儀なくされてしまいました。

改革フランシスコ会士のブレーズ師は最後まで忠実であった同僚会員たち

と共に、数名の退会者たちを残念に思いながらローマへの道をたどりました。出発前に彼らは修道院の教会の最も貴重な聖物、特に聖遺物が不敬にさらされる危険から免れさせることに成功しました。それはその大多数のものがヨゼフに渡され、後ほどマドレーヌの教会に安置されたからでした。

ヨゼフは兄のブレーズについては常に大きな尊敬をもって話していました。その生活の厳しさ、聖なる清貧に対する熱情は聖フランシスコの真の子供であることを示していたからでした。内心の不安、大革命、そして、しばらくの間務めた管区長職もその犠牲の生活に何らの変化ももたらしませんでした。また、彼の衣服はすり切れ、つぎはぎだらけでした。いつも無帽で、お金は決して持っていませんでした。ある日、60キロほど離れた所に黙想の説教に行った時、同僚の会員から、旅費など何も持っていないのではないかと尋ねられると、師は、「お金のことは考えていませんでした。河を渡るために幾らかください。何も渡さなければ船頭が悪態をつくかも知れないから。神はわたしが働いていることをご存じです。したがって、わたしに必要なものを欠かさないようにくださるに違いありません(28)。」

大革命後、師はフランスに帰りましたが、修道会がまだ復興されていなかったため修道院に帰ることが出来ませんでした。そこで、在俗聖職者として奉仕することを承諾し、まず、クールサックの主任司祭となり、1804年からはセン・タスティエ教会の助任司祭になりました。師は苦行衣を身に着けることを決して止めず、むち打ちを規則的に行っていました。また、帽子をかぶらない習慣を持ち続け、好んで日当たりのよい場所を散策していたということです。教会の側の一箇所は師が日中の大半を祈りと読書で過ごした観想や潜心の場所になっていました。住民は師を大変尊敬していました。1822年11月2日師が帰天した時、師の遺体は、長兄のジャン・バプティスト師の遺体に対してと同じように人々の尊敬の対象になりました。死の床に横たえられていた2日間、人々が死の衣服の切れ端を奪い合ったので、完全にはぎ取られるのを防ぐため遺体の側に番人を置かなければなりません(29)。

一方、ルイ・シャミナード師は1792年8月26日の政令をミシュダンの学校で知りました。当局によって尋問された師は、教区の大半の司祭たちのようにスペインに亡命したいことを申し出ました。9月7日、県の執政官からパスポートを受領した師は他の亡命司祭たちと共に直ちにボルドーに赴きましたが、扇動された民衆のば倒とおどしで迎えられました。

ボルドーの市内では民衆を扇動するような歌声しか聞かれませんでした(30)。特に夕方、男女青少年たちは愛国のスローガンを叫びながら往来や広場を

駆け回っていました。善良な市民たちはぼう然とし、出帆する船に乗船の予約をなすため各地から集った司祭たちの所に集まって来ました。そして、これらの強固な信仰の新たな聴罪司祭たちに祝福を願い、何らかの勧めや励ましの言葉を頂くことが出来た時幸せに思いました。

両親や弟のヨゼフはルイ師の到着を心待ちにしていたましたが、ボルドーに着いた師は出国の日まで信者たちのために役立つことしか考えていませんでした。必要な力量に恵まれていた師は恐れることも、見えを張ることもなく、聖職を行いました。師への「追悼演説」には次のように述べられていました。「師の活動の評判、その功績のうわさは既にボルドーに伝わっていました。信者たちは告白を聴いていただき、祝福を受けるために師の下に集っていました。彼らはおどしによる禁止も尾行も処罰も気にしませんでした。師はあらゆる身分の人々の告白を聴き、信仰の真理をあかししていました。」

1792年9月15日の晩の6時に別れの時が来ました。ルイ師は不幸な祖国の人々の苦しみのみを考えて自分自身の苦しみを押し隠すことが出来ました。師の別れの言葉は、卑劣な為政者たちによって祖国の懐から自分を追放したフランスに対する感動すべき次の言葉でした。「主よ、あなたのお恵みは別として、わたしの愛情、わたしのすべての善さえも、すべてのものからわたしを取り除いてください。しかし、すべての祝福があなたに帰せられ、おきて、モラル、信仰、そして、平和がこの国に回復されますように(31)。」プロヴィダンス号にはペリグュー、サルラ、アジャン教区の54名の司祭が乗船していました。出港のため十分な満ち潮が得られなかったため、彼らは2日間出港を待ちわびていました。彼らは、9月の大虐殺に参加したパリの暴徒の功績をねたんだボルドーの暴徒が、パリのカルメル会士や、セン・ゼルメン・デ・プレの大修道院の修道士たちの殉教者たちの運命を思い知らせるために、自分たちを港に引き下ろしはしないかと考えて動揺していました。ようやく十分な満ち潮になったので彼らは解放されました。しかし、なお幾らかの不安が残っていました。それは帆船が河を下っていたからです。船長は、プレイヤポイヤック、そして、ロワイヤン地方の愛国者たちのせん索好きな人々に乗客をさらさないように水路の中央を通るようにしました。コルドゥアンの灯台が見えた時、司祭たちはようやく胸をなで下ろして、「*Laudate Dominum*」の賛歌を歌い始めました。しかし、彼らの苦難は終わってはいませんでした。船も乗員も乗客も暴風雨に飲み込まれんばかりだったからです。この悲惨な情景の証人となった乗客司祭の一人アルティエグ師は次のような言葉を残しました。「すばらしい一日の旅程の後、すなわち、木曜日の夜、あらしが起き始めました。．．．風は怒り狂い、船は大きく揺れ、傾きました。しかも、あらしは真っ暗な夜に襲ってきたのです。乗員は皆働いていました。わたしたちは一生懸命祈りました。11時ごろ大きな衝動を感じた時、わたした

ちは生涯の最後の瞬間に近づいたように思いました。尊敬すべきミュシダンの校長先生(アルティエグ師はルイ・シャミナード師をこのように呼んでいました)が、『皆さん、神の前に立つ時が来ました』と述べたので、ある者は泣き、ある者は許しの秘跡を願い、また、ある者は罪の許しを願いました。わたしもやはり死の準備をし、イエスのみ心のご像をしっかりと握りしめていました。無事に上陸出来れば、すべての敵を心から許し、フランスの救いをお祈りするという約束を聖母にいたしました。ようやく、敬けんな安らぎがわたしたちの間にみなぎりました。」

夜明けになってあらしは静まり、船はセン・セバスティアン港に接岸にしました。もちろん、この港は亡命者たちの最終目的地ではありませんでしたが、彼らは市当局や住民たちから親切に歓待されました。しかし、ある司祭たちはサラゴサへ赴き、他の司祭たちは祖国への復帰を期待して国境の近くに留まりました。ルイ・シャミナード師は後者の方でした。師はロヨラとノートルダム・ドゥ・ガデルuppの中間地の無名のある部落に落ち着きましたが、亡命者たちにフランスの国境が再開されるのを考えさせるどころではなく、マドリッドからの要請で国境から遠ざかることを余儀なくされました。そこで、ルイ師は他の多くの追放司祭たち同様、ガリス地方のオランス教区のピエール・ドゥ・ケベド司教の親切な歓待を受けることになりました。師は5年間すなわち、1797年までこの立派な司教の下に生活しました。この同じ年に弟ヨゼフがフランス国内から追放されたので、み摂理のお計らいによって、兄弟はサラゴサで再会することになりました。



注

(1) モズ師は大革命で生き残りましたが、1811年3月31日ミュシダンの主任司祭として帰天しました。

(2) シャミナード師自身そのことを教えました。節約について手紙を書き、そして特に、食事についてすべて決められた通りにすることを要請して次のようにつけ加えました。「確か財政的に完全に信用を失っていたミュシダンの神学校の管理をしていた時のことですが、かつてわたしが若い時代には同じようなことをしていました。」(1833年9月25日の手紙)

(3) 学校の建物の正面は田園に面していました。内部の間取りはよく設計されていました。しかし、教室の天井が低かったのは、一般の家屋をこの種の目的に適応することで人々が満足した以上、それは避けがたい欠点でした。

(4) 1790年の収支決算は生徒の寮費からの収入8450リーヴルと定期収入の850リーヴルが不足しました。ボルドーのモンゴワ氏は1200から1500リーヴルの年金を神学校に寄贈していました。

(5) ルイ・エマヌエル・グロツォール・ドゥ・フラマラン司教は大革命前ペリギューの最後の司教(1773-1801年)でした。元砲兵将校で大貴族、慈悲に富んでいた司教はアンジェ教区出身で、ケンペールからペリギューにその司教座を移転しました。司教は大革命当初亡命し、政教条約によってその司教座は末梢され、1815年ロンドンで帰天しました。

(6) クルーゼ士への手紙。シャミナード師の正式の会計係としての資格は1784年からでした。しかし、この引用文によって師は1777年から修道院の会計係にたずさわっていたことが分かります。

(7) 「有名なラブルス嬢の作品集」という変わった表題のパンフレットによる。66,68ページ、ブロッシエ社、1797年 ボルドー

(8) ラブルス嬢は、1747年5月8日、リベラック近郊のワンクセンに生まれました。彼女に関するすべてのことはクリスティアン・モロー師の著作「革命家の信念」、デイド社、1886年 パリを参照してください。この著作が十二分に証明するように、彼女はヒステリックな人でしかありませんでした。特にその預言に関して、彼女は1899年に世の終わりが来ることを預言していました。

(9) ペリギューの3地方裁判所の聖職者の審議に関する議事録(45ページから印刷されたパンフレット)。サッラ、ベルジェラク社 1789年

(10) リガニオン師(ベルトラン師著、神学校歴史 2巻、30ページ)

(11) この通りは今日なおダバディ通りの名称で、当時の8番地は現在も同じで、ヴィクトール・ユーゴ通りの近くでピレ通りの筋向かいです。

(12) 1771年にロデの司教になったチャンピオン・ドゥ・シセ司教は、1782年からボルドー大司教になり、市民階級に協力した最初の司教の一人として人気を博していました。大司教は、国王が聖職者に対する市民憲章に署名させられた時、国璽保管者の危険な職に任命されました。政教条約でエクス司教座に移され、当地で1810年に帰天しました。

(13) シャミナード師の講話で、アジャンのマリアの娘の会の覚書より

(14) ペリギューとサルラの2小教区で司祭は約1200名を数えました。教会参事会員ブリュジエール師の概算によれば離脱司祭は200名のみでした。

(15) クレド著、ピエール・ポンタル 404ページ

(16) クレド著、前記引用 194ページ

(17) ペリギュー図書館

(18) 前記の通り、ルブフ師からシャミナード師への手紙で分かりました。当時同名で出帆されていた多くのパンフレットの中からこの匿名の記録を見分けることが出来なかったからです。

(19) クレド著、前記引用 194ページ

(20) ピエール・パカローは1711年生まれで、ボルドーの聖職者の中で最も高位聖職者の一人で、ドーディベル・ドゥ・リュッサン司教の死後教会参事員会総代理になりました。学識の深い人でしたが不屈のジャンセニストでした。1791年4月、ポンタルと宣誓司教に聖別されたが、1797年に死亡しました。

(21) ドミニック・ラコンブは1749年にモンレジョー(上ガロンヌ県)に生まれ、1766年にタルブの自由主義反対派に入り、1788年にはギエヌ校の校長になりました。ジロンド県の首都司教座で宣誓司教パカローの後継者に任命され、政教条約の時には、アングレム地区の司教座を得ていました。

(22) 「グラヴ赤ワインの名産地は上ブリオン県です。これらの製品は販売上メドック地方の最優秀ワインの中に分類されています。」(ジュアンネ著、ジロンド県総合統計Ⅱ、227ページ。同じくフェレ著、ジロンド県統計)

(23) この地所は18000フランで購入され、内13000フランをランゴワラン師が前貸ししました。

(24) セント・ローラン小教区教会に関してはローレン著のボルドー雑報、1876年版Ⅱ巻、237ページ参照。

(25) 建物は共和暦4年9月18日(1796年6月6日)、2649リーヴルで売却されました。大革命後ミシュダンの住民はある日町の城壁に「知識は精神の糧である」とのスローガンが張られているのに気づきました。あるLoquinaudは次のように大衆に告げました。「この町に建てられた学校は、学校を信頼する子供たちに才能を導く教育面ばかりでなく、なお、市民社会の習慣を与えることを約束したが、大革命のあらしの激しい衝撃で長い間もて遊ばれ、打ち砕かれ、ついには打ちのめされてしまった。」確かに、旧神学校は売却されました。このいかさま師に続いて、町がこの建物を公立の小学校に利用するまで、より善良な人々がその再建を試みました。町当局はしばらくの間生徒たちをマリア会のシャミナード師の弟子たちに委託しました。なお、1879年には古い建物は全部取り壊され、その代わりに町役場、小学校、裁判所が建てられました。

(26) ランゴワラン師はグラン・ルブラン地所の後ろのカープへの道で捕らえられました。

(27) この時英国に亡命したシセ司教は総代理の惨殺とフランスの不幸を悲しんで、法務大臣として不幸な市民憲章に副署して犯した過ちを謙そんに告白し、感動的な教書を教区民に送付しました。

(28) ピエール・セルマン師の自筆の覚書

(29) ブレーズ・シャミナード師のセン・タシエ教会の滞在及び師の帰天に関する詳細はセン・タシエ教会の助任司祭ラフォン師によって教会参事員ユーゼーヌ・シャミナード師に伝えられたものでした。

(30) ルイ・シャミナード師の旅行に関する詳細の大半は、気の毒な同僚会員の一人で、デーメ教会の司祭ジャン・バプティスト・アルティエグの話しからのものです。その関係がブリュエール師の記念サイン帳の4ページに転写されたからです。

(31) ルイ・シャミナード師に関する追悼演説



第4章 恐怖政治期の聖職 (1793—1794)

恐怖政治初期のボルドーの状況 ❖ 断頭台 ❖ 迫害者に対するセン・ローランでの用心 ❖ 亡命リストに登録される ❖ 市内での聖職 ❖ 策略と逸話 ❖ 亡命リストからの削除の努力 ❖ 憲法改正会議による誓約重視を司祭に要請。

ルイ・シャミナード師がセン・セバスティアンに下船した同日、すなわち、1792年9月21日によく開催した革命会議は共和政体を宣言しました。しかし、その年内にはボルドーで新たに特記すべき暴動は起きませんでした。1793年の初頭、革命会議の委員たちはジャコベン党に権力を譲渡するよう努力しましたが成功しませんでした。ボルドー市民は与党のジロンド党と連帯して、モンターニュ党や革命公安委員会の隠然たる抵抗に反対していました。

優勢になったこの中道派の政党は、国王の没後も、そして、2月16日及び3月18日付け政令の公表後も、非宣誓司祭を捕らえた者にはだれにでも賞金を与えることを約束し、処罰されたくなければ24時間以内に非宣誓司祭を密告することを義務づけながらも、カトリック信者は比較的平和を維持し続けていることを釈明しました。1793年の悲惨な年に入るぎりぎりまで、シャミナード師はほとんどオープンに生活していました。すなわち、師は契約書に署名し、周知の住所で手紙を受け取り、何らかの密告を気づかれる様子もなく自ら手紙を書いていました。例えば、1793年4月6日付けご用商人の一人にあてた次の手紙がそれです(1)。「あなたにご足労を願った時にわたしが(セン・ローラン)の田舎を留守していたことを申し訳なく思います。わたしは健康上の不具合のためボルドーに行き、何日もそこに滞在しなければなりませんでした。幸いに必要な手当を受けることが出来ました(2)。」

モンターニュ党の勝利とジロンド党の失墜の後(1793年7月2日)、ボルドー市民は余りにもちぐはぐな戦いを試みましたが無駄でした。1793年10月16日、政府当局者たちがセント・ユラリーの突破口から市内に入り、同月23日から断頭台をナシオン広場(3)に設置しました。この断頭台は1794年8月14日まで撤去されませんでした。このことはボルドー市民にとって殉教時代の始まりでした。独裁政治が宣言されました。それはまずイザボーやタリアンによって、次に、ロベスピエールの手先であったジュリアン・マルク・アントワンによって行使されました。「ジュリアンは20歳にも満たない青年でしたが、恐怖政治の最も血なまぐさ

い期間を反対されることなく単独で統括し、うわべだけで、じょう舌な吸血鬼の彼は断末魔の犠牲者に興味を抱いていたのです(4)。」

その「卑劣行為」の主要な加害者は邪悪なラコンブでした。「重罪人の最も完全なタイプのラコンブは犯罪人として全く優れていました。... トゥールーズの小学校教師であった彼は極めて有能で雄弁、器用で利口、そして、極めて勇敢でしたが、それまでもっぱら盗みと詐欺によって生きてきました。彼は革命家の判事として金と流血で手一杯悪事を企てながら尊大な働きをしていました。軍事委員会は彼の権力の下に略奪と流血の法廷になりました。彼は正義を安易に手放し、忌まわしいゆすりによって膨大な財貨を蓄積し、市民の生と死を売買に付しました。そして同時に、訴追者とその報告者になり、裁判官になりました。しかも彼はしばしば自分のパートナーを死罪にしたのでした(5)。

犠牲者は社会のあらゆる階層に及んでおり、しかも司祭は特上の餌食でした。たとえ市民憲章の受諾を宣誓し、叙階書状を渡すほど市民意識の様々な証拠をジャコベン・クラブ派に示しても容赦されなかったからです。聖職の何らかの行為が確認されることで十分でした。彼らは無情に悲運の馬車に投げ込まれ、断頭台で処刑されたのでした。

シャミナード師は、たとえ犠牲者の葬列に出会ったにしても、また、ナシオン広場を通過して、いまわしい断頭台の下に掘られた犠牲者の流血を受ける穴を眺めたにしても、忠実な40人ほどの司祭たちと市内に潜んでいました(6)。アーの要塞の城壁に沿って歩き、神学校やカルメル会修道院、孤児院やブリュトウス宮の側を通るなら、劣悪な牢獄に収容された100名近くの司祭たちの嘆き声を聞くことが出来たに違いありません。彼らは南米のギヤナやアフリカのマダガスカルの荒れ地に送られるため乗船を待っていたからです。港での状況は更に悲惨でした。船倉の奥に詰め込まれた気の毒な犠牲者たちは死よりも苦しい残酷な苦しみを耐えなければならなかったからです(7)。

シャミナード師は危険にさられることを察知してもろうばいすることなく、用心するように勧められた予防措置を講ずることで満足していました。そして、亡命したように思わせるため無遠慮で敵意のこもった人目を避け、住居の所有者届け手続きを父に委ね、可能な限りセン・ローランの地所の周囲を安全にしました。この地所には外から入ることが出来る門は一箇所しかなく、その出入りは、見知らぬ人が入ってくるとほえ続けるように訓練された立派な番犬に任せていました。ぶどう栽培家で、市民憲章非宣誓司祭とは行動できないことを宣言した過激共和派のボンタンはこの家の雇い人でした。彼は意図的に雇われていたわけです。彼が仕事に来ると、番犬はシャミナード師が隠れることが出来る意

味のはえ声でその到着を知らせていました。最後に、ボルドー出身で、おしゃべりではあったが、賢い、そして、すべてを犠牲にするまで忠実なマリー・デュブールという家事手伝いは、訪問の動機を察知するため相手におしゃべりをさせる才能を持ち、また、彼らをしていねいに追い払うか、時間稼ぎのために彼らをもてなすという、すばらしい技に優れていました(8)。

家の中には様々な隠れ場所が作られていました。その一つは果物倉庫に通じる上げぶたを上げて入ることの出来る地下の小部屋でした。シャミナード師はそこでミサをささげ、危険が迫った時にはそこに避難していました。危険が迫った時には、上げぶたが閉められ、敷き詰められたわらの下に隠れていました。後にセン・ローランの家がマリア会の最初の修練院に充てられた時、シャミナード師は、体操場となった昔の果物倉庫にずっと残っていたあげぶたを修練者たちに好んで見せていました。師は、様々な用心をしたにもかかわらず、セン・ローランも完全に安全ではなかったことをあかしする恐怖政治時代の様々な逸話をわたしたちに機会をとらえて話してくださいました。

ある日、師はもっぱら家事手伝いの機転のおかげで、恐らく救われることが出来たのかもしれませんが。彼女の延々と続くおしゃべりによって師が隠れることが出来たからです。また他の日、警官たちが突然家に押し入ったので、彼女は台所に入れてあった洗濯おけを師にかぶせる余裕しかありませんでした。彼らはくまなく搜索したが無駄だったので、テーブル代わりになった例のおけのそばに集まってぶどう酒の振る舞いを受けました。あなた方は、世にも不思議な避難所で囚人のように身をすくめていたわたしの気持ちを想像出来るに違いありません。「わたしと断頭台を隔てていたのは一枚の板の厚みだけでしたから」と後ほど師は語りました(9)。また他の緊急時には、家の中の隠れ場の一つに隠れる時間さえありませんでした。師は秘密の出口から抜け出して塀に沿って逃げ、近くの松林に隠れました。警官たちはドアを押し破り、最も奥まった場所を探し、屋敷中を探し回りました。しかし、彼らは思い違いをしていたこと、うわさの通り手配中の司祭は既にスペインに亡命していることを確信するようになりました。このことは驚くことではありませんでした。それは1793年ごろ、シャミナード師の名前が亡命司祭のリストの中にあっただからです(10)。それ以来セン・ローランの搜索はより少なくなりました。

ボルドーでの滞在を秘密にすることがシャミナード師の主な気がかりではありませんでした。師がこの都市に留まっていたのは、信者に信仰の助けを与えるよう全力を尽くして献身するためでした。ボルドーの市民は師のこのような献身を高く評価していました。彼らはたとえ恐怖政治の被害を受けたにしても、遅ればせながらもこれと戦い、あきらめることなく勝利を得ました。国民会議員たち

は革命家の信念で、信者たちの「無能力、無気力」を批判し、「真の過激派を作る熱意を持たない者」であると非難しました(11)。」事実、ボルドー人の大半は控え目で、信仰を固く守っていました。したがって、多くの人々は信仰に忠実であったので司祭の働きを求めることも、また、このことを人々に知らせることも恐れませんでした。もちろんそれは命がけのことでした。共和歴第2年7月22日付け(1794年4月11日)の政令は、非宣誓司祭をかくまったすべての人を死刑に処するということだったからです(12)。

昔のカタコンブのような幾つかの小礼拝堂があったことが知られていますが、真の神への信仰が信者を努めてそこに避難させるようにしたからでした。一方、多くの教会では理性信心の仮面劇が上演されていました(13)。信徒の避難教会には、ムニュ通りのミシェル・アルノザン教会、ユーグラ通りのM・ビロワ教会、そして、カヘルナン通り及びセント・ユラリ通りの諸教会を挙げなければなりません(14)。特にエール通りのドゥイル夫人の礼拝堂には多くの信徒が訪れていました(15)。この礼拝堂は市内で聖職を秘かに行っていた司祭たちの集合所になっていたからでした。彼らはドゥ・シセ司教から全権を託されていた上司のヨゼフ・ボワイエ師の指示命令を受けるためにそこに集まっていたのでした(16)。彼らはそこでミサをささげるために使用するすず製のカリスを受け取っていました。そして、共にイエス・キリストのみ心に祈り、毎日の活動のため、また、やがて求められるに違いない自らの最高の犠牲のためにこの信心から新しい力をくみ取っていました。

既に20名の司祭が断頭台で犠牲になっていた迫害の最中に、ボワイエ師はマリアとヨゼフのみ心を介してイエスのみ心への信心によって罪人の改心のために祈りの会を作る考えを同僚の司祭たちに吹き込んでいました(17)。その日の内に、まだ隠れていた20名の司祭を捜索するためボルドーで総家宅捜索が行われました。しかし、だれも捕まりませんでした。さい先よく創立された祈りの会は、ボルドー在住のすべての信徒を統合して速やかに発展していきました。永久礼拝が許可されていたヴェンセン姉妹の礼拝堂では聖体が絶えず安置されていました(18)。その他の集会が市内の様々な教会で、そして特にユーグラ通りの教会で行われていました(19)。毎朝5時に、「刑務所やその他あちこちに散在していたこの信心会のメンバーは、互いに心を一にして、ひざまずいて礼拝をささげていました(20)。」

ある証人は次のように語りました(21)。「ボワイエ師の熱誠はこのことに留まりませんでした。ご自分の首に懸賞がかけられていたにもかかわらず、神の最大の栄光のため罪人の改心を計って行動することが師の常日頃の関心事だったからです。この目的のため師は最初の信心会員で最も熱心なメンバーで

第二の信心会を作りました。彼らは罪人の改心を得るために昼夜イエスのみ心の前にぬかずいて祈りをささげていました。ボワイエ師は、決められた順序に従って1週間分担し合って礼拝を継続することを7人の司祭に委託しました。したがって、彼らは各自一人で、あるいは他の司祭と共に朝の5時から晩の9時まで聖務を果たして当日を聖化しなければなりませんでした。」シャミナード師がボワイエ師の熱心な補助者の中の一人であったこと、そして、この祈りの十字軍の普及に寄与したことは言うまでもなかったことではないでしょうか。シャミナード師は神の怒りを和らげる最も確かな手段が他にないことを知っていたからでした。やがてすばらしい成果が感得されるようになりました。それは革命のあらしが一時的とはいえ静かになったばかりでなく、特にこの信心が人々に豊かな恩恵をもたらしたからでした。もちろん、シャミナード師もその恩恵を豊かに受けることが出来ました。

さしあたって情勢はとても暗いものでした。しかし、司祭たちは様々な用心をなした後、やっとミサ聖祭を安全にささげるためかなりへんぴな場所をさえ見つけることが出来ました。彼らは密告者たちからの追跡を逃れるため集会場所を変えました。集会は常に遅い時間に行われました。夜の暗がりや集会の秘密を覆い隠す手助けになったからです。セント・ユリ通りの教会では、真夜中ごろ4階の1室でミサがささげられました。この部屋はこうした悲しい日々の思い出の場所として長く保存されました(22)。エール通りのドゥイル夫人の祈とう所は、ぼうどう酒貯蔵庫の奥にありました。集会は夕方多少早い時間に行われ、シャミナード師もしばしば出席していました。ドゥイル夫人は当局の注意をそらすため自分の子供たちに、その長男はやっと8歳でしたが、通りに面する配管工の作業場に近所の子供たちを集めさせ、そこで大騒ぎをするよう指図しました。こうしたちゃ目っ気が不思議にも集会の任務を果たさせていたからです。

ある個人の証人の伝えたところによると、病人を見舞い、臨終の聖体を授けなければならない時、この子供たちやその他の子供たちが司祭にとっては貴重な助け手になっていたということです。何らかの備品を店に運び入れる子供たちは家事手伝いのように見なされていたし、同時に彼らは、司祭の尋ね先を教え、そこへ行くのが危険な場合にはこれを留める見張り番の役目も果たしていました。このことについて次のようなことが伝えられています(23)。「シャミナード師はしばしば鑄掛け屋に変装していました。何か作業服のようなものを着て、背中には大きななべを背負い、汚れた顔をして、鑄掛け屋、鑄掛け屋、と叫びながら市内を巡り、城壁に沿って歩いていました。師は、両親に言い含められた数名の子供たちを連れていました。子供たちはこの自称鑄掛け屋の少し前を歩き、横断歩道を避け、飛び跳ねながら、偶然発見したように目当ての家に入って行きました。怪しい人物に遭遇しないと確信が得られると、その中の

一人が例の鋳掛け屋にそっと近づき、「某通りの何番地の何階」へと耳打ちしていました。」

シャミナード師は色々違った変装をしていました。しばしば行商人の服装をし、各種の商品を売る口実で聖職のために呼ばれた家に入出入りしていました。レイテール通りでは特に針の行商人として知られていました(24)。こうしたつましい巧妙な用心に助けられ、また、時宜に応じて服装を変えることによって、師は最も積極的に聖職を実践することに成功しました。すなわち、告白を聞き、臨終の聖体を授け、子供に洗礼を授け、結婚を祝福し、信仰の教えと聖なる希望を接する人々に想起させていました(25)。裁判所長夫人で、グランジュ家のデュラン夫人は、シャミナード師がどのようにその邸宅に入ることが出来、結婚を祝福し、居間の押入でミサをささげることが出来、子供たちが表で見張りをすることが出来たか等、当時の状況を感じ動なしに話すことが出来ませんでした。

司祭たちの聖職の実施は命の危険にさらされていました。ボルドーに隠れていた司祭たちのある者は時々警官から不意に襲われ、ある者はパンヌティエ師やガゾー師のように断頭台で惨殺され、他の者はラファルグ師のように南米のギヤナに流刑になり、また、ある者は軍事委員会の召還を待ちながら市内の牢獄で苦しんでいました。

名指しで告発されていたシャミナード師は最も重大な危険に数回遭遇しました。

ある日、例の通り変装して、労働者のように重い足取りで歩いていた時、危険が迫っていたことに気づきました。国粋主義者の一隊に出会ったからです。彼らは師に、「今し方ここを通ったシャミナード神父に合わなかったか」と息せききって尋ねたのです。師はろうばいすることなく、「はい、はい、急げば捕らえることが出来ますよ」と答え、更に、「司祭は一人残らず全員皆殺しにするつもりですか」(26)と尋ねました。また、ポルト・ダルブレ通りの建築家ジョルジュ・サバロ氏の家でも危うく襲われるところでした。暖炉からしか入れなかった隠れ場所のおかげで迫害者たちの追跡を免れることが出来たからです(27)。

シャミナード師の弟子たちはこの種の幾多の物語を師自身から聞きました(28)。次のような事件が伝えられています。シャミナード師はある家の小部屋の片隅でミサをささげるのが常でした。この部屋は、日の光など全然差し込まず、十分立ち回ることも出来ないほどの小部屋でした。ある晩、奉獻が終わったところ突然警官に踏み込まれました。小部屋の扉を閉めるのがやっとでした。師は小部屋の中で非宣誓司祭に浴びせかけるののしりの声を聞きながら聖体

をずっと捧持していました。み摂理によって発見されることが許された場合、臨終の聖体拝領の準備をしていたのです。

次のシーンはある未亡人の家で起きた出来事です。家宅捜索官たちはこの未亡人のすべての書類を検査しました。しかし、その中にシャミナード師からの手紙があったことには気付きませんでした。そこで、彼らは家中を探し、洋服ダンスの中から司祭がミサをささげる時着けるスータンのような長めの服を発見しました。彼らは、「この服はあなたが司祭たちをこの家にかくまった明かな証拠だ」と叫びましたが、彼女はあわてることなく、「そうでしょうか、未亡人は主人の衣服は誇らしげに保存しておくものではないでしょうか」と答えました。問題のスータンというのは実際は今は亡き主人の部屋着だったからです。

また別の機会には、許しの秘跡を受けるために他の二人の司祭と一緒にいるところを不意に襲われました。隣家の屋根伝いに逃げるのが予定されていたので二人の司祭は巧みに逃げ延びる時間がありました。ところで、シャミナード師はあたかも当家の主人のようにさりげなく警官たちに接しました。彼らは師に、「ここに司祭をかくまっているんじゃないか」と詰め寄りました。師は落ち着いた調子で、「司祭ですか、どこでも探してください。部屋は皆空いていますから」と答えました。すべての扉に見張りが立てられ、家宅捜索が始まりました。その間、この自称主人は廊下を行き来しながら逃げ出す機会を考えていました。その演技もすぐ見破られるに違いなかったからです。師は既に隠れ場所に逃げ込んでいましたが、たまたま居合わせた使用人にここに長居してはならないと勧められました。果たして、その隠れ場所に踏み込まれた時、師はようやく逃げ出すことが出来ていましたが、残されていた手段は同僚の司祭たちが逃げた跡をたどるしかありませんでした。しかし、師は逃げ出すとすぐ追跡されました。もし、年老いた召使いが屋根裏の小部屋に入った警官たちの行く手を邪魔し、師が屋根伝いに逃げるため彼らを引き止めておかなかったなら捕らえられていたに違いありませんでした。

ようやく恐ろしい恐怖政治の終末が到来しました。幸いにしてシャミナード師は迫害者の手中に陥ることはありませんでした。1794年8月上旬、ボルドーではようやく緊張が緩和されました。共和歴熱月9日(1794年7月27日)にロベスピエールが失墜した報が伝えられたからでした。邪悪なラコンブの逮捕や軍事委員会の廃止は爆発的な歓喜で歓迎されました。平和と安全を、次のような言葉で宣言したIsabeauの荒々しい言葉を聞いた時、人々は自分の耳を疑うほどでした。「ボルドー市民は多くの混乱の後ようやく一息入れることが出来た。わたしは友好的な政体を諸君に届ける。今後だれでも自由に自分の意見を述べる事が出来、自分自身の行為によってのみ裁かれる。」不吉な道具の

最後の犠牲者になったラコンブの頭部が断頭台から転げ落ちた時、人々は有頂天になって喜びました。彼は1年以上も余りにも熱心な断頭台の御用商人だったからです。

やがて国民会議は共和歴3年風月3日(1795年2月21日)の政令で、すべての国民は自由にその信仰を生きる権利を承認しました。更に同会議は議長のランジュイネの報告によって、教会は宗教的儀式のために委ねられ、他の使用に転用し、あるいは決定的に充当してはならないことについて、すべての市町村を拘束する法律を5月30日に可決しました。また、単に共和国の法律に従うことを宣言することによって、自由に聖職を実施する権利を司祭に与えました。共和歴9月29日(6月17日)の通達は次のように指示しました。「遵守すべきことは次の事項である。法律遵守の要請は過去には何ら無関係である。意見陳述者の政治的行為や意見によるいかなる研究調査も問題にはならない。この点に関して法律が要請するものは共和国の法律に従うことのみである。これ以上要請されることはない。すなわち、あらゆる調査、この後のあらゆる動議も権利の乱用にはならない。」

この同じ政令で、聖職者に対する市民憲章はもう共和国の法律ではないことを明示しました。しかし、新たな困難も生じました。それは、法律が信仰の自由な実践を次第に断言し、指示するという原則の適用を意図したからです。

ボルドーの刑務所は1795年の1月から2月にかけて段々空になっていきました。祈とう所は公の礼拝に解放され、鐘を鳴らすこともしばらくの間黙認されました。1795年7月25日、政府の代表者ブッソンは、だれであれ、市民の信仰の実践を乱す者は公の安寧に関する秩序を乱す者であり、法律の敵と見なすと宣言するまでになりました。

シャミナード師も周囲の人々同様確実に永続的な平和を確信しました。そこで師は隠れ家を出て、市の中心のアバディ通りに法的な住所を構えました。そして、セント・ユリ通り14番地に公然と教会を開きました(29)。師はどのような宣誓も、共和国の法律を忠実に遵守するという宣誓さえもしていませんでした。何らの公の職務に就いていなかったからです。師は亡命者のリストに乗っていたので、聖職者に対して施行された法律の効力を恐れなければなりません。この法律はずっと有効だったからです。したがって、師はこの亡命者リストからの削除を働きかけました。まず、共和歴3年収穫月21日(1795年7月9日)付けで、「市民ギヨーム・シャミナード、36歳(身長1メートル64、栗毛の頭髪、茶色の目、大きな鼻、うりぎね顔)は、1790年5月から今日まで、アバディ通り8番地にずっと居住していたし、居住している(30)」ということ、9名の保

証人の確実な証明による居住証明書を取得しました。こうして必要書類を整えたシャミナード師は8月15日に亡命リストからの削除を申請して、静かにその回答を待ちました。

師の政府に対する態度は次第に信頼の態度に変わりました。議会在共和歴3年に憲法を公表し、公務員に対して、「わたしは全フランス国民の主権を認め、共和国の法律の遵守を誓約する」という書式による新しい誓約を要請した時、師はこのことを承認しました。同僚司祭の大半とこのことに同意したシャミナード師はこの誓約を広義に解釈して承認したわけです。しかし、師自身は同法への宣誓はしませんでした。宣誓が求められた司祭たちには宣誓するよう促していました。師は、聖職者間で多くの議論の対象となったこの件に関して、1795年11月27の日付で、自らとムタルディエ師とガッジオ師の2名の同僚が署名した文書さえ公表しました(31)。後ほど、警察に対するこの「弁明書(32)」を検討した師は次のように説明しました。「この弁明書は、厄介な時代において、良心の不安を静めるために、また、公権への服従に関して真の原則をカトリック信者に知らせるためのものでした。そして、この文書は作者の信条とこれを常に刷新する中庸の精神を明らかにしたものでした(33)。」このようにシャミナード師の意見は大きな影響を及ぼしていました。その権威は、師が神から託された聖職によって与えられたものだったからです。



注

(1) デュランティ氏

(2) 次の4月28日、シャミナード師はリヴィエール氏あての別の手紙で、自分の健康に関する前記の知らせを次のように補いました。「わたしの不具合はいつまでも続くとは思いません。ですから、感謝のためわたし自身そちらに出向くことが出来ると思います。わたしの胃はかなり丈夫ですが、頼りにならないのは頭痛と足です。」

(3) 当時のドーフィーヌ広場は今日のガンベッター広場。

(4) カミー・ジュリアン著、ボルドー史、678ページ、フェレ社、1895年、ボルドー。つけ加えなければならないことは、ある他の資料の作家が、若年のジュリアンに及ぼした責任を緩和したように思われることです。この人物は、王政復興時、「信仰の友」の記者に書いた奇妙な手紙で(36巻、190-192ページ)、当時ボルドーで犯された憎むべき犯罪の責任を政府の代表者たち(イザボーその他)のみに負わせ、彼らは反革命者のようにナントでカリエによって逮捕されたことを主張しました。彼の標語は、「社会の変革をすばらしくするのはこれをお愛させるためである。また、血と犯罪に染まっていない、汚れのない少女のような自由をフランス人と社会にもたらすためである。」王政復興の下で彼は教育に専念し、教育に関する多くの著書を出版し、百科全書的な雑誌を指導しました。

(5) カミュ・ジュリアン著、前記引用、679ページ。軍事委員会は予定された858名全員を裁き、内201名を死刑にしました。当時のすべての事件に関してはヴィヴィ著、「ボルドーの恐怖政治」2巻、フェレ社、1877年、ボルドー、参照。

(6) オレリ著、「ボルドー全史」2部、2巻、2ページ。大革命後ラムルス嬢はドーフィヌ広場の近くを通った時、「こういう場所ではわたしたちは沈黙を守り、祈らなければなりません。殉教者たちの血によって赤く染まった場所を通るのですから」とつぶやきながら足を早めました。(イレール・ルリエーヴル著、「恐怖政治下のボルドーのウルスラ会」、5ページ、1896年、ボルドー)

(7) イレール・ルリエーヴル著、「1793年の殉教者名簿の新しいページ」、4ページ以降、1886年、ボルドー 参照。

(8) マリー・デュヴールは1847年の帰天まで、すなわち、50年以上シャミナード師に仕えてここに住んでいました。彼女はボルドー近郊ヴィルラードの出身でした。

(9) 1844年8月17日、カイエ師への手紙。その他の伝えによれば、この場面はぶどう酒たる製造人の家での出来事として伝えられています。警官たちに追われたシャミナード師は、ある酒だる製造人の作業場に逃げ込みました。彼はとっさにたるをわたしにかぶせました。警官たちがすかさず駆け込んできて、探している司祭を見なかったか、とたる屋に尋ねました。彼は皮肉たっぷりに、「神父ならそのおけの下だよ」と答えました。警官たちが肩をすくめただけで出ていった時、まだすっかり興奮していたシャミナード師は、たる屋から裏切られたのではないかと驚いた様子をしました。すると彼は、「あいつらはわたしのことをよく知っているんで、わたしが本当の事を言うなど信じていませんよ、いつもそうなんですから」と答えました。

(10) このリストは、「亡命者またはボルドーにおける富裕財産の所有者目録」という表題のノート形式です。その38ページに、「司祭、シャミナード、トンデュー道入り口の大きな建物はその所有である」と記されていた。(ボルドー市資料室、分類1)

(11) カミー・ジュリアン著、前記引用、686ページ。

(12) このおどしは無駄ではありませんでした。平凡なクリーニング屋であったが信心深かった証人のマリー・ジメ嬢の感動すべき物語は、殉教時代の記憶を想起させるものでした。(イレール・ルリエーヴル著、「殉教者名簿の新しいページ」、10ページ、注)。また、同じ理由で処刑されたタンドネ夫人とクーロンナ夫人(ジュステン・デュプイ著、「デュヴール師の生涯」、29ページ、1851年、ボルドー)、また、良き牧者の修道女たち、(同前著、「大革命中のノートルダム修道女」、177ページ、1900年、ボルドー、その他多くの人々がこの証人です。

(13) 特に聖ドミニコ教会がこの理性信仰の仮面劇の上演にあてられました。理性の女神の祝日は1793年12月10日に盛大に祝われました。(ヴィヴィ著、「恐怖政治の物語」2巻、3章、参照)

(14) イレール・ルリエーヴル著、「ルスラ会」43ページ及び他の文献参照。

(15) イレール・ルリエーヴル著、「殉教者名簿の新しいページ」194-195ページ。

(16) ロデ教区で1763年2月11日生まれのヨゼフ・ボワイエ師は、シセ司教によってボルドーに呼ばれ、大革命当時セン・ラファエル神学校の校長でした。ランボワラン師やアントワン・ボワイエ師の後を継いで信仰の回復時まで当教区を管理しました。ダヴィオ大司教によって正式の教会参事会員に任命された師は1808年に総代理に昇進し、1819年3月24日に帰天しました。

(17) P・プーゼ著、「ラムルス嬢の生涯」60－61ページ。

(18) セント・ユラリ通り、現在の46番地ドゥヴォール弁護士家の中。

(19) イレール・ルリエブル著、「ウルスラ会」43－54ページ。恐怖政治時代ボルドーにおけるイエスのみ心の信心に関する興味深い詳細が記されています。この信心会には宣教師や信仰の犠牲者さえもいました。わたしたちは、イエスのみ心のご絵や礼拝の通知を送付したかどで斬首されたウルスラ会のアンヌ・ガッシオ修道女について述べたいと思います。

(20) ラムルス嬢の生涯、60ページ。

(21) ラムルス嬢は生涯を通じて自筆の回顧録によって再現しました。

(22) イレール・ルリエブル著、「殉教者名簿の新しい一ページ」、54ページ。シャミナード師もセント・カタリーヌ通りのイリゴワイヤン氏の家でミサをささげていました。

(23) この話は代訴人アントワン・フェイ氏によるものです。これはマリア会のM・ピポ修道者によって伝えられました。

(24) この言い伝えはルリエブル師によって収集されたものです。

(25) 大司教館の記録には、シャミナード師の署名による恐怖政治時代の日付の多くの洗礼や結婚の証書が記載され、保管されています。

(26) マリア会の最初の修道者の一人ジュステン・デュモンテ士の覚書。

(27) ジョルジュ・サバロ氏はロベスピエールの失墜を知る前、1794年7月29日、熱誠の犠牲者として帰天しました。ルリエブル師著、「ウルスラ会」、83ページと続き、恐怖政治時代のエピソードが詳細に語られました。

(28) これらの物語はP・セルマンとデュモンテの自筆の覚書から引用したものです。

(29) この教会は恐怖政治の当初まで存在していました。(イレール・ルリエブル著、「殉教者名簿の新しい一ページ」、54ページ。)大革命の間は14番地であったセント・ユラリ通りの家がどの家であったか確実に決めることは不可能です。

(30) 「市役所資料室」1。同時に共和歴3年熱月3日(1795年7月21日)付けの市の他の資料は、「前記の居住証明書は法令に従って引き続き8日間ボルドー市役所に掲示公表された」ことを伝えています。

(31) ジャン・ピエール・ムタルディエ師は1759年8月31日に生まれたレスパール出身者でした。ペリゴル地方のシャンスラド修道院のオグステン士は1793年1月にはボルドー

に避難しました。士は大革命後再建された神学校の最初のドグマの教授になりました。1810年から神学校の教授になっていた士は1820年3月4日に帰天しました。(L・ベルトラン著、「ボルドー及びバザスの神学校史」130-135ページ。)

1747年11月13日生まれのシャルル・ガッシオ師は、カバナクの主任司祭でした。師は大革命の間ボルドーのセン・ミシェル小教区教会を管理しました。師は市内のあちらこちらの牢獄に拘留されていた司祭たちに信仰の助けを与えることに努力すると共に、女子青年たちや、特に、死刑の宣告を受けていた一司祭を脱獄させることに成功したヴェンセンヌ嬢によって彼らに聖体を運ばせていました。セン・ポール小教区教会の納室係であった師は1835年1月25日に帰天しました。

(32) 1809年警察にあてた覚書(総本部資料室)。

(33) 主任司祭メノシェ師からボワイエ師への次の手紙で判断されるように、ボルドーでのシャミナード師の意見は有力でした(1795年9月27日付け。)「神父様、わたしは議会の新しい政令によって要請された服従に関する聖職者の一致をうれしく思います。わたしはこの手続きをセント・クロワの市役所で致しました。シャミナード師は「フランス国民の主権」を無制限に認めることは出来ないに違いないと考えていました。シャミナード師はM・エメリーのように事実を認めても権利を保留していました。

第5章 市民憲章宣誓司祭の復権 (1795)

市民憲章の不信、宣誓司祭の復権希望 ❖ 教戒師と悔悟司祭の復権
❖ 宣誓司祭の実情と失墜の理由 ❖ 宣誓の取り消し、告知、復権式 ❖
バザ教区の宣誓司祭 ❖ 迫害の再開と密かな聖職活動。

歴史家のピコ氏は次のように述べました(1)。「神がフランス教会に留意されたこと、外国に亡命した多くの司祭たちの不在の間、信者たちに必要な霊的援助を与えられたこと、そして更に、聖職者に対する市民憲章によって離教的な誓約をなした多くの司祭を教会の一致に復帰させたことはすばらしい慰めでした。これらの宣誓聖職者たちはこの憲章が正統な権威や教会全体によって非難されたことをもはや隠すことは出来ませんでした。そして、この憲章は当局によって完全に破棄されてしまいました。恐怖政治の間、多くの過激派の人々がなした行為は大革命と不信心の不幸な結果に加えて悲しいごまかしをもたらしました。そこで、人々は多くの醜聞によって品位をなくした教会とは決別する必要を感じていました。市民憲章に署名した司祭たちは合法の長上に従うためどっと復帰して来ていました。」信仰が恐怖政治によって脅かされることがなくなってからボルドー市民は慰めを得ました。信仰に忠実であった司祭たちは御主の模範にならって意気消沈していた同僚司祭たちに愛情を込めて呼びかけ、彼らと分け合う用意が出来ていた神の哀れみの賜物を示し、多くの宣誓司祭と和解する慰めを得ました。宣誓司祭の教会復帰は、教区の管理司祭ボワイエ師が、彼らの復権のために特別に委嘱された教戒司祭を任命しなければならないと考えるほど多数に上りました。この困難な職務の実践のために任命されたのがシャミナード師でした。師はまだ35歳にもなっていませんでしたが、その弟子の一人が、「師は、その賢明さと円熟さが年齢の順とは限らない人々の中の一人だったのです」と述べた通りだったからでした(2)。

確かに、許しを願うこれらの気の毒な、迷った司祭たちに対して、どのような態度で接しなければならなかったのでしょうか。彼らの醜聞は余りにも悲しい影響を教会に及ぼしていたからでした。また、彼らの教会への復帰は、大迫害時代以上の類似点を作り出していたからです。もちろん当時も信仰を捨てた司祭は指導者の配慮の対象になっていました。しかし、指導者たちは彼らへの簡単な許しが憶病や欺まんを助長しないか、また、厳しい指導が、信念がぐらついていた彼らをおびえさせ、束縛しないか迷っていました。シャミナード師は聖座によって示された規則を素直に適用することによって、この二つの暗礁の

間をどのように進むべきかが分かっていた。

もちろん、ローマも協議していました。それは、教会法の厳格さを緩和することが申請されていたからです。すなわち、離教した司祭たちが教皇自身の法廷に告発されたからでした。しかし、この請願は戦争や動乱の時代の多くの罪人たちにとっては非常に困難でした。1792年3月19日の教皇書簡によって最も広範な権利が教区管轄司教に与えられ、その後、この権利は更に拡大されました。ローマに保留されたのは離教司教の許しのみでした。いずれにしても、聖座が単なる一宣誓司祭に対してさえも要求したことは、宣誓によって不当に獲得した役職をあきらめること、離教の公の取り消し、その過ちにふさわしい償いの実施、改心者の力と意向に応ずる他の償いの実施等でした。

これらの規則の適用には決して手抜かりのないことが求められました。シャミナード師が多数の弟子たちに伝えたところによれば、師はこの職責のために大変苦勞したということでした。師が特に留意した指導を知るためには、リブルンの旧改革派フランシスコ会士で老齡のヨアキム・ルッセ師とシャミナード師の間で交わされた手紙を再読することによってしか最善を尽くすことは出来ないと思います。ルッセ師は次のようにその考えを述べました(3)。

「神父様、わたしは遅ればせながら、宣誓司祭たちを教会法に従わせるための聖座の処置を知りました。不幸にしてわたしもこの宣誓司祭たちの仲間でした。わたしは罪人であることを告白します。わたしは悪意というよりむしろ恐怖心から犯してしまったこの過ちを償うために、わたしがしなければならないことを知らせていただくために、信頼をもってあなたにこの手紙を書きました。わたしは旅行が出来ないほど年をとり、様々な病気を持っています。しかし、早速わたしがなすべきことのご返事をいただければ何でも致します。わたしはもう82歳になりましたが、リブルンで32年間生活し、3回院長を経験しました。改革フランシスコ会士のあなたのご兄弟とも親友でした。わたしは生涯にわたって、教会を母にしない者は神も父に持たないという気持ちを生きることになるに違いありません。生活費が高いのを感じますが、国からごくわずかな年金を頂いています。わたしは、神がわたしに手を差し伸べてくださること、また、神父様が国の資格で同国人として(原文のまま)許しを与えて下さることを心から望んでいます。敬具。リブルンにて、旧改革フランシスコ会士ヨアキム・ルッセ、1795年8月24日。」

シャミナード師はこの手紙に対して8月29日付けで次のように返事しました。

「神父様、あなたが置かれている立場に対してわたしがお役に立つことが出来ることを本当にうれしく思います。あなたの年齢、職務、そして、あなたの修

道会で信任された名誉の地位のためにあなたの手本は多くの模倣者を引き付けました。そこで、あなたはあなたの過ちを撤回するために、そして、離教の同意によって教会に与えた醜聞を償うため、あなた自身に関しても、また、彼ら模倣者たちに対しても明確な方策を講じなければなりません。あなたは教会とあなたの長上への服従の第一の行為としてどのような聖職の実施も中止しなければならないと思います。次にあなたになすべく求められる第二の行為は、あなたの宣誓から生じた離教のすべての行為を、痛悔の気持ちと教会法上のあなたの長上への服従によって、このことに付いては誓約撤回の宣言が伴われなければならないと思いますが、詳細にわたって取り消すことです。しかし、あなたの年齢と病弱のためにあなたがこちらに赴くことは免除されますが、あなたの宣誓撤回の宣言を公表するためにあなたの宣言文をわたしあてに送付してください。宣言文を頂いたらすぐ、あなたの和解が受け入れられるためにこちらからなすべきことをお知らせしたいと思います。それまで、教会の大義を放棄したことの重大さをイエス・キリストのみ下で観想してください。あなたの心の傷を調べてください。それは犠牲者を清める泉の中にあなたを沈めて下さるイエス・キリストのしもべの司祭たちにその傷の重大さを真剣に悟らせるためです。また、あなたが誤らせたかも知れない多くの人々に対してあなたが抱いておられる苦悩と、あなたが与えたつまずきを償うためにあなたが抱いておられる希望を公にあかしてください。そして、特に物質的に必要なことはみ摂理のみ手に完全に委ねてください。したがって、教会のおきての違反者であることを告白してのみ求めることが出来た年金は良心的に受領出来ません。あなたは、み摂理はフランシスコの真の子供を決して見捨てることはない、ということを経験したフランシスコの精神で学んだはずではなかったのではないのでしょうか。」敬具。

シャミナード師は改心した司祭たちの生の声を出来るだけ聞くようにしていました。それは彼らの気持ちを確認するためと、その過失相応の償いを果たさせるためでした。師は彼らとの最初の面談の後、直ちに彼らを教会に復帰させることはまれでした。それは、彼らが世の試練に耐えて、誠実な改心と意志の強固さを明らかにすることを望んだからでした。その一例が伝えられています。それはヴェルドレのセレステン会士P・リカル師への対応でした。リカル師はその過ちの告白後直ちに許しが得られ、信者に対する聖職の再開を主張していたからでした。リカル師が司教総代理のポワイエ師(4)に送った次の手紙で指摘したように、どのような嘆願によってもシャミナード師の精神の強さには打ち勝つことが出来ませんでした。

「わたしの嘆願や最も誠実な悔い改めにもかかわらず、シャミナード師は冷酷でした。彼はわたしの宣誓撤回を受け入れようとしませんでした。彼は、わたしがボルドーに残ることが出来ないということから、わたしの罪を許し、宣誓の撤

回を受け入れるために、わたしの国元にだれかを送ることになりますから、宣誓撤回のために決められた日に必ず出頭するよにということをわたしにしたためさせただけでした。」

シャミナード師がこのように慎重に行動したのは、当時、これらの司祭たちが自らの境遇を正常化すべく多くの好ましくない人々を導いた動機が純粹ではなく、また、信者の尊敬を取り戻す野心もこのこととは無関係でなかったことを知っていたからでした。例えば、リブルンの司祭のように、宣誓の撤回のためにボルドーに来たある司祭は、また、ボルドーから司教総代理のボワイエ師に次のように書き送りました(5)。「余りにも有名なリブルンの主任司祭は前の日曜日にいわば宣誓の撤回を致したとのことです。わたしたちがそのことは見せかけに過ぎないのではないかと案じたのは当然です。彼はそのようなことをなす可能性がなかったからです。彼の教会は空でした。彼は善人同様悪人からも当然軽蔑されているので長期にわたって強力で矯正されなければなりません。もし、彼が4箇月、5箇月後も高位聖職者の地位にあるなら、その影響は教会に大きな害悪を及ぼすに違いありません。」

シャミナード師は宣誓司祭の教会復帰の誠実さを十分確認するため、彼らが大革命当初から離教によって犯したすべての行為の詳細な報告を要求しました。これらの手紙の大半は今日まで保管されています。それを読むことは痛ましいことですが、教訓になるものと思います。それらの手紙は、わたしたちの命を、あるいは、単なる幸せであっても、これを脅迫する暴力に直面した時、わたしたちの弱い悲しいさが物語られているからです。彼らの中の一人が、「わたしは神のお恵みによって、(心の底では)異端者にも離教者にもなりませんでした。もし罪を犯したとするなら、わたしの恐怖心のみがその原因でした(6)」と述べたように、気の毒な宣誓司祭たちの大半は同じようなことを述べていました。他の司祭は、「罪を犯したことを思い出せないのはわたしの無知のためと言わなければなりません」と叫びました(7)。昔の格言が、「まず始めに抵抗しなさい」と教えたように、なお余裕のある時に、わたしたちは悪を断つ必要性を学ぶために、説教よりも雄弁なこれらの手紙の幾つかを一読しなければなりません。

ある宣誓司祭は悪い傾向に引きずられないために実際に戦いました。例えば、モンテユイ師です。師は宣誓をしましたがこれを撤回しました。師は次のように述べました(8)。

「わたしが不忠実になったのはこの時期でした。わたしは本当に寛大に開始した聖職を続ける勇気がなかったのです。あらゆる方面から脅迫され、大人から、また、子供たちからまで迫害され、部屋のドアには全く侮辱的で、恐怖心を

抱かせることをもくろんだピラが絶えず、公然と張られていました。わたしを病弱になり、わたしの身に何が起きるか分からなくなりました。わたしはこうした恐ろしい苦悩の中で、いつも同じ言い訳をして、不幸な宣誓を繰り返す非難すべき憶病にかられました。この時から、わたしは自分の罪を知って、最も苦しい、最も不愉快な生活を送っていました。しかし、幸せな機会が訪れればすぐそれらの罪を償うつもりで毎日を始めていました。わたしは何もあなたに隠しだてをしたいとは思いません。わたしは第2回目の誓約をなした後も信者の中で生活し、イエス・キリストの真の聖職者として行動してきたことをあなたに告白しなければなりません。わたしはドゥ・ラングル司教の指示に忠実に従って、自分の所にはどのような邪魔者も受け入れず、わたし自身が生かされてきた信仰の精神を鼓吹した教区民としか接触しませんでした。こうした期間は、宣誓を撤回してすべての財産が没収された司祭たちが国外に追放された1793年の政令によってわたしが逮捕された昨年(1792年)の1月10日まで続きました。わたしは11箇月間この苦しい状態にありました。ようやく、ある友人の仲介によって政府の代表者イザボアの命令で拘留を解かれました。」

償いの開始が苦しみになったこのケースは例外だと思います。一般に最初の転落は他の転落を引きずり、そして、全然許されない信仰の放棄となる不幸な背教を導きます。確かに良心は黙しませんが奇妙な妥協で満足させられるからです。すなわち、多くの場合、良心は空しい錯覚、無益な効果で満足させられたからです。離教の誓約を受け入れた当局者はこれらのことは全然考慮しませんでした。

一例として、「バザ教区のセン・ローラン教会の主任司祭マテュレン・ウトー師の取った行動の報告書」の冒頭が挙げられます。これは師自身の経歴を3人称で次のように語ったものです。

彼は使徒的ローマ・カトリックの信仰に最も適切な制限の下で聖職者に対する市

民憲章の誓約をなしました。しかし、それらの制限は記録簿には記載されませんでした。したがって、その誓約は純粹で単純なものに思われました。しかし、しばらくして彼は前述の誓約に対して良心の責めを感じました。彼が意見を求めたある聖職者は、もしそれらの誓約が記録されなかったとするなら、教皇の意向がそうであるように、彼は誓約を撤回しなければならないと答えたからでした。彼はこの意見に従うことに困難を感じました。彼の聴罪師の意向や反対にもかかわらず、彼は役所への誓約の撤回を通告するため司祭館に裁判所の執行官を呼びました。しかし、彼はその役目を拒絶しました。そこで、誓約撤回のた

めの2通の書簡を、1通は市長に、もう1通を検事代理に送ることを決意しました。しかし、誓約の撤回書は1通の書簡を添えてすぐ返却してきました。その書簡には、本撤回書は法的な措置がなされていないので受領出来ないと記されていました。その撤回書が合法的でなかったにしてもそれは主任司祭の過失ではありませんでした。2日か3日の後、こ息な扇動によって恐怖心を起こさせるようなあらゆる種類の凶器で武装した400人か500人の人々が司祭館の周りに集まりました。首謀者たちは彼が誓約の撤回を望んだかどうかを尋ね、問題の教書は教皇からのものではなかったと述べました。反対のことを確信していた彼はもし教書が教皇からのものでないなら誓約は撤回しないし教皇からのものであれば誓約を撤回するはずです(9)」と彼らに答えました。

「こうして彼は自由と平等の誓約をなしました(10)。彼はその誓約をなす前に自由のために誓約をなすことはどのようなことを意味するのかを市長に尋ねました。市長は、それは勝手気ままではなく、福音の自由であると答えました。教会の位階制度が攻撃されはしないかと不安になって、更に、平等は何から成っているかを尋ねました。市長は、それはわたしたちが対等の人として相互に取り扱われなければならないことから成っている、しかし、司祭たちには長上があるからこれに従わなければならない、と答えました。彼はこの説明に応じて宣誓しました。」

「彼は自らの司祭叙階の書類を市役所から要求されたのでこれを渡しました(11)。彼は市長に、たとえ書類を渡しても、司祭職の放棄を誓うことも、司祭職を放棄することも決して意味するものではないと答えました。その翌日、当局がその書類を渡すよう要請していることが分かった彼は市長あての手紙を添えて書類を送付しました。それは、市長が、彼がその書類を渡しても、身分の放棄を誓うことも、その司祭職を放棄することも決して意味するものではないことを市の記録簿に記載すると言ってきたからでした。」

「彼は視察官から依頼書を頂いた後、自ら聖器具を当局に渡すことになりました。しかし、彼は、教会からそれらを持って来るまで待つて欲しいと告げました。しかし、決して許せないこの敵から渡されたこの書類は彼を混乱させました。敵に対する恐れへの念は、絶えず非難し合うという過ちを彼に犯させました。彼は送られてきた2通の教書の数行を読んだことのみをこの無資格の司教に伝えました。それはこの教書がこの司教からの教書であることにだれもが気づいていたので、始めも終わりも読まなかったからです。」

転落から転落、そして、最後の裏切りまで落ちたこの哀れな司祭の悲しい物語は、何らかの相違はあっても大半の宣誓司祭たちの物語です。ジャンサク

の主任司祭フィリップン師が市民憲章同意司祭との接触を避けるようどのように振る舞ったかを好奇心で述べると次の通りです。

「例の司教は最初の教書を公表しました。わたしは日曜日の説教の折それを読むよう市当局から強く要請されていました。しかし、わたしはすべてを捨てる方がよいと抗議して、そのことをずっと拒否してきました。いつもの日曜日、わたしは静かにミサをささげ、福音朗読の後これを解説するために説教台に上りました。説教が終わるとすぐ一人の信者が急に立ち上がり、司教の教書が交付されているはずだからそれを朗読するよう要請しました。説教を終わったばかりのわたしはひどくつかれていたもので、それは出来ないと答えました。この扇動的な教区民は、それでもこのことを強く要請し、幾らかのやり取りの後、彼は自ら教書を朗読したいと申し出ました。この混乱の中で、わたしは居合わせたわたしの姉妹に部屋から教書を持ってくるように頼みました。その間、わたしは説教台を離れて祭壇に帰りました。例の人は教書を大声で朗読しました。わたしは信者に背を向けて立っていました。教書の読書が終わったところでミサを続けました。こうしてこのうわさは方々に広まりましたが、わたしは非宣誓司祭であることを公表したのでこのように告発されました。また、市当局もわたしを例の司教に告訴しました。司教は、わたしが極めて非難されるべき者であることを文書で回答してきました。しかし、この件は度を過ぎてならないと要請していました。こうしてこの件は落ち着きました。翌年他の教書が交付されました。わたしは教書を公には読みませんでしたが、ほとんど混乱はありませんでした。前年、教書を朗読し、当局の役人になっていた例の人は自分で教書を持参しており、わたしに迷惑をかけないと知らせてきました。彼は早速朗読を引き受け、会衆にもこれを知らせ、わたしの説教の後、自席で(初回彼は説教台で朗読しました)教書を朗読しました。その間わたしは祭壇の福音書側に立っていて、時々会衆の方をちらっと見ていました。」

継続的な裏切り行為を犯したこれら不忠実な宣誓司祭の大半はなおあえてミサをささげるほどその良心は眠らされていました。次のくだけは前述した報告書の末尾です。

「例えば、数人の同僚司祭がミサを自分の司祭館でささげていたということは(12)、彼らの霊的援助を軽視しないためではないにしても、このことを模倣することは適切でないのではないかと、わたしを疑わせたことを表明することで終わりたいと思います。わたしは先の聖霊降臨の大祝日からミサをささげ始め、聖霊降臨後第5日曜日まで続けました。しかし、15箇月前、16箇月前からミサをささげることを中止していました。以前祝別した祭服一式、祭壇石、ナップ類は持っていましたが、カリスは持っていなかったからです。そこで、カリス代わりに

丈夫なワイングラスを用い、パテナにはニスを塗ったスチール製の大きな受け皿を用いて、テーブルの上で、わたしの姉妹だけでミサをささげました。彼女にはだれも近づこうとしなかったからです。」

これらの告白の書状には転落の重大さ同様、後悔の言葉が加えられなければなりません。次のくだりは、マッシュガのデュカスという老司祭がシャミナード師にあてた手紙です(13)。「どのような巡り合わせであろうか、わたしに想像出来ないことは、誤謬と偽りの道を歩むために、約80歳になるまで歩んできた真理の道を迷ったということです。生活の必需品、80歳という年齢、様々な病弱、一言で言えば、あらゆる人間的な配慮がわたしをこの悲しみのどん底に導いたのでした。今日のわたしの望みは出来るだけ早くこの境地から抜け出すことです…。あなたは、父親の最良の家を去ったことを後悔して、その足下で涙を流す放蕩息子を見捨てにはならないと思います。まず、わたしは当然受けるにふさわしい教会法上の償いを致します。あなたの親切な決定を心待ちにしています。1200リーブルの年金を放棄しなければならないことは分かっています。何もわたしの改心を止めるものはありません。み摂理に全幅の信頼を寄せています。もし、信者の方々や慈悲深い人々がわたしに残された生活を静かに送る手段を教えてください。わたしは一人では何も出来ない84歳の老人です。」

ローマからの指示はこれらの私的な自白や謝罪では満足せず、公の宣誓撤回を命じていました。ボルドーではこの宣誓撤回式はセント・ユラリ通りの刑務所の礼拝所で荘厳に行われていました。1795年、そして、特に当局によってほとんど邪魔されることのなかった夏の間、この感動すべき撤回式は一人あるいは数人の司祭のためにシャミナード師の簡素な礼拝所で繰り返し行われない日曜日はありませんでした。

ミサの間、彼らは信者の前に進み出て、自分たちの過ちを要約してこれに改心の語句を加えた撤回文を朗読していました。彼らが年齢や病弱のため、初代教会で行われていた公の罪の告白を想起させる罪の償いの儀式を個人的に受けることが不可能な状態にあった場合は、彼らを代表する一人の司祭が、彼らがしたためた撤回書を彼らに代わって朗読していました。これらの老司祭の一人は、この件に関してシャミナード師に次のように書き送りました(14)。

「リュデル師は、あなたのささげるミサの中で、わたしの撤回書をわたしの名で一人の司祭が朗読されたこと、すなわち、請願者としてのわたしの代わりをしてくださったことをわたしに伝えてくださいました。いずれにしても、このことをその方に心から感謝致したいと思います。その方が愛徳によってわたしに代わって

なすことを鼓吹されたすべてのことを承認し是認したいと思います。わたしの心をその方の心に、わたしの気持ちをその方の気持ちに一致させ、この機会に罪人の代わりをしたこの義人の優れた善意を賞賛したいと思います。この愛徳に満たされた司祭は、その時、わたしたちの罪を負われることを望まれた神聖そのもの、正義そのものの御主の模倣をなされたのですから。」

これらの公の宣誓撤回においても、教悔師に提出された個人的書類においても自白の内容は同じはずでした。しかし、その語調は異なるもので、固有のニュアンスで信者の心を感じさせることが予測される悔悟の表現がなされなければなりませんでした。前述の勇気のある手紙で、マッシュュガ教区の老司祭がどのようにしめくくったかは次の通りです。

「主よ、わたしの罪は数え切れません。しかし、主の哀れみは永遠です。わたしは言い訳をしようとは思いません。かえって、わたしの長年の過失を苦々しい気持ちで後悔しています。『わたしは心の苦しみにもかかわらず生涯前進し続けます。』大革命当初わたしは目新しい主義に注意深く耳を傾けました。改革の主張や上級聖職者の軽視等は、わたしに初代教会の規律の再開の思いを期待させました。しかし、この害毒はわたしの心に入り込んでしまったのです。こうしてわたしは聖職者に対する市民憲章への宣誓を単純になしてしまったのです。わたしの教会が略奪された時、確かに悲しくなりました。わたしは憶病から聖器具も自ら渡してしまったのです。その後わたしはスータン姿でミサだけはささげました。司祭叙階に関する書類も渡しました。しかし、司祭の身分を放棄する気持ちはありませんでした。わたしは転落から立ち返ること、与えたつまずきを修復することを心から望み、ミサ中、祭壇の前で、聖職者に対する市民憲章への不幸な誓約を撤回することを宣言しました。わたしは教会からの離別とそのすべての協力者を忌み嫌い、清貧に復帰し、不幸な宣誓によって与えられた年金を放棄します。わたしはパザの司教座に任命された方を司教と認め、パカロー師と決別します。神が、わたしと同じ年齢のこの無資格就任司教を顧み、その頑固さからわたしのように彼を改心させてくださいますように。」時々、宣誓の撤回は放蕩息子の感動的な祈りの形式に変更され、救い主の聖なるみ心の哀れみが懇願されました。また、時には、それは罪人の確実なより所であるマリアへの訴えであり、そして、ほとんど常にそれは忠実であった司祭たち、また、危険な時代にたじろがなかった勇敢な信者たちに対する感動的なアピールでした。こうして、改心者たちは初代教会の転落者のように自分たちのためのとりなしを願い、名誉回復を得るために教戒師の祈りと助けを懇願していました。すなわち、「わたしは義務として恩恵によって与えられた聖なる祭壇での聖職の実施を懇願し、この聖式に参加する信者たちに、哀れみ深い永遠の神にもろ手を挙げて心から祈るよう懇願しました。それは、あらゆる

汚れからわたしを洗い、清め、回復させ、そして、これから後も守ってくださる神の豊かな恩恵が 哀れな、極めて哀れなわたしの上に恵まれるためでした (15)。」

宣誓撤回の司祭が小教区の現職の司祭であり、教会の何らかの在職者であった時、そしてこれが恒例になっていた場合、教区当局者は前述の身分保障のみで納得せず、「カトリック教会への復帰を公に保証するための規則」を作りました。それらの指示は次の通りです。

「市民憲章宣誓の司祭が教戒司祭の教会で宣誓撤回書を公に朗読する日、ボルドーのすべてのカトリック教会の司祭は当該司祭の手で署名された報告書を受領することになる。司祭たちはミサの終わりにこのことを信者に通告し、宣誓撤回の司祭が償いの修行に忍耐するよう神に祈ることを信者に要請する。この目的のために信者たちは詩編の朗唱調で大声で、詩編のミゼレレ、主よ、わたしの罪によってではなく．．．の交唱、主よ、あなたはわたしの罪によってみ心を傷つけられました．．．。罪人であるあなたのしもべ某の上に慈しみの眼差しを注いでください。罰に値する罪にもかかわらず、あなたの怒りの罰を遠ざけてください、の祈りを唱えなければならない。」

次のくぐりはこれらの告示文面の一例です。

「兄弟の皆さん、下記署名のリブルン地区、サヴィニャックの司祭ジャン・コンスタンテン師とラ・レオル地区ペルグリュ郡リストラック小教区小修道院長アントワン・ロンデル師は、聖職者に対する市民憲章を誓約して教会と信者の前に罪人になっていましたが、今月23日の日曜日、神への償いの義務を果たし、使徒的、ローマ・カトリック教会の信徒の皆さんに与えたつまずきを償うため、当市のセント・ユラリ通り14番地の教戒司祭の教会の祭壇の前で、告白したばかりの誓約、そしてそこから生じた罪の撤回を申し出たことが告示されました。わたしたちは、わたしたちの魂の救いのために、わたしたちの祈りにあなた方の祈りを加えてくださるようお願い致します。それは、主がわたしたちを哀れみ、償いの修行の後罪が許されて聖職に復帰し、わたしたちの模範によって、わたしたちの脱落と使徒的、ローマ・カトリック教会への謀反によってわたしたちをまねたすべての人々を教化出来るようになるためです。(1795年8月22日、共和歴3年実りの月5日、ボルドー)サヴィニャックの司祭コンスタンテン、リストラック小修道院長司祭ロンデル」

以上がすべてではありませんでした。「誓約撤回の司祭がその撤回書を朗読した日、教区の事務局はこの件に関する教戒司祭からの報告を受け、このことを郡内の他のすべての司祭に伝達することを委任されていた各地区のカト

リック司祭に通知しなければなりませんでした。そして、これらの司祭たちはそれぞれ、ボルドーの祈とう所で決められた通りに信者たちにこのことを告知しなければなりませんでした。」そして最後に、この宣誓撤回の司祭が誠実な改心の印を現したことで、「教戒司祭から適当と判断された」時、新たな通告がなされなければなりませんでした。それは、「この迷った羊の教会への復帰を神に感謝するため、ミサの終わりに、すべての民よ神をほめよ、の詩編が歌われなければなりませんでした。」

このようにして初めて、悔悟の司祭はその聖職への復帰が認められることになりましたが、多くの信者たちの前で誓約の撤回をなすばかりでなく、晩課の後に痛快の詩編ミゼレレや主よ、あなたはわたしの罪によって．．．の祈願を歌っていただかなければなりませんでした。すなわち、「悔悟の司祭は、犯した罪の数や重さによって教戒師に定められた期間の各日曜日に、信者たちがこれらの祈りを熱心に痛悔をもってより効果的になすよう仕向けられるために、このことは、神のみ名が侮辱され、カトリック教会の声が恩知らずで、反逆の子供たちによって無視された不信心と放縦の期間に、残念ながら犯された冒とく、不敬、とく聖のための償いであるということを信者に表明しなければならなかったからでした。」

教会が英知をもって不忠実な聖職者の教会復帰を援助したのは以上のような用心をもってでした。その後、政教条約はより寛大な形で彼らの教会復帰を義務づけました。しかし、このことはご存じの通り惜しまれてなりません。真の悔悟者は厳しい条件にも改心を妨げられることはなかったからです。彼らの中のある司祭は彼らの教会復帰運動の熱心な使徒にさえなりました。その中でも、リストラックの司祭アントワン・ロンデル師は特に評価されるべき方でした。師は周辺地域のすべての宣誓司祭たちをシャミナード師の下に伴ったばかりでなく、なお宣誓悔悟の師自身、ボルドーに行くことが出来ない宣誓司祭たちの誓約撤回を自らの教会で受け入れる代表者として選ばれるにふさわしい方だったからでした(16)。

シャミナード師による処遇はすべての人々から賞賛されました。悔悟司祭たちが師に送った書簡が、師が負わされた権威に対する尊敬ばかりでなく、なお、師の寛容さによって鼓吹された信頼をあかししていたからでした。前述の通り宣誓撤回の司祭たちは、しかも、ボルドーの司教の管轄外のバザの教区からさえも、シャミナード師の下に来ていました。当時ボルドー教区の管理の任にあった聖人のような老齢のヨゼフ・キュルトユール師はシャミナード師を知っており、ボルドーの教会当局者たちがどのような尊敬をもってシャミナード師を遇していたか分かっていたからでした。師は離教の司祭たちの復職をシャミナード師に

依頼することをためらいませんでした。

キュルトユール師は刑務所から釈放されたばかりでした(17)。師は牧者の不在の間子羊たちがおおかみに襲われたことが分かりました。自らの病弱と70歳という年齢のため、この大きな教区の管理はかなりの負担に感じられました。したがって、宣誓司祭たちを受け入れ、彼らの改心を指導する配慮がシャミナード師に委託されたことは幸せでした。自由の身になった数日後師はシャミナード師に次のように書き送りました(18)。

「教会の懐から離れるという不幸に会ったが、また、そこに帰ることを望んでいる本教区の司祭たちに対してあなたの果たしている役割にこの上ない信頼を寄せています。もし、彼らがあなたの町に行くことが出来、あなたの下であなたの教えと忠告を利用するため必要な期間滞在出来る健康状態にあるなら、彼らを必ずあなたの下に送りたいと思います。」

果たして、師は旅行出来るすべての悔悟司祭をシャミナード師の下に送りました。旅行が不可能に思われた場合は、彼らの実情とシャミナード師の判断に委ねました。それは、「彼らの指導の方法に一貫性をもたせるためでした。」このように、シャミナード師は後に管理を託されることになったバザの教区と早くからコンタクトを取っていました。

ボルドーの大司教館の資料室には政教条約(19)以前の誓約撤回書が約100枚以上保管されていました。これらの撤回書のほとんどは、教区の再建まで教戒司祭の名称と役職を持っていたシャミナード師から受け取ったものでした。それらの撤回書の大半は1795年の日付になっていました。それは教会との和解によって将来への何らかの保証が与えられるように思われた年だったからでした。誓約撤回書は当局が寛大さを示すに다가って増加していきました。8月と9月が最も多くなりました(20)。10月の日付のものが何枚かありましたが、11月の日付のものは一枚もありませんでした。

果たして、迫害がまた始まったからでした。革命議会は休会する前、最後の政令(共和歴4年霧月3日、1795年10月25日)によって非宣誓司祭に対して1792年から93年に施行した法律を延長しました。そして、革命議会に続く総裁政府はこの忌まわしい遺産を引き受けました。新しい形の暴動が荒れ狂いました。人々はもう死刑の宣告は受けませんでした。グードレのトロンソンの表現によれば、「血を流さない断頭台」の刑、すなわち、オレロン島やギヤナへの流刑によって多くの人々が犠牲になったということです。ボルドー市当局は11月13日付けで亡命またはその意向のあるように思われた75名の司祭のリスト作成を急いでいました。それは彼らがまたボルドーに現れていたからでした。そ

のリストには次の指示が記されていました。「警察庁の警察官はリストに含まれている司祭を捕らえ、直ちに前記収容所に送付するため必要なあらゆる措置を講ずる任務が負わされている(21)。」

このリストにはシャミナード師の名前やシャミナード師の前で宣誓を撤回した大半の司祭の氏名が記されていました。わたしたちは師が亡命のリストからの削除を嘆願していたことを思い出しますが、そのことはまだ実現していませんでした。師は免除されるべき法律によって不利な立場に置かれていたのです。

どうしたらよかったのでしょうか。ジャコベン党の恩着せがましい態度をあてにすることは出来ませんでした。それは師の祈とう所が宣誓司祭の誓約撤回の例の舞台になって以来彼らに知られていたからでした。したがって、シャミナード師は亡命するか、市内に隠れるという新たな試みのいずれかを選ばなければなりません。公に実施されていた師の宣教活動はすべての人々の注目を浴びていたし、更に、警官の名指しの追跡を受けていたので、後者は特に危険でした。もちろん、師は危険にさらされることが分かっていますが、後者を選びました。師は11月1日には祈とう所を閉め、恐怖政治初頭のように、まず、自らの亡命のうさを広めるようにし、父親に、自分の名前で話したり、行動するようお願いして、再び変装をし、巧妙に聖職を開始しました。

師がより身近に迫る危険に立ち向かうようになった理由は、迫害の再開が宣誓司祭たちの悔悟の働きを遅らせるにしても、彼らからその聖職を奪わないためであり、また、師自身神から召されていると感じていた使命、すなわち、宣教師を養成する使命の土台を秘かに準備するためでした。確かに師はみ摂理によってボルドーに留まることが出来た1796年と1797年の2年間に、19世紀(22)の初頭に徐叙に立ち上がった修道生活の最初の基礎を築いたのでした。師が新たな危険に身をさらすことになる未来のために、自ら種をまき、自ら収穫することは不確実でしたが、しかし、み摂理によって示される時期に実り豊かな収穫が得られることは確かでした。



注

- (1) ピコ著、「18世紀の教会史に代わる覚書」6巻、432ページ。
- (2) ララン師著、「マリア会に関する歴史の序文」、2ページ。
- (3) これらの資料は本章で記したすべての資料同様、ボルドー大司教館の資料室から借用したものです。それはすべて未公開のものでした。

- (4) 1795年8月1日
- (5) 1795年末、ボワイエ師よりラフォン師へ。
- (6) セン・ローランの主任司祭のウトー師からボワイエ師への手紙。
- (7) 1795年8月23日 宣誓を撤回したリストラクの主任司祭アントワン・ロンデル師。
- (8) 1796年3月27日、手紙の名あて人は示されていませんでした。
- (9) 大半の司祭たちにとってその転落の原因は恐怖であり、安楽の熱望でした。また、他の司祭たちにとって、その最も強力な転落の原因はぐらついた意志への重圧でした。彼らの中の一人でリストラクの主任司祭でアントワン・ロンデル師は次のように述べました。「肉親のつながりがなかったなら、わたしの希望は同僚の司祭たちの行動を手本にしてフランスを去ることでした。しかし、わたしが不幸な誓約をした当時、わたしは、わたし以外に助ける者のない77歳になる病気の母の側にいました。わたしは人間的動機に屈したのです。」
- (10) この誓約の合法性はカトリックにおける長期にわたる討論の対象でした。エムリ氏はその合法性を主張しました。反対にボルドーの教区当局は国の立法権が介入したことで満場一致で処断しました。
- (11) 司祭叙階の書類は共和暦1年熱月8日(1793年7月26日)に、バザの小教区で、ボルドーでは次の霜月(1793年10月と11月)に請求されました。(イレール・ルリエヴル著、「ウルスラ会」45ページ)。この苦境を逃れるために、例えば、ジュリアク・ペルマンティエ師のように、ある司祭はそれらの書類を焼却しました。(司祭の宣誓撤回、1795年9月13日)
- (12) 宗教的儀式が公式に認められなかった時のことです。
- (13) 1795年9月5日
- (14) ウトー師、1795年9月4日
- (15) ジャンサクの主任司祭フィリップン師の宣誓撤回は1795年9月6日に行われ、9月20日にセント・ユラリ通りの礼拝堂で公表されました。
- (16) ルリーエル師はロンデル師からの極めて興味深い宣誓撤回書を全部公表しました。(殉教者名簿の新しい一ページ、272ページ) 教区の再組織にあたって、アントワン・ロンデル師はモンセギュールの主任司祭に任命されましたが、1815年11月16日に帰天しました。
- (17) バザの最後の司教であったドゥ・セン・ソーウル司教は1792年に帰天しました。同教区の総代理になったキュルテュール師はその後逮捕され、まず、アーの要塞に、次いでボルドーの孤児院に幽閉されましたが、1795年4月20日、ようやく釈放されました。
- (18) 1795年4月30日
- (19) イレール・ルリエーヴル著、「殉教者名簿の新しい一ページ」、22ページ。

(20) 8月は14通、9月は19通になりました。ルリエーヴルは前記引用書271ページに1795年の約50名の宣誓撤回者名を公表しました。そこには元修道女の宣誓撤回の記録も見いだされます。

(21) 市資料室

(22) 師が可能性を考えていたあらゆる場合に諸秘跡を受け、様々な手段で信者の信仰を勇気づけて、司祭の一般的な聖職を果たし続けていたことを述べることは不必要なことです。わたしたちは師の書類の中に、1797年信者のためのスケジュール印刷費の印刷者への勘定書を見いだしました。



第6章 未来の宣教活動除幕 (1795—1797)

市民憲章の不信、宣誓司祭の復権希望 ❖ 教戒師と悔悟司祭の復権
❖ 宣誓司祭の実情と失墜の理由 ❖ 宣誓の取り消し、告知、復権式 ❖
バザ教区の宣誓司祭 ❖ 迫害の再開と密かな聖職活動。

シャミナード師は公式の司祭職の他に特別な活動、すなわち、青少年の育成に従事していました。師は、本質的な魅力や特別な命召によってばかりでなく、革命の危機が終息しようとしていた決定的な時期に、教会の需要の正確な識別によって、青少年育成の活動に魅力を感じたのでした。この危機的な革命から生まれた新たな社会はキリストのおきてや哲人たちの法則を採用出来るのでしょうか。この質問への回答は当時20歳代に達した世代に関係するものでした。いずれにしても、青少年が無宗教の教義に基づく大革命の教育以外の別の教育を受ることが出来ないなら、代わりの選択は余りにも危ぶまれるものでしかありませんでした。したがって、教会の任務は、聖職の働きによって有害な影響から青少年を遠ざけ、ヴォルテールやルソーの理想よりも高い、そして、より確かな理想に彼らを挑戦させることでした。

シャミナード師はこの活動に生涯をささげました。恐怖政治によって加えられていた忌むべき支配がボルドーになくなって以来、青少年は師の関心事の対象になりました。しかし、多くの青少年にどのように接するかが困難な問題でした。早急により有効な結論を出すことが出来なかったので、少なくとも最初は、未来の宣教活動に協力出来る男女のエリアートの青少年を準備することを考えました。

この目的に到達する障害はありませんでした。青少年を引き付ける優れた才能に恵まれていた師は、当時から、周囲にたくさんの青少年の集まる中心になっていたからです。師は親しい談話やひそかな集会を通して、彼らの信仰やモラルがさらされていた危険に対して用心するよう指導していました。そして、宣教活動が彼らの徳の最良の保証であることを伝え、彼らに予定されている将来の役割を手ほどきしていました。

わたしたちは初期のこれらの弟子たちの何名かを知っています。まず、師が最大の信頼を寄せていた、極めて優れた性格の青年ルイ・アルノール・ラファルグです。師が亡命のため国を離れる時そのことをあかししたからです。彼の

従兄弟のレイモン・ラファルグも同様でした。次に挙げられるのはドゥニー・ジョッフルです。彼は将来「ガイヤルの聖司祭」の名でボルドー全教区に知られるようになり、シャミナード師を真に尊敬していました。彼の伝記で次のくだりを読むことが出来ます(1)。

「ボルドー到着後しばらくして(1796年ごろ)ドゥニーは、大きな危険に身をさらしながら優れた宣教活動をなしているという二重の評価を受けていたシャミナード師についてのうわさを聞きました。シャミナード師との最初の出会いは彼にとって幸運でした。やがて彼はシャミナード師の優れた聖性に気づきました。この有徳の勇敢な司祭との最初の対話の時から、その徳を模倣することを望んだこの青年は互いに理解し合い、意気投合することが出来ました。」

彼らは毎日会っていました。敬虔な本書の作者は次のように指導者と弟子たちの関係を描写し、シャミナード師が実践した熱心な宣教活動をわたしたちに理解させました。

「この二人の人が親密な宗教上の対話を通して共にくつろいだのは特に一日の疲れの後の夕方でした。一人は賢明な指導者の話しを聞くことを楽しみにし、もう一人は貴重な植物を育てるように若者の心を養うことを幸せにしていました。自分の言葉がそれほど好意をもたれたように感じていたこの司祭と、露の滴の下で開く花のように英知の教えに開花したこの青年のどちらがより幸福であったか、だれも述べる事が出来なかつたに違いありません。」

ドゥニーは自分の印象を父親に知らせて次のように書き送りました。

「わたしは探していた司祭を見いだしました。聖人のような方でわたしの案内者わたしの模範です。わたしは司祭になりたいと思います。この決心は決して動揺することはありません。もちろん、望んでもそんなに早く司祭になれるとは思いません。まだ困難な時代ですから毎日勉強を続けなければなりません。わたしがこの方に会えるのは夕方だけです。毎晚会えないことさえあります。この方はわたしにやがて四六時中一緒に住むようになるだろうと断言しました。したがって、わたしはその最初の弟子になるのです。このことはこの方の望みであり、わたしの望みでもあります。」

当時のシャミナード師の意向は事実このようなものでした。そして、このことをドゥニー・ジョッフルと分け合っていたのも確かでした。また、同じ時期に師の周囲には同じような意向によって刺激された他の青年たちも集まっていました。その中の一人はレーモン・ダミーと言い、司祭職を準備しており、その聖職を通じてシャミナード師を助けてました。やがて彼は司祭になり、ジロンド県のウルテンの

主任司祭として帰天しました(2)。更に、よく知られているもう一人、ギヨーム・ブエ師はボルドー出身で、1796年には既に30歳になっていましたが、青年としての敬けんな信仰を持っていました。他の二人の同僚のように司祭職を希望し、既に聖職者の位階の幾つかを受けていました。シャミナード師は、彼に従順の誓願を許可するのに十分強固な徳が備わっていると判断しました(3)。それは、神のおぼし召しであれば、将来もますます友情を固めるため師と弟子に用意された最初のきずなでした。事実、シャミナード師はギヨーム・ブエ師に大きな期待を寄せていたからで、また一方、彼も自分の師から離れないという希望以外の希望は持っていなかったからでした。彼は40歳を過ぎてもこの最初の関係の思い出を感動なしには思い出すことが出来ませんでした。彼はシャミナード師の晩年について次のように述べました(4)。「わたしたちは、わたしが神の祝福を悟ったことについて議論しました。．．．わたしは、あなたから頂いたご恩を決して忘れません。わたしたちの対話で、あなたはあたかも血液が循環するように神の平和を繰り返し話してくださいました。」

シャミナード師は男子青少年たちへの働きかけと同時に、同じ精神、同じ目的をもって女子青少年への働きに専念しました。師は困難な時代に作られたみ心の会によって完全に養成された協力者を得ることが出来ました。み心の会で実施されていた祈り、礼拝、犠牲は熱誠を燃え上がらせ、宣教師への関心を呼び覚まし始めていたからでした。1795年以来、老齢の司祭ミショー師に指導されていたエリザベス嬢やジャンヌ・ヴェンセン嬢たちは「み心の娘の会」と呼ばれました(5)。自らの召命を探していた他の女子青少年たちは、シャミナード師に光と指導を求めて来ていました。シャミナード師はその賢明さや知識、そして、その献身さで知られていたからでした。彼女たちの中で当然注目を引いたのはラムルス嬢でした。シャミナード師は彼女と知り合いになって以来、ドゥニー・ジョッフル師やギヨーム・ブエ師に寄せた同じ期待を彼女に寄せていたからです。

マリー・テレーズ・シャルロット・ドゥ・ラムルス嬢は司法職の上流家庭の出身でした(6)。彼女は1754年11月1日バルサクに生まれましたが、ボルドーで育ちました。彼女の母は、決して小説を読まないよう彼女に約束させました。それは聖書やキリストの模範、聖人伝等の読書によって彼女の知性を養うため余暇をより多く確保させるためでした。彼女は世間を知らなかったわけではなく、世間の人々とも交際し、彼らと共にいることを喜んでいました。しかし、自分が世俗に向いているとは感じませんでした。むしろ、カルメル会の観想を望んでいました。当時の彼女の指導者の意向は彼女の好みとは食い違っていました。神は、彼女に与えた賜物によりふさわしい生活に彼女を呼んでおられることが考えられたからでした。彼女は解放的で快活、大胆な性格の持ち主で、現実

的感覚の人でした。したがって、彼女はこれらの性格によって行動するよう予定されていたのです。しかし、彼女はこの活力をどのように活かすべきかまだ分かりませんでした。彼女は神のおぼし召しを待ちながらあらゆる慈善事業に献身していました。大革命によって家族の財産の大半が奪われたので、ボルドーから16キロ離れたピアンの田舎に家族と共に引っ越しました。彼女はランド地方の子供たちに要理を教え、秘かに司祭たちを迎えて、なお善行をなす手段を見いだしていました。彼女は、ピアンでは十分な活動が出来ないことを考え、ある程度変装して、徒歩でボルドーに行き、信仰を生きた司祭たちを助けるために刑務所などに忍び込んでいました。彼女は警備委員室にさえ忍び込むことに成功していました。それは、帳簿に記されていた次回の処刑者の使命を読み取り、なお時間があれば、そのことを当該司祭たちに知らせ、いずれにしても、彼らを断頭台から救い出すためでした。彼女自身2回逮捕されましたが尋問後釈放させました(7)。

1795年、彼女は、司祭の断頭台の処刑や他国への亡命のため自分の心を打ち明けていた司祭たちを奪い去られてしまいました。パンティエ師は断頭台上で犠牲になった司祭たちの一人でした。師は彼女に最後の祝福を与え次のように伝えました。「女性らしくではなく、雄々しく神に仕えてください。どうぞわたしのこの最後の言葉を記憶に留め置いてください。」彼女はこの勧めに最後まで忠実でした。また、他の指導者でセント・コロンブ教会の熱心な助任司祭のノエル・ラクロワ師はポルトガルに亡命していました。したがって、彼女はシャミナード師と出会い、師を良心の指導者に選び、最後まで師から離れませんでした。

1795年11月に再度迫害が起き、彼女は新しい指導者の助けを奪われてしまいました。しかし、彼女がボルドーにいた時は、「鑄掛け屋」シャミナード師の通りがかりを知らせてくれるよう家人に頼んでいました。それは、シャミナード師への何らかの用件がいつもあったからでした(8)。ピアンでは時々行商人に変装したシャミナード師を迎え入れ、小さな部屋で行われたミサにあずかることを楽しみにしていました。この小部屋は今日も大切に保存されています。

シャミナード師の指導の下に置かれた彼女は平凡な人ではありませんでした。このことを納得するには彼女の生活の規則を詳細に彼女に記録させていたシャミナード師からの手紙の幾つかのくだりを読むことで足りると思います。同時にわたしたちもそこからシャミナード師の教えや内的指導の全体の知識をくみ取ることが出来ます。次の手紙は1796年5月26日に書き送られたものです。

「キリストの平和、あなたは、あなたの身分と現在のあなたの内的な意向にふ

さわしい靈的活動のプランを描く希望をしばしばわたしに打ち明けましたが、本当にうれしく思っています。あなたは徳の面で幾らかの進歩を遂げました。神はあなたに、すべてを神に委ねるようにとの希望をあなたに吹き込んでいます。わたしは、預言者エリアのためにご自分で作った不思議なパンを食べるようにとエリアに勧めた天使と共に、次のように申しあげなければなりません。『あなたが歩むべき道のりはまだ残っています。』あなたは完徳の頂上である聖なるホレブ山に到着しなければなりません。しかし、それはあなたの本性や感覚、想像、精神の指図を受けるためではなく、特にあなたを支配することを望まれる神の指図を受けるためです。何とあなたの幸せは大きいことでしょう。あなたはその幸せをかいま見始めています。しかし、あなたはその幸せを味わう範囲だけしか分かることが出来ません。そして、この幸せはこの聖なる山の上でしか味わうことが出来ないのです。

この手紙の目的はあなたが生涯にわたって行うべきすべての事柄ではなく、ただ今守らなければならないことを伝えるためです。神のお恵みとあなたの誠実さによって、あなたは、聖霊がわたしの聖職を通してあなたに命ずることをきちようめに守ることが出来るに違いありません。そして更に、あなたに伝えることが望ましいことを考えることにしましょう。あなたは、この手紙を受け取ったらこの中に記された様々な点に関してあなたの意見を添えてまたわたしまで送り返してください。その間に、今ここで簡潔に記すことが出来なかったことを少しづつ説明するにしたいと思えます。こうしてあなたは靈的プランを立てることが出来るに違いありません。このことをわたしたちは『指導』と呼んでいます。

1. あなたは本性的理性的な生活と靈的超自然的生活間の相違をまだ十分把握していなかったように思います。

2. あなたが行っている諸徳はまだ十分ではありません。それは、あなたがこれらの徳の実践を恩恵の鼓吹によるよりも理性や想像に合わせているからです。

3. わたしたちの心が、悟性と記憶と意志の三つの力ないし能力によって働くように、わたしたちが超自然的靈と呼んでいるものは、洗礼の時わたしたちが頂いた三つの能力、すなわち、信、望、愛によって働くのです。したがって、あなたに超自然的な徳を実践させなければならない力があなたの内に刷新されるようしばしば神に祈らなければなりません。

4. あなたの想像はあなたに大きな影響を与えています。それがあなたを動揺させる例の不安の主な原因です。

5. 朝晩の通常の祈り、あなたが参列する共同の祈りや聖務日課、聴罪司祭から頂く償いの祈り、短い祈りであれば他の何らかの信心会の祈り等を除いて、すべての口とうの祈りを免除します。

6. まず、朝の祈りにあわせてたっぷり15分間の念とうをしてください。念とうを始める時、心の中で神を礼拝しながら、「主よ、灰であり、ちりに過ぎないわたしはあなたの前にぬかずいています」と唱えてください。それから、ゆっくり使徒信経を唱えてください。(あなたが一人の場合は、礼拝の行為をなすためにひれ伏し、次にひざまずいて両手を広げて使徒信経を唱えてください。) こうした準備が終わったら最も深い潜心の内に神の前にぬかずいてください。この潜心の中であなたが達しなければならぬ心構えは信、望、愛、そして、神のみ旨への委託の素直な心構えです。そして、潜心の内に一日を過ごし、信仰の動機によってしか行為しないというお恵みを与えてくださるよう神にお願いし、念とうを終わってください。それから、使徒信経を一句一句唱えてください。

7. 夕方、少なくとも15分間、同じ念とうを繰り返すよう努力してください。」

「靈的読書、良心の糾明、秘跡の拝領、すなわち、信仰生活を維持することが出来る靈的修行に関する勧めを守ってください。

身体に対してなすべき配慮も忘れてはなりません。シャミナード師は次のように続けました。「身体の維持に関しては必要なすべての食べ物を取ってください。それは本質的にあなたに備わるべき体力を維持するためです。守るべき大齋日や何らかの特別な理由で大齋が許可された場合を除いて、いつも3度の食事を取ってください。わたしは苦行用の下着を着けることやむち打ちのような特別な償いはもちろん、長すぎる夜ふかしも許しません。しかし、その代わりに内外の大きな犠牲の実践を勧めます。このことはあなたの念とうと潜心を保つ配慮の裏りとなるに違いありません。」ラムルス嬢は、服装に関して、少女時代からカルメル会士ノルベル師から次のような極めて賢明な基準を教えられました。「流行のファッションを着用する先端の人々の一人でも、最もみすばらしい服装の一人であってもなりません。流行が過ぎたにしても、流行のファッションを着用することを期待してはなりません。あなたの服装がどうであれ、服装はあなたを目立たせるものではありません。」シャミナード師はこの教えを高く評価し、これを守り続けるよう彼女の償いの業を勇気づけていました(9)。

ラムルス嬢は、それまで、判断の欠如によってではなく、過敏すぎる良心から来る細心によって非常に苦しんでいました。彼女は最善を尽くしたとは決して考えなかったからです。彼女はノエル・ラクワ師によって指導され、次のような方針で要約された規則の中でしか、わずかな休みも見いださせませんでした。

「あなたは、実行しなければならぬと確信することのみを実行してください。聖体の前で約束する自信があっても、そのことがどういうことかを相談することがなければなりません。」彼女はこれらの規則を次のように全面的に承認したシャミナード師に従いました。「どうぞこれらの規則を素直に守ってください。わたしはあなたが立派に念とうが出来ようになり、神との真の一致によって神の子としての真の自由を得ることが出来るに違いないと思います。」

これらの規則はシャミナード師がこの恵まれた魂にどのような敬の念をもっていたかを理解させるものです。師は、神が哀れみの偉大な計画に彼女を予定しておられたことを見抜いていたからです。彼女は信仰の目覚めを告げる暁に、宣教活動を実践するためにみ摂理によって選ばれた道具の一つだったのではないのでしょうか。師にはこのことを信ずる動機がありました。そして、それらの動機は1796年の終わりごろ指導した黙想の折に力強くなりました。この黙想にはアンジェリック・フェテン嬢とマルグリット・ベドゥレ嬢のまれにみる立派な二人が参加していました(10)。師は彼女たちが神の栄光のために献身する希望に燃えている魂であると確信しました。彼女たちの犠牲的精神に感激した師は、彼女たちを結集して宣教活動を実践する団体の中核を作ること考えました。それは適当な時期が到来した時、無学な人々に信仰の基礎知識と福音の原理を教えて、彼らを照らし、信仰に復帰させるためでした。そこで、師は、彼女たちをこの宣教活動に準備し、その熱誠を養うことにして、フランス国民の犯した罪を償い、彼らを救うために犠牲として自らをイエスのみ心に奉獻することを勧めました。

この奉獻の1箇月後ラムルス嬢によって次のように記されたすばらしいくぐりぐりが伝えられています。そして、これらのくぐりぐりは、神の正義をふさわしく満足させることへの人間の意志の不足によって拘束されても、神の哀れみとマリアとヨゼフの助けへの無限の信頼によって満たされた意識に気づかせるものです。「イエス、マリア、ヨゼフ、どうぞわたしを愛のきずなで結びつけてください。」神ははしための祈りを聞き入れてくださったように思われました。それは、彼女が引き受けた愛のきずなの重さがずっしりと感じられ、その後の生活は実際に焼き尽くすいけにえの生涯だったからです。

目下のところは神の国の普及のために働くことが唯一の手段でした。信仰の光でかいま見られた創立の時期はまだ到来していなかったからでした。まかれた種は芽生える前に地の中に隠れており、冬が過ぎ、春のすばらしい日差しが蘇らなければなりません。ようやく革命が終息したので、信仰の種は芽生えて早速開花し、満開になるに違いありませんでした。隠れた祈とう所の中で始められた男女青少年の集会からマドレーヌのすばらしいコングレガシオンやその

他の幾つかの福音宣教活動が生まれました。1796年の黙想から三つの修道会が生まれ、三つともイエスのみ心にささげられました。その一つはファテン嬢の修道会で、み心の会と命名され、その第一の目的はイエスの至聖なるみ心に奉獻することを渴望する人々を結集することでした。亡命によるシャミナード師の不在の間、その創立はブレッシュマン師によって繁栄に導かれました。後ほど、シャミナード師とブレッシュマン師は出合うことになりました(11)。第二の修道会は1803年に、ボルドー外で、大革命中ボルドー市内に隠れていた一司祭シャルル・バッロー師の協力を得たベドゥレ嬢が出身地のセントンジュ県のポンで創立したものです。この修道会は至聖なるみ心のウルスラの娘の会と呼ばれました(12)。最後に、ラムルス嬢はシャミナード師の指導の下にボルドーでミゼリコルド会を創立しました。この会も至聖なるみ心に奉獻されました。災難に遭った日、夕方5時の礼拝のための信者の集会は続けられ、今日なおその会則の一部となっています。

しかし、これらの貴重な計画の実現を遠ざけた大異変に立ち戻らなければなりません。1797年の春の選挙で上院及び500議席の下院で穏健派が議席の過半数を獲得しました。秩序と自由の回復が期待されました。8月24日の政令によって追放されていた司祭たちはフランスへの帰国が許可されました。祖国を立ち去らなかつた司祭たちも公に聖職に復帰しました。そこで、シャミナード師は再度セント・ユラリ教会に落ち着き教会を再開しました。

しかし、まさに権力の座から脱落寸前にあることが分かったジャコベン党は暴力手段に訴えてオーギュロー将軍によってパリを占領させ、49県の選挙を妨げ、カルノとバルテレミの二人の執政官を追放しました。共和暦実りの月18日(1797年9月4日)、哀れな戦勝者たちは直ちに8月24日の政令を撤回し王政に対する恥ずべき宣誓を要求し亡命者たちに対する法律を再度実施しました。新政令の第5条はフランスに帰国した司祭たちを予測したものでした。それは、彼らが24時間以内にその市町村から離れ、違反すれば処罰される条件で、2週間以内にフランスの領内から離れることを厳命していたからです。

クーデタがあまりにも突然起きたのでシャミナード師はこれを回避する余裕がありませんでした。政令はセント・ユラリ通りのシャミナード師の住居にも伝えられました。師はその手続きにもかかわらず亡命リストから削除されていなかったため、早速政令に触れることになりました。すなわち、師は亡命していて、帰国したものを見なされていたからでした。師が全力を傾けていた申請も無駄だったわけです。法律に従うよう強く命じられ、9月11日付けでバイヨンヌ経由でスペイン行きのパスポートが交付されました。

シャミナード師は24時間以内にボルドーを離れることを余儀なくされたので、最後の準備をなすために郊外のメリニャックに赴きました。それは、亡命のリストからの削除の要請を続ける配慮をルイ・ラファルグ師に依頼し、そのための委任状を渡すためでした。そして、1797年9月16日、ギヨーム・ブエ神学生を伴って亡命の途につきました。彼はシャミナード師から決して離れようとしなかったからです。

出発の前晩シャミナード師はラムルス嬢に次のような手紙をしたためました。彼女は常に冷静で自己抑制が出来、何らの事件によっても混乱せず天の御父のみ旨に素直に身を委ねていました。

「わたしたちは一度は死ぬこととなります。このことは真実です。このことがわたしたちに知らされこれに備えるようにどれほど多くの警告が与えられていることでしょうか。そのおのおのが一種の死の警告です。飲み込まれそうに思われる混乱の中で忠実な魂は何をしなければならないでしょうか。それは信仰によってき然として耐えることです。信仰はわたしたちに神の永遠の計画を熱望させ、何事も神を愛する人々の利益になることを保証するからです。」

内外の試練に打ちのめされていた彼女の苦しみを慰めることしか考えていなかった師は、自分自身の苦しみを忘れて次のように続けました。

「そうです、御主は決してあなたをお見捨てにはなりません。もし、天の御父のおぼし召しがなければ1本の髪の毛さえ人の頭から落ちないとするなら、あなたの生活を揺さぶる絶え間ない有為転変、絶えず追い迫ってわたしたちをろうばいさせる内外のあらしは、神があなたに対して抱いておられる真の愛のあかしです。それは救いの印であるとさえあえて申しあげます。まず、神はあなたの意志を清めすべてのものからあなたを完全に離脱させ、あなたに対するみ摂理のおぼし召しについて判断する本質的に純然たる理性から、あなたの考えを放棄させるための手段としてこれらの苦しみを絶えずあなたに用意されているのです。そして、第二の手段として、キリスト教のもっともすばらしい諸徳をあなたに実践させるのです。これらの諸徳は神の御手への信頼に含まれています。特にもっとも完全な信頼から痛みや不安、疑念のみが生じた場合がそうです。あなたは信仰によってすべてを見なければならぬとしばしばあなたに伝えてきました。また、ある種の信仰の念とうさえ勧めました。念とうはあなたを支え、あなたを徳に進歩させるすばらしい手段であると確信しています。また、念とうは同時にあなたの内性に一種の浄化をもたらすに違いありません。わたしがいつもあなたに勧めてきた質朴さによって行動するために、あなたの想像をかきたてるあらゆる考え、理屈、そして、感情を捨ててください。」

そして次のように結びました。

「もっぱらみ摂理のおぼし召しによる私たちの遠隔の距離が、あなたへのみ摂理の計画の完成が損なわれることのないようにとわたしたちの共通の御父にお願いいたします。どうぞ、毎日聖なる乙女マリアの連とうを唱えてください。あなたの霊的な父としてイエス・キリストのお恵みと平和をお祈りします。」

シャミナード師がボルドーを離れた時、セン・ローランには年老いた父親しか残っていませんでした。母親は恐怖政治の終息数日後、すなわち、1794年9月9日に既に帰天していたからです。しかも、父親との別れはそれが最後でした。この世では再び会うことが出来なかったからです。一人取り残されたブレーズ・シャミナード氏はセン・ローランの地所を売却することを決意し、その売却後ペリギュールの子息フランソワの下に帰り、1799年3月4日その腕に抱かれて帰天しました。



注

- (1) ドウガン師著、「ジョップル師の生涯」、44ー45ページ、1862年、ボルドー
- (2) 1842年5月1日、77歳で帰天しました。
- (3) セルマン師の覚え書き。ギヨーム・ブエ師はレーモン・ダミ師のように聖職の実践においてシャミナード師を助けました。ブエ師は1797年の洗礼台帳に証人あるいは代父として記されていたことが知られています。
- (4) 1846年8月20日
- (5) イレール・リエーヴル著、「ウルスラ会」、49ページ
- (6) プージェ著、「ラムルス嬢の生涯」、1857年、ボルドー
- (7) ラムルス嬢の伝記には、彼女が最初警備委員会に召喚されたことが次のように記されています。「委員長は彼女を尋問し、次のようにぶっきらぼうに問いました。『あなたは司祭を隠したことと貴族であることから訴えられています。何か答えることがありますか。』そこで、彼女は極めて落ち着いて次のように答えました。『確かにその通りです。でも、わたしにも質問させてください。どうしてあなたの顔が目立つのか教えてください。』『あなたの質問は冗談でしょう。あなたには分かりませんか、それはあざだ。』と答えました。『それでは、あなたのほほのあざはどうして出来たのですか。』『どうして出来たかって、このように生まれついたのだ。母がこのように産んでくれたのだ。』『そうですか、わたしも同じです。母がわたしを貴族に産んでくれました。』出席者は大笑いしました。そこで委員長は、『お前はいい子だ、もう帰ってもよい』といて彼女を釈放しました。」(ラムルス嬢の生涯、34ページ)

(8) ミゼリコルド会の最も古参の修道女で、数年前に帰天したシスター・セラフェンの思い出。

(9) ラムルス嬢の生涯、16ページ。次のくだりはカルメル会士ノルベル師の勧めです。「あなたは衣服を着け終わったらちょっと鏡をのぞいて自問してください。わたしが往来を横切る時、人々がわたしについて、何と素敵なんだろう、と言ったとしたら。この場合あなたは、わたしの身繕いは何か余り派手過ぎると結論づけなければなりません。したがって、質素にしてください。反対に人々が、何と無造作な服装でしょうと言ったとしたら。その場合は、そうした服装に何かを加えなければなりません。人々が何ら反応を示さなかった場合、あなたは人々の賞賛も非難も受けることなく、彼らの中を目立たずに通ることが出来るのではないのでしょうか。大切なのはこの点です。」

(10) ラムルス嬢の生涯、51ページ

(11) み心のコングレガシオンの創立は1799年11月の第一金曜日でした。このコングレガシオンは創立当初からほとんど教育事業に専念しました。同会は地方で確かな発展を遂げました。マリー・ユラリ・アンジェリック嬢は、国王の顧問でボルドーの公証人の娘でした。彼女は1773年3月25日に生まれ、1855年8月28日に帰天しました。(ボルドー教区教会暦、196ページ、1870年版) ベルトラン著、「神学校史」2巻、107-109ページ参照。

(12) 本会はなお存続しています。

第7章 亡命 (1797—1800)

スペインへの脱出 ❖ 兄ルイとの再開 ❖ オーシュの大司教 ❖ バイヨンからサラゴサへ、柱の聖母 ❖ サラゴサ市 ❖ オーシュの大司教と亡命司祭 ❖ 亡命司祭に対するスペイン政府のおどし ❖ シャミナード師兄弟の神への信頼。

シャミナード師はバヨンヌ及びセン・ジャン・ドウ・リュ経由でスペインに亡命することを考えていました。師に思いがけない慰めが用意されていたのはこれら二つの町の最初の町バヨンヌで、兄のルイ師に会ったことでした。

ルイ師は4年以上もスペインのオランスで過ごしていました。その間、身内からの知らせなどほとんどありませんでした。しかし、亡命のつらさも、オランス市のすばらしいケヴェド司教の親切な歓待によってほとんど和らげられていました。同司教はフランス人の亡命司祭たちに対していかなる賞賛にも優る愛徳を示しました。司教は彼らをその教区に歓待したばかりでなく、なお司教館を開放し、司教区の収入を彼らに分け与えました(1)。司教はルイ・シャミナード師に司教館の一室と食堂の一席を割り当てました。もちろん、この気の毒な亡命司祭も恩人の司教に恩返しするように努力しました。ヨゼフ・シャミナード師は兄のルイについて次のように証言しました。

「兄は自分の身分に与えられた慈善事業や信心業のすべての活動に協力し、現役の活動司祭になることを望みました。兄は頂いたものは皆施していたのでお金には常に困っていました。しかし、み摂理によって助けられていました。したがって、兄はこの敬けんな駆け引きによって慈善事業を倍増したわけでした(2)。」

あるフランス人司祭アストルガ師によって1795年6月9日付けで書かれた手紙は、ルイ・シャミナード師がオランスに滞在中、イエズス会の復興に関わっていたことを伝えていました(3)。ルイ師がこのイエズス会にそれほどの関心を抱いていたことには驚かされますが、それは、長兄ジャン・バプティストの模範と対話によってイエズス会に好意を持ち、これを大切にしなければならないことを知っていたからでした。

このイエズス会復興計画の中心人物はダリエスというタルブの司祭でした。ダリエス師はトレドに住んでいたヴァンデー人司祭ルイ・マリー・ボードゥワン師

を主要な補佐にしていました(4)。復興されたイエズス会は人々から無視されないためにマリア会を名乗っていました。スペイン人司祭の中には既に志願者も修練者もいました。不幸にして、ダリエス師にはこうした事業を立派に指導するための力量が足りませんでした。したがって、その創立はうまくいきませんでした(5)。

1797年の夏の間、フランスの国状がより安全になったことが分かったので、多くの亡命司祭たちは祖国に帰る決心をしました。ルイ・シャミナード師もその中の一人でした。歓待されたスペインを去る前に、師は感謝のためにセン・ジャーク・ドウ・コンポステルに巡礼し、コロニュでセン・ジャン・ドウ・リュ行きの船に乗船しました。

同港で下船してフランスの地に一步踏み入れた時、師の驚きと苦悩はどれほどだったことでしょうか。それは、非宣誓司祭たちに対するあらゆる迫害の法律を厳密に再施行するというので、共和暦みのり月19日(9月5日)付けで政令が交付されたことを聞いたからでした。ヨゼフ・シャミナード師は次のように話しました。

「人々の間で不安と動揺の内に語られていたこの思いがけないニュースにも、兄の落ち着いた心は何ら乱されたようには思われませんでした。兄は少しも不平を漏らさなかったからです。いち早く迫害者たちの手先から逃れなければならなかった兄は、ある立派な信者の夫人の家に迎えられ、そこにかくまわれました。バヨンヌには信者を助けるために多くの司祭が隠れいましたが、兄は彼らに相談することもせず、また、スペインに亡命する決心もつき兼ねていました(6)。」

ルイ・シャミナード師がみ摂理によってバヨンヌに導びかれたのは他の目的があったからだと思います。それは、ちょうどその時弟のヨゼフが当地に到着したからでした。シャミナード兄弟は5年前別れたばかりだったので抱き合って喜びました。しかし、再会の感激もそこそこに兄弟はこれからの方針について話し合いました。バヨンヌの町には司祭たちが聖職を行うため多数潜んでいました。したがって、兄弟はスペインに亡命せざるを得ませんでした。しかし、スペインのどこに。また、オランスに帰るべきでしょうか、あるいは、近い将来訪れるに違いない平和を期待して、フランスに最も近いどこかの町に落ち着くべきでしょうか。ヨゼフは前者を選ぶことに傾いていました。そこで、サラゴサへの亡命を提案しました。この都市はフランス大革命の当初から多くのフランス人司祭たちが亡命していたからというより、スペインでも特に至聖なる乙女マリアにささげられた都市だったからです。このサラゴサでは特に柱の聖母像が崇敬されていました。

ヨゼフ・シャミナード師が亡命の余暇を利用して、聖母への信心を普及するため熱心にお祈りしたのもこの聖母像の足下でした。ヨゼフは兄を説得するのに苦勞しませんでした。ルイ師は少々決め兼ねていましたが、オーシュの大司教の同意によってその迷いは取り除かれることになりました。それは、大司教自身サラゴサへの道を再びたどることになったからでした。

オーシュの大司教ドゥ・ツール・ドゥ・ペン・モントーバン司教は当時の司教団の中で最も優れた人物の一人でした(7)。あらゆる不正な要求に抵抗する精神の強さはもちろん、その思想の穩健さ、その見解の深さは相当なものだったからです。大司教が教区を去ったのは(1791年8月)訴追される恐れがあったからでした。大司教はまずスペイン領ピレネのアラン溪谷地方に落ち着きましたが、フランス国境から遠ざからざるを得なくなったのでサラゴサに教区行政の中心を置き、既にタルブの司教総代理になっていたドゥ・カステラン師に全権を委任しました。大司教はモンセッラの修道院の潜心と清貧の中に退き、亡命司祭たちを励ますためか、あるいは、黙想の説教のためにしかそこから出ることはほとんどありませんでした。大司教は1795年の暴動鎮圧の最初のうわさでピレネを超えましたが、友人たちは大司教をもっと安全な国に伴うため大司教を説得しなければなりません(8)。大司教は1797年に帰国の企てを新たにし、バヨンヌで2个月前から大司教座の町に帰るための好機を待っていました。しかし、ちょうどその時迫害がまた始まりました(1797年9月)(9)。

モントーバン大司教は個人的にはシャミナード兄弟には面識がありませんでした。しかし、ヨゼフ・シャミナード師についてはその高い評価を伝え聞いていました。1792年来司教が不在であったバザ教区はオーシュの大司教座の管轄下に置かれました。こうした首都大司教座との関係から、バザ教区の司教総代理のキュルテール師は、ヨゼフ・シャミナード師の熱誠と慎重さをしばしば大司教に報告していたからでした。師は市民憲章宣誓撤回の用意が出来ていた司祭たちをシャミナード師の下に差し向けていました。こうしたことで、大司教は自らの協力者の一人であったヨゼフ・シャミナード師をもろ手を挙げて歓迎し、シャミナード兄弟に自分と同じようにサラゴサに行くことを勧めました。

シャミナード兄弟は大司教より先にバヨンヌを離れました。ヨゼフのパスポートが切れかかっていたからでした。亡命を余儀なくされたヨゼフにとってはもちろん、違法にフランスに帰国し、たまたま弟に会って驚かされたにしても、外国追放におびやかされたルイ師にとっても国境超えは困難を極めました。しかし、兄弟の旅行者はみ摂理によって助けられました。兄弟がビダツソア河岸に到着した時、折りしも乗馬の人々が橋に踏み入ろうとしていたので、二人はその中に紛れ込み、だれにも気づかれないで橋を渡ることが出来ました。それから、パン

プロナ市に入り、ナヴァル地方の山地を通ってエプロ河の豊かな溪谷を下って、1797年10月11日にサラゴサに到着しました(10)。

その日はまさに柱の聖母の大祝日の前晩でした。わたしたちは、シャミナード兄弟同様サラゴサに亡命していたアジュネ地方出身の一司祭が述べた次の詳細なくだりを通じて、兄弟が目撃したこの祝日の情景を想像したいと思います(11)。

「わたしは10月12日、柱の聖母の光栄のための最高のすばらしい行列を見ました。この行列は前晩市内のすべての教会の鐘の音で知らされていました。また、行列の前晩とその翌日には、祝いの12のかがり火がこのすばらしい、荘厳なバジリカの前にずっと燃え盛っていました。バジリカの中には1200個以上の銀のランプが一晩中ととり、すばらしい音楽が絶えず丸天井に反響していました。．．．朝の2時にミサが始まり、．．．150キロ、160キロ先から群集が参集していました。

午後3時に行列が始まり、市内のあらゆる小教区共同体が教会旗や十字架、聖遺物を捧持して団体で参加していました．．．人々は40個の銀製の聖人の遺骨箱に見とれていました．．．わたしが辛抱強く行列参加の司祭を数えたらその数は873名でした。フランス人の司祭は、各教区を代表するスータン姿の8名か10名の司教総代理しか参加出来ませんでした。それは、すべてのフランス人司祭が参加したら、行列は延々と終わらなかったに違いないからでした。多くの聖職者が聖母の上にかざした天蓋を捧持して運んでいた柱の聖母像は行列の最後尾でした．．．(12) その夜、新たな行列『いと尊きロザリオの元后』の行列がスタートしました。それは信徒団体から認められた無数の大人と子どもの行列で、各人剣を携え、2キロの燭台を運んでいました。」

その数日後、すなわち、死者の記念の翌日、亡命司祭たちは新しい祝日、すなわち、サラゴサの殉教者たちの祝日に参列しました。聖人たちの遺骨はイエロニメットの教会に安置されていました。たとえ、フランス人の司祭たちに習慣付けられていた『フランス的壮麗さ』(13) が不足していたとはいえ、これらの純粋で深い信仰の行列は彼らの亡命の最初の苦悩をやわらげました。そして、彼らはすばらしい歓待を受けました。様々な事件について十分知らなかった住民たちは、これらの外国人たちを不信の目で見たり、迫害の時に信者の群れを置き去りにしたことを非難する状況ではなかったからでした(14)。このころから人々は彼らの祖国で彼らが置かれていた実状をよりよく理解することが出来、まれな例外は別として(15)、彼らに同情を示し、聖職者たちは歓待されました。亡命者たちの団結を恐れて様々な地域に彼らを分散させていた政府も、小人

数の大都市への滞在のみは許可し、その厳しさを緩和していました。したがって、シャミナード兄弟も迫害されることなくサラゴサに見を落ち着けることが出来ました。40年後、今度は亡命スペイン人司祭たちがフランスに避難してきた時、シャミナード師は彼らをボルドーの修道院やフランシュコンテ管区の施設でさえもろ手を挙げて歓待しました(16)。シャミナード師はある院長に次のように書き送りました(17)。「あなたは出来る限り、喜んで、あらゆる相談に乗ってください。この不幸な方々を歓待するのは極めて当然なことです。かつて彼らはもろ手を広げてわたしたちを歓迎したからです。」

それから10年後、アラゴン王国の旧都で、フランス軍に対する英雄的抵抗によって永久に忘れがたい本拠地として全世界の賞賛を博することになったサラゴサ市は、人口40万か50万の都市で、通りは狭いが真っすぐで、次ぎのような有名な建物がありました。エルベ河上の古い橋、カテドラル、柱の聖母のバジリカ、多くの教会や修道院、商人たちの市場、城壁外れにほど近いアラゴン諸王が戴冠式を行った旧イスラム教寺院、ローマ皇帝ディオクレティアンの迫害による殉教者たちの聖遺物が納められている地下聖堂のあるサンタ・エングラシア大修道院等です。半径12キロ以内にある市街地とその近郊にはすばらしい遊歩道があり、その奥には冒険することが余り好まれなかったアラゴン地方の原野が広がっていました。

亡命者はかなり多数にのぼりました。国情が新たな亡命者を受け入れるにふさわしかったからでした。サラゴサにはペリゴル地方の司祭たちやボルドー一円の司祭たちが亡命しており、彼らの中には商売の関係でサラゴサに定住し、気の毒な亡命司祭たちのためにその全財産を提供した靴屋のジャック・ピノ氏や、銀行家のラプジャード氏、また、『ボルドーの摂理の会』を創立したラランヌ夫人とその兄弟で宣教地で帰天した教会参事会員デュドゥワン師等がいました(18)。誠実な思いやりが亡命司祭たちに大きな役割を演じていたわけです。彼らの中の一人ベース師は次のように述懐しました。

「亡命司祭たちはこの孤独の中で、その喜びも悲しみも、資財も貧困も共に生きることしか出来ませんでした。したがって、すべてを共同にしていました。フランスからの手紙やニュースは、これに関心のある兄弟のように、彼らを喜ばせたり悲しませたりしました。彼らは散歩も宗教上の儀式への参加も一緒でした。こうした聖職者の友情は彼らの心を捕らえることになりました(19)。」

オーシュの大司教はこの亡命司祭社会の中心でした。大司教は10月20日ごろサラゴサで亡命司祭たちと合流しました(20)。大司教は第二回目の亡命でしたので出来るだけ彼らの中に住み、その生活を分かち合っていました。大

司教は亡命司祭たちからばかりでなく、全住民からも尊敬をもって親しまれていました(21)。1795年1月、第一回亡命期間中大司教はフランス人司祭たちの黙想の指導をしました。その思い出は1797年の今回の再度の亡命でも新鮮に残っていました。今回も亡命司祭たちの黙想のために何箇月も時間を割かれました。このことはシャミナード師にとって他の何よりも貴重なものでした。シャミナード師は大司教と親しくなり、この時から大司教に変わることのない忠誠を誓いました。一方、敬けんな大司教はこの若い司祭を自らの協力者として重視することを考えるほど深い尊敬と好意を示しました。大司教はシャミナード師と長時間対話を交わすことがありましたが、この会合には大司教の亡命後は書簡によって親しく連絡をとり続けていたタルブ教区の二人の司教総代理のドゥ・カステラン師とプラデール師もしばしば参加していました(22)。

1798年3月、デュ・ラ・ツール・ペン司教はカタルーニヤ地方に再度亡命しましたが、その出国の直後不安なうわさが町中に広がっているのを耳にしました。それは、新任のフランス大使ツリュエグによって完全に影響されたスペイン国王が、スペインから気の毒な亡命者たちを強制退去させる意向を持っているといううわさでした。そのことは間違いではありませんでした。1798年3月27日、弱腰のシャルル4世国王が表明した次の承認書が交付されたからです。「わたしはすべてのフランス人亡命者が出来るだけ短期間内にわが国から退去することを命令する。しかし、気の毒な彼らのことを考慮して、今日まで彼らに示した歓待を完全に拒否しないため、希望者にはマジオルカ島に移動することを許可する。彼らはそこで友人や両親から援助を受けることが出来るに違いない(23)。」このように、フランス革命政府は亡命司祭たちを歓待した友好国内までその犠牲者たちを追跡したのです。

不安になった彼らは、わたしたちはどうなるのでしょうか、とサラゴサでささやき合っていました。4月18日、オーシュの大司教はモンセラで、新たな事態に備えて指示と勇気を与えるためカステラン師に書き送った手紙に、「この手紙がサラゴサのあなたに届かないのではないかと心配です」と付け加えました。亡命司祭たちにとって、4月の月は苦しい待機の内には過ぎ去りました。国王の布告書には出発の時期が明記されていなかったからです。したがって、彼らは一致して事態の推移を待つことを決意しました。好機をねらいながら何も失うべきでないと判断したからです。5月になって、政府が国王の命令を実施するのにいかに緩慢であるかが分かった時、彼らは安心して始めました。フランス大使ツリュエグの解任がこうした希望を裏付けることになりました。すなわち、すべてが予備的な手続きに限られたからでした。すなわち、当局の係官はサラゴサの亡命司祭たちを出発させるために、それぞれのカテゴリーに分類し、パスポートを交付しましたがその使用開始義務を延期したからでした(24)。

オーシュの大司教は亡命司祭たちの勇気を支え続け、彼らに勧めを与えることを惜しみませんでした。5月28日、カステラン師には次のように書き送りました。

「ようやく落ち着いたようですね。時間の余裕を十分得たことになります。天候が和らぐのを希望しなければなりません。急がないでください。大切なことは余り目立たないようにすること、そして、散歩の時もグループを組まないことです。」

6月に亡命者たちの間に深刻な不安が走りました。国王の布告がマドリードで厳しく実施されたからで、すなわち、6月13日に315名の司祭がバルセロナからマジョルカ島のパルマ向け出港したからでした。しかし、このことはフランス政府にうわべを繕うことを目指した単独の処置であったことが分かったので信頼は回復されました。

地方では信仰に対する寛容さが日増しに広がっていきました。国王の布告は60代の亡命司祭や身体障害者の司祭たちに対しては緩和され、8月には、それが廃止されるまでには至りませんでした。サラゴサからはだれも去りませんでした(25)。大半の亡命司祭たちに対しては事態が次のように折り合いがついたからです(26)。「亡命司祭を国の奥地に退去させるか、あるいは、マヨルカ島やカナリヤ島に送るという国王令の宣言に対して、彼らを保護した家庭、また、しばらくの間でも司祭たちの不幸や開放的な気立てのよさを評価した友人たちは、興奮して行動に立ち上がったからです。すなわち、この生命に関わる旅行の危険性が医者や市長、既に常連の集まりとなっていたフランス人司祭たちの友人、または、彼らの毎晩の集まりのゲストであった友人たち自身によって証明されたからでした(27)。スペインの行政において、ある種の家父長制度を思わせる温厚で寛大な習慣のおかげで、地方の当局者はこの危険性をごく普通に納得しました。たとえ、そうでなくても、危険は排除されました。」

翌年の春ごろ、新たな布告が交付され、新たな不安に見舞われました。しかし、それはより安全な処置をなすという寛大な新たな解釈でした。カステラン師は次のように書き送りました。「命令に従うことを免れるために軽い病気を口実にしても、政府は極めて寛大に、好意的歓待を実施しました。」師は、「このことはだれも移動することはなかったことを意味します」と付け加えました(28)。サラゴサのすべての亡命司祭にとっては数日の不安で済みましたが、人々はヨーロッパ全体の動きに釘付けでした。フランスを取り巻く国々に勝利した大革命は短期間内にヨーロッパの盟主になれたのでしょうか。最も危機的な時期は教

皇ピオ6世聖下のおもいがけない帰天(1799年8月26日)に続く時期でした。思想家たちは競って、教皇政治は消滅した、「この制度は万事休すだ」と言明したからでした(29)。

こうした変動の中で、サラゴサの亡命司祭たちは祖国の救いのために熱心な祈りを神にささげること止めませんでした。オーシュの大司教はイエスのみ心に対する信心を特に要請し、また、「スイスのフリブール市で聖人のようにして帰天したトラピスト会士によってこうした時期のために作られたすばらしい祈り」をささげよう要請しました(30)。

シャミナード兄弟は同僚の亡命司祭たちの様々な不安な気持ちを分かち合い、彼らのすべての祈りに参加していました。いずれにしても、シャミナード兄弟の態度はみ摂理に対する絶対的な信頼でした。彼らの気持ちは、シャミナード師が当時の実状について残した手紙や思い出に反映していました。シャミナード師は兄ルイ師の追悼演説で次のように述べました。「兄がサラゴサに滞在中、スペイン国王から2回にわたって、すべてのフランス人を離島に移送するという極めて厳しい命令が交付されました。しかし、兄は決して困惑せず、つぶやきませんでした。」また、ラムルス嬢に対しては次のような極めて意味深長な言葉を使いました(31)。「わたしは、わたしの意向が神のみ旨に完全に一致する時しか幸せにはなれず、平和を保つことは出来ません。すなわち、わたしたちはみ摂理の配慮に従う時のみ様々な出来事に左右されない平静さを保つことが出来るのです。」

シャミナード師の忍耐は、すべての亡命者の共通の苦しみに加えて、兄のルイを亡くしはしないかとの不安を感じた時、特に試されることになりました。兄の長期の、そして、苦しい病気によってその生活がおびやかされたので、師は数箇月の間兄の看病をしました。ところが、父の帰天(1799年3月4日)によって打ちひしがれた悲しみを兄弟で分かち合うためかのように、兄の病気は回復しました。こうした試練の積み重ねの中で、兄弟は神のより豊かな哀れみへの希望の内のみ生き、み摂理の時が訪れるのを忍耐をもって待ちました。彼らは毎日の質朴で控え目の生活を送り続けました。このことをこれから述べたいと思います。



注

(1) この行為は万人の賞賛に値しました。この点に関してはデルブレレル師のスペイン亡命貴族に関する研究記事、254ページ、1891年10月、を参照してください。スペイン国王は同司教に王国の最高の榮譽を提案しましたが、司教はいつもこれを辞退しました。

教皇ピオ7世聖下は1814年に枢機卿の地位を授けました。

(2) ルイ・シャミナード師の追悼講話

(3) この手紙はセン・スルピスの資料室のエメール師の伝記作成のための資料の中にありました。つづり10の2

(4) 「ルイ・マリー・ボードゥヴェン師の生涯」、29ページ、ポアティエ、1873年。師は1797年の夏にフランスに帰国し、しばらくボルドーに滞在していました。師がヨゼフ・シャミナード師を知っていたことは考えられることです。それは、師がシャミナード師と極めて親しかった同僚のミショー師の所に滞在していたからです。師は無原罪の御宿りの聖母に特別の信心を持ち、無原罪のマリアへの献身を実践していました。(同生涯、43ページ)。このことはシャミナード師がマリアのしもべの手引きの中に記したものと大変似通っています。ボードゥヴェン師は無原罪のマリア会を創立しました。その本部はヴァンデ県のシャワニュにあります。師は18435年に帰天し、1871年に尊者の位に上げられました。

(5) この計画でシャミナードという司祭はヨゼフ・シャミナード師であることが考えられます。後程シャミナード師が創立することになるマリア会についての最初の考えはここからくみ出されたものに違いありません。(ユクレ師への手紙、シリーズ2、1巻、分冊3、438ページ、1890-1891) マリア会という名称の一致は偶然でした。当時この計画に没頭していたルイ・シャミナード師は弟のヨゼフ・シャミナード師が1817年にマリア会を創立するずっと以前に帰天していたからです。また、このマリア会はイエズス会とは大変異なった土台の上に建てられました。こうした歴史上の過程からこの二つの計画の間には何の共通点もなかったことが容易に確信されます。

(6) ルイ・シャミナード師に関する追悼講話

(7) 1778年からナンシーの司教であったルイ・アポリネール・ドゥ・ラ・ツール・デュ・ペン・モンターバン司教(1744-1807)は、1783年にオーシュの大司教として転任しました。大司教は市民憲章への宣誓に関して極めて自由な考えを持っていたことで知られていました。したがって、政教条約の際、その除名が教皇に送付された最初の一人でした。しかし、教会への奉仕によって、1802年に単なる一司教としてトロイに受け入れられました。1807年に帰天。イエズス会士デルブレル師による同司教に関するパンフレット、ルトー社、1892年、パリ、参照。

(8) 「バス師に関する序文」、アジャン、日付なし

(9) 引用伝記の序文には詳細に述べられていなかったこれらの事実は、ドゥ・カステラン師のタルブの司教との文通によるものです。(オーシュの大神学校資料室)

(10) フランスに帰国する前、当局から交付された公式証明書のおかげで、ヨゼフ・シャミナード師のサラゴサ到着の正確な日付が分かりました。

(11) 今日まで未公開であったこの話は、アジュネ地方のフェッルサックの主任司祭ボワシェ師、また、「1789年アジャン教区の財産目録史」の著者でメラン教会の主任司祭デウラング師の好意によるものです。

(12) ご像そのものはバジリカの中の定位置にいつも安置されていました。行列で人々

が捧持して市内をねり歩いたご像は銀製の複製でした。

(13) この表現はルイ・シャミナード師の亡命仲間のアルティエグ師によります。ブリュジェール著、「記念サイン帳」、アルティエグ師の項。

(14) サラゴサでは、フランス人たちに対してはまだ特別な苦情が寄せられました。彼らが参加した柱の聖母の行列で、スペイン人の長年の習慣にならって、聖母のご像の前にひざまずかなかったからでした。

(15) 1797年、パロメックでのオグステン・ドゥ・ルズ大司教の帰天に伴う、後継者のジョアキム・コンパニー司教の任命の間に、教会参事会員総代理のシステュエ師は、セント・マドレーヌの主任司祭がその教区のフランス人司祭たちにその教会でミサをささげさせなければならないことを命令することを余儀なくされました。(カステラン師の覚え書き、オーシュ大神学校の資料室)

(16) 多くの司祭たちと亡命したサラゴサの大司教はボルドーで帰天しました。

(17) 1840年9月1日付けのクルーゼ士への手紙

(18) ラランヌ夫人やボナール司教に関しては、「バラ夫人の生涯」、6版、1巻、358ページ参照。デュドゥワン参事会員はカナダの宣教に出発した直後その消息が分からなくなりました。

(19) デルブレレル師著、「研究論文」、265ページ、1891年10月

(20) この日付はドゥ・カステラン師からタルブの司教あての書簡で明白でした。(カステラン師の記事)

(21) サラゴサの人々は司教に会うと、「ご覧なさい、聖人のような方が通っている」と言っていました。(ベス師に関する紹介)

(22) この手紙は消失していました。しかし、ドゥ・カステラン師の手紙の中にそのこん跡が見いだされました。

(23) ジョッフロワ・グランメゾン師への手紙、1891年9月10日、954ページ

(24) カステラン師からタルブの司教への手紙、1798年5月12日

(25) カステラン師からタルブの司教への手紙、1798年6月26、7月7日、8月4日

(26) デルブレレル師著、「研究論文」、32ページ、1891年9月

(27) 友の会(デルブレレル師の覚え書き)

(28) タルブの司教への手紙、1799年4月6日

(29) ボルドーの口の悪い報道記者ベルナルドの言葉(H・ルリエーヴル著、「ウルスラ会」、157ページ)

(30) 1798年4月30日と10月4日付け、カステラン師への手紙。それは、スイスのフリブー

ル市近郊のワル・セントでトラピスト会士になった元スルピシアン会士のタッセン師によって作られた「新しいトラピスト」と題する著書の件についてでした。

(31) 1799年3月2日



第8章 亡命司祭の活動 (1797—1800)

亡命司祭の苦境 ❖ 祈りと研究、修道院訪問 ❖ セント・シュザンヌのトラピスト会 ❖ ブエ師のトラピスト会入会 ❖ 柱の聖母 ❖ 霊性への進歩 ❖ 柱の聖母の下での宣教活動への啓示 ❖ 亡命の終了。

スペインに亡命した司祭たちは、亡命期間が期待以上に長引いていた強制的な余暇の週間や年月をどのように過ごしたのでしょうか。彼らは進んで地域の聖職者の活動の手助けをしました。しかし、1792年11月2日付けの国王令によってあらゆる公職から、そして、聖職の実施も、同様に教職からも遠ざけられました。国王令が厳格に施行されたのは、習慣の違いばかりでなく、考え方や信念の相違に対して、不信感が抱かれていたからでした。また、亡命司祭たちがジャンセニズムの異端の種をスペインに持ち込みはしないかと恐れていたからでした(1)。ミサをささげること、お互いに許しの秘跡を受け合うこと、そして、例外として子どもたちに要理を教えること、以上が彼らに許可されたすべてでした。サラゴサで、多分特別な恩典によって、ピアリスト会経営のセン・ジャン・バプティスト校で正規の職務を許可されていたのはドゥ・カステラン師だけでした。こうした状況でフランス人司祭たちはどのように生活することが出来たのでしょうか。

これら気の毒な亡命司祭の大半は早速個人の資金を使い果たし、自らの働きや公の寄付を当てにするしかありませんでした。ある司祭は小教区の教会で遅い時間にミサをささげる許可を得ていました。亡命司祭の大半は、聖職者の身分には余りふさわしくない職業に就くことを余儀なくされました。したがって、彼らの中には、医者、チョコレート製造販売業者、飾り紐商、刃物製造販売業者、かご屋等、あらゆる職業の職人がいました。例えば、「アジャン出身のマルテン師はアルプスの羊飼いの器用さで木材に彫刻し、それをテーブル用具や化粧室用具としてサラゴサの主婦たちに売っていました(2)。」1795年以来、スペインで障害者の司祭たちに最低限度のものを支給するための寄付金募集が組織されて翌年まで続きました。ラ・ロシェル教区の司教、ドゥ・クーシー司教がその発起人で、ドゥ・カステラン師やプラデール師が協力しました。1796年だけでも配分援助額は10万1千642レアル(約2万5千フラン)に上りました。この一般募金にカステラン師が主催者になった特別な募金額が加えられました。これらの収益はもっぱらカタルニア地方やアラゴン地方の貧しい司祭たちに充てられました。いずれにしても、これらの援助額は多くの場合、司祭がミサ

をささげることが求められていたミサの謝礼によるものでした。

シャミナード師兄弟は募金によって補助されていた司祭たちのリストからは外されていました。かえって、国王の声明の実施に関する協力者リストに、「彼らは自給自足出来た」と兄弟の氏名が載せられていました。彼らの保護者であったオーシュの大司教、銀行家のラブジャード氏、あるいは何名かの友人は、彼ら兄弟の必要を保証出来たのでしょうか。この点に関しては何の手がかりもありません。ただ、彼らは自らの働きや慈善の援助からの収入がなければ、数年間その生活を支えるため十分な資金をフランスから持参していなかったことだけは分かっています。

また、彼ら兄弟が毎日の生活をどのように送っていったかをたどることは不可能でした。しかし、シャミナード師が兄ルイ師の追悼講話のために記した覚え書きは、この点に関する手短な手がかりを伝えました。この覚え書きによると、例えば、ルイ師は数人のフランス人の青年たちを聖職者の身分の知識と徳に養成するためにその指導をしていたということです。これらの青年はツールのドゥ・ペン大司教やカステラン師が聖職者募集の確保のためにオーシュやタルブの教区から呼び寄せたものでした(3)。ルイ師はこうした活動を好んでいました。好きで教育者になったからでした。師が生涯にわたってこの敬けんな活動に献身したことが分かっています。サラゴサの大司教が、1799年10月8日付けで聖職に従事する権限を師に委託したのは、恐らくこの活動のためだったのです(4)。また、ルイ師は余暇を利用して造花を作り、これを信仰及び信心のあかしとして教会に持参していました。

シャミナード師兄弟はこの有益な趣味を共にしていました。ラムルス嬢への手紙の一つに次のくだりを読み取ることが出来ます(5)。「わたしは二つの花束を作りました。一つはあなたのため、もう一つはわたしのためで、これを至聖なる乙女マリアの祝日の初めにマリアにささげるつもりです。」しかし、ヨゼフ・シャミナード師の好みは他の仕事でした。師はキリストや乙女マリア、そして、聖人たちの小さな石こう像を作ってこれを売り、その代価を兄弟の生活費に充てていました。ずっと後になって、師は、霊的講話の時、自ら作った石こう像を弟子たちに示し(6)、この種の仕事からすばらしいたとえを引き出しました。すなわち、人間を聖人に養成するために求められる働きと石こう像を作る作業を次のように比較しました。「素材がアーティストの手の中でまだ準備段階にある時は、どちらにも何ら賞賛すべきものではありません。しかし、素材が加工され、磨かれて現れると、それはより貴重なものとして評価されます。」

いずれにしても、サラゴサ滞在中の3年間にシャミナード師がその余暇の大

半を充てたのは研究と祈りと念とうでした。師は神学書を再読してこれを徹底的に学び、教会史と聖書解釈の知識を深めました。師の手紙や教訓がいかにかに聖書に親しんだかを証明しているからです。

師の研究は単に純理論的なものではありませんでした。師は実践的な観察者としてスペイン教会の固有の習慣や規律、そして、修道会に注意を払ったからです。この点で師の亡命は師の以前の知識に極めて有益な知識を補充することになりました。

サラゴサには各種の名称と会憲を持つベネディクト会、フランシスコ会、ドミニコ会、アウグスチノ会、ヒエロニモ会、三位一会会、そして、ピアリスト会等がありました。シャミナード師はこれらの修道会を訪れ、それぞれの会則と同時にその内的精神を確かめました。師は主として沈黙の規則が守られているかどうかの手段によって共同体の熱意を判断したようでした(7)。

師の修道会訪問はサラゴサ近郊の共同会、そして特に、アラゴン地方とカタルーニア地方の境界地域に位置していたセント・シュザンヌのトラピスト会修道院までも及びました。このトラピスト修道院は最近の創立で、スイスのヴァル・セントに亡命していた大トラピストの修道者たちがスペインの分院の一つに送られたからでした。亡命司祭たちの臨時の避難所になっていたカタルーニアのポブレ大修道院から修道者たちは人々の雑踏の中をセント・シュザンヌの修道院に行列して来たわけでした(1796年1月)(8)。

人々はこれらの修道者たちの極端な厳格さに驚いていました。スイスのヴァル・セント大修道院長のドン・ドゥ・レストランジュ師は、大トラピスト修道院の会則の厳しさ以上に厳格でした。院長は既に短い睡眠時間を更に短くし、水以外の飲み物を断ち、わら布団の代わりに粗削りの板に代えました。このわら布団はドゥ・ランセ大修道院長が会員の健康回復のため必要と判断したものでした。こうした生活がシャトーブリアンにはすばらしい生活に思われたのでしょうか。彼は、セント・シュザンヌの大修道院で平修道者になったシャルル・クローゼル・ドゥ・クッセルグ騎士の手紙を再現して、「キリスト教の精髓」にこの生活を詳述したからでした(9)。

オーシュの大司教はしばしばモンセッラの避難所からセント・シュザンヌの大修道院に下って来ていました。それは叙階式を行ったり、多くの勇敢な亡命司祭たちの模範によって自らを聖化するためでした。シャミナード師はこの大修道院で大司教と最初の出会いをなしたに違いありません。この大修道院の訪問はシャミナード師を魅了しました。師は他のどこにも、より天国のような生活、より高度な観想、世と世の虚栄のより完全な忘却、より厳しく、より良く遵守さ

れた規則の生活に出会ったことがなかったからでした。そして、聖なる教会の中で、師が観想修道会の役割、祈りと苦行の価値、そして、修道者たちによる蓄積された膨大な功德を十分理解することが出来たのはこの大修道院だったからです。師は後に農耕生活を目指す共同体の規則を作る時、このセント・シュザンヌ大修道院から着想を得たのでした。師はフランスのトラピスト修道院の再建に尽力し、後に国外追放に会ったセント・シュザンヌの残存修道者たちを再三歓待することになりました。

シャミナード師はスペイン滞在以来、セント・シュザンヌの大修道院に最大の尊敬のあかしを示しました。それは、靈的子供とも言うべきギヨーム・ブエ師をトラピスト修道院にささげたからでした。トラピスト修道会の聖なる召命にふさわしい有徳のこの青年司祭は、自分の指導者であり靈的父であったシャミナード師に、同会に入る許しを懇願するほどその生活に魅了されていました。この申し出に対してシャミナード師はまず驚き、そして、悲しみました。師はこの親愛な弟子に対しては他の目的を抱いており、彼を将来の宣教活動のための自らの主要な協力者と見なしていたからでした。しかし、師はやがてこの寛大な魂の熱望の中に敬けんな召命の明らかな印を認め、み摂理の計り知れないご計画に従い、求められた修道会入会の許可を与えました。

大修道院長のドン・ジェラジム師は多くの修道者の生活を十分支えることが出来なかったので、入会を求めている数多くのフランス人亡命司祭たちを努めて断るようになっていました。大修道院長はギヨーム・ブエ師に対しては例外を認めました。その高潔さに感動させられたからでした。そして、そのことを決して後悔しませんでした。それは、ブエ師が共同体の模範になったばかりでなく、更に困難な時代の指導者になったからでした。いずれにしても、修道院の観想に浸るためにシャミナード師の下を去ったブエ師はシャミナード師を靈父と呼び続け、その恩を忘れませんでした。更にそれ以上のことをしました。すなわち、シャミナード師の思い出としてヨゼフの名を加えることを望んだからでした。このことは後ほどの次のようなシャミナード師への手紙で分かりました。「ご存知の通り、私は貴師のことを決して忘れません。私が尊い聖ヨゼフのみ名を頂く名誉にあずかったのは、私が恩を受けたのは神様に次いで貴師だったからです(10)。」

シャミナード師は亡命の3年間に観想修道会をよりよく知る機会は一度しかありませんでしたが、未来の修道会創立者としては、その3年間は貴重な期間でした。なお、他の観点からすれば、み摂理がシャミナード師に予定していた宣教活動への準備の3年間は終了していました。しかし、この3年間に師の心は犠牲、潜心、祈りに満たされ、神のあふれる光と恩恵が保証されました。そ

の効果が生涯に及ぶことになったからです。師は次のように叫びました。「神の愛と哀れみは何と深いことでしょう。このことが最もすばらしく思われたのは、わたしがもっぱら打ちひしがれたように思われた時でした(11)。」

恐怖政治による様々な試練の後、神は、師をボルドーから引き離す時、「これからも試練を甘受し続けるように」と師に求めました。師自身の表現によれば、「清貧、苦悩、屈辱の苦しい三つの試練を甘受し続けるように」とのことでした。神は師を、その心に語りかけるために静かな場所に伴われました。神が、ご自分の名のために多く働き、多く苦しむよう予定しているしもべたちの心を鍛練するのを常とされるのは観想の中においてだからです。シャミナード師はサラゴサで、自己放棄をなすことを無制限に学び、また、神の観想に深く入ることを許され、そして、将来に関する宣教活動の指示を受けたManrèseを見いだしました。

神がこの恩恵を惜しみなく与えることを望れた場所は柱の聖母の聖堂、すなわち、*Santa capilla*でした(12)。この聖母マリアの大聖堂はエプロ河畔の旧橋の近くに建立されています。18世紀に、住民の信心によって、昔の参詣所に代わるものとしてすばらしい偉容を誇る大聖堂が建立されました。しかし、その一部は今なお完成されていませんが、1797年にシャミナード師がサラゴサに亡命してきた時には既に献堂式は終了していました(13)。守護者の聖母に対するアラゴン人の献身のすばらしいあかしとして、そして、「昔の貧しさも快く、現代様式も快い」(14)と歌う聖母の祝日の賛歌が裏づけるように、大理石や彫刻、そして、銀塊が惜しげもなく使われていました。バジリカの内陣には奇跡の聖母像を納める一種の至聖所としてのチャペルがあります。このチャペルは極めて荘厳な雰囲気、ここで行われる敬けんな儀式も極めて荘厳でした。ある亡命司祭は次のように語りました(15)。「それぞれの祈りの後、教会の内陣から出て、礼拝堂に向かう柱の聖母大聖堂の教会参事会員の行列のように美しいもの、荘厳なもの、すばらしいものは何もありませんでした。ご存じの通り、彼らは二人ずつゆっくりとした歩調で進み、深々とひざまずき、平伏していました。それは聖母マリアのご像の前で、聖母への賛歌を荘重な声で歌ったり、詠唱するためでした。わたしたちはフランスでこのような信心は見たことがありませんでした。」

至聖なる乙女マリアの存在がいわば敏感に感じられるこの尊い参けい所で、シャミナード師は好んで長時間祈りの内に過ごし、神の母との子心の談話にその心を開いていました。わたしたちにはこれらの対話の全秘密を洞察する特権は与えられませんでした。ただ、師が2種類の恩恵を頂いたことが分かっています。一つは宣教師としての個人の聖化で、もう一つは師に託された使命でし

た。

前者は本質上問題の理解を超えたものであり、恵まれた人でない限りそのことを明らかにすることは出来ません。シャミナード師のいずれの個人的な文書によってもわたしたちには伝えられませんでした。この活動家はそのわずかな印象まで記録する人々のような方ではなかったからです。また、その趣味も時間もなかったからです。幸いにして、師の手紙は自分自身の感情を主観的に明かさなないように配慮するにしても、人々に対する普段の意向も、親しい願望も示さないような非個人的なものではありませんでした。確かに、亡命時代に関しては、ラムルス嬢に対する指導の手紙の長文の断片が残されています。これらの手紙は、すべての徳の基礎であり支えである信仰の徳の成長や増加、どのような障害も許すことのない神とマリアへの信頼、苦しみに対する評価、そして最後に、心を絶えず神に一致させる愛、ただ唯一の目的である魂の獲得の熱意等、地上の物事から彼女の心を解放させた浄化の働きをわたしたちに明らかにしました。

シャミナード師が霊的娘のラムルス嬢に当てた勧めに関する次のような考えに耳を傾けたいと思います(16)。

「たとえわたしが人々の中で最も卑劣で、享樂的であったにしても、苦しむ人々は幸せであるという強い信仰を持っています。至聖三位の神秘を信ずるようにこのことを固く信じます。しかし、苦しむことの幸せはどのような点にあるのでしょうか。この問題に直接答えることは差し控えることにします。神があなたのために、また、カルワリオとわたしたちの祭壇上の聖なる犠牲のために、あなたに鼓舞した愛の犠牲を侮辱するように思われるからです。ただあなたに伝えたいことは愛の火が消えないように用心し、しばしば苦しみのたきぎをくべて欲しいということです。」更に師は(17)、「あなたの心が神の愛にささげられて、最愛の方のおぼし召しに敏感であるのを見ることが出来たらどれほど幸いかと思います。もし、あなたが神の愛に満たされた霊的指導司祭を持っていたとするなら、あなたの心はきっと神の神聖な愛によって焼き尽くされていたに違いありません。どうか神がこのわたしを哀れみ、その罪が子供たちに及ぶことをお許しにならないよういつもお祈りください」と続けました。また、他の箇所では(18)、「勇気を出しなさい、勇気を。ヒースや灌木の生えた荒れ地のあなたの田舎があなたに、勇気を、勇気を出しなさいと叫んでいるからです(19)。真理を知る幸福を得たあなたがなぜ自分をおろそかにするのですか」と伝え、また、次のように書き送りました。

「もう自分自身ではなく、イエス・キリスト、あるいは、その肢体に属するよう

になる謙そんと愛徳を生きるようにしてください。」

師はイエス・キリストをその肢体から、そして、自分自身の聖化を他人の聖化から決して切り離しませんでした。すなわち、師は宣教師でなければキリスト信者ではあり得ないことを理解していたのです。

師は宣教活動への自分自身の召命を決して疑いませんでした。しかし、その正確な手段はまだ分かっていませんでした。幾つかの修道会に入るための努力がむなしく、不安になっていたからでした。一方、サラゴサ滞在以来新たな恩恵に恵まれたことが分かりました。心の霧は晴れ、神の呼びかけがより明らかな、より決定的な言葉で聞かれたからです。妄想によってこの種の恩恵にあずかった気になることがあるかもしれませんが、しかし、だれもミシュダンの会計係であったシャミナード師ほど豊かな考えに富んだ人はなく、そしてまた、その後の出来事がサラゴサで頂いた啓示を確認するものであることに着目するなら、どうして師に対する神のみ手を認めないことが出来るでしょうか。

神が本会創立の役割を託したのはマリアでした。すなわち、このことはマリアに属する事柄だったのです。そして、シャミナード師はマリアの使徒として定められていたのです。本会の誕生後、創立者は、わたしはマリアの呼びかけに従ったに過ぎなかったのだということをしばしば明らかにされました。そして、ある日、本会の最初の弟子たちに親しく心情を吐露して、神との交わりの尊い時間の印象とひらめきを次のような言葉で話されました。「今わたしがあなた方を目前にしているように、本会の創立の久しい以前に、わたしはみなさんの今の姿を目にしていました。」それから、余り話し過ぎたのでその謙そんがたしなめされでもするかのように、次のように付け加えられました。「あなた方がここにいるのはわたしたちの御母、無原罪の乙女マリアのおかげです。この創立を計画されたのはマリアです。そのメンバーを準備されたのもマリアです。この事業を見守りこれを導き続けるのもマリアです(20)。」シャミナード師はこの神秘的な呼びかけの秘密をもっと明確に打ち明けようとは決してしませんでした。師はこの特別な事柄に関してはその弟子たちからしばしば質問されましたが、いつも返事を避けました。しかし、その講話や手紙では、両修道会の創立においては自ら行動したのではなく、神の命令によって行動したことを断言して止みませんでした。

至聖なる乙女マリアはそのしもべにどの点までその真相を明かされたのでしょうか。そのことは分かっていません。分かっていることは、マリアは純粹に人間的計画では容易に発見出来ないその考えの一部を明確に示されたということです。示された三つの考えは次の通りです。その第一は、師の使命は、過去のすべての異端に勝利されたように、現代の異端に対する勝利が保留されてい

る無原罪の御宿りの乙女マリアのみ名とご保護の下にあるということです。第二は、その宣教活動には自ら範囲を決めてはならない活動範囲があるということです。すなわち、その宣教活動は個人的、つかの間の的であってはならず、修道家族によって実現され、その活動自身、いわゆる修道会による修道精神によって維持されなければならない、他のすべての活動の完成でなければならないことです。第三は、この宣教活動は社会のすべての階層により確実に浸透することが出来る手段を講じなければならない、また、出来る限りキリスト教生活や修道生活の本質に従って時代のあらゆる要求に適応しなければならないということです。

これらの基本的考えの適用はシャミナード師の生涯と活動全体に、その使命への信頼によってしか説明されないすばらしい統一を与えました。この信頼は様々な障害にもかかわらず揺らぐことはありませんでした。何も師を止めることが出来なかったのです。師は決して目標を見失わない人として、また、目的に到達することを確信する人として確実な足取りで前進しました。

こうした考えが師の心に明確になった時、未来の創立者にとっては、その本質と視野を外部に漏らすことなく明らかにしないままにしておくことは出来ませんでした。亡命時の最も親しい同僚の一人で、シャミナード師の深い信仰に引かれていたロゼルトの司祭(タルン・エ・ガロンヌ県)のエンベル師に、このことを話されたことが伝えられています(21)。彼らはその対話の中で、大革命終息後、宣教活動が実施出来る実状についてしばしば話していたということです。そして、当時からエンベル師は聖母のご保護の下に修道会を創立することを考えているような協力者をシャミナード師に提供することを約束していたということが伝えられています(22)。事実、モアサックの主任司祭になったエンベル師はマリア会創立当初の会員となった一人の召命をその町から獲得したことが分かっています。

亡命の終わりが近づくと共にすばらしい宣教活動の開始も近づいていました。進むべき道は柱の聖母から示されていたからです。シャミナード師は母に対する子心の信頼を固く抱いてその目的に突き進んで行きました。



注

- (1) デルブレレル著、「研究論文」、271ページ、1891年10月。
- (2) 同前、271ページ。—デルリウ著、「バス師序文」。
- (3) デルブレレル著、「ドゥ・ラ・ツール・デュ・ペン司教」、43ページ参照。

- (4) サラゴサ大司教館資料室。この案内及びその他の案内はサラゴサ大学の元文学部長ファヤルネ氏によって伝えられたものです。心からお礼申し上げます。
- (5) 1799年7月19日
- (6) セルマン氏の覚え書き
- (7) シャミナード師の弟子の一人、カイエ師の覚え書き
- (8) デュボワ著、「ドゥ・ランセ師の経歴」、700ページ、1866年、パリ参照。また、作者不明、「大革命中のドン・ドゥ・レストランジュとトラピスト修道士」、59ページ以下、トラピスト大修道院印刷、1898年、参照。
- (9) 「キリスト教の精髓」、4部、3編、注6。
- (10) 1846年8月20日
- (11) ラムルス嬢への手紙、1800年7月26日
- (12) ご存じの通り伝説によれば、まだ存命中であった聖母マリアは天使たちによって柱の上に支えられて運ばれ、福音を宣教していた大ヤコブに勇気を与えるために現れたとのこと。サンタ・カピツラはその出現の同じ場所です。
- (13) このバジリカは長さ130メートル、幅66メートルの長方形をしています。東洋風を思わせる幾つかの丸屋根が上部に見られます。
- (14) ロードの賛歌
- (15) アジャン教区のデュピュイ師(デルリウによる注)
- (16) 1799年9月23日
- (17) 1800年7月5日
- (18) 1799年1月15日
- (19) ピアン地方の暗示
- (20) 最初の弟子、特にロテア師の証言とシャミナード師の手紙でしばしばの暗示。」
- (21) ヨゼフ・ルイ・エンベル師は1763年8月6日にロゼルトに生まれ、1814年にモアサックのセン・ピエール教会の主任司祭になり、1840年9月28日にこの地位で帰天しました。
- (22) マリア会の修道者の一人で、モアサック出身のカネット士の覚え書き。士はエンベル師と個人的な親交がありました。

第9章 バザ教区の管理 (1800—1802)

亡命リストからの削除 ❖ ボルドーへの帰省 ❖ 市内の状況 ❖ 最初の活動と改心 ❖ バザ教区管理の委任 ❖ その管理 ❖ バザ司教座の廃止
❖ 教皇派遣宣教師の資格。

フランスでは様々な事件が次々に起きていました。総裁政府への不信、ナポレオン将軍の復帰、共和歴霧月18日のクーデタ、共和歴8年の憲法公布等は決定的平和への徴候でした。ようやく政権が確立されたように思われ、生きた気持がしなかったすべての人々に、いまわしかつた大革命の終息がかいま見られるようになりました。亡命者たちの気持ちはパリの方に向けられ、長いドラマの最終幕を熱心に追い求めていました。政府の第一執政官がヴァンデー人たちに次のような平和回復の宣言をなした時、亡命者たちの心は希望に満たされました。「平和の神の聖職者たちは和解と融和の第一の推進者である...。聖職者たちは再開された教会に赴かなければならない。それは、戦争の犯罪と流された血を償う犠牲を同胞の人々とささげるためである(1)。」

シャミナード師は亡命者リストからの削除に関する手続きを再開するようボルドーの代理人ルイ・ラファルグ氏に急ぎよ依頼しました。シャミナード師はラファルグ氏に1800年3月4日の日付で、自らが1797年10月11日以降ずっとサラゴサ市に滞在していたことを証明するサラゴサ滞在の証明書を渡しました(2)。ジロンド県知事に対するラファルグ氏の最初の試みは失敗しました。その申請書の提出が遅すぎたこと、したがって、それらの書類は共和歴8年雪月4日(1799年12月25日)以前に送付されていなければならなかったことが告げられたからでした。そのため、ラファルグ氏は直接フーシェ警察庁長官(3)に問い合わせたところ、数日後すなわち1800年7月22日に好意的な回答を得ました。諸書類は普通のお役所手続きで通過し、1800年9月2日ジロンド県知事によって連署され交付されました。こうして、シャミナード師は亡命リストから決定的に削除されました。

シャミナード師はこのうれしい知らせを受けて帰国のための準備をすっかり整えました。ドウ・カステラン師やサラゴサの他の聖職者たちとの連絡手段については調整がついていました。カステラン師の姉妹のアンリエット嬢がその仲介役になることが取り決められていました。彼女はタルブで大革命中この危険な使命を果たしていました。カステラン師は姉妹との手紙の内容を記録した連絡ノ

ートに、1800年11月4日付けで、次のように記していました。「わたしが彼女の前で大変ほめていた尊敬すべきシャミナード師は、何らかのニュースやわたしが彼女に送るべき信仰に関する書類等の連絡を彼女に求めて、ボルドーから時々彼女に手紙を書くに違いないことを彼女に知らせておきました(4)。」

シャミナード師は多くの恩恵でその心が満たされた柱の聖母の恵みの参詣所に別れを告げました。師は聖母に心からの感謝をささげ、天の母の祝福に強められて祖国の国境への帰途につきました。出発の際、親友で銀行家のラブジャード氏は師の旅費やボルドーでの再定住費として幾らかの金子を師のポケットにしよばせました(5)。シャミナード師は兄のルイ師や、フランス政府とは調整がついていなかったが、当然その好意的な措置を期待していた数名の司祭たちと一緒にいました。彼らはつつがなくフランスに入国し、シャミナード兄弟はボルドーに帰りました。

こうして、シャミナード師は半世紀近く宣教活動に従事することになるボルドーに帰着いたのでした。すなわち、師は長期にわたる宣教活動のためにすべての需要が十分整えられていた活動の部署としてこの市に復帰したのでした。師には御主から正確な指示が与えられていたからです。師は部隊を集合させるため、無原罪の御宿りのみ旗と神への信仰とみ摂理への信頼という抵抗し難い武器を持っていました。

師は他の財産など何も持っていませんでした。したがって、最も必要な家具道具さえ家事手伝いに借りなければなりません(6)。しかも、帰国後しばらくは、以前頂いていた貴重な装飾品も生活のために売却しなければなりません(6)。師にとって大切なものは何だったのでしょか。それは金銭の財産を持つことではなく、イエスとマリアがこの世に神の国を樹立することでしかないことを知っていたことでした。師は、かつてフィリッポ・ドゥ・ネリが財産も家族も祖国もすべてを捨てて、ローマに入ったように、ボルドーに帰って来ました。師もこの聖人同様貧しく、そしてこの聖人同様魂の救いのために専念していました。亡命期間中ずっと取り残された信者たちのことを思って涙せずにいられませんでした。師はラムルス嬢に次のように書き送りました。「ボルドーには物質的にも精神的にも見捨てられた人々がどんなに多いことでしょう。彼らは永遠の幸福を失う危険にさえさらされているのです(7)。」宣教師のこの叫びは正に同市の悲しい状態を裏付けるものでした。

ボルドーは大革命前に知られていたほど豊かな都市ではありませんでした。戦争と専制政治によって商業は全滅し、がれきの山は積み重ねられ、人口は少なくとも2万人は減少し、道徳面の実状は物質面の状況よりも残念な状

態にあったからです。また、数年来あらゆる信仰上の司牧を奪われた住民は信仰の真理に対する無知のために苦しみ、信仰によってよりも迷信によって吹き込まれた実践に没頭していたからでした。聖職者たちはシャミナード師を援助し始めました。しかし、教会には公にはまだ平和が回復されていませんでした。当局は教会に対してもう敵意こそ抱いていなかったにしても、まだ好意的ではありませんでした。したがって、大半の教会は閉鎖されたままでした。聖職者たちはある種の不信感をもって眺めていました。

実を言うと、行政界からの新しいリーダーによる宣言がもつぱら待たれていました。それで、ボルドーの役人たちは、勝利を収めた英雄が、「全フランス国民に榮譽と和解の冠をもたらす」ことへの待望に応ずることを熱望して止みませんでした(8)。ところで、ナポレオン・ボナパルトはフランス在住の聖職者たちに、共和歴8年の憲法を遵守する約束を要求することで満足していました(9)。そして、1800年12月から、国の宗教上の再構築に関する合意のために、第一執政官と教皇ピオ7世聖下の間で交渉が開始されているということが密かに伝えられていました。政府の寛大な態度に大胆になったボルドーのカトリック信者は、市内のあらゆる地区に教会に代わる単なる祈とう所を開設し、こぞってそこを訪れました。警察にもたらされた報告によれば、バラダの祈とう所だけに通っていた信者の数は3000人に上っていたということです。

シャミナード師兄弟の帰国時のボルドー市の状況は以上のようなものでした。聖職の場所が全く決まっていなかったルイ師は田舎に引きこもることになりました。しかし、田舎で無為に過ごしたわけではなく、ボルドーから10数キロほど離れたメドック地方のマコーの小教区で聖職を実施しました。

ヨゼフ・シャミナード師はもう隠れる何の理由もなくなっていたので、市内で聖職を行っていたごく少数の司祭たちの聖職に協力しました。こうして、師は、最初に開かれた礼拝堂の一つで、最も広々として、最も信者の出入りが多かったマドレーヌの礼拝堂で教戒師の職を果たしたことが伝えられています。師は1795年に定められた規則に従って、市民憲章受諾の若い司祭たちの宣誓撤回を厳粛に受け入れていました(10)。師はこの職務を他の多くの祈とう所でも行いました。1801年の初頭、師はシャルترون街のドワディ通りの礼拝堂で、同僚司祭の一人、シェラル師に協力して黙想の説教を行いました。師は信者たちがこぞって集まり、むさぼるように説教を聞き、極めて長い間禁じられていた聖歌を興奮して歌うのを見て感動しました(11)。

当時代に関する逸話は、シャミナード師が信仰から遠ざかっていた信者をどのように信仰に連れ戻したかを伝えています。ボルドーでイタリー語やスペイン

語の通訳をしていたブリュッシーというイタリー人が臨終を迎えていました。シャミナード師によって導かれていたその妻と娘は、久しい以前から人生観への偏見によって迷っていた気の毒な夫を見舞ってくださるよう師に懇願しました。師は愛想よく彼に近づきました。それが師の特徴の一つだったからです。最初は単なる儀礼的な見舞いでしたが、次第に親しく雑談するようになり、やがて、神や魂の不滅の話に移り、かつてはその心を占めていたこれらの問題に興味を示して来たように思われました。やがて、彼らは人々に対するみ摂理の愛の役割について話すようになりました。そこで、シャミナード師は出し抜けて次の質問をしました。「このような状態の中で、あなたが一人のカトリック司祭と向き合っているのはみ摂理の計らいとは思いませんか。」病人は身震いしました。この言葉は彼の幼少時代の信仰を目覚めさせた一条の光のきらめきだったからです。

そこで、シャミナード師は、彼の判断を曇らせていた考えや偏見の迷いから彼を解放することによって、真理を再発見するよう手助けしました。彼らは一緒に使徒信経を「わたしは永遠の命を信じます」の最後の項目まで唱えました。このように使徒信経の各項目を力強く唱えた後、師は、「わたしは永遠の命を信じます」の言葉をしばしば唱えなさいという勧めだけを付け加えました。その翌日この病人を見舞った師は、いきなり弾んだ声で次のように叫ぶのを聞いて喜びに満たされました。「神父様、わたしは永遠の命を信じます。わたしはこのことを信じて幸せです。」こうして、この魂は神に立ち返りました。病人は当日許しの秘蹟を受け、罪の許しを頂きました。そして、その翌日と翌々日に、臨終の聖体を拝領し、病者の塗油を受けました。この出来事についてシャミナード師は、この改心した不信仰者の死ほど模範的な死に出会ったことはほとんどありませんでしたと語りました(12)。

シャミナード師は自分自身の祈とう所を持っていました。それはセント・ユラリ通りの祈とう所ではなく、旧セン・シメオン小教区とセン・プロジェ小教区の間で、市の中心のセン・シメオン通りに位置する他の祈とう所でした。この祈とう所は1800年12月、至聖なる乙女マリアのコングレガシオンが発祥した場所でした。わたしたちはしばらくの間このコングレガシオンに触れることになります。ここでは例外的に、結婚を祝別し、あるいは、更新し、そして、洗礼を授けていました(13)。こうした時には、一人のコングレガニストが、あるいは、家事手伝いのマリー・デュブールさえもが、不在の代父、代母の代わりにしばしば務めていました。また、この祈とう所は他の理由で重要になりました。それは、シャミナード師が信者のために与えられた特別な役職のために旧教区バザの多くの司祭や信徒たちが出入りするようになったからです。

シャミナード師がバザ教区の司教総代理及び管理者の資格でスペインから帰国していたのは事実でした。バザ市の最後の司教、ドゥ・セン・ソーヴェール司教は教区民に謙そんと慈愛、そして、英知のすばらしい評判を残して1792年に帰天していました(14)。司教総代理のキュルテュル師が臨時に教区の管理に当たっていましたが、やがて、よる年波と捕らわれの身で受けた苦悩でその重責に耐えられなくなりました。そこで、バザ市のドゥ・ラ・ツール・デュ・ペン司教はオーシュの大司教の資格でこの小教区の管理をシャミナード師に委ねることを考えました。シャミナード師は教戒師の職によって既に多くの司祭を知っており、そして、その職の実施にあたって優れた管理能力を示していたからでした。しかし、オーシュ大司教の寛大な姿勢はシャミナード師を大変困惑させました。それは、師の気持ち、深い友情のあかしを示してくださる司教様方のために役立ちたいという希望と、教区の管理ではなく、完全に福音宣教の使命を託されていたことが分かっていた特別な使命に応えられないことになりはしないかとの恐れの気持ちに分かれていたからでした。いずれにしても、師はフランス教会の教区再編成によってやがてこの重責から解放されることを期待して、教区管理の任務を引き受けることになりました。

バザ教区は広範囲にわたっていたのでその管理は重い負担になりました。教区はトルドーニュ県のセント・フォア・ラ・グランド市からラ・レオル郡を含めてロッセ・ガロン県のカステルジャル市まで斜めに、ジロンド県全域に広がっていたからでした。1792年以来、1795年から1797年の短い期間を除いて、教区はキュルテュル師自身に委ねられ、師はその権限を行使することが出来ました。しかし、教区にはわずかな忠実な司祭しか残っておらず、大革命の間、様々な書類は紛失し、資料室全体が無くなっていたので教区の再編成は更に困難になっていました。

シャミナード師はボルドーにおける聖職を犠牲にすることなく、自らの任務を果たすため、大革命のつらい日々を共に生きてきたフランソワ・ピノー師を秘書として協力していただくことにしました(15)。更に、シャミナード師はバザに定住出来なかったため、カオル教区のロゼルトの旧主席司祭であったピエール・ファバ師(16)を副管理者として同市に定住させました。更に、シャミナード師は教区の他の地域を同様の資格でプジュ師とリュガ師の二人の司祭に委嘱しました。

しかし、こうした処置によって、すなわち、様々な実状を自ら把握する代わりに副管理者に直接処置させることで、しばしば現地に赴くことを免れることはありませんでした。バザ教区の記録簿が明らかにしているように、師は教区の視察を利用して説教を行い、秘蹟を授けていたからでした。

困難は著しく、しかも各方面から同時に起きました。しかし、カトリック信者たちの善意には不足がなく、彼らは教会を助け、司祭の生活費さえ援助するよう努力していました(17)。しかし、市民憲章同意の司祭たちは多くの教会を占拠していました。例えば、彼らは、その司教ラコンブのように、思い上がって新たな力で信徒を統治することを考えていました。バザ教区においては、カテドラルのセン・ジャン・バプティスト教会のみがカトリック信者の自由になっているように思われました。一方、これらの離教者たちの側でも、その司牧の当局者が用心して行動するようになるという他の種類の分離が起きていました。それは共和歴8年の憲法に忠誠を誓うことを拒否した司祭たちでした(18)。当局から疑われ、訴追されさえた彼らは市民憲章受諾の司祭たちによって開設された公の祈とう所の側に秘密の祈とう所を持っていました。シャミナード師は彼らを非難することも、また、彼らの新しい立場に賛成することもなく、すべての司祭たちの中に一致が確立するよう努力しました。この一致こそ、なお危機的な状況の中で善行の最高の条件だったからです。

当局に対する立場は次第に厄介になっていました。政府からの命令は、旧体制の司祭や市民憲章拒否の司祭に対しては別として、市民憲章に忠誠を誓った司祭たちに対しては一般に寛大でした。そこで、シャミナード師は市民権を無視したこの区別を考慮しなければなりませんでした。このように混乱は続いていましたが、バザの郡長とボルドーの大司教間に交わされた2通の書簡をしばしば朗読するというすばらしい考えが生まれました。郡長のカッルージュは次のように説明しました(19)。「国外追放にあった司祭たちや隠れていた司祭たちがその聖職を公に実施するようになって以来、これらの司祭たちと宣誓司祭たちの間に多くのトラブルが生じました。宣誓司祭たちはわたしに色々苦情を申し立てていました。わたしはある人々に何らかの忠告をなすよう許可しましたが、わたしはなおあえて責任を引き受けられないほど、この問題はデリケートでした。共和歴8年(20)の憲法受諾司祭たちは、多くの結婚式をやり直させ、市民憲章宣誓司祭のミサに出席した信者が洗礼の代父、代母になることを禁じました。そして、宣誓司祭たちを非難し破門に値すると叫びました。ボルドー在住でバザの司教総代理と言われていたシャミナードという司祭は、カトリック信者への説教のためこの市を訪れることが期待されていました。確かなことは彼は政令に服従しなかったことです。そして、この地方のうわさによれば、彼はボルドーでも求められていなかったが、無条件に自由にその聖職を行っていたということです。彼は政府によって要請された保証を、この地方で司祭たちが要請するのをわたしたちが妨げていると言っていました。いずれにしても、わたしは法律しか知らず、また、極めて寛大で、極めて和解的だと考えたこの件に関する政府の決定しか知らなかったのも、問題がわたしの権限に属する限り、た

とえ政府の見解に服従したにしても、あるいはまた、服従する意志があったにしても、事前にわたしが知ることの出来ない聖職を実施するために、どのような司祭もわたしの郡に来てはならないと宣言しました。本書簡の件に関して、どうぞ知事殿のご意見をお聞かせください。敬具」

知事は、共和歴9年芽月25日(1801年4月15日)付けで次のように回答しました。「司祭たちが政府の祖国復帰命令への好意も、今までにない最も優しい、最も寛大な政府の下で生活する幸せも感じていないということを聞くのは悲しいことである。彼らは政府が彼らのためになしたことを修正させようと務めているという風評さえ聞かれる。あなたが置かれている立場は、最も挑発的な司祭たちを直ちに捕らえさせ、駐屯地から駐屯地へ、そして、国境まで連行させることが要請される。あなたは、不服従の司祭たちの中から、あるいは、共和歴13年の憲法受諾者の中から挑発的司祭を選ばなければならない。彼らはその誓約を軽視し、家庭や市町村にトラブルを引き起こしているからである。政府はわたしの権限としてこの活動費を負担するに違いない。ボルドーのように人口の多い都市では不服従の司祭は警察の警戒を逃れることが出来るかもしれないが、このことは法律の軽視であると同時に行政官の軽視であることを確信していただきたい。執政官の布告は至上命令である。したがって、どのような司祭もこの布告に服従することなく、聖職を実施することは出来ない。共和歴8年末に市町村に入っていた司祭は、聖職の実践の前に心からの服従のあかしを示さなければならないと記された警察庁長官の決定は、あなたにも伝えられたはずである。もし、バザの自称司教総代理がこのあかしを示さないなら、あなたの郡で聖職を行うことを彼に禁じなければならない。もし、彼の存在が何らかのトラブルを引き起こすなら、いかなる場合でもあなたの郡から彼を排除しなければならない。最近、レスパールの郡長もこのように行動している。わたしは彼の処置を承認した。それは彼が原則に従ったからである。わたしは迫害は憎むが、公的治安の責任者であることを決して忘れない。どうかこの治安を危険にさらすすべてのことを正確にわたしに伝えるようにしていただきたい。敬具」

同じころ、すなわち、1801年3月29日、レスパールの郡長は、「復活の祝日に郡の信者たちを熱狂させた」ドゥ・ラ・ポルト司教総代理を厳しい言葉で非難しました。知事は早速ドゥ・ラ・ポルト師を逮捕するよう命じ、尋問(4月9日)の後、監禁しました(21)。同じ運命がシャミナード師をも待ち受けているように思われました。それは、シャミナード師が警視総監ピエールの前に召還されたからです。そこで、師は、聖職者の服装の着用がまだ禁じられていたので、国民軍の制服を着て出頭しました。師は早速諸書類を提示し、ドゥ・ラ・ポルト師の亡命に関する資格が、どのように完全に規則にかなっているかが師にはきつと分かっていたに違いないということを証明しました(22)。警視総監は満

足しましたが、自分の祈とう所以外ではドンキホーテのような義侠主義を許可しないことを師に厳しく命じました。いずれにしても、シャミナード師は、人々に迷惑をかけてその宣教活動を危険にさらすことのよいように十分用心しました(23)。

1801年7月15日から16日の夜にかけて、政教条例が調印されたので、役人たちの干渉に終止符が打たれ、シャミナード師の教区管理の最後の年にはバザ教区の総代理の職が容易になりました。ジロンド県の行政区分に含まれていたバザ教区の大半はボルドー大司教区に合併されました。バザ市の正式の司教座が承認されるのを待つ間、後ほどの手紙があかするように、ドウ・カステラン師の仲介によって、オーシュの大司教とシャミナード師の間に頻繁に書簡が交わされていました(24)。次の年の春、最も多くの司教の任命が承認されました。オーシュの大司教はトロワの司教区を謙そんに受け入れ、そこで、1810年に帰天しました。ボルドーの首都大司教座は旧ヴィエンのダヴィオ大司教に委任されました。

次の書簡は、1802年6月19日に、シャミナード師がバザ教区の管理について新大司教になした最初の報告です(25)。

「大司教様、大司教様がボルドーの大司教に任命されたことを聞いて、私は、バザの全教区民と共に喜びを分かち合うために大司教様にこの手紙をさしあげる機会を得たことを心からうれしく思います。いずれにしても、私たちは司教様の着任を待ちわびていました。それは正に、大きな幸せの到来を熱心に待ち望んでいるようなものです。教区の聖職者や信徒は、大司教様に約束された新しい任地での聖職の恵まれた成功を予測する等、好意的な態度を示しています。

バザ司教区の大半は政教条約によってジロンド県に属するものとして、ボルドー大司教区に合併されました。本司教区の現状に関しては目下のところ詳細に申し上げられない状況です。

私は、司祭たちの資質、同様に小教区の地域性や教会の状況についてこれまで入手したすべての情報を添えた各小教区の一覧を大司教様のご来臨の折りに差し上げたいと思います。大司教様、私は最大の関心をもってその作成にあたりますが、多分なお不完全であるかもしれません。あらゆる種類の書類が、財産目録に至るまですべて焼失してしまっているからです。敬けんなオーシュの大司教様が本教区の管理を強いて私に託されたのは約18箇月前のことでした。私は大司教様に対する敬愛の献身から、そして、それ以上に神が教会のために私に鼓吹された愛によって大司教様の切なる勧めに従いました。

しかし、私はこの困難な任務の上に、ボルドー市の現状、そして、特に見捨てられた少年少女たちの現状からもたらされた多くの業務を併せ持っています。

大司教様、私の働きが御主イエス・キリストに何らかの栄光を帰し、私たちの信仰の回復に少しでも貢献出来ればと願っています。また、大司教様がみ摂理によって最も重要な牧者となられた御主の遺産を容易に司牧出来ますようお祈り申し上げます。」

シャミナード師は約束通り教区の状況に関する詳細な報告書を新大司教館に提出しました。教区の活動全体を報告するよう依頼されていたドゥ・ラ・ポルト師は、言わば、シャミナード師の報告書を書き換えるのみで、しばしば次の言葉を添えて報告していました。「詳細については同僚のシャミナード師が報告することになっています。」

ドゥ・ラ・ツール・デュ・ペン司教は、ローマの聖座から様々な恩恵を頂いてシャミナード師の奉仕に報いることを望んでいました。しかし、シャミナード師は、1801年3月28日に布教聖省によって与えられた「教皇派遣宣教師」の称号以外には何も受諾しようとしませんでした。どのような栄誉も師を教皇派遣宣教師以上に喜ばすことは出来ず、また、師の希望をよりよく満たすものでもありませんでした。師の使命は言わばサラゴサで柱の聖母から託された特別な召命だったからです。もし、何らかの栄誉を望むことが出来たとするなら、それは人々の中に信仰の王国を確立するため至聖なる乙女マリアの宣教師として聖座によって任命されるという栄誉だったからです。アントネリ枢機卿によってシャミナード師に伝えられた3月28日付けの教皇書簡によって、更に、他の恩恵が与えられることになりました。しかし、謙そんなシャミナード師はその恩恵を受けることを望まず、その件に関してボルドーの大司教の署名を決して求めませんでした。

ダヴィオ大司教の着任以来、シャミナード師は教戒師の任務とバザ教区の管理の任務を大司教の手に委ねました。それらの任務が臨機応変の業務でしかなかったからでした。そして更に、これらの臨時的な役職の時代は革命時代と共に終息していたからでした。

教会にもたらされた平和は真実で恒久的であるように思われました。しかし、それはどのような犠牲によってもたらされたのでしょうか。いずれにしても、こうした事情の下で、宣誓司祭たちには他のどのような場合よりも法外に思われる宣誓撤回の認可が与えられました。このように、これ以来、市民憲章宣誓司祭たちの復職のために要求された条件は、1795年にローマの指示によってシャミナード師が彼らに課した条件とは似てもつかないものになりました。このことはカ

ブララ枢機卿の司教たちへの次の書簡によって判断されました。「司教様、教会と和解を望む市民憲章宣誓司祭たちは、次のようにその宣誓の撤回宣言を致さなければなりません。『私は聖教条例に従い、第一執政官によって任命され、教皇聖下によって承認された司教の共同体に属します。』この宣言は当該司祭によって署名され、司教は、彼らは良心的に教会との和解に応じたと記載していただかなければなりません (26)。」

シャミナード師は聖座の諸法令の審判者として自認した方ではありませんでした。師は全力を尽くして母なる教会に奉仕することしか考えていませんでした。そこで、師はみ摂理によって与えられた畑を耕し、種をまく活動に着手し始めました。わたしたちは師の使徒的熱誠の豊かな創立を通じてその足跡をたどりたいと思います。



注

- (1) 共和歴8年雪7日(1799年12月28日)の宣言、オレイー著、「ボルドー全史」、2部、2巻、324ページ。
- (2) この書類は、「シャミナード師関係書類(ジロンド県)」、F7 5127 として国立資料館にありました。
- (3) 手紙のスタイルは、それがだれにあてられたかを思い出すなら、それは味気ないものではありませんでした。「警察長官殿、私は、私の苦しみを父親としてのあなたの懐に打ち明けに参りました。どうか私の願いをお聞き届けください。私は非宣誓司祭で、共和歴実月19日付けの法律の施行によってスペインに亡命したギヨーム・ヨゼフ・シャミナード師から、その亡命リストからの削除を懇願され、これを実現していただくためにその全権を委託されました。シャミナード師は同リストからの削除を望み続け、祖国を一瞬も離れなかったにもかかわらず、その氏名が同リストに記されていたからでした。」
- (4) 決定事項は実行されました。1801年8月12日付けでドゥ・カステラン師は、更に次のように記しました。「シャミナード師が彼女に手紙を書いたことを大変うれしく思います。その思い出に満足していたわたしにも手紙を下さったと彼女に伝えました」(ドゥ・カステラン師の記事)。
- (5) 1849年付けのシャミナード師からカイエ師への手紙にその詳細が見られます。
- (6) 1833年3月9日、ダヴィド・モニエ士への手紙
- (7) 1799年1月15日、ラムルス嬢への手紙
- (8) ボルドー当局者の宣言、C・ジュリアン著、698ページ。
- (9) この誠実な誓約は一般に混乱なく実施されました。しかし、このことは神の掟に結

ばれている良心に不安をもたらしました。したがって、一部の司祭たちは密かにその聖職を続ける方を選びました。その結果生じた討論で、誓約の非合法性の最大の支持者はモーリ枢機卿で、同枢機卿がモンテフィスコンから、教皇聖下はこの件を認可されていないことを信じさせるよう努力しました。教皇聖下は何も表明されませんでした。

(10) イレール・ルリエーヴル著、「ウルスラ会」、158ページ。

(11) ベルトラン著、「神学校史」、2巻、58ページ。

(12) このことは1801年8月に起きました。そして、この話はこの病人の孫から伝えられたものです。

(13) ボルドーの大司教館の資料室には、担当の司祭の許可の下に、シャミナード師がセン・シメオン通りの祈とう所で行った多くの洗礼証明書や結婚証明書が保管されていました。当時(1801-1802)多くの旧主任司祭たちは自らの教会の司牧を臨時的に再開していました。

(14) アメデ・ドゥ・グレゴワール・ドゥ・セン・シヴェール(1708-1792)司教は、マンド教区の出身で、ルイ15世国王の聴罪師となり、1746年以来バザの司教になっていました。そして、三部会の代議員にもなりました。そうした努力にもかかわらず、司教座の廃止を阻止することが出来ませんでした。シセ司教は1790年10月31日付けの書簡で、ボルドーの大司教館に司教を歓待することを申し出ましたが、司教はこれをことわり、教区民の中で死去する(1792年1月16日)ことを選びました。司教はバザの養老院の小さな墓地の貧しい人々の中に埋葬されるよう願っていたからです。司教の質素な墓は現在もその地にあります。(オレイ著、「バザ史」、1840年、参照)。

(15) フランソワ・ピノー師は1790年に叙階された若い司祭でした。1802年の公式の通達には次のように記されていました。「聖職者としてのあらゆる徳を備えた師は司牧のための最良の能力を備えている。」政教条約によって師はボルドーのセン・ミシェル教会の助任司祭に任命されました。1816年にグラブのセン・ニコラ教会の主任司祭になった師は、1845年10月15日、教会参事会員の資格で帰天しました。

(16) ピエール・ファバ師は1761年生まれで、政教条約後もボルドー教区に残り、オーロ教会の主任司祭に任命され、1818年3月9日帰天しました。

(17) バザ教区の副管理者からシャミナード師への報告(1802年1月29日)によれば、1801年間には、現金823フラン、小麦3ボワソー、26ピコテン、カラス麦14ボワソー、18ピコテンがカトリック司祭たちの生活費として信徒の委員によってバザ教区に納付されました。

(18) これらの司祭たちの中の主要人物はリモージュ教区のシニアック師でした。師は後ほどバザ教区の主任司祭になりました。

(19) 共和歴9年芽月22日(1801年4月12日)、「ジロンド県記録」、L・911。

(20) 彼らは共和歴8年の憲法に忠誠を誓ったカトリック司祭でした。

(21) 後の上院議員ジョベールの仲介によって師はしばらく釈放されました。ドゥ・ラ・ポール

ト師についての詳細をヴィヴィ師に感謝しなければなりません。

(22) ドゥ・ラ・ポルト師は1792年からフランスを離れていたのですべての亡命者の場合と同じでした。したがって、師は逮捕されることが出来たわけです。

(23) この物語は、その詳細は多少の違いはあっても、シャミナード師の数人の最初の弟子や師の家族によって語られたものです。

(24) 1801年8月の書簡によれば、ドゥ・ラ・ツール・デウ・ペン司教はシャミナード師に送った書簡で様々な不安を表明していました。それは、シャミナード師が政教条約の結果も、それは9月になってしか一般には知らされなかったからです、国境の通過が可能かどうかはまだ知らなかったからでした。

(25) この手紙は大司教館の資料室に保管されていたもので、ベルラン師によって、「神学校史」、2巻、40ページに掲載されたものです。

(26) 1802年6月10日の手紙



第 10 章 ミゼリコルド会 (1801)

ドウ・ラムルス嬢の指導 ❖ 悔悟女性の事業 ❖ ミゼリコルド会の上長 ❖ 最初の試練 ❖ 和解の式 ❖ 極度の荒廃 ❖ 事業の強化 ❖ 指導者へのドウ・ラムルス嬢の率直さ ❖ ミゼリコルド会と他の事業の特徴 ❖ ミゼリコルド会の共同体の移転 ❖ 類似の施設の創立。

それは1800年9月のある雨の日のことでした。メドク地方のぶどう畑は既に緑の名残を失い、完全に落葉する前に紅葉したぶどうの葉で覆われようとしていたころ、一見旅行者風の一人の訪問者がピアンの大邸宅の閑静な扉の前に立ち止まりました。ラムルス嬢が門を開いて、それがシャミナード師と分かった時、彼女の驚きと喜びはどれほどだったことでしょうか。3年の不在の後やっと再開した霊的指導者だったからです。また、彼女はその孤独の中で、特に父親の帰天以来、勇気づけられる必要があったからです(1)。更に、彼女の苦悩を増していたのは、司祭職に保留されている霊的援助が断たれていたからでした。彼女は16箇月もの長い間ミサにあずかれず、一度も聖体拝領をしていませんでした。彼女には、自らの過ちを素直に告白していた聖ヴェンセン・ドウ・ポールの肖像画以外には告白者がいませんでした。許しの秘蹟を受けることが出来る司祭はいなかったからです。

シャミナード師は、神がその恩恵で満たすことを喜ばれたこの魂を忘れることはありませんでした。師は亡命の遠国から彼女あてに何らかの頼りをなすことなしに過ごす月日はありませんでした。師は柱の聖母のご像の前でくみ取っていた慰めを彼女と分かち合い、師自身が力づけられていたマリアへの信頼を彼女に抱かせていました。1798年12月28日の手紙で次のように書き送りました。「柱の聖母に触れた布をあなたに送ります。もし、神があなたの難聴の回復によって栄光をお受けになられるとするなら、尊いマリアがこの布を祝福してくださったに違いないからだと思います。」1799年1月15日の手紙で、師は彼女の難聴快復の結果を次のように喜びました。「あなたの難聴が完全に回復したことについて神に感謝致します。神のみ旨が常に行われますように。」

師はこの手紙で、孤独や試練の中にあってもその本性の弱さに備えるよう彼女を励まし、万事に越えてみ摂理への子心の信頼を抱くよう求めました。「わたしたちは、わたしたちの意志が神のみ旨に完全に一致する時だけしか幸せになれず、心の平和を抱くことは出来ません。どうか、み摂理へのあなたの服

従や忍従によって、主が様々な出来事に左右されない平和をあなたにお与えくださいますように(2)。」師は、彼女が神によってはっきり受け入れられた犠牲として自らをささげた寛大な奉獻を思い出させて彼女を勇気づけました。神なるキリストは焼き尽くす犠牲のホステリアによってご自分をささげられたからです(3)。

「ご存じの通り、あなたが犠牲として自分自身をささげた奉獻を実現することは困難です。この奉獻を実現しようと努力すれば努力するほど、あなたの本性は反抗するに違いないと考えなければならないからです。多分、あなたの本性は犠牲にされるいけにえのようにもがくに違いありません。しかし、いけにえになった神の子羊に対するあなたの信仰と愛、イエス・キリストが尊いご受難によって神聖なものにされた苦しみや屈辱の価値についての認識、あなたと隣人のためになだめられなければならない神の正義等、これらすべての超自然的見方があなたの心に浸透するなら、あなたは、時々あなたを悩ませている事柄を無視するに違いありません。」

いずれにしても、シャミナード師は彼女と共に苦しみ、そしてそのことを彼女に隠すこともありませんでした(4)。

「本性を超越するようにしましょう。あなたは、苦しみへのいらだちを希望と愛の力で克服してください。わたしは、自分の感覚や感受性と信仰の姿勢で戦うことにします。あなたは、わたしがすべてを話すことを望んでいます。人間的に考えるなら、わたしはあなたに同情します。しかし、信仰に耳を傾けるなら、わたしはすぐ、『テレーズ、あなたは幸せです、苦しんでいるから』と申し上げなければなりません。」師が常に引き合いに出していた次の言葉を繰り返したのはこのことに関連してでした。「わたしは苦しむ人は幸いであるという固い信仰を持っており、至聖三位の神秘を信ずると同じようにこのことを固く信じているからです。」

そして最後に、師は地上の有為転変の上にその眼を向けさせ、苦しみをへりくだって甘受することによる魂の浄化の目標としての神の愛を次のように彼女に示しました(5)。

「神は、熱心な信者が聖女テテジアを愛している以上に聖女を愛するようあなたを育てられたように思います。これらの事柄についてもっとあなたと話すことが出来れば何と素晴らしいことでしょう。いずれにしても、ただ一つの勧めだけに止めたいと思います。しばしば自分の心を知るために反省してください。何か神以外のことにかかわっていないかを知るためです。もし、わたしが、神の愛に全く献身し、最愛な方の利益のみに敏感なあなたの心を見ることが出来るなら何

と幸いでしょう。」

「最愛な方の利益」とは魂の救いのことでした。シャミナード師の指導は、やがてこの目的に近づき、ラムルス嬢の心には極めて誠実な反応が見いだされました。師は彼女に自覚させた熱誠を時々抑制しなければならないほどだったからです。1799年1月15日付けの手紙では次のように書き送りました。「隣人に仕えるためあなたが持っている心の熱意や熱情を、あなたに対する御主の恩恵の内的な働きを妨げ、神のみ手への絶え間ないあなたの献身を中断してはなりません……。愛徳を実践する場合、何らかの節度は、しばしばその活動を続けるよりはもっと多くの善をもたらす効果があるからです。」

彼女の心に聖霊の働きを注意深く観察していたシャミナード師は、サラゴサでかいま見たすばらしい事業の協力者として彼女に摂理的に出会ったことを疑いませんでした。師は彼女への手紙で、特に亡命の終わりごろの手紙で、その計画の一部をもらしていました。1800年8月26日の手紙では次のように書き送りました。「勇気を出してください。年月は過ぎ去ります。あなたもわたしも、人生の歩みの中で年を取って行きます。多分わたしたちは同じ年齢です(6)。体は衰えますがまだ何もしていませんでした。問題はイエス・キリストと御母の栄光のために何かを本気で始めることです。このことを考えてください。わたしも考えます(7)。」

師はボルドーに帰ったらすぐにも活動を開始することを考えていました。他の宣教活動の確立のため基礎的な土台を提示することが必要であると考えていましたが、それは男子青少年のコングレガシオンと女子青少年のコングレガシオンの創立でした。ラムルス嬢は後者の組織のために神がシャミナード師に準備したように思われた協力者でした。12月に、シャミナード師が、慈善事業に献身していた老齢のドゥ・ピション・ロングヴィル嬢の訪問を受けた時、セン・シメオン通りの祈とう所では、既に様々な集会在試みられていました。この慈善家は前年の7月から、1784年にさかのぼるボルドーの非行少女たちの矯正教育の試みを再興していました。彼女は大革命前、デュドゥヴァン嬢やグラマニャク嬢の協力を得て、マドゥロンネット修道院及び良き牧者の修道院に配属されていた悔悟少女たちのために、彼女たちはそこで強制的に閉じ込められていました。任意の厚生施設を開設するよう試みていました(8)。経験不足のため、そして特に、彼女たちと共に生き、彼女たちのために生涯をささげようとする人がいなかったためにその試みは失敗しました。後にラランヌ夫人になったデュドゥヴァン嬢は「み摂理の孤児院」を創立しました。しかし、ピション・ロングヴィル嬢は決して最初の計画を放棄せませんでした。マドゥロンネット修道院や良き牧者の修道院のシスターたちの失そうのため悔悟少女たちの厚生が緊急の業務になっ

ていただけに、1800年には勇敢にこの計画を再興しました。不幸にして、彼女は年齢と病弱のためその創立の必要な働きに専念することが出来ませんでした。そこで協力者を探していましたが、ラムルス嬢を協力者に決めました。彼女がシャミナード師を訪れた目的はラムルス嬢に紹介していただくためだったのです。

ラムルス嬢の伝記記者の次の言葉に少し耳を傾けてください(9)。「用心深いことで知られていたこの敬けんな聖職者は、ラムルス嬢には他の慈善事業を計画しているので、前述の件に関しては彼女に伝えないで欲しいとドウ・ピジョン嬢に答えました。しかし、その後まもなく、反対の考えに強く動かされたシャミナード師はみ摂理の計画に背くことを恐れて、ドウ・ピジョン嬢に伝えたことを撤回し、彼女が自らの計画の遂行をラムルス嬢と自由に相談するよう委ねました。」師は、神がしもベアブラハムに求められた信仰の行為を、また、み摂理がその栄光を受けられるために自ら準備されたように思われた犠牲を、自分に求められているということが分かったからでした。そこで、師は、スペインでブエ師をささげて示した同じ寛大さで、ラムルス嬢をささげました。師は、石ころからさえアブラハムの子孫を生まれさせることが出来る神に全幅の信頼を寄せていたからでした。

ラムルス嬢から同意を得ることがまだ残されていました。すべての慈善事業で彼女の気に入らないものは何もなかったわけですが、ドウ・ピジョン嬢の提案に対する彼女の反応は芳しくなかったからでした。しかし、ラムルス嬢はセン・ジャン大通りの厚生施設の訪問を承諾しました。そこには15名ほどの悔悟少女が収容されていました。彼女は少女たちの中に入るとすぐその嫌悪感は消え、代わって内心の大きな喜びを得ました。一方、容易に支配されないことを意識していた少女たちは、お互いに、「ご覧、あの方はわたしたちを解放するに違いない」とささやいていました。

ラムルス嬢は施設を出るとすぐ心の底に前と同じような嫌悪感を感じました。しかし、再度の訪問で新たな満足感を得ましたが、また、新たな戦いも続き、こうしたことがしばらくの間繰り返されていました。シャミナード師は、彼女のこれらの様々な反応に対する無言の、しかし、思慮深い観察者になっていました。師の心にささやきかけていたものは、彼女に与えられた特別な、そして、思いがけない召命だったからです。また、彼女の犠牲としての最高の献身が激しい嫌悪感で彼女と話していた悔悟少女たちの間で実現するに違いないと感じていたからでした。事実、当時の日付の私的な書類の中に、次のような彼女の特別な熱意が感じられる献身の更新のくだりが見いだされました。

「主よ、もし必要なら、あなたのお恵みに対する感謝の気持ちも足りず、みじめな心ではありますが、わたしの生涯をあなたにささげることを約束します。あなたのみがわたしの苦しみを認めてくださるからです。」

彼女はわたしたちの本性の本質的な弱さを意識して更に続けました。

「神がわたしに何を望んでいるか分かっています。わたしは神に何も拒まない決心をしました。神もわたしの約束を受け入れました。この約束は他の約束と同じでしょうか。わたしは4年前から、ある場合には約束を守るために意識を活気づけることが難しいこと、しかし、苦しみながらささげるより祈りながらささげる方が易しいことを経験しました。」

彼女は過去を思い出すことで決して落胆しませんでした。

「この経験はわたしの献身を更新するようもっぱらわたしを励まし続けました。そこにより大きな価値を認めたからです。神よ、あなたへのわたし自身の奉獻、わたしに属するすべてのものの奉獻をお受けください。わたしは犠牲として自らをささげます。どうぞお望み通りにしてください。また、あなたのお恵みによってわたしが活用するすべてのものをお望み通りにお使いください。わたしは自分のために何も望みません。」

シャミナード師が、ラムルス嬢にまず短期間のため、次に、細心が快復するにしたがって長期間のために誓願宣立の許可を与え始めたのもこのころでした。

1801年のある日、彼女は夢をみました。それは聖フランシスコ・サビエールに現れたように多くの魂が彼女に現れ、彼女が大至急助けに行かなければ今にも地獄に落ちそうになっているという夢でした。彼女はこの夢に促されてついに決心しました。彼女は馬でピアンからボルドーに行つてシャミナード師の住居に直行し、師の指導によって厚生施設の規則を作成しました。次に、悔悟少女たちの所と一緒に行くよう師を促しました。施設の訪問を終えると師と別れ、ドゥ・ピション嬢を訪ね、もちろん何の予告もなしに、「今晚は、わたしはここに留まります」と話しました。こうして焼き尽くす犠牲が完了したのです。

ボワイエ師によって紹介された教会当局は早速シャミナード師を厚生施設の長に任命しました。この任務は、既に負わされていた多くの任務、すなわち、ボルドー市内で実施していた聖職、創立されていたコングレガシオンやバザ教区の管理等に加えられた任務でした。この任務には時間と様々な配慮が要求されました(10)。それはラムルス嬢の次のような証言によって判断されます。

「当所は新天地の無秩序のようなものでした。建物の建築には予定された礎石が考えられなければなりません。まず、それらの礎石が集められ、選択され、刻まれ、建築者によって使用されるか、または、放置されることとなります。これらの礎石は正にミゼリコルド会の最初の悔悟少女たちでした。狭い住居に集められ、閉じ込められていたような彼女たちは、正にその環境が彼女たちを危険な誘惑にさらしていたのです。不幸にして数名のものは激しい情欲や誘惑者の誘いに負けてしまいました。」

この他にも財源を生み出すためかなりの困難がありました。彼らが頼みにしていたのは寄付と悔悟少女たちの働きのみでした。財力が乏しかったのは施設に対する評判からでした。

ラムルス嬢は更に続けました。

「人々は至る所でわたしたちの活動を非難し始めました。それは、わたしたちの活動が、一方では、過度に熱狂し、軽々しく信じた想像の結果から生まれたものと見なされ、他方、原則的に罪を犯す哀れな、そして、何時罪を犯すか分からない無能力者でしかなく、同情を受けることなどからはほど遠く、かえって、憤慨のみを刺激するすべての悪の集団と見なされたからです。こうしたことから、ちょう笑や軽べつのみが刺激され、すべての援助資金が中止されることになったのです。院長の熱誠を支えていた神の全能の力がなかったならどうして直面していた困惑や様々な敵意と戦うことが出来たでしょうか。」

こうした苦境の中で、シャミナード師の最初の配慮は、セン・シメオン通りの祈とう所で呼びかけて、これらの気の毒な悔悟少女たちへの関心を引くことに成功した後援会婦人の委員会を作ったことでした。シャミナード師の友人の一人で、大革命中ずっとボルドーで過ごした敬けんなマルマンドの主任司祭マルテン・ドゥ・ボンフォン師はすばらしい宣教的な説教によって師を助けてました。ボンフォン師は信者たちを感動させ財布の口を緩めさせたからでした(11)。施設の創立発起人たちはみ摂理に信頼していたのでこのような援助を受けましたが、もちろん十分ではありませんでした。そこで、彼女たちはもっと多くの悔悟少女たちを受け入れるため、アルブレ通りのベン邸と呼ばれていたより広い住居に彼女たちを移すことにしました。

移転は1801年5月12日、昇天祭の前日、シャミナード師の指揮の下に行われました。教会のみすぼらしさから住居のみすぼらしさも判断されました。プジェ師は次のように語りました(12)。

「祭壇の前の布はラムルス嬢の衣服以外の何ものでもありませんでした。壁

紙に覆われた細長いインキつぼがローソク台の代わりをしていました。院長があちこちの礼拝堂から探し求めてきた手の指ほどの細いローソクをそこに立てていました。」

こうしたことにもかかわらずシャミナード師は荘厳に新居祝いを致しました。師は講話の後、少女たちが着ける黒色のスカーフを祝別し、ラムルス嬢の協力で決定した最終的な規則を読み上げました。翌日のご昇天の祝日にはミサをささげ、みすばらしい聖堂に聖体を安置し聖務日課を歌わせました。

師は荘厳な儀式が好きでした。師は人の心が分かっており、意志はもっぱら感覚によって善にも悪にも引かれることを知っていたからです。したがって、神と悔悟少女たちとの和解を特に荘厳な式で飾ること、すなわち、このすばらしい式の準備が厳しい規則によって規定されていただけにこの聖体拝領を盛大に行うことをちゅうちょしませんでした(13)。こうした最初の式は5月24日、すなわち、アルブレ通りに定住してから数日後に行われました。ラムルス嬢は次のように語りました。

「ミゼリコルド会の最初の成果は、厚生施設の上司であり、ジュリ(教会に復帰した悔悟少女たちはこのように呼ばれていました)の指導者であったシャミナード師によってもたらされました。シャミナード師がこのような最初の成果を神にささげる慰めを得たのは当然でした。誠実なジュリが熱烈な悔悟の気持ちでその過ちを嘆き、力強く洗礼の約束を更新し、深い信頼と愛をもって聖体を拝領し、至聖なる乙女マリアの制服を頂くことが出来るよう深い謙そんをもって願ったからです。そして、彼女たちは自分たちの改心が聖母マリアのおかげであったことを感謝しました。また、このすばらしい式に参加したすべての人々は頂いた感激を決して忘れませんでした(14)。」

やがて、悔悟少女たちは35名になりました。住居が狭苦しくなったので第2回目の移転が必要になりました。そこで、同じアルブレ通りのゲラル邸に移り住みました。この場所が今日ミゼリコルド会として知られている修道会の揺らんの地です。

ミゼリコルド会は様々な試練からの避難所であったにしても、ここでは多くの善が行われました。まず、ラムルス嬢がその恩恵に浴しました。彼女は極めて苦しい内的な危機を乗り越えることが出来たからでした。それは、妄想にかられ、やがて施設にも混乱をもたらしかねないほどの重症だったからです。彼女は何名もの少女を厳しく扱い、締め出しさえしました。このうわさは外部に広まり、ミゼリコルド会は悪評の対象になりました。こうしたことから会への援助は著しく減少し、数箇月間、創立の発起人たちを困らせるような真の窮乏に陥りました。

シャミナード師は婦人たちの後援会の他にローザン師や司教総代理のドゥ・ラ・ポルト師及びボワイエ師から成る司祭の委員会を作りましたが、それも無力だったので無駄でした。資金と需要の大きな不均衡を確認したシャミナード師は根本的な方針を決め、9月15日の委員会で少女たちの半数を立ち去らせることを決めました。ラムルス嬢もこの審議に参加していましたが、彼女は一箇月の猶予を委員会に懇願し、ミゼリコルド会に帰って少女たちを集め、実状を説明すると、彼女たちは、「パンと水だけ、ミゼリコルド会だからといって、わたしたちは長い間パンと水しかもらっていない」と叫びだしました。委員会から託された厳しい通知を彼女たちに伝えるために、しばらくして到着したシャミナード師も同様の不満を浴びせられたので、彼女たちに説明することは出来ませんでした。悔悟少女たちの動静からして、もし一箇月前なら、この厳しい決定の施行の必要がないように彼女たちは自分たちに課されるはずのあらゆる窮乏を自発的に受け入れていたに違いなかったからです。

月日が経っても状況の展望は開けませんでした。また、支払い猶予の月末に達しても全然仕事がなく、預金もなく、いかなる種類の蓄えもありませんでした。1801年10月27日の朝ほど大変な朝はありませんでした。ラムルス嬢が打診しようとしていた最後の援助も断たれてしまっていたからです。しかし、彼女の神への信頼は一瞬も揺らぐことなく、平静さが失われることはありませんでした。会の創立発起人たちが標語として選んでいた次の聖書のくだりは空しくなかったからです。「何よりもまず神の国と...を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる」(マタイ6:33) すべてのことが絶望視されていたように思われた時、救いが確実に訪れました。すなわち、同日の夕方、あちらこちらからパンやまき、ぶどう酒や野菜等が届けられました。それは正にみ摂理が窮乏に陥っている所に豊かさを行き渡らせることを目指しているように思われました。シャミナード師はすべての苦しみをラムルス嬢と分かち合っていたばかりでなく、それから数日後、ミゼリコルド会の委員会が、最近、市の他のどのような慈善団体よりも多くの収入を計上していたことを彼女に伝える幸せを感じるなど、その喜びも彼女と共にしていました(15)。

こうして1801年は過ぎていきましたが、この年は施設の記録簿に記しおかなければならない年でした。それは、ミゼリコルド会の機構を安定させる強固な土台を確立した年だったからでした。ミゼリコルド会のすばらしい発展をたどることが出来るにしても、ダイヴィオ大司教の、「そうです、そこには確かに神のみ業が働いていました」という言葉を繰り返さなければなりません。そして、この逸話はラムルス嬢の伝記により正確に記されています。また、シャミナード師は、このミゼリコルド会の事業は自分にとっては他の事業と同様親しい事業ではあっても、わたし自身に属するものではなく、少なくとも外見上同会とは「霊的な関係」

しかないと述べて、その協力者ラムルス嬢の前から身を引くよう努力していました(16)。

ラムルス嬢の伝記はシャミナード師とはほとんど関係なく書くことが出来たと考えるなら、そのような人々は実際に間違いを犯したことになります。神の人シャミナード師が40年以上もひそかにミゼリコルド会のために働かされていたとするなら、そのすばらしい活動の真相、すなわち、すばらしい活力をもたらし、なお、もたらし続けている事業の組織に寄与した師の役割の真相は明らかにされなければならないからです。

シャミナード師がミゼリコルド会の創立当所から負われた役割は生涯続きました。師はラムルス嬢の霊的指導者であり、厚生施設の公式で唯一の長上だったからです。ラムルス嬢はわたしたちが父祖に対して持っているような愛情のこもった尊敬と子心の服従を師にささげていました。彼女が師に子供のように素直に従っていたことは、彼女がある日師になした次のような立派な答えがそのあかしです。「神父様、わたしはあなたの言葉を注意深く聞いたのでよく分かりました。しかし、わたしは内心全く反対のことを考えていることを申し上げなければなりません。あなたがおっしゃっていることとは全く反対のことを感ずるからです。しかし、わたしは次のように結論づけました。すなわち、わたしの信念が確かであることや物事の実状が分かっているという保証がないということです。わたしの貧しい理性は確かに間違い得るからです。また、わたしは教えられなければならないこと、あなたはわたしを導く身分上の恩恵を頂いておられること、わたしはあなたに従う以外に何も立派なことをなすことが出来ないこと、こうしたことはキリスト者の信仰であるということです。したがって、わたしはわたしの考え方を捨ててあなたの考えに従います(17)。」彼女は2週間ごとに師の口頭上の承認ばかりでなく、なお、署名によって承認された個人的生活の規則書を提出していました。それは従順の道を歩み続けることが保証されるためでした。

不幸にして、ラムルス嬢の私的な書類はその帰天の前にすべて消失していました。しかし、わたしたちはシャミナード師の手元に残されて伝えられたわずかな書類によって、彼女がどのような足取りで完徳の道に進まれたかを判断することが出来ます。彼女は、その素直さによって細心を克服して神の子の自由に到達し、その本性によってもう支配されないかのように容易に内的な領域に行動することが出来たからです。もちろん、多くの苦痛や嫌悪感を耐えなければなりませんでした。

しかし、最高の危機も、最高のあらしも彼女の心の平静さや穏やかな容ぼうを動揺させることは出来ませんでした。当時彼女は1796年の奉献を更新し、こ

れに次の誓約を加えることだけに止めました(18)。

「わたしはイエスとマリアの至聖なる御心に、わたしが行うすべての善行、わたしの死後わたしのためにささげられるすべての善行をささげます。それは至聖なるみ心のお望みが彼らの善意によって満たされるためです。わたしはイエスとマリアの至聖なるみ心にわたしの意志を一致させ、イエスとマリアの至聖なるみ心への愛のために至聖なるイエスとマリアのみ心を愛することを除いて、すべてのものを捨てることを誓い、わたしに属し、わたしの利益となるすべてのものを至聖なるみ心の慈しみと優しさに委ねます。以上に基づきわたし自身の血でこの証書に署名しました。また、わたしが頂いた許しのあかしとしてこれからずっと神がこの誓約をなすことを勧められて署名した誓約を履行します。」

神が外的な恩恵によってこのはしめを恵まれたこと、そして、真に英雄的な彼女の信仰に奇跡をもってさえしばしばお報いになられたことは驚くべきことではないでしょうか。彼女について多くの事柄がうわさされていたのは、超自然的な事柄によって、身近な人々は別として、多くの人々が感動させられていたからでした。謙そんについて言えば、彼女は自分の謙そんについては気づいていなかったということです。これらの奇跡的な事柄について報告を受けていたダヴィオ大司教は、彼女について次のような高い評価を下されました。「彼女が奇跡を行わなかったことがわたしの驚きです。」

厚生施設の管理に関して彼女はシャミナード師にしか相談しませんでした。彼女は外部の干渉に対しては自主性を力強く明確にする必要を知っていたからでした(19)。彼女はその指導者と容易に理解し合うことが出来ました。それは彼女の素直さによるばかりでなく、なお、彼らの考えや意見の一致によるものでした。新しいチャペルに関して二人の間に起きた争い以外の他の争いは伝えられていません。その争いというのは、主祭壇の上に聖画か聖像を置くことを認めるかどうかの争いでした。しかし、キリストの大きな聖画を掲げることでまもなく合意することになりました。その聖画は今日なお残っています(20)。

したがって、ミゼリコルド会が実践上も精神上もシャミナード師の影響を受けていたこと、また、同じ創立者による他の施設の創立同様、共通の起源を表す家庭的な雰囲気を持っていたことを認めることは驚くに足りません。

シャミナード師の優れた特徴の徳であるみ摂理に対する信仰と信頼はミゼリコルド会の揺るぎない基礎、盤石の土台になっていました。その全歴史の各ページがこのことを雄弁にあかししており、そして、例えば、作業の授受や食前にみ摂理の連とうを唱える部屋につけられたボンヌ・プロヴィダンスの名称から、すべての資金が底をついたことが分かった時、ラムルス嬢が悔悟少女たちを次

のように言って踊らせたダンスに至るまで、個々の事柄がそのあかしの真実さを浮き彫りにしています。「今やわたしたちは神に全幅の信頼を置き、神のみにすべてを期待しなければなりません。皆さん、ひざまずき、何もないことに神に感謝してください。」彼女たちがそのようにするとラムルス嬢は続けました。「さあ、何もないので、喜んで愉快地踊ってください。」彼女たちはつぶやくことなく、その誘いに従いました(21)。こうしたことは正にシャミナード師の精神であり、彼女の頭の回転の速い性格に適合したものでした。

シャミナード師の影響が何事にも及んでいたように、乙女マリアはミゼリコルド会においてすべてにわたって重要な役割を演じていました。厚生施設はマリアに奉獻され、マリアのご絵が住居の一番高い所に掲げられ、施設のかぎはマリア像の下に置かれていました。毎月の初土曜日に行列が行われましたが、この行列はマリアがミゼリコルド会の母であり、女主人であり、最高の長上として、マリアに感謝するという特別な意向を持っていたからでした。また、毎日の3時の鐘の合図で、施設の全員が苦しみの母がたたずまれた十字架の下に集められました。このことはシャミナード師のすべての共同体で行われていました。マリアへの献身はラムルス嬢の生活に深く浸透していました。彼女はマリアに対して最も素直な信頼を寄せていたからです。例えば、彼女は、母親の心遣いの義務として、彼女が認めたすべての支出のレシートに至聖なる乙女マリアのみ名を記していました(22)。シャミナード師やラムルス嬢の表現通り、聖ヨゼフ、栄えある聖ヨゼフをその配偶者マリアから決して離すことが出来ないのは当然なことす。聖ヨゼフは施設の扶養者、養父として宣言されていました。なお、イエスの至聖なるみ心への信心は一日の聖務の特別な位置を占めていました。

ミゼリコルド会に取り入れられた精神は、シャミナード師がすべての宣教事業体に伝えるよう努力した精神、すなわち、「家庭の精神」として特徴づけられたものと同じ精神でした。この精神はミゼリコルド会の指導者たちにとっては素直さや品位を意味し、悔悟少女たちにとっては信頼や腹藏なさ、そして、全く強制されないことを意味していました。少女たちは決して無理にミゼリコルド会に入会することはありませんでした。例え入会したとしても望むなら立ち去ることは自由でした。指導者たちによってふさわしい環境が配慮されていたにもかかわらず、彼女たちの一人が退会したのはかなり驚くべきことでした。シャミナード師やラムルス嬢をボン・ペールやボンヌ・メールと呼ぶことによって厚生施設の一般的な気風が明確になっていました。

悔悟少女たちの服装は、この献身的な事業に生涯をささげた創立者ラムルス嬢を模倣するような質朴な服装ではありませんでした。ラムルス嬢は彼女たちに次のように教えていました。「あなた方の服装が質素でも、だれも不愉快に思

いません。修道女の立場から見てもあなた方は立派な身支度です。修道女のようにヴェールを着けていないだけです。世の人々の立場から見てもあなた方の服装は立派です。あなた方は喪服を着た未婚の女性のようにです。したがって、このようなあなた方はどこへ行っても排除されることなどありません。」このことはシャミナード師の固有の精神であったということがいつか納得出来る機会があるに違いありません。ラムルス嬢は生まれつきの魅力で模範を示していましたが、ある日当局者の一人から次ぎのように話しかけられました。「お嬢さん、あなたは、だれもあなたに何も断れないように話します。あなたには何も弁解しない、警戒心を和らげるようなものがあるからです(23)。」

ミゼリコルド会は、この会を知るようになったすべての人々から当然驚きと賞賛がもたらされました。ダヴィオ大司教は本会を「教区の奇跡」と呼ばれました。どのような著名人も本会を訪問することなくボルドーを立ち去る人はいませんでした。特に専門的な判断をなすことが出来る人々に深い印象を与えました。ミゼリコルド会と類似の修道会の院長はシャミナード師に次のように書き送りました(24)。「ボルドーの施設は何かすばらしい所です。確かなことは、わたしが知る機会を得、また、少なくとも詳細に観察することが出来た多くの施設で、ちょうど生まれ故郷にでもいるようにくつろぐことが出来たのはここだけでした。このような事業の精神や制度を理解し実践することは極めて難しいからです。」

ミゼリコルド会は驚くほど発展しました。1801年には同会の会員数は35名でしたが、1808年には90名になり、ラムルス嬢の帰天の年、すなわち、1836年には300名に、そして、それから10年後には400名に達しました。

アルブレ通りの第2の施設も久しい以前から十分ではありませんでした。1807年のある日、シャミナード師はラムルス嬢から、売家になっているお告げの会の修道院の一部の取得についての意見を求められました。ラムルス嬢にはお金がなかったからです。シャミナード師はしばらく考えた後次のように答えました。「あなたのお願いに答える前にわたしにも質問させてください。『あなたはこの事業が神の事業であることをしっかり考えていますか』

『はい、その通り固く信じています』

『あなたはこの事業に召されていることも十分信じていますか』

『はい、その通り固く信じています。』と彼女は答えました。

それでは、どうぞ買い取ってください。しかし、一部分の購入のみで満足してはなりません。住居と礼拝堂の二つの部分も購入してください(25)。」

このみ摂理への信頼は報われました。翌年、皇帝がボルドーを視察した時、マレ国務大臣はミゼリコルド会に関心を抱き、同施設購入費を国庫の負担として2万8千フランを計上し、更にその修繕費として1万2千フランの贈与を追加したからです。ところが、軽率な友人たちは政府から定期的な援助をもっと要請し懇願するようラムルス嬢に勧めました。ラムルス嬢はしぶしぶとはいえそうした意見を受け入れようとしていましたが、シャミナード師は彼女を引き留め、彼女の自由や事業の自由が軽々しく国によって拘束されないように伝えました。彼女はこの勧告を決して後悔しませんでした。それは、彼女が全幅の信頼を置いていたみ摂理によって決して裏切られることがなかったからです(26)。

ボルドーのミゼリコルド会に倣って処々方々で悔悟者たちの厚生施設の創立が企てられました。シャミナード師の手紙にはそれらの多くの形跡が見られません。ラヴァル、カオル、リブルンの三つの厚生施設は、シャミナード師の生存中からボルドーの厚生施設から直接派生したものでした(27)。その他の幾つかの厚生施設はミゼリコルド会の会則と精神から着想を得たものでした。このようにシャミナード師は、1824年にアジャンに、1830年にはローマにこの関係の施設の創立を要請していたことが分かっています。

ミゼリコルド会の事業の発展をたどる内に、年代順にたどっていたシャミナード師の活動の時期を著しく外れてしまいました。そこで、師の他の活動、すなわち、ミゼリコルド会創立前にラムルス嬢が協力した他の諸活動を説明するために元の話題に戻りたいと思います。

シャミナード師はこうした活動に協力するために寛大な犠牲を神にささげました。神はこのことを師に報われました。それは様々な新しい協力者が師に保証されたばかりでなく、ラムルス嬢自身もある程度まで協力者になったからでした。彼女はその師のように熱烈な宣教活動に献身していたからでした。いずれにしても、当初、ミゼリコルド会に様々な困難が生じた時でさえ、彼女は師の様々な活動を援助するためその意向に従っていました。師にとって彼女は生涯大切な協力者だったのです。特にボルドーの女子青少年コングレガシオンの創立とアジャンでの汚れなきマリア修道会の創立に協力したからです。したがって、彼女は本書でしばしば取り上げられることになります。



注

- (1) ラムルス嬢は1799年に帰天していました。
- (2) 1799年3月2日

(3) 1799年4月27日

(4) 1799年9月23日

(5) 1800年7月5日

(6) ラムルス嬢は7歳年長でした。

(7) シャミナード師は既に1799年1月15日の手紙で、ラムルス嬢が、多分父の帰天後、ピアノの田畑の売却を考えていたことから彼女に次のように書き送りました。「御主がわたしたちを近づけてくださいますなら、この隠れ家のために何か思いきった決定をしましょう。しかし、さしあたって、その負担を維持してください。」

(8) マドゥロンネットの施設については後ほど(第8章)再度述べる機会があると思います。グラン・カンセラ通りにあった善き牧者の会の修道院は、大革命の間、そのあかしとなった悲痛な悲劇のために有名になりました。(H・ルリエーヴル著、「大革命中のノートルダム修道女」、159ページ以降)

(9) イエズス会士P・プージェ著、「ラムルス嬢の生涯」、54ページ、1857年、ボルドー。」ほとんど発見されなかった1843年版の第1巻(ペリス、パリ、リオンで印刷)の代わりに、第2巻を引用しました。この伝記作者はシャミナード師とラムルス嬢の関係については極めて不完全な知識しか持っていなかったようです。彼はわたしたちが引用したラムルス嬢の私生活に関する手紙も資料も持っていませんでした。ドゥ・ラヴィニヤン師によって執筆されるはずであったこの伝記は、執筆開始時期に邪魔が入り、リオンの同僚の一人プージェ師に依頼したものでした。ラムルス嬢の甥で、ピアノの主任司祭ドゥ・メニョル師は本伝記の中に隠された時代錯誤に抗議しました。(1851年7月27日、ドンネ司教への手紙、ボルドー大司教館資料室)。第3巻は1888年に出版されました。

(10) ラムルス嬢によるミゼリコルド会の起源に関する覚え書き。「ラムルス嬢の生涯」、62ページ。

(11) ドゥ・マルセルス伯爵による、「ラムルス嬢の生涯」、64ページとボンフォン師の生涯、94ページ」、1810年、ボルドー。ミゼリコルド会にとっては不幸にもボンフォン師は旧マルマンド教区の管理に再就任するため、ほどなくボルドーを去りました。師は政教条約後司教によって同地に留められましたが、1809年5月15日聖人のような評判の内に帰天しました。同師に関する詳細な紹介がデウラング師によって1896年アジャンで公表されました。

(12) 「ラムルス嬢の生涯」、205ページ

(13) 更に所轄当局によって承認されたこれらの厳しい規則によって、大半の人々の想像を超えた残念な状態がもたらされました。しかし、40年の経験後、シャミナード師は極めて慎重に行動したことを次のように喜びました。「これが神のお恵みによって今日まで頂いた様々な成功の秘けつでした。時々すばらしい聴罪司祭たちに出会いましたが、彼らはこうした厳しい規則には、神聖な裁判所での職務上の一種の統制や多くの人々に対するそくばくが考えられると思っていたようです。しかし、彼らも早晚それらの規則を厳守することが正しかったことを認めるようになりました。ただ、わたしたちは時々、熱心の余り誤った聴罪師の頑固さから来た不幸に泣かされることもありました。」(ラムルス嬢

の伝記で見受けられた感動的な例、109ページ)

「世の中では、世間体は善の実行に臆病な人々を誤らせます。このことはミゼリコルド会では逆でした。世間体は偽善のマントーで覆われ、信心の態度をとるからです。」(ラヴァルのミゼリコルド会の院長への手紙、1841年3月17日)

(14) 「ラムルス嬢の生涯」、65ページ

(15) 「ラムルス嬢の生涯」、79ページ

(16) ドンネ司教への手紙、1845年9月26日

(17) 「ラムルス嬢の生涯」、325ページ

(18) 1803年11月21日

(19) 彼女の伝記中にその特徴的な例が見られます。338ページ

(20) 「ラムルス嬢の生涯」、245ページ

(21) 「ラムルス嬢の生涯」、281ページ

(22) ラムルス嬢もシャミナード師のようにヴェルドレの聖母の巡礼を特に好んでいました。

(23) これは全体のくだりを読まなければならない場面です。(「ラムルス嬢の生涯」、172-173ページ参照)。ラムルス嬢は1813年にパリに行きました。それはその滞在期間中に、取り上げられたばかりの労働の継続をタバコ委員会に申請するためでした。

(24) ルマンの善き牧者の修道会の院長、1839年6月4日。

(25) 「ラムルス嬢の生涯」、116ページ

(26) 「ラムルス嬢の生涯」、135ページ。彼女の伝記作家はシャミナード師をその記録に干渉させませんでした。しかし、わたしたちは、シュヴォー師からレオン・メイエ師への次の手紙(1851年5月22日)によって、シャミナード師が演じた役割を知りました。「皇帝ナポレオンがボルドーのミゼリコルド会に住居を寄贈しようとした時、シャミナード師は丁寧にこれを断ったことを想起してください。その理由は善行を行う上に自由がなくなり、そして、そのことはきっと起こりうるに違いないことを恐れていたからでした。」

(27) 1839年9月25日、カオルの司教は同市にミゼリコルド会創立のためフルニエ夫人を援助するようシャミナード師に依頼しました。ラヴァルの創立は1818年で、リブルンの創立は1840年でした。

第 11 章 コングレガシオンの創設時代 (1801-1802)

当代の各種青少年活動 ❖ 大革命前の信心会 ❖ 無原罪の聖マリアの
コングレガシオンの創立(1801年2月2日) ❖ 組織 ❖ 聖フィリッポ・ネリの
オラトワール会との類似 ❖ 女子青少年コングレガシオン(1802) ❖ 最初の
記念日 ❖ ダヴィオ大司教 ❖ 名誉教会参事会員に任命。

シャミナード師はフランスへの帰国後様々な活動に忙殺されていました。しかし、福音宣教の聖職も、バザ教区の管理も、そして、ミゼリコルド会の困難な創立も、師が神から召されたと感じていた使命についての考えを決して思い止まらせるものではありませんでした。したがって、迫害の当初、すなわち、1796年から追いつけていた考え、そして、サラゴサでより明確に確認され決定されたかつての考えが、革命家たちの熱情の沈静化が実現可能になって以来、これまでにないほど明確になっていました。宣教師を養成すること、これが師の使命であり、亡命から帰国以来の主要な専念事項でした。

追求すべき目標を定めた師は実施すべき手段については特にちゅうちょしませんでした。1796年でのように青少年が直接の対象でした。師は不健全な影響に抵抗し、絶滅することがおびやかされていた超自然的命を刷新する新しい、そして、高潔な血を青少年によって当時の古くなった社会に注入することを望んでいたからでした。このことはボルドーのシャミナード師ばかりでなく、パリのブルディエ・デルプイ師(1)、リオンのロジェ師(2)、マルセイのアルマン師(3)、そして、フランス各地で自らの時間と能力を最大限に青少年の指導にささげる決意の宣教的熱意によって刺激された聖職者たちの考えだったからです。アルマン師の最初の試みはシャミナード師の試み同様1797年にさかのぼりました。デルプイ師とロジェ師は1801年及び1803年にしか開始しませんでした。彼らは皆青少年を保護し、指導することを目指した過去に成功した制度の幾つかを復活させることのみを提案していました。デルプイ師とロジェ師は信仰の司祭会に属していたので、当然のこととして1560年にイエズス会士によってローマに設立され、聖座によってしばしば激励されていた名高い学生のコングレガシオンを想起していました。マルセイのアルマン師は、師自身幼年時代に加入していた善き牧者の司祭会士の青少年の事業を新しい需要に適合さ、再生していました。

シャミナード師はボルドーでこの種の二つのコングレガシオンを鮮明に思い

出していました。これらの二つのコングレガシオンは1762年のイエズス会の廃止後もイエズス会のコングレガシオンに倣って継続していました。第一のコングレガシオンは1689年にイエズス会士によって創設された職人のコングレガシオンでした。このコングレガシオンは1765年にカプチン会によって再開され、彼らの手で無原罪の御宿りの聖母の保護の下に置かれ、1783年5月3日の教皇ピオ6世聖下の教書によってボルドーのイエズス会が享受していたすべての免償、すべての特権が譲渡されて充実したものでした。このコングレガシオンは大革命当初まで存続していたので、シャミナード師はボルドー滞在中確かにその活動を見ていたに違いありません。しかし、このコングレガシオンは実質的に青少年を対象にしたものではありませんでした。(4) 第二のコングレガシオンはセント・コロンブ教会で1762年以降無くなっていた学生のコングレガシオンに代わるものでした。主任司祭のアラリ師と助任のノエル・ラクロワ師は神学校の若い神学生の養成に献身することだけでは満足せず、一般の学生や少年にまでその配慮を拡大していました。こうして、彼らは最年少の子供たちに初聖体の準備をさせ、最年長の子供たちを集めて罪のない娯楽で彼らをつなぎ止め、危険なつまずきや娯楽から彼らを遠ざけることに成功していました。ラクロワ師の伝記作者(5) は次のように伝えました。

「これらの集会はセント・コロンブ教会のコングレガシオンを市に呼び戻す原因になりました。ラクロワ師が青少年を集めたのは単に罪のない娯楽を与えるためばかりではなかったからです。彼らは教会内に指定席を持ち、特別な信心業や講話にあずかるため400名以上の青少年が集まっていました。ラクロワ師は毎年彼らの黙想会を指導しました。」

師は夏休みの間も彼らを放置せず、彼らに様々な危険を知らせるためのパンフレットを作りました。師は大革命の時でも、セント・コロンブ教会が信仰の要さいと見なされたほど彼らを引き留めることに成功しました。「鳩のふん」というあだ名は、彼らの信仰がジャコベン党の嘲笑を買った軽蔑の言葉として与えられたものでした。セント・コロンブ教会はカトリック教義への恨みから破壊されてしまいました(6)。

シャミナード師はラクロワ師の真の後継者になりました。師はラクロワ師と同じ熱誠、同じ高潔な性格、そして、同じくすべての人々への献身、特に青少年への熱情で活動したからでした。すなわち、彼らはこのことを熱愛し、また、理解し愛するのにいかにふさわしいかを知っていたからでした。前述の通り、シャミナード師にはこうした恵まれた天賦の才が認められていました。革命時代がまだ決定的に終息していなかっただけに、師が短日月の間にどのようにしてこの驚くべき結果に到達したかが伝えられているからです。

この点に関してシャミナード師の最初の弟子の一人は次のように語りました。(7)「教会に対する禁止令が解除されたばかりでしたので教会はまだ荒れ果てていました。信者たちはとてもおびえ、孤独でした。それはこの大都会で信仰の光を固く守って来た人々に囲まれていながら、信者たちは教会に行っても自分一人行っているように思い、別のトビアのように考えていたからでした。このことから、一つの修道会の会員の間にも越えがたい隔たりが生じていました。しかし、シャミナード師ほど時代や忍耐の力を知っている人はいませんでした。師は、障害に出会って、これを乗り越えるために、少しの無理もしない静かな小川の流に自らの歩みを進んで比較しました。小川の流をせき止めてその流を大きくするのは障害物そのものですが、やがて流は水かさを増してその障害物を乗り越え、あふれ、流れ続けていきます。熱心なこの宣教師シャミナード師は市の中心(セン・シメオン通り)に一部屋を借りるだけにしてこれをチャペルに変えました。師はそこでミサをささげ、説教をし、数名の信者が駆けつけて来たことが知られています。それらの参会者の中にコングレガシオンの二人の青年がいるのに気づいたので、ミサの時間に彼らに呼びかけました。二人はお互いに未知の間柄であることが分かったので、師は次の週一緒に自分の所に来るように促しました。それは彼らが互いに親しくなり、何らかの共通の行動について意見の一致を見るためでした。師は自分の勧めに同意したこの二人に、各々新たな友人を誘ってくるように約束しました。彼らはこのことに成功しました。こうして、彼らが4人になった時、同じ方法で8人を集め、やがて、より敬けんな意向に駆り立てられた12人を数えるまでになりました。神秘的とも思われたこれら少人数から出発したシャミナード師は真の召命活動を実施したので、小さな祈とう所はコングレガシオン会員を収容出来ないほどの成果を収めました。」

この質素なチャペルはセン・シメオン通りの住居の4階にあって、無原罪の御宿りの至聖なるマリアに奉献されてきました(8)。コングレガシオンの創立は1800年12月8日の無原罪の御宿りの祝日にさかのぼるということを伝統は確かに伝えています。しかし、12名のコングレガニストがマリアの祭壇の下に集まって、マリアに不変の忠誠を誓ったのは、次の2月2日の御清めの祝日でしかありませんでした。そして、マリアのみ名とみ旗がコングレガシオン参加への印になりました。次のくだりはその誓約文です。「神のしもべにして聖なるローマ・カトリック教会の子供である私は至聖なるマリアの無原罪の御宿りの信心に献身します。私は出来る限り青年の母としてのあなたを誉め、また、誉めさせることを約束します。神と聖なる福音が私を助けてくださいますように。」

奉献の証書が作成され、次のように署名されました。「青年の母、至聖なるマリアの無原罪の御宿りの祈とう所にて、1801年2月2日、ボルドー。」最初の署名はシャミナード師の署名で、その後、ベルナル・ロティ、ギヨーム・ダルビ

ニャック、ルイ・アルノー・ラファルグ、レイモン・ラファルグ、ジャン・バプティスト・エステブネ、エティエン・デュコ、フランソワ・タピ、カドゥヴィル、ジャン・デュション、ピエール・デュボス、アレクサンドル・デュボスの氏名が続きました。レイモン・ラファルグとエステブネは教師で、タピー、カドゥヴィル、デュションは学生、デュボス兄弟、アルノー・ラファルグは商人、ロティは聖職者志願者、デュコは靴家、そして、ダルビニャックはトランプ製造人でした。続いて3月25日には、バザ教区の管理で、シャミナード師の秘書をしていたピノー師がコングレガシオンに受け入れられ、コングレガシオンの習慣に従って最初の12名にその氏名が追加されました。ピノー師は、奉獻後しばらくして帰天したカドゥヴィル青年の跡を継ぐことになりました(9)。これら青少年の大半はラクロワ師のコングレガシオンに属していた人々でした(10)。こうして、彼らは過去のコングレガシオンと現在のコングレガシオンの橋渡しをしました。

デルプイ師がパリで6名の学生によってコングレガシオンの活動を開始したのは、くすしくも偶然の一致で、1801年2月2日のボルドーと同じ日付でした。コングレガシオンの歴史家は次のように指摘しました(11)。「大革命終息後、慈善事業の復興の件に触れた歴史家はパリでこの日付を特記したに違いありません。」それは、この日がフランスのキリスト教再生にとって最も強力な二つの宣教活動団体の同時創立による二重の記念日になったからでした。

組織的な活動を望んだボルドーのコングレガシオンは、2月3日に、シャミナード師の最も古い弟子の一人ルイ・アルノー・ラファルグを会長に選びました。この謙そんな青年は感動して、当時教皇ピオ7世聖下によって免償が与えられた、「いと正しく、いと高く、いと愛すべき神のみ旨が、すべてにおいて永遠にたたえられ、あがめられますように」との熱烈な祈り以外に、与えられた名誉への他の言葉を見いだすことが出来ませんでした(12)。この感動の叫びにコングレガニストたちは感動しました。彼らはこの神への信頼の祈りを標語として採用しました。したがって、それ以来、コングレガシオンの任務に選ばれた人々はこの祈りを唱える習慣を持つようになりました(13)。コングレガシオンの会長には数名の補佐、一名の書記、数名の評議員、そして、任意の分担金が計上された時、一人の会計が選出されました。

善の模範は悪の模範同様伝染するものです。信仰がほとんど守られていなかった時期に、また、当局が宗教上の儀式を「不適切」なものとして取り扱っていた時期に、そして更に、少なくとも世論がなお懐疑思想の偏見に犯されていた時期に、ボルドーの青少年たちは軽薄で、流行と快楽の奴隷と言われていましたが、互いに世間体を無視し、シメオン通りの指導司祭の下にその友人たちを紹介してきていました。彼らは歓待を約束されました。更に、少年たちは最

初の対話から、彼らを魅了し引きつけた指導司祭の好意をもっと深く感じました。こうして、彼らは賛同者として登録されたので新生の会員は増加していきました。8月15日には、コングレガニストだけで40名に、12月8日には60名になっていました。この時期から賛同者の数が増加したので、彼らに信仰上の義務を教え、コングレガシオンの事業のために養成し、その精神を注入し、コングレガシオン見習いの課程に彼らを導く任務を負わされた特別な担当者を置くほどもでした。こうして、彼らは無原罪の御宿りのマリアへの荘厳な奉獻式を受けるにふさわしく判断されるのを待っていました(14)。

新しいコングレガニストは類似の家庭環境の青少年で構成された別の分野に登録されました。その条件は、用心深く行動することを忠告する善意の人々の気持ちを傷つけることなく、かれらの協力を可能にする思慮深い用心の持ち主であることでした。こうした配慮のおかげで、セン・シメオン通りのチャペルはあらゆる階層のすべての来訪者に区別なく解放されました。大商人や船主の子息であったラコンブやカントナック、そして、フォルカードのようなコングレガニストは普通一般の使用人たちに接し、エステブネ、トマ、ラフォン、カイエのような教師、そして、ラボルド、ジョリのような学生、及び、その他のコングレガニストたちは彫金師や武器販売人、パン屋、呉服商、たる屋たちと知り合いになりました。彼らは皆マリアの子供だったからです。したがって、彼らは休息を共にし、祝日を共に祝い、指導司祭の熱のこもった言葉を共に聞いていました。世の青少年たちにとってこの感動的な友情は様々な段階の聖職者の存在によってより意味深いものになりました。コングレガシオンの創立の年、すなわち、1801年に、「無原罪の御宿りのマリアのコングレガシオンへの入会記録簿」には、ピノー師(3月25日)、ローザン師(8月7日)、ヴレシュマン師(8月15日)、デュキューブ師(9月1日)、ジャン・ボワイエ師(11月8日)等、いずれも司祭が登録されたことが伝えられています。更に、コングレガシオンの歴史にしばしば登場する助祭のヤシント・ラフォン師もこれに加えなければなりません。

ローザン師は正にその後のフランス宣教師会の創立者であり、有名な説教師でした。また、教区の再編成の際、その信心、精神、才能及び知識の点において、教区的最優秀聖職者とは言わないまでも、その一人として評価されていました(15)。師は大革命前、セン・プロジェの助任司祭であった時、既に頭角を現しており、当時多分シャミナード師と親交があったに違いありません。師はわずか4歳年上であったからです(16)。二人は亡命から帰国後も親交を結んでいたことも伝えられています。それは、異なった才能に恵まれた二人であったが、フランスの信仰の再生のために同じ熱情に活気づけられて類似の宣教活動に専念し、無原罪の御宿りのマリアへの同じ献身を表明していたからでした。大革命前からラザリスト会士であったヴィレシュマン師は1792年からシャミ

ナード師の親友でした。彼らは恐怖政治の間、色々変装して、命をとって戦ったからであり、共にみ心の信心を奉じてこれを実践し、共に総裁政府によって追放されたからでした。亡命先のローマから最初に帰国したヴィレシュマン師は、1796年の黙想会の間、シャミナード師によって準備されたファテン嬢の事業を支援していました。師がシャミナード師のチャペルで無原罪の御宿りのマリアへの奉献を宣誓する最初の一人になったことは驚くに足りません(17)。これと類似の関係で、デキューブ師(18)とジャン・ボワイエ師(19)がシャミナード師の下に導かれました。

これらの青少年たちの間に司祭がいたことは、これらのグループやローマの聖フィリップ・デウ・ネリの祈とう所における以上に似たような特徴を作り出していました。

2世紀前、聖フィリップ・デウ・ネリはフロランテンのセン・ジャン教会の高間に弟子たちと共に司祭や信者を集め、熱心な信心業の実践でのように、親密な談話によって信仰への熱意を持たせ、易しい宣教任務を与えました。それほど魅力的なこれらの集会はシャミナード師を鼓舞した理想でした(20)。

セン・シメオン通りの質素な住居において、聖フィリッポの祈とう所でのように、コングレガニストたちは自由に談話し、教義や護教、あるいは、教会史に関する様々な質問に対する討論によって目覚めさせられ、教化されました。こうして、彼らは指導司祭の活力に満ちた講話を聞き、忠告を受け入れ、激励によって勇気づけられ散会しました。シャミナード師は大勢の人々を魅了する雄弁の持ち主ではありませんでしたが、その落ち着いた言葉は良識、適切さ、せん細さ、そして、特に敬けんさに満ちていました。したがって、その言葉は人々を納得させ、心の奥底に健全な反響を起こしました。

聖フィリッポの祈とう所でのように祈りは共同で行われました。特に好まれた祈りは15世紀や16世紀の熱心なフランシスコ会士が神の母の栄えある特権と誉れのために、聖書の園でつみ取った祈りの花束、また、聖アルフォンソ・ロドリゲスが全教会を通して普及した祈りの花束であった無原罪の御宿りの小聖務日課でした(21)。更に、聖フィリッポの祈とう所でのように、感動的な宗教音楽が人々の心を軟弱にすることなく、これを高揚させ、魅力的な印象を与えていました。こうした宗教音楽は長い迫害の間、用心のために教会から遠ざけられていただけに効果的でした。青少年たちは心に力強い熱意を目覚めさせる賛歌を熱心に歌っていました。特に、「旅たちの歌」のメロディーで、歌詞が無原罪の御宿りのしもべの旗印の歌に変えられた「コングレガシオン」の歌を喜んで歌っていました(22)。

シャミナード師は青少年のコングレガシオンを組織した時、自分の任務はまだ半ばしか果たされていないと考えました。当初から、師は女子青少年の上にも配慮の一部をそそいでいたからでした。したがって、ミゼリコルド会の事業に関するラムルス嬢の思いがけない召命は師の当初の計画を妨げることになったわけです。しかし、師は直ちに信頼を回復し、1801年の間に女子青少年のコングレガシオンを開始しました。そして、それは男子青少年のコングレガシオン同様に成功しました(23)。男女青少年のコングレガシオンの聖務は完全に別々に行われていました。それぞれのコングレガシオンでは毎日曜日ミサと特別な説教がありましたが、女子のコングレガシオンはマリアの至聖なるみ心の聖務日課をフランス語で唱えていました。この聖務日課は、職人のコングレガシオンのようにカプチン会士によって指導された昔の婦人たちのコングレガシオンから取り入れたものでした。その上、彼女たちも無原罪の御宿りのコングレガシオンの名称を持ち、生活様式の要請に応じて同様に多くの分野に組織されていました。したがって、彼女たちのすべての活動も男子のコングレガシオンと同じ精神で鼓吹されていました。女子青少年コングレガシオンの登録簿は消失してしまっているので、創立当初のメンバーの氏名を知ることは出来ません。ラムルス嬢も彼女たちへの協力をちゅうちょしませんでした。彼女は自らの協力者たちと共に女子青少年のコングレガシオンに登録し、やがてその会長になりました。そして、この職を1809年ごろまで続けました。

シャミナード師は1801年間にこの新しい創立の一連の働きを終わりました。疲れを知らない働きのため病気になったのも驚くことではないでしょうか。バザ教区の管理補佐主任のファバ師が、1802年1月29日に、シャミナード師が健康に十分注意しないことをとがめて次のように書き送ったのも理由のないことではありませんでした。「あなたが重い病にかかったと聞いて大変心配しましたが、快復に向かわれたとのこと何よりです。あなたの絶え間ない働きによって教会に寄与する大きな善が、熱心の余り病気になって、教会にもたらされなくなるような、これからもぜひご自分をいたわるようお願い致します。」

病気が回復したシャミナード師は、2月2日、コングレガニストたちと共に彼らのマリアへの最初の献身の記念を祝いました。彼らは99人でしたが、なお修練中であった友人の一人のマリアへの献身の許可をシャミナード師に懇願したので、その数は100名に達しました。こうした友情の暖かい雰囲気の中で行われた奉獻は、彼らの心と意志の完全な一致からもたらされたものでした。

彼らの熱情は大きく燃え上がっていました。この幸いな日の記念を想起したシャミナード師はこのことをあかしし(24)、神と徳に魅惑されたこのすばらしい青少年の姿に知恵の書の、「*Quam pulchra est casta generatio cum*

claritate」のくだりを口ずさみ、次のような感動的な言葉で解釈しました(25)。

「今までになく最も墮落した時代の腐敗の中に、そして、あらゆる悪徳の中に、純潔で有徳な世代が生まれました。この世代はいと清いマリアの家庭の一員になることを熱望していました。果たして、すべてはマリアの家庭への尊い誕生を物語っています。彼らは悪を避け、徳に励むことしか考えていません。この家庭のすべてのメンバーは優しく愛し合い、いつも聖なるみ心の内に一致していくこととなります。たとえ、性格の相違、個人的欠点の名残がお互いの愛を冷ますようなことがあるにしても、平和と一致のために必要なことは、すべてのメンバーがマリアの母胎から生まれた兄弟であることを考えることだけです。」

政府は国民に対して緩和策を実施しました。そして、政教条約の施行が開始されたので教会はカトリックの祭式のために再び開放され、1802年の復活の祭日にはフランス全土で復活のTe Deumが爆発的な歓呼の内に歌われました。

困難の中にも入念に準備された司教の任命がようやく終わりました。市民憲章受諾のラコンブ司教(26)によって手に入れられたボルドーの司教座は、ご存じの通り、旧ヴィエンヌの大司教ダヴィオ司教に委任されました(27)。これ以上のすばらしい選択は出来なかったのではないのでしょうか。古都ポワティエ出身で、司教総代理であったダヴィオ司教は大革命時にはヴィエンヌの大司教座に就任していました。亡命のために出国しなければならなかった時には大司教座に就任したばかりでした。イタリー巡回中、長い間迷った後、最終的な決断をなす前に教区に帰りました。ポルタリ宗務大臣よりの書簡によって大司教のために意図された計画が知らされた時大司教はアルデーシュ地方の山地で福音宣教に従事していました。大司教はこの第二の大司教座で黙想や潜心を好んだからでした。ところが、政府はラコンブを大司教に任命しようカブララ枢機卿をおどしていました。事態を予見したダヴィオ大司教は自らの好みを犠牲にして大司教座の着任を受諾したのでした。

大司教はボルドーで聖人のようだとの評判でした。70年の司牧経験の上に、当時極めて必要であった優れた精神を特徴づける節度を兼ね備えていたからです。市内では市民憲章宣誓司祭たちがしばしばトラブルを起こしていたからでした。例えば、彼らの中の一人でセン・スレンの主任司祭は、説教台から自分を教区から引き離すには力づくでしか出来ないと明言していたからでした(28)。

1802年7月25日に盛大にボルドー市内に入った新大司教は、8月15日に臨時のカテドラルとなったセン・ドミニク教会(29)に入りました。それは、旧首都

大聖堂でカテドラルのセン・ダンドレ教会が、大革命当時の仮装舞踏会の名残が取り除かれ、祭式に必要なものが備え付けられるのを待たなければならなかったからです。これらの一連の歓迎行事の中で大司教が注目したのは、将来の慰めの先駆者となる熱狂的な青少年の一団でした。それはセン・シメオン通りのコングレガシオンだったのです。その熱心な指導司祭の評判は大司教の耳にも入っていました。大司教がパリで前任者のシセ大司教(30)に会い、ボルドーについて協議した時、「ダヴィオ大司教が最もしばしば聞かされ、最も熱っぽく語られた名前の中」にあったのはシャミナード師でした。シセ大司教は、「彼らは何とすばらしい青少年たちでしょう。むしろ天使みたいです。彼らはわたしの教区にすばらしい善を行いました」と語られました(31)。

司教総代理のラポルト師やボワイエ師は前任大司教のシャミナード師への配慮の報告を怠りませんでした。そこで、両師は改めて機密書にシャミナード師について次の言葉で記録しました(32)。「シャミナード師は7年間ボルドーに滞在してすばらしい働きをした。その熱誠と徳において極めて尊敬すべきこの司祭は、善を行うすばらしい手段を持っており、あらゆる点で高く評価するに値する」。両師は、当時ボルドーにあった五つの宣教活動の内、最も盛んで、最も救いの実りの豊かな二つの活動、すなわち、コングレガシオンとミゼリコルド会がシャミナード師によって指導されていること、そして、他の三つの宣教活動もシャミナード師と極めて密接な関係にあるもので、すなわち、ラランヌ夫人の「み摂理の会」はミゼリコルド会と同じ委員会によって管理され、ある程度シャミナード師の激励によって創立されたファテン嬢の「み心の会」は、師の友人でコングレガニストのヴィレクマン師によって指導され、ヴェンサン嬢の「み心の会」はシャミナード師の協力者ローザン師やミショー師、そして、モミュ師によって指導されているということを大司教に報告しました。

ダヴィオ大司教は、教区が再組織されたので、シャミナード師がペリギュールに帰ることを考えているのではないかと一抹の不安を感じていました。しかし、アングレムの司教座に合併されたペリギュールの司教座は例の余りにも不名誉な市民憲章宣誓のラコンブ司教に与えられていました。フランス南西部大都市の市民憲章宣誓の旧司教と尊敬すべきダヴィオ大司教のどちらを選ぶかシャミナード師はちゅうちょしませんでした。その上、シャミナード師にはボルドーとは切っても切れない縁があったので、これを絶ち切ることは出来ませんでした。したがって、ボルドーを去ることは問題外でした。シャミナード師の弟子たちは、ダヴィオ大司教がシャミナード師を教区の管理者として協力させ、ご自分の下に留め置くことを考えているに違いないとシャミナード師に知らせていたと言われています(33)。たとえそのことが大司教の意向であったにしても、大司教は十分賛意が得られなかったので思い止まりました。しかし、教区の信徒の刷新へ

の関心は、小教区の正式管理者の聖職者以外にも羊を導く任務を負わされた補助司祭の必要が要請されていました。シャミナード師は教皇派遣宣教師の資格によって、教皇聖下ご自身からこの使徒職に信任されたものと見なしていました。そこで、師はコングレガシオンの極めて効果的な手段によって、また、やがて初期の目的を達成出来るに違いない他の宣教活動によってもこの使徒職が続けられることを願っていました。ダヴィオ大司教はだれよりもこの教皇派遣宣教師という言葉を理解し、高く評価していました。司牧者が不在であった200の小教区にもかかわらず、大司教は、シャミナード師が採用していた使徒職が教会にとって最も有益なものとし、その使徒職遂行のために自由な活動を提供しました。

いずれにしても、大司教は、バザ教区を管理し、多くの市民憲章宣誓司祭を教会に復帰させ、更に、そのコングレガシオンによって著しい善をボルドーで行っていたシャミナード師の奉仕を忘れることは出来ませんでした。1803年6月27日、首都大司教座聖堂の教会参事会を再興した大司教は、まず、その一人にシャミナード師を登録しました。このことは、敬けん大司教があらゆる場合にシャミナード師に示した信頼によって特に増加していった尊敬の印であり、また、本書で十分あかしすることになる尊敬の印でもあります。



注

- (1) ジョッフロワ・グランメゾン著、「ラ・コングレガシオン」、14ページ、1889年、プロン社、パリ。
- (2) 同上、109ページ、229ページ
- (3) ガデュエル師著、「ジャン・ジョゼフ・アルマン」、1867年、ルコッフル社、パリ。作者はアルマン師を「19世紀における、いわゆる青少年の事業のフランスの最初の創立者」と呼びました。先の議論が確かなものでなかったにしてもこの断言には異議が申し立てられました。
- (4) コングレガシオンはカプチン会の修道院の敷地内に、大神学生たちが今なお使用している特別なチャペルを建てました。(L・ベルトラン著、「神学校史」、1章、434ページ)。ルイ・クラヴリ師のおかげで、「職人のコングレガシオンの会則、1786年、ボルドー、を入手することが出来ました。
- (5) タイフェル著、「ラクロワ師の生涯」、27ページ。
- (6) H・ルリエブル著、「ウルスラ会」、110ページ、121ページ。
- (7) エリオ及びバディシュ著、「修道会一覧中のマリア会」、ララン師の項(ミーニュ双書、4巻、744項)。

(8) 15番地のこの住居を特定することは出来ませんでした。この住居はセン・シメオン通りとアルノー・ミキョ通りの二つの通りに近かったように思われます。

(9) 1801年の帳簿には帽子製造人のアレクシス・ドゥ・コンブの氏名が記載されていました。しかし、受け入れの日付がなく、帰天のみが記されていました。多分、彼は2月日の祝日を天国で祝ったに違いありません。

(10) リガニオン師は既に自筆の覚え書きに記していました。

(11) ジョッフロワ・ドゥ・グランメゾン著、「コングレガシオン」、19ページ。

(12) 1800年5月2日付け教皇書簡。この免償は臨時的なものでしかありませんでしたが、1818年5月19日の教皇令で決定的なものになりました。

(13) キリスト教教育修士会でエロワ修道士となったルイ・ラファルグは、1816年12月9日、友人の一人ケンテン・ルストーに、その選挙の状況を内密に次のように語りました。「当日、役員選挙前にわたしは聖体の前で祈っていました。わたしは突然ある靈感によって強く感動させられました。そして、心の奥に次の言葉を聞きました。『あなたは会長に選ばれます。』わたしは強い確信をもって聖体の前から引き下がりました。選挙が行われ、わたしは会長に選ばれました。わたしは自然に、いと正しく...の例の祈りを唱えました。しかし、わたしはすぐに指導司祭に、わたしが選挙の時に早とちりの意識を持ったことを知らせました。こうして、恐らくコングレガシオンでこの祈りを唱える習慣が出来たのでしょうか。」

(14) 見習いの語Approbanisteについて、シャミナード師は後にProbanisteの語を選びました。

(15) 大司教資料室。ベルトラン著、「神学校史」、1巻、177ページ参照。

(16) ジャン・バプティスト・ローザン師は1757年12月5日にボルドーに生まれ、1847年9月5日パリで帰天しました。その生涯はドゥ・ラ・ポルト師によって伝えられました。1857年、パリ。1892年、ボンヌ・オウレス社によって再販されました。

(17) ピエール・ウレシュマン師は1755年9月12日にボルドーで生まれ、1831年6月27日に同市で帰天しました。ザラリスト会の共同体では師の生涯の思い出として一般に「ヴェンセン師」と呼ばれていました。師は生涯の大半をみ心の会の創立と指導のために献身しました。後ほど触れるように、シャミナード師は師の修道者としての経験に最高の信頼を置いていました。(ベルトラン著、「神学校史」、2巻、4章、6章参照)

(18) 1764年10月26日に生まれで、ポルテ教会の旧助任司祭であったフランソワ・デキユブ師は聖職者の再編成の折り、「熱誠と信心、そして、教養のある立派な司祭」として評価されました。師は1803年ニメリニャク教会の主任司祭に任命されました。

(19) 1759年1月30日生まれで、大革命前ブノージュのカリニャン教会の助任司祭であったジャン・ボワイエ師は、スペインからの帰国以来ボルドーで働いていました。1802年の評定では、「極めて教養が高く、温順で、優れた性格の持ち主」と評価されました。師はボルドーのセン・ピエール教会の助任司祭に任じられました。司教総代理のヨゼフ・ボワイエ師やオーシュ教区出身でセン・マルシアル教会の助任司祭のヨゼフ・ボワイエ

エ師とジャン・ボワイエ師を混同してはなりません。

(20) これはシャミナード師がその弟子たちに勧めていた理由でした。アジャンのマリアの娘の会での講話のくだりが伝えられています。「聖フィリッポはコングレガシオンが保持していたすばらしい方法で無数の善行を行いました。集会は2部から成っていました。第1部は人々の教化にあてられていました。聖人は30分あるいは45分続くような説教は決してしませんでした。聖人は1週間を通して一人の聖人を模範にするように勧め、彼らの精神を高揚する感動すべき激励を与えて終わりました。すべての人々が満足していました。何時も聴衆でいっぱいでした。精神は糧を見だし、心は立派な印象に満たされていたからでした。」このくだりにシャミナード師自身の指導方法が見いだされるに違いありません。

(21) イエズス会士ドゥビュシー著、「無原罪の御宿りの小聖務日課に関する考察」、「史的概要」誌の項、1886年、ブリュッセル、参照。

(22) コングレガシオンの歌の大半は敬けんな歌詞に変えられた世俗歌の借用でした。これは当時の流行でした。フランスの宣教師たちも余り宗教的でない世俗歌のメロディを利用しました。それは宗教への知識と愛と真理を大衆に浸透させるためでした。

(23) 女子青少年のコングレガシオンの年表には1801年6月2日の日付で記されています。

(24) 1848年シャミナード師による覚え書き、22ページ

(25) マリアのしもべの手引き、1804年版、5ページ

(26) H・ルリエヴル著、「ウルスラ会」、162ページ参照

(27) ツアル近郊のボワ・ドゥ・サンゼ城館で、1736年8月7日に生まれたシャルル・フランソワ・ダヴィオはラ・フレーシュヤボワティエでイエズス会士に、そして、アンジェの神学校でシュルピシアン会士師に教育され、1790年1月3日ヴィエンヌの大司教によって叙階され、政教条約後、教皇聖下に司教の辞任を申し出た最初の一人でした。司教は1802年4月9日ボルドーの大司教に任命され、6月2日教会法通り就任しました。1826年7月11日聖人のような評判を残して帰天しました。大司教の生涯は後のワランス司教でアルビの大司教になったリオネ師によって執筆されました。2巻、ルコッフル社、1847年。

(28) フィスケ著、「ボルドー教区のフランス司教」、442ページ

(29) 現代のノートルダム教会

(30) 司教はロンドンから帰国後エックスの司教座に就任しました。

(31) リオネ著、「ダヴィオ大司教伝」、2巻、276ー277ページ。

(32) 大司教館資料室

(33) セルマン氏の覚え書き

第12章 コングレガシオンの発展 (1802-1803)

宣教活動の拡大ーダヴィド・モニエ士 ❖ 父親の会のアグレガシオン(1802年、クリスマス) ❖ コングレガニスト司祭 ❖ 黙想の婦人会 ❖ コングレガシオンの精神 ❖ 混同なき一致 ❖ 宣教の精神 ❖ 無原罪の乙女マリア ❖ 政府への態度 ❖ カプララ枢機卿よりの教皇教書。

シャミナード師は、その適性や才能、同時にみ摂理の直接的な招きによって予定されていたコングレガシオンの指導司祭の地位に合法的な権利によって任命されて以来、親愛のコングレガニストたちのためにより一層熱心に、出来る限りの献身をしました。したがって、二つの系列、すなわち、男女青少年のコングレガシオンは著しく発展しました。ダヴィオ大司教のボルドー着任以来、しばらくして司教総代理のプレール・ドゥ・テール・ノワール師によって政府に提出された報告書には、両系列のコングレガシオン会員数300が記録されていました(1)。

シャミナード師は青少年への働きかけを制限する意向があったのでしょうか。師は自らの熱誠の効果の充実を目指すにしても、あらゆる年齢の子供たちを受け入れることをちゅうちょしませんでした。それはすべての宣教活動は聖書の教えや司牧活動に負っていたからでした。

しかし、青少年への働きかけも限度を超えないよう慎重に行動することが勧められました。熱心の余りその限度が認識出来なくなるからでした。師は、青少年の司牧に全力を傾注するように努め、暇つぶしするような余裕はありませんでした(2)。師は、実年に達した人々を司牧し、社会生活に入る人々を擁護する使命の配慮を小教区の司祭や黙想の説教師に委ね、自らは、み摂理のおぼし召しによって少なくとも長期間こうした司牧の境界を越えないよう要請されていたので、自ら描いた限られた司牧の範囲内に止まることになりました。

いずれにしても、師は、果たした責務、与えられた評価によって、あらゆる年齢の人々と親交を持つようになりました。したがって、多くの人々がセン・シメオン通りの質素な住居に訪れるようになりました。その中には数名の確固とした信念のエリート信徒がいました。彼らは革命時代を通してひるむことなく生き残った信徒であり、自らの気持ちを自由に表現出来るようになった日から、その賢明さと敬けんさ、そして、その教えが高く評価されたシャミナード師の下に信仰生活への支援と勧めを求めて来た信徒だったからです。彼らは、例えば、

大革命期間中ボワイエ師をかくまっていたクロード・ヘリエ氏、弁護士でギエンヌ地区の元行政官総代理、そして、定住地のマルティヤック同様ボルドーでもあらゆる慈善事業に献身していた慈善家のフランソワ・デュセーン・ドゥ・ボーマノール氏(3)、また、元行政官でセン・ルーベ市の市長、生涯シャミナード師と親交のあった特別な友人レオン・ラポーズ氏等の人々でした。

他の人々は、大革命の幻想に疲れ、長い間迷い、革命家たちの変節を恥じ、また、思想家たちの様々な詭弁が平和への渴望を人々にもたらすことを不可能にしていたので、シャミナード師のような良識や節度があつて、経験豊かで善良な聖職者の下に、乱れた生活から厚生するために集まってきたのでした。本書の関係で、彼らの中で最も興味ある人物はボルドーの弁護士のダヴィド・モニエです。彼はシャミナード師の下で積極的な役割を演じたので、本書でしばらくの間彼に注目したいと思います。

1757年9月7日にボルドーで生まれたダヴィド・ジャン・モニエは弁護士業に就くことを希望していました。彼が弁護士会に登録したのは後に大臣になったレーネと同年の1789年でした。彼が受けた教育がキリスト教的であったかどうかは判明しませんでした。いずれにしても、彼は宗教上の勤めをおろそかにし、思想家たちの学説に夢中になり、その戦闘的な気質からもたらされた熱意でこれを普及し始めました。ジャン・ジャック・ルソーの思想が彼の好みの思想の根拠になりました。大革命が起きると彼はこれを新しい時代の夜明けとして、また、社会契約の差し迫った現実として、そして更に、人々への平和と自由の到来としてこれを歓迎しました。彼は自らの活動範囲を広めるため、友人のジロンド党の議員たちとパリに行き、彼らの政治的陰謀に加担し、好みの作家たちの書籍出版に従事しました。

しかし、やがて彼の革命への熱狂も冷め、モンタニュー党の勝利や過激な恐怖政治によってこれまでの友人たちに対して嫌悪感を感じるようになりました。彼は、本来の熱い信仰が習慣づけられていたある改心者のおかげで、突然反革命派に転向し、やがて、君主政体の復興のために陰謀を企てるようになりました。彼は後のルイ18世でプロヴァンス伯爵の代理人の資格で、ドイツやイタリア等への様々な旅行を計画し、総裁政府の下でブルボン家のためにバッラ子爵の説得の試みに参加しました。カドゥダルの陰謀に介入した彼は第一執政政府の警官に逮捕されました。しかし、裁判では彼に対する証言が不十分だったので釈放されました。余りにも貧しい政治に嫌悪感を感じたのはこの時でした。そこでボルドーに帰ることになりました。

「彼は若い活力にあふれ、すばらしい機知に富み、ずうずうしいほど大胆な

人でした。彼は優れた話術によって望むすべてのものを言葉巧みに話すことが出来ました。また、当時の社会情勢を把握し、それらの事柄をおろそかにすることなく、最も重要で、最も慎重を要する問題を処理することに熟練していました(4)。」

彼はボルドーで早速高く評価され、セント・コロンブ広場の事務所は繁栄しました。しかし、信仰の問題に関してはいつもの通り無関心で懐疑的でした。その私生活はキリスト教の実践からますます遠ざかるばかりでした。キリスト教に対しては思想家たちに対するように過去の恨みを持ち続け、1789年の運動の大半の指導者のように信仰への態度を変えるのではなく、政治的な考えを変更したのみでした。

彼はシャミナード師に出会った時、この司祭に対する尊敬を拒むことが出来ませんでした。やがて、シャミナード師を信頼し、少しずつキリスト教の信仰に復帰するようになりました。彼はこの新しい指導者の下で長期間黙想をなし、黙想を終わった時、光を快復した盲人のように一変されました(5)。彼の改心は決定的で、その生活を全く新しい方向に駆り立てました。それから帰天に至るまで、その活力は慈善と信仰の普及に用いられ、友情と深い感謝のきずなによってその余暇も才能もささげたこの霊的指導者から離れませんでした。こうして彼はシャミナード師の下で活動することになりました。性格上の欠点から時には危険な協力者になり得ることもありましたが、その広い知識と熱誠と見事な熟練によってすばらしい協力者になりました。

このように各階層からシャミナード師を訪れた人々もまたマリアのしもべの資格を熱望していました。青少年のコングレガシオンのみにこの資格を認めることは軽率なように思われました。それは、コングレガシオンがその固有の性格と自由な活動を失う恐れがあったからでした。コングレガシオンが分離した場合、これをコングレガニスト自身でまとめさせることは指導司祭に新たな負担を負わせることであり、青少年の活動を誤らせることであり、もし、グループ自身が少しでも近視眼的な考えで支配されるなら、このことは特に教区民の教化を害する危険に身をさらすことだったからでした。

シャミナード師はこの重大な不都合を避けるため、そして、これらの善意の人々からグループの善意を奪わないため和解の解決策を採りました。師は1802年のクリスマスに「家庭の父親の会、アグレガシオン」を創立しました。この会はおっぱら男子青少年コングレガシオンを援助する組織で、会員は無原罪の御宿りのマリアへの信心に献身し、同時に会員の個人的聖化にも関心を持ち、その主要な目的としては青少年の育成、そして、概して出来る限りあらゆる

靈的物的奉仕をなすことを意図するものでした。会則には次のように明確に規定されていました。

「男子青少年のコングレガシオンの発展と完成は、ただ今から、わたしたちの活動の中心である。コングレガシオンの青少年が関心を抱くもので会員に無関係なものはなく、彼らの信仰と、市民社会での支援のために活動することは会員の選択した主要義務である。」

しかし、彼らは青少年コングレガシオンの管理には決して干渉せず、ただその経験と社会的地位や社会的関係による支援を青少年たちに与えることで満足し、もっぱら精神的な影響を及ぼすことにしていました。こうした理解の下に、家庭の父親の会のアグレガシオンは青少年コングレガシオンの活動を妨げることなく、かえって、有益な援助をもたらしていました(6)。

このアグレガシオンは小教区の権利や利益を侵害するようなことはなく、また、毎日曜日の固有の任務もありませんでした。かえって、小教区で信徒の奉仕に熱心な模範を示すように奨励されていました。その上、本会は小教区に不安をもたらすものとして発展することを目指すものではなく、また、エリートのみで集まるものでもありませんでした。彼らの徳の修得の理想は青少年たちに勧められていた徳よりも厳しい徳の修得だったからです。アグレガシオンではより充実したキリスト教生活、より実践的でより強力な信仰、そして、変動する世の中であってより大きな忍耐が要求されました。そして、保護の祝日として殉教者の元後の祝日(5月13日)が定められていました。1802年12月25日に奉獻式を行った最初の6名の会員は前述したラポーズ氏とエリエ氏、そして、商人のモロー氏、蜜ろう製造人ギョーム・ドルデ氏、地主のJ・フェイヤード氏、会社社長のベルナル・ギヌノー氏でした。本会は急速に発展し、やがて、例えば、デュセン・ドゥ・ボーマノワル氏、彫刻家のヴェンセン氏、有名な説教師で公証人のローザン師、弁護士のカヴィド・モニエ氏、そして、優れた慈善事業によってそのすばらしい生涯がたたえられたボルドーの弁護士会の名士の一人ギョーム・ブロンシオン氏等の著名人を数えるようになりました(7)。なお、本会にはトロカル氏、ボルドゥロン氏、アントニー氏、ラプラント氏、メスティヴィエ氏、ラバイ氏、カイル氏といった多くの医師や外科医もいました。更に、最も貧しい職人に至るまであらゆる職業人がいて、青少年のコングレガシオンの創立を激励したキリスト教の同じ愛の精神をこの家庭の父親の会のアグレガシオンに実現したのでした。

シャミナード師が、その年齢や地位によって尊敬に値する司祭たちをこのアグレガシオンに所属させようとしたのはこのころからでした。彼らは自らと自らの

働きを無原罪の御宿りのマリアにささげる恩恵を熱望していたからでした。そして、市内の聖職者の大半はコングレガシオン創立の当初、ローザン師やヴレシユマン師、デキュブ師やジャン・ボワイエ師、そして、フランソワ・ピノー師たちによって示された模範を早速模倣しようとしていたからでした。

1803年ごろから、尊敬すべき「長老」のノエル・ラクロワ師がセン・シメオン通りの祈とう所に駆けつけるようになったことが伝えられています。ラクロワ師は亡命先のポルトガルから帰国した時、セント・コロンブ教会の活動を再興した霊的子弟を見て大きな慰めを感じたからでした。やがて、師は自らもマリアの子供たちのリストに登録し、古きよき時代の温和な気持ちを彼らの中で再燃させるために、早速、コングレガシオンの見習い者の約束をなしたのでした。セン・ポール教会の助任司祭に任命されたラクロワ師は、その年齢でなお青少年のために献身し、シャミナード師のために未来のコングレガニストを養成する機会を再び見いだしたことを幸せに思っていました(8)。ラクロワ師の他にも聖職に経験豊かな司祭がいました。それは、例えば、ヴェンデー出身のミショー師のような司祭です。師は恐怖政治の間ボルドーで活動する機会を得ていました。そして、信仰の復活後もなおしばらくボルドーに止まっていた。

これらの老司祭たちに次のような熟年の司祭たちが加えられます。すなわち、改革フランシスコ会士でサラゴサでシャミナード師と亡命を共にしたジャック・ピノー師、大革命中聖職の働きを共にした様々な司祭たち、すなわち、シャミナード師の友人で、教区の元管理者でその後名譽参事会員となり、やがて(1808年)ダイヴィオ大司教の司教総代理になったヨゼフ・ボワイエ師やアントワン・マルトグット師(9)、教区でより高く評価された司祭で、セン・テロワ教会助任のヨゼフ・ラブアル師(10)、フランソワ・ピノー師と共にセン・ミシェル教会の助任司祭のヨゼフ・モミュ師(11)、そして、ジャン・ボワイエ師と共にセン・ピエール教会の助任司祭でラクロワ師の弟子であったコッスール師等です。ボルドーの多くの司祭たちがセン・シメオン通りの祈とう所に奉獻式を行うために訪れていました。例えば、大革命前タランスのセン・ジュネ教会の主任司祭であった時既に有名になっていたセン・ピエール教会の主任司祭ツーカー・ポワイアン師や、セント・ユラリ教会の主任司祭ベルジェ師、そして、セン・マルシアル教会の主任司祭ピエール・ディリヴェ師等でした。ツーカー・ポワイアン師は聖職者の市民憲章への忠誠の誓約によって引き起こされた神学上の論争に立派にかかわり、やがて、ボルドー大学の哲学教授になりました(12)。

ピエール・ディリヴェ師はいわば自然にシャミナード師の周りに集まっていたミュンダンの司祭団に属していました。ボルドー教区の数名の優れた司祭の選択は、アングレム教区とペリギュール教区の合併の時のラコンブ師のおかげでし

た。これらの教区出身の多くの司祭たちはある司教の下で働くことを望んでいませんでした。それは、その司教が市民憲章誓約の司祭を擁護する気持ちを持っていたからでした。これらの司祭たちはダヴィオ大司教に歓待され、ボルドー教区を悩ましていた宣教活動の極端な窮乏の貴重な協力者になりました(13)。

ピエール・ディリヴェ師とジャン・ディリヴェ師兄弟はボルドー教区出身でしたが、ミュンダンで教育され、シャミナード師兄弟と同期で、相互に親交がありました(14)。兄のピエール・ディリヴェ師はボルドー教区に帰りましたが(15)、弟のジャン・ディリヴェ師はペリギューに残り、ペリギューの宣教師祭団に入会し、すばらしい説教師として高い評価を受けました。大革命中スペインに亡命した師には、亡命の同僚者として、ペリギューの宣教師祭団の一人レオン師や、ミュンダン校の出身で、ジャン師よりも15歳ほど年長のピエール・ブニ師がいました(16)。亡命から帰国したディリヴェ兄弟はボルドーに定住し、特にこれまで専念していた説教の聖職を続ける許可を得ました。この兄弟司祭もセン・シメオン通りの祈とう所で無原罪の御宿りの乙女マリアへの信心に奉獻していました。

ミュンダンのグループの司祭でシャミナード師に最も身近な方は兄のルイ師でした。ルイ師はスペインから帰国後しばらくボルドー教区にいましたが、政教条約によって師に強制された司牧に関する嫌悪にもかかわらず、出身地の教区に帰りました。ルイ師はシャンスラード教会(17)の主任司祭を望みましたが、ペリギューの救済院付き司祭に任命されたからでした。師は青少年が大好きでしたので、彼らも師に引きつけられました。したがって、わずかな期間内に、ある人たちからは嫌がらせを受け、市民憲章誓約の司祭たちからは不満をもたらされるほどの影響を学校の生徒たちに与えました。師の立場が最悪になったのは、施療院のチャペルが彼らの教会よりも多くの人々を熱心に動員していることが分かった時でした。彼らは師の行き過ぎを司教に密告し、司教は特別の理由もなく当該チャペルへの使用を禁じたからでした。ルイ・シャミナード師はこの厳しい命令の意味が何であるかが分かりました(18)。ペリギュー教区は師自身のために分裂寸前だったからでした。そこで、ルイ師は自ら姿を消すことを選び、1803年の終わりごろボルドーに引き上げました。そして、ダヴィド大司教によって教区神学校の設立のための協力を求められるまで弟ギヨーム神父の聖職の手助けをしていました。

マリアに奉獻した司祭たちのリストが枯渇しないようにこのリストへの登録を続けなければなりません。それは、これらのエリートの司祭たちの協力によって、マリアへの献身をもたらしたシャミナード師がどんなに高く評価されたか、ま

た、父親の会アグレガシオンが青少年に対する役割を果たすためにも、あるいは、すべての宣教活動の中で、青少年コングレガシオンの指導司祭自身が助けるためにも、エリートの司祭たちの協力がどんなに効果的でなければならないかに注目しなければならなかったからです。

男子青少年コングレガシオンに対して父親の会のアグレガシオンがあったように、女子青少年コングレガシオンに対しては黙想の婦人会の組織がありました。この新たなグループは正に父親の会と同じ必要に応じて創立されたものでした。したがって、この黙想の婦人会の会員は、会員の助言や特に模範によって女子青少年のコングレガニスとたちを支えるよう彼女たちに関心を示さなければなりません。この黙想の婦人会は父親の会と同じ精神で生かされていましたが、会員数は制限され、会則は父親の会の会則より厳しいものでした。会員は毎日死の準備をなすよう勧められ、毎月の第一水曜日に月の静修をなすよう求められていました。

この黙想の婦人会の起源はラムルス嬢の事業の創立に関係していたように思われました。ミゼリコルド会の後援会の夫人たちがその主要な中核になっていたように思われるからです。会員は共同で黙想や死の準備をなすために毎月の第二金曜日にミゼリコルド会のチャペルに集まっていたことが伝えられています(19)。その後しばらくして、この黙想の婦人会は他の事業と同じようにシャミナード師のチャペルに落ち着きました。この会の発起人たちの氏名は分かっていません。創立当初のリストがすっかり消失してしまっていたからです。ただ、最も古参の役員はフルニオル夫人、ピツラ夫人、そして、ドウ・ノワレ夫人であったように思われています(20)。

シャミナード師は、父親の会のアグレガシオンと男子青少年コングレガシオンとの間の親密な関係のように、黙想の婦人会と女子青少年コングレガシオンの間でも、相互に親密な関係を保つことを目指して頻繁にコンタクトを取るよう指導しました。したがって、黙想の婦人会の会員は女子青少年のコングレガシオンの全体集会にいつも招待されていました。彼女たちは、時々、市内のいずれかの教会でささげられるミサにあずかり、総員聖体拝領をなすため共に出会っていました。聖霊降臨の祝日の当日、全体集会の会場はセン・タンドレ カテドラルでした。同日の夕方、父親の会アグレガシオンは男子青少年コングレガシオンと友好協定を更新するためそろってその集会に参加しました。1804年のこの集会のすばらしいスピーチが伝えられています。青少年コングレガシオンの演説者ラボルドに対して、デュセン・ドウ・ボーマノワル氏は父親の会を代表して、聖女ヒルデガルドの予言、すなわち、「人々が彼らのすばらしさをあかしするほど、新しく、しかし、まだ知られていない正義と平和の殿堂が建設されること

になりました」というくだりが、この和やかな集会で実現したことに出会ったことをたたえました。そして、結びの言葉を次のように叫びました。「そうです、皆さん、わたしたちは社会においてあなた方の父親や保護者、そして、あなた方の支えや擁護者になります。そして、あなた方はこれからわたしたちの様々な勧めや力によって愛し、助ける最愛の子供、若い兄弟になります。」憎しみと分裂を存分にまき散らした兄弟姉妹殺しの動乱が終息し、理解と思いやりの完全な共同体で、あらゆる年齢、あらゆる階層の人々の協力が得られたことは何とすばらし情景だったことでしょう。また、福音が人類に提示し、初代教会の信徒が実現したので決して妄想でないこの一致と愛の理想に燃えていたシャミナード師にとってもこの上ない慰めの光景だったのではないのでしょうか。

社会のあらゆる階層の人々がコングレガシオンの中で重大な不都合もなく相接するのを見たのはシャミナード師にとって最高の喜びでした。師はコングレガニストの傷つきやすい気持ちを予防するために、組織を幾つかの下部組織に分割することで満足せず、下部組織そのものの中で、多少とも自由業に属するメンバーと肉体労働に属するメンバーの二つの分野に分割しました。しかし、名目上のこうした区分のおかげで、活動の刷新を証明する完全な一致が得られました。

あるペシミストはシャミナード師に、善は社会の各層で困難な障害を克服するという手段によってしか行われないと断言しました。また、シャミナード師は、過去のコングレガシオンは雇い主としもべ、自由業者と肉体労働者がそれぞれ別々に組織されていたのではないのでしょうかとも問いかけられました。しかし、シャミナード師はこうした理由で動揺することはありませんでした。師は、「大革命の不幸以来、賢明な人ならだれでも、道徳界を動かす手段は何らかの形で新しい形の他の視点が必要であるということが分かるのではないのでしょうか。時代が変われば習慣も変わるからです」と語りました(21)。

鋭い知性の持ち主であったシャミナード師は世界が昔に戻ることを考えるような思い違いはしていませんでした。師は、善を行う手段が位置しなければならぬ新しい視点は社会の各層の人々の友愛関係の確立であることを予感していたからでした。また、師はこの友愛関係を明確な手段で目指す新しい社会制度の利点や不都合な点を議論して時間を無駄にはならず、何者もこの点を抹消出来ない事実として考えていたからでした。要するに、師にとってはこのことは本質的なものであり、この事実の合法的結果に関して、より純粋なキリスト教精神と調和しない何物も見いださなかったからでした。師が着目していたことは、教会は「当時、秘蹟の拝領について」、身分や貧富の差を認めていなかったということでした。いずれにしても、師は福音によって非難される極端な

平等の原則を推進することを試みなかったばかりか、「コングレガシオンの中に組織から一部の会員を切り離すことなく、お互いに気心の会っている人々を同一のグループでまとめるために、必要な多くの部門や下部組織を作りました。」そして、この方法には、「用心と柔軟性が必要でした」と付け加えました。師はこうした用心や柔軟性の特質を最高に備えており、師の原則の「混同のない一致」はその適応において空想でないことを証明したわけでした。

師は更に次のように語りました。「より高い階層の人々と出会うことが出来るコングレガシオンに貧しい階層の人々を受け入れることは、信仰のために、また、国のためにもどれほどの利益をもたらすことでしょうか。貧しい人々はどのような模範が示され、どのように励まされることでしょうか。また、上層の人々は、それほど多様で、関心の高い労働者たちにどれほど多くの善をもたらすことが出来ることでしょうか。」こうしたすばらしい成果がセン・シメオン通りの祈とう所で証明されたのは確かでした。各分野の下部組織は同一の組織に含まれ、各下部組織は唯一で同一のコングレガシオンに含まれていました。こうしてコングレガニストは相互の親密さを弱めることなく、各種社会階層の人々を受け入れる家庭の精神、また、コングレガシオンという家庭の長に対して「父」と、唯一の同じ言葉で呼ぶ家庭の精神によって生かされていたからでした。

ある日、女子青少年コングレガシオンの一部が通称セント・アンジェラと呼ばれていたコングレガシオンとの合併を申し出て来た時、シャミナード師はこれを断り、次のように話されました(22)。「16世紀の半ばにあったような女子青少年のコングレガシオンの復興に成功出来るかどうか疑わしいと思います。それらのコングレガシオンは組織を監督するための教師や指導者を作ることが目的でした。それは統治しようとする長上のコングレガシオンでしかありませんでした。しかし、今日のコングレガシオンの組織は統治される人々のコングレガシオンです。前者は言わば諸徳を教える組織でしたが、後者は言わば模範の伝達による迅速な意志の疎通です。」

シャミナード師は、様々な年齢や階層の人々の接触によって彼らが相互に教化される以上のものを目指し、積極的な宣教活動の手段を考えていました。したがって、特にシャミナード師のコングレガシオンは同名の他の組織とは異なっていました。シャミナード師は自らのコングレガシオンによって会員の聖化を容易にするばかりでなく、なお、特に大衆の中に宣教の種をまいて、社会のキリスト教的刷新に寄与することを目指していました。このことについて師自身の教えたことに耳を傾けたいと思います。

「昔のコングレガシオンには会員相互の教化によって熱心な会員を徳の道

に精進させる意向はほとんどありませんでした。刷新の時代である今日、教会は信徒に他のことを求めています。教会は、すべての人々が協力して司祭の宣教を援助し、その賢明な指導の下に信仰の復興のために働くことを要請しています。新しいコングレガシオンに吹き込まなければならないのはこの精神です。コングレガシオンの各会長は永続的な宣教師であり、各コングレガシオンは永続的な宣教です。．．． 布教や宣教の精神は新しいコングレガシオン創立の一つの特徴です。」

したがって、問題はご存じの通り信徒の結合、司祭の宣教活動への各階層の信徒の参加でした。シャミナード師はこのことを秘密にせず、コングレガシオンの会長の一人に次のように書き送りました。「宣教のために休みなく働いてください。そして、あなたのコングレガニストたちを小さな宣教師にしてください。『それが目的です。』」そして、師は、「このことを話してはなりません」と用心深く付け加えました。それは、余り宣伝しなくてもその目的は達成されうるからであり、また、任務の重大さのためにコングレガニストたちをしりごみさせ、異常な悪夢が教会の宣教精神に熱心な人々の過敏な自尊心を目覚めさせる恐れがあるからでした。

ご存じの通り、この共同宣教活動の旗印は他でもなく無原罪の御宿りの乙女マリアの旗印でした。この選択そのものが計画全体の指針になっていたからです。無原罪の御宿りの乙女マリアは純潔の模範として、また、貧しい哀れな人間に示された潔白の理想として青少年に提示されました。したがって、各コングレガニストが衣服の下に着けている白いリボンに奉獻した聖母にふさわしいことを思い出させるものでした。そればかりではありません、無原罪の御宿りのマリアは力強い乙女、悪霊への勝利者、原罪のあがないの印として人類の元祖に示された方、また、誤謬に対する真理、悪に対する善の勝利の象徴として示された方です。したがって、マリアは時代を通じて宣教活動の理想を具現化されたし、そして特にこの新しい時代の夜明けにこれを具現化されるのです。

これがシャミナード師の深い信念でした。それは、教会が取り組もうとしていた戦いは無原罪の御宿りの乙女マリアの戦いを最善を尽くして戦うことであり、無原罪の御宿りのマリアの旗印をマリアの子供たちに示すことはマリアの力に彼らの力を結集させることであり、マリアが彼らによって勝利を得るためにマリアに手を貸すことに違いないことだったからでした。このことは今世紀の修道会史によって証明された極めて新しく実り豊かな考えであり、シャミナード師が次の言葉で表明した考えだったからです。「新しいコングレガシオンは乙女マリアの誉れのためだけのコングレガシオンではありません。それはマリアのみ名の

下に進軍する聖なる軍隊であり、蛇の頭を踏み砕くべきマリアのご保護の下に地獄の勢力と戦うことを意図する軍隊です。」

Maria duce、これが新しい軍隊のときの声です(23)。

シャミナード師はコングレガシオンの本質的性格を要約して次のようにこれを明確にしました。

「このコングレガシオンは初代教会の信徒を模倣するものとして、頻繁な集会によってもっぱら一つの心、一つの魂を持つこと、そして、神の子供、キリストの兄弟、神秘対の肢体としてばかりでなく、なお、マリアへの信心の特別な奉獻と無原罪の御宿りの特権に対する公式の誓願によって、マリアの子供としてただ一つの家庭を形作ることを目指す熱心な信徒の組織です…。本会のすべての規則、すべての活動、すべての一般的及び特別の義務、そして、このコングレガシオンを生かす熱心な宣教精神さえも無原罪の御宿りのマリアへの献身に由来するものです。」

1803年以来、セン・シメオン通りのコングレガシオンはこのように紹介されてきました。同時代のある人は、「このコングレガシオンの色々な分野が市の最も熱心な信徒全体をいつの間にか統括していました」と述べました(24)。」しかし、このコングレガシオンは同一目的に向かって協力して活動するために統一された様々な分野の組織体で、その最初の力強い創立は、善のために疲れを知らないほど熱心に働かれたシャミナード師の先見の明と積極的精神によるものとして高く評価されるのです。

コングレガシオンの組織に対する極めてさい疑的な当局の束縛が恐れられていました。彼らはコングレガシオンの存在を認識していたからでした。しかし、大司教はこのことについてコングレガシオンに注意を促し、コングレガシオンをご自分の保護の下に置くよう配慮しました(25)。大司教はコングレガシオンを内務大臣に紹介しましたが、それはコングレガシオンを承認させるための口実でした。その報告書には次のように述べられていました。

「14歳から20歳ないし25歳の男子青少年のコングレガシオンは、日曜日と祝祭日に熱心な指導司祭の下に公の祈とう所に集まっています。彼らはここで彼らを取り巻く悪の危険に対処出来るような特別な訓練を受けています。すなわち、危険な友人たちから自らを守るための社会的なきずなが彼らの中に確立されているのです。彼らは、病気になった場合は互いに助け合い、物的、靈的援助を与え会っています。お互い健康な場合は、貧しい人々を助け、彼らが額に汗して働くことが出来るように彼らに働き口や仕事を与えるよう努力して

います。大都会の腐敗から300名以上の少年たちを保護し、救済したこの敬けんなコングレガシオンは良俗風習の復興に極めて有益な影響を更に拡大することが出来るに違いありません。したがって、このコングレガシオンは宗教的な観点からばかりでなく、社会制度やその秩序の面からも育成される必要があるものと思います。」

そこで、政府はコングレガシオンの活動を妨害することはありませんでしたが、この新しい組織に対して不信の念を抱いていました。シャミナード師がこの活動を決して秘密にしておかなかったからでした。師は気質上白日の下での活動を好んでいたのも、次のように述べていました。「すべて隠されているもの、秘密にされているように思われるものは、それが何らかの善に思われたにしても、わたしは常にこれを嫌いました(26)。」いずれにしても、内緒にしておくことは師の意図にそうものではなかったのです。師の次の表現によれば、「真に熱心ではあっても、余りにも少ない信徒の数を段々増加するために、熱心な何名かの生徒を集めるにしても、出来るだけ多くの大人や青少年を引き寄せることは」問題ではなかったからでした。この目的のためにはコングレガシオンの門戸が広く開かれていなければならず、更に、コングレガシオンへの入門が保証されていなければなりません。師は更に次のように続けました。「コングレガシオンの集会は公然と行われるので、必要ならば、教会当局や政府当局によって容易に監督される事が出来ます。避けなければならないことは相互に不信の念を抱く恐れです。」事実、警察は非難すべきことは何も発見出来ず、干渉もしませんでした。

シャミナード師はより上位の承認、すなわち、コングレガニストの熱意を刺激することが出来る霊的恩恵を伴った聖座自身の承認を熱望していました。師のコングレガシオンはカプチン会士によって指導されていた旧職人コングレガシオンと同じ名称を持っていたので、彼らが頂いていた恩典を頂くことを聖座に要請し、1783年5月13日付けの職人コングレガシオンへの教皇教書によって認可されたすべての恩典の譲渡を懇願しました。師は教皇聖下に自らの願いを披れきし、請願書の冒頭で次のように述べました。

「教皇聖下、イエス・キリストの教会は、数年来ボルドー市において、至聖なる乙女マリアの無原罪の御宿りのご保護の下に男女の青少年の集会所が設立され、日々入会者が著しく増加するのを見る慰めを得ています。そして、堅固な信仰を持つ熟年の司祭や信徒がこの有益な活動の激励と安定に特に献身的に尽力しています。そして、このマリアのしもべの魅力的なグループは、神のお恵みによって、彼らがいつか尽力することになる社会の各層に信仰と熱誠の精神を普及することに召されることを熱望する機会が与えられています。」

パリ駐在の教皇特使であったカプララ枢機卿はピオ7世教皇聖下からフランスの諸事業を規制するより広範な権利を授かっていました(27)。ダヴィオ大司教は次のようなくだりの推薦文を、欄外に請願書を記して、カプララ枢機卿に提出しました。「私は、このささやかな請願書を提出した敬けんな信心会が、規則正しさと熱心さにおいて特別な恩典の付与に値するものであることを教皇特使枢機卿閣下に証言致します。1803年5月21日、ボルドー。」

早速回答が得られました。すなわち、教皇特使枢機卿は1803年6月2日付けで、1783年5月13日の教皇教書は、新しいコングレガシオンにおいてもその効果を維持しており、カプチン会士に与えられた恩典同様、同じ様式で適用されるということをシャミナード師に伝達しました。教皇聖下によって保証された免償は正にローマのPrima Primariaコングレガシオンの恩典と同一のものでした。

この日からボルドーのコングレガシオンは公認の証書を保持することになりました。シャミナード師は、「いと清き乙女マリアのしもべの手引き」のタイトルで当時公表した祈とう書にこの恩典を記載しました(28)。感動的な言葉でマリアへの献身をたたえるためにささげられた前口上には、心の底から仕えるべき無原罪の御宿りの乙女マリアを仰ぐ喜びが表明されていました。そして、注に次のように記されていました(29)。

「4年前からいと汚れなき乙女マリアへの奉仕に献身するために青少年が示してきた競争心は毎日強化され、そして、熟年の会員は、青少年と一致して無原罪の御宿りの乙女マリアへの奉仕に献身することを誇りにしています。」

この手引き書の本文にはコングレガシオンの義務が性格に提示され、集会で使用する祈りや賛歌が含まれていました。

次章では、極めて賢明に、そして、慎重に組織され指導されたコングレガシオンの活動を検討したいと思います。



注

(1) 「大司教が、ボルドーで創立されたことを認め、そして、その維持が教区の善のために有益であると判断した集会や組織に関する記録」。大司教館の資料室に保管されていたこの報告書は、当時ボルドー教区にあった最も重要な五つの活動としてのコングレガシオンを指すもので、その五つの活動については第11章末に触れました。

(2) ローマ書、1章14節

(3) マリー・フランソワ・デュセン・ドゥ・ボーマノワル氏は、1756年7月2日にヴィティリ・ル・フランソワに生まれました。氏もまたシャミナード師のように1819年にヴェルドレの巡礼所で奇跡的にいやされました。1830年6月19日帰天。

(4) 修道会辞典、4巻、747欄

(5) 1835年7月5日、シャミナード師のカイエ師への手紙。シャミナード師はこの種の人々が改心する時には、「図書室、庭園、教会」の三つを与えることが有益であると教えました。

(6) 父親の会アグレガシオンには会長はいませんでした。事務長が補佐と呼ばれていました。

(7) 師は1814年に85歳で帰天しました。有名なフェルレール氏はその墓に向かって、「神父様の知識や理解の深さについてはだれも意見を述べることは出来ませんでした。また、神父様は常に反省された理性によって裁判所や公の意見に固執することがなかった40歳台から重大な事柄について争うことは決してありませんでした」と語りかけました。フェレ著、「伝記」、ギヨーム・ブロンシオン師の項、103ページ。

(8) タイフェル著、「ラクロワ師の生涯」、52ページ。

(9) 政教条約後セン・ユラリ教会に属し、後、刑務所の教導師になりました。

(10) バザ教区出身で、やがて首都大司教区教会の教会参事会員になりました。

(11) 師は当時コンドン教区に属していたプッシュ村(ロテ・ガロヌ県)に生まれ、1792年にボルドーに行き、この教区から離れることはありませんでした。

(12) ヴィヴィ著、「恐怖政治の歴史」、1巻、69ページ。ベルラン著、「神学校史」、1巻、198ページ参照。また、H・ルリエーヴル著、「ウルスラ会」、42ページのその前任者セン・ピエール教会の市民憲章宣誓司祭に対するすばらしい行為参照。

(13) 前述の司祭たちの他に、クレティアン師、デュタル師、リシャル師、そして、ヴェシヤンプル師等、ペリギュー教区はこの4人の司祭はボルドー市内のみの助任司祭として用いられました。

(14) ディリヴェ兄弟は1758年と1762年に生まれました。

(15) 師はブノージュのスリニャック教会の主任司祭になり、大革命中も教区を離れませんでした。ベルラン著、「神学校史」、2巻、27ページ以下。

(16) 師は1745年に生まれていました。前記ベルラン著引用、2巻、34ページ以下。

(17) ユージェン・シャミナード師著、「ギヨーム・ヨゼフ・シャミナード」、ペリギュー、1894年。(パンフレット八折、16ページ)

(18) 師の場合も特別ではありませんでした。コニャックにもサブローという他の司祭がいたからです。この司祭は多分サラゴサでシャミナード師と同じ亡命の仲間の一人だったと思われますが、ラコンブ司教によって似たような動機によって同じ運命に逢いました。

ラコンブ司教はしばらくしてランベル師やボルドーでより成功を収めた宣教師たちの受け入れを拒否しました。__後ほど、ラコンブ司教の伝記が出版されることになりましたが、その伝記は教会がこれの困難な時期に余儀なくされた譲歩についての参考になることは否定出来ません。

(19) 黙想の婦人会の創立当初の日付で印刷されたパンフレットや、同じ日付で印刷者レオンによる、「黙想日の聖務」と題するパンフレットがあります。これは多分シャミナード師によるもののように思われます。

(20) シャミナード師は、父親の会や黙想の婦人会に入会することが出来なかったが、ある形でそのすばらしい活動に参加することを望んだ人々にアッフイリエの称号を与えました。Congregacionの第3会のような会は決して組織されませんでした。

(21) 後ほどCongregacionの擁護について書かれた抜粋によります。

(22) 1817年三月九日、とランケレオン嬢への手紙

(23) マリアのしもべの手引き、315ページ、1820年版。

(24) リガニョン著、前述の覚え書き

(25) プレール・ドゥ・テール・ノワールの記録、前記参照

(26) 1809年、警察への報告

(27) 枢機卿はこの権利を1808年五月七日まで持っていました。

(28) レオン印刷所、ボルドー、1804年

(29) 4ページ



第 13 章 マドレーヌの小教会 (1804)

1804 年の大赦後のコングレガシオンの発展 ❖ マドレーヌの小教会とその歴史 ❖ キリスト信者の助けなる聖母の教会、コングレガシオンの本拠地 ❖ マドレーヌでの聖務 ❖ 日曜日の集会 ❖ 黙想会 ❖ 指導司祭 ❖ コングレガニストの養成 ❖ 慈善と宣教活動。

ボルドーにおける信仰復興の進展は日ごとにより目覚ましくなっていました。政府と和解したダヴィド大司教は、1804年1月12日付けの書簡によって教区の聖職者は聖職者の服装を着用するよう促しました。また、大司教は、教皇ピオ7世聖下によってフランス教会に認可された特別な大赦を、その年の4旬節に、教区の全教会で伝えさせました。ある人は、「聖職者は必ずしもそれほど熱心に努力しなかったのではないのでしょうか」と証言しましたが(1)、シャミナード師やコングレガシオンの司祭たち、特に、ローザン師、ディリヴェ師、ブニ師等はこの大赦実施活動の大きな担い手になっていました。

活動の結果は慰めに満ちたものになり、コングレガシオンは著しく成長しました。彼らは多くの人々の好意を勝ち得たので、常に増大する信望に応ずる他の分野の活動を考えざるを得ないほどでした。

セン・シメオン通りの住居はずっと以前から彼らを収容するには余りにも手狭になっていました。そこで、彼らは旧セン・プロジェ小教区教会に注目しました。この教会では、大革命前、乙女マリアの永久献身会の会員が集会を開いていました。しかし、政教条約後、小教区は廃止され、教会の建物は利用出来るようになっていました。

しかし、その取得費と修理費にかなりの費用がかかると共に、政府は小教区用に必要な建物以外の建物を祭礼のために修復する意向は毛頭ありませんでした。そこで、コングレガシオンは仕方なくしばらくの間最初の本拠地からほど近いメルシー通りの家に引っ越しました。

仮住まいは長くは続きませんでした。大司教は、コングレガシオンの将来の規則的な歩みと発展のためにこれを保証する住居を提供することが出来ていなかったために、事業の発展を大変心配していました。そこで、大司教は1804年8月から、これ以上望むことの出来ない環境のすばらしい住居を彼らに提示しました。すなわち、大司教は公認の祈とう所であったマドレーヌ、当時の

綴り字法の「Magdeleine」が一般に好まれていました、の小さな教会をシャミナード師に提案しました。

この建物はボルドーのイエズス会士の有名な中学校と同名で、この中学校にもフォッセ通りにも程近い所に位置していました。この教会は、大革命前、悔悟少女たちの受け入れを目的にして訓練施設を併設していたマドロネット会修道院のチャペルに使用されていました(2)。この修道院は1793年に分割売却されました。教会はエリ・ラファルグという商人の手に渡り、彼は大革命後しばらく倉庫として使用していました。

執政政府の下でこの教会は賃貸され、ボルドーで再開された最初の礼拝の場所になりました。シャミナード師はこの教会をしばしば使っていた聖職者の一人に数えられ、師は時々ここで市民憲章宣誓司祭に対する教戒師の務めを行っていました(3)。やがてマドレーヌ教会はセント・ユラリ教区の首座教会になりましたが、セント・ユラリ教会はなお市民憲章宣誓司祭の手に委ねられていました。敬けんな老カトリック主任司祭モンセク師は教区民をアイルランド人の教会に集めていましたが、やがて、助任司祭のルイエ師が荘厳な典礼を繰り広げ、信徒に大きな影響を与えていたマドレーヌ教会を選びました。モンセク師は、前任地セント・ユラリ教会の助任司祭ジョール師、そして特に、カネジャン教会の前主任司祭コードレ師によって援助されていました。コードレ師の説教はマドレーヌ教会の多くの信徒を魅了していました。当時のある人は次のように指摘しました。「師の説教は信心深いボルドーの信徒の好みには合いませんでしたが、長い間聞かされなかった尊い福音の言葉への信徒の渴望に十分応えるものでした(4)。」政教条約によって市民憲章宣誓司祭の祭式の執行が中止になり、教区の新しい行政区分が最終的に決定された(1803年)後、セント・ユラリ教区は昔の教会を復興しました。しかし、マドレーヌの教会は隣接の行政区分セン・テロワ教区の小教区教会として引き続き使用されていました。他方、セン・テロワ教会の修復は1804年8月までに完了していました(5)。

こうして、4年間、マドレーヌの教会での荘厳な典礼の施行は中断されませんでした。したがって、セン・テロワ教区が教会を荒れるにまかせていた時、教区民はそのことを嘆いていました。彼らはセント・ユラリ教会、セン・ポール教会、セン・テロワ教会がそれぞれ離れていることに大司教の注意を促し、マドレーヌの教会での典礼の継続を懇願しました。彼らの苦情は知事にまで届けられましたが、知事は何らの異議も唱えませんでした。大司教は、1804年8月14日の大司教令によって、マドレーヌの教会を分教会のランクに昇格させました。

この教会はシャミナード師にとって絶好の位置でした。大司教は、シャミナード師やコングレガシオンに大変関心を寄せておられたので、教会の分教会昇格命令公布当日、シャミナード師を教会の管理者に任命しました。コングレガシオンはその翌日から活動を開始し、至聖なる乙女マリアの被昇天の祝日を祝いました。

祈とう所の建物はどの建物よりもコングレガシオンの活動に適した場所に位置していました。市の中心に位置しているとはいえ、ラランド通り横の通りに隠れていたからでした。17世紀の建築になるこの教会は翼廊のチャペルによって広げられた唯一の内陣によって便利になっていました。また、側廊の効果を与える柱の間の引っ込みは多くの信徒の集会と説教や講話の聴取のため適切に設置されたものでした。2階にも1階同様広い部屋があって、修道女たちのアーチ型の昔の歌隊席が内陣に面していました。いずれにしても建物は堅固で、風雪に耐えることが出来るものでした。建築構造は極めて体裁よく、メインの輪郭が全体の調和を浮き立たせ、かなり高い丸天井が内陣と翼廊の交差点に高くそびえ、この種の教会としては建物にまれにみる開放的な外観を与えていました(6)。

コングレガシオンが最終的にここに落ち着いたのは12月になってからでした。ジロンド県のドラクロワ知事は分教会としてマドレーヌ教会の維持を認可し、大司教への書簡で次のように伝えました。「いずれにしてもこの建物の譲渡は臨時的でしかありません。ボルドー市は各種施設のための公共の施設が足りません。したがって、いずれ市はマドレーヌの建物の返還を要求するかも知れません。請願者の皆さんはこのことを覚悟しなければならず、純粋に無駄遣いになる支出を余り企ててはなりません(7)。」そこで、コングレガシオンはこれ以上心配のないことが保証されるまで何の計画も立てませんでした。

シャミナード師は、次の11月に、建物の相続者ラファルグ氏と5年間の賃貸契約を締結し(8)、教会の調度品を所有者になっていたプサック教会の主任司祭から買い戻し、大革命の時付けられた傷跡の補修に着手しました。それは大きな出費でした。財布は空だったからでした。しかし、み摂理によって助けられました。それはコングレガニストたちが教会の床や祭壇を新しくし、よりすばらしい装飾を施すことが出来て、教会をまずよりふさわしい状態になすことが出来たからでした。シャミナード師はペリギューのレコツレの教会に保管していた聖遺物やスペインから持ち帰った聖遺物を祭壇に備えました(9)。主祭壇の上にはアー通りのノートルダム修道女会のチャペルの入り口的大门を飾っていた乙女マリアの石像、革命家たちの破壊から免れていた、を安置しました(10)。

一方、ダヴィオ大司教はコングレガシオンの指導司祭のシャミナード師に、師及びその事業に対していかに敬意を表しているかを次のように述べて、すばらしい特典を与えることを望まれました。

「私は、あなたの配慮に託された青少年の立派な生活習慣と信心の養成への熱意に対し、また、数年前から啓発的に、そして、成功裏に指導されている立派な活動の成果を広め、永続させる方策を指導していることに対する公のあかしとして、あなたを首都大司教座聖堂の名誉参事会員に任命したいと思います。私は、前記教会で行われる祭式に関して、1804年11月12日付けの大司教令に従うという条件で、先に分教会として決められた通称マドレーヌ小教会の助任司祭としてあなたを任命することにし、任命しました。」

同日付けの大司教令によって、「マドレーヌの教会で宗教行事を継続する許可を得るため、セン・ポール、セント・ユラリ、セン・テロワ小教区教会の多くの信徒によって申請されていた『申請』が再確認されました。」そして、この大司教令は、「この件に関するジロンド県知事の承認」に言及し、地域の信徒のためのみならず特にコングレガシオンのために祭式を行う場所としてこの教会を承認しました。こうして、この大司教令によって乙女マリアの主な祝日、特に、無原罪の御宿りの祝日を荘厳に祝うことが許可されました。すなわち、「無原罪の御宿りの祝日は8日間祝われる。祝日当日には終日聖体顕示が行われ、更に、8日間はミサ中及び晩課中の聖体顕示と聖体降福式が行われる」と規定されていました。なお、黙想会の婦人会に対しては毎月の第1水曜日の聖体降福式が許可されました。

これらの主要な恩典に他の恩典が徐々に付け加えられました。例えば、コングレガシオンの第2の保護者で、指導司祭の保護者でもあった聖ヨゼフの祝日を荘厳に祝う許可、司祭団に保留されていた殉教者の元後の祝日、マリアのみ名の祝日等を特別に祝う許可でした。ダヴィオ大司教はマドレーヌで行われていた善を高く評価していただけない、シャミナード師には何も断ることが出来ませんでした。

コングレガシオンが新住居に快適に定住するようになって以来、コングレガシオンはボルドー市の教育のセンターになりました。それは、コングレガシオンがより直接的で具体的な影響をキリスト教生活の刷新に及ぼすことが期待されていたからでした。また、彼らの純粋で偽りのない有徳な、そして、迷いのない信仰のまな差しは、当時はそうした人々がまれであっただけに、一層効果的な模範になっていたからでした。彼らは世間体を気にすることなく、毎月、時にはマドレーヌの教会に、時には小教区の教会に聖体拝領に行っていました。また、

行列や公の祭式に出席していました。彼らの存在やその態度だけで生きた説教になっていたのです。

更に、コングレガシオンはその住居を出ることなく、集会の簡潔な運営や信心業の荘厳な実施によって人々を教化していました。他の様々な宣教活動より優れていたこの間接的で隠れた宣教活動はシャミナード師の意向に応ずるものでした。ここで手持ちの資料によって可能な限り当時のマドレーヌの宣教活動の特徴を追憶したいと思います。

1週間の典礼は、当該教会が分教会に昇格されたため地域の信徒のためでした。しかし、ここでは毎日のミサを除いて、金曜日の晩 *Stabat Mater* の賛歌を歌う聖体降福式ぐらいしか行われませんでした。

日曜日はコングレガシオンの日になりました。夏は朝6時から、冬は7時から、ラランド通りは活気づきました。ちょっと陽気な青少年のグループがあちこちから現れてマドレーヌの教会の方に急いだからでした。彼らは部屋に入り、先ず優しい眼差しであいさつを受ける指導司祭の下に赴き、それから教会に入りました。

二つの分野のグループが前後して教会に入るよう規定されていましたが、この規則は死文になっていて決して守られませんでした。より上級クラスのコングレガニストたちもこの不規則を気にしませんでした。彼らの中の一人は、「より貧しい友人のだれかを傷つけはしないかと気遣っていたためでした」と話したほどだったからです(11)。このことは祈とう所内でも同じでした。規則にもかかわらず彼らは自由に着席することを望み、シャミナード師もこのことを少しも気にしませんでした。幹部のみが指定席に着き、会長とその補佐は内陣の席に着きました。先ず、彼らは無原罪の御宿りの小聖務日課を、次に、*Memorare, O Domina Mea* の祈り、聖ヨゼフの交唱の *Fidelis Servus* を唱え、そして、ミサが開始されました。シャミナード師は常に自らミサをささげる権利を保留していました。二人のコングレガニストが侍者を務めました。シャミナード師が祭壇に上るとすぐ3人主要幹部が近づき、会長は、すべてのコングレガニストの氏名を記入した名簿を渡して、「マリアの信心に献身した青少年の氏名が神の小羊のいけにえの祭壇で命の本に書き換えられますようあなたの同意をお願いいたします」と述べました。この名簿はミサの間ずっと祭壇の上に置かれていました。シャミナード師はラテン語で福音を朗読した後、会員の方に向き直ってフランス語でこれを読み直し、そのくだりの数行を力強く適切に解説しました。この短い説教は聴衆を魅了しました。質朴で親しみのあるこの説教は聴衆の想像力を助けるため、聖書のぐう話や人物を目立たせることから始め、独創的な手段

で表現し、しばしば易しい心理分析を伴って最高の真理に及んだからでした。一般に説教の結論は実践的な信仰とマリアへの信心と祈りの必要でした。説教は15分を越えてはなりませんでした。指導司祭によって説教時間の配慮が指図されていた補佐は13分が過ぎると決められた合図をしました。こうしたさ細かな行為によっても、シャミナード師はきちょうめんな人であり、青少年を理解した経験な人であることが高く評価されました。

総員聖体拝領が行われる時、コングレガシオンの会長は聖体拝領前に大声で使徒行伝を朗読しました。すると、青少年たちは世の快樂からの離脱とキリストとのおきてへの忠誠を誓いながら聖体拝領台に近づきました。賛歌の感動的な調べやコングレガニストのケンテン・ルストー朗唱の詩編、「最愛の人はまだ現れません」のくだりのすばらしい調べが祈とう所の丸天井にこだまして、青少年たちを感動させずにはおかない深い魅力をミサ聖祭に与えていました。

この感動的な全光景は男子青少年コングレガシオンのミサの後に続いてさざげられた女子青少年コングレガシオンのミサでも繰り返されました。すべての祭式は小教区教会の祭式前に終了しなければなりませんでした。それは、コングレガニストたちが自由に、容易に小教区教会の祭式に参加出来るためでした。

無原罪の御宿りの祝日には、少なくともコングレガシオンの質素な予算が許す限り、どのような豪華な飾り付けも出し惜しみませんでした(12)。また、当日には、大司教令によって荘厳な歌ミサが許可されていました。父親の会のアグレガニストたちはこのミサに出席しなければならず、コングレガニストの司祭たちは司式司祭に随伴しなければなりませんでした。典礼はコングレガニストの荘厳な入堂から開始されました。歌ミサの間に祝別されたパンがミサ後配布されました。当日、ダヴィオ大司教はコングレガニストたちの間に臨席されることを欠かしませんでした。もし、朝のこの祭式が司式出来なかった場合は、大司教のためのパンは式後会長や補佐によって届けられました。聖体は終日安置され、コングレガニストたちは絶えず礼拝に訪れました。晩課の時、説教と聖体降福式の間、コングレガシオンの印としての白絹のリボンと深紅のメダル(13)を着けた会長が祭壇の下で、全コングレガニストを代表して無原罪の御宿りの乙女マリアへの奉獻を更新しました。最後に、これは感動すべきさ細な事ですが、コングレガシオンが自ら従事した慈善事業を想起するため、当日のすべての式に二人の貧しい人の名誉席が説教台の下に設けられました。

マドレーヌの教会で、荘厳な典礼によって人々が善導されたとするなら、日曜日の晩の集会によっても、人々はより直接的に同様に善導され教化された

ことになりました。セン・シメオン通りのこうした全く友愛的な集会はローマの聖フィリップ・ドゥ・ネリの祈とう所で行われた集会の特徴を想起させるものでした。マドレーヌに移されたこうした集会は、誠実で相互教化の印を持ち続けていました。同時に、集会は、彼らに伝えられたものよりも、場所の性格と、同時に、増加した補佐の数によって多少華やかな性格を帯びていました。

シャミナード師の集会の目的は、聖フィリップ・ドゥ・ネリの集会の目的同様、青少年を悪の危険から予防し、同時に彼らを教化することでした。しかし、聖フィリップがローマの青少年に最も危険な午後の暇な時間をこの集会に当てたのに反して、シャミナード師は夕方方の早い時間、すなわち、フランスの大都会で青少年たちが娯楽に引かれ魅惑される時間にその集会を割り当てました。

青少年たちに誤った娯楽を犠牲にするよう要請する時、彼らに一つの代償、すなわち、年齢に応じた活動や、ボルドー人特有の演劇に対する趣味による満足を与えなければなりません。したがって、シャミナード師は少なくとも外見上は、集会の計画やすべての準備の配慮を彼らに委ね、夕べの催しの費用全体、あるいはそのほとんどを彼らの責任に委ねました。音楽、詩歌、講演等すべては彼らの管轄に属しました。心が体の中に隠れていても最高の効果を生み出すように、コングレガシオンのすべてを活気づける指導司祭は、率先行動の喜びを彼らに与え、自らは後ろに引き下がっていました。

夜になるとマドレーヌの教会は点灯され、聖体は聖ひつから運ばれて修道女たちの旧内陣の祭壇に安置されました。内陣に置かれた二つのテーブルの内、福音側に置かれたものはマリアに献身した司祭たちに囲まれた指導司祭の席を、書簡側に置かれたものは会長及び補佐たちの席を示していました。コングレガニストたちは規律責任者の指示に従って中央廊下に整列しました。もし、特別に配慮しなければならない父親の会アグレガシオンの方が見えた場合は歌隊席の側に着座させられました。後部座席の自由席は常に新しい催し物を求めて飽き足らない信徒に提供されました。名誉役員たちは青少年の集会に出席して彼らを激励するために訪れた著名人の案内役を務めました。ダヴィオ大司教はしばしば子供たちを激励に訪れ、内陣の指導司祭と会長席の中央に着座されました。指導司祭はもちろん、大司教も何ら役割を演ずることはありませんでした。青少年たちのくつろぎの場だったからです(14)。

会長はVeni Sancteの祈りを唱えて集会を開始しました。まず、賛歌の合唱から始められ、時には、コングレガニストのタレント作の詩歌が朗読されました。書記は来る週間にコングレガニストが模倣するよう提案された聖人を知らせ、聖人の日常生活への忠実さを披れきしてその諸徳を浮き彫りにし、その精神

がすべての人に近づきやすいモデルであるとの印象を伝えました。この種の幾つかの概要が伝えられていますが、それは歴史的事実としての配慮によるものとして注目されます。

聴衆は、詩歌の朗読や賛歌によって緊張が和らげられ、催しのメインイベントへと導かれ、コングレガニストの一人の講演が始まりました。ローマの祈とう所でのように、聖職者のコングレガニストと信徒のコングレガニストは話したり、朗読する同じ権利を持っていました。コングレガシオンは早くからこうした分野に司祭職志願者を当てることを考えていたからでした。しかし、その同僚を教化したのはしばしば信徒のコングレガニストたちでした。講話の目的は、その形式は様々でしたが常に宗教教育を目的にしていました。講話は活気のある解説を目指してしばしば対話形式で行われました。したがって、3人か4人のコングレガニストが対話に参加しました。また、主題の選択にもより大きな多様性が見られました。例えば、護教論、モラル、教会史、時代の修道生活等が次々に話題になりました。要は、教える教師を自任することではなく、注意を集中させること、話を易しく伝えること、そして、時には好奇心を刺激するように話すことでした。

今日まで伝えられているこの種の講演の例から判断しても、こうした講演はしばしば大成功を収めていました。それらの講演の幾つかは確かなセンスがあかしされており、ボルドー人の特性として余り驚くには当たりませんが、所々に文学的せん細さや雄弁さが現れていたからでした。講演の幾つかには署名がありました。伝えられている最も優れた講演者には、ラン師、コリノーやグードゥレン、ドゥ・マルク・アルノザンで、これらのすべての氏名は後ほどまた本書で触れることとなります。当時、マドレーヌで評判の雄弁家はヤセント・ラフォンでした。彼の4編の対話劇が伝えられています。2編は信仰の欠如について、他の1編は青少年の義務について、もう1編は最も顕著なもので、ボルドーに例の部隊が到着した時に作成した演劇でした。これらの演劇は多くの青少年の劇場通いを遠ざけました。しかし、コングレガシオンの廃止に関して、これらの演劇の作者を再検討しなければなりません。彼の不用心がコングレガシオン廃止に口実を与えたからでした。最もしばしば取り上げられたモラルの主題は、友情、人生観、世俗的な集会、宗教の基本原則等でした。そして、講演の題目は病院経営の修道会や十字架の賞賛の祝日の設定に関する講演のように歴史的なものでした。その他の対話劇は当時の偏見を攻撃するものでした。例えば、金曜日の迷信について中傷家たちを攻撃した活気に富んだ対話でした。時にはコングレガニストの死亡によって追悼講演の機会が与えられましたが、それはかなり教育的効果のある他の形の講演でした。

用心深いシャミナード師はどのような即興講演も黙認せず、また、教義の正確さや暗示の適時性を確認するため、すべての講演を自ら再検討したことは言うまでもありませんでした。師は教義に関する責任を持たなければならず、また、持つことを望んだからでした。また、教会当局や政府当からもたらされ得る非難に身をさらす危険に遭わないためでした。

師は青少年たちを解散する前に彼らにねぎらいや励ましの言葉をかけることを欠かしませんでした。こうして、夕べの催しは、青少年たちが悪から遠ざかり、神のことに専念するという二重の成功を収めました。また、この集会のすばらしい光景が聴衆をコングレガシオンに引きつけたこと、そして、単なる好奇心でこれに参加した聴衆の心から信仰への偏見を消し去ったという収穫は言うまでもありません。

マドレーヌの教会で行われた行事の中で忘れることが出来ないものは、毎年冬の初め、すなわち、11月に、あるいは無原罪の御宿りの祝日の直前に行われた行事でした。それは、コングレガニストやすべての善意の一般信徒たちが、1週間、基本的な真理に関する講話を每晚聞くために招かれた黙想会でした。シャミナード師はこの黙想会の終わりに、強者のパンを求めて100名前後の信徒がこれに参加したことを敬けん大司教に報告する大きな慰めを得ていました。

黙想集結の晩、シャミナード師は洗礼の約束を荘厳に更新するよう全黙想者に呼びかけ、この幸せな週間の最終の晩に、この驚くべき修業の栄誉を無原罪の御宿りの乙女マリアに帰し、この静修の成果をマリアにささげました。また、黙想者たちも、「至聖なる乙女マリアとの契約の更新」を呼びかけられた感動的な式で、神の母との契約の更新を結ぶ決心を固めました。次に、師は、マリアについて話すこと、全出席者を代表して誓約の言葉を朗読することを助祭に委任しました。それから、祭壇の下に呼ばれたコングレガシオンの会長と補佐は全コングレガニストを代表して無原罪の御宿りのマリアへの特別な献身を更新しました。

こうした総合的な教化手段が人々に深い感動を与えないはずはありませんでした。彼らの催しは身体を粉にして働く宣教師を励ますものでした。それは、世の生活の誘惑から、また、10年にわたる革命や不信心によって人々の間に作られた憎しみや宗教無関心の環境から、特に彼らを解放しなければならぬ時、キリスト者の真の精神を人々に浸透させるため価値あるものであることを表明するものだったからでした。

ラランド通り65番地で、マドレーヌ教会の正面に貧しく生活していたシャミナ

ード師はコングレガニストたちにすべてをささげていました(15)。師はコングレガシオンの指導司祭の姿を自ら次ぎのように描きました(16)。

「わたしはいつも自分の部屋にいて、訪れる人々を自由に迎え入れ、このこと以外には何の関心も持っていないかのように各人の意向に応ずるものでなければなりませんでした…。もしわたしが全力で、完全に献身しなかったなら、コングレガシオンは決して成功せず、存続もせず、多分不振に陥るしかなかったに違いないとあえて断言しなければなりません。」

このくだりで師はその成功の秘訣の一つを明らかにしました。それは師が、自分の部屋を決して出ることがなかったと評判になるほど、全コングレガニストの意向を正確に把握していたということです。

コングレガシオンの懇切な歓待や会話のすばらしさは青少年たちの上に否定出来ない魅力を与えていました。したがって、青少年たちはコングレガシオンに指導者や真の友人、父親のような人を見だし、気前よく自発的にコングレガシオンに入会して来ました。こうして、彼らは慎重で適切な指導を受けました。日常生活の問題同様、危険な談話から彼らを解放することがコングレガシオンの指針でした。それは青春期の困難な時期に彼らを援助するために、乏しい資金や預金といった霊的援助を霊的子供たちが自由に享受することを妨げないことでした。その成果はあらゆる面に現れたとはいえ、むしろ信仰面に現れました。それは、世俗的業務を処理する時でさえ、目的は、人々をより正確に神に向かわせ、神に導くことでしかなかったからです。シャミナード師は人々の改心やキリスト教生活への刷新を求めるため、強固な確信や根強い習慣がないことから昔ながらの過ちを犯した時でも、心を動揺させたり、とっさに動転させたりするようなショック療法の助けを求めず、心を少しずつ真に超自然的命にまで導くような、緩やかでも継続的で霊的な進歩を好んでいました。師は自ら大半の青少年に許しの秘蹟を与え、コングレガニストの司祭たちは他の活動に自由に従事していました。師は、後ほど触れるように、数名の青少年を福音の勧めの実践にまで導いていました。いずれにしても、青少年たちは皆、一様な原則に従って、深い生きた実践的信仰、諸徳の根源、そして、宣教熱やすべての慈善事業等に基づくキリスト教、真のキリスト教の表明に導くことを目指した指導を受けていました。

師は、青少年たちの心にこのような信仰心を植え付けるためには、宗教教育よりももっと効果的な手段としての祈り、秘蹟、霊的指導等以外の手段を用いることを知らなかったほどでした。宗教教育は師の指導の特徴の一つでしかなかったからでした。師は、哲学や論理学、そして、批判の時代に、「素朴な信

仰」だけでは不十分であり、宗教的確信が不品行や自由思想によって同時に攻撃される時、感情はその不確かな支えでしかないと判断していたからでした。したがって、師は自らの熱誠が受け入れられるあらゆる手段を用いて出来る限り完全な宗教教育を施しました。

「入門担当者」は賛同者や見習い者たちに対して最高の宗教教育を施すのが特別な使命でした。そして、「下部組織の長」は、グループのメンバーに彼らの知的適性に応ずる書籍を提供し、彼らの宗教教育を実践する任務を自らの最も重要な職責として考慮しなければなりませんでした。「マリアのしもべの手引き」に強調されていたように、読書が強く要請されていたからでした。青少年が容易に入手出来るような良書が多ければ良かったのですが。それでもシャミナード師は少なくとも18世紀の書籍の中からそれほど古くもなく、しかし、自らの計画に合うような書籍を用意することが出来ました。

コングレガシオン全体の教育は前述の通り日曜日の晩の集会で行われていました。それは極めて家庭的な雰囲気でも、しかも、各下部組織や各分野の特別な集会での各種の要請により適応出来る形で行われていました。シャミナード師は教理、そして、護教やモラルの説明の出発点として役立つ日曜日の福音のくだりを好んで用いていました。また、極めて親しみのある対話形式の講話を好みました。そのために補佐の一人は師に質問するよう指示されていた幾つかの反論や質問をあらかじめ準備していました(17)。こうした総合的な教化手段によって、世俗精神にさらされる最も一般的な危険から男女青少年を保護するために正確で十分な知識で彼らの信仰を強化することがなければ、彼らは何箇所もコングレガシオンの集会に参加したということは考えられないことでした。

その上、信仰は彼らの活動によって支えられていました。シャミナード師は魂に不可欠の食物であるこの信仰を拒むことのないよう配慮していたからです。更に、師はコングレガニストたちが、何よりもまず、身体的援助によって相互に助け合い、支え合うよう要請しました。このことは尊い福音によって命じられた愛徳の命令だったからです。コングレガシオンには各階層の人々が集まっていたのでこうした義務の実践は容易でした。1803年に教区に存在していた活動に関する大司教区の報告には、特に指摘する点としてコングレガシオンについて、次のように評価していました。「コングレガニストたちは貧しい人々を助け、生きるために額に汗して働くことになった人々に職業や職場を提供するよう努力し、もし、コングレガニストたちが病気になった場合は、相互に物的、靈的慰めや援助を与えている。」もし、病気になったコングレガニストに家族がなかった場合には、一人のコングレガニストがその介護に当たりました。もし、彼が帰

天することにもなった時は、コングレガシオン全組織の会員がその野辺送りをなし、マドレーヌの教会で全会員参加の下で行われる葬儀ミサは煉獄の彼の魂を慰めるもにになりました。父親の会のアグレガシオンは、相互援助として、青少年たちを勧めや模範によって助けるよう貴重な援助を与え、貧しいコングレガニストに対してはその職業の無償訓練を保証しました。例えば、医師のトロカル氏、弁護士のダヴィド・モニエ氏、その他の人々は彼ら貧しい人々の需要に応ずるようにしていました。

慈善事業がコングレガシオン外でも行われていました。彼らは病人を病院やその自宅で介護していました。また、貧しい人々を見舞い援助していました。無原罪の御宿りの祝日に二人の貧しい人々が紹介されていたことが伝えられています。男女青少年コングレガニストたちは御主が永遠の報いを約束された慈善事業への熱誠と献身を競っていました。ここではこの活動に関する詳細に触れることは止めたいと思います。こうした慈善事業は類似の団体によって他のどこでも行われていたものとボルドーでのものとは同じだったからです。

最もデリケートな刑務所訪問は父親の会のアグレガシオンに保留されていました。1804年に開始されたこの活動は当局の反対に遭遇しました。したがって、王政復興の下でしか正常化されず、効果ももたらされませんでした。しかし、父親の会のアグレガシオンによって、そして、特にダヴィド・モニエ氏によって後援されたボルドーのパン屋の団体は当初から繁栄しました。彼らはマドレーヌのコングレガシオンの住居の一部屋に事務所を置き、団体として職業組合として集会を持っていました。ところが、フランスが英国と戦争を交えるころになると、小麦がしばしば不足し、したがって、パンの値段が急とうしたため、貿易の必要と群衆の騒ぎと当局の無理な要求との板挟みになって、モニエ氏にとって彼らの資金管理は生半可の心配では足りませんでした。そこで、父親の会のアグレガシオンはこれらの善良な人々に金銭上の援助をなしたことは言うまでもありませんが、それ以上に、霊的な関心を抱かせるよう配慮しました。この職人団体の保護の祝日は聖ペトロと聖パウロの祝日で、当日はマドレーヌの教会で盛大に祝われました。

この職人団体の活動は、お分かりのように、社会的、宗教的な慈善事業がミックスした活動でした。一般にコングレガシオンの活動の草創時代には、慈善事業よりも宣教活動を選びました。大革命がぼつ発していた時期には、不信心や宗教的無関心の危機から逃れさせる宣教活動が緊急な活動と判断されたからです。その上、コングレガシオンの最終目的は宣教、すなわち、ほとんど異教的になった社会に真理と善を普及することだったからです。したがって、すべてのコングレガニストはその適性と性格と身分によって宣教活動の実

践が要求されました。もちろん、すべての会員がキリスト教の教義を直接伝えるよう要請されてはいませんでした。すべての会員は個人的な模範と感化によってこの教義を知らせ愛させなければなりません。また、この活動へのいかなる好機もなおざりにしてはなりません。親切な言葉、友情あるいは激励の手紙、高尚な感じを抱かせる読書等はすべてだれの手にも届く手段だったからです。

愛徳のように宣教活動においても優先権が与えられていました。したがって、先ず隣人に対して、次にコングレガニストに対して、そして最後に部外者に対して宣教活動を実践しなければなりません。シャミナード師は、コングレガニスト全員にに対して、下層の人々、召使いや労働者たちの信徒育成の実施を強調しました。師はコングレガシオンには、指導司祭として、常に同僚の霊的福祉を配慮する真の使徒しか認めませんでした。師はこのことを「宣教」と呼んで彼らを養成したのです。師は次のように述べました。「最も熱意の乏しい、最もだらしのない少年たちを見つけてこれを励まし、また、きっと迷うに違いない少年たちを立ち直らせるために、最も熱心な何名かのコングレガニストたちに密かに与えられた任務を、コングレガシオンでは『宣教』と呼んでいます(18)。」コングレガシオン以外でも、師は、青少年の年齢と余暇に応じた様々な活動を意図し、初聖体の遅れた子供たちの指導、そして、次章で取り扱うことになる志願者に関するすばらしい活動等に専念しました。

ボルドーでコングレガシオンが成し遂げた特別な成果の評価によって、マドレーヌの教会でのコングレガシオンの活動計画は完成に向かうことになります。



注

- (1) リガニオン師の自筆の覚え書き
- (2) デュプレ師は1887年3月号「ボルドーカトリック誌」に、「マドゥロネット会」に関する詳細な論文を掲載しました。この会の修道女たちは大革命の折りに四散しましたが、その中の一人アデライド院長はミゼリコルド会の創立の際ラムルス嬢に協力しました。
- (3) H・ルリエーヴル著、「ウルスラ会」、158ページ。
- (4) 1802年、ダイヴィオ大司教のためにラポルト師によって作成された忠実な司祭に関する記録(大司教館資料室)。コードゥレ師はリブルンの教会の主任司祭に任命されましたが、1805年6月9日現職で帰天しました。
- (5) これらすべての事項はセン・テロワ教会の記録によるものです。
- (6) 当時、この伝記作成中、マドレーヌ教会はデウッフール・デウベルジエ通りの拡張

のためその一部が切り取られるところでした。

(7) 共和歴12年熱月21日、すなわち、1804年8月9日。(大司教館資料室)

(8) エリ・ラファルグ氏は1800年にハイチ島のフランス岬(サント・ドミンゴ市)で帰天しました。シャミナード師は最初の賃貸契約後、マドレーヌ教会が国王の勅令によって認可され、無事に買い戻すことが出来た1820年まで5年ごとに賃貸契約を更新していました。その買収は1820年の4月23日でした。

(9) 師はスペインから持ち帰った多くの聖遺物をカテドラルに置き去りにしていたと言われていましたが、それはセン・シャルル教会にありました。

(10) この教会は確かにプロテスタントの手に渡ったところでした。(1804年2月8日)。

(11) 1817年の会則に関する旧会長の覚え書き。

(12) 無原罪の御宿りの祝日の当日のお祝いは女子青少年コングレガシオンに、8日間の日曜日は男子青少年コングレガシオンに、8日目は父親の会のアグレガシオンに保留されていました。なお、聖ヨゼフの祝日や40時間の信心の時も荘厳な式が行われました。

(13) 直径5.3センチのこのメダルは、表面に「青少年の母至聖なる乙女マリア」という無原罪のマリアの文字が浮き彫りになっていて、裏面には会長の氏名と会長選出の日付、「英知はコングレガシオンを保護する」という標語が刻まれていました。1802年1月2日に選出された第4代会長ラフォン氏のメダルが残されています。

(14) ダヴィオ大司教はパリ滞在中、デルプユイ師のコングレガシオンの集会への入場を次のように拒絶されました。「大司教様のご出席は光栄過ぎるほど最高に光栄ですが、わたしたちは立場上控え目でなければなりません。この謙そんを傷つけることは出来ないからです。」(ジョッフロワ・ドゥ・グランメゾン著、「ラ・コングレガシオン」、65ページ。いずれにしても、パリとボルドーのコングレガシオンの間には明らかに見解の相違がありました。

(15)この家は現在の9番地ですが、デュフル・デュベルジェ通りの貫通によって無くなりました。

(16) コングレガシオンに関する覚え書き(1824年)

(17) この種の講話に関する多くの覚え書きがシャミナード師の書類の中に見いだされました。

(18) 1809年の覚え書き

第14章 コングレガシオンとボルドーにおける信仰の刷新（1804－1809）

コングレガシオンの影響 ❖ ドンネ大司教の刷新 ❖ 女子修道会への召命
❖ 最初のキリスト教男子校 ❖ キリスト教教育修士会の招致 ❖ 上位聖職者
❖ セン・ローランの修練院 ❖ 聖職者の召命 ❖ 神学校への教師、生徒の提供
❖ バザの小神学校。

300名の男子青少年と同数の女子青少年、そして、60名の信徒の父親と同数の母親、これがボルドー市で信仰の復興に寄与するために無原罪の御宿りの乙女マリアのみ旗の下に登録された信徒の軍団として列挙された人々です。

彼らの努力は首尾よく成功したのでしょうか。このような質問に答えるために忘れてならないことは、こうした勝利は戦いで奪い取る勝利ではないということです。その勝利はしばしば目に見えないが前進的に得られる成果だということです。もし、この種の戦いに勝利した分野を判断しようとするなら、最終勝利に関する各人の役割が明確に識別されない危険があるので、もっぱら成功の結果が反省されなければなりません。また、ある都市や地域のモラルや信仰に生ずる変化に気づくために考慮しなければならないのは幾つかの世代の隔たりです。ボルドーで、第一帝政の間に着手されたキリスト教世代のモラルや信仰の成果が明らかになったのは、50年後のドンネ枢機卿の司牧下でしたからです。したがって、少なくとも信仰に対して一番偏見を抱いていた歴史家たちが、「ボルドーにおけるカトリック教会の新しい勝利」とあかししたのも、正にその通りだったからです(1)。

こうした勝利でコングレガシオンに帰せられるべきものはどのような部分でしょうか。この問に対してはシャミナード師と共に答えたいと思います。1824年、コングレガシオンを擁護すべき多くの人々によってもたらされた異論に対して、コングレガシオンを擁護することを余儀なくされた師は、次のように答えました(2)。

「ボルドーには立派な精神が行き渡っていること、また、人々が一般にその信仰と立派な道徳原理を重視していることは十分知られています。このことがコングレガシオンの活動によるものと断言するものではありませんが、大都市においては、ごくわずかな中核をなす人々が立派な道徳原理を力強く支え維持

することが出来ると考えている賢明な人々を信ずることが出来るからです。それは1本の柱は多くの柱の一部分に過ぎないにしても、それでも建物を支えているようなものだからです。」

少なくとも世論の評価から見落とされる一般的な影響の外に、たとえシャミナード師の謙そんを考慮しても、師はCongregationalismがその創立の当初から第一帝政時代を通じて示した明らかな足跡を指摘出来たに違いありません。多くの人々の毎日の改心、一般家庭に刷新されたキリスト教の習慣、娯楽に深入り過ぎた少年たちの放縦な行為の減少、そして、信仰の司祭団(3)による宣教活動の成功、更に、Congregationalismの模範と熱誠がもたらした成功等についてここで触れようとは思いません。

当時の各種の宗教学校におけるCongregationalismの影響のより具体的な試みが伝えられているからです。Congregationalismはそれらのいずれの学校とも無縁ではなく、そこで、宗教教育の基礎全般を教えました。ドンネ枢機卿は、1869年にボルドーを訪れて創立者について修道者と対談された時、このことを確認して次のように語られました。

「敬けんなシャミナード師は優れた人物でした。わたしは彼ほどの人物を知ることすら評価することも出来ないばかりか、どのように感謝すべきか分からないほどです。いずれにしても、ボルドーのあらゆる事業の設立にさかのぼる時、その各々の事業の創立にシャミナード師の氏名が記されていたからでした(4)。」

これらの活動に対するCongregationalismの役割は、豊かな流水を引き入れ、この流水につながるすべての運河に給水する貯水池の役割に比較されます。すなわち、Congregationalismは多くの青少年を受け入れてこれを養成し、次に、Congregationalismの援助を求める事業に彼らを配分したのです。彼らの登録簿がこのことを決定的にあかしています。そこには、残念ながら空白もありますが、会員によって演じられた役割についての彼らの貴重な情報が提示されているからです。

女子修道会が、ボルドーで、先ず、政府の寛大さによって、次に公式の承認によって最初に復興されました。それらの内の四つの修道会が政教条約後存続していました。二つの修道会は慈善事業に専念する「み摂理の孤児院会」と「ミゼリコルド会」で、他の二つの修道会は教育事業に献身する「み心の会」と「み心の娘の会」でした。当然、十分養成された最初のCongregationalistたちがこれらの修道会に入りました。

み摂理の孤児院会は大革命中も存続し続けましたが、革命の動乱後はそ

の存続も極めて不安定になっていました。ラランヌ夫人はまだ亡命中だったからです。この事業を救うために、1801年にシャミナード師は福祉委員会を設立し、ミゼリコルド会指導の司教総代理はみ摂理の孤児院会をその保護の下に置きました。こうして、この二つの事業はミゼリコルド会シスターたちの経営になりました。それは、ミゼリコルド会の発起人のドゥ・ピシヨン嬢がラランヌ夫人の当初の協力者だったからでした。こうした状態はラランヌ夫人がスペインから帰国して孤児院の指導と責任を取るまで数年間続きました。シャミナード師のおかげでラランヌ夫人は女子コングレガシオンの中に二人の協力者を見いだしました。彼女たちは協力して孤児院の事業を最も華やかであった時代のように盛んにしました。

ミゼリコルド会への召命の選択はよりデリケートでより困難でした。いずれにしても、シャミナード師はその召命を女子青少年コングレガシオンで見いだしました。その中の一人ローズ・ビドン嬢は正に事業の発起人に数えられました。ラムルス嬢はミゼリコルド会の会員の中から修道院の院長を選んでいました(5)。コングレガシオン出身者も、あるいはそうでない者も皆コングレガシオニストとして登録し、その活動に参加するよう志していました。ラムルス嬢はコングレガシオンに際限なく献身することによって、また、熱心にコングレガシオンの会長職を果たすことによって修道女たちに模範を示していました。

教育事業のシスターの共同体は慈善事業の施設よりも召命の真の温床をコングレガシオンに見いだしていました。確かに宣教が彼女たちの特徴だったからです。ファテン嬢とヴレシュマン師のみ心の会、ヴェンサン嬢のみ心の娘の会は、コングレガシオンの温床から会員の召命を確実にくみ取っていました。ミショー師とモミュー師の二人のコングレガニストの司祭によって指導され、マドレーヌの教会の近くに設立されたみ心の娘の会は、ミゼリコルド会を模範にして女子青少年コングレガシオンとほとんど一体化していました。彼女たちは二人のヴェンセンというシスターを先頭に全員まとまってコングレガシオンに登録していたからです。ラムルス嬢の後を継いで女子青少年コングレガシオンの会長になったラコンブ嬢は修道誓願の関係でラムルス嬢と生活を共にすることなく、ヴェンサン嬢のみ心の娘の会のシスターとして生き、帰天しました。後ほど彼女の聖なる模範に触れる機会があると思います。シャミナード師はみ心の会が批判の対象にされ反対されたことに巻き込まれませんでした。それはもっぱらただ一つのこと、すなわち、庶民の子供たちを教育してすばらしい善を実現したのはこのみ心の会であったということを確認していたからでした(6)。このみ心の会及びその共同体はボルドー市の最も人口の多い三つの小教区で600名から700名の子供たちを教育していました。

その上、彼女たちは宣教活動において孤独ではあいませんでした。ダヴィオ大司教の着座後しばらくして、ウルスラ会(7)や聖ヴェンセン・ドゥ・ポール会のシスターたちが共同体として再建されたからでした。ウルスラ会はやがて主として中産階級の子女の教育活動を再開しましたが、無償のクラスも幾つか作りました。聖ヴェンセン・ドゥ・ポール会のシスターたちは多くの捨て子を収容し、特に病人の介護に専念しました。そして、ヌヴェール会のシスターと共に病院を再開しました。やがて、カルメル会も復興されました。1810年、ボルドーにあった女子修道会の修道女数は四つの修道会とも充足していました。それは女子青少年コングレガシオンがそれぞれの募集人員を提供出来たからでした。募集リストがこのことをあかししています。

更に、ボルドー外の修道会もこの同じ募集源のコングレガシオンに召命を求めています。したがって、女子コングレガニストの氏名に続いて、ポアティエの修道女に、ポンの修道女に、としばしばその登録簿に記されていたことが伝えられています。前述のポアティエやポンの修道女になったコングレガニストたちはベドゥレ嬢の創立による修道会のシスターになっていました(8)。1796年の黙想会の件について先に触れたように、大革命時代の最初の宣教の鼓吹者となったシャミナード師が、宣教活動の協力者をこのように提供していたことを見ても驚くには足りないのではないのでしょうか。

少年たちに対する教育活動の再建は着実にゆっくりと行われました。シャミナード師は彼らをより直接に、より個人的に指導しました。信仰の原理に基づいて子供たちを幼少から教育するために献身の用意が出来ている男子修道会はまだなかったからでした。また、大革命はこの種のすべての学校を一掃し、政府の意向を無視するすべての学校の再建を禁止して、共和歴12年収穫月3日(1804年6月23日)の政令の浸透を図ったからでした。しかし、やがてある学校が反対の障害を乗り越えざるを得なくなったのは事実でした。それは差し当たり出来る限り学校教育の不足を補充する必要があったからでした。

教区の聖職者たちは特に善意は示していましたが、多くの業務の重荷に押しひしがれていました。しかし、コングレガニストの司祭たちはこの効果的聖職への献身の模範を示していました。中でも、その先頭に立ったのはローザン師とラクロワ師でした。教区での一流の説教家であったローザン師は、子供たちを相手にするまで卑下すること、彼らの初聖体を準備することを断りませんでした。師は、話を聞き、質問することを熱望していた子供たちに、「皆さん、人間らしく行動しなさい」と繰り返し教えていました。師は人々を、そして、信徒を司牧する喜びを持っていたからでした(9)。セン・ポール教会の助任司祭であったノエル・ラクロワ師は、自らの知識や才能、そして、年齢においても、教区の聖

歌隊の子供たちのためにその時間の大半をささげることは当然であると考えていました。師はこれらの子供たちをマリアの保護の下に置き、ローザン師同様、マドレーヌの未来のコングレガニストを準備していました(10)。また、シャミナード師は、子供たちの初聖体の準備に専念する幾人かのコングレガニストをボランティアのカテキスタとしてこれらの司祭たちに協力させていました。

しかし、シャミナード師が更に渴望し望んでいたのは教会の立派な影響下に子供たちを、特に、初聖体の年齢からコングレガシオンへの受け入れが許可される16歳に達するまでつなぎ止めておく学校の創立でした。それは、その4、5年間に、子供たちが両親の監督から半ば解放されて職場や仕事場で有害な影響を受け、信仰や徳の実践の上で不幸な習慣を取るような危険にさらされ、また、危険にさらされることを余儀なくされるからでした。こうした悪の伝染から子供たちを護るためにはコングレガシオンの門戸を開く必要があったのではないのでしょうか。しかし、シャミナード師はそのようには考えてはいませんでした。そうした子供たちの仲間と混同されて傷つくコングレガニストを見捨てるような危険を犯すべきではなかったからでした。

この困難な問題の解決はコングレガシオンの志願者のための特別のグループを作ることでした。それは、現代的な表現を借りるなら、ボーイスカウト促進のための下部組織を作ることでした。コングレガニストたちはそうした志願者募集の責任を負っていました。シャミナード師は一人のコングレガニストを「志願者募集係」としてこの活動の特別な指導に当たらせました。また、コングレガシオンの中で最も優れた、最も熱心な者の中から選ばれた多くのコングレガニストたちが子供たちの娯楽や集会を助けるためにこの志願者募集係の補佐になりました。そこで、コングレガシオンの評議員会はそのための予算を承認しました。効果は直ちに現れました。数百名の子供たちがマドレーヌを訪れたからでした。彼らは、各小教区のコングレガニスト司祭たちによって募集された子供たちや、様々な娯楽や気晴らしの魅力に引かれて自らマドレーヌを訪れた子供たちでした。コングレガニストたちは彼らを遊ばせたり、散歩に連れ出したり、あるいはまた、セン・ローランのプラタナスの木陰や近くの松林の中で楽しい野外ゲームを計画したり、時にはコングレガシオンの費用でちょっとしたおやつを振る舞っていました。

こうして志願者たちはミニチュアのコングレガシオンを作ることになりました。彼らは毎日曜日、彼ら自身のミサにあずかり、毎月総員聖体拝領をなし、一定の修練の後マリアの様々の特権への信仰表明をなし、シャミナード師の祝福を受け、免償を受けることが認められました。彼らはコングレガシオンの集会を模倣した小さな集会を2週間ごとに開催し、コングレガニストとして無原罪の

御宿りの小聖務日課や天使の第九コーラス隊と心を合わせて3回の天使祝詞と無原罪の御宿りのマリアへの9回の祈願から成る無原罪の御宿りのすばらしいロザリオを毎日唱えていました。このようにして大きな善が行われました。子供たちはその年ごろの誘惑から遠ざけられていたので、コングレガシオンは常に確実な募集源をそこに見いだすことが出来ました。こうして、コングレガニストたちは易しい、しかし、効果的な宣教活動に専念していました。

もちろん、このことがすべてではなく、また、当時は今日の時代と同じでもありませんでした。したがって、どのような形の青少年サークルもキリスト教学校の補充にはなりません。当時、ボルドーには余りよく管理されていない10校ほどの小学校がありました。教師たちは特に宗教的な観点で十分養成されておらず、しかも、これらの小学校は庶民の子弟対象ではありませんでした。学費はすべて有料だったからです。当時のある人は次のような観想を述べました(11)。

「庶民の子供たちは非行グループとなってあちこちの通りを徘徊し、老人たちをいたぶり、通行人に無礼を働き、港では何時も盗みを行い、近隣地域まで非行を広げていました。彼らが通った後には情けない証拠が残されていたからです。また、彼らは市中や公園で、あるいは、トロンペット城趾の広場で、それぞれの地区の子供たちと血みどろの戦争ゴッコに夢中になり、警官しか仲裁出来ないほどでした。」

シャミナード師はこうした混乱を見逃すことは出来なかったので、混乱の快復手段を検討していました。しかし、事は用意ではありませんでした。志願者に関する活動のように日曜日の一日だけを犠牲にする用意が出来ているコングレガニストを募集することのみがもう問題ではなかったからでした。これらの活動には貧者の子供たちへの完全な献身、絶え間ない犠牲、したがって、生涯の犠牲が要請されたからでした。この犠牲を引き受けたのは、コングレガシオンの初代の会長であったコングレガニストの二人の先輩、ルイ・アルノー・ラファルグとギヨーム・ダルビニャックでした。

この二人は第一共和国の戦争時代から親交のあった旧友でした。彼らはピレネ遠征軍に従事して重症を負っていました。ラファルグは遠征の初期に、ダルビニャックはフランス軍がトロサに入場した時に負傷したということでした。ラファルグはすぐ本国に送還されましたが、死んだものとあきらめていたダルビニャックはその生還を身に着けていたスカプラリオの聖母のご保護によるものと見なしていました。彼らはシャミナード師の最も古い、最も忠実な弟子でした。二人の内の一人は1796年以来、すなわち、兵役除隊後からシャミナード師と一緒

だったと伝えられています。

二人とも見通しの明るい職業に従事していましたが、その指導司祭シャミナード師の模範や教訓、同時に、恩恵の密かな刺激によって、より高い理想へと押し進められました。彼らは神の招きに敏感でしたので、1804年には、シャミナード師に召命の研究のため数日の黙想を指導して下さるようお願いしました(12)。セン・ローランの静かな住居が彼らに提供されました。彼らは、そこで潜心と祈りの内に貧しい下層クラスの子供たちの教育に献身するため、ビジネスの職を放棄することを決心しました。彼らの一人は35歳で、もう一人は33歳でした。

シャミナード師はこの二人の青年に与えるべき最良の規則はラサールのジャン・バプティストの規則であると考えていました。特にラファルグにとっては、少年時代、彼がキリスト教教育修士会で教育され、この修道会への魅力を感じていただけに一層そうでした。ツルーズの共同体に保管されていたこの規則が取り寄せられたので、ラファルグはこれをコピーしました。二人は早速エテュヴ通りにほとんど無償の小学校を開校しました。開校初日から子供たちが殺到しました。ダヴィオ大司教はこの計画を大変喜ばれ、この新しい教師の献身、同時に、キリスト教教義の原理を児童たちに教え込む才能を賞賛する気持ちを抑えることが出来ないほどでした。ギヨーム・ダルビニャックは特にこの教育に優れていたからでした(13)。

彼らはキリスト教教育修道会の会則を遵守しながらも同会の修道服は着用しませんでした。この修道会はフランスではまだ再建されてはおらず、少なくとも、ボルドーではそれがどのような修道会であるかも知られていませんでした。1805年の初頭、教皇聖下がナポレオンの戴冠式のためアルプスを越えられた時、聖下はフェーシュ枢機卿の保護の下にリオンに同会を再建する使命を帯びた同会総長フリュマン士を伴っておられました。シャミナード師にとってこれほど喜ばしいことはありませんでした。師はみ摂理によって与えられたお恵みとして同会修道士たちの復帰を歓迎しました。師は、早速、ダイビオ大司教の了解を得て、例の二人の弟子を再建された同会のメンバーとして受け入れていただくこと、また、同会の慣例や伝統を彼らに養成出来る古参の修道士をボルドーに派遣していただくことをフリュマン士に交渉し始めました。交渉は直ちに成功しませんでした。フリュマン士の自由になる会員は5,6名しかいなかったからでした。しかし、ダヴィオ大司教もシャミナード師もあきらめませんでした。ローザン師が1806年の四旬節の説教のためリオンを訪れた時、同師は会員派遣の件が成功するまで同会に要請するよう使命を帯びていました。ローザン師の使命は成功を収めました。フリュマン士はボルドーに二人の会員を派遣し、その一

人セラフィン士は小さな共同体の院長に任命されていたからでした。彼らは同会の伝統的な修道服で到着しました。なお、皇帝もその叔父のフェーシュ枢機卿の要請によって同会の再建を認可したところでした。ラファルグとダルビニャックは彼らと合流し、エロワとポーレンの修道名を頂きました。

ダヴィド大司教はシャミナード師を教会法上の共同体の上長として任命しました。また、大司教は神学校の基礎学級のために二人の修道士を選びましたが、その中の一人はポーレン士でした。ポーレン士は、早速、大革命前極めて繁栄していた学校教育修士会の昔の学校をボルドー市内に再建することでラフォーリ・ドゥ・モンバドン市長と合意しました。この提案は1806年7月30日開催の市議会によって好意的に承認され、四つの学校の設立が決定されました。

この決定によって共同体のメンバーの迅速な増加が求められました。シャミナード師はキリスト教学校教育修士会の修練院を早速ボルドーに開設するようリュマン士に連絡を取りました(14)。シャミナード師はこの計画を容易にするため、修練者を住まわせるためセン・ローランの住居を提供することにしました。シャミナード師の提案に同意されたダヴィオ大司教は必要な物的資源を支給され、一方、シャミナード師はマドレーヌのコングレガシオンの中に同会修道者の召命を見いだしました。リガニオン師は次のように語りました(15)。

「シャミナード師は最初のこの二人の修道士に善行のすばらしい活動をボルドーに普及したコングレガシオンに献身したメンバーの中で、信心と熱誠に優れた数名のコングレガニストを協力させました。こうして、小さくとも優れた修練院の核が作られました。修練院を構成したすべてのメンバーは人というより天使のようでした。」

ポーレン士が院長に任命されたこの修練院は、大革命後フランスに正式に再建されたキリスト教教育修士会の最初の施設になりました。この修練院は、1811年には、セン・ローランの小さな住居が手狭になり、ここを立ち退くことを考えざるを得なくなるほど繁栄しました。ボルドーは地域の中心ではなく、ツールーズからの観光客次第だったので、ツールーズが修練移転の最後の都市になりました(16)。シャミナード師は最後まで同修練院の教会法上の長上でしたので修練者の霊的指導に従事しました。師は修練院共同体の公式報告書を定期的にダヴィオ大司教と市当局に提出しました(17)。修練院の移転によってもシャミナード師の修練者に対する愛情は何ら減少しませんでした。師は全力を尽くして彼らを激励し続けました。ボルドーで同会の学校の発展に努めたアルフォンス士はシャミナード師とその好意に対してもっぱら尊敬の念を込めて

心から感謝していました。

シャミナード師の司祭職募集とその養成に関する配慮は大変なものでした。この熱情はミュシダン神学校での財務部長時代に既に表明されていたように、積年の優先事項だったからです。また、大革命中は、神によって聖職に召された青年たちを特別な配慮をもって養成するよう宣教熱意を鼓舞するものだったからです。ジョッフル、ダミ、ブエについては既に述べた通りですが、他の若い司祭たちの召命についても、神に次いで、シャミナード師の努力に負うことが大でした。シャミナード師は、ダヴィオ大司教が司祭職志願者のために神学校を開設される日を待ちわびていました。その期待は無駄ではありませんでした。師は神から召されたと思われる数名のコングレガニストに注目し、彼らにこのすばらしい召命への尊敬と熱意を抱かせ、「マリアのしもべの手引き」を読み、これを念とうするよう勧めました。この手引きには神から召された場合の義務を教え、その貴重な宝を持ち続けよう配慮することによってその召命を維持することを教えていたからでした。

ダヴィオ大司教は、一方では立派な司祭の不足、他方では神学校開設を遅らせていた様々な障害を知って嘆息していました。200の小教区には司祭が無く、その他多くの小教区では老齢と病弱の司祭によってしか司牧されていなかったからでした(18)。こうした実状に苦しんでいた敬けんな大司教は、1802年以来適当な住居の取得を政府に要請していました。1804年になってようやくその要請が聞き届けられ、カプチン会の旧修道院が大司教に委ねられました。しかし、この建物もすぐ使用出来る状態にはありませんでした。しかし、大司教は、1804年4月4日復活後の水曜日に、ロアン通りの仮住居に教区の神学校を開設しました。教職員及び神学生は皆シャミナード師のコングレガシオンから派遣されました(19)。

先ず、大司教は、この種の事業に献身した旧修道会で指導の教職員を捜すことにしました。大司教は、ボルドーの宣教師祭団の神学校の旧指導教職員であったラザリスト会士に、そして次に、アンジェで大司教が師事したシュルピシアン会士に打診しました。しかし、いずれも会員不足の面から大司教の申し出を受諾する状況にはありませんでした。そこで、大司教はこの困難な職務に十分対応出来るメンバーを自らの教区で探すことにしました。早速、シャミナード師の友人やシャミナード師のコングレガシオンの宣教活動の援助者でペリグュー教区出身の司祭たちの中から選ぶことにしました(20)。彼らはペリグューやミュシダンの神学校の指導の経験者たちで、その知識はその熱誠に勝るとも劣りませんでした。

1802年の正式の通知で、「虚弱な健康以外に他の欠点は認められない」と評価されたジャン・ディリヴェ師はミュシダンの神学校で養成され、ペリギューの宣教司祭会に加入した優れた司祭で、その雄弁は新しいクリジストムとあだ名されたほどでした。ダヴィオ大司教はこのディリヴェ師を神学校の校長に任命しました。同時にペリギューの宣教司祭団の旧メンバーの一人で雄弁家で疲れを知らないブニ師を会計と倫理神学の教師に任命しました(21)。更に、教科指導部長に任命されたルイ・シャミナード師は教育に関する経験と教師としての才能によって神学生たちを援助しました。ヨゼフ・モミュ師の兄弟であった信徒教師のモミュ氏の参加によって教授陣がそろいました。ティモテ・モミュ氏は1801年のコングレガニストの登録簿に小学校教師として登録されていました(22)。

特定の神学生を神学校の最高の中核として養成することは教師を捜すことと同じほど困難でした。ダヴィオ大司教の伝記作者は次のように指摘していました(23)。「いつの時代にもこの地方では聖職者の召命は乏しかった。金銭欲と安楽のとりこになってジロンド県の空の下で生活することに魅せられた人々は、旅へのいざないによって教会や参詣所から離れてしまっていたからである。」神学校設立の時期が思ったほど適切でないように思われました。少年たちのこの聖なる召命の恩恵の芽生えを育成出来る信者の学校がまだ無かったからでした。そこで敬けんな大司教は自然にシャミナード師に頼るようになりました。シャミナード師のコングレガシオンが、超自然的命が全く失われたような社会に、神の恩恵によってまかれた召命の種を育て開花させた小さな召命の温床だったからではないでしょうか。

大司教の信頼は誤っていませんでした。シャミナード師のコングレガシオンで聖職の召命を受けた一人、ドゥニー・ジョッフル師は既に知られていたからです。また、シャミナード師の忠実な他の弟子で、1801年2月日のマリアへの奉獻者12名の一人、フランソワ・ジョゼフ・タピは当初から神学生としての召命を明確に示していました。彼はセン・シメオン通りの祈とう所で、下級聖職者としてシャミナード師を助け、代父の用意のない洗礼が申し込まれた時、その子供の代父を務めました。彼は長い病気の後、1809年に若くして帰天しました。彼は一度しかミサをささげることが出来ませんでした。それはせめてもの慰めでした。フランソワ・タピのコングレガシオン入会の数箇月後、コングレガシオンに入会したのは、ジェローム・ラブリュシュ、ジャン・アントワン・リション、そして、ジャック・ルスタレでした。以上の5名とその年齢上まだコングレガシオンに受け入れられていなかったフィッローとデウクロの二人を加えた7名が神学校の礎石になりました。8月になってラクロワ師は他の4人を募集しました。その内の二人だけはコングレガシオンに受け入れられる年齢に達していました。その一人、エティエ

ン・ラベルはコングレガシオンのリストにありましたが、リストそのものは極めて不備でした。他の二人はラクロワ師のすべての生徒たち同様コングレガシオンの志願者でした。最後に二人の通学の神学生、レーモン・リション、ピエール・ダルガが前述の11名に合流しました(24)。彼らもコングレガシオンの登録リストに登録されていました。

こうして神学校が設立されました。神学校は10月の新学期開始時にカプチン会の建物に落ち着きました。田舎の小教区からの召命は不足がちでしたが、常に召命の豊かなコングレガシオンは少年の第3グループを神学校の職員に紹介しました。彼らは少なくとも5名で、ミュシダンからかペリギュールからか分かりませんが、恐らくシャミナード師兄弟によって神学校に導き入れられた少年たちでした。

コングレガシオンは神学校開設当初なした召命の配慮をその後も継続しました。毎年最良の召命を提供する貢献を神学校になしたからでした。ここでこれらの敬けんな少年たちの氏名を列挙することは不可能です。分かっている氏名のリストだけでも長過ぎるので、本書ではその数名にしか触れることが出来ないかも知れません。1808年ごろは、コングレガシオンに通い続けていた神学生はかなり多数で、コングレガシオンの特別な下部組織を作るにはその数が多過ぎました。

神学生たちの指導は1814年にセン・シュルピス会の司祭たちが来るまでコングレガニストの手に委ねられていました。ディリヴェ師は残された体力や健康を駆使して院長職に尽力し、1808年3月4日 デウニ・ジョッフル師にみとられて帰天しました。その後継者は敬けんなラクロワ師でした。しかし、師は神学校を素通りしたようなものでした。皇帝の不興を買った師はその職を離れ、行方をくらますことを余儀なくされたからでした。しかし、その短い期間に不朽の足跡を残しました。師はご存じの通りコングレガシオンの主要な祝日であった無原罪の御宿りの祝日を神学校の守護の祝日に定めたからでした(25)。師は神学校を離れる時、コングレガシオンに最初登録した司祭で、セン・シュルピス会士の到着まで院長であったヴェルクマン師に院長職を譲りました。

シャミナード師が神学校を訪れた時、あたかも自分の住居にいるように思われたのは驚くことでしょうか。師は四六時中没頭していた様々な用件にもかかわらず時々神学校で講話を行い、黙想の指導を要請されていたからでした。したがって、アジャンの司教から教区の神学校でぜひ黙想を指導して欲しいと依頼されたほど、召命の尊さを少年たちに浸透させることに成功していたからでした。

シャミナード師はやがて自らの協力者ばかりでなく、特に聖職者の養成の事業に専念する弟子たちを得たことで慰められました。師にこの慰めをもたらした最初の人、1805年にCongregacionの会長であったティモテ・ラコンブでした。彼は世の様々な呼びかけにもかかわらず27歳で神学校に入り、パリのセン・シュルピスで神学を終了し、1812年にはボルドーに帰り、聖職者の育成に専念することを決意しました。当時、ダヴィオ大司教によって大神学校から切り離された小神学校の会計に就任したラコンブ師は、安定した経営管理のため二つの建物を早速取得しました。

こうして、大神学校はセン・シュルピス会の司祭たちに委ねられ、イエズス会士は小神学校の指導を引き受けました。いずれにしても、この方面の心遣いから解放されたラコンブ師は司祭職召命の最も豊かなフランス中部地方を巡回して多数の聖職者の召命を得ました。また、教区からも豊富な召命が得られるよう1821年に、「小さな聖職者共同体」を設立し、ボルドーやリブリンの数名の聖職者の中からも熱心で頼もしい協力者を見いだしました。師はマリアへの愛に引かれてセン・ローラン・シュル・セーヴルのグリーニオン・ドゥ・モンフォル司祭団を訪れましたが、健康が優れなかったためそこに止まることが出来ず、聖職者育成者としての使命を生き続けるために聖母マリアの静かな他の巡礼所ヴェルドレに退きました。師は1836年にシャミナード師に協力を求められたことが伝えられていますが、1856年に帰天しました(26)。

教区の功労者の一人になったのは他のラコンブ師、すなわち、ジャン・バプティスト・ラコンブ師でした(27)。師の氏名はバザの小神学校から切り離すことが出来ません。聖職者の召命の増加のために、ダヴィオ大司教によって1807年に創立されたこの小神学校は、帝政下でも発展することが出来ず、1812年には政府によって廃止されました。小神学校の当初の院長の一人であったジョゼフ・モミュ師は、ロット・ガロン県の出身で、大革命中シャミナード師と共に宣教に従事していましたが、1801年の初頭にCongregacionでマリアに奉献しました(28)。王政復興時、カディヤック村に再建された小神学校はバザに移され、ラコンブ師の指導の下に最高の発展を遂げました。新院長のラコンブ師は生涯を神学生の養成にささげました。ボルドーの小神学校からイエズス会士を遠ざけることになった1828年の政令が公布された時、ラコンブ師は小神学校をボルドーに移し、1852年の帰天の時までこの小神学校の院長をしていました。ボルドー教区はこの小神学校からすばらしい聖職者の大半を輩出させました。ジャン・バプティスト・ラコンブ師も、その従兄弟ティモテ・ラコンブ師同様、その召命をCongregacionに負っていました(29)。バザ教区とボルドー教区で、ラコンブ師の協力者でマルシアルという名の二人の司祭もまたシャミナード師の弟子でした。その一人ギヨーム・エリゼ師は1858年にセン・ブリュックの司

教になり(30)、もう一人のジャン・バプティスト・ジョゼフ師は1881年ボルドー教区の司教総代理として帰天しました(31)。

帝政時代に、シャミナード師やコングレガシオンから直接間接影響を受けたボルドーの様々な宗教施設を簡単に一べつするにしても、当時創立されたほとんどすべての施設を列挙しなければなりません。富裕な階層のためのキリスト教施設のみは除外するにしても、こうした影響を認めないわけにはいかないからです。

確かに男子の子供のためのこの種の主要な施設は前述の二人のマルシアル師とは別人のマルシアル師によって指導されていたペルマンタド通りの施設でした。このマルシアル師とシャミナード師との関係は知られていません。しかし、エステブネ師によって指導されていたモニュ通りの他の学校は有名で、早晚、第一級の学校になるように思われました(32)。ところで、ジャン・バプティスト・エステブネ師は最初の12名のコングレガニストの一人で、また、初年度の3名の会長の一人でもありました。師は全面的にシャミナード師やコングレガシオンに協力しました。生徒たちがコングレガシオンに受け入れられる年齢に達するとすぐ彼らをコングレガシオンに送ることを幸せに感じていました。師自身は旧会長の「最年長者」の一人の資格で最も信頼された評議員になっていました。師は長年ボルドーに滞在している間、すなわち、1830年の大革命まで教育事業に従事していました。師の教育原理はその恩師シャミナード師の教育原理に一致するものであったということ、また、師が学校を去ったのは鍛錬されたキリスト者としてであったということをつけ加えるべきでしょうか。なお、師の聴罪司祭フランソワ・ピノー師もまたコングレガニストでした。

少女たちの寄宿学校の中で、グラマニャック嬢たちの寄宿学校が最も注目されていました。しかし、伝えられた女子青少年コングレガシオンのリストには彼女たちの氏名は見いだされませんでした。したがって、彼女たちがコングレガニストであったかどうか確かめることは出来ませんでした。しかし、シャミナード師の書簡によって、師の活動が彼女たちまで及んでいたことが理解されます。なお、彼女たちは友人同士であり、その友人の一人はラランヌ夫人やドゥ・ピション嬢の協力者でした。こうした親しい関係は、シャミナード師の宣教活動が少なくとも間接的に彼女たちに及んでいたことをあかしするものです。

前述の長いくだり、ドンネ枢機卿が教区のすべての活動の主要な役割を担ったのは正にシャミナード師であったと述べられたことをあかしすることは容易です。問題は、帝政時代のコングレガシオンの活動とその豊かさはこの時代に限ったものではなかったということです。



注

- (1) カミー・ジュリアン著、「ボルドー史」のある章のタイトル、750ページ以降。
- (2) コングレガシオンに関する覚え書き
- (3) 特に1806年
- (4) ブノワ・メイエ師の証言
- (5) ラボルデールのシスターたちについて述べたものです。彼女たちの中の一人ロール嬢はミゼリコルド会の役員を引き受けました。
- (6) ヴェンセン嬢たちに対する反対者は聖職者や大司教館の中にさえいました。真偽のほどは別にして、過度の神秘主義を教えたということで非難されたとのでした。その共同体は「ノートルダムのシスターの修道院」、または、「慈善の修道会」とも呼ばれていました。それは政府に疑心をもたらす「み心」の名称を避けるためでした。ラランヌ嬢のみ撰理の会同様、ヴェンサン嬢の共同体は後にバラ夫人のみ心の会に合併されました。そして、1806年からこの合併まで信仰の司祭団によって指導されていました。
- (7) H・リュリエーヴル著、「ルルスラ会」、最終章。
- (8) み心のウルスラ会の創立者、86ページ参照。
- (9) この言葉を述べたのは多分ラコンブ師とします。ドゥ・ラ・ポルト著、「ローザン師の生涯」、34ページ。
- (10) 「ラクロワ師の生涯」、52ページ。
- (11) リガニオン師、前記引用の覚え書き
- (12) もしキリスト教教育修士会の事務局の情報正確であるなら、多分1801年から1802年から。
- (13) 前述のすべての案内はリガニオン師の覚え書きによります。
- (14) 交渉は困難に思われました。フランスには同会の修練院がまだなかったからです。シャミナード師は押収されたフリュマン士からの手紙については、1809年警察に提出した覚え書きに次のように説明していました。「市当局によって要請される各種の学校のためには教師を見だし、または、養成しなければなりません。当初、フリュマン士は、わたしの提案に反対してきました。しかし、わたしはこのことを理解していただくために、再度フルマン士に書くと同時にローザン師にも手紙を書きました。フリュマン士の手紙が示すように、すべては理解され合意されました。」これらの手紙は1807年末の日付で、修練院開設の時期を明確にしています。
- (15) 既述の覚え書き

(16) フランソワ・ポーレン士はツルーズでも修練院長でした。士は41歳の若さで、1813年5月6日に帰天しました。総長のフランソワ・ジェルボー士は、ポーレン士が同会の最も重要な責任を負うにふさわしい修道士であったと述懐しました。一方、フランソワ・エロワ士(1771-1847)はボルドー、オーシュ、モンペリエの共同体を継続的に指導しました。士は、1816年にリオンで開催された同会の総会で総長秘書に選ばれました。確かなことは、シャミナード師の弟子たちがキリスト教教育修士会の中でも彼を高く評価していたということです。前記資料の提供は、同会の総書記ジュスティニユ士の好意によりました。

(17) 大司教館の資料室にはキリスト教教育修士会の修練院に関するシャミナード師の数通の手紙が保管されていました。シャミナード師は1811年4月27日に修練院の報告を中止しました。

(18) なお、1807年には、現役司牧の491名の司祭の内、78名は60歳以上で、117名は50歳から60歳でした。

(19) 神学校とその創立に関しては、L・ベルトラン師の「ボルドーとバザの神学校史」、特にその2巻、40ページ以降参照。

(20) 156ページ参照

(21) ブニ師はプロテスタントからの改宗者でした。師は1814年からこの職を辞任し、1827年5月13日、81歳で帰天しました。L・ベルトラン著、「神学校史」、2巻、356ページ参照。

(22) ベルトラン師がP・M・モミュ師の名で指摘した神学校教師とコングレガニストのティモテ・モミュ師と混同してはなりません。

(23) リオンネ著、「ダヴィオ大司教の生涯」、2巻、636ページ。

(24) 「神学校史」、2巻、45ページ。

(25) ラクロワ師は1813年6月29日に帰天しました。その伝記作者のベルナルドは、その「覚書帳」(595ページ)の中で、信者たちが師のひつぎの周囲にいんぎんに競って近づいたことを物語りました。

(26) 師はフランスで、そして、特にボルドー教区で、十字架の道の信心の最も積極的な宣伝者の一人でした。L・ベルトラン著、「神学校史」、2巻、219,222ページ。

(27) 3番目のラコンブ、すなわち、マルシアル・ラコンブはティモテが会長であった1805年にコングレガシオンの会計で、帝政の終わりに小神学校に採用されました。

(28) モミュ師は病人看護慈善事業の犠牲者として1810年1月29日に帰天しました。L・ベルトラン著、「神学校史」、3巻、77ページ。

(29) 師は後のパリのスタニスラス校となるリオタル師の有名な学校で文学の研修を終え、セン・シュルピスで神学の研修をいたしました。その伝記は、「神学校史」、3巻を参照してください。

(30) 司教はセン・ブリュックの司教座に3年しか止まらず、1861年に帰天しました。プーレン・カルビオン著、「司教の生涯」参照、セン・ブリュック、日付なし。

(31) ベルトラン著、「神学校史」、3巻、6章、7章。

(32) 1810年、この学校の卒業証書授与式を司会したのはボルドー市長でした。



第 15 章 コングレガシオンの廃止 (1809—1814)

1805 年の危機 ❖ 1806 年 ❖ 1809 年の繁栄 ❖ 試練の開始 ❖ 兄ルイ師の帰天 ❖ 皇帝の権限 ❖ 破門教書の漏えい ❖ ヤセント・フォン及びアレクシス・ドゥ・ノアイ-その逮捕 ❖ コングレガシオンの解散 ❖ 帝国の晩年 ❖ シャミナード師の逮捕 ❖ 帝国の失墜。

ボルドーでキリスト教精神の復興を目指していた神学校や修道会等、ほとんどすべての宗教団体はコングレガシオンの費用で創立され、あるいは、強化されていました。しかし、その最良の人材はコングレガシオンから継続的に失われていました。こうした危険を目前にしても慎重なシャミナード師は、「わたしたちは負けるが勝ち」の勝負をしているのですと静かに繰り返していました。確かにコングレガシオンは苦しんでいましたが、実り豊かな樹木のような諸施設の創立の目的にしたがって、周囲の人々の関心に応じた効果を惜しみなくもたらすよう努力していました。しかし、コングレガシオンは性根を使い果たす危険が無かったわけではなく、シャミナード師もその将来について常に心配がなかったわけでもありませんでした。師自身次のように述べていたからでした。「コングレガシオンが危機に遭遇したのは次の似たような二つの理由によってでした。一つの理由は1805年に多くの司祭や修道者の召命がコングレガシオンから出た結果でした。もう一つの理由はマリア会の創立でした。その最初の会員が皆コングレガニストだったからでした。」

コングレガシオンの最初の危機は、偶然にもシャミナード師の全く個人的な心配によるものでした。師はスペインから帰国して以来、文無しに近い貧しい生活を送っており、セン・ローランのぶどう酒が師の唯一の収入でした。しかし、その事業も収入より支出の機会に過ぎなかったからでした。いずれにしても、師はなすべき善に気づいた時には気前よく行い、不用意に師を非難する人々に対してもこれを許して、すべての人々に最もすばらしく、最も寛大に奉仕していたからでした。

しかし、師は既に困難な時期を乗り越えていました。例えば、師の窮乏を察知したコングレガニストたちが募金によって師を援助し、父親の会アグレガニストで、特に(ムニュ通り)のラブジャード氏とララン氏は師に対する寛大で好意的な援助が目立っていたからでした(1)。しかし、1806年の初頭、師はこの新たな困惑に対して、それが単なる試みとしてもたらされたものか、あるいは、自らの

活動自体のためにみ摂理によって新たな計画としてもたらされたものかを知るために自省し反省しました。師は一時的であっても教区の聖職者の司牧に復帰するよう要請されていたのではないのでしょうか。こうした不安にかられながらもコングレガシオンの臨時的な組織計画を作成しました。それによると、福音の勧めを最も熱心実践していたコングレガニストの中から選んだ12名の会員が他の会員の指導者になり、コングレガシオンの伝統の番人になるということでした。師のちゅうちょは一時的なものでした。師はどのように落ち着きを取り戻したかを次のように述べました。「わたしは厳密に必要なものや様々なるものを売りました。家族からも金銭的な援助を受けました。おかげでこの大きな苦境から立ち直り、すべてはいつもの通りになりました(2)。」

他方、コングレガシオンは思いがけない早さでその損失を弁償することが出来ました。当時のコングレガシオン登録簿は消失していましたが、その会計簿がコングレガシオンの最も繁栄した状態をはっきり示していました。当時、人々は帝国の幸福な日々を楽しんでいました。イエナやティルシーでの戦勝の凱歌はボルドーまでこだましていたからでした。ボルドーの人々は、港湾は閑散とし、取引も中止されていたことなど、愛国者の誇りからすっかり忘れていたからでした。宗教行事はすべての国際日において元通り行われるようになりました。それは大衆の尊敬と共感を得るために十分考えた当局によって援助されたからでした。しかし、自由思想や革命思想のなかなか消えない人々からの復しゅうが誘発されないように慎重に行われました。

ボルドーの青少年たちはコングレガニストの誠実で無欲な徳の模範に引き寄せられ、また、キリスト教教育修士会の学校で与えられた宗教教育はすばらしい影響を与え始めていました。したがって、シャミナード師の下には毎日のように新しいコングレガシオン入会希望者が訪れていました。こうして、コングレガシオンの住居が手狭になったので、これを拡張するか新築するかの必要に迫られました。コングレガシオンは黄金時代を迎えていたのです。男子コングレガニストの数は300名から400名に達し、女子コングレガニストは志願者やアッフイリエを除いて250名に達していました(3)。このすばらしい時期(4)の会長たちの中で、マルシアル、デュ・ティモテ、そして、ドゥ・パティリス・ラコンブの氏名を挙げなければなりません。この3人は立派なビジネスマン家庭の出身で、すばらしいキリスト教精神のあかしをしました。更に、認識を深めなければならない人々は、マルク・アルノザン、ドゥ・ケンテン・ルストー、そして、ドゥ・ピエール・グードレンです。最後に、コングレガシオンの不幸な歴史に緊密にかかわっていたドゥ・ジャン・バプティスト・ヤセント・ラフォン氏の氏名を挙げなければなりません。

1808年から社会情勢に暗雲が立ちこめ始めました。こうした時期にある親しい人の帰天は、信仰、国家、そして、コングレガシオン等、シャミナード師にとって大切なすべてのものを攻撃しようとする諸悪の前兆のようなものでした。それは、1808年4月29日、ようやく50歳になったばかりの兄ルイ師の帰天でした。ルイ師はボルドーに帰着以来、神学校で神学生の監督に任命されていました。ラテン語の知識の不十分な数名の神学生の出現は正規のクラスの教科を効果的に進めることが出来なくなっていました。そこで、校長のラクロワ師は彼らのために特別なセクション、一種の小さな補修グループを作ることにし、その指導をルイ師に委託しました。ルイ師は献身的にこの任務を受諾しましたが、師にとっては、年齢と損なわれた健康のため、車に戻すというすばらしい表現のように、彼らを同一教科に定期的に復帰させることは困難でした。

やがて師の肺は冒され、初めて授業を止めざるを得ませんでした。少しは快復に向かっていることには気づきませんでした。ちょうど大司教がミサをささげるために神学校を訪れていた時、師は一般席の上からでもミサにあずかることが出来ると考えていました。しかし、病気がぶり返す結果になりました。それでもなお友人たちを迎え、長時間にわたって、いつもながらの話題、また、神の愛について話し続けました。新たな不用心は師に悲劇的な結果をもたらしました。大司教は神学生の試験の指導のために神学校を訪れていたわけでしたが、ルイ師は神学生の試験準備を完了させるために彼らを自室に次々に呼ばなければならないと考えていました。そのことが体力的に無理だったのです。しばらく無意識の状態に陥ったからでした。駆けつけた兄弟、友人、そして、神学生たちは、「主よ、安らかに逝かせてください」の言葉のみがルイ師の口から漏れるのを聞きました。永遠の安息の時がこの忠実な神のしもべに訪れていたのです。

しかし、師の意識は回復し、なお数日間話すことも出来ました。この小康状態の間に、師にはその子弟に有益な教訓を与える機会がありました。神学生の一人はこのことを次のように述べました(5)。

「百科全書を含むすばらしい図書を持ち主であったルイ・シャミナード師は、ひどい苦しみの最中に、師を介護していた神学生の一人が読書のために一冊の本を取るのに気づきました。2日前から話すことが出来なくなっていた病人は、この神学生が危険な読書によって誤った信条を読みとりはしないかと恐れて力がわくのを感じ、『それを読むのは止しなさい。良くない本です。取ってはいけません』と力いっぱい叫びました。」

この同じ神学生はなお次のように付け加えました。

「ルイ師の帰天は神学校に深い悲しみをもたらしました。師の均整のとれた性格、優しい配慮、そして、その信心はすべての人に親しみを感じさせていました。」弟ヨゼフ神父の悲しみがどれほどであったか想像しなければなりません。故人の賞賛者が、二人の兄弟の悲しい離別を、同じ幹から分かれた大きな枝があらゆる方向にその小枝を交え絡ませていたが、激しいあらしのために折れてしまった樹木に比較しましたが、この感動すべき言葉を聞いたのは、1808年5月のコングレガシオンのある集会の時でした。この追悼講演者は弁護士のだヴィド・モニエ氏でした。彼はシャミナード師にその兄ルイ師に関する幾らかの伝記上の事柄を願っていたのでした。故人の生涯や諸徳について聴衆を感動させた講演は次のように結ばれました。

「この上何を申し上げることが出来るでしょう。わたしは故人のために涙を流していた多くの若者たちに囲まれて、神への供え物として祭壇の下に運ばれた故人の亡がらをみましたが、その顔は全く聖人のようでした…。ルイ師は幼い兄弟のヨゼフにマリアへの信心の精神を吹き込むと共に、ご自分の模範によってわたしたちを尊いマリアへの信心に導き、更に、師ご自身この祭壇の下でわたしたちの奉獻に参加されて、わたしたちのマリアへの信心の最初の導き手になったことを神は思い起こしてくださいに違いありません。どうか師が天国の幸せな喜びの中で、コングレガシオンを配慮してくださいますように。また、神が、師をわたしたちから取り去る前に、師をコングレガシオンの模範として示してくださいますように。師はわたしたちの力強い保護者だからです。また、師の最高の味方、似たもの同士であるわたしたちの、尊敬する弟神父をみ摂理がこの世のわたしたちの指導者として生きながらえさせてくださいますように(6)。」

なお、シャミナード師には他の心配がありました。マドレーヌでの諸活動の成功、典礼への評判が周辺の小教区にしっと心を起こさせていたからでした。そして、多くの司祭たちはシャミナード師の熱誠や実現した善を高く評価して、個人的には親しみを持っていましたが、マドレーヌの「越権行為(7)」を、また、「独立司牧権を有するような第14教区(8)」として、大司教座に、そして、当局にまで告訴したからでした。マドレーヌに与えられたそれぞれの新しい恩典が障害の理由になっていたのです。確かなことはダヴィオ大司教はほとんど動じなかったことです。1809年に大司教がシャミナード師に対する新たな要請に記された次のすばらしい覚え書きがこのことをあかししています。「新年度の諸行事が、マドレーヌの教会に許可された多くの奉仕活動について、また、マドレーヌの教会が他の小教区教会以上の利益を享受していることについて、わたしにもたらされた忠告の原因になっていることを忘れてはなりません。御清めの祝日の晩課では聖体顕示を許可しますが騒ぎが更に増大しないようお願いします。」こうして、シャミナード師は安心することが出来、うわさ話は聞き流してい

ました。師はどのような権利も侵害せず、教区自体の善のため、要するに神のためには働いていないという意識を持っていたからでした。

師は世の権力に対しては何ら恐れを感じていましたが、コングレガシオンに対するあらゆる政治問題を徹底して避けるようにしていました。これが師の原則的な手段だったからです。もちろん、このことは時代や祖国の問題に無関心であるということではありませんでした。それは師の分別だったのです。

師は、政治が魂を動揺させてもこれを成長させることはなく、一致団結の障害にさえることを知っていたからでした。善の追求への一致団結が師の最大の関心事だったのです。したがって、「*Quoerite primum regnum Dei*」、先ず神の国を求めなさい。そして、良心的な人になりなさい。学校で義務について教えられた人は国に対しても必要な奉仕をなす用意が出来ているはずでした。これが師の口癖でした。

もちろん、師とて何事も見聞せずにはおられなかったし、このことで他人を邪魔することが出来ませんでした。悲しいことに、師はフランス軍によるローマの占領(1808年2月10日)、教皇聖下に対する皇帝の敵意がエスカレートするのを知りました。それから数箇月後、師は、フランス皇帝のバイヨンヌ向け出発を歓迎するボルドーの民衆の最後の歓呼の声を聞き、また、スペインから追われた諸侯や許し難い戦争の最初の犠牲者となった数千人の捕虜の悲しい行列の到着を眺めたのでした(9)。

シャミナード師の司牧に関しては、同僚の司祭たちと、また、これらの不幸な人々に必要な奉仕をなすためには地域の人々と寛大に競い合いました。このことは師にとって亡命期間中大変歓待されたスペイン人から受けた恩義に感謝する最高の手段だったのです。公共施設に収容された捕虜たちはやがてチフスにかかってしまいました。シャミナード師やコングレガシオンの献身は敬けんな大司教や聖職者たちの献身同様片時も揺らぐことはありませんでした。司教総代理のプレール・ドゥ・テール・ノワール師はこの奉仕に命をかけました。シャミナード師も重い病にかかりましたが、冬の終わりには快復していました。

それほど苦しいスタートを切った1809年ではあったが、シャミナード師には更に多くの試練がもたらされることになりました。聖木曜日、マドレーヌの仮祭壇で起きた事故は単なる小さな事故ではありませんでした。この事故当日付けの手紙の追伸で、シャミナード師は次のように語りました(10)。「まだこの手紙の封をしていない時、マドレーヌの小さな教会で大きな事故が起きました。それは、夕方8時ごろ、聖務終了30分後、建物が火事になったのです。そのため貴重な調度品が焼失しました。与えた神は取り上げることが出来、取り上げた神

は与えることが出来るのです。その聖なるみ名はとこしえにたたえられますように。」

それから数日後、師は神学校の校長で友人のノエル・ラクワ師、司教総代理のティエル師、そして、大司教の秘書ドゥロル師のり免を知りました。ボルドーを訪れていた皇帝ナポレオンは、彼らを「立派な神学者」、すなわち、自らの離婚の問題に関して柔軟性のある聖職者とは考えなかったからでした。こうして、迫害のあらしが吹き始めました。果たして、1809年6月10日、皇帝はフランス帝国へのローマの無条件合併を宣言しました。その翌日、皇帝はローマから教皇聖下をらっちさせ、宿营地から宿营地とグルノーブルまで連れ回しました。最後にはサヴォヌに連れ戻すためでした。

教皇聖下はローマからのらっちに対しては破門の教書で応じました。警察はこのことが漏れるのを防ぐため用意周到でした。しかし、教皇教書がリオンやパリに伝わることを防ぐことは出来ませんでした。それは、ユージェン・モンモランシー侯爵が教書を長靴に隠して持ち込んだからでした(11)。パリの多くのコングレガニストは、その中には、アレクシス・ドゥ・ノアイ、旧聖ルイ勲章はい用者、そして、廃兵院年金受給者等の協力者及び帝政に対する不満分子がいました、教皇教書を複写してこれをフランス全土に配布するよう努力しました。

ボルドーのコングレガシオンは基本的にはパリのコングレガシオンとは何らの関係もありませんでした。同じ日に創立されたこの二つのコングレガシオンはそれぞれいつの間にか発展していました。しかし、1804年には両者の間には「祈りの連帯」(12)が確立されていました。同様な性格の関係がリオンのコングレガシオンとも結ばれましたが、ボルドーとパリ、そして、リオンのコングレガシオンの間には主に指導原理の目立った相違があるだけで、他の関係はほとんどありませんでした(13)。それぞれの都市を訪れた青少年たちは相互に歓待されていました。こうした動機でボルドーのヤセント・ラフォンとパリのアレクシス・ドゥ・ノアイの間には、まもなくコングレガシオンの性格が変わることになる文通が1808年から行われました。このことには後ほど触れることにしたいと思います。

ジャン・バプティスト・ヤセント・ラフォンは1766年にパッサク・シュル・トルドーニュ県で生まれました(14)。彼は聖職者の身分を目指しており、大革命ぼっ発時にはようやく助祭になっていました。しかし、総裁政府下では教育に専念し、「博愛協会」の名の下にブルボン王朝の復興をもくろんだ政治結社の陰謀に参加しました。これがその性格によって運命づけられていた彼の冒険経歴の第一歩でした。しかし、執政政府下や帝政の初頭には落ち着いていたように思われました。彼は司祭職には進みませんでしたので相変わらず市民服を着

用し(15)、もっぱら信仰への勧誘に専念していました。その熱心さと才能によってしばしばCongreganistたちによって、Congreganionの会長に選ばれ、その詩歌はマドレーヌの日曜日の晩の集会で大変好評を浴びていました(16)。

1807年度－1808年度間、彼はフィジャックの高等学校の教師でしたので、多くの生徒たちをボルドーのCongreganionに入会させました(17)。また、アジャン近郊のアデル・ドゥ・トランケレオン嬢によって指導されていた女子青少年の信心会をシャミナード師に結びつけたのも彼でした。シャミナード師とトランケレオン嬢の出会いはその後最もすばらしい成果をもたらすことになりました。ボルドーに帰って市の豪商ジャン・バプティスト・マレイヤック(18)の家庭教師を務めたラフォンは、Congreganionに対しても相変わらず熱心でしたが、既に政治的陰謀を再開していました。ラフォンとアレクシス・ドゥ・ノアイとの文通は、Congreganistたちにとっては宗教的な目的でしかなかったはずでしたが、「暴君」を打倒する独自の手段を取り扱ったものでした。したがって、彼らの手紙には二つの区分がありました。一つはCongreganionに関するあからさまな部分であり、もう一つは秘密の部分でした。アレクシス・ドゥ・ノアイもラフォンと同じ様な手段を用いていました。例えば、1809年1月8日に、ラフォンはノアイに次のように書き送りました。「例の件に関する部分は会員たちに読んで聞かせました(19)。」

1809年7月にラフォンはブルターニュ地方に旅行し、その間、ボルドーのCongreganionと同じようなCongreganionの創立に熱誠を傾けました。帰途パリに立ち寄りしましたが、ちょうどナポレオンの破門の教皇教書がパリのCongreganionに届けられたところでした。したがって、ノアイはこの教書をボルドーでも宣伝するよう友人のラフォンに決心させることは容易でした。

ノアイはラフォンに教皇教書の写しと、既に密かに印刷されていた教書の手書きの写しを託しました。これには次のようなタイトルが付けられていました。「ヴァチカン市国の占領から教皇聖下のらっちまで、ローマの聖座とフランス間に交わされた真正の書簡」

ラフォンはボルドーに帰るとすぐ、次のような隠語を用いた書簡でノアイに教書普及の最初の成功を伝えました(20)。

「わたしはラアルプ氏の最近刊行の書を多くの文士たちに送付しました。この作品は余り知られていませんが、大きな感動を与えるものです。また、わたしはミュズのような大作家の愛読書を収集しました。この件についても彼らに知らせました。彼らはそれを写して他の友人にも知らせました。ラアルプ氏がこの件を特に慎重に取り扱っていたことを考慮しなければならなかったからでした。

その取り扱われた件は何と力強く、何と雄弁だったことでしょう。この手紙を書いている間も30数名の友人がテーブルを囲んでメモを取っています。」

この手紙では、その暗示が見え過ぎて、幼稚でさえありました。8月29日の手紙を見ると、前述の手紙の「文士」は、今回は「業者」になっており、ボルドーの大半の司祭たちを指しているもののように思われました。彼は個人的には司祭たちに好意を抱いていたにもかかわらず、「彼らは非力で無気力、戦って破滅することを恐れてあえて事業に着手しようとしません」と述べて聖職者たちを非難しました。すなわち、ラフォンは警察での尋問に対して次のように説明しました。「教皇教書の原文に必要な説明を加えて印刷させる必要のあることを数名の司祭に訴えましたが、彼らは特にその必要を認めても実行することを望みませんでした(21)。」

一方、コングレガニストにおいては、少数の者だけが事件に精通しているように思われました。前述の通りラフォンは、「読んで聞かせるべき手紙の部分は彼らに読んで聞かせました」と述べていたからです。彼は、こうした状況の中で慎重になっていて、8月29日のノアイへの手紙には次のように書き送りました。

「ボルドーの友人たちへのわたしの働きかけについては何も明らかにしないでください。わたしが病気になった場合でも、誰かを代理人に指名しないようにして欲しいと思います。この件に関して十分同調する人を見いだすことは困難だからです。また、かつて、英国人が港湾を封鎖した時、危険を犯すほど正直で、慎重で、勇敢な人々を見いだすことは出来なかったからでした。…。ボルドーの一人の友人をあなたに推薦せざるを得ませんが、わたしたちの事業については何も話さないでください。もちろん、彼らはとても正直ですが、正直だけでは足りないからです。」

いずれにしても、コングレガシオンには極めて苦しい結果がもたらされることになるにしても、こうした事件については何も知らされていませんでした。

8月の最終日、警察は事件をかぎつけ、エンワリードで旧軍人のヴェルニエとブリアンソンを、そして同時に、デルピュイ師のアレクシス・ドゥ・ノアイを含む3人のコングレガニストを逮捕しました。押収された手紙からラフォンが割り出され、やがて、彼に対する逮捕令が出されました。

9月19日、午前6時、二人の警官が容疑者ラフォンをその住居で逮捕し(22)、その書類が隣家の屋根に窓から投げ捨てられないように押収しました。後ほど分かったことはその中の一枚は教皇教書でした。ボルドーの警視総監ピエールは、ラフォン逮捕の報告書を作成し、次のように発表しました。「当地

にはラフォンの聴罪師のシャミナード師によって指導されている狂信的なコングレガシオンがある。ラフォンが留置されていた留置所に最初にラフォンを見舞ったのは指導司祭シャミナード師を長とするコングレガシオン会員であった。このコングレガシオンとパリにあるこの種のものとの間には加盟関係があるようである(23)。」

真相は、ラフォンのいつもの聴罪師が不在だったためシャミナード師が呼ばれたということです。師は数名のコングレガニストを伴って何の疑いもなく留置所を訪れたこと、また、コングレガシオンで常日頃行われていた様々な事柄同様このことも決して秘密にしておかなかったということです。師は、たとえラフォンが事件にかかわっていたとしても、それは彼個人の問題で、決してコングレガシオンの問題ではないことを十分知っていました。コングレガシオンは政治問題には中立で、決して干渉することはなかったからです。

10月5日、ラフォンはパリに護送され、長時間の尋問を受けました。警察はコングレガシオンの会員数や集会の目的等、コングレガシオンに関するすべての事柄を詳細に問いました。事件の背景をつかんだように思った警察もこの遠大な陰謀からは何も発見出来ませんでした。ラフォンは次のように宣言しました。「わたしは誠心誠意誓って申し上げます。公式の集会でも、特別な集会でも、いかなる場合でも政府を批判する話をしたことはありませんでした。」審議官が、彼の自白から引き出したことをほのめかしながらわなをかけようとした時、ラフォンは次のように抗弁しました。「わたしは断固間違った答えはしていません。その上申し上げたいことは、わたしの知っている限りこの集会の目的は今述べられた嫌疑とは正反対です。」警察は、ボルドーのコングレガシオンにも同じ嫌疑をかけるため、パリのコングレガシオンが取っていた秘密主義を口実にしていたわけです。このことについてラフォンは次のように答えました。「彼(ノアイ)は、パリのコングレガシオンが多く善を行うため公にならないことを望んだのではないのでしょうか。反対にわたしたちはそのような心配はありませんでした。わたしたちのコングレガシオンは常に警察の目にさらされていたからです。」

いずれにしても、警察はボルドーのコングレガシオンがどうなっているか分かっていました。警視総監のピエールは次のように認めていたからです。「わたしは、長い間特別な警官とマドレーヌについて話してきた。彼はコングレガニストになり、コングレガシオンで何が行われているかについて興味ある報告書をししばしばわたしによこしてきたからである。」しかし、これらの報告書が危険をもたらす心配は全然ありませんでした。事件の観察をなす業務を担当していたのは国会議員で、彼らは警視総監側の評価を何ら対象にしていなかったからです。

したがって、ラフォンの尋問によって、コングレガシオンが事件とは無関係であることが分かりました。ラフォンはノアイとの文通で取り扱っていた政治問題をコングレガニストたちに話していなかったことが彼らの手紙によって明らかに立証されたからでした(24)。ラフォンはパリの他の容疑者同様拘置所に拘留されました。したがって、しばらくの間ボルドーのコングレガシオンは比較的平穏でした。

しかし、警察の捜査によって毎日報告を受けていたナポレオンはすべての宗教組織の廃止を決意していました。9月15日には宗務大臣ビゴ・ドゥ・プレアムニュに次のように書き送りました。「わたしは彼らとのかかわりを断ち切りたい。もし、10月1日までフランスに宣教師やコングレガニストたちが居残っていたなら、それは貴殿の責任である(25)。」

デルピュイ師は既に皇帝の激怒を予測していたので、9月10日からコングレガシオンの集会を中止していました。反対にシャミナード師はことの成り行きを静かに見守り、自らの誠実な態度によって皇帝の激怒から逃れる希望を養ってさえました。しかし、そのことは間違いでした。ジロンド県の知事は警察庁長官フーシェから11月4日付けで次の文面の通達を受領していたからでした。

「知事殿、わたしは様々な形式で設立されている狂信的な組織に注意を促すよう要請します。これらの団体、通称『乙女マリアへの信心のコングレガシオン』、の主要メンバーをパリでもボルドーでも逮捕させました。彼らは教会で集会し、何らかの信心行を行った後信仰とは無関係な問題について討論していました。わたしは彼らの書類を審査して、彼らが他の都市にもその組織への加盟を拡大するよう努力し、また、努力しようとして、世の中をよく知らない少年たちと何らかの悪らつな陰謀を文通していたことを知りました。これらの組織は宗教の真の利益やその精神に立脚するような立派な秩序とは相反するものです。祈りしかさげることが出来ず、また、司祭しか聖職を行うことが出来ない教会で、いかなる種類の集会も行われることがないように注意するよう要請します。貴殿の県に存在するこれらの組織を直ちに解散させてください。そして、彼らの書類を押収し、特にそのメンバーを報告してください。知事殿、わたしはこの命令の実施方について詳細な報告を皇帝になすようお知らせいたします。」

通達に明記されていた規定に従ってコングレガシオン本部の家宅捜索が実施され、シャミナード師及びその秘書であったダワッス師(11月17日)のもとにあった疑わしいすべての書類が押収されました。そこで、シャミナード師は警視總監にコングレガシオンの組織とその存在理由について説明しました。軽視總監は、コングレガシオンには帝国の安全をおびやかすものは何もないことを理解し、

あるいは、理解したふりをしていました。そして、法務大臣に提出する簡単な覚え書きを作成するようシャミナード師に要請しました。そこで、シャミナード師はこのことを速やかに実行するようにし、その覚え書きに次の手紙を添えました。

「警視総監殿、コングレガシオンの廃止に伴う遺憾な結果について簡潔に申し上げる光栄を得ましたが、総監殿には心痛められたことと拝察いたします。ご承知の通り、わたしは不平を言わず服従いたします。もし、青少年たちの集会で行われた善行の証拠を目撃しておられた総監殿が、ご自身でわたしが警察庁長官殿に提出すべき簡単な陳情書を総監殿に提出するようお勧めにならなかったなら、わたしはただ沈黙するだけになっていたに違いありません。総監殿のご厚意はわたしの心の痛みを和らげ、わたしに希望を与えました。

失礼ながら、わたしの見解を述べさせていただくわけですが、わたしの申し上げたいことはただ青少年のコングレガシオンに関するだけで十分なものと拝察いたします。実は、総監殿がご親切にも既にお話くださったように、総監殿のお考えでは、政府は女子青少年のコングレガシオンは存続させるつもりであり、また、前者について言えることはすべて後者にも当てはまるということだったからです。」

陳情書では二つの考えが浮き彫りにされていました。それは、コングレガシオンが創立以来維持して来た公共の良俗風習と公的性格の維持促進のためのコングレガシオンの明白な有用性でした。陳情書は更に続けられました。

「指導者の肩書きを持つ聖職者はこれらの青少年たちに、信頼から生ずる権限以外の権限は行使しませんでした。指導者の周知の性格、節度のある指導方針、大革命中もその後も、その生活のあらゆる状況における行動は当局に対する保証になっていました。また、信心の実践や集会に関してコングレガシオン自体を観察しても、宗教的な考えの狂信的なもの、法律とその委託者への尊敬と服従のゆるみ等、何もなく、懸念するものは何も見いだすことが出来ないに違いありません。」

押収した書類を審査した警視長官ピエールは、コングレガシオンを名指した言葉の「この狂信的なセンター(26)」は危険ではなかったということを更に確認出来たのです。彼は会則、道徳的な講話、会員名簿、そして、その他の無害な資料しか見いだすことが出来なかったからです。ただ1806年に計画された第12回の集会計画についてだけはいささか言いがかりをつかられました。それは、その計画に秘密結社の創設を企てたふしがあるようにかんぐられたからです。しかし、シャミナード師は必要な説明をいたしました。

ダヴィオ大司教はCongregacionを擁護し弁護しました。しかし、当局は皇帝の明らかな命令をたてに大司教に反対しました。当時パリに滞在していて個人的にビゴ・ドゥ・プレアムニユ宗務大臣と知り合いになっていたローザン師は、友人のシャミナード師に決して落胆しないよう、また、大司教に新たな歩みを促すよう勧めました。シャミナード師にはわずかな望みしかありませんでしたが、再度覚え書きを作成し、大司教をわずらわしてパリの当局に送付させていただきました。それは男子青少年のCongregacionに対して抱かれていた不満は、女子青少年Congregacionや志願者グループには無関係であるということで、彼女らを厳しい措置から除外していただくよう嘆願したものでした。

宗務大臣からの決定的な回答を待つ間、警視総監は寛大な態度を示してシャミナード師が維持することを求めていた集会の開催を一時的に黙認しました。しかし、やがて、警視総監は11月24日に政府から命令を受け取りました。それは、Congregacionの集会の特権をシャミナード師に自由に任せてはならないということでした。宗務大臣は次のように厳しく宣言していました(27)。「子供たちを小教区教会から引き離してはならず、主任司祭や助任司祭は彼らの能力にふさわしい訓練を施さなければならない(28)。」

シャミナード師はこの衝撃的な試練を受け入れましたが、脳裏に刻み込まれたマドレーヌの教会の思い出を忘れようとして、やがてマリア会の修練院になるセン・ローランに完全に引きこもりました。師はCongregacionを弁護するためパリに赴いたように思われますが、教皇聖下の権威に対して自らの権威を誇るために国会を召集した政府に対しては何ら期待出来ないことが分かりました。そこで、この件に関してダヴィオ大司教に次のように書き送りました(29)。

「大司教様、教会会議の開催が最終的に6月8日ないし9日に決定されたことを伺いました。確かに、大司教の生涯中最も重要で、最もデリケートな状況にあって、神が大司教様に必要とされる剛きと賢明の賜物を与えてくださいますようその日まで続けてお祈りいたします。」

シャミナード師の期待は裏切られませんでした。ナポレオンはダヴィオ大司教の揺るがない抗議に降参したからでした。ナポレオンが大司教を逮捕しなかったのは何よりでした。それは、もっぱら大司教が「聖人のように見なされていたからでした(30)。」

この審理の結果を待つ間もシャミナード師は活動をあきらめませんでした。Congregacionの集会が禁止されたとはいえ、有力者を通じてCongregacionを維持するよう熱心に努力したからです。次のくだりは1810年8月27日付けの手紙で、女子青少年Congregacionについて述べたものです(31)。

「女子青少年のコングレガシオンは一般に模範的でした。しかし、み摂理はその廃止を許されました。彼女たちが行っていた善行を考えれば残念でありませんが、わたしは不平を言いませんでした。コングレガシオンの解散後も彼女たちの徳は確固としています。彼女たちは一般に立派に活動しています。至聖なる乙女マリアへの献身を忘れた者はほとんどいないはずです。ラコンブ嬢は以前務めていた職責を続けています。すなわち、かの女は、彼女に接するすべてのコングレガニストを徳と信仰に導いています。幾人かの会員はしばしば彼女に会っています。彼女は彼女たちの間にみなぎる信頼と愛のため、まるで母親のようだとされています。」

一方、男子青少年コングレガシオンは、その会員名簿によれば、1810年から1812年まで様々な入会者の登録がなされていたので、実はそれほど影響を受けなかったように思われました。シャミナード師が、「かろうじててではありませんが、万事順調です(32)」と、ドゥ・トランケレオン嬢に書き送ったのは確かにその通りの方でした。もちろん、わずかな動静にも用心して密かに行動しなければなりません。さい疑心の強い警察に疑惑を持たれることを恐れたからです。

シャミナード師はボルドーを去って行ったコングレガニストたちと接触を続けていましたが、文通でのコンタクトは何よりも用心が肝要でした。一通の手紙が紛失した時、師はその機会を利用して通信相手の一人ドゥ・トランケレオン嬢に次のような極めて慎重なアドバイスを与えました(33)。

「このちょっとした事件から、どのように用心して文通しなければならないかお分かりでしょう。あなたに出来るすべての愛徳は口頭で、あるいは使い走りを頼むにしても口頭でなしてください。何かわたしに特別に伝えたいことがあるのでしたら、都合のよい機会を待ってください。わたし自身余り手紙を書きません。事件が起きた場合自白にさらされる恐れがあるので、そのような手紙はほとんど書きません。」

こうしたあらゆる用心にもかかわらず、1812年末ごろから新たなあらしがぼつ発しました。10月、皇帝のロシア戦線での折後、ラフォンは四人の身であったが無謀にもマレ將軍の企てたクーデタに協力したからでした(34)。ラフォンは逃走しましたが、この事件はまたも何の関係もなかったボルドーのコングレガシオンに対する政府の不信を招くことになりました。警察は、先の陰謀の時その現場を押さえることが出来なただけに、今回はその証拠を捕らえるために一層熱心に捜査しました。シャミナード師は、ラフォンが属していたコングレガシオンの指導司祭というだけで逮捕されました(35)。彼らは師の友人で弁

護士のダヴィド・モニエ氏も逮捕しました。

二人とも拘置所に拘留され、コングレガシオンの書類はまたしても押収され、厳しく審査されました。彼らは何らかの告発の理由を探しましたが無駄でした。告発の理由が無いことを認めざるを得なくなり、二人の容疑者は釈放されました。この時から、コングレガシオンは用心を倍加し、活動上のどのような徴候も、たとえそれがわずかであってもこれを漏らさないようにしました。したがって、1813年のクリスマスまでコングレガシオンへの入会式は行われませんでした。

ボルドー市には、こうした悲しい事件に、また新たな悲しみが重なりました。久しい以前からボルドー市は恐ろしい危機には見舞われていませんでした。商人が致命的な打撃を受けることもありませんでした。ところが、1812年から1813年の相次ぐ2回の冬は、極端な食糧の危機に見舞われました。こうした時期に、ダヴィオ大司教には奇跡的な慈善事業の機会が訪れました。この時期のシャミナード師の動静は不明ですが、シャミナード師やコングレガシオンが愛徳の義務を座して待たなかったことは想像に値します。

フランスの一般情勢は人々の勇気を高揚させる性質のものではありませんでした。ウエリントン将軍の率いる英国軍がピレネの国境を突破し、オルセーの戦闘の勝利によってフランスの南部地域全体を管理下に置いたからでした。その他の国境も全然防備されていませんでした。1814年の初頭には敵はあらゆる方面からフランスに進入して来ました。したがって、圧制的な政体は崩壊に向かい、フランスは滅亡の危機にひんしていました。



注

- (1) 1848年10月18日の覚え書きによるシャミナード師の証言
- (2) 1809年の記録で、警察に当てられた覚え書き
- (3) これらの数字は1809年のラフォンの尋問調書の数字です。
- (4) 会長職は先ず毎年3回更新され、次に2回更新されました。次の会長リストは破損した資料から復元したものです。1801年：ルイ・アルノー・ラファルグ、ジャン・バプティスト・エステブネ、ギヨーム・ダルビニャック。1802年：ヤセント・ラフォン、マルシアル・ルノー・ラコンブ、ベルナル・ロティ。1803年：ヤセント・ラフォン、エティエン・フェルラ。1804年：マルク・アルノザン－2期、1805年：ティモテ・ラコンブ、ヤセント・ラフォン。1806年：ケンテン・ルストー－2期。1807年あるいは1808年：ピエール・グードゥレン。1809年：パティリス・ラコンブ。
- (5) 前述のリガニオン師の覚え書き。L・ベルトラン著、「神学校史」、2巻、103ページ参

照。

(6) ダヴィド・モニエ士が次の献呈の言葉を添えてシャミナード師に送った自筆の弔辞。「私はあなたを父と呼び、あなたはわたしを時々子と呼ぶことを断りませんでした。どうかあなたの最良の味方であり、親愛の兄、そして、コングレガシオンであなたに続く最も信仰の深い司祭の生涯についての私のささやかな弔辞を述べさせていただいた私の敬愛の賛辞としてお受け取り下さい。今の私の気持ちは、途方にくれ、最も深い悲しみと残念さに満たされています。」

(7) 「マドレーヌの集会は極めて頻繁に行われていました。ボルドーの各小教区の司祭たちは少なからず不満でした。彼が小教区教会での集会を邪魔したということでした。」1809年11月24日付け警察の報告書による。国立資料館、AF. 1507。

(8) これは、ダヴィオ大司教がシャミナード師に聖体降福式を行うこと、師が落ち着くはずであったセン・プロジェ教会で門を開いたまま説教をなす事を禁ずよう、1803年に8名の司祭が大司教に提出した請願書です。(大司教館資料室)

(9) ボルドーで世論はスペイン人に対して好意的でした。1809年の縁日でシャルル4世の肖像入りのタバコ入れが売られていたほどでした。しかし、警察はこのことを対立の徴候と見なしていました。(1809年11月20日、警察資料)

(10) 1809年3月28日、ドゥ・トランケレオン嬢へ

(11) ジョッフロワ・ドゥ・グランメゾン著、「ラ・コングレガシオン」、105ページ

(12) ドゥ・グランメゾン著、「ラ・コングレガシオン」の229ページと特に383ページに記録された2箇所のみで指摘されているように、パリとボルドーのコングレガシオンは加盟でも従属の関係でもありませんでした。

(13) 最も目立った相違は政府に対する態度でした。パリのコングレガシオンについては、ラフォンが警察で尋問された時の答弁で断片的に明らかにされたことが伝えられています。このことは後に触れることになります。リオンのコングレガシオンについては、同コングレガシオンの会長からシャミナード師におくられた書簡で、次のくだけた読みが出来ます。「あなたのコングレガシオンは当局に対して極めて公然と活動していますが、わたしたちのコングレガシオンは秘密の中に、用心して、控え目に活動することを余儀なくされています。」

(14) 主要伝記辞典にラフォンに関する記録が見いだされます。最も正確な記録は1839年のフェルレルの辞書の記録です。「現代の一般携帯用記録」の記録(1834年)が最も詳細になっています。これらの資料を、独自の資料と国立資料館から借りた資料と家族の好意による資料によって修正し、完成しました。

(15) この場合は異常ではありませんでした。ボルドーでも、1819年にボワイエ師に代わったダヴィオ大司教の司教総代理バツレ師にも変わった例があることが伝えられています。ラフォンは大革命中は助祭で、1814年まで一般の業務にたずさわっていました。司祭職を目指す前の最後のポストはピュイ県庁の総書記でした。

(16) シャミナード師がラフォンに送った手紙に、彼の評判がどんなに高かったかが示さ

れています。「会長殿、うわさによれば、あなたは受難曲を知っているとか。あなたは聖金曜日に祈とう所で説教する勇気がありますか。皆喜んであなたの話を聞くと思います。」しかし、ラフォンは大司教の許可が必要であるということで辞退しました。」(ラフォンの尋問から)

(17) ノー、ラコンブ、マルセル、そして、ブルーニオン・ピエール等の新入会員は極めて熱心で、ブルニオン・ペリエールはマリア会創立当初の会員であったことが伝えられています。

(18) ジャン・バプティスト・マレイヤックは1796年にはボルドー市長でしたが、1809年には県会議員でした。

(19) 国立資料館F7 6538、記録1726。ジョッフロワ・ドゥ・グランメゾンは1899年10月22日付けのユニヴェル誌に同記録の幾つかの抜粋を公表しました。

(20) 1809年8月22日の手紙。ラフォンはフィジャックで旧知の郵便局長オギエ氏を介してアノイにその手紙を届けさせました。

(21) ラフォンは特に大司教や、むしろ、司教総代理に対して不満を抱いていました。「耳が遠く、話の不自由な筆頭業者の一人(大司教)はラハルブの著作(教皇教書)の連絡不十分ということで非難されました。彼らは自由に行動出来る主要な社員だったはずです。」(パリ、セン・ジャック通りの無名の通信相手への8月末の手紙)。

(22) シャルトロン通りの筋向かいで、マレイヤック氏の住居22番地

(23) 9月22日警察の報告

(24) ノアイからラフォンへの手紙で、例の言い回しで、「破産者ジュリアン(背教者ユリアヌス)」と呼んでいた人、あるいは、皇帝の戦勝を非難していたことについて、ラフォンはコングレガニストたちにはこのくだりは読み聞かせませんでした。ラフォンは、「このことは皇帝や国王に関するくだりで、これを彼らに読み聞かせる必要はないと思っていたし、このくだりは、教会が国家の元首に対して払うことを命ずる尊敬に反するからでした」と述べました。(10月5日の尋問)

(25) この命令の結果、ローザン師のフランス宣教師団は廃止され、外国宣教師会に与えられていた援助は中止されました。信仰の司祭団は1807年以降解散させられていました。

(26) 1809年11月24日の「警察の報告書」に記された11月18日の報告

(27) 1809年11月24日の警察の報告書。国立資料館、A FIV,1507

(28) パリとボルドーのコングレガシオンと同時に廃止された他のコングレガシオンの中には、リオンとモンターバンMontaubanのコングレガシオンを記さなければなりません。リオンの「信仰の復興者」のコングレガシオンは1809年11月22日、23日の警察の長文の二つの報告書の対象になっていました。警察が彼らを告発した主な不満はその「秘密主義」でした。警察はこのこと自体を強調したのです。モンターバンのコングレガシオンに関しては、1809年11月27日の警察の報告によれば、「彼らは職人や商人で構成され、その主要

目的は病人の介護であり、市から貧困を減ぼすことに寄与することでした。」このコングレガシオンも乙女マリアのコングレガシオンの名称を持ち、後にオータンの司教になったエンベルディ司教によって創立されたものでした。

(29) 1811年5月日

(30) C. ジュリアン著、「ボルドー史」、700ページ

(31) ドゥ・トランケレオン嬢へ

(32) 1812年4月19日、ドゥ・トランケレオン嬢へ

(33) 1811年10月24日

(34) アレクス・ドゥ・ノアイは皇帝直属の兄弟アルフレドの仲介で1810年4月8日に釈放されていました。しかし、ラフォンはラ・フォルスの留置所に拘留されていました。彼は釈放を申請しましたが無駄でした。警察庁長官は6月8日、好意的な意見を申請しましたが無駄でした。皇帝はオーストリー内親王マリー・ルイズとの結婚の折りにも彼の恩赦を頑固に拒みました。ラフォンが唯一手にすることが出来たことは、ラ・フォルスの留置所からセント・アントワヌ郊外のデュビュイソン医師の療養所に移送されたことでした。ここで彼はマレ将軍と懇意になり、マレ将軍、ポリニャック、ベルシエ、ピュイヴェルと共に1812年10月23日の例の陰謀を準備しました。一時警察署長であったラフォンは、マレ将軍の失敗を聞いた時早速逃走しました。炭焼きに変装してパリに止まり、懸賞がかかっていたとはいえ、警察の追跡を逃れることに成功しました。彼は、ルアン(ソーヌ・エ・ロワール県)に落ち着き、王政復興時まで偽名で公立学校の教職についていました。そして、100日天下の間、フランスの東部地方でルマール・デュ・ジェラやドゥ・ジュッフワ・ダバンと共に王党派の長として重要な役割を演じました。王政復興時、レジオン・ドヌール勲章と小姓の副教育係によって報いられました。生まれ故郷のプッサクに退いた彼は1826年司祭に叙階され、1836年8月15日に永眠しました。彼は、「キリスト教思想協会」の長をしていました。護教の問題についての多くの著作がありましたが出版されませんでした。

(35) この逮捕は、「修道会辞典、マリア会の項」、4巻、745項でララン師によって明らかにされたものです。シャミナード師の手紙の数箇所ではこのことは暗示されていました。いずれにしても、シャミナード師が逮捕されたのはマレ将軍の陰謀の折りではなく、ララン師が指摘するように、ボルドー市を悩ましていた2回の食糧危機の間、政府とボルドーのパン職人たちの間に起きた困難な問題に関して行われたと考えられる理由があったからです。それは、シャミナード師と弁護士ダヴィド・モニエ士によって指導されていたパン職人のコングレガシオンの下部組織がマドレーヌにその本部を置いていたことが想起されるからです。

第 16 章 コングレガシオンの再建 (1814—1830)

アンブレム公爵 ❖ コングレガシオンの再建 ❖ 100 日天下 ❖ 王党派シャミナード師 ❖ コングレガシオンの繁栄 ❖ 組織の改革 ❖ 教区のコングレガシオン ❖ キリスト信者の助け手なる聖母の小聖堂 ❖ マリア・プリマリアへの加盟 ❖ 25 周年記念。

ナポレオン退位1ヶ月前、そして、王朝支持者のパリ入場1週間前、ボルドーはアンブレム公爵に城門を開放し、ブルボン王家の人々を歓迎しました(1814年3月12日)。このことは商取引を壊滅させ、港湾を過疎にした政体に対する敵意をあかしするものであり、また、愛国心の行為をなすことだったのでないでしょうか。皇帝の失墜は避けられないものになっていました。ボルドーの人々は現状で、また、自発的運動の支援によって、王朝支持者たちにその約束を想起させ、気まぐれのままにフランスをあしらうことを防ぐ唯一の政府を出来る限りサポートする用意が出来ていたからでした。

ダヴィオ大司教はアンブレム公爵をカテドラルの玄関で迎え、熱烈な歓待を込めてTe Deumの賛歌を歌いました。こうして、第二の、恐ろしい試練の後に教会に与えられた平和のあかしを神に感謝し、フランス王座への王室の復帰を公爵に感謝しました。使徒伝来の教義によって確立されたすべての権威に忠実であった大司教は先祖たちが仕えた王室への世襲的な忠誠の念を心の奥底に持っていたからでした。その日、大司教は政治的選択を表明することが出来ました。その気持ちが宗教的な信念に一致していたからでした。

シャミナード師は過去の政体については同じような感覚は持っていませんでした。旧政体の敵の中で知っていたのでは宗教の迫害者だけだったからです。しかし、師はブルボン王家の復帰を自由への期待、教会の勝利として歓迎しました。師の神への感謝の気持ちは、ドゥ・トランケレオン嬢に送られた次のくだりの感動的な言葉で表明されました。

「ついに神の慈悲がフランスに表明されることになりました。ボルドーがそのお恵みを最初に頂いたわけです。それは、ボルドーでは、年齢、性別、身分を問わず多くの信徒が常に聖母を敬い、そのご保護を求める聖母信心を熱心に行っていたためでしょうか。わたしはあえてそう信じたいと思います。もちろん、わたしたちマリアの子供が神への奉仕により熱心であってのことです。それにして

も、わたしはとても喜んでいます。と申しますのは、フランスに現れた最初の国王の白旗をセン・ミシェル教会の鐘楼に掲げたのは忠実なコングレガニストの一人(1)であったことを考えていたからです。今まで以上に聖母への信心に励みましょう。そうです、マリアは真にいつもわたしたちの母だからです。」

コングレガシオンは新政府の下で、もう隠れていませんでした。4月30日以来、コングレガニストたちはその登録簿、すなわち、「ボルドーの青少年コングレガシオンの誓約書」に次のように署名しました。この登録簿は今日まで伝えられています。

「カトリックの信仰に本質的に属する二つの特性は、教義の真実性とモラルの神聖性です。キリスト者は信仰の公の告白によって前者を、風俗良習の犯すことの出来ない純潔さによって後者を尊重する義務を持っています。今日においても、世の中に孤独で生き、これほど重要な義務を果たすことは青少年にとって不可能ですから、わたしたちは相互に無原罪の御宿りの乙女マリアのみ名を頂く青少年のコングレガシオンを設立することを決定しました。」

最初に、当該コングレガシオンの指導司祭ギヨーム・ヨゼフ・シャミナード師が署名し、続いてコングレガニストたちが署名しました。

最初の入会者の一人はリモージュのフィリップ・デゥブール司教でした。同司教は、帝国の最も平和な時期、すなわち、1806年に司教総代理の一人によって指導された聖職者の静修会に参加した時、シャミナード師やコングレガシオンを知るようになりました。1814年に再度ボルドーを訪れた司教は教会に再興された信仰の自由に対する感謝の公のあかしをマリアにささげようと思いました。そこで、5月22日のコングレガシオンの総会で、旧マルタ騎士修道会士の弟ヨゼフと共にマリアの祭壇の前にひざまずいてマリアへの奉献をいたしました。敬けんな司教は、100日天下の間、乙女マリアのすべての祝日に、また、聖母の誉れのための聖務日課が唱えられる毎土曜日にカテドラルでミサをささげることを約束してマリアへの献身の新たなあかしを表しました。1822年に不意に訪れた帰天の日までこの約束は忠実に守られました(2)。

コングレガシオンの各系列が再建されました。父親の会のアグレガシオンの会員たちもまたマリアへの忠誠と青少年への献身奉仕をあかしするために誓約書に署名しました。こうして、コングレガシオンのグループ全体が特別な熱誠で活気づけられ、秋の黙想会によってシャミナード師には過去の悲しみに対する十分な慰めがもたらされました。

1814年のコングレガシオンが1809年のコングレガシオンの熱誠を持っていた

としても、もう静かに隠れて活動する必要はありませんでした。コングレガシオンの廃止が大きな反響を呼んでいたのはその活動の再開が気づかれなかったからでした。様々な事件そのものがコングレガシオンの廃止を印象づけていたわけでした。犠牲になった国王ルイ16世を記念する追悼式がカテドラルで行われた日にコングレガシオンの再建が明らかになりました。追悼式には市のすべての公的機関の人々や国民軍も出席していました。この追悼式は、コングレガシオンで毎月習慣的に行われていた総員聖体拝領日に重なりました。しかも、この国民軍には多くのコングレガニストが入っていました。したがって、聖体拝領の時になると彼らは隊列を離れ、小銃をさ銃して、秩序正しく聖体拝領台に進みました。この光景は参列者一同に深い感銘を与えました。この日からコングレガシオンは祭式の時特別席に着くことになりました。また、聖体行列の時、その天がい捧持する名誉を保持することになりました。

その他のあらゆる事柄がこれまでコングレガシオンが喜びを享受していた隠れた活動から彼らを表舞台に引き出すことに寄与しました。1814年の夏、パリの二人のコングレガニストで政治活動に興味を抱いていた、アレクス・ドゥ・ノアイとジュール・ドゥ・ポリニャックがボルドーを訪れてコングレガシオンに紹介され、熱烈な歓待を受けました。試練の時期の思い出が彼らの歓待に寄与したのでした。コングレガシオンは二人にコングレガシオンの名誉会長の資格の印として記念のメダルを贈りました。次の年の春3月12日、アングレム公爵夫妻はボルドー入場記念式典のためボルドーを訪れました。当日は日曜日でしたが、その日の晩、公爵夫妻に従っていた3名の名士がコングレガシオンの集会でマリアへの奉献を行うことが許可されていました。その3名の名士は、ドゥ・モンモランシー子爵、ドゥ・ダンピエール侯爵、そして、ジュワリエ勳章はい用者のミランブでした。

不安な一報が祝典を動揺させました。ナポレオンがジュアン湾に上陸し、パリに向かったという知らせだったからです。アングレム公爵はプロヴァンス地方の防衛軍の編成に赴き、公爵夫人はフランス南西部の人々の王家への忠誠を擁護するためにボルドーに止まりました。ナポレオンに、「ブルボン王家の第一人者」とまで呼ばせたルイ16世の王女アングレム公爵夫人の勇敢な行動も軍隊の脱落者を防ぐことが出来なかったからです。ポンタク大左に率いられた500名のボルドー人義勇兵はクローゼル将軍に抵抗して、セン・アンドレ・ドゥ・キュザックまで進撃しました(3)。

しかし、それも見せかけに過ぎず、ボルドーは陥落しました。

善意旺盛なコングレガシオンは集会を継続し、5月14日にはまた新しいメン

バーの入会式を行っていました。ところが、このころから9月まで彼らの活発な活動の痕跡が無くなってしまいました。警察がコングレガシオンを廃止した1809年の政令を再発動したことが考えられたからでした。言い伝えによればシャミナード師はボルドーを去ってペリギュールに退き、ある女子修道院で様々な乱用によって損なわれた会則遵守の秩序を確立する手助けをしていたということです。多分、宣教師はその出身地に帰らなければならないという帝国の命令が師の上にも最適用されていたのではないのでしょうか。

いずれにしても、この突然の危機は100日しか続きませんでした。危機が遠ざかった時、コングレガシオンは正規の活動を快復しました。アングレム公爵夫妻は1815年の8月にボルドーに復帰しましたが、ボルドー出発後、シャミナード師はドゥ・トランケレオン嬢に次のように書き送りました(4)。

「ドゥ・モンモランシー子爵はボルドー滞在中、最も規則正しく、最も模範的なコングレガニストの一人でした。わたしたちは子爵にコングレガシオンの名誉会長の資格とささやかなメダルを贈りました。また、王家の大公たちのためにマリアのしもべの手引きを2部製本させ、これをドゥ・モンモランシー子爵を介して彼らに進呈しました。子爵夫人はボルドー出発に際して、ご自分が頂いた花束の一部分をわたしたちに渡すよう命じられました。目下、コングレガニストたちは聖体を飾るため四つの花束を作るよう働いています。また、夫人は花束と同時に、暖炉の上に飾っている額入りの版画も送っていただきました。」

同じころ、シャミナード師は、ボルドーを舞台にした最近の出来事を記念して市の婦人たちが作った刺しゅうの旗をボルドー市長出席の下で荘厳な祝別式を行うよう要請されました。このことはいささか政治の領域に立ち入ることになりかねない機会に思われましたが、師は司式者にふさわしい言葉で次のように慎重に話すことが出来ました。

「教会は、わたしたちを勝利に導いたが、絶えず涙を流させた国旗、栄光の国旗、しかし、血まみれの国旗よりも、感謝と平和、そして、幸せのこれらの旗を喜んで祝別いたします。これらの旗には神の恩恵によって災いを止めていただくためのわたしたちの願いが込められているからです。神の哀れみの印を頂いたこと、そして、すべてのキリスト教的な諸徳と両立する世の繁栄への期待が再生されるのを感じるのは何とすばらしいことでしょう。」

師は、神の祝福を頂くことの出来る諸徳の実践を呼びかける話しを続け、最後に次のように結びました。

「皆さん、皆さんは、この世では権威や力が皆さんの幸福を強化するために

聖なる信仰と密接に関係していることが分かると思います。動乱を許し、平和を促す神の前にひれ伏してください。これ以上神の怒りを受けないよう全力を尽くすことを神の前に約束してください。」

確かなことは、シャミナード師が復興した政体に好感をもって臨んだこと、そして特に、この選択に導かれた動機が何であったかが分かったことでした。王政復興は師にとって、神聖な事柄の尊重、真の自由、善の実践の自由への復帰を意味するものだったからです。この意味で師はもっぱら王党派だったのです。師は前述のドゥ・トランケレオン嬢への手紙の末尾にこのことをはっきり記しました。「わたしたちは皆喜んで、国王万歳と叫びました。しかし、心の中ではむしろ信仰万歳と高らかに叫んでいました。」シャミナード師は1802年ごろのように、ブルボン王朝に信頼を寄せ、政教条約の当事者や教会の保護者にも信頼を寄せていました。しかし、今回は新政府がより積極的に宗教的意識を明言するまで余り信頼しないようにしていました。

帝国によって厳禁されていた黙想会の開催もフランス全土にわたって盛んになりました。しかし、旧ジャコベン党員の怒りを挑発することが無いわけでもありませんでした。フランスの黙想指導司祭たちの長であったローザン師は先ず出身地で黙想会を開催すべきだと考えました。ボルドーで、フレッシヌー司教による一連の講話が行われるという信徒の黙想会が準備されていた時、ローザン師は1817年の四旬節の終わりに、同僚の司祭たちと共にこの黙想に参加しました。黙想会は、3月16日にダヴィオ大司教によって荘厳に開始され、4月27日復活祭後第2日曜日まで続きました。信徒の参加は驚くほどでした。彼らは夕方6時の聖務の座席確保のため午後4時からカテドラルに押し寄せるほどでした。黙想参加信徒は最終日まで熱心に務めました。黙想集結の最後の行列はすばらしいものでした。1200名の国民軍が、この記念すべき黙想会の記念としてセン・アンドレ教会の後陣に建てることになった巨大な十字架を肩に担いで運んだからでした(5)。

だれもが予想していた通りコングレガニストたちは極めて熱心でした。彼らは多くの入会者を受け入れました。1815年以来教会の宣教活動が衰えることはありませんでした。教会は当局の協力が保証されたように思われたからでした。そして、コングレガシオンも他のすべての修道会同様多くの善意の人々の協力の恩恵に浴していました。これら善意の人々は他の政権下に潜んでいた人々でした。父親の会のアグレガシオン会員は70名から120名に達していました。彼らは二つの分野に区分され、更に幾つかの下部組織に分けられていました。彼らはその規約を、疲れを知らないモニエ士に、当初の目的を変更することなく再検討させていました。黙想の婦人会にも同様な発展が見られました。女子

青少年コングレガシオンには各グループ30名の10部門がありました。

男子青少年コングレガシオンは、シャミナード師に何らかの心配をかけたとはいえより目立った進歩を遂げていました。師は、迫害は熱心をもたらし平和は解放をもたらす、ということを知っていました。かつて、教会がカタコンブで生活しなければならなくなった時、信徒の数はより少なくなりましたが、彼らはより熱心に、より勇敢になりました。忍耐のみに世論に勝つ最高の勝利が予想出来るからです。たとえ、国が宗教をあるべき姿に回復させても、常に付和雷同の民衆は卑劣さや時には偽善の種を心に持ちながら、うやうやしく教会に入るのではないのでしょうか。シャミナード師はこうした危険性を避ける必要を感じていました。王政復興によって新しい志願者が増加することが分かったので、師はコングレガシオンへの受け入れをより厳しくしました。

いずれにしても、師はその努力にもかかわらず、帝政時代を通じて極めて特徴的であったキリスト教的愛の精神の不足を防止することも、その後退を堪え忍ぶことも出来ませんでした。その多くの原因は正に人気回復を獲得する特典への愛着でした。師に寄せられた様々な不満はコングレガシオンが各階層の人々の混成グループであったということです。彼らは次のように申し立てていました。「商人とたる屋、資本家と呉服商や靴屋、立派に教育された少年と下層民の不作法で粗野な環境で育成されたその他の少年の間でのように、相反する条件で対立する青少年の間では完全な意見の一致を見いだすことは絶対に不可能です(6)。」こうした言葉はシャミナード師を大変悩ました。いずれにしても、師は信頼している賢明な青少年たちから寄せられた言葉として、彼らの意向を受け入れることが最善であると考えました。そして、コングレガシオンの二つの分野間により完全な区別を確立することに同意しました。したがって、それ以来、彼らは聖務と日曜日の晩の集会以外は互いに会うことはありませんでした。

そのころまで、第二分野から引き出された名誉会長は、旧会長の評議員会に第二分野を代表して出席する使命を持っていました。コングレガニストは彼らを評議員から除外するよう指導司祭に要請しました。しかし、シャミナード師はこのことを了承せず、「少なくとも彼らは思いやりの気持ちで優れている」と述べて、旧会長を会議に含めることを要請しました。こうして、この機会を利用して無理に求められた譲歩についての考えを明白にしました。師は、第二分野のコングレガニスト、すなわち、職人のコングレガニストは、「一般により礼儀正しく、他の人々より軽率ではない」ということに着目させ、更に次のように付け加えられました。

「第二分野のコングレガニストはコングレガシオンにとって極めて大切です。彼らは第一分野のコングレガニストとして募集された会員よりもっと広範な庶民層から募集された会員だからです。第二分野の会員が第一分野の会員より少なく、両者が均衡していないのは、第二分野に募集された階層からコングレガシオンに入るために必要な資質を備えた者を見いだすのがより困難だったからです。しかし、第二分野のコングレガニストの数が少なくとも、現在少なくともコングレガシオンに入ることが出来ないでいる多くの青少年に、彼らの熱誠を及ぼすことは容易です。」

こうした考えにシャミナード師の宣教の精神や現代精神が認められます。師の考えによれば今日最も重要なことは団体で福音の宣布に専念するということでした。

その他の修正も提示されました。世の中に増加した様々な誘惑から多くの少年たちを予防する必要が起きたからでした。シャミナード師は様々な娯楽を用意してマドレーヌを出来るだけ魅力的なものにして、少年たちを自分の下に引き留めることを決意しました。補佐の一人は次のように述べました。「コングレガシオンは最もすばらしい徳の実践のために、魅力的な友情、感動的な旋律の音楽、最も感動的な典礼を備えています。」事実、教会の祝日は無類の荘厳さで祝われました。毎日曜日の晩の集会は最大の注意を払って準備されました。集会の魅力が増して来たので、会場は教会からコングレガシオンの一室に移されました(7)。

集会場のとびらの上には次の4行詩が掲げられていました。それは友情の集会にしばしば参加した人々の真の気持ちを表明する以外の意図はありませんでした。

「すばらしい会場、すがすがしい隠れ家、

ここで青春を過ごすことは何と幸せ、

あなたが作り出す幸せをだれが計れよう、

この平和な一時はあなたのおかげ。」

集会所はコングレガニストによって描かれたり、スケッチされた絵画で立派に飾られていました。演台の中央に置かれた貴賓席に聖母像が安置され、その側にダヴィオ大司教の胸像が置かれていました。集会のプログラムには実質的に詩歌や当該週間の保護の聖人伝の物語、講話や詩編等、帝政時代に行われていたものが残されてきました。講演の主題も極めて多様で、祈とう所で

行われていた時よりも発展的で柔軟性に富んだものでした。会長の一人は次のように書き送りました(8)。「青少年はアカデミー会員ではありませんが、彼らにより親しみのあるこの種の講話はこの集会に適しています。これらの講話を通じて、青少年と何を求めるべきでしょうか。彼らの興味を刺激すること、同時に、楽しみ、教えること、これが目的です。」

司教、評判の説教家、宣教師、そして、ボルドー訪問の名士たちは喜んでCongregationalの集会に出席し、その才能や激励によって集会に寄与しました。しかし、彼らの催しは当時の催しのようにそれほど変化に富んだ催しではありませんでした。したがって、ある日、あるCongregationalはCongregationalと「親愛な指導司祭」に別れのあいさつをしてボルドーを去って行きました(9)。他の日には、米国のルイジアナから、評判のデュブルシエ司教が新天地の福音宣教についてCongregationalを啓発に訪れました(10)。また他の折には、ある宣教師は、「ルイ14世国王を表敬訪問に訪れた名高いママツアンザの子孫でイロクォイ国の国王」をCongregationalに伴いました。当時の記録によれば、Congregationalたちはインディアン王の信心と率直な信仰に大変教化されたということです(11)。

以上がすべてではありません。その後、シャミナード師は、一日の最後の時間を和やかにくつろいで過ごそうとする青少年たちに毎晩マドレーヌの一室を開放しました。また、彼らに図書室を解放し、あらゆる種類のゲームを提供しました。要するに、師は、今日「カトリック・サークル」と呼ばれているようなものを創設しました。これは他の多くのサークル同様、この点では今日の学校を先取りしたようなものでした。メルミッロ司教が、1878年に行った講演でこの種の活動組織に関するすばらしい計画を提示した時、この講演を聞いていたシャミナード師の弟子たちは、ボルドーのCongregationalの創立者の計画との偶然の一致に驚きました。

サークルに新たな側面が少しずつ加えられてきました。1825年以降、Congregationalやその志願者を援助するため、彼らを確実に育成出来る後援者を見いだすための職業紹介所が作られました(12)。次に、商業科、数学科、地学科等、すなわち、ボルドーのような商業都市において最も有益な知識を青少年に手ほどきする実務課程が提供されました。その上更に、各種主題の講話、ララン師の担当になった読書や発声法の科目が追加され、1820年にはCongregationalの祭典や市のすばらしい宗教行列を引き立てるための音楽愛好グループが加えられました。

Congregationalたちは、冬には演劇を上演し、夏にはセン・ローランのプラタ

ナスの木陰で陣取り遊びに熱中し、近くの松林ではその他の遊技に興じました。また、皆連れだって散策に出かけました。こうした活動からもたらされた確かな利益は言うまでもなくコングレガシオンにとって最も魅力的なものの一つでした。ある会長は評議員会で次のように指摘しました。「こうした散策はコングレガシオンに大きな利益をもたらしました。言わば、この事がコングレガシオンを維持してきたのです(13)。」これらの散策の中で2回は他の散策よりも重要でした。それは4月と8月のコングレガシオン幹部の任期更新後、第2期就任に続いて行われた散策だったからです。彼らは、大神学校や小神学校のあった田舎まで交互に出掛けました。シュルピス会士やイエズス会士がシャミナード師の意向をくんでくださったからでした。散策の時にはいつも賛美歌を歌い、コングレガシオンの信心同様、その気晴らしの時でさえ大きな役割を演ずることが求められた乙女マリアのご像の下に集合しました。

シャミナード師は自ら気づいた新たな実状に応じてコングレガシオンのイメージを大きく修正していきました(14)。もちろん、師が導入したいずれの改革もコングレガシオンの精神や目的を改悪するものではありませんでした。この点に関して何らの変更もなかったことを当時の会長の一人は次のようにあかししました。「コングレガシオンの意図する目的は社会に対する信仰の精神、キリスト教の精神の普及だからでした。」子供たちがどんなに気晴らしをしても、それは信仰の養成を犠牲にするものではありませんでした。道徳教育や活動の報告を目的にした各分野の集会や各下部組織の集会はより頻繁に実施されていました。よくまとめられた要理講座が商業科と同時に設けられ(15)、最も信仰の優れたコングレガニストに委任されました。また、シャミナード師も自ら週2回、対話形式あるいは親しい談話形式の信仰教育に関する講話を行いました。それは、ゆっくりと、しかも正確に、手際よく、長い経験による興味深い話しでした。こうして談話に興味を添えながら信仰の真理を教え込みました。また、師は図書室に良書を増加し、各コングレガニストが好奇心に引かれて文学的興味を培いながら信仰の信念を強化出来る何冊かの本を読書出来るよう配慮しました。

シャミナード師は次の4主要項目に要約した良きコングレガニストとしての義務をしばしば説明しました。

- 1 キリスト教を率直に公然と宣教する
- 2 身分と才能に応じて信仰に関する教育が受けられるよう努力する
- 3 信仰の維持と普及に専念する

4 至聖なる乙女マリアを真に崇敬し、特に無原罪の御宿りの秘義を尊敬し、マリアへの献身のリボンを常に身に着け、その信心の普及に専念する(16)。

コングレガシオンの成功は熱心な指導司祭の努力にふさわしいものでした。最も悲観的な人々でさえ、コングレガシオンが、「誹謗者たちから決して抗議されない信心と徳が評価された」ということを認めたからでした(17)。

コングレガシオンの旧会長たちがここで話したひぼう者とはどんな人たちだったのでしょうか。そのひぼう者とは、ボルドーのある小教区にいて、帝政時代に「マドレーヌの権限」を告発するために騒ぎ、コングレガシオンを相互に対立させようと試みた聖職者たちでした。後ほどの記録には次のように記されていたからです(18)。「彼らは説教台の上からわたしたちに抗議しました。また、わたしたちの教会やわたしたちの前まで入り込み、わたしたちの面前でコングレガシオンの活動を中傷し、あらゆる手段に訴えてコングレガシオンの切り崩しに成功しました。」

シャミナード師は深く傷ついていました。もちろん、師はボルドーにおける善の独占を主張するものではありませんでした。教区の司祭たちの成功をたたえたのは先ずシャミナード師だったからです。師はコングレガシオンの活動を細分化する時期が来ているとは考えませんでした。また、社会は全体としていまだに十分キリスト教化されておらず、信仰に敵対する要素に深く影響されていると判断していました。当時は自由党派の扇動的な政体の下で、教会に戦いを宣言した時期だったのではないのでしょうか。教育さえも全国に普及されていませんでした。したがって、公共の精神によってこれを補なうしかありませんでした。政府がカトリックを自称していたのは確かです。しかし、中産階級はヴォルテール主義者でした。したがって、コングレガニストを急いで細分化すべきではなかったのです。彼らは十分保護されることもなく、世間体の恐ろしい誘惑にさらされて自分の決心を弱める危険を犯すことになるからです。コングレガシオンが自由主義進歩の確かな障害になっていたという指摘は、彼らが至る所でコングレガシオンを非難した中傷に過ぎませんでした。したがって、ボルドーでは、コングレガシオンは、「侮辱的な言葉であしらわれ」、パリでは、コングレガシオンが政治的な影響を受けて攻撃の対象になっていました。

シャミナード師は中傷者に対して過去の教訓を引き合いに出しながら十分弁解しました。旧体制下で、この種の戦いがイエズス会に差し向けられたのを想起したからでした。すなわち、彼らは、「これらの強力な宣教師たちの排除を喜ぶまでになりましたが、教区がこのことで何ら得ることがなかったことを確認す

るのは遅すぎました。かえって、「教会は民衆によって荒廃し、大革命はこれを閉鎖してしまっただけ」からでした。シャミナード師は次のように述懐していました。今日、コングレガシオンは教区にとってこれまでよりも確かに不可欠なものになっています。いずれにしても、コングレガシオンは、その優れた場所、個人的配慮の提供、まとまった雰囲気の出発等によって青少年たちに信仰実践の接近を容易にし、彼らを世間体から解放し、その信仰教育は信念を持った信徒を作り、しばしば宣教師さえも作るからです。こうして、小教区はコングレガシオンが実らせた果実を受け取り、コングレガニストの中に最も強力な支えを見いだすことになったからです。

こうした論旨が抗議されることはありませんでした。しかし、教区の司祭たちは教区立のコングレガシオンによって同様な成果が得られたと主張しました。そこで、師は教区立のコングレガシオンが全然無いより、これを作った方がまだましですと回答していました。しかし、小教区は、マドレーヌの場所のようなこの種の活動に適した場所をどのように見いだすことが出来るでしょうか。そしてまた特に、各教区は、コングレガシオンが意図する経験を持ち、コングレガシオンが要求する忍耐をもってこの活動に専念する司祭をどのように見いだすことが出来るでしょうか。こうした任務を引き受けることが出来るのは、「すべてにわたって責任を負う」主任司祭でもなく、任務の頻繁な変更にさらされる助任司祭でもありません。したがって、シャミナード師は、「もしこの活動に完全に専念しないなら、コングレガシオンの活動は決して成功しないばかりか衰退するか崩壊するだけです」と述べました(19)。

こうした予告に対して批判者たちからは反応がなかったばかりか、彼らは好んで不幸な体験をなしたことはいうまでもありません。予告されたことが実現しました。先に引用した記録には次のように記されていたからです。

「各小教区は小教区自体の特別な活動を持とうとしたが、やがて、イエズス会廃止時に起きたような事が起きました。すなわち、小教区の特別な活動は継続出来なくなり、教会の典礼には青少年はもちろん、特に大人たちがほとんど出席しなくなりました。実のところ、小教区はコングレガシオンから奪った会員とほとんど同数の教区民を失ったのです。」

こうした競争によってコングレガシオンは重症を負いましたが、その経験、そして特に、賢明で熟練した指導に負うところがあつた魅力を維持していました。旧会長たちはその報告書で次のように伝えました。「この施設に対する神のご保護は極めて明らかであり、著しいものでした。様々な難点や障害にもかかわらず、神は確かな豊かさでなおコングレガシオンを生かし続けてくださいまし

た。」大半の離脱者のCongregacionistも復帰し、マリア会創立によって最も優れた何名かのCongregacionistが引き取られたという目立った危機も少しずつ緩和され、したがって、1820年ごろからCongregacionの活動は今まで同様盛んになりました。

Congregacionはマドレーヌの教会に置いていた本拠地を今にも失いかけた最大の危機からようやく逃れることが出来ました。Congregacionがマドレーヌに定住して以来、セント・ユラリ小教区の教会評議員会はCongregacionに対して愛想よくありませんでした。しかし、ダヴィオ大司教の支えを確信していたシャミナード師はそうしたことを少しも気にせず、教会評議員会を怒らせることは何も行わず、何も許可しないよう注意しました。シャミナード師は相変わらず教会評議員会から苦情や不満を受けていましたが、これをユーモアな気持ちで受け流すことが出来るほどになっていました。いずれにしてもシャミナード師は小教区の後継者になっていた二人の主任司祭と懇意になりました。その一人はCongregacionistのベルジェ師で、もう一人はかつてセント・コロンブ教会のラクワ師の補佐で、いつもCongregacionの友人であり後援者であったディネティ師でした。

1814年、ようやくCongregacionが活動を開始してから1ヶ月後、またしても新たな激しい抗議が寄せられ、そのことが大司教座より指摘されました。シャミナード師は6月4日、ダヴィオ大司教に次のように書き送りました。「わたしはセント・ユラリ教会の教会評議員会の審議の写しを大司教館から受領いたしました。この件については来週の初めごろ回答出来ると思います。悪霊が騒ぎ出したようですが余り驚いてはいません。初期の計画に基づいてCongregacionの活動を継続しながら、勇気と用心をもって信仰のために大きな善を行い得ることが一つのあかしだと考えるからです。」問題はそれほど発展しませんでした。

1819年の場合、事情は異なっていました。混乱の原因となったきっかけはそれ自体取るに足りないものでした。マドレーヌの教会の鐘にひびが入ったので、シャミナード師は今までのものより多少大きな鐘を求め、教会の切り妻の上に鐘を取り付けるための小さな壁を立てさせ始めました。ところが、隣家の人々はこの新しい鐘が騒音公害をもたらすに違いないと考えて市役所に抗議したのです(20)。

シャミナード師はこの種の言いがかりを断ち切ろうとして、分教会としての公式認可を国王の政府当局に申請しました。しかし、この処置は全く悲惨な結果に終わりました。ドゥカズ宗務大臣は、マドレーヌの教会の公式使用を認可

した知事の承認を単純に確認する代わりに、この教会の効用について裁判官のように振る舞いました。すなわち、大臣はその調査を開始し、先ず、他の情報としてセント・ユラリ教会の主任司祭と教会評議員会の意見を求めました。教会評議員会にとってはいつもの不信を行動に移す最高のチャンスだったのではないのでしょうか。もちろん、彼らはマドレーヌで行われる善を認めていたし、不都合な意見を述べて混乱をもたらすことを臨むものではありませんでした。しかし、彼らは様々な条件を課すことを要求しました。毎年の膨大な使用費を要求したからでした。マドレーヌにとっては迷惑千万でしたが、それは彼らの予算超過を精算するためのものだったのです。

シャミナード師はこの新たな負担を引き受けることは出来ませんでした。それは、教会と別棟の賃貸料と維持費を支払うのがやっとだったからです。他方、師が恐れていたのは、信仰に関して極めて平凡な関心しか持たないことが当然疑われた宗務大臣が、教会が享受していた特典を取り消し、あるいは、耐えられない責務を負わせてその活動を弱めるためのこの争いを口実にするのではないかということでした。師は攻撃を避けるためセント・ユラリ教会の主任司祭のディネティ師を頼りにすることも出来ませんでした。ディネティ師は帰天したばかりでしたし、その後継者の主任司祭ジョール師は教会評議員会の味方だったからでした。もちろん、師はいつもの平静さを少しも失わず、常に神に信頼し、ダヴィオ大司教のいつもの勧めに頼っていました。師は実状を大司教に訴え、次のように神にすべてを委ねる言葉で結びました。「主の栄光のためにすべてが行われ、企てられるために、主のみ名が永遠にたたえられますように(21)。」

シャミナード師は、創立したばかりの事業で、マドレーヌがその本拠地であることが知られていた煙突掃除の子供たちの救済事業のおかげで、問題の解決が得られるに違いないと考えました。また、ダヴィオ大司教も教会評議員会との仲裁に当たられました。大司教がその意志を明確に表明されたので教会評議員会も譲渡しました。一方、宗務大臣によって意見を求められた市議会も容易に適切な意見を伝えたので、苦しい不安な数箇月後すべては解決されました。1819年9月29日付けの王朝令によってマドレーヌの分教会とその特典は公式に承認され、法令集に登録されました。また、大司教座よりの新しい教令によってマドレーヌの教会は、以前承認された(1819年9月17日)すべての権利が保証されました。シャミナード師はこれ以降マドレーヌの教会の平和な所有に何ら異議が唱えられる恐れが無くなったので、1820年8月23日の売買契約によってこれを取得しました。

同時期に、マドレーヌのコングレガシオンはローマから教会法上の認可を受

けたばかりであり、また、コングレガシオンの名称を持つ他のすべてのコングレガシオンを加盟させる特権を享受していたローマのコングレガシオンのプリマ・プリマリアに加盟したばかりでした。シャミナード師は1809年と1812年にその書類が押収されたため、1783年5月13日に教皇ピオ6世聖下によって承認された職人のコングレガシオンの教皇教令の原文を無くしていました。この教令にはカプララ枢機卿の尽力で頂いた教皇書簡によってマドレーヌのコングレガシオンに与えられた特権が記載されていました(22)。そこで、シャミナード師は教皇勅書の原文の写しを、もし、それが頂けなければカプララ枢機卿から頂いた教皇書簡より明確な新規の教皇書簡を申請しました。ローマからは、イエズス会が再建されると同時にコングレガシオンのプリマ・プリマリアも再建されました。したがって、このコングレガシオンへの加盟で十分であるとの回答がありました。マドレーヌのコングレガシオンのプリマ・プリマリアへの加盟は1819年7月4日付けでした(23)。

以後、マドレーヌのコングレガシオンは王政復興末まで重大な障害に会うことなく繁栄していました。しかし、シャミナード師は、1825年から、創立した男女修道会の配慮に少しずつ忙殺されるようになったので、それほど親しかったこの活動を協力のコングレガニストの司祭たちに委任せざるを得なくなりました。しかし、決してコングレガシオンへの関心を失うことなく、ボルドー滞在中はコングレガシオンのすべての総会や補佐の評議員会を自ら司会することを欠かしませんでした。

シャミナード師がコングレガシオンによって与えられた最も親しい慰めの一つは、セン・シメオン通りの質素な教会で、最初の12名のコングレガニストが無原罪の御宿りの乙女マリアへの奉献式を行った日の25周年記念を祝った王政復興の最後の年、1826年2月2日の祝日でした。教皇レオ12世聖下がすべてのキリスト信者に与えた大赦と重なったこの記念は、シャミナード師にとって最高の喜びと感謝の機会になったからでした。師の弟子たちはこの記念を後の世代に想起させる永久の記念として大理石のすばらしい祭壇をマドレーヌの教会に寄贈する募金をしました。

当日の典礼は総員聖体拝領の荘厳ミサで開始されました。シャミナード師はミサに入る前に、感極まって、コングレガシオンのささやかな起源について語られ、無原罪の御宿りの乙女マリアが喜んでコングレガシオンを保護してくださっているお恵みについて述べられました。師は弟子たちに署名させるために次のように記された証書を提示しました。「過去25年間、特にわたしたちを全能のご保護の下に置き、また、わたしたちをその奉仕に親しく結びつけるため、コングレガシオンに与えられた無原罪の御宿りの乙女マリアのお恵みへの感謝とし

てこの証書に署名します。そして、この証書を銀製のマリアのみ心像に収め、コングレガシオンの祈とう所の聖母像のみ手にささげます。」熱狂は最高潮に達しました。旧会長最年長者のジャン・バプティスト・エステブネは感謝の証書を収めるために大きな銀製のマリアのみ心を捧持する栄誉を得ました。彼はミサの奉獻の時に祭壇の前に進み出て、コングレガシオン全員を代表して、彼らが署名した証書を読み上げ、至聖なる乙女マリアのみ心を奉獻しました。シャミナード師は祭壇上に備え付けられた聖母像の腕にこのみ心をうやうやしくささげました。

この時、シャミナード師はマリアがその御取り次ぎによってコングレガシオンの上に果たされたすべてのお恵みを想起し、教会と共に知恵の書を引用して、マリアへの子心の孝愛の結果、「真にすべてのお恵みが聖母のみ手を経てコングレガシオンの上にもたらされた」ことを感謝しました。更に、コングレガシオンのすばらしい豊かな活動によって25年間絶えず救いの成果がもたらされたこと、王政復興時代の今日の会員も創立当初の会員に何ら劣らず救いの成果をもたらしたことを神に感謝しました。

確かに、コングレガシオンのこの第二期は、コングレガシオンの樹液、すなわち、その生命力が、ボルドーで目指した各種活動の新しい芽生えを丈夫な幹から芽生えさせるために、また、コングレガシオン加盟のすべての施設によってその地域全体にその小枝を延ばすために十分でした。そして、コングレガシオンはついにこの強固な幹から二つの花を開花させました。それはマリア会と汚れないマリア修道会の栄光の花冠だったのです。



注

- (1) ジャン・バプティスト・エステブネは旧会長の一人でした。国王の布告を準備した委員会員のだれもコングレガシオンには属していませんでしたが、エステブネだけは王党派に登録していました。(オレツリ著、「ボルドー全史」、2部、2巻、22項) 王政復興の時、彼はパリのコングレガシオンに入会しました。(グランメゾン著、「ラ・コングレガシオン」、142ページ) 彼はシャミナード師に尽くしましたが、その指導は受けませんでした。
- (2) イエズス会士ジャック・ベルスロ著、「リモージュのマリー・ジョセフ・フィリップ・デュブール司教の追悼講演」、1822年。ツルーズ出身のブール司教は政教条約以来、リモージュの司教でした。
- (3) 多くのボルドー人同様、派遣義勇軍にはクサヴィエ・ドゥ・ラヴィニャンや無数のコングレガニストが入っていました。また、その中には当時最初の詩歌を作ったララン師も含まれていました。「スタニスラス校略史」、364ページ、1881年、パリ参照。

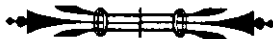
- (4) 1815年9月7日
- (5) 1817年の黙想会の実際の報告はムタルディエ師の署名によるものが存在していました。
- (6) このくだりは旧会長の手紙から引用したものです。この中に彼らがシャミナード師に要請した反論が示されていました。
- (7) 1824年2月
- (8) マルク・アルノザンからオーシュのラッリアン師へ、1826年6月3日
- (9) 1818年の主の奉献の祝日に行われた講演が大きな反響をもたらしたフェダの場合です。
- (10) 1816年11月1日付けコングレガシオンの記録。この司教と前述のリモージュの司教と混同してはなりません。ルイ・ギヨーム・ワレンテン・デゥブール司教はセン・ドミニックで生まれ、ボルドーで教育を受けました。大革命の間アメリカに赴き、1815年ニルイジニアナの司教に任命され、信仰の宣教事業に大きな貢献をしました。1826年健康上の理由でヨーロッパに帰った司教はフレッシュヌー司教の願いに応じてモントーバンの司教座就任を受諾しました。1833年にはモントーバンからブザンソンに転任しましたが同年同地で帰天しました。
- (11) マルク・アルノザンからオーシュのコングレガシオンの会長への手紙、1826年2月16日付け。
- (12) ごく普通の職人でしたがすばらしく熱心なジャン・バプティスト・ビドンは同じ身分の青少年の育成に任じられ、より豊かな宣教を実施しました。
- (13) 1823年4月3日の評議員会の審議記録
- (14) シャミナード師は規則を改定し、1815年と1825年にマリアのしもべの手引きを2度再販しました。
- (15) 1815年2月
- (16) マリアへの献身の肩ぎぬは、男子コングレガシオンの場合は胸につけていた白いリボンで、女子コングレガシオンの場合は赤地裏の白い帯で、「至聖なるマリアと栄えある聖ヨゼフの会」の文字がししゅうされていました。1898年にアジャンで、この帯をしめていた97歳の敬けんなシスターに会いました。彼女はシャミナード師のコングレガシオンの奉献の思い出としてこれをしめているとのことでした。それから数箇月後に帰天した彼女のお棺にはこの肩ぎぬが収められたとのことでした。
- (17) 1817年、旧会長たちよりシャミナード師への手紙
- (18) 1840年に記録されたシャミナード師によって署名されたマドレーヌに関する記録。
- (19) 1824年記載のコングレガシオンに関する覚え書き

(20)鐘の交換の決定に最も反対していた者の一人で、最後まで反感を持っていた信者が聖週間の中に死亡したことの知らせは忘れられませんでした。ちょうど聖金曜日で埋葬の鐘は鳴らされませんでした。

(21)1819年2月5日

(22) 前記162ページ参照

(23) ボルドーでシャミナード師が失った思われていた教皇ピオ6世聖下の教皇教令のフランス語訳がミゼリコルド会の書類の中に見いだされました。しかし、ローマの原本は見つかりませんでした。



第 17 章 コングレガシオンから生まれた新たな事業 (1815—1830)

シャルトロンのコングレガシオン、リガニオン師 ❖ 友の会、ダヴェン師 ❖ 「良書活動」、バロール師 ❖ 刑務所活動 ❖ 煙突掃除少年の事業、デュブシュ師 ❖ 年の黙想会。

名称はそれぞれ異なっても、コングレガシオンに結びつく活動の中で重要な活動は、マドレーヌの中核コングレガシオンの場合のように、それぞれのコングレガシオンに引き寄せられた男女青少年のグループの活動でした。

実を言うと、それらのグループの一つは遠隔地のグループで自治の特権を行使していたコングレガシオンの下部組織で、セント・ルイ小教区教会の助任司祭リカニオン師によって特に熱心に指導されていた「シャルトロンのコングレガシオン」(1) でした。リカニオン師はシャミナード師の弟子であり友人で、少年時代からセン・シメオン通りの集会にしばしば出席していました(2)。会員たちは一般に小教区教会の一室で集会を実施していましたが、荘厳な典礼式が行われる場合にはマドレーヌのコングレガシオン本部に集合していました。

シャルトロンのコングレガシオンは独立していたとはいえ、自ら派出した源泉からその精神をくみ出すことを決して中止しませんでした。彼らは、組織の安定や熱誠がコングレガシオンの母胎からしか得られないことが分かっていたからでした。シャルトロンのコングレガシオンは、マドレーヌの評議員会によって選出された会長によって代表され、何らかの重要なすべての決議はこの評議員会の承認を得なければなりません。シャルトロンのコングレガシオンの独立をうらやんでいた他の小教区のコングレガシオンもこの例を模倣しようとしたに違いありません。マドレーヌの記録にはこのすばらしい点が次のように評価されていたからです。「シャルトロンのコングレガシオンは極めて困難な時期にあったにもかかわらず、その熱誠と忠実さによって特に認められ、本部コングレガシオンに対して常に誠実な献身を維持して来ました。シャルトロンのコングレガシオンは常にボルドーのコングレガシオンの下部組織であると共に独自の役員と組織を持っていました。」シャルトロンのコングレガシオンは1821年一時的に危機に遭遇しましたが、リガニオン師の力強い活力とマドレーヌのコングレガシオン本部の援助によってその同じ年に立ち直ることが出来ました。こうして、シャルトロンのコングレガシオンはその地域に大きな善を施すことが出来ました。セント・ユ

ラリ小教区でコングレガシオンに加入した最初の司祭はマルトグット師でした。師はかなりの少年たちを指導していましたが、コングレガニストの少年はごくわずかでした。師は彼らを教会隣接の庭園に集めて彼らと談話し、彼らをくつろがせていました。この小さなグループはコングレガシオンとは正式な関係もなく、それほど信仰的な特徴もありませんでしたが、師は様々な意向を持つ少年や様々な性質の少年たちの関心を引きつけていました。これらのメンバーの一人で、本書で再度触れることになるノアイ師は、かなり漠然とした感傷的な形ではか信仰を認めず、信仰を守ることなど無視していました。しかし、彼はマルトグット師との接触で少しずつ立ち直っていきました。師の喜びは、時々自分の弟子の一人に彼をコングレガシオンに紹介することでした。しかし、マルトグット師は刑務所の聴罪師に任命されたので、これらの少年たちを他のコングレガニストの司祭ダヴェン師に委託しました(3)。

クサヴィエ・ダヴェン師は、親友のシャルル・デウビュル師同様、ジョッフル師によってシャミナード師に紹介され、マドレーヌのコングレガニストと交友を深めていました(4)。師は1822年には司祭になっていましたが健康がすぐれず、決まった地位に就くことが出来ませんでした。そこで、レテール通りのセン・テロワ小教区に属する臨時の分教会で聖職に従事していました。師はここで、「キリスト教信徒友の会」で知られ始めていたマルトグット師の指導していた信徒会を譲り受けました。この信徒会はマドレーヌのコングレガシオンの姉妹組織として会い携えて活動していましたがマドレーヌに迷惑をかけることはありませんでした。ダヴェン師は献身的にシャミナード師に尽くしていたからでした。その上、師の学校勤務補助司祭の地位は多少コングレガシオンの活動とは相容れない活動分野に属していたからでした。セン・ミシェル教会(5)の主任司祭で友人のデュブール師の助任になったダヴェン師は、マドレーヌのコングレガシオンがその影響を失っていた7月革命の後、キリスト教信徒友の会の発展に寄与しました。師は彼らの間に総員聖体拝領、宗教講話、そして、共同散策等を復活させました。師は1859年に帰天しましたが、師の活動はその帰天後も継続され、最後にはマドレーヌに本拠地を移し、今日まで続いています。

1814年にコングレガシオンが再建されると同時に「志願者クラス」も復興されました。このグループは一種のコングレガシオンの準備の分野で、初聖体から16歳の子供たちが集められていました。志願者クラスの担当者は1819年にその規則を改定し、図書やゲーム類を備える特別室を用意し、やがて、数学や国文法、商業や文学等の教科を教え始めました。彼らの指導はコングレガニストたちが常に当たっていましたが、もちろん、シャミナード師がこれに関心を持たないわけではありませんでした。

各小教区で敏感な感受性の志願者に出会うことがありましたが、そうした感受性はCongregacion自体から与えられたもののように思われていました。そこで、シャミナード師は、マドレーヌのCongregacionとシャルトロン下部組織の間にある類似の関係を、マドレーヌとの間に持つ子供たちの小さな自立の組織を作ることをCongregacionistたちに許可することにやぶさかではありませんでした。セント・クロワ小教区で、若い職人の熱心なCongregacionistで、最も評価の高いCongregacion下部組織の会長であったアントワン・カントーはこうした子供たちの組織の一つを極めて巧みに指導していました。彼は主任司祭と協力して、初聖体を終わったばかりの子供たちを集め、善意を持って忍耐するよう励まし、信仰の育成を継続し、娯楽を指導しました。更に、彼らの職業養成さえも導き、立派なCongregacionistになるように指導しました。こうして、彼はマドレーヌのCongregacionistたちからも協力を受け、最も慰めになる宣教活動の効果を収めました。後ほど触れるように、彼はその熱誠によって更に高い召命に予定されていたのでした。

他のCongregacionistで、後のボーヴェの司教マルマン・ジヌー師は寄宿学校や小学校に通う子供たちの指導に専念していました。師は、「良い子の友の会」に子供たちを集め、特に夏休みの間、ゆるみと怠惰の時期の避けがたい危険から彼らを守るために献身しました。

少なくともマドレーヌのCongregacionistと親しく結びついていたこれらの下部組織について述べることをこれ以上遅らせることは出来ませんでした。彼らの活動がより広範囲でより継続した事業に表れていたからです。しかし、帝政時代に創設され、あるいは援助されていた神学校や各種の宗教施設を再検討したいとは思いません。王政復興下でも彼らの宣教活動の役割は変わらず、彼らは過去においてそうであったように、あらゆる新旧の学校からくみ出された召命の豊かな温床になっているからです。ただ、Congregacionistの歴史の第二期において、彼らが信仰やモラルの再建に、また、ボルドー市における貧困の軽減に寄与した宣教活動や慈善事業についてのみ触れたいと思います。

それらの活動の中で第一級の活動は1820年の日付になる「良書」についての活動に関するものです。この活動は直接シャミナード師に属するものではありませんでしたが、師によって準備され、支援され、育成された活動でした。師が宗教教育にもたらした熱誠や多くの良書を青少年に渡そうとした熱誠は高く評価されていました。師は弟子たちの育成に役立つ様々な書籍を熱心に集め、その収集を容易にするため著者や出版社と直接接触していました。

師は当時二人の著者、ラ・ソース師とカルロン師とたえず文通していました。

彼らの著書がコングレガシオンの需要に完全に応ずるものだったからでした。ラ・ソース師は、「サン・シュルピス会士の著者の中でも最も優れた著者(6)」で、サラゴサの気の毒な亡命者たちを慰め支援した「新しいトラピスト会」選集の発行者でもありました。師は、大革命終息時の人々の心理状態にふさわしい、読みやすく、易しいスタイルの霊性及び教化の書籍を絶えず刊行していました。シャミナード師はこれらの図書のボルドーへの普及に協力しました。例えば、著者と市内の出版業者との仲介役をかって出たり、セン・ローランのぶどう酒を図書の郵送料と交換したりしました。また、青少年に献身的な奉仕をなして友情を深めていたカルロン師に対しても同様の協力をなしました。カルロン師はパリでマリー・テレーズ女子修道会を指導し、また、大半が帝政時代にダストロ師によって創立され、王政復興時代に同師によって再建されていた職人や使用人のコングレガシオンの多くの慈善事業でその活動を分かち合っていたからでした。カルロン師の著書は青少年の読者を対象にしていました。師が神への愛と信仰の実践に彼らを感じさせ導くよう努力したのは、模倣すべき易しい模範を青少年の読者に読み取らせるためだったからでした。師の最も評判の著書は、「18世紀末の信仰の告白者」の4巻です。また様々な環境下に生きた「正直な人々の伝記」を多数著しました。その全体は少なくとも40巻を下りませんでした(7)。シャミナード師がよく参照したのはこれらの原典でした。しかし、多くの悪書がますます増加するのに直面して個人的な活動がいかに不十分であるかを痛感しました。

読書の選択が重大な問題になってきたのは、自由党によって与えられた新聞雑誌の出版の自由によって、信仰に敵対し、モラルに危険な出版物が都市にも田舎にも浸透してきたからでした。彼らはヴォルテールやルッソー、デイドロや百科全書の作家の通俗出版物を宣伝し、特に青少年向けのタルテュフ版を刊行し、精神や心に誤謬や腐敗をもたらすパンフレットやシャンソンを増販しました(8)。

この憎むべきキャンペーンの結果を恐れたダヴィオ大司教は、悪書に対するパリの司教総代理による教書(1817年)及び悪書に関するフレッシュヌー司教の講話の写しをボルドーに配布し、こうした宣伝の危険性を国王に指摘するため国王にも書簡を送付しました(1817年3月9日)。大司教は、先見の明のある人々同様、悪に対する唯一の救済策は敵の使用した武器を混乱させることであることが分かっていました。こうして、大司教の「信仰無関心に関するエッセー」は、40万部が売りさばかれましたが、この事は良書の読者がなお健在であることのあかしでした。

良書販売組織が展開されていました。この組織は、大革命中ある偶然の出

来事からボルドーに来ていたアンジェ教区出身のジュリアン・バロール師によって考案されたものでした。共通の宣教活動での失敗や喜びを通じてシャミナード師と親交を結んでいたバロール師は、信仰の平和が訪れた時、ドアディ通りの教会での黙想会の説教をシャミナード師に依頼しました(9)。セン・ポール教会の助任司祭のバロール師は熱心な黙想会説教師として無宗教と不道徳に対する戦いを続けていました。バロール師は8年前から出版物による新たな宣教活動を試み初めていました。このことはシャミナード師が、この事に専念する時間と手段に事欠き、思うままに実現出来なかった試みでした。

遺産の相続人になったバロール師はすべての収入を良書の購入に当て、まず、セン・ポール教区民のため、次に、次第に市内の他の小教区の教区民のために貸し出し図書館を開始しました。以上がダヴィオ大司教が1820年11月15日付けの認可を急がれた「良書普及活動」の起源でした。当初考えられた貸し出し図書館のシステムには、経験を積むにしたがって改善策が取り入れられ、こうして、バロール師は田舎の小教区まで良書の普及が出来ることを確認出来るようになりました。こうして庶民階級の人々も無償で宗教的な知識、あるいは、宗教外の知識を深めることが出来、無信仰の自由党のき弁から擁護されるようになりました。シャミナード師がこの友人のこうしたすばらしい成功をどんなに喜んで歓迎したかは言うに及ばず、当初からバロール師の感化とアドバイスを役立てるようにしました。

良書普及運動は修道会によって組織化され、聖母マリアのご保護の下に置かれました(10)。英知に導かれたこの運動は期待以上に盛んになり、図書館の寄贈や購入予約によって貸し出し図書館数が増加し、全教区に販売代理店を置くことが出来るようになりました。やがて、教区の境界を越え、グルノーブルやパリに、そして、フランス全土の多くの教区に、また、外国にまでもこの良書普及運動センターが設立されるようになりました。そして、ここから計り知れない善がもたらされました。1826年にはパリで良書普及運動センターのみで80万部の図書館が取り引きされました。ボルドーでも、ダヴィオ大司教が次のように述べられるほどすばらしい結果を収めました。「わたしの老後を慰めてくれているすべての修道会に対して、また、教区の最大の善のために後継者に伝えたいことを繰り返し述べなければならないことは、この良書普及運動がわたしの最大の関心を引くものであったということです。すなわち、この運動は、悪の根源を枯渇させるために求められたこれらの過度の悪に対する運動、また、善の種や芽生えを至る所に普及するすばらしい善への希望に対する運動だからです。」

それから20年後、この運動はボルドー教区に173の主要販売代理店、1万1000名の読者、5万5000部の貸し出し図書館を数えるほどになりました(11)。教

皇レオ12世聖下は1824年にこの運動を賞賛され(12)、教皇グレゴリオ16世聖下は1832年にこの運動を信徒会運動に昇格させ、多くの免償で充実させてくださいました。

当初、バロール師(13)は、シャミナード師及びその弟子たちの極めて熱心な協力を得ていましたが、老齢と長年の活動のため健康上の衰えを感じたので、1828年に友人のシャミナード師にこの良書普及運動をマリア会に委託するよう申し出ました。こうしてこの運動の将来と発展が保証されるようになりました。ただ当時、マリア会員が多忙を極めていたので(14)、この提案が直ちに承認されるまでには至りませんでした。セン・ポール教会の他の助任司祭のタイフェル師がバロール師の運動を引き継ぐことになりましたが、師は絶えずシャミナード師の子弟の協力を得ていました。1852年に、タイフェル師は、当初から1870年までマドレーヌのセンターにあった良書普及運動の指導を手放す時期が訪れたと判断しました。同年この運動は教区の聖職者によって再建されました。それは、マリア会がしばらく前から総本部をパリに移していたので、ボルドーには十分な会員が残っていなかったからでした。

他の二つの活動、すなわち、刑務所訪問の活動及びオーヴェルニュの活動、あるいは煙突掃除少年救済活動はシャミナード師やコングレガシオンによる指導によって当初から強化されていました。

病院や刑務所の訪問は帝政時代から父親の会アグレガシオンに保留されていました。しかし、彼らはこれらの活動の一部しか果たすことが出来ませんでした。それは、専制主義の政府が刑務所への出入を厳禁したからでした。王政復興下では、当局は彼らに対してより寛大な意向を示していました。知事のツルノン伯爵は個人的にシャミナード師やその活動に極めて好意的でしたので、早速、県の刑務所への出入りを許可しました(15)。しかし、彼らはこの種の訪問活動がもたらしていた不都合を協力して阻止し、防止しなければなりませんでした。そこで、シャミナード師は1818年にこの活動の実践に関する父親の会アグレガシオンを指導するためその会則を賢明に改定しました。

県の刑務所として使用されていたアー要塞の三つの塔屋は、無分別や最も悲しい不品行におぼれた各地からの留置者でいっぱいでした。修道女たちの奉仕も、旧聴罪師のルッソー師やその後継者のマルトグット師の熱誠も、不びんな彼らの援助要請に十分応ずることは出来ませんでした。以後、コングレガニストたちは週2回、水曜日と土曜日に彼らを訪問しました。彼らは気の毒な留置者に対して食糧や衣類等物資の援助によって様々な慰めを与えました。しかし、シャミナード師の指示に忠実であった彼らは、物資の配布の任に当た

っていた修道女たちにすべてを委ねました。そこで特に、コングレガニストたちがこのわびしい刑務所にもたらしたものは、身体の苦痛を和らげるものよりももっと欠くことの出来ない精神上的の慰めでした。彼らは悪や罪によって神から離れていた人々に安らぎと慰めの言葉をかけ、久しい以前から閉ざされていた霊的世界への展望を開いてあげるようにしました(16)。

先ず大切なことは彼らを教化することでした。大半の留置者にとって無分別は道徳軽視に連なるからでした。シャミナード師は一般の留置者に対しては、形式的な祈りや抽象的な難しい考を説くのを止めさせ、「最もすばらしい説教も聴衆にはごくわずかな印象しか残らない」ことを考えて、グループ指導を行わせました。すなわち、簡単で易しい要理を教え、信仰上の雑談をなすよう指導しました。これらのことが彼らの知識や心情を同時に養い、魅力的な説明が注意を引き、哀れな心の奥に眠っていた人間的な感情を目覚めさせることが出来るからでした。師は、獄舎での個人的な対話を好んでなすようコングレガニストたちに要請しました。普通の言葉にも敏感で、気むずかしく、個人的で直接的な配慮のない考えに耳を傾ける十分な心の余裕の無いこれらの不幸なカテゴリーの人々は、かえって特別な対話に近づきやすくなっていたからでした。それは、彼らが心を打ち明け、自分の意向や過去に関する激励や勇気付けを容易に受け入れたからでした。

この困難な活動も魂の救いという慰めに満ちた成果で報いられました。それは、この活動に専念していた父親の会アグレガシオン会員は、留置人たちに遅れた初聖体を受けさせ、長年の信仰生活の忘却と罪の生活から神への復帰を助けてました。こうして、多くの留置人に絶望やのろいの代わりに心の安らぎや平和を与える慰めを得たからでした。アーの要塞の塔屋の一つには、アグレガシオンの二人の最年長者の会員の特別な配慮に託されていた18名から20名ほどの救いようのない子供たちが収容されていました。この二人の老アグレガニストはこれら不幸な子供たちに対して父親のような役割を果たし、不足していた教育を基礎から取り戻すよう努力しました。こうしたすばらしい献身はダヴィオ大司教によって高く評価されました。大司教は1821年10月1日の教書で、「アグレガシオン会員たちがすばらしい活動に献身した寛大な熱誠」について喜びを述べられ、更に、「刑務所訪問の目的である祈りや施し、そして、霊的援助の隣人愛を敬けんな教区民と分かち合うよう」望まれました。社会から忘れられていた他の子供のグループがシャミナード師やコングレガニストの援助を必要としていました。それは煙突掃除の少年で、パリでは「サヴォワ少年」

と呼ばれ、ボルドーでは彼らの出身地名で「オーヴェルニュ少年」と呼ばれていました。彼らは毎春、わずかな乏しい金もうけのために故郷の山地から都

会に降りてきていました。粗野でどん欲な雇い主から、何ら指導されることも教育されることもなく、しばしば搾取されていた彼らは概して最も不品行な習慣を身につけていました。ずっと以前から、シャミナード師は彼らがアバディ通りかいわいの貧しい小部屋に住んでいることを知っていました。その上、師はドウ・フェヌロン師という友人をパリに持っていました(17)。フェヌロン師はカンブレ大司教の甥の子息で、首都に、「サヴォア少年救済事業」を創設していました(18)。フェヌロン師は人々のために多くの善をなしたこと以外に何らの罪もなかったのに、1795年に断頭台で犠牲になったすばらしい方でした。

シャミナード師はこの活動をボルドーにも定着させるために、み摂理によって選ばれた時期が何らかの形で示されることを期待していました。これまで、師は取り立ててこの活動に従事しなかったからでした。しかし、ボルドーでは、刑務所訪問活動同様当局の許可なくこの活動を成功させることは不可能でした。それは、必ず雇い主の側と衝突するに違いないとの難点があったからでした。更に、予想される外観よりもっとデリケートなこの活動の指導に適したコングレガニストを選任しなければならなかったからです。師は1817年には様々な条件が整ったものと判断しました。ジロンド県知事の援助が保証されると同時にすばらしい協力者を得たからでした。最も熱心なコングレガニストの一人、アドルフ・デュピュシュ師(19)はパリのリオタル寄宿学校で勉学を終了し、当時リュグリ・デュワル師によって指導されていたサヴォア少年救済事業を1815年から開始していましたが、夏期休暇の間、ボルドーでこの活動を続ける熱意に燃えていました。

こうして、煙突掃除少年の救済活動が創設されました。既に予想されていたように、コングレガシオンの会長ドウ・ツルノン伯爵はシャミナード師の考えに即座に同意し、最初の支出を支弁するため莫大な費用を率先して申し込みました。更に、アドルフ・デュピュシュ師は1818年の夏期休暇にボルドーを訪れた時、師を援助する準備がすっかり整っていた同僚がいて資金の確保も出来ていました。既にこの活動の組織に従事していたシャミナード師は、セン・ジュリアン広場のキリスト教教育修士会に臨時の住居を確保していました(20)。最初のミーティングに関してデュピュシュ師が伝えた次のすばらしい話しに耳を傾けたいと思います(21)。

「特別な善への期待と1816年にデュワル師自身が伝えたように、わたしたちは初めて出会った、むしろ、神からよこされたサヴォア少年たちに関心を示しました。彼らは清い天使のような魅力でわたしたちを引きつけるように思われたからでした。しかし、気の毒な子供たちはこの活動がすばらしい善であり、この最初のセン・ジュリアン校がどれほど評価されるか少しも気づきませんでした。この

特別な活動には特別な用具が必要であるに違いないと考えた数名のサヴォア少年たちは、すねあて、敷物、すす落とし等、様々な道具を携えて、日曜日の夕方、集合地に集まりました。彼らは、煙突のない、変な作りの部屋を一目見た時、どんなに驚き、とまどったことでしょう。わたしたちはしばらく彼らの反応を確かめ、神のお恵みとして各人にわずかなお金を与えた後、わたしたちの活動計画をはっきり伝え、次の日曜日の再会を約束しました。彼らは約束を忠実に守り、たくさんの貧しい友人たちを連れて来ました。こうして、彼らはほとんど皆この約束を忠実に守りました。」

シャミナード師は父親の気持ちでこれらの子供たちの指導に従事し、次のように書き送りました(22)。「彼らのことを考える機会があるごとに彼らの境遇に関心を寄せています。」師は彼らの指導に当たっていたCongreganistのために指導書を作成し、最も賢明で、最も経験豊かな子弟の一人にこの活動の直接の責任を委ねました。彼は「小さな会」と呼ばれる会で将来のマリア会に属していたジャン・バプティスト・コリノー師でした。師はセン・ジュリアン広場で、熱心な魅力的なすばらしい言葉で要理の指導に当たっていました。師は、大半がエステブネ師の寄宿学校で働いていた数人のCongreganistの協力を得ていました。師が叙階の準備のために8箇月間神学校で過ごした時、この少年グループの中での師の存在は極めて効果的でした。師は長上のカルボン師によって、毎日曜日、教理を教え、食糧やお金を恵むために、そしてしばしば、ダヴィオ大司教の個人的なプレゼントを携えてオーヴェルニュ少年たちの所に行くことが許可されていたからでした(23)。

典礼はマドレーヌで行われていましたが、初聖体はセント・ユラリ小教区教会で荘厳に執り行われました。この式典で12名の子供が初めて聖体を拝領しました(1819年7月7日)。ボルドーの様々な知名人が式典に出席しました。こうして、シャミナード師はこれらの知識人たちにこの活動への関心を持たせることになりました。知事や市長、そして、市内の知名人がCongreganionの評議員会の活動に協力することになり、彼らの寄付によってこの活動が支えられることになりました(24)。

1819年以来、煙突掃除の子供たちは80名に達しました。そして更にその数が増加していったので、セン・ジュリアン広場のキリスト教教育修士会の会員たちに苦しい奉仕を継続させないために、マドレーヌに少年たちのための住居を用意するよう考えなければならなくなりました。そこで、シャミナード師は、1821年5月に、ノートルダム・ドゥ・ラ・プラス通り99番地近くの住居をコリノー師の名義で貸借しました。デゥピュシュ師の次のような説明によって判断すれば、このアパートはそれほど立派ではなかったようですが、子供たちは有頂天になって

喜んでいたとのこと(25)。

「そこには、地下室、天井の低い数室、階段状のはしごで登るようになっていた広い屋根裏部屋がありました。この部屋がチャペルになりました。その時から毎日曜日ミサをささげ、晩課を唱え始めていたからでした。貧しいチャペルの飾りとして、半分壊れかかった石こう製の十字架、幼年時代皆集まって様々な祈りをし、初聖体を準備した古びた縁取りの祭壇(26)、その起源や最初の目的を隠すため、友人の一人がブロンズ色にし、金メッキした数個のインキつぼ、古びた白の祭服、大革命の荒廃を逃れた聖遺物、幾つかの丸太のベンチ、そして、献金箱のような小さな箱がありました。その中にはさびで半分腐食した数枚のリアル銅貨が見つかりました。この貧しい人々の種は百倍の実を結ぶことになりました。」

彼らはノートルダム・ドゥ・ラ・プラスの住居によく落ち着きましたが、だれも予想していなかった障害に突然見舞われました。それは事業の中心的存在であった人によってもたらされたからでした。アドルフ・デュピュシュ師は最終的にボルドーに定着し、故郷での弁護士業に登録したばかりでした。確かに、師は毎年夏休み中にこの煙突掃除少年の救済事業に関心を寄せ、積極的にこれを援助していましたが、事業の指導もせず、責任も取りませんでした。年間の大半ボルドーを不在にしていたからでした。1821年に、師は自分自身のプラン、その頑固な性格で採択を要請したプランを携えて帰って来ていました。師は、「慈善事業の会」のパリでの活動をボルドーでも再現するよう提案しました。このグループの活動は、その活動様式がマドレーヌのコングレガシオンの模倣であったにもかかわらず、全然違っていました。大司教によって任命された司祭を長にして、病院の部、刑務所の部、サヴォア少年の部の3分門に区分されていました(27)。師は自らの考えを司教総代理のバルレス師に納得させ、シャミナード師を訪れてこの計画を提示しました。

シャミナード師はデュピュシュ師のコングレガニストとしての熱誠を知っていました。すなわち、シャミナード師は、デュピュシュ師は計画を変更しないよう支えることよりこれを実践に移すことがより適切であること、しかし、熱心さのあまり用心して対応しなければならない世俗的な課題の障害に気づかないことを知っていました。事業は完全に組織化され、盛んになり、その目的に沿うように思われました。計画の修正が有益だったからでしょうか。成功への保証は弱体化されるようなことはなかったのでしょうか。これが弟子の提案に反対するシャミナード師の反論でした。しかし、それも無駄でした。デュピュシュ師が自らの計画に固執したからでした。シャミナード師はあくまで計画に賛成しかねましたが、新しい組織の長として考えていた司祭にその指導が委任されるという条件で譲歩

する意向を示しました。シャミナード師が提案したのはグードゥレン師でした。しかし、デュピュシュ師の計画は決定済みで、ダヴェン師に話を持ちかけていました。ダヴェン師はシャミナード師の友人であり弟子でもありましたが、この種の責任を取るには適当ではないように思われました。師は極めて賢明で熱心ではありましたが、一般社会でも一番未熟な管理者だったからです。このことがシャミナード師のちゅうちょの理由でした。

紛争はダヴィオ大司教の裁判にまで持ち込まれました。シャミナード師は提案の変更の適時性を謙遜に表明し、その要旨の中でもとりわけ次ぎのように述べました。「何らの保証もなくこの提案を復旧するなら、堅実に確立された計画は破壊されるに違いありません。この提案は3人の若者によるものですが、その一人(デュピュシュ師)がすべてを進めています。しかし、彼はボルドーを去ろうとしています。実のところ彼は敬けんな青年で献身的に善を行い、才能もありますが、心配されるのは熱狂的などころです。彼はわたしたちの事業に介入して以来3回も計画を変更しました(28)。」

大変当惑したダヴィオ大司教は司教総代理のバルレ師をひたすら説得し、シャミナード師には反対することなく譲歩するよう要請しました。また、出来る限りの援助をデュピュシュ師とダヴェン師に与え、会費の徴収を容易にしました。

しかし、予測したことが起きてしまいました。デュピュシュ師の新構想の「慈善会」はボルドーには決して生まれませんでした。刑務所訪問の活動も危うくなり始めていました。ダヴィオ大司教はこの活動に関して仲裁せざるを得なくなりました。父親の会のアグレガシオンが青少年のためにこの活動に積極的になり過ぎるのを中止せざるを得なくなったためでした。オーヴェルニュ少年救済事業に関しては、次の年から、デュピュシュ師がパリのセン・シュルピスで司祭叙階のための研修を始めるためボルドーを去ることになったため、その集会は衰退し、一時はほとんど完全に消滅さえしました(29)。

このような展開のためシャミナード師はひどく苦しみました。密かに嘆くことしか出来ませんでした。幸いにして、1826年に司祭に叙階されたデュピュシュ師のボルドー復帰とサヴォア少年救済事業付き司祭としての任命によって、この事業は復興し、師の指導のおかげで盛んになっていきました。ダヴィオ大司教はこの活動の復興を好意的に援助しました。それはこの活動の誕生を歓迎したのと同じで、同様な配慮を惜しみませんでした。大司教がその帰天の前に試みた最後の外出はサヴォア少年たちを訪れるためでした(30)。ダヴェン師はこの活動を支えるために特別な力量を示していました。師は見事な「サヴォア少年のアルバム」や「サヴォア少年救済事業に関するエッセー」を出版し、地

域の上層家庭の子供たちに興味を持たせた「サヴォア少年の小さな救済事業」を創立しました。そして、後ほど司教総代理に任命された時、この事業に孤児院、矯正少年のための少年院等の事業を追加しました(31)。師の熱誠は新たに創設されたアルジェの司教座に任命されるまで続けました(32)。

この活動は司教総代理ビュショー師によってしばらく指導された後、1860年ごろ、マドレーヌのシャミナード師の子弟の下に返されました。こうして、この活動は約20年間、すなわち、ボルドーにオーヴェルニュの煙突掃除の少年たちが滞在する間続きました(33)。1860年にはシャミナード師はもう生きてはいませんが、最後まで謙そんで、この件に関して沈黙を守った師は、この事業の創立者の肩書きを要求するなど決して致しませんでした。世評はデュビュシュ師をその創立者として評価しましたが、その資格はシャミナード師にこそ帰せられるべきもだったのではないのでしょうか(34)。

王政復興の時期にコングレガシオンに関係づけられた諸活動の結論として、1817年のすばらしい宣教活動の効果を維持するためにローザン師によって創立された男女二つの信心会を挙げる事が出来るに違いありません。シャミナード師とこれらの信心会の関係はそれほど明確ではありませんが、それでもなお、その関係が現実であったことには変わりはありません。シャミナード師によって激励されたマドレーヌのコングレガニスト司祭ローザン師によって創立されたこれらの信心会は、その目的を考慮する限りでは、コングレガシオンの会則を模倣し、コングレガシオン同様、無原罪の御宿りの乙女マリアへの信心に献身しました。男子の信心会は長く生き延びませんでしたが、女子の信心会は「黙想の婦人会」の名称で今日まで存続し、女子青少年の教育及び職業あつせんに大きな奉仕をなしています(35)。

マドレーヌのコングレガシオンは毎年黙想によって1817年の大黙想の成果を維持するように務め、ダヴィオ大司教がおっしゃったように、これを「永続的な黙想」として維持し続けました。こうした黙想は1830年まですばらしい熱意によって継続的に実施されました。すなわち、これらの黙想は信徒の要請に適応され、荘重ではないがていねいに教えられ、年内の活動の最も少ない10月や11月に行われました。そして、これはシャミナード師にとって慰めになりました。今日残されている1818年の手紙によれば、シャミナード師は黙想の集結日に次のように大司教に報告しました(36)。「黙想の集結日に引き続きささげられるミサで800名の信徒が聖体を拝領するものと思われました。当日、教会は朝5時から晩の9時までいつもいっぱいでした。婦人たちは男性に席を譲ったので何らの混乱も起きませんでした。コングレガシオンへの加入者は数多く、また、改心した者(37)、がどんなに多かったかは神のみが知るところでした。」

この年は例外として、成人男子の黙想会と成人女子の黙想会が9月に同時に行われました。普段はこれらの黙想会は別々に行われ、成人男子の黙想会は一般に無原罪の御宿りの聖母の祝日に終了していました。これらの黙想で幾人もの召命が見いだされ、幾人もの罪人が改心しました。例えば、多くの改心者の中でも、シャミナード師がフリーメーソンから改心させた一人の軍人がそうでした。彼は感謝の気持ちを表すことを決して忘れませんでした(38)。

王政復興時におけるボルドーのコングレガシオンの活動のすばらしい成果を一べつただけでは不十分だと思います。それは、少年たちのキリスト教教育のために試みられた努力や取得された成果が理解されないからです。この少年たちのキリスト教教育こそがコングレガシオンの活動を完成することになる男女両修道会の使命の一部になるに違いないからです。しかし、このことに注目する前に、ボルドーのコングレガシオンの強力な切り株から生じた多くの下部組織にいちべつを加えなければなりません。ボルドーのコングレガシオンはこれらの下部組織によってその活動を増強し、フランスの南西地方全域にその活動を展開することが出来たからでした。



注

- (1) それはボルドー市のある町名です。
- (2) 覚え書きの中にしばしば記された同名の司祭です。1792年8月29日生まれのジャン・ポール・リガニオン師は1808年に神学校に入り、1816年に司祭に叙階されました。その司祭職の前期はセン・ルイ教会で過ごし、1834年にセン・マルシアル教会の主任司祭に任命されました。1871年に帰天しました。ベルトラン著、「神学校史」、2巻、114ページ参照。
- (3) ボルドーのセン・ミシェル教会の主任司祭セルヴァ師著、「ダヴィン・ドゥ・ボワマレン師の生涯」、1879年、ボルドー参照。
- (4) ドウガン著、「ジョッフル師の生涯」、49ページ。
- (5) ジュステン・デュピュイ著、「セン・ミシェル教会主任司祭シャルル・デュピュール師の生涯」、1851年、ボルドー。
- (6) リオン出身のジャン・バプティスト・ラ・ソース師(1740—1828)は64冊の著書を刊行しました。ベルトラン著、「セン・シュルピス会の文化史」、2巻、66ページ以降、1900年、ピカルル、パリ。
- (7) ギー・トゥッセン・ジュリアン・カルロン師(1760—1821)はレンヌで生まれ、1785年に作業場を設立しました。1814年までロンドンに滞在し、その充実した生涯をパリで終わりました。師は労働者階層の人々の生活を助け、彼らを教化するために多くのすばらしい

事業の発起人になりました。フランスのベネディクト会による「カルロン師の生涯」、2巻、1866年、ドゥニオル、パリ。

(8) 1817年から1825年にかけて、信仰に敵対する書籍が274万1000冊の刊行がありました。(グランメゾン著、「ラ・コングレガシオン」、220-221ページ。)

(9) 同前、114ページ参照

(10) その守護の祝日はお告げの祝日でした。

(11) 「1843年度教会歴」、カトリック事業付録、6ページ

(12) スペイン派遣教皇大使ジュスティアニ司教の要請によって。同司教は様々な事件でボルドーに一時的に滞在しなければならなくなっていました。

(13) パロール師は1766年にシャロンヌ・シュル・ロワール県のアンジェ教区で生まれ、1839年6月2日、自らの使命を害することを恐れて、少なくとも教区からは何らの任務も受けることなく、名誉参事会員の資格で帰天しました。タイフェル著、「ラクロワ師の生涯に続くパロール師に関する略述」、1847年、ボルドー、参照。

(14) 1828年9月22日、マリア会評議員会議事録

(15) 市当局は余り協力的ではありませんでした。市役所の留置所への出入りを禁じたからでした。

(16) 「刑務所訪問の目的は、救いが絶望的に思われたこの時期とこの場所での隣人の救いのための直接的な活動です。神の哀れみへの信頼、イエス・キリストの模範と約束、あらゆる時代における最も熱心な信徒の実践がこの活動を理解させます。その他のことは神がなされるからです。」(刑務所訪問に関する講話の冒頭)

(17) 1821年9月付けデュピュシュ司教回章は明確な言葉で当該事項を述べていました。「サヴォワ少年救済事業に関するエッセー」、86ページ、1832年、ボルドー

(18) 創立というより復活で、この活動は1世紀前のドゥ・スーシ師にさかのぼるからです。ドゥ・ラ・ポルト著、「旧体制下の煙突掃除少年救済活動」、1900年、ルトー参照。

(19) アドルフ・デュピュシュ司教は1800年5月20日ボルドーに生まれ、エステブネ寄宿学校の生徒となり、初聖体拝領時からコングレガシオンの志願者で、1817年にコングレガニストとして受け入れられました。師は1821年5月14日に次のようにシャミナード師に書き送りました。「あなたから頂いたマリアの子供という名は、あなたの特別な願いに常に応ずる力をわたしに与えました。」ピノー著、「アルジェの最初の司教ドゥ・デュピュシュ司教の生涯」、1866年、ボルドー。

(20) 現在のアキテーヌ広場

(21) 友人の一人(アドルフ・デュピュシュ司教)著、「サヴォア少年救済活動に関するエッセー」、57ページ、1832年、ボルドー。

(22) 1818年2月11日、ドゥ・ツルノン伯爵へ

- (23) 1843年1月3日、コリノー師のドンネ司教への手紙。(大司教館資料室)
- (24) オーヴェルニュ少年救済事業の後援者の中で、デルボ夫人、デュベルジエ夫人、メーデュ夫人、バアン夫人、ドゥ・メンヴィル夫人等が特記に値しました。
- (25) サヴォア少年救済事業に関するエッセー、66ページ。
- (26) この枠縁はエステブネ校より持参したものでした。
- (27) パリのこのグループの組織については、ドゥ・グランメゾン著、「ラ・コングレガシオン」、195ページ以降で照合出来ます。
- (28) 1821年5月15日、ダヴィオ大司教への手紙。熱心の余り用心すべきことに十分配慮しなかったデュピュシュ師は、後にアルジェの司教になった時、司教座を去らなければならないほどの残念な誤算を来すことになりました。
- (29) 1826年1月のデュピュシュ師の第2回回章、「サヴォア少年救済事業に関するエッセー」、95ページ。「数箇月前から気の毒なサヴォア少年たちは教訓的な言葉もかけられず、だれからも見舞われず、病気の時だれからも看護されず、ある少年はだれから助けられることもなく死亡しました。」
- (30) サヴォア少年救済事業に関するエッセー、97ページ。
- (31) マドレーヌ近くのラランヌ通り
- (32) 師は1838年に司教に任命され、1846年に辞任しました。晩年をボルドーで過ごし、善徳を積み、1856年7月8日に帰天しました。
- (33) 煙突掃除少年救済の事業は次第に地域の子供たちのにも広がっていきました。したがって、オーヴェルニュ少年たちの移動は無意味になっていきました。
- (34) デュピュシュ師は自ら指導していた年度の事業を1826年の回章(サヴォア少年救済事業に関するエッセー、95ページ)に記録しました。シャミナード師は真相をたずため、周知の事柄であった事実を想起させるしかありませんでした。師は沈黙を守ることがを好みました。この事業の創設がデュピュシュ師のみに帰せられていた1843年の教会歴編集者によって犯された誤りをこれ以上取り上げませんでした。セン・ルイ教会の教会参事会員、そして、主任司祭になったコリノー師は、シャミナード師ほど慎重ではありませんでした。1843年1月4日、ドンネ司教にあてた手紙によれば、サヴォア少年救済事業に関する教会歴の不正確さに抗議しなければならないと考えたようでした。次のように述べていました。「1819年(1821年のつもりでしたが)、サヴォア少年救済事業がダスヴェン師の名義の下にデュピュシュ師の手に移った時、この事業は既に2年前からボルドーに存在しており、多くの少年と教師たちは相互に信心や熱誠が鼓吹され、それまで到達出来ないほどの繁栄の域に達していました。」当時のことを忘れてならないことは、コリノー師はずっと以前からシャミナード師やマリア会から離れていたことです。「デュピュシュ司教の生涯」には、サヴォア少年救済事業の起源に関しては同様に不正確に記載されていました。
- (35) たとえ、シャミナード師が「黙想の婦人会」に直接かかわっていなかったように思わ

れても、その手紙であかされるように、恒常的な関係がありました。これらの婦人たちの氏名はシャミナード師の活動(サヴォア少年救済事業)の後援者たちの中に伝えられ、また、時には、師自ら女子青少年の就職を斡旋して、ドウ・ノアイアン嬢や活動の指導者ドウ・ガラール婦人を手助けしました。

(36) 1818年9月25日の手紙

(37) 既にコングレガシオンには登録していましたが、その聖務には不規則的にしか出席しなかった人々。

(38) 1826年オーシュのコングレガシオンと交わした手紙で彼が話題にされていました。シャミナード師はフリーメーソンの支部に注意していました。彼らの書類に、当時ボルドーに置かれていたその支部のリスト及び上述兵士のフリーメーソン証書が伝えられていました。



第 18 章 加盟コングレガシオン (1815—1830)

メール・ドゥ・トランケレオン ❖ その信心会 ❖ 相互の連携 ❖ ボルドーの信心会への加盟 ❖ 教皇ピオ7世聖下よりの権限 ❖ ジャクピー司教とアジャン教区のコングレガシオン ❖ 成人男子のコングレガシオン ❖ ボルドー、アジャン、オーシュ、タルブ教区のコングレガシオン ❖ バザ、オーシュ、エール神学校の加盟コングレガシオン。

1808年、当時フィジャックの高等中学校の教師であったラフォンが市内の病院を訪れた時、バース・トランケレオン男爵夫人に遭遇しました(1)。フィジャックには一時滞在中に過ぎなかった男爵夫人は、娘の一人が数名の女子青年の友人と設立した小さな信心会のことをラフォンに伝えました。そこで、ラフォンは彼女にボルドーのコングレガシオンのことを話す好機を得ました。それは、その小さな信心会の組織を確立し、また、コングレガシオンが享受している霊的な熱誠を分かち合うことによって、その信心会グループに何らかの手助けが出来るに違いないと考えたからでした。この提案を耳にしたドゥ・トランケレオン嬢はていねいにこの事を承諾し、初めてその名前を知ったボルドーの司祭シャミナード師に早速手紙を書きました。こうしたことがコングレガシオンがボルドー外に展開する起源になりました。やがて、シャミナード師とドゥ・トランケレオン嬢との間に文通が交わされるようになり、双方に最も思いがけない結果をもたらすことになりました。

アデル・ドゥ・トランケレオン嬢はガスゴイン地方の名門の一つバーツ家とナヴァル女王の時代にはネラシェ地方のほとんどの貴族のようにプロテスタントであったが、ルイ14世の治世に先祖の信仰に復帰したトランケレオン家の分家の出身でした(2)。父方の城館は現代様式の建築で、広大で肥沃な田園の中、バイズ河畔に優雅に位置していました(3)。アデルは1789年6月10日にここで生まれました。それは、ボーム球技場の誓約、すなわち、国民会議が国の制度の変動をフランスに予告するしばらく前でした。したがって、彼女は旧政体もその政体から与えられた特権も知りませんでした。父親の男爵は亡命を余儀なくされる前にやっと第2子のシャルルを抱くことが出来ました。

父の亡命は城館の人々を深い悲しみに沈めました。また、城館の財産が供託に付されたので、家族は早速貧困に陥りました。しかし、若い母は家族がこうした不幸に見舞われても少しもくじけぬ強い心を持っていました。彼女は最

良の日の到来を待ちながら城館に残ること、そして、神と祖国のために子供たちを養育することを決意していたからでした。しかし、彼女の決意も冷酷な追放令によって打ち砕かれました。それは、フィジャックの実家の母を訪ねていた短期間の間に、多くの亡命者の中に彼女もリストアップされていたからでした。彼女は城館に立ち戻ることも出来ず、子供たちを伴って早急にフランスの国土を立ち去らなければなりません。彼女はポーのある知人によってしたためられたトロサの信徒修道者当ての紹介状のみを携えてスペインに到着しました。ようやく、彼女はポルトガルに亡命していた主人の男爵と遭遇することが出来ました。こうして、たとえ旅空であっても家族の再会を喜ぶ慰めを得ました。

アデルの幼年時代は亡命の避けがたい窮乏の中で過ぎていきました。彼女は亡命の地で早くから、俗世界の喜びから離脱することを学び、最も感受性の強い年齢からカルメル会の修道生活にあこがれるようになりました。執政政府が亡命者たちにフランスの門戸を再開したので、この一家もピレネ地方に移りました。スペインの小さな村で、この少女は活発な知性と純真な心で神への道を体験する修道女になる熱意に引かれていました。1802年のご公現の主日に初聖体の拝領が許可されました。やがて、彼女はカルメル会に入るためスペインに止まる許しを熱心に両親に願いました。当時彼女はやっと12歳でした。両親は、もし、25歳になるまでその望みを持ち続けることが出来るなら、その計画を自由に実行してもよいと言って、ほほえんでうなずきました。しかし、アデルはカルメル会には予定されてはいませんでした。彼女の強い性格は観想生活より活動生活に予定されていたからでした。聖女テレジア(4)に対する特別な信心によって全生涯を貫いた幼年時代の修道生活への魅力は、彼女にとって、潜心、内性、犠牲、熱誠、そして、愛の生活の基本的要請へのスタートになりました。

トランケレオン城館に帰着いた彼女は二人の優れた英知によって、紛れもない神への道に、すなわち、祈りと謙遜の徳の実践を伴う宣教活動の道に導かれました。その一人は彼女の弟の家庭教師のデックルノー氏でした。彼は単なる信徒であったにもかかわらず、彼女の性格と境遇に完全に適合した生活の規則を彼女のために作りました。もう一人は謙遜な内的なロンピアンの主任司祭、ラリッポー師(5)でした。師は彼女を完徳の頂上に、同時にまた、宣教活動に静かに導きました。彼女はこうした賢明な指導者の下で、隣人の援助のために全エネルギーをささげました。彼女は愛徳の天使となり、地域の恩人となったのです。彼女は村々の需要を求めて奔走し、みなしごたちを世話し、あるいはそのためのホームを作り、病人を慰め、臨終の病人を夜通し看護し、あらゆる貧者を出来る限り慰めるようにしていました。どのような職業も、それが貧しい人々の実情を改善するのに役立つなら、それは彼女にとって何ら

卑しいものではありませんでした。したがって、彼女は養鶏場で家畜を飼い、自ら刺しゅうしたものを売りさばきました。母は出来る限り彼女を助け、父も彼女の献身的な働きを決して妨げませんでした。

いずれにしても、こうした外的な愛徳の実践は彼女にとって一つの手段にし過ぎませんでした。もし、心が危険への無知や悪習に陥っているなら、身体の苦痛を和らげることが何の役にたつでしょう。したがって、彼女の目的は魂を救うことでした。貧しい人々が城館を訪れるようになったのは、彼女の愛徳が多量の貧しい人々を引きつけたからでした。彼女は優しい親切な言葉や好意によって、また、施しによって彼らを勝ち得たのです。彼女は子供たちを相手にしない場合は訪れた人々に如才なく神について話すことが出来ました。もちろん、子供たちに対しても特別な関心を抱いていたので彼らとくつろいでいました。近隣の子供たちの名前は皆知っていたので、だれも彼女の配慮から漏れるものはいませんでした。もし、彼らの中のだれかが初聖体を拝領していなければ、自ら教え、準備させるよう引き受け、また、他の子供が要理の勉強に遅れていればその先生になっていました。神は、彼女のこうした優れた天性の働きによって、いかに彼女がしばしば忍耐の実践の機会を見いだしたかをご存じでした。彼女は地域のすべての少女たちの助言者になりました。毎日曜日家族は城館の馬車でフュガロール村の小教区教会に行きましたが、彼女は村の友人たちと親しくなる機会を得るため徒歩で行きました。

間もなく、城館の人々の宣教活動の領域は極めて限られることになりました。しかし、彼女は家族の関係や個人的友情関係を利用して、交際している人々に愛徳の熱誠を伝えました。彼女は16歳にして早くもこうした成功を収めていました。彼女は熱心で活気のあるグループの長で、そのメンバーはヴィルニューウ・シュル・ロ、コンドン、ランド地方のヴィルニューヴ、トネン、モンフランケン、セン・セヴェル、そして、特に親友のディシエ嬢の住んでいたアジャン地方に分散していました。ラッリボー師はこの信心会の名目上の指導を委ねられていましたが、アデルがその指導的地位に立っていました。この小さな会は保護者として無原罪の御宿りの乙女マリアを、モデルとして聖フランソワ・ドゥ・サルを、目標として死の準備を、その手段として世の虚栄からの離脱を選びました。小さな会は1808年には約60名のメンバーを数えましたが、彼女たちはすべてアデルのリーダーシップの下に信心と宣教活動への推進力を得ていました。アデルの宣教活動はフィジャック市においてのみは成功しませんでした。神が、召命上の航路を導くため生涯の指導者となるべき方を彼女が選ぶように期待されたのはこうした時でした。

1808年の秋の終わりごろ、アデルはラフォンの勧めにしたがってシャミナード

師に手紙をしたためました。それは、ボルドーのコングレガシオンに小さな信心会を加盟させることを交渉するためでした。シャミナード師は彼女を暖かく迎え、次のように回答しました。

「わたしは、あなたの手紙とコングレガシオンに加盟することを望んでおられる若い方々の名簿をうれしく興味深く頂きました。このようにたくさんの女子青年の間に熱心がみなぎっていることがうかがわれてとても感動しました。こちらの女子青少年コングレガシオンの総会の際、あなた方の熱心な小さな会の願いを知らせ、名簿を読み上げたところ、全員、わたしの感じていた内心の喜びと満足に気づき、彼女たちも同じ気持ちになり、今後、あなた方をコングレガシオンの一員と見なし、祈りの折りに毎日あなた方を思い出すことを約束致しました。」

シャミナード師はコングレガシオンのこの新しい志願者たちに、コングレガシオンの会則とマリアのしもべの手引きを送りました。これを受け取ったとランケレオン嬢は早速アガツ・ディシエ嬢に次のように書き送りました。「すばらしいお祈りと立派な指導指針、マリアの誉れのための美しい詩編、わたしはこの小さな本が大好きになりました(6)。」彼女たちはボルドーの女子青少年コングレガシオンへの加盟を受け入れ、彼女たちとの通信を開始しました。ボルドー側で、先ずこのコンタクトに協力したのはドゥ・ラムルス嬢で、次にその後継者ラコンブ嬢でした。ラコンブ嬢についてはやがて触れることになります。

シャミナード師はこれらの新しい娘たちにコングレガシオンの慣行を伝えるだけでは満足せず、特にマリアへの献身について、また、魂の救いに関する熱誠について強調し、その精神を教え込むよう努力しました。もちろん、小さな会でも普通の愛情と尊敬をもってマリアを愛していましたが、シャミナード師はそれだけでは満足しなかったのです。師はトランケレオン嬢に次のように書き送りました(7)。「神の母に特別の仕方で属する幸福をあなたに感得させることが出来たら何とうれしいことでしょう。こちらで、わたしたちはマリアの子供という称号を誇りにしています。わたしたちはその特別な家族を構成していると信じているからです。」シャミナード師は彼女にマリアへの献身を行わせ、「マリアへの絶えざる愛」の信心を教え、すべてにおいて「至聖なるマリアのご保護」を期待するよう要請しました。更に、次の手紙で、マリアがどのようにわたしたちの真の母であるかを説明しました。

「マリアの真の子供は何と幸いでしょう。イエスの母が本当に彼らの母となるのですから。しかし、あなたは、マリアはイエスの母であるからわたしの母にはなれないと考えるに違いありません。わたしたちが物事を靈的に考えなければ確

かにその通りです。しかし、マリアの神母性を考えなければならないのは本性によってよりも霊によってです。イエスのみ言葉そのものによれば、マリアが幸せになったのはイエスを自然の法則によってお産みになったことより、霊によってお産みになったからでした。」

マリアへの献身のような使徒的精神は小さな会に既に芽生えていました。各会員は小さな会のためにもう一人を募集し、子供たちに要理を教え、要理教育の遅れた者を教育し、プロテスタントを改心させるまでに活動しなければなりませんでした。アデルは1809年にある家族の全員が真の信仰に復帰したことで大変喜びました。小さな会は、ボルドーのコングレガシオンの精神を全面的に受け入れるために、その主要目的の一つとして宣教活動をより明確に意図しなければなりませんでした。以後、小さな会はその使命として「福音宣教」を意図することになりました。ドゥ・トランケレオン嬢はこの表現を好んで用いるようになりました。

アデルとその友人たちはボルドーのこの新しい指導を熱心に受け入れました。そこで、ボルドーからの音信が待ちわびられ、これを受け取ると熱心に読み、他の友人たちにも伝えました。アデルは友人の一人に次のように書き送りました(8)。「シャミナード師は本当に聖人みたいな方です。わたしたちをどれほど歓待されたことでしょうか。師がわたしたちの小さな会に寄せてくださる好意にふさわしいように努力しましょう。」

彼女たちは更に懇願しました。それはローマの聖座から認可された免償にあずかるためボルドーのコングレガシオンへの実質的な加盟を望んでいたからでした。どのようにしたらよかったのでしょうか。シャミナード師はこのころまでコングレガシオンがボルドー外に展開することを考えていなかったし、パリのデルフェイ師のようにその権限を他の都市で行使する資格も持っていなかったからでした(9)。既にローマ市に幽閉されていた教皇聖下に懇願することも不可能だったのです。コングレガシオンへの個人的な加入許可の方法しか残されていませんでした。師はトランケレオン

嬢に次ぎのように書き送りました。「み摂理が教皇聖下に伝える何らかの容易な手段をお示しになるまでは、それ以外のことをなすことは不可能です(10)。」

そこで、シャミナード師は次の(1809)の四旬節までに高地のアジャンを訪れることを約束しました。しかし、約束した時期までに多くの用件から解放されることが出来ませんでした。そこで、計画した旅行を短縮するため、小さな会の会員をグループごとに幾つかの村に集めることを提案しました。この計画にも不

都合がなかったわけではありませんでしたが実施されました。師はトランケレオン嬢に次のように伝えました(11)。「ボルドーでは、わたしたちは、母マリアのご保護の下にはるかに困難な事柄を成し遂げました。」いずれにしても、決められた約束は実現されました。しかし、それも恐らく1810年(12)、ボルドーのコングレガシオンが廃止になった後のことでした。シャミナード師が、み摂理によって汚れなきマリア修道会の創立の協力者として予定されたドゥ・トランケレオン嬢と出会って個人的に知り合ったのはヴィルヌーヴ・シュル・ロ市ででした(13)。

「第3部門」(小さな会はこのように呼ばれていました)の熱誠は、ボルドーのコングレガシオンの活動の廃止からもたらされたシャミナード師の苦悩を和らげました。師はドゥ・トランケレオン嬢に次のように書き送りました(14)。

「わたしは、あなたの友人たちの間に熱誠がみなぎっていることが分かってうれしく思います。あなたが彼女たちと親しい関係を維持するなら、彼女たちが徳と信心の実践に励むことが分かってあなたも慰められるに違いありません。彼女たちと交際を止めないようにしてください。まず、神の前で彼女たちのために祈るため、そして、文通によってです。お互いに会ったり、文通し会うよう勧めてください。しかし、もっぱら神を愛するよう刺激するためです。わたしは小さな手引きを船便でアジャンに送り届けることが出来るのではないかと考えました。音信不通の場合はどうぞ事情をお察してください。この手引きはあなたとあなたの友人たちのためにお使いください。この手引きのことをだれかに知らせたからといって、あなたにも他のだれにも危険が及ぶことはありません。その目的が神への奉仕と至聖なる乙女マリアの誉れのためだからです。今日から、このこと(ボルドーとドゥ・トランケレオン嬢との文通)をラコンブ嬢の任務にしたいと思います。彼女は文通の内容を埋めるため必要な記事をわたしに求めることになるでしょう。どうぞマリアの子供たちを増やすように務めてください。そして、地獄の働きには断固立ち向かってください。」

シャミナード師自身その模範を娘たちに示しました。帝政の不幸な日々においても、マリアを信頼していた師は、大半の人々が希望さえしていなかった将来の事業を準備していました。ドゥ・トランケレオン嬢の小さな会と接触するようになった全く偶然の事態は、師にとって、コングレガシオンが再建されて以来その活動がボルドー外の地域に展開するためのみ摂理のおぼし召しのように思われました。シャミナード師は、1813年の春、ミゼリコルド会の用件でパリに赴いたラムルス嬢に、フォンテンブローの刑務所に幽閉されていた教皇聖下に心からの敬意を表し、デルピュイ師に既に与えられた特権を懇願すること、新しいコングレガシオンを設立すること、そして、コングレガニストを受け入れるた

めの必要な権限と免償の適用の権限をその指導司祭に与えてくださることを懇願するよう依頼しました(15)。聖座はこの懇願を喜んで受領されました。そこで、ドゥ・トランケレオン嬢は、次の7月25日にシャミナード師がこの件に関してその権限を友人のローモン師に委任するためにアジャン来訪を知らせて来たことを小さな会の会員に伝えることが出来ました(16)。ラッリボー師は健康上の不安からこの任務を引き受けることが出来なかったからでした(17)。

善を行う新たな手段が授けられたシャミナード師は、更にすばらしい日の訪れを待っていました。早速そのあけぼのが水平線に輝き始めました。疲れを知らない宣教師シャミナード師はボルドーのコングレガシオンを再編成した後、この祝福の樹木を移植するためにアジャン教区に赴いたのでした。

アジャン教区を統治していたジャクピー司教はシャミナード師と同郷の出身で、間もなく同年齢になるところでした。1761年4月28日にペリゴル地方のセン・マルテン・ドゥ・リベラックで生まれた司教は、ある特別な機会にアジャンの司教に任命されました(17)。司教は、優れた手腕よりむしろ、文学や雄弁よりも迫害を避けるための有益な良識、思い遣り、用心等の諸徳を教区にもたらししました。司教は、幼年時代シャミナード師を知っていたのでしょうか。そのことについては信じられる理由があります。

それは、司教がペリギューの若い聖職者であったころ、神学の終了後、数年間ボルドーで過ごしたからでした。いずれにしても、王政復興の当初から相互の文通によって極めて親しい友人として行動していました。1815年9月、アンブレーム公爵夫妻の歓迎式典参列のためボルドーを訪れた司教は、教会参事会員の中にシャミナード師を見かけ、あいさつのため公式行列から飛び出して来たほどでした。

ジャクピー司教は早速友人のシャミナード師と会見しました。そこで、シャミナード師は、1815年3月14日、ドゥ・トランケレオン嬢に次のようにしたためることが出来ました。

「コングレガシオンはそのすべての下部組織、そのすべての様式があなたの教区の司教様によって承認されました。わたしはベロック夫人をアジャンのコングレガシオン下部組織の長、すなわち、黙想の婦人会及び女子青少年コングレガシオンの責任者に任命しました(18)。すべては順調に運ばれることと思います。もちろん、苦しみや困難はあるに違いありません。わたしたちに何もつらいことがないなら、神とマリアへの熱誠の奉仕をどのようにあかし出来るでしょうか。愛は最愛な方の栄光のために取り組む奉仕の中で養われるものです。」更に師は付け加えました。「あなたはアジャンの下部組織を正規なものになすため、

かなり大きな組織を作らなければならないので、会員たちがコングレガシオンの信心業を公式に実施出来るような広々として場所を検討しても結構です。そのためには十分用心しなければなりません。いつも主任司祭方の了解を得るように努めてください。また、常にローモン師と相談してください。特に何事にも慎重であってください。」

シャミナード師の願いは帝国の決定的な失墜後、すなわち、その年の秋に実現しました。家庭の主婦や女子青少年のためのコングレガシオンが、アジャン、トネン、エギーヨン、ロンビアンに設立されたからでした。ドゥ・トランケレオン嬢の小さな会の会員は熱心な働き手となり、教区内へのコングレガシオンの普及に尽力しました。この活動に計り知れない熱誠を傾けたドゥ・トランケレオン嬢は友人の一人に次のように書き送りました(19)。「わたしたちに残された唯一の希望は青少年たちです。古い世代の人々はほとんど亡くなりました。神のために若い世代を勝ち取るよう努力しなければなりません。確かなことは、コングレガシオンには明らかに神の祝福が認められることです。しかし、この事は驚くに足りません。神の母は全能だからです。マリアはその子供たちのためにどれほど取りなしをしてくださっていることでしょう。」この新しいコングレガシオンは皆ボルドーのコングレガシオンを模倣していましたが、ボルドーの活動方式に比較して違った宣教活動、慈善事業を試みていました。すなわち、孤児たちへの要理教育、悪の危険にさらされた少女たちの保護、病人の見舞い、そして、初聖体の準備等でした。

しかし、シャミナード師は特に青年男性の獲得を熱望していました。師はこの活動を先ずアジャンから開始しようと考えました。1815年3月12日(20)から、コングレガニストで、「まるで12歳の子供のように素直で信心深かった青年(21)」のドゥ・ダンピエール侯爵が活動を開始するためひたすらみ摂理の印を待っていたからでした。しかし、アジャンの中産階級の支配的見解は自由主義であり、宗教無関心でした。したがって、その活動は困難でした。師はドゥ・トランケレオン嬢に次のように書き送りました(22)。「ドゥ・ダンピエール侯爵の援助がなければ、コングレガシオンがあるべき姿に組織されるかどうか不安です。アジャンでは青年たちの心を揺さぶるために何回かの黙想を行わせる必要があるように思われます。」ドゥ・トランケレオン嬢も、「アジャンでは男子青少年のコングレガシオンは成功しないように思います」と友人に書き送りました(23)。

様々の障害もシャミナード師の働きを中断することは出来ませんでした。師は好機の到来を知っていたからでした。ただ、最初のメンバーを見いだすのは困難でした。いずれにしても、シャミナード師が、1816年の6月に汚れなきマリア修道会の最初の修道院開設のためアジャンを訪れた時、ドゥ・ダンピエール侯

爵は同市の使徒になることを決意し、また、その可能性のある数名の青年を師に紹介することが出来ました。最も熱心な人の中には、県会議員のラコスト氏(24)や小学校校長のダルディ氏がありました。最初の集会は、シャミナード師の友人であり、元ラザリスト会士で、当時大神学校校長であったムーラン師の下で開催されました。シャミナード師はドゥ・ダンピエール侯爵をコングレガシオンの会長に任命し、メンバーの会員にマリアへの奉献を行わせ、規則を説明し、ムーラン師に指導司祭の役目を果たすよう委任しました。この集会で、グループのメンバーはボルドーのコングレガシオンに倣って「誓約書」に署名し、コングレガシオンの一般目的外に、その熱誠の目的として、初聖体の遅れた子供の準備、主任司祭たちの好意によるその他の子供たちの宗教教育、少年子弟の就職あっ旋、そして、出来れば、専門教育の補修を使用人や職人たちに与えるため、商業や芸術、職業コースの開設等を目指しました。

やがて、集会は市の中心に位置し、ノートルダム・デュ・ブルと呼ばれていたゴティック式の古い聖堂で行われるようになりました。当時、この聖堂は神学校の所有で、公に使用され、あらゆる名家の墓地のある、市でも最大の墓地に囲まれていました(25)。ボルドーのコングレガシオンの集会のような日曜日の晩の公の集会は、静かなアジャン市には、強烈な好奇心を与えました。コングレガシオンの集会はここで多くの入会者を募集することが出来ると共に、やがて、この地域社会のすばらしい評判になりました。

ボルドーのコングレガシオン母胎はその発展を喜び、下部組織の視察のためにある会員を派遣し、優れた講話をなし、新たな加盟グループから厚く感謝されました。すべては順調に運ばれていました。1816年の8月8日の日付で、ドゥ・トランケレオン嬢は喜んで友人の一人に次のようにあかししました(26)。

「当地では、コングレガシオンはあらゆる階層で増加しています。熱心な人がたくさんいるからだと思います。今日すばらしい感動的な典礼が行われました。その目的は大革命の間に犯された忌まわしい行為を償うためでした。大革命中、人々は至聖なる乙女マリア像を引き回し、居酒屋に運んで汚したからでした。今日、新しい至聖なる乙女マリアの像を建立するためここから一里ほどのノートルダム・ドゥ・ボンナンコントルの教会まで荘厳な行列が行われました。聖母像を運んだのは男子コングレガニストたちでした。ヴェール姿の白衣の少女、また、白衣や黒衣の婦人たちが聖マリアの連とうを歌い、謝罪のためにこの教会に寄贈される立派な旗を携えていました。」

この行列は不信仰者たちにとってはがまん出来ないことでした。コングレガシオンが確かに脅威になっていたからでした。ボンナンコントル教会への行列の1

週間後、コングレガシオンは行政権によって廃止でされました。ドゥ・トランケレオン嬢が友人に伝えたくだりに耳を傾けてください(27)。

「あらゆる善にしつとした悪霊が無数の善をなしていた男子コングレガシオンに対して反乱を巻き起こしたところです。信者たちがおおぜい告白場につめかけるのが見られました。罪を犯す危険な場所が廃れるようになったからでした。．．．。一人の部長が延々と不用心なスピーチをしていたので、当局は集会を禁じなければならぬと考えたのです。」

県会議員でコングレガニストのラコステ氏が思想家を批判したのがこの始まりでした。そこで、アジャン市長リュガは、同地のヴォルテール派に説得されて聖母被昇天の祝日当日、コングレガシオンの集会が夕方行われ、アジャン市の静寂が損なわれるという理由で、コングレガシオンの集会を禁ずる市の条令を布告しました(28)。ドゥ・ダンピエール侯爵は臨終の母の下に帰宅していて不在でした。そのことは早速シャミナード師に伝えられました(29)。ボルドーでは、ダヴィド・モニエ士がアジャン市長の布告事項及び市長権の乱用に対するすばらしい反証を準備中でした。

また、ジャクピー司教も即座にコングレガシオンを弁護しました。司教総代理を伴った司教は、8月16日の布告の翌日、ミュニエ・ドゥ・コンヴェルズリ知事を訪れ、1時間半会談したからでした。「知事は非難の言葉に対しては一言半句の弁解も出来ませんでした(30)。」そこで、知事は市長の強力な要請によって問題を宗務大臣に付託しました。司教も宗務大臣に書簡を送り、ドゥ・ダンピエールコングレガシオン会長はパリの友人たちに働きかけました。しかし、ドゥ・トランケレオン嬢の指摘のように、不幸にして、「世俗の人々がまだ優位を占めていました(31)。」レーネ内部大臣は引き延ばし作戦に打って出たました。大臣はこのような無価値な問題でトラブルを起こされることを望まなかったからです。要するに市長及びその関係者は決定的に有利な立場だったからでした。

アジャンの成人女子のコングレガシオンは安泰でした。ムーラン師によれば、彼女たちは「すばらしい発展」を続けました。ドゥ・トランケレオン嬢も友人の一人に次のように書き送りました。「彼女たちは計り知れない善を行っています。まったく信じられないほどです。ガルデル師(司教総代理の一人)は、それは学校で行われる善よりももっと効果的な善です、と述べられたほどです。」彼女は更に、「コングレガシオンの活動は正に神の働きのように思われます。」と述べました(32)。

成人男子のコングレガシオンの廃止はシャミナード師を落胆させませんでした

た。師はアジャンを訪れるたびごとに、また、1816年から毎年アジャンを訪れてジャクピー司教とコングレガシオンを再建する方法を静かに検討していたからでした。2回ほど成功したかに思われましたが(33)、市長はこうした行動を用心深く監視し、しかも、危険な行動と見なし、再度コングレガシオンを禁止しました。1820年ドゥカズ大臣の失脚によって、フリーメーソンの厚顔無礼な行動がしばらく縮小されたので、コングレガシオンはこの機会をその再建に利用しました。シャミナード師が当市に設立したばかりの学校に送り込んだ修道者たちのおかげでコングレガシオンは1830年まで持続出来ました。1816年に計画された活動は実施に移され、多くの活動、特に、初聖体の遅れた子供たちの準備、ボルドーで行われていた活動と同様のオーヴェルニュ少年救済事業等、幾つかの活動がコングレガシオンの活動に追加されました。経験を積んだラコスト氏やコングレガシオンのその他の指導者たちは慎重に行動し、コングレガシオンの集会所を、それまで余りしばしば行っていたノートルダム・デュブール教会から、シャミナード師の修道者たちの住居のあるリュフュージュの教会に移しました。

アジャンのコングレガシオンについて長々と触れて来ましたが、それはこのコングレガシオンが加盟コングレガシオンの中で最古のものであったばかりでなく、なお、特にこのコングレガシオンの生い立ちを披瀝することによって、王政復興後のシャミナード師の配慮をその他の多くの活動に振り向けたこの種の創立の例を読者に示すことを意図したからでした。

事実、アジャンのコングレガシオンは長期にわたる一連の加盟コングレガシオンの最初のリンクに過ぎませんでした。1815年9月、シャミナード師はドゥ・トランケレオン嬢に喜んで次のように書き送りました。「コングレガシオンの設立の必要性が多くの小教区で感じ始められました。幾つかの市からその設立要請がありました。」パリのコングレガシオンに起きたような事柄がボルドーのコングレガシオンにも起きました。コングレガシオンは新たな他のコングレガシオンを加盟させることが出来ることが分かると、方々からその特権の利用が要請されてきました。もちろん、この二つの母体コングレガシオンの間には相違がありました。パリのコングレガシオンは簡単な加盟資格による加盟を一般に制限していました。それは、多くの場合、イエズス会がこうした新しい創立の本質的、専門的指導者だったからでした。シャミナード師の方では反対により積極的な協力を呼びかけていました。このことはアジャンの例で納得出来る通りです。師は個人的指導を与えることを欠かさず、常に規則を与え、補佐たちを指導し、障害を除去するよう手助けしました。シャミナード師によって創立されたコングレガシオンは単なる加盟コングレガシオンではなく、ボルドーのコングレガシオンの支部のようなコングレガシオンでした。

ボルドー教区で一般に率先して活動していたのは、市を離れたマドレーヌの数名の旧コングレガニストたちでした。ランゴワランのコングレガシオンがその一例でした。このコングレガシオンは、シャミナード師の弟子の一人で、最初の神学生の人であったこの小さな町の主任司祭ジェローム・ラブルシュ師によって創設されたものでした。教区の黙想指導者モレール師やグルムモロン師は自らの指導効果を維持するためにこの種の創立を積極的に致しました。1819年に、はなばなしくスタートしたリブルンのコングレガシオンがこの第二のカテゴリーに属しました。最初に裁判所長が、次に、検事や弁護士等、リブルンの著名人たちが次々にこのコングレガシオンに登録しました。検事のデュラン・ラ・グランゼールがその会長に、有能なシャツリエ師が指導司祭になりました。そして、ダヴィオ大司教自らコングレガシオンの創設式を司式されました。1819年5月、復活の祝日を祝うためボルドーに滞在していたシャミナード師は、その数日後、コングレガシオンの組織の詳細を調節するためリブルンに赴きました。両市間の交通が便利であったため、コングレガニストたちは相互にしばしば訪問し会い、文芸作品の交換や講演者を接待し合うことが出来ました。リブルンのコングレガシオンはそのすばらしいデビューを裏切ることなく、王政復興期を通じて発展していきました。

ロッセ・ガロンヌ県とジェル県にまたがったために当時最も広範なアジャン教区では、コングレガシオンはボルドーのコングレガシオンよりも迅速に発展しました。ヴィルニユヴ・シュル・ロット、コンドン、ポール・セント・マリ、ネラック、レックツール、マルマンド等の都市にはコングレガシオンがあり、少なくとも、成人女子のコングレガシオンがありました。1818年にシャミナード師は自らオーシュ市に成人男子と成人女子のコングレガシオンの設立に赴きました。旧オーシュ教区の管理を委任されていた司教総代理のフナッス師はシャミナード師の友人で、シャミナード師のあらゆる活動に好意を寄せていました。フナッス師はドゥ・トランケレオン嬢の親類のバツツ師をセン・オラン教会を中心にする各種宣教活動の長に任命しました(34)。

より遠いピレネ地方でも、地域出身の熱心な青少年によってコングレガシオンが設立されました。ボルドーのコングレガシオンに数名の顕著な人材を提供していたタルト一家の人々が、その故郷のコアラズ(バス・ピレネ地方)にコングレガシオンを設置したからでした。また、リヴィエール家の人々はアクスやアリエージュのコングレガシオンをずっと援助してきました。同時に、アジャンやオーシュの女子青少年コングレガシオンの仲介によって、男子青少年のコングレガシオンがポー、タルブ、バレージュに、そして、その他の地域ヴィルフランシュ・デュ・ルエルグに設立されました。神のこれらの事業の詳細について説明出来れば何と幸いです。これらのコングレガシオンは、ボルドーのコングレガシオン

母体のように宣教精神の恒久センターとなったため、これが設立された地域にとってばかりでなく、なお、近隣地域全体にとっても祝福になりました。

これらのCongregasionでは、無原罪の御宿りの同じ名称、同じ組織、男子青少年Congregasionと成人男子Congregasionの統合、女子青少年Congregasionと成人女子Congregasionの統合を除けば、同一精神、同一形式の集会等、すべてボルドーのCongregasion母体と同じように行われていました。いずれにしてもボルドーとの関係は親密でした。加盟Congregasionの名称は、ミサ中マドレーヌのCongregasionの祭壇に置かれていた登録簿に記入されていました。このことは母体のCongregasionと各加盟のCongregasionを結ぶ祈りと慈善事業の通交の印になりました。指導司祭たちは機会のあるたびごとにシャミナード師の下でマリアへの献身を誓いました。そして、しばしばCongreganistたちの熱誠の実践を指導する靈感をくみ取るためにボルドーを訪れていました。彼らはマリアへの信心に献身し、フランスの西南地方全域に広まったマリアの聖職者軍団だったのです。すなわち、ムーラン師、ローモン師、バガ師、セッレス師、また、アジャンのその他の司祭、コンドンのフェッレ師やカステス師、オーシュのラツリユ師やシュワリエ師、ヴィルフランシュのマルティ師等でした。

以上のすべてのCongregasionは学校内のCongregasionに対して、「広域Congregasion」と呼ばれるにふさわしいタイプに属するCongregasionでした。ボルドーによって承認された加盟Congregasionには、バザ、オーシュ、エールの神学校に三つの青少年のCongregasionしかありませんでした。

バザのCongregasionにはマドレーヌの旧Congreganistたちがたくさんいました。ラコンブ、マルシアル、トロカル等、すべての指導者陣はマドレーヌ出身者でした。彼らは1820年に、マドレーヌの懐かしい思い出を想起するCongregasionを神学校に創設することをシャミナード師に懇願しました。シャミナード師もこの懇願を拒否することが出来ませんでした。やがて、エールの神学校(1825年)とオーシュの神学校(1826年)も同様の恩典を申請し、これを取得しました(35)。会則は少年のCongreganistたちの特別な要請に応ずるものでした。日曜日の晩の集会は主要な祝日に行われていた伝統的な催しで置き換えられていました。集会のプログラムは宗教色一色でしたが内容は多岐にわたっていました。

当時代のCongregasionに関する多くの資料が保管されていたオーシュの神学校(36)の資料室には、シャミナード師やボルドーのある高位聖職者の書簡によってCongregasionの会長の後継者になったアバディ署名のすばらし

い詩歌や、神学校長の一人ラッリウ師作の対話劇の混じった歌曲が伝えられています。これらの幾つかの対話劇はボルドーのコングレガシオン母体を対象にしたもので、その特徴を最高に想起させることが出来るコングレガシオンの詳細を伝えています。シャミナード師はオーシュの小神学生に特別の好意を寄せていました。それは、師が自らの祝日に寄せられた祝辞への返礼に、また、夏休み開始に当たっての手紙に父親のような愛情を示していたからでした。また、ミゼリコルド会のシスターに刺しゅうさせ、自ら祝別した旗を彼らへの好意を想起させるために二度送り届けたからでした。

既に長文になり、しかし、豊富な材料を考慮すれば短すぎますが、本章を終わるにあたって、コングレガシオンの評価がこの地域を越えたことを述べなければならぬと思います。1819年に、ル・マンでドウ・ヴォギュオン婦人によって指導されていた成人女子のコングレガシオンはボルドーへの加盟を申請し、その資格を取得しました。ニームからは、一人の司祭が、「マリアの旗の下に進軍するボルドーのコングレガシオンから与えられた教訓的な模範に感動し」て、同じようなコングレガシオンの設立を決意したことをシャミナード師に伝え、シャミナード師のアドバイスと会則の写しを要請しました。また、オルレアンからは、セン・パテルン教区の活動の指導に関するアドバイスをシャミナード師に求めてきました。すばらしいコングレガシオンが既に存在していたリオンでは、ボルドーのコングレガシオンをモデルにした他のコングレガシオンの設立を計画していました(1823)。

最後にパリでは、ローザン師やフランスの黙想指導司祭によって設立された教区のコングレガシオンの衰退を恐れて、善意の人々はボルドーのコングレガシオンをモデルにしてその安定の確保を考えました(37)。そして、この件の指導をシャミナード師に依頼しました。もし、教区内に外国宣教会を設立するならば、その試みはきっと成功するに違いないと言われていました。主任司祭のデジュネット師(後のノートルダム・デ・ヴィクトワールの主任司祭)がこの計画を懇願していたからです。また、集会のためには教会の地下礼拝堂を提供するということがあったからです(38)。その当時、様々な用件を委任して、カイエ師をパリに派遣したシャミナード師は、ボルドーのコングレガシオンのようなコングレガシオンがパリにもたらしている善を考えて感動し、彼らの要請を受諾しました。師は彼らの要望に従って、次のようなすばらしい言葉を添えてコングレガシオンの会則を送付しました(39)。「わたしはコングレガシオンの活動が首都で普及することをどんなにか望んでいることでしょうか。このすばらしい活動を主要な対象とするマリア会の小さな施設をパリに設立したいとのわたしの厚かましい期待をあなたは多分推測出来るに違いないありません。あえて申しますが、マリア会会員は極めて少なく、しかも、このわずかな会員の中でこの活動のために養成さ

れた者はごくわずかです。」事実、当時はこの領域への参加は無理でした。交渉は長引きました。それは、シャミナード師によって申し立てられた動機としての会員の不足に一貫性がなかったからだと思います(40)。

コングレガシオンのボルドー以外への拡大についての説明はここで中止したいと思います(41)。いずれにしても、コングレガシオンの影響は大きなものでしたが、しかし、コングレガシオンの母体から出た修道会が及ぼす影響には比較出来ないに違いありません。



注

(1) 男爵夫人はフィジャクの親戚の家を訪問していました。彼女はルエルグ地方の旧家ペイロンネック・ドゥ・シャマラン家の親戚でした。

(2) 彼女の伝記(フランスのベネディクト会士、ドン・ジャン・バプティスト・プラディエ著、1861年、ボワティエ)の第一版は売り尽くされ、第二版が準備されていました。アデル・ドゥ・トランケレオンは3人兄妹の長女でした。弟のシャルルと妹のデジレの家族は継承され、今日その子孫が生存しています。

(3) ネラク郡とポール・セント・マリ郡の間で、フエガロール村近郊(ロテ・ガロヌ県)

(4) 彼女はカルメル会の修道女にまねて、その手紙の文頭に、聖女の名前の頭文字と、イエス・マリア・ヨゼフの頭文字(J.M.Y.T)を書きました。彼女はカルメル会の祝日を祝い、アジャンの修道院の修道女のところで黙想をしていました。

(5) ジャン・ラッリボー師は1764年1月9日に生まれ、1791年市民憲章への宣誓を拒み、亡命しました。政教条約でロンビアンノの臨時主任司祭に任命され、1833年にトンネンの主任司祭に任命されました。師の健康は常に不安定でした。したがって、短期間だけその職に専念し、委託された最後の職責も辞退しました。こうして師は聖人のような司祭の思い出を残して1836年に帰天しました。

(6) 1809年1月19日

(7) 1808年末日付なしの手紙

(8) 1809年3月15日、アジャンのアガート・ディシエ嬢へ

(9) デルプイ師は国王聖別式のためフランス滞在中の教皇聖下にこの特典を申請しました。(1805年1月18日)。ジョッフロワ・ドゥ・グランメゾン著、「ラ・コングレガシオン」、226ページ。

(10) 1809年初頭、ドゥ・トランケレオン嬢へ

(11) 1809年4月、ドゥ・トランケレオン嬢へ

(12) 1810年の聖母被昇天の祝日に、小さな会はコングレガシオンの免償を頂いたことが伝えられています。

(13) オーシュの大司教に当てられたコングレガシオンの起源に関するドゥ・ランケレオン嬢の覚え書き(1824年)。

(14) 1812年7月29日

(15) ドゥ・ラムルス嬢は、1813年3月19日、ミゼリコルド会の補佐たちに送った手紙でこの委託の件について述べました。(ミゼリコルド会の資料室)

(16) 1758年6月9日、エギーヨンで生まれたピエール・ローモン師は大革命の間スペインに亡命していましたが、政教条約の時にエギーヨン近郊のセント・ラドゴンド教会の臨時主任司祭に、次に、ノートルダム・ダジャン教会の主任司祭に任命されました。師は1827年9月5日、汚れなきマリア修道会に引き下がり帰天しました。

(17) 史家デルリュウ師(ジャン・ジャクピー司教の生涯と司教職に関する史的覚え書き、1874年、アジャン)は、ジャクピー師が、同名で親戚の将軍と偶然パリの市役所で出会い、この将軍によってどのように第一執政官に対して司教座への推薦が行われたか、また、エメル師は、その教書を書くすばらしい司教総代理を約束してどのように司教職受諾を勧めたかを語りました。ジャクピー司教は高齢と病弱のため教区の統治が出来ないことを考え、こうした気遣いから1840年司教職を辞任しました。そして、ボルドーに退き、1848年5月28日に帰天しました。ナポレオンは同司教について、「わたしは将軍たちを作るより司教を作る幸せな方法を知っている」と語りましたが、少なくとも同司教に関してはナポレオンも間違っていないでした。

(18) ベロック夫人はディシェ嬢の友人の一人でした。彼女はアジャンの有名な医師ベロック氏にとついでいました。

(19) 1816年2月16日、コンドンのドゥ・ラシャペル嬢へ

(20) 前期252ページ参照

(21) 1821年1月4日、ロジェ師よりシャミナード師への手紙

(22) 1815年9月7日、ドゥ・ランケレオン嬢への手紙

(23) 1815年11月17日、アガート・ディシェ嬢に

(24) ジャン・ジャック・ラコスト氏はロット・エ・ガロヌ県の中心校の教師でした。彼は偉大な文筆家で、アジャンの人々の伝記に様々な記録を残しました。

(25) デルリュウ著、「ジャクピー司教の略歴」、233ページ以降

(26) ドゥ・ラシャペル嬢へ

(27) 1816年9月6日、ドゥ・ラシャペル嬢へ

(28) 市長は、「本会は本日からあらゆる集会を中止しなければならない。また、教会は

過去におけるように夜間の入堂が禁じられる」と命令しました。

(29) ラコスト氏とムーラン師は8月17日同時にシャミナード師に手紙を書きました。ムーラン師は事実を知らせた後、次の反省を付け加えました。「神の事業が裏切られた訳ではありません。その活動は続けられると思います。しかし、わたしたちの意向や活動方法に対する明確な説明も、コングレガシオンに向けられたあらしを沈めることが出来ないことがわたしたちには予見出来ませんでした。神父様、これまでもましてわたしたちの活動を導くために今あなたの導きが必要です。あなたはこの事業の創立者であり指導司祭です。おかげでこれまでたくさんの指導を頂きました。わたしたちがあなたのおかげを被っている善、わたしたちの進むべき道を示す善をわたしたちすべてに教えてください。」

(30) 1816年8月17日、ラコスト侯爵よりシャミナード師への手紙

(31) 1816年9月6日、ドゥ・ラシャペル嬢へ

(32) 1816年11月14日、ドゥ・ラシャペル嬢へ

(33) 1818年8月28日の書簡で、司教は青年男子のコングレガシオンの再建を会長に促しました。(アジャンの司教館資料室)

(34) オーシュのコングレガシオンは大成功を収めていました。1819年のシャミナード師の滞在後、成年女子コングレガシオンの主要補佐のヴィクトル・ドゥ・ラグラス嬢はシャミナード師に次のように書きました。「神父様はわたしたちについて満足されたと思います。すべての司祭が神父様に会いたがっていました。わたしは会員たちの熱心を見て喜んで涙を流すほどでした。ある時神父様は、『神様は望まれることをきっと行われます』とわたしにおっしゃったことを思い出します。」

(35) 同時期にボルドーの小神学校はパリのコングレガシオンに加盟しました。そのことは当然でした、この施設を管理していたのがイエズス会士だったからでした。その上、シャミナード師はイエズス会士とはとても親しかったからです。イエズス会士は彼らの田舎の別荘をコングレガシオンに自由に使用させていました。

(36) オーシュの神学校のコングレガシオンには3部門がありました。一つは大神学生のため、もう一つは小神学生のため、そして、第三部門は小神学生に合併された児童クラスのものでした。小神学生の部門が一番栄えていました

(37) 1821年以来。「ローザン師の生涯」、92ページ、また、教区のコングレガシオンは16ページ参照。

(38) 1824年、オロンベル氏とシャミナード師の文通。この計画の仲介者オロンベル氏は、当時小姓の副養育係としてパリ在住のラフォンを通じてシャミナード師とそのコングレガシオンのことを知っていたからでした。注目されることは、イエズス会士のコングレガシオンはその集会を外国宣教会の図書室で行っていたことが指摘されています。これらの二つの活動は相互に邪魔されることはありませんでした。その目的が異なっていたからでした。

(39) 1824年三月22日、オロンベル氏へ

(40) パリのコングレガシオンの会長ポントン・ダメクル氏が、コングレガシオンの刷新について、上級補佐選出に関する会則の精神について、会の各クラスの合併について、また、プロテスタントの集会に類似の夕方の集会について等、について様々な忠告をなしたのはこうした交渉の折りでした。

(41) 加盟コングレガシオンの登録簿は全然残っていません。そこで、伝えられた多くの資料を基に加盟コングレガシオンのリストを再生することを試みました。確かに完全なものではありませんが、このリストを挙げることにしました。日付は加盟の時期を示します。成年男子のコングレガシオンは、男、成年女子のコングレガシオンは、女を記しました。

アジャン：女、1815年、男、1816年；エギーヨン：女、1815年；エール：神学校、1825年；オーシュ：男、女、1817年、神学校、1826年；アックス：男、1826年ごろ；バレージュ：女、1820年ごろ；バルサック：男、女、1820年；バザ：神学校、1820年；ベギー：(ジロンド県)男、女、1827年；ブレイ：男子青少年、1826年ごろ；コアラズ：(バス・ピレネ)、1820年ごろ；コンドン：男、女、1819年；オルグ：(オート・ピレネ)女、1826年；ランゴワラン：(ジロンド県)、男、女、1822年；レクツール：女、1822年；ル・マン：女、1819年；リブルン：男、女、1819年；マルマンド：女、1822年；モンカッセン：(ジェル県)1826年；モンセギュール：(ジロンド県)女、1822年；モンティニャック：(トルドーニュ県)1822年；ネラック：女、1816年；ポー：女、1822年；ポール・セント・マリ：(ロット・エ・ガロンヌ県)、女、1817年；プーシュ：(ロット・エ・ガロンヌ県)女、1825年；タルブ：女、1824年；ヴィルフランシュ・ダヴェロン：女、次に男、1820年；ヴィルヌーヴ：(ロット・エ・ガロンヌ県)、女、1820年、男、1823年；ヴィルリアル：(ロット・エ・ガロンヌ県)、女、1824年。

第 19 章 修道会創立への歩み (1814—1816)

父親の会の援助、モニエ士 ❖ 司祭コングレガニストの援助 ❖ マルク・アルノザン、ケンテン・ルストー、アントワン・フェイ ❖ 婦人たちと女子青少年 ❖ その自由な援助 ❖ 修道者養成の使命 ❖ 福音の勧めの実践 ❖ レタの創立。

シャミナード師によって指導され、計画された様々な活動のリストを一べつする時、ただ一人の人がどのようにこのような活動を遂行出来たか不思議に思われます。シャミナード師は、もしだれかに助けられなかったなら、すなわち、司祭や創始者としての職務から完全に排除されない様々な雑用から解放され、重荷を分かち合うため、あらゆる年齢の人々、あらゆる階層の人々の協力がもたらされなかったなら、その事業は事実成功しなかったし、その活動も平凡な結果しか得られなかったに違いありません。

父親の会アグレガシオンの献身は賞賛に値するものでした。それは、彼らの固有の職務やその身分からの様々な要請のため最高に多忙な人々からもたらされた奉仕だったからです。アリヌイという平凡な指物師はその時間とすばらしい熱意を職人の部門のコングレガニストたちにささげました。金物師のルストーは刑務所訪問の責任者になりました。父親の会で最も裕福なメンバーはモラルと財政の面から義務的に会の活動を支えることを欠かしませんでした。銀行家のボンメ氏、豪商のシャンジョール氏(1)、そして、バルディネ氏はシャミナード師の友情に鼓舞され、熱心に資金面で会の活動に奉仕しました。1802年、父親の会アグレガシオンの創立者の一人で、セン・ルーベ市の旧市長ラポーズ氏はわずかなぶどう畑の世話のみで、その余生をコングレガシオンへの奉仕にささげました。氏は、加盟コングレガシオンへの信心及び熱誠の励ましの手紙でこれを支え、護教やモラルの話しや長い経験の結果を伝えていたからでした。

父親の会アグレガシオンからもたらされた様々な援助の中で最も積極的で、最も貴重な助けは弁護士ダヴィド・モニエの支えでした。彼はシャミナード師の取り巻きの友人の中でも親しくダヴィド先生と呼ばれていたほどで、アグレガシオン及びその関係活動の中心人物でした。しかし、その役割はそれだけに限られてはいませんでした。シャミナード師は、コングレガシオン廃止の時期に秘書として仕えていたご存じの老ダヴァッス氏を失っていたので、その代わりにダ

ヴィド氏を迎えることになったのです。ダヴィド氏はこの時以来、その時間、文筆、言動等、すべての活動をシャミナード師とCongregacionにささげられました。彼は様々な規則を提案し作成し、公式文書やシャミナード師の私信の一部の発送を引き受け、加盟Congregacionを視察し、世事全般の交渉に当たりました。彼はシャミナード師の友人であり、忠実な助言者でした。彼の意見は必ずしも常に適切ではありませんでしたが、重みがありました。その意見の根拠が広範な知識に裏付けられていたからでした。

Congregacionの司祭たちはシャミナード師を援助するにやぶさかではありませんでした。彼らの英知と見識が毎日ますます宣教活動に示されていたからでした。1803年の昔の協力者はもうわずかしか残っていませんでした。彼らの帰天や、ボルドーからの離脱によってその仲間意識が薄れていたからでした。ラクロワ師やベルジュ師及びその他の人々は帰天し、司教総代理のボワイエ師もやがて帰天しました(1818年)。ローザン師はフランス黙想司牧会を設立しました。この設立によって師は完全に生まれ故郷から引き離されました。しかし、その空席は新しい世代によって埋められました。若い世代のグループはCongregacionによって激励され、そのお返しにより献身的な援助を指導司祭に与えたからでした。例えば、青少年の霊的指導でシャミナード師を援助したダスヴェン師であり、ジルー兄弟司祭でした。兄のエミール師(2)はボルドーの小学校の校長になり、弟のマルマン師(3)は、後ほど師自身述懐したように、もし、25歳でボーヴェの大神学校の指導に任命され、同市の司教に選任されなかったなら(4)、シャミナード師から決して離れなかった方でした。また、シャルトロン師のCongregacionを指導していたリガニオン師や独自の活動の責任の地位にあったにもかかわらず、Congregacionの夜間講座の成功に大きく寄与したノアイ師も同じでした(5)。

これらの若い司祭たちのだれよりも、指導司祭シャミナード師の精神を持っていたグードレン師は質朴にシャミナード師に従い、出来る限り自らの時間と熱誠をCongregacionにささげていました。グードレン師はCongregacion廃止前Congregacionの会長であったことが伝えられています。師は当時から教区の黙想指導者になり、雄弁家の評判があり、その聖職が求められていた教区の各小教区ばかりでなく、Congregacionにも恩恵をもたらしました。ボルドー教区に幾つかの新しいCongregacionを進出させたのは師の熱誠によるものでした。そして、師はこれらのCongregacionを支えるためにも、また、マドレーヌにおける黙想の指導のためにもしばしばシャミナード師の援助を求めました。師はシャミナード師に何も拒まず、もしみ摂理によって他の召命に導かれなかったなら、シャミナード師の活動にもっぱら献身したに違いありません。師は優れた適性によって若年にもかかわらずボルドーのろうあ学校の校長に任

命されました。ここで素晴らしい成績を上げたので、1822年にはシカール師の帰天に伴って、パリの王立ろうあ学校長に任命されましたが、謙そんな師はこれを断りました。しかし、政府の役人のように行動していたアレックス・ドゥ・ノアイがシャミナード師にその説得を要請しました。こうして、グードレン師はパリのろうあ学校長に任命されました。師は後ほどイエズス会に入会しました(6)。

シャミナード師は青少年の中に無数の協力者を持っていました。熟練した指導司祭であった師は好んですべての善意の人々を協力させ、同時にその才能と身分によって確かな感化を保証する人々に宣教の精神を教え込んだからでした。師は一般のコングレガニストにはむしろ独自の使命を委託していました。そして、会の全般的指導には補佐たちの団結を恐れませんでした。

各補佐は使徒にならなければならず、事実使徒になっていました。コングレガシオンの活動に効果的な役割を演じたすべての補佐を列挙することは出来ませんが、その協力が最も印象的であった人々には特に言及しなければならないと思います。そうした補佐たちの名簿の筆頭には、旧会長で最年長者のジャン・バプティスト・エステブネ氏が当然挙げられなければなりません。1814年に彼が再建されたイエズス会への入会を申請した時、ドウ・クロリヴィエール師は彼に在俗での修練を命じました。そこで彼はこの期間を利用して、修道院に入った後も続けられることになる多くの慈善事業に励みました(7)。ムニュ通りの師の学校は正にコングレガシオンの一部門でした。この学校で教えていたジャック・ブルニオン・ペッリエール師は、コングレガシオン廃止前はフィジャックの高等中学校のラフォン師の同僚の一人でした。次に、シャミナード師に全面的に協力していた若い司祭たちは、ガストン・ドウ・ラボリ師、そして、特に、ジャン・バプティスト・ララン師で、ララン師は素晴らしい才能に恵まれ、日曜日のコングレガシオンの集会では評判の講演者でした。

王政復興当初、最も熱心な補佐の一人であったジャン・バプティスト・ギタールは1821年8月、若い盛りに主に召されました。また、二人の優れた会長ジャン・クラヴリとジャン・フランソワ・マリー・ラグランシュリも1824年から1825年の数箇月の間に同じような若さでコングレガシオンから神に召されました。彼らの一人は現職の会長でした。彼らの徳の熱誠の記憶はコングレガシオンの中に生き生きと長く伝えられるに違いありません(8)。この時期のその他の会長たちも優れていたことで評価に値たいしました。聖職者としての大きな期待を寄せられていたコリノー師は1818年に同僚の全会一致で会長に選ばれていたからです。また、ピエール・デルペシュは1820年に、シャルル・ランゴロワは1823年と1825年に会長に選ばれていたからです(9)。最後に、完全な献身者と呼ばれていたマルク・アルノザン、ケンテン・ルトー、アントワン・フェイの3青年は個人の

利権をコングレガシオンのものにし、また、コングレガシオンの活動のために自らの時間、自分自身、そしてその財産から解放されるため家庭を作らないという点で極めて宣教精神の充実した人たちだったからです。

最初の二人は帝政時代から熱心に活動し、生涯その活動を中止することはありませんでした。マルク・アルノザンは、大革命の間信仰のために多くの危険に立ち向かったアルノザン家一族の一人でした(10)。1801年にコングレガシオンが創立された時、彼は共和国軍の兵役を終えて帰還したところでした。やがて、彼はコングレガシオンに受け入れられ、このことを隠すようなことはせず、善行の実践に堅忍することになりました。彼は使徒的熱誠とその才能によって、1804年から会長職に選任され、その後もしばしば同職の職務を果たしました。

帝政下で彼はコングレガニストの模範であり、支えでした。しかし、王政復興の時代にはその役職がその手に余るもにになったので、その職務から解放されてコングレガシオンのために生涯をシャミナード師の意向に委ねました。彼がどのようにその決意を表明したかその説明を彼自身から聞くことにします。1826年に次のように書き送りました(11)。

「天の元後にささげられたコングレガシオンの幸福のためにわたしのすべてをささげるため世を捨てることは、天の元后が望まれたことであり、このことを理解することは天の元后が好まれたことです。この勧めはわたしにとって義務になりました。わたしはコングレガシオンの活動のみに専念し、自らの救いと兄弟たちの救いを熱心に配慮するため様々な活動から全面的に手を引きました。わたしは12歳の時からコングレガシオンの活動に全面的に献身して25年が過ぎました。こうして目下熟年に達しました。わたしはこれまで得た経験に対して兄弟たちに深く感謝しなければなりません。」

さすがに彼は疲れ切っていました。このことは会長職を理解することから判断されます(12)。彼は次のように続けました。、「わたしはまだ現役の会長です。わたしのため、そして、これらの青少年のため神に祈ってください。コングレガシオンの会長には何と多くの心配や心遣いがあることでしょう。どんなに多くの青少年を助けなければならないことでしょう。この事は迷路のように冷静さを失わせませす(13)。」

ボルドーのコングレガシオンの発展に絶えず専念していたアルノザンは、加盟コングレガシオンにとっても摂理的な援助者で、父親の会の数名の会員とも親しく文通していました。彼はシャミナード師の巡回の時しばしば師に従い、時にはその代理をすることもありました。彼は最後まで疲れを知らない人でした。1844年にもなお評議員会に出席していたことが伝えられています。晩年になっ

て十分目が見えなくなった時、彼はコングレガニストたちに祈りを唱え、キリストの模範や聖人伝を読む手助けを求めということです(14)。

ケンテン・ルストーもその寛大さにおいて極めて優れた人でした。彼は信仰の人で、コングレガシオンにとってその謙そんや、誠実さはさることながら、その熱誠も卓越したものでした。彼はしばしば会長職を努め、多少勉学の面で不足があったにしても、優れた性格と徳の輝きですべての人に敬意の念を起こさせていました。兄弟のアレクシスとワランテンもコングレガシオンの発展のために同じ熱情を分かち合っていました。彼らはバス・ピレネ県の故郷コアラズにコングレガシオンを設立し、その財産の大半をこの活動にささげました(15)。

アントワン・フェイがコングレガシオンに入ったのはマルク・アルノザンやケンテン・ルストーよりずっと後でした。彼は1799年生まれで、パリで勉学を終えた後法学博士の学位を取得し、1823年ごろボルドーに帰ったからです。彼はシャミナード師に惹かれて宣教活動の手ほどきを受け、王政復興最後の年から、最も忠実な弟子の一人、最も積極的な協力者の一人になりました。彼は自由に法律の研究に没頭していましたが、この研究を放棄し、小さな相談室のみを残し、すべての収益をコングレガシオンの活動にささげました。彼は1827年以來しばしばコングレガシオンの会長に選ばれ、コングレガシオンの当初の精神の維持に特段の配慮をなし、シャミナード師の帰天後は、好んで恩師の生涯の特色を青少年たちに伝え、読み聴かせ等していました。また、彼は極めて熱心に慈善事業に専念していたので貧者の恩人として知られるようになりました。刑務所の訪問をコングレガニストに禁じた7月政府もこの代訴人フェイには除外しなければならないほどでした。ご存じの通り、ボルドーにセン・ヴェンセン・ドゥ・ポール会議やセン・フランソワ・レジ運動の設立に最も貢献したのはこの慈善家でした。1882年の帰天まで彼は忠実に慈善事業を継続しました。

シャミナード師の協力者の何名かを読者にまだ紹介していませんでしたが、当然のこととして女子青少年コングレガシオン関係グループの熱誠やその関係活動を支えていた婦人たちの協力者たちを紹介しなければなりません。不幸にして、資料不足のため次のような氏名しか記することが出来ませんでした。黙想の婦人会関係協力者は、デルボ夫人、バアン夫人、エリッサガレ夫人、ソウティロン夫人で、女子青少年コングレガシオン協力者は、ラコンブ嬢、シャンヌ嬢、ラブランシュリ嬢、そして、アンリエット・ビドン嬢でした。以上の協力者の中で、ラコンブ嬢だけについては幾分知ることが出来ました。それは、シャミナード師の両修道会創立前の通信の断片に幾つかの資料が保存されていたからでした。ここで分かったことは、ラコンブ嬢は女子青少年コングレガシオンの会長であったドゥ・ラムルス嬢の後継者になったということですが、残念なことに

その他の協力者については何も知ることが出来ませんでした。次は1811年10月24日のコングレガシオンの廃止についてシャミナード師はどのようにドウ・トランケレオン嬢に伝えたかのくだりです(16)。「ラコンブ嬢は女子青少年に立派な影響を与えています。彼女は自分に近づくすべての女性たちを信仰と徳の実行に導いています。その内の何名かはしばしば彼女に会っています。彼女は彼女たちに母親のように見なされ、信頼され、親しまれていたからでした。」次のくだりは神に選ばれた彼女の臨終についてのシャミナード師の言葉です(17)。

「ラコンブ嬢は1814年1月23日に帰天しました、というよりむしろ、彼女は待望の命を生き始めました。彼女の徳は生涯の終わりに当たっても少しも変わらず、弱まることはありませんでした。彼女が苦しみのため絶えられなくなったように思われた時でも、わたしたちは皆、彼女は苦しみの中で味わう幸せ、天国に行く喜びを決して顔に表わさないようにしていると考えていました。彼女は生涯、償いに飽きることなく、屈辱を恐れることがなかったからでした。彼女は死の時が日一日と日延べになるのを思って、内心誇らしい喜びを感じていました。それは天国に出発する前更に苦しむことが出来ると思っていたからでした。彼女は1箇月近くひどい激痛を味わいました。最後の8日ないし9日間は介護のシスターの手助けがなければ身動きも出来ませんでした。介護のシスターが最後に気づいたことは、病人はわたしの見舞いのおおよその時間が分かると寝返りを打たせてもらっていたとのことです。それはもっと苦しむため、そして、わたしに会う喜びを犠牲にするためでした。ずっと以前から彼女は毎時間十字架の道の1留を黙想していました。最後の3週間は各留ごと女子青年コングレガシオンの各部門のためにその苦しみをささげていました。わたしは、コングレガニストたちの救いのためにこれほど積極的で、不屈の熱誠の人に会ったことはありませんでした。すばらしいつつましさと深い謙遜に包まれていた彼女は、数年前からコングレガニストたちを教化し、励まし、色々世話をし、そして、彼女たちのために祈ることに努めていました。」

これほど多くの、そして、大きな心配に捕らわれていたシャミナード師の周囲には善意の人々が不足することはありませんでした。彼女たちはもっぱらシャミナード師に激励され、その統一した指導によって各自ふさわしい領域の中で活動し、全員全体の繁栄のために協力していました。もちろん、反対も予測出来ていました。シャミナード師は絶えず拡大していった活動領域を一人でまとめるのに際限なく苦しんでいたのではないのでしょうか。師の指導手段が適切であったからこそ、相互に独自の意見を持っていた会員間の一致を実現することが極めて困難であった見解の一致を確立することに到達出来たのではないのでしょうか。もし、師の上に不祥の事態が起きた場合だれがその重要な遺産を継

承出来たでしょうか。

シャミナード師はこうした考えに悩まされていました。このことはコングレガシオンに関する覚え書きのくだりに表明されました。コングレガシオンの指導者が維持しなければならない特性を列挙した後、次のように付け加えたからです。「更に述べなければならないことは、決して死なない人が必要だということです。」問題は遠く離れたコングレガシオンの問題ではなく母体コングレガシオンの問題だったからです。この母体コングレガシオンは、言わば世界的宣教活動をしている全加盟コングレガシオンの中枢をなしていたからです。したがって、この死なない人という言葉は何と意義深い言葉だったでしょう。もちろん、「死なない人」など存在するはずはありませんが、シャミナード師の考えは、自らの内に生命の源泉と継続性を持った修道会を指していたのです。したがって、世に対する気遣いから完全に解放され、もっぱら宣教活動に専念し、自らのように、修道誓願のきづなによって相互に結ばれる協力者を集めることを考えていたのは当然なことでした。

こうした考えは、シャミナード師が修道者の身分に特別の魅力を感じていた間ずっとあたためていた意向だけに一層親しいものでした。師は14歳の時から修道会の重要な任務を考えていたのではないのでしょうか。したがって、この青年の熱情が師を方向づけたのではないのでしょうか。たとえ様々な事情によってこの希望の実現に障害がもたらされたにしても、師は、少なくとも60歳になるまでなぜ修道会の犠牲的で清貧、そして、隠れた生活を導入しなかったのでしょうか。師にとって修道者の身分は「キリスト教の完成、すべてを放棄して見だし、すべてを売って買い求める隠れた宝」でした(18)。師は修道会が教会にとって不可欠のものであることを知っていました。福音は完全に適用されなければならない、しかも、フランスにおける修道会の再建は大革命以来最も必要なものであることを疑わなかったからでした。弟子の一人は次のように語りました(19)。「シャミナード師は、フランスのキリスト教は修道会の復興によってしか確実に再建されないに違いないという考えに徹していました。師は、キリスト教諸徳の完全な実施は修道誓願にしかないことが分かっており、もし、み摂理がキリスト教の再建を望まれるなら、キリスト教を国の基本的制度として復興するための試みを保証し、成功させるに違いないという強い確信を抱いていました。」この同じ弟子は更に証言しました。「サラゴサでの不思議な呼びかけを暗示させるこうした考えは、師の深い潜心と英知によってただ単に師にもたらされたものではなく、師が最初の数名の弟子に打ち明けられたように超自然的手段によって起こされたものでした。」

大革命以降宣教活動は困難になり、修道会は信用を失ってしまっていまし

た。それは哲学者たちの宣伝によってばかりでなく、1765年(20)に創設された不幸な「修道者に関する委員会」が何も抑制せずかえって悪化させた、権限の乱用によってでした。結局、憲法議会が介入し、法令によってフランスの国法から修道誓願及び修道会会則の法律上の認可を抹消してしまいました。そこで。与えられた自由につけ込んだ大半の修道者、すなわち、多くの修道生活離脱者たちはこれ見よがしに市民憲章誓約聖職者の仲間を増加することに加担し、誓願放棄の結果にならざるを得ませんでした。

「神の正義の目撃者(21)」であったシャミナード師は、フランスに帰国して以来、男子修道会の再建をすることが出来ませんでした。それは、共和歴12年收穫月3日(1804年6月23日)の執政官令で、当局の許可なく男子の新修道会を創立することが厳しく禁じていたからでした。しかし、師は女子修道会の共同体の創立に専念することが出来ました。事実、修道女たちはみ摂理の働きによって寛大に取り扱われ、1806年から公式に認可されるようになりました。男子修道者たちが経験したことは違って、ほとんどすべての修道女が1790年代におけるようにその誓願に忠実だったからでした。一方、師が当てにしていたドゥ・ラムルス嬢の協力も十分ではなく、他方、目指していた両修道会の創立のためにも神のおぼし召しの時がまだ到来していないことが感じられました。したがって、師は出来る限り旧修道会の再建に全力を尽くすことで満足していました。こうして師は1805年からナポレオンによって黙認されていたキリスト教教育修道会や師が支援していたコングレガシオンから召命を募集した各種女子修道院をボルドーに再建することに寄与しました。

忍耐強く待っていたシャミナード師は状況の許す範囲で将来の修道会の創立を準備することが出来ると信じて疑いませんでした。たとえ、コングレガシオンの中に修道共同体をそっくり創設することが出来ないにしても、少なくとも、福音の良き種を普及すること、彼らの普段の活動を中止させることなく固有の宣教活動にエリートの何名かを投入すること、そして、共通の精神によって彼らを活気付ける多少とも親密なきずなによって相互を近づけることさえ出来るに違いないからでした。

この構想はコングレガシオン創立の当初から少なくともその第一部が実現されていました。すなわち、師は当初からコングレガシオンの各種部門に、私誓願によって献身し、指導司祭の宣教活動に協力して寛大に犠牲を受け入れることが出来た人々に出会っていたからでした。神学校やキリスト教教育修士会、そして、ボルドーの各種修道会が司祭や修道者の召命をくみ出したのはシャミナード師のコングレガシオンの中ででした。更にまた、1806年にコングレガシオンの活動が一時的に停止されようとした時、シャミナード師が12人のエリートグ

ループの選定を意図したのもこの同じコングレガシオンの中ででした(22)。

シャミナード師は、多少とも均整のとれたグループを作るために精選したコングレガニストたちをどのような時期に統合し始めたのでしょうか。このことを確認出来る状態の資料はありませんでした。既に確立されたグループを初めて伝えた二つの資料がありましたが、一つは青少年に関するもので日付がありませんでした。もう一つは1812年の日付の女子青少年に関するもので、多分に以前の組織を含むものでした。

次に掲げるのは女子青少年コングレガシオンの規則の写しです。

「後ろ盾：十字架、4福音書、霊戦、信仰と才能に匹敵する知識。__誓約：すべての祈りは共同で行う。この一体感は常に生かされる。祈りの継続、み摂理のおぼし召しによる居住の遠近、年齢、地位、どのような境遇、死さえもこの一体感をなくすことは出来ない。一人の退会者によって苦痛が感じられても、全員の祈りの意向から彼を除外することはない。__実践：すばらしい誠実さ、温和で堅実な性格、秘蹟の頻繁な拝領、神の光栄のための熱誠、聖なる乙女マリアの保護に対する優しい信頼、聖ヨゼフに対する交唱、『これこそ忠実にして賢明なしもべ…』、4福音書の順序に従って福音の何行かの朗読、晩、短い良心の糾明、昼、次の射とうを心の中で唱える。『いと正しく、いと尊く、いと優しい神のみ旨がすべてにおいて永遠に誉めたたえられますように』。この時刻、神のみ前で相互の献身の思い出から来る喜びを味わうためしばらくの間全員で同じ思いにしたる。」

個人の誓約には問題ありませんでした。その誓約が相互に異なっていたからであり、指導司祭としか関係していなかったからです。その上、この最初のグループは11名の加入者でしかありませんでしたが、その詳細が伝えられていなかったからでした。女子青少年コングレガシオンに関しては様々な資料のおかげでその実情を最高に把握することが出来ました。最も興味深いのは1812年8月15日に、数名のコングレガニストによって署名された次の誓約文です。

「全能永遠の神よ、私某は、あなたのまなざしをそそいで頂くにふさわしくありませんが、あなたの無限の慈愛に身を委ね、あなたへの奉仕の希望に動かされ、至聖なる乙女マリア、天国の諸聖人、及びここに列席するすべての人々の前で、神と神の代理者である指導司祭及び会長(23)に3箇月の貞潔と従順を誓約し、この従順の誓約の導きの下に、わたしたちのグループの習慣に従って、女子青少年の幸福のために特別の配慮を持って働きたいと思えます。全能の神よ、甘味な香りのこのはん祭を喜んでお受け下さってわたしを鼓吹し、ただ今おささげすることをお許し下さった誓約を忠実に実行するお恵みをお与

え下さるよう、御子イエス・キリストの尊い御血の功德によってあなたの無限の御慈悲と御哀れみをお祈り申し上げます。」そして、署名がフェリシテ・ラコンブ、マリー・クレーシュ、スゴンド・ラブランシュリ、ハンリエット・ビドン、エリザベス・ポー、そして、マリー・レンヌの順でなされていました。

次のくだけは誓願文に述べられた誓願の意義を明確にしたものです。

「次の場合は従順の誓願に背くことになります。すなわち、1. 長上を認めない時、あるいは、長上に背く時、2. 長上が神と従順の名によって命じても従わない時、3. 会憲に反対してこれを放棄し、他の会員にも会憲に背くよう仕向ける時。貞潔の誓願はもっぱら貞潔が禁じているすべての徳に及びます。貞潔の誓願は結婚生活に入ることを、また、どのような結婚であれその申し入れを受け入れることを禁じます。」

神にささげたこの「犠牲」は、その第一の目的は正に誓願による個人の聖化にあります。また、その目指す目的は宣教です。誓願には、「少女たちに特別な配慮をささげる誓約」が付加されているからです。これこそ、「コングレガシオンを生かす宣教精神」によって鼓吹された誓願の義務の特徴です。この精神自体は乙女マリアへの関心から流れ出たものであるから、マリアへの献身がより完全な生活に向かう決定的な基本になっています。

帝政末期の困難な状況下で唯一可能になったのはコングレガシオンの中に修道生活を組織するという試みでした。幸いなことにより平穏な日々が訪れることになりました。ちょうどフランスの教会が解放され、友愛と自由な環境の中でくつろぐことが出来るようになったからでした。スイス人作家ケレル氏は次のように述懐しました(24)。「流血と廃墟の中で窒息し、死滅したと思われたフランスの信仰は至る所で新しい根を張り、17世紀の宗教復興が報じた活動より豊かで華やかな活動の花を開花させました。これこそ、冬の寒風によって枝々が裸にされ、枯葉が散らされた樹木であり、春の太陽の下で緑に若返った樹木でした。」また、ヨゼフ・ドゥ・メートル氏が次のように述べたのも当然なことでした(25)。「完全に消えてなかったフランスの信仰の精神は山々を移す奇跡を行うようになるに違いない。」

再建された旧男子修道会、そして特に女子修道会は試練に耐えて若返り浄化されていました。ボルドーでは、教皇教令 *Sollicitudo omnium Ecclesiarum* (1814年7月31日)によって復興されたイエズス会が小神学校を運営することになりました。それから数年後(1824年)、トラピスト会士がそのすばらしい徳の模範によって市の人々を教化することになりました。シャミナード師はヨゼフ・ブエ師を会員に加えたトラピスト会士に熱心に協力しましたが、こ

の件に関しては後ほど触れることにします。帝政下の市内にはいくつかの旧女子修道会が再建されていました。その中の一つに、福者ジャンヌ・ドゥ・レトシナックによって17世紀にボルドーで創立され、王政復興当初繁栄していたノートルダム女子修道会がありました。シャミナード師はこの修道会の再建に協力しました。師は、1821年に修道共同体として再建した同修道女たちの聴罪師となり、彼女たちを指導していたからです(26)。

ボルドーにはこれら旧修道会の外に新しいコングレガシオン修道会が創設されていました。それらは、ドゥ・ラ・リセツトリ夫人及びレピオール師によるマリー・テレーズ修道会、セン・ミエル教会の主任司祭スプール師によるキリスト教教義修道女会、そして、ノアイ師によって創立された聖家族修道会の7系列の一つになったロレット修道女会等でした。シャミナード師は前記修道女会の内、キリスト教教義修道女会とロレット修道女会の指導に協力しました。こうして、女子青少年コングレガシオンから修道女会に多くの召命を提供しました(27)。

サラゴサでみ摂理によってシャミナード師に委託され指示された事業の着手や計画の実施時期が到来していたのではないのでしょうか。状況は師に好都合のように思われました。それは師に信頼する多くの献身的な協力者がいたこと、また、政府の好意的な寛大さが保証されていたように思われたからでした。すべての事柄が、行動すること、しかも、急いで行動することを勧めているように思われました。このことに関して、弟子の一人は次のように伝えました(28)。「師はルイ18世によって確立された立憲政体の安定性には少しも信頼していませんでした。しかし、師は活動を強化し、最終目的に到達するためにこの恵まれた時期を利用することを極めて熱心に目指していました。」主要な協力者間で結ばれていたきずなを固めること、彼らによってコングレガシオンの永続を、あるいは、少なくとも現在コングレガシオンが行っている善の永続を保証すること、そして、み摂理が望まれる所にはどこにでもこの宣教活動を普及すること、一言で言えば、マリアに完全にささげられた軍隊を無原罪の御宿りの乙女マリアに奉仕させること、これこそが師の目的でした。しかし、目的に到達するための手段の決定が残されていました。

シャミナード師はこのような計画を急激に実施に移す人ではありませんでした。師は行動する時期が到来したように思われても徹底的に取り組む前に神の意志の印が示されるのを待つ決意をし、その正確な指示を待ちながら成功することが考えられる予定の期日に向けて慎重に行動することを考えていたからでした。したがって、協力者のだれにも修道共同体の設立については伝えず、既に存在していた在俗の男子共同体や女子共同体に、より堅実で、より規則

正しい生活の指導に努力していました。

このことから、師は修道会への円滑な移行を考えるばかりでなく、なおより決定的な他の目的を熱心に求めました。まず、数名の新メンバーで共同体を作ってもコングレガシオンの中で堅忍出来るに違いないと考えました。家庭の義務や何らかのその他の理由で在俗にあって福音の勧めを實踐している寛大なコングレガニストがいることを考えればそのことは当然だったからでした。師はこの点について明確に次のように指摘しました。「この修道会は、コングレガニスト修道者グループの共同体が組織されていても常に生き続けることが出来、その召命や進むべき方向を見いだすことが出来るに違いありません。」

他方、__この観点が基礎になりますが__ シャミナード師はかつての啓示によって将来の修道共同体をおぼろげながら考えていました。したがって、当時の師の修道生活に対する概念は他の修道会創立者の考えとは多少異なっていました。このことは前述の通り(29)、弟子の一人が次ぎのように伝えていたからです。

「Nova bella elegit Dominus. シャミナード師は常日頃この標語を繰り返していました。新しい敵に対しては新しい武器が必要だったからでした。大革命がそれほどの憎しみをもってすべての修道会に対処したごう慢な時代に直面して、師は困難な障害に遭遇しないためにはどのように配慮をしなければならぬか分かっていました。最も困難に思われたことは修道服とすべての典礼の行事でした。しかし、修道精神はこれらの外面的な事柄がなくても維持することが出来、また、避けがたい先入観もこれを刺激することなく、積極的な感化を及ぼすことが出来ると考えていました。」師は次のような考えを固めていました。それは、「大革命中、在俗生活の修道者や修道女の養成に努力した優れた人々、これは師の独自の表現ですが(30)、について学んだからでした。師はラテン語で記され、印刷された在俗修道者の規則を見いだしたのでそれを活用することにしました(31)。それは、コングレガシオンの精神にこれらの規則を適用すること、時代と経験の協賛を得たこの規則を彼らに提供することが固有の意義の修道共同体の創設を準備するため、師にとって最も効果的な方法の一つに思われたからでした。いずれにしても、両方の精神は同じであり、共同生活の要請によってその組織も異なることになるからです。」

こうして、シャミナード師は引き続きいくつかの会則を考察して在俗修道生活の会憲を少しずつ完成するよう試みていたことが伝えられています。その後の事業の創立の観点から、これらの試みにある重要性にもかかわらず、これを詳細に分析することは出来ませんが、その試みの基本的特徴を把握するため

一般的で簡潔な一べつを加えることは大切なことのように思われます。

シャミナード師は、まず、その弟子たちの意図する修道生活は正にコングレガニストの身分の完成あるいはその開花であるということを次のように説明しました。「コングレガシオンの中で組織される修道者の身分は乙女マリアへの献身を全面的に果たす最高の方法です。」したがって、この身分の精神はコングレガシオンの精神でもあり、マリアへの完全な献身の精神であり、そして、布教の精神であり、シャミナード師の表現によれば、「宣教精神への参加」でした。コングレガニスト修道者はマリアへの献身の意義をより深く推進するという精神においてしか一般のコングレガニストと変わりません。すなわち、「マリアへの献身はコングレガニスト修道者を福音の勧めの実践に導きますが、一般のコングレガニストはおきての実践によってもっぱらマリアを経てイエスに向かうのです。」

コングレガニスト修道者はまず宣教活動に専念しなければなりません、それはコングレガシオンのためであり、その繁栄のためであり、そして、その熱誠のためでもあります。いずれにしても、コングレガニスト修道者は、修道生活の基本的目的、すなわち、「キリスト者の増加」を見失わないよう会則に忠実でなければなりません。したがって、彼らは、「何らかの形で修道会の目的に一致するどのような活動も無縁なものとは見なしてはなりません。」

誓願は従順、貞潔、そして、熱誠の誓願でした。もちろん、誓願の義務はあいまいさを招かないため、また、ためらいを生じないために厳密で明確なものでした。熱誠の誓願の義務は次のように規定されていました。「(コングレガシオン)の職務、指示、在俗の身分と両立出来る任務や上長によって命令された任務を拒絶する時この誓願に背く。」更に、この誓願の範囲は個人によって異なっていました。個人の立場が同一でなかったからです。在俗生活と両立出来ない清貧の誓願は明白に宣立しませんでした。しかし、次のような清貧の精神を約束しました。「個人は何物も所有せず、使用せず、その財産を増殖しない。ただし、従順によって命令される場合はこの限りでない。」

レタ(コングレガシオンの中の修道会を略してこのように呼んでいました)は学識経験者や無学者、聖職者や信徒等、各階層の人々から構成されていました。したがって、会則にはこのことが明確に記載されていました。生活は共同ではなく、相互の関係は自白忠告会を伴う毎週一回の集会、何らかの共同の活動、そして、特に、毎日午後3時にマリアと一致して十字架の下にたたずむことに限られていました。

以上が王政復興の当初シャミナード師が心にかけていた全体的な構想でし

た。師は少なくとも男子青少年、女子青少年、そして、黙想の婦人会の三つの系列のコングレガシオンにこの構想を実現しました(32)。父親の会のアグレガシオンに青少年コングレガシオンより明確にレタが組織されていたかどうかは分かりません。コングレガシオンの中のこうした小さな組織の構成や実際上の運用については次章で検討したいと思います。

この組織は、在俗での福音の勧めの実践の試みとしてコングレガシオン同様永続するに違いないと思われました。事実、本章の初頭に触れたように親しくこのグループに属していた大半の協力者は決してマリア会にも、汚れなきマリア修道会にも入会しませんでした。シャミナード師の指導の下に、コングレガシオンのために継続して宣教活動に従事しました。特にそれらの人々の中には、マルク・アルノザン、アントワン・フェイ、そして、ルストー3兄弟が数えられました。彼らは結婚生活に入ることを希望せず、貞潔の誓願を終生、あるいは、少なくとも絶えず更新することを誓約していました。

レタはコングレガシオンの中に正式に組織され、設立されたものでしたが、その存在は短命でしかありませんでした。それはより完全な修道会への準備段階の組織であり、ステップに過ぎなかったからでした。シャミナード師はこのことを予期して、会則の第1条に次のように記しました。「青少年にとって十分可能なことは、生涯にわたってコングレガニストの召命を生きるために献身するコングレガニスト修道者の共同体が創設されるなら、レタのメンバーとして修道生活を準備することも、在俗で福音の勧めの遵守を誓約することも可能であるに違いありません。」

このレタは予期に反して一時的なものでしかありませんでした。それは実践において、最も深刻な困難に遭遇したことが経験によって証明されたからでした。指導司祭は、他の多くの業務とのかかわりの中で、個人的規則の相違からもたらされた障害にどのように対処したのでしょうか。また、まれにしか会わない会員たちにレタの精神をどのように維持させたのでしょうか。更にまた、会員の不信やねたみを刺激することなく、特にレタから選び出した補佐によるコングレガシオンの指導をどのように成功させたのでしょうか。師はコングレガシオンの会則の改訂の際、この最後の点に関して決定的な経験をしました。シャミナード師はレタのメンバーだったコングレガシオンの旧会長の集会で、今後は「レタのコングレガニストとして認められた者」、すなわち、福音の勧めの実践に献身したコングレガニストのみが評議員会を構成するようにしたいとの希望を表明しました。しかし、この計画には何らの反響も得られず、かえって大きな反対を引き起こしたので、師はこの計画を撤回しました。

人間的な意志よりもみ摂理の啓示による様々な理由によって、この一過性的な組織もやがて堅実で決定的な組織、すなわち、修道共同生活の組織に変えられることになりました。まず、女子青少年コングレガシオンのグループ、次に男子青少年コングレガシオンのグループでの修道共同体への移行について検証したいと思います。この順序は当時行われた移行の順序によるものです。



注

(1) ピエール・シャンジュールはボルドーの富裕な人々の一人でした。彼らは大革命の時罰金を支払うことによって処罰を免れることが出来ました。10万フラン支払いました。ヴィヴィ著、「恐怖政治史」、354ページ参照。

(2) ジャン・ポール・エミー・ジヌー師は1793年に生まれ、1833年にボルドー教区の司教総代理に就任し、1870年に帰天しました。

(3) それはシャミナード師の弟子たちによって司式されたメルル孤児院のチャペルの献堂式の時でした。1864年6月4日。

(4) ジョゼフ・アルマン・ジヌー師は1799年に生まれ、1812年にボーヴェの司教に任命され、1878年に帰天しましたが、教区に大きな愛徳の不変の足跡を残しました。

(5) ピエール・ビエンヴェヌ・ノアイ師は1793年10月27日に生まれ、1861年2月8日に帰天しました。師はマルトグット師によるキリスト教友の会の創立者(230ページ参照)の一人でした。聖職の召命を感じていましたが、パリで法律を学んでボルドーに帰りました。彼がシャミナード師に協力したのはセント・ユラリ教会の助任司祭としてでした。彼はやがてシャミナード師の修道会創立に全面的に協力することになりました。このことは後ほど本書の30章で触れる機会があると思います。

(6) 師はより宣教生活に召されていることを感じ、パリには長く滞在しませんでした。1824年からボルドー教区信徒の黙想会を指導し、コングレガシオン廃止後1832年にイエズス会に入会しました。親しく人々の協力を得て長い間宣教活動に従事しましたが、1863年5月日にツールズで帰天しました。師は1778年10月19日の誕生でした。(イエズス会エロール師提供の覚え書き)

(7) ジャン・バプティスト・エステブネは1777年8月20日ボルドーに生まれ、36年間ボルドーで最も評判の寄宿学校の一つを指導しました。1831年にスペインのパスサージュ校でイエズス会の修練者として認められ、ミランやアヴィニオンで修練期を過ごし、生涯の最後の12年(1836年-1848年)間はボルドーで過ごしました。前期学校の会計係で帰天しました。(イエズス会エロール師の覚え書き)

(8) コングレガシオンの部屋に飾られていた絵画は、友人のコングレガニストに囲まれて帰天したジャン・クラヴリを描いたものでした。彼はマリアへの奉獻文を手にしていました。穏やかな顔は熱心に奉仕した聖母マリアへの信頼を表していました。

(9) ボルドー近郊のセン・オーベンのキュジュック城の地主であったシャルル・ラングロワ

(1802年ー1874年)は、勇敢な海賊ユーゼン・ランゴウロフの子息でした。ユーゼンは大革命や帝政時代に英国海軍と戦ったが、決して捕虜にはなりません。彼の名はボルドーのある通り名になっています。

(10) ミシェル・アルノザンの教会は恐怖政治の間、市内の教会でも最も参拝者の多い教会の一つでした。H・リエヴル著、「ウルスラ会」、37,43ページ以降。

(11) オーシュのコングレガシオンの会長への手紙、1826年2月16日

(12) 1826年2月16日の同じ手紙

(13) 親類のアルノザン嬢が語った次の逸話のように、彼が示した勇気と配慮の模範が考えられます。「彼は兵役に服役していた時、後の芸術家ラフォンと親しくなりました。ラフォンの才能は悲劇作家タルマ氏から評価されるほどでした。アルノザンはラフォンの才能を見込んで劇作家になることを勧めました。アルノザンはこの時までまだ改心していませんでした。その勧めに従ったラフォンはずっと後になってボルドーに一大演劇を上演するために来ていました。マルク・アルノザンは友人の演劇の見学にあこがれていましたが、コングレガニストたちに悪い影響を及ぼすことを恐れてこれを欠席する勇気を持っていました。

(14) エージンの薬剤師デュラン氏の回想録によれば、マルク・アルノザンは1858年9月7日に帰天したということです。

(15) これらの案内はルストー兄弟の甥のデュラン氏の好意によるものでした。ケンテン・ルストーは1861年6月3日に帰天しました。このルストー兄弟と前記256ページの金物商のルストーと混同してはなりません。これらの二つの家族は異なった家族でした。

(16) 前記207ページ、ドゥ・トランケレオン嬢への手紙

(17) 1814年3月末、ドゥ・トランケレオン嬢への手紙

(18) 修道者の身分に関する覚え書き

(19) ララン師による、「歴史概要」、3, 4ページ

(20) 「修道者に関する委員会」は修道院を改革するためにフランスの聖職者会議によって設立されました。しかし、この委員会は善よりも悪、つまずきをもたらす以外、何ら役にたちませんでした。この件に関してはバルディシュ著、「修道会辞典」、4巻の序文に参考になる詳細が見いだされます。(ミヌ叢書、22ページ以降)

(21) 「修道会辞典」、4巻記事743。シャミナード師は弟子たちへの講話で、様々の修道院を没落させた不幸は、特に清貧のゆるみであったことを指摘しました。

(22) 前記196ページ参照

(23) グループの上司

(24) ケレル著、「フランスのコングレガニスト修道者」、32ページ、1880年、パリ。フランスのコングレガシオンの復興に関しては、テーヌ著、「新政体」、2巻、3章のすばらし

いくだり参照してください。そこには、混乱から解放されて力強く発展する修道会が示され、そうした活動の特色が見事に描かれました。

(25) ボナール司教著、「1901年のフランス教会」142ページ

(26) H・ルリエヴル著、「大革命期のボルドーのノートルダム修道会」、226ページ以降、1900年。シャミナード師の書類に、ダヴィド士によって複写された福者ジャンヌ・ドゥ・レトナックの会則が発見されました。

(27) キリスト教教義修道女会の会憲がシャミナード師の検討に依頼されていました。また、友人のノアイ師によって創立されたロレットの修道女会はその名称と活動のためシャミナード師に親しまれていました。このことには後ほど(第30章)で触れることとなります。

(28) ララン師、「修道会辞典」、4巻、745項

(29) 同前、744項

(30) ドゥ・トランケレオン嬢への手紙、1815年9月7日

(31) シャミナード師がだれのことについて話していたかを知ることは出来ませんでした。1802年にボルドーで出版された作者不明の書籍で、「ジャン師の生涯と印象の要約」という表題の司祭についてのように思われます。このジャンという司祭は確かに在俗の修道司祭でした。シャミナード師は最後までこの本を特別の図書室に保存していました。

(32) 女子青少年コングレガシオン及び黙想の婦人会には、コングレガシオンよりももっと厳格な義務が課されていた中間の組織がありました。しかし、誓願を宣立するまではいきませんでした。それは、「マリアへの絶え間ない愛の会」や「マリアの10の徳の会」でした。後者の会則には次のように規定されていました。「本会は、自らの過失ではなく、何らかの理由で修道会に入ることが出来ない人々、また、ある修道院に入るための経験をなし、あるいは、これを準備する人々への入会を勧める。」そのグループで実践されていた献身は旧お告げの会の献身によるもので、聖母の10の徳、すなわち、貞潔、用心、謙そん、信仰、献身、従順、清貧、忍耐、愛、そして、御子の苦しみへの同情の諸徳をたたえることでした。

第 20 章 マリアの娘の会 (1816)

修道者の身分のコングレガニスト ❖ アデル・ドゥ・トランケレオン嬢の召命 ❖
シャミナード師との通信 ❖ アジャンでの創立の実情 ❖ マリアの娘の会の将来
❖ 最初の会憲 ❖ 共同生活の開始(1816年5月25日) ❖ 修道誓願とちっ居の誓願 ❖ 総長の任命。

1814年、女子青少年コングレガシオンの補佐の大半は福音の勧めの実践を意図した前述のレタの会員になっていました。彼女たちの誓願の期間は3箇月から1年と異なり、数名の会員が終生誓願の許可を申請していましたが、シャミナード師はこのことをだれにも望んでいませんでした。

しかし、数名の会員は在俗での職務を放棄し、共同生活への希望を表明していました。彼女たちの提案はシャミナード師を困惑させていました。それは、師自身修道生活の必要性の方向に動いてはいましたが、迅速に行動することをためらっていたからでした。しかも、情勢によっては決定的な決断を下すよう強いられることを感じていたからでした。師が一層とまどっていたのは、コングレガシオンの中に普及したこれらのコングレガニスト修道女たちは、コングレガニストの間で大きく評価を受けており、コングレガシオンの天使とも言われた彼女たちがやがて修道共同体を作り、世に現れることが短縮されるに違いなかったからでした。

いずれにしても、シャミナード師は、すばらしい事業のためにはその徴候がどれほど微弱であっても、事前に検討することなくこれを放棄すべきではないことが勧められていました。黙想の婦人会の一人で、貧しい階層出身でしたが有徳で、神から特別な恩恵を受けていたように思われた若い未亡人が、1806年6月以降、コングレガシオンに修道共同体を作るよう絶えず師に訴え、その創立の促進を延期しないよう要請していました。賢明な指導司祭のシャミナード師は、このような要請を続けてきたこの未亡人を試みるために何も答えませんでした。ただ、師もこのことの決断に確信を持っていなかったからでもありました(1)。やがて、師の気持ちをますます動揺させるような知らせがアジャンから寄せられました。ドゥ・トランケレオン嬢及び彼女の小さな会の最も熱心な会員が皆、修道共同体に入ることを決断し、この計画に対する師の協力を要請してきたからでした。

アデル・ドゥ・トランケレオン嬢の修道生活への召命には少しの疑念の余地もありませんでした。ご存じの通り、彼女は初聖体以来、少女時代からカルメル会入会への関心を示していたからでした。したがって、修道生活によって神に身をささげる志を決して放棄しませんでした。1806年には、友人の一人に次のように打ち明けていました(2)。「正に、イエス・キリストのしもべ、イエス・キリストの花嫁の資格がわたしの唯一の望み、唯一の喜びです。神に仕えること、自分を救うこと、これがわたしのすべての目的です。世の中を見れば見るだけそこの救霊はむずかしいように思われるからです。」1808年、彼女の計画は決定的なものになりました。彼女の父は彼女を在俗で身を固めさせることを考え、彼女を惹きつける似合いの人を勧めました。彼女はしばらくの間ちゅうちょしましたが、やがて、11月21日乙女マリアのご奉獻の祝日に、自分の選択が決まり、イエス・キリスト以外のだれの花嫁にもならないことを両親に伝えました。やがて、彼女は頭髪を短くし、城館を離れることなく、在俗のまま神のためにのみ生きることになりました。

彼女は数年間、もっぱらみ摂理の計画が示されるのを待っていました。1814年7月、中風にかかった老齢の父親は、城館の隣村のフエガロールに慈善事業の創立の希望を彼女に打ち明けました。老男爵は少女たちの育成と病人の介護のための修道女を呼ぶ計画を持っていたからでした(3)。アデルは喜びを押さえることが出来ませんでした。この日から、彼女は自らを一修道女と見なし、スール・マリー・ドゥ・ラ・コンチエプションを名乗りました。彼女は数名の友人もこの計画に同意するに違いないことを確信し、この小さな会の指導者と聴罪師に、そして、率先して修道会創立に当たるようラツリボー師に依頼しました。しかし、ラツリボー師は健康上の不具合や極度の引っ込み思案を理由に承諾しませんでした。ローモン師は、シャミナード師に小さな会の配慮を依頼し、その指導権を委託して自ら引き下がり、ドゥ・トランケレオン嬢にはシャミナード師以外にはこのような計画を指導出来る方はだれもないことを伝えました。

彼女がまずシャミナード師の協力を考えなかったのは、聴罪師への尊敬からであり、ボルドーが遠距離にあったためでした。しかし、最高に信頼している方に従って導かれることを考えることは彼女にとって最高の喜びでした。ずっと以前から、彼女はシャミナード師の意見を聞くことなしに重要なことは何も決断しなかったし、師の回答をまるで神の啓示のように見なしていたからでした。更にまた、ずっと以前から、ボルドーのコングレガシオンで行われていたすべての活動を共に生きるよう努力し、コングレガシオンにみなぎる精神によって満たされていたからでした(4)。シャミナード師もまた、ボルドーのコングレガシオンに導入された福音の勧めの実践をアジャンの教区のコングレガシオンにも普及するために彼女に注目していたところでした(5)。

シャミナード師は修道共同体創設の希望の知らせを受け取った時、この共同体開設の日とボルドーで伝えられていた提案の日が重なったことに驚きましたが、なお決定を下すことなく、この件に関する神のみ旨を伺うことにしました。まず、ドゥ・トランケレオン嬢に次のように回答しました(6)。「神のみ心にあることのみを行うため聖霊の光を願ってください。」

ドゥ・トランケレオン嬢は、師の回答によって、師が別の計画を抱いていることを知りましたが、師がどのような活動を計画されるにしても、そのことを明らかにし、これに参加させていただけるよう懇願しました。シャミナード師が率直に次ぎのように彼女に伝えたのは1814年10月8日のことでした。「わたしの秘密をもれなく話しましょう。どんな父親でもその指図に無条件に従う娘に言い逃れをする父親がいるでしょうか。」ボルドーにコングレガニスト修道女の組織が存在することを明らかにして次ぎのように付け加えました。

「現在、数名の修道女が世とのすべてのかかわりを捨てて、在俗のまま正規の共同生活を生きることを望んでいます。この靈感には従わなければなりません。しかし、コングレガシオンの活動を損なうことなく、かえってこれに奉仕しなければなりません。数名のコングレガニストはそれぞれ異なった修道会に入りました。わたしたちはそれを見て喜びました。補佐の役員たちが多少残念そうにそのことをわたしに知らせましたが、わたしは彼女たちを励ますため、「負けるが勝ち」のゲームをしているのですと話したものでした。しかし、今回はまったく別のことです。コングレガニストの修道女は現役のコングレガニストでありながら、修道女として正式に生活することを望んでいるからです。あなたが修道女になりたいとの望みにはちょっとした宣教師になろうとの意向と気持ちが含まれているかどうか近い内にお知らせ下さい。あなたの心を余すところなく、常に率直に打ち明けて下さい。」

そこで、シャミナード師は彼女の共同生活への基本方針を承認しました。修道会の目的に関する不一致はなく、事実この点に関する相互理解は既に事前になされていたからでした。アデルは友人のディシェ嬢に次のように書き送りました(7)。

「ローモン師は、わたしがシャミナード師から頂いたすばらしい手紙をあなたにお見せするに違いありません。シャミナード師は、わたしたち各人がコングレガシオン会員の身分のまま小さな宣教師になるというコングレガシオンの目的を指摘して参りました。正直言ってわたしはこの言葉に感動しました。そこで、わたしたちはあらゆる手段を用いて、神に光栄を帰し、隣人に救いをもたらす者として召されていることを自覚したいと思います。したがって、わたしたちが意

図している尊い身分のために修練生活を始めたいと思います。わたしは、ローモン師の意見に従ってシャミナード師に、コングレガニスト修道女のなすべき実践生活について尋ね、無原罪の御宿りの祝日に修練院生活を開始する希望を伝えるため手紙を書きたいと思います。」

シャミナード師は、トランゲレオン城館やアジャンの小さな会の会員たちが急いようには急ぎませんでした。師はアデルに次のように伝えました(8)。

「わたしはこちらの若い修道女たちの会憲をあなたに送らせるはずでしたが、よくよく検討したところ、それにもっと手を加える必要があったのでお送りしませんでした。そのこよは次の二つの理由からです。その第一は、アジャンのあなた方の何名かは誓願によって修道生活を始める決意をしていること、第二は、こちらでは幾人かが終生誓願によって修道生活に入っていること、すなわち、彼女たちが真の修道生活を始めようとしていることです。今日まで彼女たちは3箇月ごとに誓願を更新しています。わたしは彼女たちの中にあつて様々な困難を解決し、必要ならば誓願をも免除しました。しかし、問題は1年間の有期誓願と特に終生誓願です。わたしは死ぬことさえあり得るし、それにあなたは遠く離れていますからです。したがって、十分ふえんされた会憲と詳細な会則が必要になります。女子青少年コングレガシオンと黙想の婦人会のためのすべての基本項目は決定されましたので、これからは更に仕事を進めることが出来ると思います。しかし、なお手を加えるべき多くの会則があります。それにしてもわたしの希望は、聖なる乙女の御宿りの祝日かその8日間に、あなたとあなたの2人の友人がただ貞潔の誓願をのみを6箇月間に限って宣立することが出来ることです。したがって、今から聖母の御清めの祝日まで、あなた方が正規の修練院を始められるよう決めたいと思います。どうか忍耐と勇気を持ってください。わたしはとてもしぞがしく、数週間全然手紙を書くことも出来ず過ごしていました。」

彼女たちは、こうした状況下でシャミナード師の活動も進展していないこと、同時に、自分たちの待ち遠しい思いほど事が進まないことが分かりました。しかし、近い将来の修道会創立もようやく整えられ、ドウ・トランケレオン嬢をボルドーから離れた所に引き留めて置かなければならないように思われた唯一の障害も解消されていました。1815年6月18日、年老いた父親が彼女にみ取られて静かに帰天したからでした。こうしてアデルは以後完全に自由な身になりました。

同じころ、シャミナード師の活動計画は思いがけない障害に遭遇しました。師は百日天下によってボルドーから離れ、コングレガシオンの活動も中断しな

ければならなかったばかりでなく、なお、市内に同時に創立された新しい二つの修道共同体のために師が当てにしていた幾人かの志願者が師から離れ去ったことでした。

セン・ミシェル教会の主任司祭スプール師と助任司祭デュブール師は、ティモテ・ラコンブ師の協力を受けて、庶民階層の多くの少女たちを集めて熱心なグループを組織しました。彼女たちは「キリスト教教義」のコングレガシオンを名乗り、下層階級の少女たちの教育に専念し、その会則をシャミナード師に提示することを怠りませんでした。シャミナード師はイエス・キリストの多くの花嫁の新たな増加を歓迎し、自らの独自の活動が妨げられたことに不満をもらすどころではありませんでした。同じ時期に、第二の修道女会、すなわち、マリー・テレーズ修道女会がボルドーに創立されました。この会は聖人のような司祭レピオル師の指導とリオン出身のドゥ・ラ・ロセトリ嬢の協力で誕生したものでした。その他の修道会の創立もノアイ師の協力で準備されていました。更に、フランスの他の地域で再建された古い修道会や新しく創設された修道会がボルドーに移転進出し始めていました。例えば、イエズス会は聖心の修道女会をボルドーに呼び寄せるよう努力していました。

最悪の事態がアジャンに起きたことが伝えられました。そこで、シャミナード師は小さな会の会員たちがその希望をジャクピー司教に伝えるよう明確に指示し、1815年9月7日、次のように書き送りました。「わたしたちは敬けんな司教様に全幅の信頼を寄せなければなりません。司教様は真心から善を望んでおられるのですから、あなた方が素直に心を開かれることを司教様は喜ばれるに違いありません。司教様はこのような事業を導くために身分上のお恵みを頂いておられるからです。」しかし、ジャクピー司教はドゥ・トランケレオン嬢や小さな会の会員たちをボルドーに行かせることを絶対に承諾しませんでした。教区から彼女たちが立ち去ることを恐れたからでした。司教はシャミナード師が修道共同体を創設することを心から望んでいましたが、まず、アジャンにそれを設立させることでした。シャミナード師は、司教の指示に容易に従うことが出来るように、ドゥ・トランケレオン嬢の親友のベルロック夫人に新しい修道共同体を受け入れる住居を直接アジャンで探しこれを貸借するよう依頼しました。

こうして、関係者全員が計画された修道会設立の場所をボルドー市ではなくアジャン市にすることに協力しました。このことは創立者シャミナード師の計画を逆転させることでしたが、師はこれほど明確なみ摂理の指示の前に素直に従い、すべての計画に自らを導かれるみ摂理への子心の信頼を明らかにしました。

師はアジャンに修練院を設立し、またもし必要があれば、ボルドーのコングレガニストたちをアジャンに送ることを決定した後、たとえ数週間であってもドゥ・トランケレオン嬢がボルドーで過ごして欲しいとの希望を表明しました。それは、彼女をよりよく理解し、彼女に修道会創立の精神を伝え、彼女が意図し、また、他の会員にも教えることになる修道生活の手ほどきをなすためでした。いずれにしても、師は自らの計画を放棄し、遠く離れた所から未来の修道女たちを指導することで満足しなければなりませんでした。こうした隔離によってもたらされた文通の一部が保管されていたので、創立者の基本的な考えを洞察することが出来るようになりました。

シャミナード師は1815年10月3日にドゥ・トランケレオン嬢に次のように書き送りました。

「あなたはあなたの小さな修道会がどのようなものであるべきかの概要を把握したいようですが、それは当然です。このことについての正確な考えを持つためには、まず、すべての修道会の修道女と共通に持たなければならないことを考えなければなりません。あなた方も真に修道女になるはずですから。次に、特にあなた方が持たなければならないことは他の修道会からあなた方を区別する事柄です。

あなた方は真に修道女になるに違いありません。あなた方はいわゆる修道誓願を宣立し、様々の徳を実践しなければならないからです。そして、これらの諸徳は誓願を鼓吹し、これを支えなければならないからです。イエスの尊い母マリアがあなた方の保護者であるように、あなた方の模範にならなければなりません。ここから、あなた方の修道生活の基本的な修業や実践が生ずるのです。

あなた方を他の修道会から区別する点は、魂の救いに関する熱誠です。そのためには信仰と徳の原理を知り、キリスト者を増加しなければなりません。子供たちに教科を教え、病人を見舞い介護し、寄宿舍を経営する必要はないでしょう。これらの事業はたとえそれがどんなに優れていても、あなた方より経験のある他の古い修道会に委ねるようにして下さい。それでは、わたしたちは何をしたらよいのでしょうかと尋ねられるに違いありません。あなた方はあらゆる身分、あらゆる環境の少女たちに信仰を育成し、徳を習得させ、真のコングレガニストを養成し、その総会や分野別及び下部組織の集会を開催させなければなりません。更に、少女たちに短い黙想を行わせ、彼女たちの召命選択を指導しなければなりません。あなた方の共同体は宣教修道女によって構成されることとなります。以上のような観点から、こうした修道女の身分にふさわしい志願者を識別しなければなりません。

以上の観点からお分かりと思いますが、コングレガシオンはあなた方の誓願宣立のため不利益を被ることは何ともありません。まったくその反対です。したがって、あなた方はただ今からこの尊い身分にあずかるためにどのような準備をしなければならないかを考えて下さい。この身分はあなた方を宣教の精神に参加させなければならないからです。わたしは自分自身のためにちょっとした黙想をなしたいと思っています。皆さんのことを忘れません。やがて、11月10日から12日まで続く青少年の黙想会が行われます。それまでアジャンに行けるかどうか決めたいと思います。わたしがあなた方に示した『マリアの娘の会』の概要について、あなたとあなたのグループの皆さんの考えをお知らせください。」

この名称こそ新しい修道会の呼称として師が提案したものでした。この提案は将来の修道女たちによって熱狂的に受け入れられました。

シャミナード師は決めた時期にアジャンを訪問するために自由になれたでしょうか。マドレーヌでの黙想が終わるとすぐ大神学校で黙想の説教をしなければなりません。そこでかかったひどい風邪のため、無原罪の御宿りの祝日まで動くことが出来ませんでした。しかし、少なくともマリアの娘の会の会憲の作成が終了したことを彼女たちに知らせる喜びを感じて次のように書き送りました(9)。「賢明で学識のある方の意見を聞くために会憲の写しを取らせたいと思います。彼らの意見を聞いた後、ミサの間会憲を祭壇の上に置き、それからまたその写しを取りたいと思います。」この会憲には、「マリアの娘の名で呼ばれる女子コングレガニスト修道会会憲草案」との題名が付けられていました。この会憲の草案はコングレガシオンにおける修道生活の組織を指導する基本的事項を提示したものでした。しかも、それは極めて短く、要点のみを規定していました。マリアへの信心、マリアの諸徳とその熱誠の模倣に献身するコングレガニスト修道女のマリアの娘は、清貧、貞潔、従順及び堅忍の終生誓願を宣立しなければならず、歌隊修道女と助修道女の2階級に区分されていました。しかし、後者の人員には制限がありました。会則には次のように規定されていました。「修道女は尊い保護者マリアの諸徳を絶え間なく模倣することによってのみ自らを聖化し、少女たちの救済に専念する以外の任務を帯びない。…。修道女は自ら献身する配慮や労苦の報酬を決して受け取らない。」彼女たちの持参金は会の生活費に提供されなければなりません。「マリアの娘の会はちっぽけな生活ではない。しかし、歌隊修道女はその召命の目的から極めて重要な用件が生じた場合以外は決して外出することはない。」なお、外出の場合は確実な用心が確認されなければなりません。

会則には毎日30分の念とうしか規定されていませんでした。たとえ、プリユール(修道院長はこのように呼ばれていました)が、「既に念とうに十分進歩した

修道女、また、神の霊によってその域に到達した修道女に一時間の念とうを許可することが出来た」にしてもでした。マリアの娘の会は正に活気にあふれたものでした。規定の日課はコングレガニストが唱えていたマリアのみ心の小聖務日課でなければなりません。修道女の服装の選択は会の創立の発起人たちによって置き去りにされていましたが、シャミナード師は、すべての印が白地であったコングレガシオンの思い出として、少なくとも聖歌隊修道女の修道服は白地のものが妥当であると考えてこのことを要請しました。

シャミナード師は最初の草案の内容を次の3点に要約しました(10)。「第一点、あなた方は通常の修道誓願を宣立し、特にイエス・キリストの花嫁となる修道女の身分です。第二点、真のコングレガニストは宣教師でなければなりません。コングレガニスト修道女はなおさらそうでなければなりません。第三点、尊いマリアはあなた方の保護者であり、あなた方はその娘です。したがって、あなた方はキリスト教的、また、霊生上の諸徳の実践に絶えずまい進し、神のために魂を勝ち取るよう絶えず努力しなければなりません。以上が二つの原則です。これらの原則によってあなた方の控え目な会憲とこの会憲に基づくすべての規則を作成しなければなりません。」

師は更に次のように付け加えました。「あなた方の修道会は償いに関して決して厳格であってはなりません、霊性上の諸徳の実践の面と熱誠の活動が内性を損なわないように用心すべき点で特に厳格でなければなりません。」

会則の起草に関しては次のように述べました。「わたしの気持ちとしては、今度あなた方に与える会則は臨時的なものでしかないということです。まず、会則を実施して目的を達成したことが保証された時、最終的に決定したいと思いません。このことはまたレウニオン修道会の創立者(ウレシユマン師)の意見でもあります。もし、わたしがあなた方の所で住まなければならないことになれば、会憲についても同じように行うに違いありません。しかし、現状では司教の権限によって会憲が決定され、承認されることが適当だと思います。」

ドゥ・トランケレオン嬢と小さな会の会員たちはこのすばらしい展望の実現の時を待ち望んでいました。彼女は会員たちを代表して次のように書き送りました(11)。「わたしたちは有頂天になってこの計画について話し合いました。そして、この計画の近い将来の実現を心から熱望しました。」しかし、この計画の実現は、当時彼女たちが考えていたほど近いものではありませんでした。アジャンで、ベロック夫人は彼女たちの修道院確保のための交渉を1816年の2月にしか終了しなかったからでした。ベロック夫人の希望は、タンプリエ城趾(12)の土台上に設立されていた旧罪人のより所なる聖マリアの修道女会の修道院の

取得でした。しかし、建物は荒廃していたので大々的な改修工事が見込まれました。シャミナード師は絶えずアジャン訪問を約束していましたが、ボルドーを抜け出すまでには至りませんでした。そこで、自らの代わりにドゥ・ラムルス嬢を送ることが最良であると考えました。ドゥ・トランケレオン嬢には次のように書き送りました(13)。「この女性は優れた経験の持ち主で、極めて気転がきいて正確な人です。彼女はすべての事柄を準備するのに極めてふさわしいように思われます。わたしがそちらに到着した時には、わたしはあなた方に修道精神のみをつぎ込むことに専念出来るからです。大きな問題は彼女がほとんど常に病弱だということです。」したがって、彼女は健康上の理由からご復活の大祝日後までこの旅行を延期せざるをえませんでした。

いずれにしても、ドゥ・トランケレオン嬢の気持ちは揺るぎませんでした。小さな会の会員の一人に次のように書き送りました(14)。「神様がわたしたちに予定して下さっている宣教師の身分にそれほどふさわしくないことを考えて謙そんになりましょう。」ドゥ・トランケレオン嬢の召命は厳しい試練に会わせようとしていました。この最初の試練は彼女にとってとても厳しかったからです。彼女は、犠牲的な修道生活の実現の前にたじろいた小さな会の数名の会員の気力の減退を知ったので、自らも生家を立ち去ろうと考えました。もちろん、彼女の勇氣は衰えなかったばかりでなく、一瞬のちゅうちよもありませんでした。5月25日の土曜日、この世で愛したすべてのものに別れを告げ、後を振り向くことなく、マリアのご保護の下に徒歩でポール・セン・マリーに赴き、同日夜アジャンに到着しました。彼女は小さな会の3名の会員のみを伴いましたが、4人目の会員は目的地で待機していました。

未来の修道女たちがジャクピー司教を訪れると、同司教は極めて好意的に彼女たちを歓迎しました。他方、彼女たちは、合流したドゥ・ラムルス嬢を伴って彼女たちの修道院を受け取りました(15)。その翌日、司教は彼女たちの所に赴き、コングレガシオンの指導司祭であったムーラン師を彼女たちの長上に任命しました(16)。数日後、すなわち、7月8日、シャミナード師もアジャンに到着し、彼女たちを心から喜ばせました。

しかし、彼女たちの試練はまだ終わっていませんでした。最大の問題であった誓願の宣立がまだ解決していなかったからでした。創立者シャミナード師は、まだボルドーに滞在していたころ、書簡で修道会に関する意見をジャクピー司教に披瀝しましたが、司教との間に大きな意見の相違が生まれていました。ジャクピー司教の意見は、愛徳修道会で実施しているように、例えば、有期誓願の期間は1年ということでした。ダヴィド大司教も同様の意見を次のように表明していました(17)。「終生誓願には、大革命中一度ならずわたしを困惑させた

難点があります。大革命のような困難を免れることが出来るでしょうか。政府当局と教会当局の間に相互理解が得られるでしょうか。過去の経験は将来にわたって恐るべき何らの余地も残さないでしょうか。」大司教は荘厳誓願が可能かどうかを考えていたからでした。そして、大司教も当時の人々のように、教会に対する政府の権限がどうであれ、教会が終生誓願の宣立を保護する手段を既に見いだし、また、見いだしていることが実感出来なかったからでした。しかし、終生誓願を維持しながら、終生誓願の荘厳性と、終生誓願から生ずる外的な結果を取り除くことで十分だったからでした。

いずれにしても、シャミナード師も大司教同様この点に関しては気づいていなかったのです。したがって、シャミナード師はダイヴィオ大司教の考えを全面的に支持し、終生誓願の宣立を犠牲にすることを決意しなければなりません。この結論は当然でした。それは、トレントの公会議によって荘厳誓願の背景には終生誓願がちっ居の義務を含んでいたからでした(18)。そこで、司教方はシャミナード師に次ぎのように警告しました。「あなたは、あなたの娘たちに修道生活に献身することを勧め、ちっ居生活を強制する義務を彼女たちに課することを考えているように思われますが。」宣教師の召命が危うくなるのを恐れたドゥ・ランケレオン嬢は、司教方の意見を入れ、あきらめて有期誓願のみを宣立することにしました。

しかし、シャミナード師は動揺しませんでした。終生誓願とマリアの娘の会の使命の件で教会当局と対立していた不一致も、いつか消え去ることを予感でもしていたかのように、自ら確信がある時もつばら發揮出来る強固な気持ちを持ち、既にアジャンに移っていたドゥ・ランケレオン嬢に次のように書き送りました(19)。

「自然界の領域で結婚とはどういうことでしょうか。それは解消出来ないちぎりを結ぶことではないでしょうか。しかしそれは、修道誓願によってイエス・キリストに身をささげる修道者や修道女が天配と結ぶ霊的一致のかたどりに過ぎないのです。わたしは、あなたやあなたの親しい友人たちが半端な修道女になることしか望んでいないとしたら、そのようなことは決して理解出来ません。聖霊があなた方の心に鼓吹した気持ちはまったく違ったものだからです。」

シャミナード師のこの考え方からすればドゥ・ランケレオン嬢や小さな会の会員たちは、ボルドーの多くのコングレガニスト同様ずっと在俗生活であったので半端な修道女と呼ばれるような者でした。もし今日、彼女たちが共同生活に入り神のためにすべてを放棄したとすれば、それは真にそしてそのすべの結果から修道生活を意図することを目的にしたものです。ところで、すべての神学者

たちの意見によれば(20)、修道生活は終生誓願を予想しています。もし、誓願に永続性がないならどのようにこの身分を維持することが出来るでしょうか。ところが、終生誓願はちっ居の生活という障害を伴うと反論されていたのです。しかし、シャミナード師は、終生誓願は宣教活動の障害にはならないと次のように弁明しました。マリアの娘の会には、その会憲によれば、ちっ居の精神はありません。「彼女たちはその召命の目的から、極めて重要な用件が生じた場合の外は決して外出しないはずだからです。」彼女たちは霊と共に文字さえも生きようとしていたのです。熱誠の墓場のように思われていたちっ居もむしろその避難所になるはずだったのではないのでしょうか。

以上は、シャミナード師がジャクピー司教同様彼女たちに伝えた言葉でした。師は、会憲にちっ居の生活を記載するにしても、修道会の目的が変更しないように会憲を改訂することを約束しました。司教は友人のシャミナード師がどのようにこの難問を切り抜けるかを知りたがりながらも、差し当たり誓願宣立と着衣式を延期するよう提案してきました。

彼女たちは司教の決定に従いました。未来の修道女たちは悲しい思いで胸がいっぱいでしたが完全な忍従の気持ちを示しました。しかし、シャミナード師は自らの模範と次のような言葉で彼女たちを勇気づけました(21)。「ちっ居生活は終生誓願の一つの結果です。したがって、悩まないでください。あなた方の気持ちを駆り立ててください。万事うまくいくと思います。あなた方のすべてを所有することを望まれるイエス・キリストは、聖職者たちが思い違いをすることをお許しにはならないはずですから。」この言葉は創立者にもその娘たちにもふさわしい信仰の言葉でした。

6月末まで長引いたアジャン滞在中、シャミナード師は修道生活全般にわたる教話や個人対話を重ね、修道生活の真の精神を彼女たちに伝えることを決しておろそかにしませんでした。また、師は新生修道会の階級組織についても配慮しなければなりませんでした。小さな共同体を一人の院長の指導に託することなしにアジャンを離れることが出来なかったからでした。修道会創立の起源を考えて見ても、ドゥ・トランケレオン嬢はあらかじめ院長職に予定されていたように思われました。しかし、彼女はこの職に乗り越えがたい嫌悪を感じていたので、ボルドーのシャミナード師に3回手紙を書き、師が共同体組織のためにアジャンを訪れた際、自分を院長職に就けないよう懇願していました。シャミナード師自身もちゅうちょしていました。アデルは27歳でしかなく、小さな会の数名の会員たちは彼女よりかなり年長だったからでした。その上、彼女は鋭敏な感受性の持ち主であると共に何らかの内気なところがありました。このことが修道家族の指導には向かないようにも思われました。もちろん、神は彼女の全

存在を支配しておられました。したがって、彼女の内気は神を侮辱することを恐れることから来ており、その敏感な感受性は神によりよく仕えることを望むところから来ていたのです。聖イグナチオは一つの共同体を指導するために必要なことを次のように判断しました。「慎ましい聖徳を伴った大きな用心は適度の用心を伴った聖徳に勝る。」創立者のちゅうちょはここにあったのです。

このような実情を知っていたドゥ・ラムルス嬢も同様な意見の持ち主でしたので、ドゥ・トランケレオン嬢に自らの気持ちを打ち明けました。彼女は喜んで謙そんにこの気持ちを受け入れたので、ラムルス嬢は感動し、遂に彼女の意見を変えさせることに成功しました。彼女は、徳の取得によって本性の不完全性を支配することが出来るに違いないことをシャミナード師に伝え、恩恵の助けによって優れた長上になることを望みました。

そこで、ドゥ・トランケレオン嬢は長上に任命されました。数日後、シャミナード師は熱意と善意に満たされ、既に何名かの会員が増加していた小さな会の共同体を見て感動しボルドーへの帰途につきました(22)。



注

(1) 1814年8月30日と10月8日、シャミナード師よりドゥ・トランケレオン嬢への手紙。10月8日の手紙では若い未亡人について次のように伝えました。「わたしが彼女にほとんど何も答えなかったのが、彼女はわたしをとがめ、わたしがその件について話を進めないことを意外に思っていました。わたしは彼女を試そうとしてそのようにしていたのです。」

(2) 1806年2月17日、アガツ・ディシェ嬢へ。

(3) ドゥ・トランケレオン男爵の希望によって創立された事業は、その後、旧愛徳会のデンベル嬢の指導下に置かれていましたが、現在、フエガロール村はすばらしいセン・タンヌ修道女会の母院の所在地になっています。

(4) 1814年1月25日、彼女はディシェ嬢に次のように書きました。「お昼と晩に十字架の下にひざまづきましょう。ボルドーの姉妹たちもほとんどこのようにしているからです。」

(5) この意向は1814年8月30日の手紙ではっきり表明されました。

(6) 1814年8月30日

(7) 1814年10月13日

(8) 1814年12月1日

(9) 1815年12月6日

(10) 1816年1月11日

(11) 1815年10月24日、ディシェ嬢へ

(12) 罪人のより所、あるいは、良き牧者の修道院では大革命前、不良少女たちを強制的に閉じ込めていました。ローザン著「アジャンの修道院」、1886年出版。罪人のより所の修道院は、マリアの娘の会の修道女がそこで修道生活を送ってから4年後(1816-1820)、引き続き男子マリア会、次にキリスト教教育修士会、そして、最後に信徒の女学校の所有になりました。

(13) 1816年2月19日

(14) 1816年3月7日、アガツ・ディシェ嬢へ

(15) ドゥ・ラムルス嬢は少女たちの知らない間にミゼリコルド会を離れていました。1813年から半年間パリに滞在していたからでした。だれも会を留守にすることを望みませんでした。ラムルス嬢の伝記によれば、シャミナード師は彼女の出発を伝えることを引き受けましたが、そのことは容易ではありませんでした。プージェ著、「ドゥ・ラムルス嬢の生涯」184ページ。

(16) ジョゼフ・アントワン・ムーラン師は1766年3月18日にアジャンに生まれ、若くしてラザリスト会に入り、大革命の大半の期間をコンスタンティノーブルで過ごしました。当時、革命議会の代表者たちは、東洋でフランスの威信を守るために赤い帽子をかぶってラザリスト会士の宗教行事に熱心に参加しようとしていました。ムーラン師がジャクピー司教に呼ばれて教区に復帰したのはようやく1812年でした。師は大神学校の校長になり、1822年には総長になりました。晩年は汚れなきマリア修道会に退き、善良さと聖人のような高い評判を残して1844年10月30日に帰天しました。師の略歴はデルリュウ師によって記されました。

(17) 1816年6月1日、シャミナード師への手紙

(18) トレントの公会議、第25会期、欄外の「Reformation」、ピオ5世教皇及びグレゴリオ13世教皇勅書「Circa pastoralis et Deo sacris」参照。ダヴィオ大司教やジャクピー司教、そして、シャミナード師の誤りと類似の誤りは、1823年、テュレンの大司教シアヴェロッチェ司教がみ心の女子修道会に対して警告していました。ポーナル司教著「バラ夫人の生涯」、6版、1巻、411ページ参照。

(19) 1816年6月1日

(20) 例えば、スアRez著の「修道生活」、7巻、lib 2、c. 1、n. 1

(21) 1816年6月1日、ドゥ・トランケレオン嬢へ。シャミナード師のアジャン訪問前。

(22) シャミナード師がアジャンに中高年男子のコングレガシオンを創立したのはこの旅行の時でした。

第 21 章 マリアの娘の会の発展 (1816—1820)

終生誓願とちっ居の誓願の解決 ❖ 会憲の改訂 ❖ アジャンでの宣教活動 ❖ 着衣式(1816年クリスマス) ❖ 聖ヨゼフ孤児の会との関係 ❖ 誓願式 ❖ 共同体の試練 ❖ 共同体の移転 ❖ 聖家族の会との合併の問題 ❖ トネンの創立 ❖ 在俗修道女会。

シャミナード師はボルドーに帰るとすぐマリアの娘の会のちっ居誓願についての調整のために会憲の改訂に従事しました。数週間の祈りと熟慮の末問題の解決に到達しましたが、それは確かに最も基本的な解決でした。余りにも厳し過ぎるちっ居生活の不都合を解消するために、会憲にちっ居の誓願に関する特別で、しかも明確な誓約を導入したからでした。すなわち、このちっ居の誓願に修道会の目的に調和出来る解釈を与えたからでした。旧来の修道会のように、例の3誓願の中にちっ居の誓願が含まれていることを主張することは彼らと同じ趣旨で許されることでした。したがって、他の3誓願にちっ居の特別の誓願を付加することは事業の要請上その自由な解釈が残されていたのでした。

そこで、シャミナード師はこの原則に基づいて、ちっ居の誓願は「従順の誓願に従属する」、すなわち、従順の誓願は決められた範囲内でちっ居の誓願の適用を調整するということを表明しました。例えば、熱誠のためという動機によって、あるいは、より寛大な解釈が示された場合、長上によって臨時的にちっ居の誓願の中断の許可が得られるに違いなかったからでした。このように、創立者の基本的な考えは変更されませんでした。ちっ居の精神は既に会憲の原案に提示されていたからでした。新しい誓願はその実践が明確にされ、誓願の永続性の原則が保持されることになりました。

シャミナード師はマリアの娘の会の会員と共にこの解決を心から喜び、次のように、ドゥ・トランケレオン嬢に書き送りました(1)。

「ちっ居の誓願に関してわたしたちが決定したことを考えれば考えるほど、わたしはそのことに満足しています。もし、あなた方がカルメル会の修道女をまねて三つの主要な修道誓願にちっ居の誓願を含めるなら、あなた方は、あなた方の意図する目的には容易に到達出来ず、多分、全然到達出来ないに違いありません。わたしたちは常に会の目的と会が生まれる時代に注目しなければ

なりません。もちろん、カルメル会やすべての古い修道会を尊敬し、出来る限り彼女たちに協力しなければなりません。しかし、万事において彼女たちに類似していないことを残念に思う必要はありません。」

その後、シャミナード師は、ちっ居の誓願の理解に関して幾つかの説明を求めた修道女の聴罪師の一人に次のように回答しました(2)。

「マリアの娘の会にとってちっ居の誓願は、他の修道会で宣立される同じ誓願とは多少異なることがあるのは事実です。この誓願は次のように宣立されます。『わたしは長上、あるいは、教会法上の長上から一時的に外出する明白な許可を受けない限り、同期間、ちっ居の誓願を守ることを誓います。』このことから、次のことが生じます。すなわち、この誓願は能動的ちっ居の誓願に関してのみ長上に属するということです。長上が臨時の外出のために与える許可は神の前に責任があるからです。その外出の動機が極めて重大でなければならぬからです。」受動的ちっ居の誓願に関しては、他の修道会同様、司教の権限のみに属します(3)。

一度、この件が解決されると会憲の改訂は他の障害に遭遇することなく順調に進み8月中に終了しました。新しい会憲の草案は形式上はダヴィド士の記述によるもので、教会に新しい修道会を創立する適時性について、誓願の永続性について、宣教活動への召命によって献身する会の組織に重要な役割を演ずべき原則について、序文を含めず、48箇条に及びました。シャミナード師は、マリアの娘の会の固有の目的は、「在俗の女性をキリスト教生活に導くことを目指すものである」と強調しました。このことから、3通常誓願とちっ居の誓願に加えられた第五の誓願、すなわち、「カトリックの信仰とキリスト教の道徳を教育する誓願」で、この誓願はちっ居の誓願同様従順の誓願に属するものでした。それは、労働に従事する修道女に不安を起こさせないためでした。また、この誓願はコングレガニストの在俗修道女の熱誠の誓願と同じ意義を持つものでした。

この修道会の組織には創立の当初から今までどの修道会にも取り入れられていなかった一つの考えがありました。修道会の管理や活動の責任分担は、霊生部、教育部、財務部の名称によって3分割されていました。たとえ、一人ないし数人の補佐が各部門に配置されるにしても、あるいはまた、一人の補佐が3部門を代行するにしても、3部門の全責任は総長に統一されていました。霊生部長名で任命された霊生部の責任者は、完徳の道への修道女の指導、すなわち、会則の正確な遵守や信心業の実践、そして、ちっ居の生活の実践を指導する任務を負わされていました。教育部長は、学校教育活動への修道

女の養成と教育活動遂行指導の任務が課せられていました。財務部長は、筋肉労働や修道会財務、そして、財務管理に関するすべての事項の管理を委任されました。この組織は、現代国家が各種公的事業の管理に採用している組織に類似したもので、マリアの娘の会からマリア会に引き継がれたシャミナード師の諸創立の特徴の一つになったものです(4)。

新しい草案では、メールという歌隊修道女名でいわゆる修道女を示し、コンパイヌという平修道女名で助修道女を示しました。この助修道女は手工芸や修道院の活動のための外部折衝に当たる修道女でした。修練院の期間は2年に定められました。院長及びその補佐は3年ごとに改選されなければなりませんでしたが、ただし、終身総長職にあった創立者メール・トランケレオンは例外でした。

シャミナード師はこの会憲の草案をアジャンに送付する時点で、ドゥ・トランケレオン嬢に次のように伝えるためその送付を遅らせました(5)。「会憲をあなたに送ろうとしていますが、非常に学識があってマリアの娘の会にとっても関心のあるわたしの友人の意見を聞くことにしました。その友人の意見によれば、わたしが自らこの会憲を容赦のない検閲官のように再検討し、すべての条項を厳密に検討し、更に、大司教に送付すべきである」とのことでした。

師は、とりあえず、会憲の適用に関して修道女を指導する精神、そして特に、マリアへの絶対的献身の精神を強く教え込むようにして、次のように書き送りました(6)。「いうまでもなく、マリアの聖なるみ名は至る所で自然に唱えられなければなりません。あなたが一人で、あるいは共同で祈る時も、また、あなたがだれかを励まし教える時、そして、コングレガニストの集会を開催する時、マリアの聖なるみ名が唱えられることがなければ、あなたも、あなたの娘たちも何ら満足してはならないのです。」

内的精神や祈りの精神が関心の最大の目標になりました。師は会憲の冒頭に、本会が明確に追求することを意図する目的に、「時代の悪の感染から人々を守り、予防する」という目的を提示しました。それは、修道女の召命上彼女たちもその危険にさらされるからでした。このことから、師は、ちっ居の誓願を、それが適用されるままに正確に遵守することを彼女たちに要請しました。こうした配慮のみがその優れた予防を確立するからでした。同じ理由から、師はマリアの娘の会を特徴づけるべき多くの点、特に、内性の成長、潜心及び信仰と念どうの精神の必要性を強調しました。

師は、ドゥ・トランケレオン院長に次のように書き送りました(7)。

「あなたが頂いた使命を絶えず勇敢に果たして下さい。しかし、あなたが送るべき内的生活、すなわち、常に新たな進歩を遂げなければならない内的生活を妨げてはなりません。あなたが意図しているような修道会で人間的な考えで行動するような長上は長続きしないに違いないからです。常にあなたを照らし、あなたを駆り立てるのは神の霊だからです。精神の緊張を乱すことなく、絶えず念とうを続けて欲しいものです。時々、あなたが念とうに呼ばれていることを内心感ずるなら、あなたの主要な義務が妨げられない限り念とうを辛抱強く行って下さい。聖テレジアのように、神と話し、神に相談してその命令を受けることが出来ることは長上にとって何と幸せでしょう。」

マリアの娘の会の修道女は、まだ俗服着用の単なる修練者でも宣教活動に従事していました。彼女たちは、「罪人のより所の聖マリア」の小さなチャペルで家庭の母親のコングレガシオンや女子青少年のコングレガシオンの集会を開催することに成功しました。そして、創立当初から一般環境の少女たちに職業の手ほどきをするための共同裁縫室を設置しました。また、司教の要請によって、貧しい人々の子供たちのための無償学級さえ設置しました。すべての活動が思い通りに運ばれ、志願者も応募するようになり、その他の女性たちも新修道会に関心を示しました。ボルドーから、シャミナード師も優れた志願者ルイリエ嬢を送りましたが、なお他の二人が年末までに彼女の後を追ってアジャンに行きました。

しかし、彼女たちの幸せにもあることが欠けていました。それは彼女たちが神のみ旨を行っているという保証であり、彼女たちの最高上司の司教からもつばら期待されているという保証でした。シャミナード師はこの点に関して彼女たちを安心させるのにそれほど苦労はしませんでした。「そのまま続けてください。神のみ業はきっと達成されます。忍耐してください」と書き送りました(8)。それから数週間後、師はまた次のように書き送りました(9)。「あなたの忍耐と忍従をうれしく思います。司教様のゆっくりとした足取りやためらいもみ摂理の計画の実践を止められるはずはありません。もし、本会が極めて平凡な善しか行わないとするなら、わたしたちはたいした障害には遭遇しないに違いありません。悪霊、すなわち、マリアの特別な敵はマリアのすべての子供たちの敵でもあります。しかし、恐れることはありません。」

改訂された会憲を受領した司教は早速それを検討し、新草案に満足したことを表明しました。司教はシャミナード師に対して信頼の情を禁ずることが出来ませんでした。やがて分かるように、マリアの娘の会に対しては極めて異なった考えを抱いていたにもかかわらず、シャミナード師の賢明さを高く評価したからです。したがって、司教は時の経つにつれて人々を導くべき宣教活動の第

一步を踏み出すことを彼女たちに許可しました。ムーラン師によって指導されていた黙想会の集結日のクリスマスの聖なる祝日に、当日だけではありませんでしたが、修道服の着用を司教から許可されました。修道服は質素でしたが上品で、全体は黒色、白色のウールの帯と同様に白色の歌隊コートで引き立てられていました。このことは彼女たちにとって大きな慰めでしたが、翌日からまた当時の平服を着用しなければならないことを恐れて困惑していました。しかし、この不安は無駄でした。ジャクピー司教は修道服の着用を許可して、彼女たちの願いをかなえてくださったからでした。また、彼女たちに与えた喜びに新たな好意のあかしを示すかのように、次の日、司教は、現在の修道院から少し離れてはいたが、大きな建物の修道院を提供したからでした。ただ、当時運営していた孤児院は継続し、そこに寄宿舎を備えるという条件のみが示されました。

ジャクピー司教がマリアの娘の会に運営の継続を指示した聖ヨゼフの孤児の会は、アンリ・ドゥ・スルディ大司教によって1628年に創立されたボルドー人の女子修道会でした。この修道会は大革命後ボルドーには再建されませんでした(10)。アジャンのこの会の共同体は廃止されませんでした。その活動は停滞していました。帝政時代の報告によれば、メール・マッカルシー院長はまれにみる万能の持ち主でしたが上長に不従順だったということでした。ジャクピー司教は全力を尽くして彼女たちを支え、1816年の当初には、共同体に対する政府の認可を取得しましたが、マッカルシー院長は不幸にして自らに代わる院長を残すことなく同年12月に帰天しました。司教はマリアの娘の会のために新たな手続きをなすことなく政府の認可を取りつけました。マリアの娘の会が将来性のある会員を擁する修道会であることを断言する唯一の機会であると考えたからでした。このことが司教の提案の目的でした。したがって、司教は、聖ヨゼフの孤児の会共同体のマッカルシー院長の代わってその後を継承するようドゥ・トランケレオン院長に要請したのです。

この申し出は罪人のよりどころの聖母の小さな共同体に喜んで受け入れられました。しかし、娘のマリア会会員たちはシャミナード師の承諾なくして何も結論づけることは出来ませんでした。彼女たちは早速このことをシャミナード師に伝えました。しかし、創立者の態度は彼女たちの期待とは大変異なっていました。師は彼女たちが少しも気づいていなかった様々な結果を考えていたからでした。会則と会の目的を維持する明白な条件が満たされなければ、この申し出を受け入れないようにと次のように書き送りました。もちろん、師は孤児に関する事業には反対していませんでした。「どのような種類の活動も禁じられていません。孤児たちに対する思い遣りも除外されるべきではありません。しかし、この事業が他の事業より独占的でも、優先的でもあってはならないからです。それは、一定の階層の子供たちの寄宿学校設置の計画に関してもっと検討しなけ

ればならないからです。」そして、次のように結論づけました。

「この要請の受け入れを余り急いではなりません。それは、この要請を特別扱いにして修道会の目的を変質させる恐れがあるからです。したがって、軽々しく、また、修道会の一般的目的とわたしたちのかかわり合いを調整することなく約束しないようにしてください。」

シャミナード師は間違っていないでした。ジャクピー司教はマリアの娘の会を聖ヨゼフの孤児の会に変更することなしに計画した変更を実施することが出来ませんでした。司教は1817年1月6日に、この件についてシャミナード師に次のように書き送りました。

「神父様、出来ましたら新年のすばらしいお年玉を送ってくださいますか。神父様ならきっと出来ると思います。ところで、マリアの娘の会を聖ヨゼフの孤児の会、あるいは、聖ヨゼフの娘の会に変更することをお願い致します。この変更は彼女たちがまだ一緒になる前にわたしに申し出た計画に一致するばかりでなく、なお、彼女たちにより大きな善を行わせることになると思います。彼女たちが現在住んでいる修道院から孤児院への移転はこの変更がなければ苦勞するに違いないからです。その上、この変更は彼女たちのためにも、アジャン市のためにも有益に思われるからです。以上の点を考慮してこの件に関して彼女たちをご指導下さるようお願い致します。」

シャミナード師はこのことを神の前で熟考し、回答は急ぎませんでした。このような変更がみ摂理の計画に一致すると考えることが出来なかったからです。司教によってなされた提案の真の意味を知った彼女たちはシャミナード師と意見を調整し、神のみ旨が明確に示されるよう祈りに頼りました。

この問題はやがて解決されることになりました。ジャクピー司教は、この変更を強調する立派な理由がなかったこと(11)、また、シャミナード師が、1月20日、次のような言葉で回答してきたことを了承したからでした。「わたしはマリアの娘の会の使命について十字架の前で熟考しました。司教様がこの変更を命令されなかったのは神のおぼし召しだったと思います。むしろ、司教様はこの件に関する決定をわたしにまかされました。わたしは司教様の提案を修道会の目的に一致させるよう熱心に努力しましたが、正直なところ毎回否定的な考えしか得られませんでした。同時に、聖霊も司教様に他の解決策を勧められたに違いありません。」シャミナード師は、こうした機会を利用して、古い修道会の再建が極めて困難であること、完全に刷新された社会の傾向を考慮するならば、修道精神を新しい鑄型に流し込む必要のあることについての考えを司教に再度申し述べて次のように書き送りました。「すべての点において神の霊は普遍

です。しかし、わたしたちは、それぞれの時代の精神や風習の違いにもかかわらず、神の霊がどのように人々の心を動かすことができるかを知っています。」

このささいなトラブルにもかかわらず、小さな共同体の会員たちは以前通り希望に満ちた宣教活動のうちに修道生活を送っていきました。様々な活動によってもたらされた慰めは計り知れないものがあったからでした。特にコングレガシオンの活動は大成功を収めました。メール・ドゥ・トランケレオンは次のように書き送りました(12)。

「コングレガシオンの事業は明らかに御主の事業のように思われます。あなたは女子青少年たちがこの活動に傾ける熱情を想像出来ないのではないのでしょうか。熱心な彼女たちにとって1週間置きの集会は待ち遠しいものだったのではないのでしょうか。彼女たちを容易に解散させることが出来なかったのも、わたしは、暗くなって来たのを理由に院長の権限で彼女たちを立ち去らせなければなりません。わたしたちは毎週要理を教え、念とうを行わせるために小さなグループを作りました。その他の日には、行わせるべき善と避けさせるべき悪を検討するために補佐たちの評議員会を開きました。」

カーニバルの期間の3日間世俗のお祭り騒ぎに抗議するため、少女たちは修道女の下に止まることを望みました。そして、作業所や無償学校の設置は修道女たちを満足させました。また、メール・ドゥ・トランケレオンは次のように書き送りました(13)。

「わたしたちはコングレガシオンの他になすべき無限の善のある貧しい婦人たちの教育を考えています。彼女たちは宗教について何も知りません。したがって、彼女たちをイエス・キリストに導くことは何とすばらしいことでしょう。わたしたちはしばらく前に40歳と60歳の婦人に初聖体を受けさせました。こうして、わたしたちは、わたしたちの助けを必要とする人々に毎日出会っています。」

実践された多くの善は敬けんな修道女たちにとって力強いあかしになりました。彼女たちは修道院の中で最も尊い、最も献身的な生活の義務を果たして平和な喜びの生活を送っていたからでした。彼女たちの努力に深く感動したジャクピー司教は1817年7月に創立者シャミナード師がアジャンを訪れた際に、彼女たちの誓願宣立に同意されました。7月25日は彼女たちにとって天国のような1日でした。バラの花冠を頂いた6名の修道女は、彼女たちがボン・ペールと呼んでいたシャミナード師のひざもとで終生誓願を宣立したからでした。イエス・キリストの新しい花嫁となったのは、創立者のアデル・ドゥ・トランケレオン嬢、修道名:メール・マリー・ドゥ・ラ・コンチエプシオン、彼女の幼少からの友人のアガツ・ディシェ嬢、修道名:メール・マリー・デゥ・サクレクール、ルイリエ嬢、

修道名：マリー・エンマヌエル、コルメ・ドウ・フォンボンヌ・ドウ・ラバステイド嬢、修道名：メール・セン・ヴェンセン、クレマンティヌ・ヤンナシュ嬢、修道名：メール・テレーズ、リオン嬢、修道名：メール・センテスプリ、そして最後に、助修道女のアルノデル嬢、修道名：スール・セン・フランソワでした。次の日曜日、シャミナード師は他の二人の修道女の有期誓願宣立を受け入れ、二人の修練者の着衣式を行いました。

ボルドーに帰った創立者の心は、多くの障害を克服して目的をかなえてくださったマリアへの感謝の気持ちでいっぱいでした。師は同時にマリアの娘の会の会員たちにも心から満足していました。彼女たちが内的生活の初歩の段階、師の表現によれば、「準備徳や浄化の徳」の段階に止まることなくその頂上に導かれることに同意したからでした。師は次のように書き送りました(14)。「わたしはあなた方の進歩に満足しています。あなた方はこれから完成徳の実践にスタートすることが出来るものと思っています。」師は真実を述べ、その気持ちには推測などありませんでした。彼女たちは、いわば自らの完成となり、修道会に神の刻印が押されることになる3年間の修練が終わろうとしていたからでした。

マリアの娘の会の召命は不足することなく、熱心も衰えることはありませんでした。シャミナード師は修道女たちが引かれがちであった過度の禁欲を抑制するため指導を余儀なくされました。ところが、小さな修道院は驚くほど新規なものとして外部から伺われていました。修道院創立の発起人となった彼女たちは世間でよく知られていたからでした。そこで、彼女たちの一挙手一投足が批判され、社交界で中傷の話題になっていました。極めて矛盾する批判に対応することが出来なかった彼女たちはこのことを深く悲しんで、ボルドーのシャミナード師に意見を求めました。シャミナード師は、「あなた方が決断しなければならぬと考える措置に対する何らかの非難に対して驚いたり、ためらったりしないようにしてください。」と繰り返して止みませんでした(15)。

彼女たちは、やがて、共同体においてもより苦しい試練に見舞われることになりました。空想が過大評価され、会則が過度に厳格に遵守されていました。こうした熱心さの余り、良心の混乱と集会時の意見の不一致がもたらされました。そこで、メール・マリー・デュ・サクレクール修練長は、「悪霊がひどくわたしたちをからかっています(16)」と「ボン・ペール」シャミナード師に書き送ったほどでした。シャミナード師は早速最愛の娘たちを訪ねましたが、その後も引き続き手紙による賢明な助言によって彼女たちの心を落ち着かせるよう指導しました。メール・ドウ・トランケレオン院長には次のように書き送りました(17)。「親愛の娘たちが勇気を出し、お互いの間で、また、その長上との間で完全に一致するようにして欲しいと思います。そのようになれば、マリアの敵である悪霊はきっと悔

しがるに違いありません。また、悪霊はわたしたちが創立した本会の土台とも言えるマリアの娘たちを動揺させ、不安にし、不和にするためあらゆる努力をするに違いないからです(18)。あなたとあなたの娘たちの上に主の平和がありますように。」

彼女たちは心身共に誘惑のあらしや病気に見舞われていました。この新しいちっ居の生活によってでしょうか、既に虚弱であった数名の修道女が重い病気にかかってしまいました。熱心な創立関係の修道女たちは、神への献身が「中途半端」でしかなかったのではないかと主張しましたが、人間の哀れな人生が束縛される様々な条件を考慮に入れていなかったのではないのでしょうか。共同体のある年長の修道女は熱心のあまり会則の最も軽い緩和さえがまん出来ないほどでした。こうしたことから、シャミナード師は、聖フランソワ・ドゥ・サルの教えを彼女たちに想起させるために次のように勧めました。「強制されることなく、快く神に仕えなければなりません。落ち着きのない熱誠はイエスやマリアの精神によるものではないからです。」師は、分別のない熱心な修養を抑制し、あらゆる悩みや苦しみにも同情するよう院長を促し、「どうぞ立派な母になってください」と書き送りました。そして、迷いがある場合には常に寛大な方に耳を傾けるよう勧めましたが、院長自身には断食することを禁じ、彼女に最も必要とされた休息を取るよう義務づけました。しかし、師は、彼女たちの多くの者が健康を害した過度の信心業を観察し、これを抑制するために現地に居合わせたわけではありませんでした。既に、創立者のドゥ・トランケレオン院長も、青春の若さで神に召されることになる病魔に冒されていたのです。

その他の理由で彼女たちの健康が害されていましたが、それは田舎の不衛生な環境でした。だれもこのことを予見出来なかったのです。町の最も高台に位置していた修道院はかなり広い庭園に囲まれ、衛生上の観点からは優れた環境に恵まれているかに思われたからでした。しかし、近くの悪い設備の下水道から臭気が発散し、空気が汚染されていたからでした。やがて、共同体には熱を出す修道女が現れました。そこで、修道院付きのローモン師は、「*ex grabato*」(土地の表現で病床からの意)、すなわち、病床からシャミナード師に次のように書き送りました。「わたしがひどい熱に悩まされてからもう1週間になります。しかし、驚くほどのことはありません。マリアの娘の会の聴罪師として、すべてにわたって彼女たちと苦しみを共にしているからです。したがって、わたしが職務上何らかの苦しみの模範を彼女たちに示すことは当然だからです(19)。」1819年は特に苦しい年でした。修道院全体が正に病室だったからです。信心深く、純真で天使のような若い修道女のスール・エリザベスがその年の復活節の火曜日に帰天しました。彼女は幸せなマリアの娘の会の修道院への最初の入会者でした。そこで、ローモン師はシャミナード師に次のように伝え

てこの修道院の撤去を急がせました。「修道女たちがこの墓地のような修道院を放棄することは緊急を要します。彼女たちはここで望んでいる善をなすために必要な健康を維持することが出来ないからです。ここは恒久の病院に過ぎません。」

シャミナード師はこのことを納得し、1819年6月の年次の訪問の際、この致命的な修道院の放棄を決心しました。町の外れに位置していたアウグスチノ会の修道院が売りに出されていたので、師はそこを訪れ、共同体とその事業を避難させるに最適であると考え、その取得を決定しました。その地所はクリスマスのシーズンに購入され、修理されて、1820年9月初旬に修道女たちに解放されました。シャミナード師は自ら指揮して修道院の転居を行いました。それは、聖ヨゼフのご保護の下に、人々に目立たないよう水曜日の早朝に行われました。

マリアの娘の会は初期の著しい試練を断固克服しました。やがてよりさわやかな将来の前兆が現れました。その召命は増加し、大半の志願者が高く評価されたからでした。彼女たちの中には、ヴィルヌーヴ出身で、愛の天使のようなロルメ嬢(20)や創立者ドゥ・トランケンレオン院長の実のいとこのクララ・ドゥ・カステラ嬢がいました。このドゥ・カステラ嬢は、後に、コングレガシオンの指導者としてドゥ・トランケンレオン院長の後継者になりました。

メール・エミー・ドゥ・ロダによって創立されたヴィルフランシュ・ドゥ・ルエルグにあった修道会との統合さえ行われようとしていました(21)。創立の関係者たちは双方ともこの統合を望んでいたため、1817年から1820年まで、このことへの反対の障害の除去に努力しました。統合が行われるかどうかは彼女たち次第でした。しかし、み摂理の計画は恐らくこの統合に賛成されなかったのではないのでしょうか。様々な事情によってその実現が邪魔されたからでした。この二つの修道会の関係はもちろん親密で、聖家族の会エミー院長の修道女は、白色の帯を除いてマリアの娘の会の修道服とほとんど同じ修道服を採用していました(22)。

ヴィルフランシュの修道会との統合の交渉は失敗しましたが、その代わりに、マリアの娘の会には他の発展がもたらされることになりました。シャミナード師はアウグスチノ会から購入した共同体にマリアの娘の会員を移転させる時、彼女たちを有頂天にさせるようなうれい知らせを伝えました。それは、新たな共同体の開設のためにマリアの娘の会がその門戸を開放するということでした。シャミナード師は久しい以前から何名かの修道女を派遣してくださるよう各方面から要請されていたからでした。オーシュからの要請は1817年から、トネンからは

1818年からでした。しかし、師は、かつて、ミランにオラトリオ会の導入を急速に要請した聖シャルルに、聖フィリップ・ドゥ・ネリが、「翼が十分生えていない小鳥を巣の外にはばたかせてはならない」、すなわち、力以上のことを企ててはならないと諭されたように、こうした要請に対しては厳しい姿勢を示しました。師は、共同体の状態が、大きな事業の計画にはまだ十分耐えられないことを知っていたからでした。その上、創立の初期においては、会員を会の外に分散する前に会員の心に修道精神の基本を安定させることが最も大切に思われたからでした。師は次のように書き送りました。「忍耐強く待てば万事がうまく行われま。しかし、わたしは常に原典に帰ります。それは共同体が順調に運営され、会員が立派に養成され、成熟し、聖化されることです。聖人になればすべてが克服されます。しかし、平凡な、あるいは半端な修道女であればほとんど何も出来ないからです(23)。」

1820年、シャミナード師は、共同体が何らの妨げもなくトネンからの申し出を引き受けることが出来ると判断しました。慈善家で、タバコ製造工場長のフォーール・ドゥ・ラコーサド氏が、住民の大半がプロテスタントであったこの町にマリアの娘の会を誘致し、また、表面上は乗り越えがたい困難にもかかわらず、共同体の住居の準備のための何らの苦労も惜しまなかったからでした。

ボン・ペールは数日後(1820年9月)、6名の修道女を伴ってアウグスチノ会の修道院の引き受けに赴きました。師はメール・テレーズを新修道院の院長に任命しました。彼女はわずか22歳でしたが、賢明さや熱意はもちろん、まれにみる気高い精神で奉仕しました。しかし、マリアの娘の会はこのことを長い間喜んではいられませんでした。彼女は3年も経たない内に神に召されたからでした。彼女の帰天はトネンの人々が共に喪に服する機会になりました(24)。彼女が指導していた修道院はトネンの人々にとって神の祝福だったからでした。例えば、ちっ居生活が確立される前、一助修道女に過ぎなかったシスター・セン・フランソワは修道院の玄関の敷石の上から通行人に教え、多くの人々を神に導いていました。また、女子のコングレガシオンは以外に発展し、貧者の子供の学校が設置され、やがて開校された寄宿学校はマリアの娘の会にとってこの種の最初の活動になったからでした。

シャミナード師はこの創立と平行してアジャンとトネンにマリアの娘の会の在俗修道女会を創設しました。この会は修道生活には入っていないが、最も熱心なコングレガニストによって組織され、マリアの娘の会の何らかの活動に協力し、これを分かち合うことを意図したものでした。創立者シャミナード師によって与えられた会則の精神はボルドー地域で生活する修道女の精神と同じものでした。この在俗修道女会の目的は次のように規定されていました。「1. 世俗に

において会員の境遇が許す限り、キリスト教諸徳の完成に共に努力する。2. 女子青少年コングレガシオンを維持発展させる。」本修道女会の会員は、「従順の誓願を宣立し、マリアの娘の会への献身を約束しました。」また、会員が未婚の場合は、貞潔の誓願を宣立しました。彼女たちには自ら選んだ院長がいましたが、マリアの娘の会の修道院とその院長に従属していました。こうして、本修道女会はアジャン市とトネン市で計り知れない貢献をなし、ちっ居の生活が至るところで熱誠と愛徳の障害となっていたマリアの娘の会の活動を援助し、更に、特別な活動を実践し、特に、年の大黙想を実施しました。ボルドーからシャミナード師によってもたらされた至聖なる乙女マリアに対する絶え間ない信心は、1819年にジャクピー司教によって承認された会則によって、この在俗修道女会に盛んに実践されました。

ジャクピー司教に関する史家が伝えたように、「教区の中心的修道会」となったマリアの娘の会の困難な創立も、こうして堅固な土台の上に確立されることになりました(25)。なお、第二の創立を検討するには何年かさかのぼることになると思います。



注

(1) 1816年9月6日、メール・ドゥ・トランケレオンへ

(2) 1832年5月24日、バレ師へ

(3) シャミナード師の弟子の一人エティナル師(1878年ララン師への手紙)は、シャミナード師同様ある種のちっ居生活のない修道会の創立を望まないことを主張しました。世俗とかかわって活動する修道女の指導に当たる司祭に課せられる責任が重大だったからでした。また、師は、「ミゼリコルド会はみ摂理によって、優れた会憲によって、また、絶えず公に見守られていることによって十分守られている」ということを聞いていたに違いなかったからです。

(4) 他の修道会の総長補佐は一般に修道院の土地の管理権を持っていました。彼らはその修道会の様々な活動ではなく、修道会が関係する様々な地域の管理が割り当てられていました。

(5) 1816年8月11日

(6) 1816年7月20日

(7) 1816年10月10日

(8) 1816年8月11日

(9) 1816年11月18日

(10) ボルドーのセント・ユラリ教会の近くにあったいわゆる孤児の会の修道院は、大革命中、老齢の司祭たちの収容所として使用されていました。現在、この修道院はセン・ヴィンセン・ドゥ・ポール会の修道女によって使用されています。

(11) 孤児の会の共同体はメール・ローズ・ムリニエの指導の下になお1年間生き延びましたが、1818年に修道女たちは四散しました。ジャクピー司教はモアサックにミゼリコルド会の事業を開設したゼニエ夫人にこの修道院を提供しました。この修道会は今なお同修道院を使用しています。H. カリア著、「モアサックのミゼリコルド会創立者ゼニエ夫人」、188ページ以降、1898年、ドウニオル社、パリ、参照。

(12) 1817年4月6日、メール・ドゥ・ラシャペルへ

(13) 1819年9月29日、メール・ドゥ・ドラへ

(14) 1817年8月9日

(15) 1818年12月の手紙で問題として取り上げられたのは、一般に厳し過ぎるとされていた応接室に関する新しい規定でした。

(16) ちょうど、神経発作に悩まされていた修練者の進退について討議されていました。彼女は親元に帰されることになりましたが、どうしても修練院を去ることを望みませんでした。彼女は聖なる配偶者キリストに結ばれるかのように、チャペルの大きなキリスト像を抱擁し、哀願するほどでした。

(17) 1818年6月10日

(18) このことから、マリアの娘の会が最初の創立であることが分かります。その会憲も男子マリア会の会憲の編集に使われたからでした。

(19) 師は次のように話を続けました。「彼女たちはわたしを勇気づけるために短い手紙を書いて病床のわたしを慰めています。神のみがご存じのことを、そして、それはお恵みによってわたしに与えられたものですが、このことを読みとる一人の修道女がいます。(もちろん、神は彼女によって何をなさろうとされておられるか、わたしには分かりませんが。) このことがわたしを驚かせたことは今回だけではありません。神のみ業はあがめられますように。」

(20) 彼女は当初から創立の発起人たちと一緒に活動することを望んでいましたが、ヴィルヌーヴの人々は彼女を引き留めるべく立ち上がりました。

(21) エミリ・ドゥ・ロダ(1787-1852)は、1816年に修道会を創立し、会員は貧しい子供たちの教育に献身しました。また、彼女は極めて親しかったドゥ・ラムルス嬢に倣って悔悟少女たちも受け入れていました。彼女は1872年に尊者に上げられました。レオン・オビノー著、「エミリ・ドゥ・ロダの伝記」、6版、1891年、リオン、参照。

(22) こうした関係によって、メール・ドゥ・トランクレオンは男女のコングレガシオンをヴィルフランシュに誘致することに成功しました。また、この事業を熱心に指導したマルティ師はシャミナード師と接触することが出来ました。

(23) 1818年6月10日

(24) シャミナード師は極めて控え目な判断の持ち主でしたので、彼女の帰天について次のように述べました。「メール・テレーズは去る11月3日に聖徳の香りの内に帰天しました。彼女の帰天以来、マリアの娘の会は彼女の明らかな保護を感じています。」(1823年12月、クローゼ土への手紙)

(25) デルリュ著、「ジャクピー司教の生涯と司教座に関する略歴」、126ページ、1874年、アジャン。



第 22 章 マリア会 (1817)

コングレガシオン内での修道生活の試み、15 名 ❖ ジャン・バプティスト・ララン
❖ 活動への協力 ❖ コリノー、ブルニオン-ピエール、ルイ・タギュザン、ドミニ
ック・クルーゼ ❖ 1817 年 10 月 2 日 ❖ ジャン・バプティスト・ビドン、アントワ
ン・カントー ❖ セギュール通りのでの共同生活 ❖ ラポーズとダヴィド ❖ シ
ャミナード師の共同体外の生活 ❖ マリア会。

マリア会の創立はほとんどマリアの娘の会の創立直後行われました。同一の
原因は同一の結果をもたらすように、マリア会の創立に関しても、その手続き
はより簡単で、より順調でした。シャミナード師は自らの使命の実践についてあ
る女子修道会の協力を高く評価していましたが、なお、青少年の中に協力者
を確保することを特に望んでいました。師は彼らに大きな期待をかけていたの
で、特別な配慮を彼らに割いていました。そこで、メール・ドゥ・トランケレオンに
次のように書き送りました(1)。「わたしはこれまで常にコングレガシオン全体に
配慮してきました。特に、青少年のコングレガシオンには一層の配慮をしました。
彼らは一番難しいグループではありますが、宣教に関してわたしが最も意図し
ている目的に最も寄与出来る青少年たちだからです。」

王政復興当初、男子青少年コングレガシオンで福音の勧めを実践していた
小さなグループは15名ほどで組織されていました(2)。彼らの共同誓約文は
次の通りでした。

「神の最大の光栄のため、また、尊い無原罪の御宿りの乙女マリアのご保
護の下で至誠三位のみ名によってわたしたちイエス・キリストの兄弟は、自らの
聖化と至上至福の御主のしもべの増加に貢献するために、努力を結集するこ
とを熱望して共々次の誓約を致します。わたしたちは各人の必要に応じて生
活の規則を遵守します。この規則は全員に共通の次の四つの項目を含んで
います。1. 2週間ごとに聖体を拝領する。2. 毎日念とうを行う。3. 毎朝先見
の糾明をなす。4. 毎晩良心の糾明をなす。わたしたちはキリスト教の真の精
神に従って、各人一人の生徒を養成するよう努力します。わたしたちは生活
の規則、生徒の指導、わたしたちに可能な他の熱誠の活動を指導司祭の判断
に委ねます。以上の件に関しておよそ3箇月のために指導司祭の下で従順の
誓願を宣立致します。」

15名の氏名はその一部しか伝えられていません。伝えられているのは7名で、彼らは当初のマリア会員となり、後ほどその氏名を挙げることになる者で、親しくこのグループに属していた者でした。マルク・アルノザン、ルストー兄弟、そして、数名の将来の修道者も同様に彼らの内に含まれなければなりません(3)。共同誓約文で確認されたように、従順の誓願のみは全員宣立しました。また、当時は極めて不安定な時代であったにもかかわらず、大半の者が貞潔と熱誠の誓願を宣立していました。

例えば、彼らの一人で、たる屋のビドンは清貧の誓願を含む3誓願を宣立した申し分のない修道者でした。彼らは身分の要請に応じて清貧の誓願を宣立していたからでした。彼らは全員マドレーヌの活動に熱心に献身しました。その熱誠は、コングレガシオンの再建の当初、他のどのような要因よりもコングレガシオンの大きな繁栄に寄与しました。

もちろん、シャミナード師の熱望はこれに止まるものではありませんでした。これらの協力者たちの協力がどのように献身的であったにしても、彼らの個人的関心を考慮する以上のことを要請することは出来ませんでした。師が必要としたのは真の使徒としての彼ら自信とその時間の完全に自由な協力者だったのです。真の使徒の唯一の関心事は神とマリアの関心事だからです。師は自らの一言で十分彼らを納得させることが出来ることを知っていました。しかし、当日までそのことを彼らに伝えることをちゅうちょしていました。それは、み摂理のおぼし召しがあらかじめ伝えられることをいつも好んでいたからでした。その上、彼らグループの存在が秘密であったというよりもその影響が極めて効果的であっただけに、彼らが引き抜かれるならコングレガシオンの活動が妨げられることを恐れたからでした。いずれにしても、修道共同体の利点は彼らグループの短所を十分補うことが出来るのは確実だったからでした。したがって、マリアの娘の会の創立の時以来、すなわち、1816年以来、師は選ばれた弟子たちを結合するきずなを強化することが示される最初の機会を捕らえることを心がけていました。

既に提示されていた会則はコングレガニスト修道者の統合の促進を目指し、彼らにある種の共同生活を次のように規定していました。「二人ないし数名の修道者が共同生活が出来れば、共同で毎日行うべき聖務が調整出来る。すなわち、規定された方法で小さな会合が出来るからである。数名の修道者、修練者、あるいは、志願者が近隣に住み、何らかの聖務をどちらかで行うため容易に集合することが出来るようになれば、この件は容易に合意出来るに違いない。」ララン師の伝えるところによれば、シャミナード師は、使徒たちの時代の初代教会の信徒が共同で生活していたように、修道者を在俗のまま生活させ

る考えを抱いていたということです。しかし、「シャミナード師はこのような修道生活の様式が不可能であることも分かっていました。しかし、在俗形式の修道生活の考えを完全に捨てることなく、本来の共同体によってのみ修道生活が実現出来ることを少しずつ考えるようになりました(4)。」いずれにしても、シャミナード師はいつもの通り何事も急ぎませんでした。何事も忍耐強く神のみ旨に委ねた師は、落ち着いて祈りや犠牲を行い、会員を何ら刺激することなく、神への奉仕と無原罪の御宿りの乙女マリアの使命への協力の望みを彼らにますます燃え立たせることで満足していました。その期待は早速到来しました。神は言わば師に自ら最後の一步を踏み出すように促したからでした。

ご存じの通り、Congregacionの分校さながらのエステブネ校の教師たちの中には優れた能力が認め始められていた若い司祭たちがいました。その中でも、ジャン・バプティスト・ララン師はシャミナード師にとって一番親しい弟子でした。彼は1795年にボルドーで生まれ、12歳の時から志願者の資格でCongregacionの集会に出席していました。彼はこの当時からマリアへの献身の証書を皮袋に入れて常に身に着け生涯離すことはありませんでした(5)。シャミナード師は彼の父親とも懇意にしていました(6)。ララン師の父親が帰天した時、シャミナード師はその悲しみを彼に伝えたほどでした。シャミナード師はそのころから既に彼の知識や心の優れた能力を評価していました。

ララン師は古典文学の履修後、医学を目指し、17歳でボルドーの総合病院の四部門の一つのインターンの身分の試験に合格しました。彼がラテルロード氏と共にリンネ式動植物分類社創立者の一人になったのはこのころのことでした。彼は勉学の完成のためパリに赴き、ジャン・バプティスト・ラコンブやアドルフ・デュプシュのようなボルドーの数名の友人と共にリオタル校に入学しました。この学校は数年後スタニスラス高等中学校と改名されるはずでした。彼は、当時、司祭や修道者の召命の温床になっていたこの学校で聖職者の召命を受けることになりました。彼は、ある日、ある特別な偶然の出会いによって、ある没落者を救うべく召されたからでした。

ボルドーに帰った師は、エステブネ校で最上級のクラスを担当し、教区の神学校に入るか修道会に入るかその選択に迷っていました。彼はシャミナード師やCongregacionへの献身を惜しまず、15名のCongregacionist修道者のグループに熱心に参加していました。

1817年の春のある日、ローザン師によるすばらしい黙想会の間、彼はシャミナード師を訪れ、自分の決心が決まったこと、イエズス会への入会の計画を思い止まったことを興奮しながら話しました。それは、最初の宣教活動後、神が

他の場所での活動を望んでおられることが分かり、コングレガシオンの指導者の生活や活動に類似したこの種の生活や活動に召されていることを感じたからでした。ララン師は次のような自筆の覚え書きを残しました(7)。

「シャミナード師はわたしの打ち明け話を聞いて涙を流すほど感動されたように思いました。感極まった師は次のように答えました。『このことはわたしが久しい以前から待っていたことです。神はたたえられますように。神のみ旨が表明されました。したがって、その計画を実行に移す時が来たのです。この計画は神から啓示され、20年来追い求めて来た計画です。』そこで、シャミナード師はわたしにこの考えを次ぎのように説明しました。『修道生活はキリスト教のもので、それは、キリスト教が人類のものであるのと同じです。修道生活は福音の中で不滅です。それは、福音が世界で不滅であるのと同じです。修道者がいなければ、福音は人類社会のどこにも決して完全に適用されません。したがって、福音の勧めの実践を人々に可能にする修道会がなければ、キリスト教の再建を強く主張することは無駄です。いずれにしても、大革命前と同じ形式の修道会の再建を熱望することは今日困難であり、不適當です。』

修道生活にとってどのような形式も本質的なものではありません。外見は在俗人の生活様式であっても修道者であることが出来るからです。悪意のある人であってもその修道生活には不快感を起こさないばかりか、修道会の再建を妨害することは更に困難であるに違いありません。世界も教会もこうした修道会によって教化されるに違いないからです。したがって、修道3誓願を宣立し、しかし出来る限り、修道名も、修道服も、市民的地位もなく、修道共同体を作ることにしましょう。Nova bella elegit Dominus 『神は新しい戦いを選んだ(8)。』神のみ子が地獄に対する最後の勝利を保留された無原罪の御宿りの乙女マリアのご保護の下にすべてを委ねましょう。Et ipsa conteret caput tuum 『彼はお前の頭を砕き、』。師は感極まって次ぎのように叫びました。『皆さん、へりくだって婦人のかかととなりましょう。』わたしはこの師の打ち明け話に深く感動し、しばらく熟考する時間を願い、とりあえずこのことを友人たちに話して、シャミナード師の考えと計画を彼らに伝えることを約束しました。」

以上の光景が繰り広げられたのは5月1日で、シャミナード師は後ほどこの日を「すばらしい記念すべき日」と呼びました(9)。マリアご自身こそ、そのしもべが望むことが出来たすばらしい最高の慰めをお与え下さったのではないでしょうか。

ララン師はシャミナード師の計画を友人のコリノー師に直接打ち明けました。コリノー師は、「わたしは何の抵抗もなく、この提案を受け入れ、早速賛成しま

した。この自発性はわたしにとって普通ではありませんでした」とわたしたちに伝えていきます。他方、シャミナード師も、その弟子の一人で普段はただオギュストと呼ばれていたブルニョン・ペツリエールにこの計画を伝えていました(10)。オギュストもその友人と共に身をささげる用意が出来ていることを早速宣言しました。ララン師は、また、次のように続けました。「一度3人のこの決意を確認した創立者は、この計画が既に確立されたもののように考えました。事実、3人は確かな将来が約束出来る人たちであるように考えられたからでした。」ララン師は、このくだりでこの件を、そして特に自分自身のことを控え目に述べているように思われます。人間的に言えば、彼らのこの計画への参加は成功の大きな保証になったからでした。ララン師はその経歴が十分証明しているように優れた能力の持ち主でした。また、ボルドーの名門出身のジャン・バプティスト・コリノー師も、極めて豊かな教養に支えられて非凡な雄弁に恵まれていました(11)。最後に、6歳年上で、より経験豊かで常識に恵まれていたオグストは同僚の向上に貢献しました(12)。彼もエステブネ校で古典教科の大半を終了していましたが、在俗生活に入るか教区聖職者の活動生活に入るか迷っていましたが、実際には神学校に入っていました。しかし、教区聖職者の活動生活への召命がないことを確信したので、まず、ラフォンと共にフィジャックの高等中学校で、次に、エステブネ校でエステブネ師の協力者として教育活動に専念しました。彼はララン師やコリノー師ほど鋭い才能の持ち主ではありませんでしたが、その性格の誠実さ、すばらしい良識、豊富な知識は彼を優れた協力者にしました。

ララン師は更に次ぎのように述べました。「シャミナード師は、自我に拘束されず、心から神に献身することが出来るすべての人々にその事業を提案出来ると考えました。やがて、それらの人々の中から二人の申込者が現れました。それは、商業に従事していた二人の青年で、ルイ・ダギュザンとクルーゼ兄弟の末弟でした。」二人とも28歳でした。ルイ・ダギュザンはボルドー出身でしたが、1831年に若くして帰天したので、新生の本会は彼の優れた徳と献身的な活動を長期にわたって享受することは出来ませんでした。オート・ガロンヌ県サルムザン出身のドミニク・クルーゼは優れた修道者的性格と実践的手腕の才能に恵まれて、シャミナード師によって、「マリア会の礎石の一人」と呼ばれましたが、正にその通りでした(13)。もし、彼が在俗生活を送っていたら、その柔らかな物腰、まったく如才のない姿勢、自己抑制、事業に対する知識等によってその成功は保証されていたに違いありません。ところが、修道生活に移し替えられたこれらの同じ性格は新生の本会に貴重な貢献をもたらすことになりました。

相変わらず慎重に行動するシャミナード師は、あれほど希望に満ちて宣言

した本会の創立を余り急がないよう用心していました。師は、弟子たちのすばらしい意向が、好機の到来と恩恵の働きの下に固まるに任せ、セン・ローランの木陰での親しい集會に彼らを引き留めることで満足していました。こうして、宣教活動を意図する熱意に燃えた青年たちがその寛大な熱情を吐露していたのはこのセン・ローランであり、指導司祭のシャミナード師が燃えるような言葉でマリアへの奉仕と余すところのない献身の幸せを彼らの心に繰り返し浸透させていたのもここセン・ローランでした。彼らは祈りと熟慮、計画された本会創立に関する相互の意見交換に従事して5ヶ月が過ぎました。青年たちは日々ますますその決意を固め、決断を下す前に師の指導の下に決意のための黙想を指導してくださるよう促しました。

これら5名の青年が、指導司祭のシャミナード師にその決意を固めたことを明かに表明したのは、教会が守護の天使の祝日を祝う当日、すなわち、1817年10月20日の木曜日、黙想の集結の日でした。彼らは師にすべてを委ね、修道誓願によって結ばれる恩恵を懇願したのでした。シャミナード師は感動を押さえることが出来ず、彼らをしっかり胸に抱きしめ、早速誓願を宣立することは許可しませんでした。その日から、彼らを頼りにすること、修道共同体で生活するための様々な手はずを整えることを保証しました。こうして新しい修道会が創立されました(14)。

この新修道会創立のうわさはたちまち広まり、二人の職人が駆け付け、マリアのしもべとして、マリアへの献身のため入会する恩恵を懇願しました。伝えられている通りこの二人は、ジャン・バプティスト・ビドンとその友人のアントワン・カントーでした。二人とも職業はたる屋で、それぞれ、1778年と1791年生まれで、謙そんで率直、熱心にコングレガシオンの活動を援助することで評価されていました。ビドンは1801年からコングレガニストで、シャミナード師への忠実さは強固でした。コングレガシオンの廃止の時期にカントーを指導司祭に紹介したのはこのビドンでした。カントーは1810年2月2日にコングレガシオンへの献身の誓約が許可されましたが、やがて、兵役の勤めを果たすためボルドーを後にしました。最も困難な徳行の実践によって鍛錬されて帰郷した後、セント・クロワ小教区でその積極性をあかしするものとして、最も熱心なコングレガニストの一人に挙げられました。やがて、本会に入会し、修道誓願を宣立しました。この二人の新たな入会者は7名の創立者の数に数えられることになりました。

ラン師は本会創立のくだりを次のように続けました(15)。

「ランとコリノーは司祭職を目指し、タギュザンとクルーゼは上級の勉学を継続していなかったのが修道生活のみを目指し、勉学を完全に終了していた

にもかかわらずオギュスト・ペリエールも同じく修道生活を目指し、ビドンとカントーは施設の維持管理の任に献身することになりました。こうして、本会創立の当初から司祭、教育修道者、そして、施設管理修道者の3部門から成っていました。」

セン・ローランでの数回の予備集会の後、オギュストは他の様々なかかわりによって妨害されないよう、早速共同生活を実施するための住居を探し賃貸することになりました。ラランは、在俗コングレガニスト修道者の会則の抜粋で、共同生活の諸条件に適した臨時の会則作成を早速委任されました。シャミナード師はこの会則を承認し、11月13日にこれを会員に提示しました。会則は6項目から成っており、新生修道会会員の相互関係を明確化し、同時に共同でなすべき聖務、すなわち、念とう、自白譴責、そして、糾明を確定したものでした。数日後、オギュストはマドレーヌの近郊に小さな住居を見つけこれを貸借しました。それはセギュール通りの袋小路の奥にあった小さな庭園付きの質素な家屋でした(16)。ラランの伝えるところによれば、「この家屋には1階に5部屋あったので、チャペル、自習室、寝室、食堂、そして、台所が作られました(17)。」

11月24日、この住居の祝別式が行われ、翌日25日にオギュストはこれを受け取りました。ラランとダギュザンは早速そこに住み込みました。残りの方々も自由になるに従って彼らの後に続きました。ただ、コリノーのみは年内には入居しませんでした。彼の召命に驚き、不安になった両親が強く反対したからでした。12月11日木曜日、無原罪の御宿りの祝日の8日目に、これら7名の青年は質素なチャペルでシャミナード師の下で初誓願を宣立しました。全員喜びと希望に満たされていました。

シャミナード師は以上の経過をダヴィオ大司教に報告し、その認可を得て発足することになる新修道会の様式について1年間研究することを決意しました。同時にこの期間は、会員の召命を試みることに、彼らの寛大な決意とこの修道会設立という計画に覚悟しなければならない見込み違いとを各人に考慮させることが出来るためでした。創立者はこのようにして、その最初の弟子たちに修道生活に関する基本的な諸徳をゆっくりと体系的に訓練する余裕を持つことが出来たのでした。

シャミナード師は、こうした訓練期間中、彼らがこれまで従事していた業務を離れることを許可せず、その仕事が終わり次第、セギュール通りの袋小路の住居に帰って共同生活をなすことのみを要請しました。オギュスト士が院長に任命されました。その年齢と性格が正にこの職責にふさわしかったからでした。

マリアの娘の会に導入された3部門は新生の共同体にも採用されました。ラン師は霊生、コリノー師は教育の責務を負わされました。ラン師は、院長の認可を受けるべき事柄を別にして、霊生部長の資格で最初の会則及び共同の祈とう書を作成しました。

カントー士は財務部長に任命され、共同体の管理に関してはオギュスト士の意向に委ねることにしていました。オギュスト士が共同体に到着して、「わたしは何をしなければなりませんか」と尋ねた時、シャミナード師は、「あなたには家事が委ねられています。ベッドを整えることやその他の家事に従事するのもあなたです」と答えました。しかし、彼は、「わたしたちは自分自身でベッドを整える習慣があります。しかし、料理人がいません」と答えたので、彼は急きょ料理人に任命されました。「彼にとって料理は新しい仕事でしたので、まず、初心者であることはすぐ分かりました。しかし、意見を求める配慮、与えられた教訓に従う気配り、また、自らの試みや方法によって、かなりの料理が準備出来るようになりました(18)。」

誠実な好意、深い謙遜、更に、気兼ねやわざとらしさの無い融和は新会員間の相互関係を特徴付けていました。彼らの一人は次のように伝えました(19)。

「これらの青年たちは皆キリスト者としてすばらしい自由の内に育成されてきました。彼らは20歳まで、あるいは、それ以上の年齢まで、世の中の様々な事柄、すなわち、家庭関係、友人関係、仕事、勉学、娯楽等にかかわって生きてきました。彼らの気晴らしは、端的に言えば、最も地味で良心的に行われました。また、彼らは私欲や野心、世に対する嫌悪、人々の救済に関する不安等、どのような人間的動機によっても動かされませんでした。久しい以前から相互の友情によって結ばれて、お互いに、また、シャミナード師に対しても無制限な信頼を寄せていました。最後に、大革命後、そして、少なくとも下層階級の両親から生まれ育った彼らは、どのような貴族的な偏見によってもこり固められることなく、彼ら自信の前歴や家族の前例によっても、過去とは何らかのかわりもありませんでした。彼らは大革命の残虐さに恐怖におびえていましたが、革命政府を終わらせようとしていた新しい治世の下で晴れ晴れと生きていました。自由に善を行う以外には市民権など求めませんでした。

修道生活の基礎を何ら変更させないこれらの考えや習慣、すなわち、禁欲、神への全的献身は、言わば、マリア会の性格、特徴、そして、基本精神になりました。厳格主義者でも排他主義者でもなく、古い習慣のとりこでも追随者でもなく、政治政党派のあらゆる偏見や影響から解放された新生の修道者たち

は正直に神への一致の生活に向かっていました。シャミナード師は他の角度から修道生活を体験していたとはいえ、当初から彼らに修道生活の最善を求めませんでした。弟子たちの自由にくつろいだ態度を余りにせず、イエス・キリストの模範によって修道者的禁欲を確立する諸徳の実践を強調しました。

いずれにしても、シャミナード師は修道者の外見に関しては彼らに禁欲的のものは何も与えませんでした(20)。ラン師は更に続けました(21)。

「わたしたちは全然修道服を着用しませんでした。また、何らかの形で世人の注意を引くことが出来るものをすべて避けることさえ決めました。司祭、修道者、院長の呼称も避け、某さん、と呼びました。こうして、修道者的形式の回避はマリア会の存在理由の一つになりました。」

シャミナード師は修道者を特徴付ける内的精神を強調する以外は何も強調しませんでした。したがって、修道者の養成には慎重に配慮し、確実で、継続的な進歩を保証する慎重さと毅然とした態度で各会員を指導しました(22)。師は、自らの様々な業務を考慮することなく、会員の必要とする時間のすべてを彼らのためにささげました。毎週、彼らの下に赴き、長時間の対話の中で、修道者の諸徳のすべてを一つずつ教え、最も基本的な徳、特に、情欲と潜心に対する警戒について強調しました。更に、謙遜の徳が修道服の代わりにならないこと、また、信仰の精神や念どうの精神が、彼らの宣教使命が必然的に危険にさらされることになる世の危険性に対する唯一の救いになるということを繰り返し強調して止みませんでした。師の創立当初の幾つかの講話が伝えられていますが、それには、ほとんど一挙に世から修道生活に移し替えられて新修道会の礎として役立つことを目指す彼らを強固に鍛えるために欠くべからざる厳格さがあふれていました。この小さな共同体では、当初から、毎週金曜大齋が行われていました。また、会則のゆるみと乱用の予防を目指す自白譴責は毎週の修養の中で重要な位置を占めていました。特別の恩恵を神に懇願する時、聖ヨゼフはその仲介者として選ばれました。そこで、彼らは聖ヨゼフの誉れのために金曜日の大齋に加えて水曜日にも大齋を行いました。

共同生活の第一年目は著しい困難もなく過ぎ去りました。創立の当初から、既に老齢の域に達した二人の人が、晩年における望外の恩恵として、マリアの新しい子供の数に加えられる許可を懇願してきました。その中の一人で謙遜なラポーズ氏はボルドーから遠く離れた地域の父親の会のアグレガシオンや青少年コングレガシオンの活動に献身していましたが、もう活動を続けることが出来ない年齢ということで本会ではアッフリエとしての称号しか認められません

でした。彼は会員の共同体がより広くなった翌年から修道者と共に生活しました。マリアにささげられた共同体で晩年を過ごすことを幸せに思い、自らのすべての収入を共同体の会計に収めました。彼は、「財務のおじいさん」の名でよばれていましたが、1832年、会員にみとられて帰天しました(23)。

もう一人は有能な弁護士ダヴィド士でした。彼は久しい以前から文筆と助言でシャミナード師に協力していました。彼は波乱に満ちた60年の生涯を晴れやかに生きてきましたが、なお、マリアのみ名をたたえ、マリアへの信心を広め、マリアによって御子に栄光をもたらすために常に新しい熱情をささげる希望に燃えていました。彼は新生の修道者の中に受け入れられ、同様に有期誓願を宣立しましたが、いずれにしても、その翌年からしか彼らとの共同生活には入りませんでした。彼はシャミナード師の秘書として本会の上には素晴らしい奉仕活動を展開し、事業の伸展に大きな影響を及ぼしました。しかし、豊かな想像力から起きる錯覚によってでしょうか、自らの素晴らしい意向もしばしば台無しにすることがありました。こうした過ちにもかかわらず、彼は極めて貴重な協力者でした。もちろん、直接シャミナード師の監督下に置かれている限り、何ら問題はありませんでした。彼は子供のように質朴に従っていたからでした。

シャミナード師は会員の側において彼らと生活を共にすることが出来ればこの上ない幸せとと思っていましたが、神の前にこのような決心の利点や不都合を熟考したところ、このことは神のおぼし召しではないことを確信しました。共同体生活は師の大切な活動であっても唯一の活動ではなかったからでした。したがって、もし、完全に共同生活に参加すれば、なお配慮しなければならないその他の事業の創立をおろそかにしかねないことを恐れたからでした。そこで、新生の本会に完全に取り込まれることを避け、共同体で効率の上がない奉仕をなすより、外部の危険から本会を守ることが最良であるに違いないと考えました。こうした考えから、マドレーヌの自宅を保持し、自ら不在の時も時々会員に評議員会を開催させ、院長職にも就任せず、前述の通りこれをオギュスト士に委任し、自らは指導司祭の資格のみを保留しました。

このことは、会員との利害関係を区別しようとしたわけではなく、まったくその反対でした。最初の修道者の一人がこの点に関して師に聞いたところ、師は次のように答えられました(24)。

「創立者は長上の資格で誓願を受け入れる以上、会と極めて密接な関係を結ぶことにならないでしょうか。例えば、従順の誓願は長上と誓願者との間に相互のきずなを結ぶのではないのでしょうか。他の誓願についても、また、会憲についても同じことが言えます。もし、創立者が会員の誓願や約束を受ける者を

任命し、自ら退いているなら、その場合は別でしょう。」その上、新生の本会を効果的に指導出来るのは創立者のみでした。師は後ほど総長の資格を正式に引き受け、他の事業の要請がある場合以外は自らの生活を修道者の生活と区別しませんでした。

シャミナード師のこの姿勢は、新しい共同体の周辺でその匿名を維持するのに寄与しました。したがって、本修道会はボルドーで生まれた最初の男子修道会でしたがここではほとんど注目されませんでした。コングレガシオンやシャミナード師の友人たちの間で、この共同体は、「小さな会」と呼ばれ、この呼称はずっと以前から親しまれていたものでした。公式には既に「マリア会」と呼ばれていましたが、師は、ボルドーとアジャンの両修道会を「マリア会」の名称で統一することを望んでいました。この名称は無原罪の御宿りの乙女マリアへの奉仕に極めて密接な共通の名称だったからです。

同じころ、極めて偶然の一致で、献身的な司祭コッレン師の指導によって別のマリア会がリオンに誕生していました。この二人の創立者と二つの修道会が相互に知り合うようになったのはそれほど後のことではありませんでした。したがって、相互の修道会の間で合併の話が一時持ち上がったようでしたが、両修道会はそれぞれ独立して存在する理由が証明されました。それぞれの目的が明確に異なっていたからでした(25)。

その他の男子修道会、例えば、ドゥ・マズノ司教による無原罪のマリアのオブラト会、シャンパニャア師によるマリアの小さな兄弟会、ボードヴェン師による無原罪のマリアの子供会は特にマリアの世紀と言われたこの時代の夜明けにほとんど同時に創立されました。それぞれの会は異なる靈感によって導かれたもので、異なる軍団であったとはいえ、教会を新しい戦いと新しい勝利に導くマリアの唯一の軍旗の下に一線に整列したものでした。



注

- (1) 1814年10月8日
- (2) ララン師、「歴史概要」、4ページ
- (3) 例えば、ピエール・ブスケ
- (4) ララン師、「歴史概要」、5ページ
- (5) この事実はドゥ・セン・ポール著、「スタニスラス校史概説」、262ページ、1881年、によって証明されています。ララン師に関しては、前述の「歴史概説」や「各種伝記辞書」、

特に、「有名フランス人霊廟」、レーネ及びアワール著、1867年、パリ、で、師に関する項目を考察しなければなりません。

(6) ジャン・ガブリエル・ララン師は、測量の専門家でした。大革命時代には、病院経営の会計係でした。また、恐怖政治の間では、聖ヴィンセント会の修道女を保護することが出来ました。氏は1793年10月29日の軍事委員会によって厳しい6年の刑に処せられました。恐怖政治の後釈放されました。

(7) 「歴史概説」、6ページ

(8) 判事の書、5章8節

(9) 1833年5月6日、ララン師の手紙

(10) わたしたちも洗礼名でないこのオギュスト名で彼を呼ぶことにしました。彼の本名はジャック・ブリュニオン・ピエールでした。

(11) ジャン・バプティスト・エミー・コリノーは1796年5月26日に生まれました。彼は、1814年に帰天したセン・スレン教会の主任司祭ジャン・ゼルメン・コリノー師の甥でした。

(12) 彼は1789年6月13日にボルドーで生まれました。

(13) 1833年5月23日、ショヴォー師への手紙。また、1832年12月10日には、クルゼー士に次のように書き送りました。「わたしはあなたを会の中で自分自身のように見なしています。」クルゼー士の兄弟は、ボルドーで大きな貿易商を設立し、その正直さは周知の通りで、その子息フェルディナンはジロード県の県会議員でした。

(14) 本会は創立記念日として当日の思い出を伝えてきました。本会は、一般典礼より上級典礼として守護の天使の祝日を祝う認可を聖座から得ました。

(15) 「歴史概説」、8ページ

(16) 言い伝えによれば、カイヤベの袋小路は旧セギュール通りから出たところでした。現在はキュルソル通りです。

(17) 「歴史概説」、9ページ

(18) 1819年8月25日、カントー士の帰天の折りのオギュスト士の談話

(19) ララン師の自筆の覚え書き

(20) 1826年にシャミナード師は次のように語りました。「大革命中、修道生活はあらゆる中傷を浴びたので、当世代の人々は修道生活など必要ないと思っているのでしょうか、何と愚かなことでしょう」したがって、師が考えていたのは、新修道会が絶対に慎重さを保たなければならない外的な行動形式や発言についてでした。

(21) 「修道会辞典」、4巻、746項

(22) 最初の修道者の一人の個人的覚え書きによって直接のあかしとして伝えられたも

のです。

(23) 晩年のジョフル師あての手紙、269ページ

(24) 1824年3月31日、カイエ師への手紙

(25) リオンのマリア会の起源は1816年にさかのぼり、1836年に最終的に設立されました。その組織と活動はイエズス会を想起させました。コッレン師とシャミナード師の関係は双方から証明されました。シャミナード師は1844年にカイエ師に、「コッレン師はまりスト会の総長ととても親しかった」と書きました。ゴージェロン師は(1899年11月7日のプラズネ師あての手紙)で次のように断言しました。「コッレン師はこの二つのマリア会の合併についてわたしに話しました。しかし、それぞれの会の目的が、相互の歩み寄りを可能にするには余りにも違い過ぎていました。」コッレン師の生涯はヴィツ社から匿名で出版されました。1900年、リオン。ゲイ師によるものと思われます。



第 23 章 新生マリア会の特徴 (1818)

最初の黙想会と終生誓願 ❖ 会憲草案 ❖ 司祭修道者と信徒修道者の協力 ❖ 修道服 ❖ 修道会の精神、熱誠の精神 ❖ 内的精神 ❖ 修道会の特徴、マリアへの献身 ❖ 信仰 ❖ 謙そん ❖ 家庭の精神 ❖ 黙想会 ❖ ローマからの恩典 ❖ カントー士の帰天。

シャミナード師は、マリア会会憲の草案作成を終了したことを1818年8月18日にダヴィオ大司教に報告し、これを大司教の審査に委ね、やがて開催されようとしていた黙想会のために祝福を願い、次のように書き送りました。「大司教様、わたしは大司教様が望まれることを望み、何事においても大司教様が望まれることに従いたいと思います。わたしは極めて不完全な者ですが、神は御哀れみによってわたしに鼓吹されたご計画を完成させるに違いないことを確信しています。」

黙想会は静寂なセン・ローランで8月18日に開始され、9月5日に終了しました。シャミナード師固有の表現によって、「マリア会の創立が厳粛に発表されたのはこの時でした(1)。」16名の黙想者が出席していました。この中には、既にご存じのアジャン教区の二人の司祭も含まれていました。一人は大神学校校長のムーラン師で、もう一人はセント・ラドゥゴンドゥ教会の主任司祭のローモン師でした。ジャクピー司教は創立者あての次の手紙を添えてこの二人を黙想会に参加させたのでした。「わたしは匿名で彼らを黙想会に参加させようと思いましたが、出来ませんでした。立派な成果が挙げられるよう期待しています(2)。」このように表明した司教には、これら二人の司祭をシャミナード師に委譲する考えが毛頭なかったからでした。また、ドゥ・ランケレオン嬢とそのグループの女子青年たちを教区に引き留めることに司教がどれほど固執していたかも想像されました。司教は、どんなことがあっても、この最も熱心な二人の司祭の協力者を失うことを承諾出来なかったからでした(3)。

いずれにしても、司教は、シャミナード師をすばらしい使徒の教育者と認めて、1年前から、二つの神学校の指導司祭に要請していました(4)。司教の理想は、同教区の「司牧」のために両修道会と類似の教区立の修道会を設立することでした。司教はある司祭に次ぎのように書き送っていました。「わたしはかつてペリギュールにあった活動をこのアジャンにも実現したいと思っています。事態は好転するに違いないからです。そこで行われるすべての善があなたに託

されることとなります。したがって、わたしに何らかの慰めになることを知らせてくださいますよう、また、少なくとも、あなたがわたし要請することがあれば出来るだけ早くお知らせ下さい(5)。」いずれにしても、マリア会が既に創立されていたので、ジャクピー司教はご自分の計画を実現する手段をマリア会に求めていたのです(6)。シャミナード師が8月の黙想会を司教に通知したのはこうした時期でした。そこで、司教はムーラン師とローモン師に黙想会参加を許可したのでした。

この黙想会にはこれを司会し指導したシャミナード師以外に、ダヴィド士とラポーズ士を含む最初の会員7名、そして、全員コングレガニストの4名の新志願者が参加しました。この4名は、ボルドーの良家の出身ベルナール・ロジェとセン・ルーベス出身で、一般庶民の身分で確かな教養を備えていたジャン・ニュヴィエル、ジャン・メメン、そして、ジャン・アルムノーでした。このアルムノーだけは数年前から私誓願を宣立していました。

黙想の8日間は好評の内に余りにも早く過ぎ去りました。黙想参加者たちは、シャミナード師が感動を込めて繰り返し強調した講話に飽きることなく耳を傾けました。彼らはマリアに選ばれた家庭に属したこと、その宣教師として世界中に派遣されるよう召されたことをどんなにか喜んでに違いありません。彼らは何よりもまず、完全な禁欲が要求される修道生活の意義を理解し、神とマリアに永久に献身する熱意に燃えていたからでした。

シャミナード師は、彼らに終生誓願の宣立を許可する前に、自ら作成した最初の会則を伝え、神のみ旨が示されるどのような考えも実践するよう要請しました。こうして、師は、既にダヴィオ大司教から許可を得ていたのです。オグスト士とララン師、ビドン士とダヴィド士、そして、ダギュザン士とカントー士の終生誓願を受けました。修練院に入らなければならない最後に入会した者を除いた他の人々は3年間の有期誓願を宣立しました。1818年9月5日の黙想集結日に、シャミナード師はボルドー大司教名で、「マリア会が公式に承認された」ということを報告しました(7)。同夜、ダヴィオ大司教は会員たちを訪問され、創立者の誓願受領を批准され、全会員に激励と信頼の言葉をかけられて祝福を与えられました。

シャミナード師の喜びはアジャンに帰る二人の司祭に託されたジャクピー司教あての次の手紙に表れていました(8)。「この黙想会はだれも想像出来ないほどの熱心さと潜心のうちに行われました。黙想参加の青年たちはもっぱら聖なる事柄のみを熱望していたからです。したがって、この黙想会から『神の働き手』が生まれるに違いありません。」こうした考えのすべては次のくだりに表れ

ていました。「わたしはついにマリアのご保護の下に御父のぶどう畑で家族として共に働くことを熱心に求めていた働き手を見いだすことが出来ました。」一方、ジャクピー司教は新生の修道会が司教に抱かせた期待を心から喜び次のように回答されました。「ムーラン師とローモン師の帰宅の折り託された手紙を何度も読み返しました。したためられた事柄を深く考えれば考えるほど神のみ旨を確認せざるを得ませんでした。どうぞ、あなた方が意図される目的に到達出来るよう絶え間なく働いてください。わたしもあなたが養成するような聖職者が必要です(9)。」シャミナード師は、セン・ロンランでの黙想会(10)に続いたマドレーヌで行われた黙想会直後、喜んでコングレガニストの一人に次のように書き送りました。「相次いで行われた二つの黙想会は仕事よりもっと大きな喜びでした(11)。」

マリアの娘の会の会則と基本的には同一の会則をマリア会員に提示する考えを持っていたシャミナード師は、その草案の起草を余り急ぐべきではないと判断しました。それは、事前にその会則を実施し、その体験を利用することを考えていたからでした。そこで、シャミナード師は本会に直接適用する会則にダヴィオ大司教の承認が得られるよう、マリアの娘の会の会憲から基本的で特徴的な項目を抜粋して男子マリア会の会憲に適用する草案作成をダヴィド士に委任しました。

数ページにまとめられた「マリア会」表題のこの会則草案は、黙想会前にダヴィオ大司教に提出され、口頭で承認されました。草案はまだ不完全なものでした。内容が分かりづらく、創立者の考えを正確に伝えていなかったからでした。ララン師は次のように伝えました。「創立者は立派に話されたのに、草案は不正確に作成されていました。」創立者の基本的な考えさえ完全に伝えていなかったからです。師は大司教の承認を得るためにその要約しか提出していませんでした(12)。師は後ほどこの草案を修正するよう提示しましたが、差し当たり、マリアの娘の会の会憲をマリア会に適用させました。

ダヴィド士の草案には新生マリア会の目的として「キリスト者の増加」が挙げられていました。また、霊生、教育、財務の3部門間の任務分担が記載され、清貧、貞潔、従順、堅忍、そして、キリスト教教義の教育の誓願宣立が説明されていました。誓願宣立の方式には、ちっ居の誓願に代わる堅忍の誓願を除いてはマリアの娘の会の会憲にないものは何もありませんでした。この草案の唯一の新しい部分は人間関係でした。

同一修道会の中で司祭修道者と信徒修道者の相互協力は、在俗修道者として生きていたコングレガニスト修道者の会則にも認められており、新生の本

会にも実現していました。15名の会員の内数名は、例えば、コリノー師やララン師のように司祭を目指す聖職者だったからです。創立の当初から創立発起人会員の中にこうした若い聖職者がいたことから混合構成はマリア会の特徴になりました。コリノー師は1820年に、ララン師は1821年に司祭に叙階されました。その他の会員は信徒修道者でした。この混合構成は偶然ではなく、シャミナード師の意志でした。それは、時代の要求に応えるものであり、宣教活動をすばらしく促進させる機構だったからでした。司祭修道者には聖職、そして、宗教教育や修道者の養成の責任が、信徒修道者には同様に宗教教育や養成への参加と財務への配慮への責任が負わされました。信徒修道者は、その服装が世人の服装とほとんど変わらず、批判の対象となりにくいことによって世との接触がより容易になるので、それだけ、その役割が効果的になり得たからでした。

極めて順調に実施されていたマドレーヌのコングレガシオンの集会は、二種類の構成員による共通活動協力の模範でした。シャミナード師が好んで模範にしていた聖フィリップ・ドゥ・ネリは、国家は教会と関係を断つことを目指していること、また、現代社会はただ自立するために教会権力の圧力から逃れようと努力していることが既に分かっていました。したがって、その当時から、司祭の活動の不足を補うため、また、福音宣教と平和促進の使命を聖職者に十分果たさせるため信徒による協力を司祭に保証したのは賢明だったのではないのでしょうか(13)。ルネサンス時代に指摘されていたこの考えは、市民社会と宗教社会間の完全な分裂を唱えた大革命の終息時にはより有益になりました。しかし、両社会が一致したのは政教条約後のみで、しかもこれは一時的でした。

事実、この分裂は毎日ますます強められ、政治の領域を越えて科学やモラルの領域にまで拡大しました。こうした制度や思想の新たな情勢に直面した教会は、その尊い使命を果たすため与えられた条件に順応して活動手段を修正しなければなりません。したがって、19世紀が終ったばかりの今日、カトリック教会は信徒のカトリック・アクション運動を特に展開するようになったのではないのでしょうか。信徒の中でも特に有名人の一人モンタランベル氏が、その友人のドゥ・メロド氏が修道院に入るのを見て名残惜しむ気持ちを表明したのも理解出来るのではないのでしょうか。彼はドゥ・メロド氏に次のように書き送りました(14)。

「わたしはあなたが信徒修道者としても、司祭修道者としても教会のために無数の善をなすことを確信しています。今日、教会が必要としているのは信徒修道者です。教会の敵をろうばいさせることが出来るのは特に信徒修道者で

す。確かに、大半の見識ある人々にとって、宗教が『司祭たちの職業』、すなわち、その生活手段、独占的資産に過ぎないこのおろかな時代にあつて、信徒修道者たちが私利私欲を擁護するとは思われなからです。」

シャミナード師は時代の要請を直観していました。したがって、現代修道会創立者の第一人者として評価されたように思われます。これまで、同一修道会の中で分離されていた二つの身分を融合させたこと、そして、その任務が司祭の職権を要請しない限り、修道会の大半の任務を司祭修道者同様信徒修道者にも認めることを提案したからでした(15)。すなわち、司祭修道者と信徒修道者は連携して唯一で同一の目的である宣教活動を追求しなければならなかったからでした。司祭職の活動は別にして、活動能力そのものにはほとんど差異はなく、司祭修道者と信徒修道者はその修道会にむらのない活動能力と知識を提供することが出来るからです。

事実、この概念は数世紀前から司祭修道者と信徒修道者の身分を完全に区分することを目指してきた修道会にとって、それは法的にももっぱら新しい考えでした。こうした概念は旧修道会の組織には見られませんでした。例えば、ベネディクト会の共同体は聖ベネディクトの会則によって司祭修道者と信徒修道者が無差別に組織されていました(16)。改革は中世期から開始されていました。当時から信徒修道者は修道院で個人の聖化に専念することを止め、人々の救いのために働くために修道院を後にしました。体制が完全にキリスト教化された社会で、大きな尊敬をもって対応されていた司祭職も彼らの宣教活動の欠くべからざる補助的な役割のように見なされ、人々の福音化を目指した社会は次第に宗教的な雰囲気になりました。例えば、神の聖ヨハネ修士会やキリスト教教育修士会のように、目的に司祭的性格を要しない活動修道会が創立されましたが、彼らは完全に信徒修道者でした。

いずれにしても、シャミナード師の計画の独自性は初代教会の修道共同体の確立に復帰することでした。それは観想修道会の召命ではなく福音宣教活動修道会の召命を求めるものでした。中世以降もっぱら司祭の共同体、あるいは、信徒の共同体と、そのいずれかの身分として第二の召命が強制されていた伝統から解放されるとするなら、それは、新しい時代がこの二つの身分の統合を可能にし、ある程度までこのことが要請されてきていたということでした。事実、19世紀中に創立された幾つかの修道会はシャミナード師によって開かれた新しい進路を取り、今までとは違った傾向を作り出しました。そしてこの傾向は今日まで修道生活の組織に要請されてきました。

この二つの身分の統合は現実にはどのように実施されたのでしょうか。シャミ

ナード師もこのことには確信を持っていませんでした。当初、シャミナード師は聖ベネディクトの会則に信頼することで満足していました。この会則は宣教活動を予見していなかったため、その活動上の要請の一部にしか適用出来ませんでした。この会則を模範にしていたからでした。この統合が本会に対する神のおぼし召しに従うことであると確信した創立者は、差し当たりこれを実現することが義務であると考え、時の流れと経験で学んだ教訓から、この新しい共同体にはどのような会則が最適であるかを示してくださる配慮をみ摂理に委ねました。

ダヴィド士による会憲の草案は、「本会会員を司祭修道者、教育修道者、助修道者」の三つのカテゴリーに区分することでした(17)。更に、「司祭修道者と信徒修道者は幾つかの点で異なる二つのカテゴリーに組織出来る」ことを付け加えていました。ダヴィド士は法律家の資格で、本会の法的存在の確立に専念して民法を基礎にこれが確立出来ることを期待し、本会の財産を保護し、政府のいかなる特権に対しても財産の保持を擁護出来る市民団体を信徒修道者の中に確立することを意図したからでした。これが司祭修道者と信徒修道者のカテゴリーの特徴の趣旨でした。しかし、シャミナード師はこのような区分を認めず、この件を含む会憲の草案の承認を大司教に申請しませんでした。師は削除した項目は全然補てんせず、司祭修道者と信徒修道者のカテゴリーの相関関係についての何らの規則もしばらくの間提示しませんでした。

大司教に提出された会憲の要約には信徒修道者の服装についても触れられていませんでした。それは創立当初から特別の服装によって世人の注意を引くことを避けることが了承されていたからでした。もちろん、一定の服装をなすことが取り決められ、当時の中産階級で用いられていた市内の人々の服装が適用されました。黒のズボンとチョッキ、黒か栗色のフロックコート、礼服用白ネクタイ、そして、山高帽でした。多くの修道会の服装は元々同一でした。すなわち、当時のそれぞれの階層で使用されていた服装を選ぶことで満足していました。こうした修道服の着用を継続しながらも、周囲の環境の変化に応じて、世人の服装とは異なる固有の修道服を着用するようになりました。新しい修道会においては必ずしも同一の修道服の着用を義務付けませんでした。それは、新しい修道会は、その生活環境において市民社会から公然と区別されない構想を会憲の原則として肯定したからでした。このようにして、旧修道会とは異なり、多少の条件付きで修道服の変化が認められてきたのでした。

シャミナード師は、創立当初からフランス東北地方のある修道者から修道服の問題について厳しい意見の申し入れを受けました。彼らは、その地方では、

「服装は修道者を作る(18)」と言われており、また、スータン着用の司祭はすばらしく歓待されると強調していました。もちろん、同地方の人々が皆こうした意見に賛成していたわけではありませんでした(19)。しかし、シャミナード師は自分の考えを変えることなく、次のように書き送りました(20)。

「わたしたちは信徒修道者のためにつつましい服装を採用したことで、賢明で間違いのない策を取ったことをますます確信しています。本会の信徒修道者はその服装の付け方とつつしみによって、大革命前に意図していたように修道服に身を固めていた時代よりも一層模範になっていることに気づきました。昔の服装は、わたしたちのようにもっぱら信者を増加することを目指す者にとって是不向きのように思われたからでした。」

数日後、更に次のように書き送りました(21)。「わたしはマリア会員の服装に関してわたしの見解を明らかにしましたが、これを変えるつもりはありません。この考えは熟考と祈りの中で更に強められました。」この時以来、この問題は一挙に解決されました。

ダヴィド士によって起草された会憲の草案の統治の項目はほとんど一貫性のないものでした。三つの短い項目が含まれていましたが、唯一の重要な項目は次の通りでした。「本会の統治は内性面を考慮して総長に委任される。各修道院の統治は総長への推薦によって、総長によって任命された院長に委任される。」ダヴィド士は選挙制度の選定を提案しましたが、シャミナード師はその提案にも賛成せず、ダヴィオ大司教の認可を受けるための会憲草案にはこの件を取り上げませんでした。師は目下のところ全般的な方針で満足することが賢明であると考え、祈りと念とう、実践によって、改善し補うべき不備に関する知識が得られることを確信していました。

シャミナード師にとって最大の関心事は、会員が追求しなければならない目的、会員が刷新しなければならない精神を彼らの心に深く浸透させることでした。追求すべき目的はマリアのご保護の下に実践する熱誠であり、宣教活動でした。師は1821年の黙想の時、その信念を次のように吐露しました。

「わたしたちの精神は尊いマリアへの知識と愛によって達成する神の栄光のための熱誠です。各修道会には神の息吹によって鼓舞され、それぞれの時代の状況と要請に適応した固有の精神があります。神がマリア会を起こされたのはどのような時代であったか考えてください。今の時代を眺めてください。いやはや、何という暗やみ、何と恐ろしい退廃、何と悲しい救いへの無関心でしょう。これまでの時代では、道徳の退廃は心にしか忍び込んでいませんでした。しかし、今日、精神も心も腐敗しているのです。精神の病は心の病より無限に危険

であり、不治の病です。神がマリア会を起こされたのは、こうした信仰、道徳の荒廢の時でした。すなわち、ちょうど生まれた世代が宗教無関心と不信仰に続く荒廢によってさいなまれた時でした。こうして、神はわたしたちを聖化するためばかりでなく、フランスやヨーロッパ、そして、全世界の信仰の再建に貢献させるためにわたしたちを召されたのです。この企ては何と偉大で、尊く、高尚でしょう。また、神の栄光と同胞の救いに燃える魂にとって何と魅力的でしょう。こうした活動のために神は多くの人々の中からわたしたちを選ばれたのです。」

師は会員たちに、「あなた方は皆宣教師です。その使命を果たさなければなりません(22)」。また、「もし、神があなた方を呼ばれるなら、地の果てまで行かなければなりません(23)」と絶えず繰り返し教えました。

この目的に到達するため、マリアの修道者は特別な特徴、すなわち、「本会の特徴」が刻み込まなければなりません(24)。シャミナード師はこの精神を「内的精神」の一語に要約しました。1821年の黙想の時、「わたしたちを特徴づけるものは内的精神です」と教えられました。マリア会が、宣教活動のために、修道生活の外的形式のあるものを犠牲にすることがその熱心を維持するのにふさわしいものであるなら、その基本的安全を維持する内的生活に同様に重点をおかなければならないからです。創立者の考えでは、この内的精神はマリア会の修道者に、マリアへの献身、信仰、つつしみ、家庭の精神の四つの基本的で特徴的な要素をもたらすものでなければなりませんでした。

師は、「マリアへの献身」は、マリアの保護の下にもっぱら魂の救いのために働くこと、シャミナード師自身の表現によれば、「人々の前に、マリアの兵士、無原罪の乙女マリアの宣教師」になることを意図する修道者の第一の印であると確信していました(25)。創立者は、コングレガシオンで実践していた宣教活動においてこの点をしばしば強調していたことが伝えられています。師は、マリアに全的献身をなした修道会の会員にこの特性をどれほど要請しなければならなかったことでしょう。したがって、マリアの娘の会が創立されようとしていた時、計画された創立はこの特徴的な印によって見分けられたことが伝えられています(26)。一度小さな共同体が設立されると、師は修道女たちにしばしば次のように繰り返し教えたことが伝えられています。「マリアの聖なるみ名はどこでも、いかにも自然に唱えられるべきであることを今更あなた方に伝える必要はないと思います(27)」。両修道会の守護者であるマリアのこの尊いみ名の祝日は1823年から創立者によって保護の祝日として定められました。

シャミナード師の意向によれば、会員が宣立した堅忍の誓願はマリアへの奉仕の名誉ある約束の明確な意義を持つものでした。したがって、師は、両修

道会の会員にこの誓願に含まれた気持ちを毎晩口頭で再確認するよう求めました。この美しい「マリアへの奉獻の祈り」はその全文をここに記す値打ちがありますが、少なくとも最初のくだりを記したいと思います。

「天地の元后よ、わたしたちの真心からの崇敬と愛が委ねられる御身の玉座の下に御身に奉仕と賛美の真心をささげます。わたしたちは御身への信心に献身し、御身のご保護の下でしか何事も行わず、御身を誉め、御身に仕え、御身の偉大さを知らせ、御身の無原罪の御宿りを擁護することを約束する身分を喜んで奉じたいと思います。御身への信心の誉れのため、御身のみ栄えの発揚ためにわたしたちの熱誠をささげ、異端者の陰謀と不信仰者の侮辱、多くの人々の無関心と忘却を償いたいと思います。」この祈りはマリアのご保護の下にこの地上に豊かなお恵みがそそがれるよう熱心に続けられなければなりません。したがって、世界の改心はマリアの新しい子供たちの使命ではないでしょうか。そして更に、彼らにとっては、コングレガシオンの修道者におけるようにこの熱誠の徳はマリアへの献身から生ずるのではないのでしょうか。いずれにしても、彼らはこのマリアへの献身に力と希望の保証を見いだすことが出来るに違いありません。創立者は次のように教えました。「たとえ、あなたの心に不安、臆病心、あるいは、疑念が起きるにしても、あなた方をすっかり包んでいる尊いマリアの特別なご保護を考えてください。もし、わたしたちが自分たちだけで、また、人間的な考えで行動しているとするなら、取り乱すことにならざるを得ません。そうではないでしょうか(28)。マリア会は、その会員、特にその長上は一般的に極めて弱く、不完全であります、マリアの全能のみ名によって力強くなることを信じています(29)。」

シャミナード師は、「聖ヨゼフへの献身は、その尊い浄配、神の母マリアへの献身から切り離すことは出来ません」と教えました(30)。それは、会員の聖なる乙女マリアに対する献身は聖ヨゼフへの特別の信心を含んでいると理解していたからでした。この点に関して次ぎのように教えました。「確かに、わたしたちはマリアの子供です。このことはわたしたちの慰めであり、誇りです。しかし、わたしたちは聖ヨゼフの養子でもあります。しかし、このことはわたしたちが聖ヨゼフに対して持っている信頼の単なる動機ではありません(31)。」師は、毎日の祈りの時、そして、特に何らかの重大な事態に遭遇して特別な懇願が要請される場合、聖ヨゼフに熱心な祈りをささげさせました。また、マリアとヨゼフの信心に、「尊い御母マリアの長子」、聖ヨハネへの信心を加えました(32)。聖人の祝日にはマドレーヌの教会で聖体顕示の許可が与えられました。

いずれにしても、信仰は創立者にとってマリア会の土台でした。師は幼年時代から自らを取り巻く社会に対する真理の啓示が次第に減退するのを体験し

た証人でした。師はここから生ずる大きな惨禍を考えていました。したがって、キリスト教精神や真の文化、そして、真の進歩等の後退を強く心配していたのです。そこで、師は、悪に相応する償いをなすこと、理性の崇敬に信仰への尊敬を置き換えること、また、人権宣言に「使徒信経」の確認を置き換えることを主張しました。「使徒信経」は、師が弟子たちに託した優れた武器でした。彼らがこの武器を操作出来るよう、あらゆる状況下でこの武器の使用を勧め、その武器のあらゆる秘密をうむことなく教えました。師は啓示された真理によって会員の精神を鍛錬することを念願したに違いありません。それは、その真理が彼らの案内者になるばかりでなく、彼らのすべての言葉や行いを通して自然にわき出る第二の本性のようなものになることを望み、また、彼らを福音の生きた模範として世に示すためだったからです。もし、彼らがこの理想に応ずることが出来れば、恐れるものは何もないに違いありません。信仰は本会が建立される堅固な基礎となるからです。師は次のように教えました(33)。「多少の混乱に試みられることがあっても、本会は微動だにしません。神は信仰という堅固な土台をわたしたちに与え、わたしたちを導かれるからです。」

創立者が会員に要求した第三の性格は「慎み」でした。慎みは謙そん、または、質朴と呼ばれる、隠れた二つの真珠のような外的な表現です。すなわち、慎みは、身繕い、礼儀作法、立ち居振る舞い、どのように考え、どのように話すか等、すべてにわたるわたしたちの賢明な節度です。

会員の服装に関するシャミナード師の考えは既にご承知の通りです。その考えは会員の一人から伝えられた次の言葉に要約されているからです(34)。「人々はわたしに、『あなたの修道者はどんな服装をしますか』と時々尋ねましたが、わたしは常にそれは慎みのある服装ですと答えました。」したがって、師は、世の気まくれに服し、世間の流行を服装に取り入れるような、何らかの変更を修道服にもたらすようなあらゆる傾向に強く反対しました。師は次のように教えました(35)。「修道者は質素でつましい服装、また、慎みを奨励する服装をしなければなりません。しかし、わたしたちが神によって生を受けたこの時代の考えや好みを余り公然と押しつけなければならないようにしなければなりません。世の人々、特に、青少年を引きつけなければならないからです。わたしたちの柔和で親切、忍耐の行動によって、また、服装そのものによって彼らを引きつけなければならないからです。」

シャミナード師は、会員が本会について話す時にも、何時も慎み深い修道者であることを望みました。師は、聖フランソワ・ドゥ・サル(36)や聖ヴェンサン・ドゥ・ポール(37)の模範に従って、貧しい本会ではありましたが喜びを感じていました。師は会憲の草案を次ぎのように始めました。「神と教会にささやかな奉仕

をささげる小さな本会は．．．」また、期待された強い要請に対しても次のように答えました(38)。「高すぎる考えを持たないでください。わたしたちは、ボルドーの侯爵のそれほどの好意にあずかるには余りにも小さ過ぎる会ではないでしょうか。わたしたちは出来る限りの善を行います。しかし、わたしたちが今行っている善のために必要でない限り、表に現れ、人々に知ってもらうことを求めてはなりません。」

このように理解される慎みは、悪意も偽りもないすばらしい謙そんと区別されないもので、創立者は次のように教えました(39)。「わたしたちの態度全般にわたる優れた謙そん、質朴、誠実、賢慮、これが人々に接する手段です。御主もこのことを要約して、『あなた方は鳩のように素直に、蛇のように賢くなければならない』とおっしゃったのではないのでしょうか。」また、「誠実、率直、無視無欲はわたしたちの特徴になります」と教えられました(40)。

最後に、師は第四の特性「家庭の精神」を会憲に記載したいと思いました。本会において、管理権あるいは聖職者の特権は完全に維持されなければなりません。しかし、この権利は温情に満ちた配慮と子心の尊敬による服従によって実施されなければなりません。かつて、コングレガシオンにおいて、善の実践の大きな力は相互教化の助けになっていました。まして、本会においては、マリアへの同じ献身のきずなで結ばれた司祭も、教職及び非教職の信徒修道者も皆、一つの心、一つの魂となり、コングレガシオンにおけるよりももっと初代教会の理想を実現する真の兄弟愛の精神が要請されます。

どのような忠告も、全マリア会員間におけるように同一共同体の会員間であっても、文章によっても口頭によっても、「一致や調和」の言葉より激しい言葉でしばしば繰り返されてはなりません。師は次のように繰り返し教えました(41)。「本会においてわたしたちは各人全体の連帯責任者と見なさなければなりません。」また、「皆が一つになることを見る時にしかわたしは決して満足しません。すべての会員、特にすべての責任者がただ一つの心、一つの魂を持っている会は何とすばらしい会でしょう。このような会こそマリア会であると期待しています(42)。」更に、「マリア会員の間では常に節度と平和と一致の友情があるべきで、決して衝突などあってはなりません(43)。」また、「わたしたちがマリアのご保護の下にイエス・キリストの霊の導きによって一致するなら、わたしたちは非常に強くなります。地獄が一体になってもわたしたちに対して何も出来ないに違いありません。『Et ipsa conteret caput』(彼はお前の頭を砕くからです(44)。」したがって、ある共同体の会員間に何らかの冷淡さが入り込んだことが分かった時、師はどのように驚いたことでしょう。そこで次のように教えました(45)。「幸いにしてこの混乱はそちらにだけに限られています。もちろん、そちら

でもこうした冷淡な気持ちを心に抱いている者はいないはずだと思うのですが。全会員が兄弟、同じ霊的家族の一員と見なさなければなりません。皆さんは、わたしが一致と調和を維持するためどんなに犠牲を払っているかを知って欲しいものです。

『Hoc est præceptum meum ut dilipatis invicem』(あなた方が互いに愛し合うことこれがわたしのおきてである。)

創立者はこの四つの特性によって作られる「刻印」、すなわち、その特徴を会員に強調するため、どのような機会もおろそかにしませんでした。対話、手紙、講話等はすべてこの目的を強調することを目指しました。創立当初、会員は終日生徒の教育に従事していました。このような時、師は一般の家庭が休息に入ろうとしていた夕方、会員を集め、昔の体験を交えて次のように霊的な糧を与えました(46)。「福音書を手にした師は、時には、信仰の行為について、時には、業務中でも内的精神を保ち、世の者でないように世に生きるため取るべき手段について霊的講話をされました。」

特に年の大黙想会において、師は、常に心に抱いていたこれらの事項を会員に強調し、浸透させることを怠りませんでした。師は、毎年7月ごろ、アジャンの修道女たちを訪れて年の大黙想会を指導していました(47)。秋は修道者たちの大黙想の順番で、セン・ローランが何時も黙想会場になっていました。本会が誕生したこの場所で、1817年と1818年に行われた忘れられない感動の思い出の黙想会は毎年会員に想起されました。シャミナード師自身も、会員が決して会則を逸脱せず、彼らの上に築いた大きな期待から外れないことを望んで、多くの教えを彼らに与えたことを想起して、感動を押さえることが出来ませんでした。これらの大半の大黙想からの報告が伝えられています。それによれば、黙想者に教話を通して深い感動を与えたことが明らかにされています。創立者の口調は素朴で親しみあるものでしたが、師が信仰のすばらしさ、マリアへの奉仕の幸せ、あるいは、修道生活の全的奉獻の卓越性の説明の展開に思わず引き込まれた時、雄弁の域にまで達しました。

師はマリア会について話す時更に雄弁になりました。それは、マリア会によって神に大きな栄光が帰され、マリアがこの上なく仕えられることを熱望していたからでした。次のように強調しました(48)。

「常に登りなさい。この世では完徳の山に頂上はないからです。これほど尊い身分にあなた方を召し出した方、暗やみから光に召し出した方はあなた方をきっと力づけてくださるに違いありません。あなた方が落胆しがちになった時、あなた方は特にマリアに献身したことを思い出してください。本会においては、す

べてが神の至聖なる乙女マリアの方に向けられていることがお分かりになるのではないのでしょうか。マリアへの献身が神のおぼし召しの印であるなら、マリアにささげられた本会への期待はどれほどでなければならないでしょう。本会にはすばらしいお恵みが予定されています。したがって、次のように叫ばなければなりません。『至聖なる乙女マリア、わたしたちはあなたのものです。あなたのご保護の下に戦います。あなたへの信心を広めます。世の果てまで行かなければなりませんか。そうです、あなた方は皆宣教師だからです。あらゆる迫害を耐えなければなりませんか。そうです、あなた方は殉教者ですから。．．．。』

これらの講話の後に、アジャンの大神学校長のムーラン師は自らの覚え書きに次のように記しました。

「主よ、あなたはこの尊い身分に関するわたしの熱情をご存じです。また、わたしがそのために努力していること、わたしに託された人々をわたしが励ましていることにあなたは満足しておられます。そうです、主よ、わたしは生涯この活動に献身します。天国を獲得しなければなりません、そのためにはこの方法しかありません。主よ、あなたはマリアに属する人々の上に、また、最初は小さかったが、現在は大きくなり、更に普及することを目指すマリア会に与える祝福によって、このことをあかしされます。マリア会はきつと至る所に普及されるに違いありません。これがわたしの心からの願いです。この願いがわたしのささやかな努力の目的になるに違いありません。」

マリア会員以外でこのすばらしい黙想会参加の恩恵を懇願したのはムーラン師のみではありませんでした。ローモン師やセルレス師のようなアジャンのその他の司祭、ノアイ師やブエ師のようなボルドーの司祭、アジャンのラコスト氏やパリのオロンベル氏、ボルドーのマイニャン氏のような熱心な信徒はアッフリエの資格で同様に参加が認められました。したがって、黙想者はセン・ローランの貧しい小さな住居で窮屈な思いをしたのではないのでしょうか。チャペルや台所を除いてすべての部屋は寝室に早変わりしたからでした(49)。

シャミナード師が、会員が互いに一致し、しかも、世の人には少しも目立たない外的な印を採用するよう提案したのは1822年の黙想会の時でした。会員は金の指輪の選択に合意しました。世の人々はだれも何らかの指輪をしていたので会員の指輪にはだれも気づきませんでした。この印は、「会員のマリアとの契約、神が会員に期待する奉仕の権利」を会員に想起させる利点があったからでした(50)。

黙想会の集結日に誓願の宣立や誓願の更新が行われました。当日、シャミナード師は兄弟愛の精神にかられてテーブルで会員たちに給仕しました。当

日かその翌日、会員はそろってダヴィオ大司教の祝福を受けるために大司教館に赴きました。大司教は創立の当初から会員に好意を示していたからでした。黙想会集結日の朝、大司教も自らセン・ローランに赴き、ミサをささげ、その小さな共同体を次ぎのように祝福されました。「御主の小麦のように成長してください。」大司教は生涯を通して、すなわち、1826年までマリア会に特別な好意を示されました。

1819年来、新生の本会は教皇聖下のかげがえのない祝福を享受していました。教会に従順な子供としてのシャミナード師は、信徒の共通の父である教皇聖下の意向を仰ぐことなしに何事も企てることを望みませんでした。また、何らかの認可を懇願する意向も持っていませんでした。その認可を仰ぐ時期がまだ到来しておらず、それ以前に会員が自らの真価を証明すべきだったからでした。目下のところ、シャミナード師は自ら実施してきたこと、これから実施しようとするのを教皇聖下に伝えることで満足し、教皇聖下のご厚意のあかしとして、両修道会の会員のために何らかの霊的恩恵を懇願していました。

シャミナード師はコングレガシオンに関する嘆願に続いて、1819年1月19日付けで次のように両修道会について申請しました。

「下記請願者は、これらのコングレガシオンを母体にして、一つはアジャンに、もう一つはボルドーに誕生した両修道会の上に少なくとも聖下の使徒的祝福を頂きたく申請致しました。第一の修道会は、管轄下のすべての信徒にいかなる善もゆるがせにさせない司教様の権威下にあつて信仰の普及に献身し、同時に修道誓願を宣立した女子青年の修道会です。本会はマリアの娘の会という名称を頂きました。ボルドーの修道会は、マリアの娘の会と同じ精神で、同じ誓願を宣立し、性の違いによって要請される何らかの相違はあっても、同じ任務を意図する男子青年によって組織されています。ボルドー大司教座の大司教様は、下記署名者の私がこの両修道会を教皇聖下の監督下に置くという試みに反対されませんでした。

次に、師は両修道会の会員のために誓願宣立の当日、年度の誓願更新の当日、40時間の祈りの折り、そして、臨終の時にそれぞれ全免償を頂けるよう申請しました。ジャクピー司教とダヴィオ大司教はその嘆願書の欄外に好意的に推薦状を記入し、ちょうど苦難の教皇位を全うされたピオ七世聖下は、1819年5月25日、温情の教皇書簡によって当該申請の恩典を承認されました。

ボルドーの小さな会の会員はアジャンの共同体の会員同様、彼らが頂いた激励にふさわしい態度を示しました。ラン師は次のように伝えました(51)。

「会員は本会を愛していました。彼らは純粋な意向と寛大な犠牲の精神によって、また、彼らの犠牲が効果をもたらすことを望むことが出来た成功の要素と恵まれた機会によって本会の創立に献身したからでした。そして、少年時代から世と世の魅力を捨てた彼らは、世の救い主がそのしもべたちに遺産として残された深い喜びの内に生きる生活、すなわち、修道生活を送ることを選んだからでした。」

ボン・ペールは会員の熱情を何とか調節するよう努力しました。例えば、彼らの中の一人は誓願更新の際に、「わたしは、堅忍の語はより長い期間を表明するものであって欲しい」と素直に話していたからでした(52)。他の会員は請願文を血書したからでした(53)。後ほど、彼らの中の一人は次のように書きました(54)。「わたしはボルドーのモニュ通り(55)で過ごした幸せな時期を常に興奮しながら思い出していました。共同体のすべての会員が、会則が寛大過ぎると嘆いていました。」以上のように話した会員たちは、「粗末なわら布団の上で休み、水曜日と金曜日は大齋を行い、少なくとも礼儀上、あるいは、必要がなければぶどう酒は飲まない」という習慣を持っていたからでした(56)。

こうした姿勢の修道者は臨終や死の最後の試みに揺らぐことはありませんでした。1819年4月、アジャンでのスール・エリザベスの安らかな帰天は、ボルドーのマリア会でのすばらしい帰天にすぐ引き継がれたからでした。それは、次の8月に息を引き取った若い最初のマリア会員アントワン・カントーの帰天でした。彼は兵役勤務のために久しい以前から虚弱な健康を害していました。彼は共同体で神と兄弟への奉仕に専念し、自分自身については何らの配慮もしませんでした。1819年7月初旬に彼は病床に伏す身になりました。ダヴィオ大司教はカルメル山の聖母の祝日に、いつもの多忙さを押して小さな共同体を訪問されました。大司教の訪問を耳にしたこの病人は、大司教の祝福を頂くためにベッドから起き上がって大司教を迎えました。医者によってさじを投げられていたことを知っていた敬けんな老大司教は、「あなたの病は大変重くなりました。したがって、このような状態の中で、あなたはきっと時々世のむなしさを考えたに違いないと思います。」—敬けんなこの会員は素直に答えました。「大司教様、わたしは世を捨てました。神は久しい以前からわたしに世に関することを無視するお恵みを望まれたからでした。」

シャミナード師はアジャンのマリアの娘の会の会員を視察していて不在だったので、病人はその帰りをしきりに待っていました。ようやく帰宅したボン・ペールが臨終の床の病人の上に身をかがめると、病人のやつれた顔がまるで天国のすばらしい光にでも照らされたかのように輝くのが見受けられました。既に、この敬けんな修道者はもう天国のことしか考えていなかったからでした。聖母の

被昇天の祝日前晩、病人は、ずっと病床に付き添っていたオギュスト士に、「わたしは明日死ぬよう神に願いました」と語りました。しかし、至聖なる乙女マリアは10月の月になってしか彼を呼びませんでした。8月20日、彼は病者の秘蹟を受け、病床に集まった会員たちに、特に病気になって以来兄弟たちに与えた数々の悪い模範についての許しを謙そんに願い、正に事切れようとする自らの生涯を立派に活用しなかったことを後悔し、自分よりも立派に生きるよう兄弟たちに促しました(57)。夕方、病人は新生マリア会の初穂を刈り取るため天国に旅立ちました。

この思い出を想起する時、キリストの模範の次のくだりが自然に心に浮かびます。「ある修道会創立の始めには、すべての修道者の熱心はどんなに大きかったことでしょうか。祈りの時の彼らの熱心はどんなに大きかったことでしょうか。善徳に対する彼らの競争心はどんなに大きかったことでしょうか。規律はどんなに厳格に守られたことでしょうか。創立者の会則に対し、すべての人が示した敬けんと服従はどんなに盛んであったことでしょうか(58)。」



注

- (1)1833年1月14日、ショヴォー師へ
- (2)1818年8月22日
- (3) アジャン教区は大革命によって特に損害を被りました。市民憲章宣誓司祭数が他教区より比較的多かったからでした。
- (4) 政教条約後も大神学校は存続していましたが、小神学校が設立されたのは1817年11月1日でした。
- (5) 1817年9月4日
- (6) 新修道会の歩みは、ジャクピー司教がペリギューで経験したものと異なっていたことは確かであり、司教はこのことに多少困惑していました。そこで、シャミナード師に次のように書き送りました(1818年4月22日)。「時が経つにつれて、忍耐強く、わたしたちは神のみ旨に献身する人々を神学校に受け入れることが出来ること、そして、この新しい神学校を立派に管理出来るよう期待しています。しかし、わたしは急ぎません。可能な限り前任者たちの手段を継承したいと思います。新しい建物には不安を感じます。教会が荒廃しているこの時期にこそこれを有用しなければならないことを感ずるからです。」
- (7) 1833年7月31日、ショヴォー師への手紙
- (8) 1818年9月21日
- (9) ジャクピー司教の計画は、「ペリギューの司牧会」のような教区立の修道会をアジャ

ンに設立することでした。ムーラン師が作業に取りかかりましたが成功しませんでした。ジャクピー司教は、「教区の司祭たちには余り期待出来ない」ことを予見していました。司教は、シャミナード師がボルドーから助けてくれることを期待していました。しかし、シャミナード師はマリア会を創立したばかりの時期だったので、どうして援助援助出来たでしょうか。

(10) 前記240ページで述べられた黙想。ムーラン師とローモン師がシャミナード師に協力しました。

(11) 1819年9月15日、シャンジュル氏へ

(12) 1833年2月23日、ショヴォー師への手紙参照

(13) エティエン・オルヴ伯爵夫人著、「聖フィリップ・ドゥ・ネリの生涯」、79ページ、ルコップル社。「(祈とう所での集会)は、司祭と信徒が共同で唱える祈りで開始されていました。それまではまったく区別されていた信徒が親しく集会することが出来たことはすばらしいことでした。聖人は司祭と信徒間の溝を深める分裂を予見し、これを予防するよう努力したのではないのでしょうか。…。聖人は祈とう所設立の数箇月後、二人の信徒、フランソワ・タルジ及び医師のモディオに自らの講話を分担するよう依頼しました。」

(14) ルカニュー著、「モンタランベル伝」、2巻、500ページ、プッシエルグ社、1899年。

(15) 15世紀から19世紀間に設立された幾つかの修道会で、二つの身分は共存していましたが、その一つの身分は付随的なものでした。セン・ジャン・ドゥ・ディウ兄弟会では司祭は聴罪司祭でしかなく、主要任務につくことは認められませんでした。聖ヨゼフ・カラザンによって創立されたエコール・ピー修道会では、補助修道者は司祭職と類似の職につくことが一時認められましたが、また、単なる補助修道者の身分に戻されました。ティモン・ダヴィド著、「聖ヨゼフ・カラザンの生涯」、1章、307ページ、2章、32ページ以降参照。

(16) 特に司祭職に関する第62章には、「たとえ、修道院長が修道者の一人から司祭、または、助祭の叙階を求められたにしても、院長は司祭職を実施するにふさわしい人を選ぶ。一方、叙階された者はごう慢になり、あるいは、ごう慢に引きずられないように用心しなければならない。…。彼は常に修道院に入った時の階級を重んずる。…。彼は他の係り長や上長の命令を守り、常にこれに従うべきことを知らなければならない。」また、第60章には、「司祭であるという理由から役職に任命された場合、尊敬や性格のために与えられた順位ではなく、修道院に入った年月に応じた順位を占めるものとわきまえなければならない。」

(17) 創立当初、肉体労働に従事する修道者は助修道者と呼ばれていました。

(18) 1822年1月16日、ロジェ士からシャミナード師への手紙。ルイ・ロテア士について述べられていました。

(19) クサヴィエ・ロテアは兄の司祭に当てた手紙でこのことをあかししました。「司祭はアルザス地方では他の地方より自由主義者をおびえさせている。」1822年1月14日。

(20) カイエ師への手紙、1825年5月3日。

- (21) 1825年5月16日
- (22) 1834年2月7日、ショヴォー師へ
- (23) 1823年3月31日、ダヴィド士へ
- (24) 1826年6月23日、カイエ師への手紙
- (25) 1840年2月9日、修道誓願宣立の折り、ペッコディン師へ
- (26) 前記286,288ページ参照
- (27) 1816年7月30日
- (28) 1824年8月17日、カイエ師へ
- (29) 1826年2月15日、ノアイ師へ
- (30) 「マリアのしもべの手引き」、1804年版、9ページ
- (31) 1833年3月9日、ララン師へ
- (32) 1824年12月24日、メール・ドゥ・トランケレオンからメール・マリー・ジョゼフへ
- (33) 1830年9月23日、マリアの娘の会の総長へ
- (34) シルヴェン士
- (35) 1825年6月17日、カイエ師へ
- (36) 「わたしたちの若い訪問会を極めて貧しく、小さなものと見なすこと、そして、会の貧しさを考えることが神が望まれるからといって本会を高く評価しないこと、これが真の精神です…。花の中でもみずぼらしく、小さな、余りぱっとしない色のスマレのように修道会の中でも見なされて欲しいものです。教会にわずかでも立派な香りを与えることが出来るよう、神がその奉仕のために本会を作られたことで十分です。
- (37) そうです、わたしはもう一度言います。もし、わたしたちが真の宣教師になるなら、各会員は、特に貧しい人、無徳の人と見なされ、また、無知な者として取り扱われ、一般に本会が教会にとって無益なものであり、貧しい人々によって組織されていると言われることを喜ばなければなりません。
- (38) 1825年4月30日、カイエ師へ
- (39) 1824年6月16日、カイエ師へ
- (40) 1827年3月28日、ゴーザン士へ
- (41) 1834年1月15日、シュヴォー師へ
- (42) 1824年6月6日、クルーゼ士へ

- (43) 1825年7月25日、クルーゼ士へ
- (44) 1832年12月14日、シュヴォー師へ
- (45) 1833年8月17日、シュヴォー師へ
- (46) セルマン士の覚え書き
- (47) 1830年前は一度しか欠かすことはありませんでした。それは、1825年で、ボルドーを離れることを妨げられたまったく特別な場合でした。
- (48) 1822年の黙想会
- (49) セン・ルミにとっては最初の黙想者としてのスタートでしたが、1820年は23名、1821年は32名、1822年は54名、1823年は57名の黙想者がいました。次の年には70名に達しました。狭い修練院のためそれ以上の参加は受け付けられませんでした。
- (50) 1822年の黙想会の議事録
- (51) 1842年2月23日の覚え書き、18ページ
- (52) 1819年の黙想会、ロジェ士へ
- (53) 1830年3月20日の手紙でララン師に伝える
- (54) 1837年3月13日、ルイ・ロテア士よりシャミナード師へ
- (55) 1818年末、セギュール袋小路のはずれに移転した所
- (56) 1831年3月14日、ロテア士からシャミナード師へ
- (57) オギュスト士の覚え書き
- (58) キリストの模範、1巻、18章、5節

第 24 章 シャミナード師の面影 : 精神上的の特徴

尊敬と好意 ❖ 親切 ❖ おだやかさ ❖ 神への信頼 ❖ 謙そん ❖ 賢明さと節度、神との関係 ❖ 隣人との関係 ❖ 冷静さ ❖ 活動の増加 ❖ 超自然的慎重さ ❖ 确实性 ❖ 最終的な印象。

シャミナード師は1820年には60歳になっていました。それは、当然の休息を期待する一般の人々が将来より過去を思いめぐらす年齢でした(1)。ところが、師は、これまで従事してきた様々な実り豊かな活動より更に独創的な新たな活動計画に着手するかのように思われました。神は師に保留していた宣教活動生活を20年も呼び戻してくださったのではないのでしょうか。いずれにしても、師は、人間的に言えば、人生の頂点に到達した年齢でした。やがて、豊じょうな実りの秋が確かに訪れるに違いありません。労苦の半世紀の実りが疲れを知らなかった働き手に与えられるに違いありません。しかし、この秋はしばしば灰色の空に覆われ、黒雲によぎられ、また時には、冬の訪れの前に冷たい寒風によって吹きさらされるに違いありませんでした。

今はまだ夏で、暑い日差しは衰えていませんでした。多くの事業に多忙なシャミナード師は、あたかも麦の穂がすっかり実った黄金の収穫期のように希望に満ちていました。コングレガシオン、ミゼリコルド会、創立された二つの修道会、慈善と熱誠の各種学校は、その繁栄によって評価され、人々の注目を集めていたからでした。こうして、師は尊敬され、更に言うならば、だれからも高く評価されていました。

シャミナード師はダヴィオ大司教と親しく、その下に自由に出入り出来ていました(2)。帝政時代に師に帰せられた評価が教区の司牧に生かされていなかったのは、彼らにしっかりと心を起こさせないため意識的に身を引いたためでした(3)。大司教は師の心遣いを尊重し心からの信頼を寄せていました。例えば、セント・ユラリ教会の財産管理委員会が新たな何らかの苦情を申し立てた時でも、大司教はシャミナード師にその苦情を伝え、師自ら回答するように配慮しました。大司教はシャミナード師の教会参事会員という高い評価については決して隠し立てはしませんでした。ある日大司教の前で、どの司祭が優れた説教家であるかの争いが起きました。ある司祭はモーレル師に、他の司祭はグードレン師に栄冠を帰しました。ところが、大司教は、「いや、最も優れた説教師はシャミナード師です」と答えました。ダイヴィオ大司教による意味深長な判断は

説教術の平凡な評価以上に宣教の価値を評価したためでした(4)。時々、大司教の評議員たちはシャミナード師の活動計画を非難しました。しかし、大司教は、「自由にさせておきなさい、大罪を犯すわけではないのだから」と言って、シャミナード師をユーモラスに擁護してこれを止めさせました(5)。

ボルドーの上流社会の人々もシャミナード師を尊敬し、その助言を求めていました。その幾人かはシャミナード師との友情を誇りにしていました。ここでは最も注目すべき次の二人しか述べられません、その一人は「ジロンド人弁護士の天才(6)」で、当時下院の議長であったラベ氏で、もう一人は、ラベ氏にも劣らない才能の持ち主で王宮会議議長のドゥ・サジェ氏でした。シャミナード師と親交のあったドゥ・サジェ氏はシャミナード師から神と永遠について学びました。他の多くの人々よりこの知識について学べなかったからでした(7)。

シャミナード師と懇意になるために近づく身分の高い人にも、貧しい人にも師の親近感には変わりはありませんでした。セン・ローランで、師の両親の召使いであったマリー・デブールは、大革命中しばしばシャミナード師の命を救うために自らを危険にさらし、師がスペインから帰国するとすぐ師の下でまた献身しました。彼女はその献身に対する報酬など少しも期待していませんでした。マドレーヌを訪れる人々の間で語りぐさになっていたこの優れた女性は、「胸に大きな金の十字架を誇らしげに下げ、モスリンとレースの飾りのついた帽子をかぶったボルドー女性の典型的なタイプ」でした(8)。彼女はその後もシャミナード師を離れず、師にみとられて帰天しました。シャミナード師の召使いのジャン・ラルキーも忠実な人で、コングレガシオンのチャペルや諸部屋の世話を担当していました。彼は尊敬するシャミナード師に従順であるばかりでなく、誠実と信心の模範でした。シャミナード師はコングレガニストから尊敬され、師もまた、望むことを彼らに求めることが出来、拒絶されることがなかったことは確かです。

この司祭を浮き彫りにしたいずれの賜物も恵まれた素質ではありませんでした。

シャミナード師には大衆を引きつけ、魅了する雄弁家らしいところは何もなかったからでした。その話しぶりはとても穏やかで、多少もたつき気味のところがありました。また、その口調も単調で、発音にはかなりペリゴルなまりがありました。師は公の舞台に立つことを好まず、かえって「世俗から完全に身を引き、質素な部屋に何時も閉じこもり、その活動は熱誠事業のみで、その会話は神のことだけでした(9)。」

師は、「人々を照らし導くために生まれてでもきたかのような人々」の中の一人でした(10)。しかし、師の感化はまったく内面的で、独自の方法で人の心を

捕らえることでした。愛想のよい態度、感じのよい顔つき、上品で素朴な物腰や歓待の態度は人々の心を開き、希望で心をふくらませました。以前の時代から伝えられたせん細な礼儀作法に恵まれた師は、80歳の高齢に達しても20歳の青年に頭を下げるほどでした(11)。師の話しぶりは意味深長で、その優れた誠実さは人々をすっかり魅了していました。「師は師の指導を求めて来る人々をすっかり魅了しました。こうしたことは師の優しさと寛大さによるもので、だれも知らず知らずのうちにその魅力に圧倒されていたからでした(12)。」

いずれにしても、人々がシャミナード師のとりこになり、また、師が人々を引きつけたのもその誠実さによってでした。師の人々に対する関心は、敏感に感動してもすぐ忘れるような表面的な感性ではなく、献身と犠牲によって表れる真の愛情以外の何ものでもありませんでした。師は、青少年や会員の霊的、物的利益に対して絶えず心からの気配りを惜しみませんでした。彼らを父親のような寛大な心で迎え、その健康、その不具合さえも無関心であることはなかったからでした。師は、一時的な身体の不具合を隠していた一人の会員に次のように書き送りました(13)。「どうぞ、これからはそれほどの気配りをしないで下さい。あなたの健康についてあなたが黙しているのではないかと心配する時、わたしは落ち着いてはおられないからです。」

これらの手紙の末文は熱烈な愛情に満ちた表現になっています。例えば、「わたしはもろ手を挙げ、父親の愛情をもってあなたを抱きしめたいと思います(14)。」また、「この手紙はわたしよりも幸運です。この手紙はあなたに届きますが、わたしは80キロも離れたところにいるからです。体では出来ないにしても、心であなたを抱きしめたいと思います(15)。」それは、師が、聖フランシスコ・ドゥ・サルが、「愛徳のすばらしい花、豪華ではないがすばらしい徳」と呼んだ、「親切、寛大さ」を実践して、近づくすべての人を細かな心遣いで歓待したからでした。

この愛情は不満を伝えるべき会員に対してさえも、強い忍耐、驚くべき強い忍耐によって表明されました。彼らに対して決して辛らつな言葉ももらされず、不利な判断も下しませんでした。生涯で最も苦しい時期の手紙に目を通すなら、そこにみなぎるすばらしい優しさと寛大さに気づいて驚かされるに違いありません(16)。師は正しい道からそれようとする人々を心から弁護し、その過ちを指摘して、「深く悲しんでいる父から」と署名しました(17)。寛容の気持ちを持つことを常に志していた師は院長たちに対して不従順な会員たちの立場を自ら弁護し(18)、彼らの悔悟を信用するに迅速で、時には必要な処置の決定を遅らせました。したがって、ボン・ペールに助けを求めることは適切な判断の保証になりました。

師の親切は貧しい人々、師に無縁の人々、そして、身内の人々に対しても何ら劣ることはありませんでした。師はどんなに多くの不幸な人々を助けたことでしょうか。また、どんなに多くの男女青少年を危険から保護したことでしょうか。師の通信はこの種の何らかの活動に専念していたことをあかしするものでした。このことは師にとってさ細なこと、重大な活動下の気晴らしのようなものでした。

シャミナード師はその親切さによって人々を引きつけました。すなわち、常に変わらない温厚な性格によって彼らを引き留めたのです。この性格は精神面におけると同様身体的にも最も目立った特徴になっていたからでした。この温厚な性格は、大きくおだやかな額、好意的な茶色の目、皮肉な笑いのない口、白いほほ、肩まで延びた銀髪で巻き毛の頭髪、弟子の一人が、ルネッサンスの芸術家がほうふつさせたキリストの顔に比較したよく整った顔に感じられました(19)。その言葉はもちろん、あらゆる行動のおだやかさは、決して情欲に左右されない、常に自己抑制の人を示していました。また、ばか笑いすることも怒るもともありませんでした。ラン師は次のように伝えました(20)。「変化に富んだ優しい声と、まぶたから流れ落ちる涙がそのせん細な感受性を表していました。一見無表情に思われたのは、とっさの反応が普段の自制心によって抑制されていたからでした。」

師は、賞賛、非難、幸運などによっても決して冷静さを失いませんでした。事業の成功を喜ばれなかったのでしょうか。「ある善意の人々がこれらの成功をわたしの知性や能力のせいにしてはいますが時々笑っています」と書き送りました(21)。師は非難されることはなかったのでしょうか。「ありがとうございます。わたしは多くの欠点の持ち主、しかも、時々やむを得ず注意しなければならない人々より大きな欠点があることを以前から承知していました。今日はわたしが欠点だらけの者であるという新たな確信を得ました」と率直に伝えました(22)。師の決定を非難した会員の一部には感謝しながら次のように書き送りました(23)。「こうした手続きに何か不備な点が見いだされたのなら知らせてくださればありがたく思いました。どんな年齢になっても立派な助言を受け、経験を積むことが出来るからです。」

ほとんど毎冬悩まされた病(24)、貧しさや窮乏からの苦しみ、恐怖政治時代に遭遇した危険、亡命、投獄、そして、事業と自らに降りかかったどのような反対(25)に対しても、不平の一言も師から聞くことは出来ませんでした。知恵の書に次のように書かれていたからでした(26)。「Non contristabit justum quiquid ei acciderit」(神に従う人はどのような災難にもあわない。神に逆らう者は災いで満たされる。)様々な反対も試練も師の平静さを乱すことは出来ませんでした。このことはマドレーヌに対して起こされた最も険悪な非難で、ダヴィ

オ大司教に申し述べられた次の言葉に要約されていました(27)。「主のみ名はとこしえにたたえられますように。すべてが行われ、企てられたのは主の栄光のためでした。」

師の平静な心の秘密は神のみ旨への服従にありました。「いと高く、正しく、愛すべき神のみ旨は万事において、とこしえにたたえられますように。」これが師の好まれた祈りでした。師はこの祈り、そして、特にその実践をうむことなく教えました。ラン師に次ぎのように書き送りました(28)。「その通りです、わたしはいつもあなたに神のみ旨を行いなさいと言い続けています。この極めて正しく、愛に満ちたみ旨を行うことこそ心に平和と喜びをもたらすものです。「*Quis restitit Deo et pacem habuit?*」(神に逆らった者で平和を得た者があるだろうか) 師は、特に本性を揺るがす不安と長期間戦う時、「心にすばらしい感動をもたらすこの祈り」をしばしば口ずさんだことを伝えています(29)。また、次のようにも書き送りました(30)。「神がそのようにお許しになられたのなら、わたしもそのことを許さなければなりません、わたしは神に従わなければなりませんから、と言わない日はほとんどありませんでした。」

特に逆境の中で勝ち取ったこの冷静さは神への信頼からばかりでなく、謙そんや質朴さによっても取得したものでした。師は自らの資質についてのどのような評価も信じませんでした。人々の前では最も謙そんでした。断ることが出来なかった教会参事会員の肩書きを除いては、どのような名誉も栄誉も受けず、どのような重要な委員会にも出席することはありませんでした。かえって、活動に協力した人々が高く評価されるよう、その活動の表舞台から身を引くようにしていました。師の活動は一般には余り知られておらず、むしろ、用心深い人々には認められるよりも怪しまれていたほどでした。たとえその活動が合法的であっても評価を要請することなど決してなかったからでした(31)。かえって、賞賛が誇張したものであると考えられた時にはすぐ抗議し、余りにも熱心な賞賛者に対してはその取り消しを要請するほどでした。師の考えが余りにもすばらしかったので、パリの友人が師を警視総監に紹介した時、このようなことが起きたのです。師はその訂正を求めて次のように書き送りました(32)。「どうぞ、神の前にぬかずいている人のように、人の前でも心から貧しい者であって下さい。わたしたちは他人の栄誉を自分のものにしてはなりません。」また、人々からの賞賛を出来るだけ避けるように注意し、特に、自分だけがその対象となった時そうでした。あるさ細なことがこのことをあかししました。それは、ダヴィオ大司教が、シャミナード師の教皇聖下への嘆願書に、師を賢明なコングレガシオンの指導司祭と記入したので、この嘆願書を秘書室の資料としてコピーさせなければならなかった師は、自らの氏名に添えられた「賢明」という形容詞を削除させました。こうした密かな謙そんはひたすら神に向かって進む師をすばらしくあかしし

たものでした。師の年齢、そして、創立者や総長という地位にもかかわらず、目下の会員にも頭を下げ、食卓で会員に給仕する等、こうしたことを少しも気にしなかったことが伝えられています。

キリストの模範に(33)、「人は心が謙そんになればなるほど、また、神に従えば従うほど、万事にますます知恵と安らぎを得るであろう。」と言われている通り、神への信頼と謙そんの帰結であった師の平静さは、そのあらゆる行動の賢明さや節度として表れていたからでした。要するに、師の生涯には情欲の入り込む余地はなかったからでした。

神との関係さえもこの賢明さによって解決されていたように思われました。この賢明さが、気ままに、また、思い上がって行動をさせず、そして、例外的な方向に入り込むことを防いだからでした。師は良心の声が神の意志として示したすべてのことを謙そんに実践しました。神の意志に反してあちらに行き、こちらに止まる権利のないことを考えていたからでした。

師の靈性には空想的なところはありませんでした。感覚ではなく、意志に支えられた堅固で不屈な信仰を持っていたからでした。したがってその信仰にはためらいも、盲目的執着のきざし等一切ありませんでした。師はマリアにこよなき愛情、聖ヨゼフに全面的信頼を寄せていたので、緊急な必要時の懇願も、容易に利用出来る人間的手段も退けました。その事業の成功は神のみに期待すると共に神の計画の障害にならないよう、また、期待される大きな成果に応じて自らも聖化されるよう努力しました。師は、「絶え間ない心配事のために神への十分な祈りがなされなかったことを」嘆いていました(34)。どのような種類の緊急な用件があったにしても、毎日の念とう、年の大黙想を怠ることはありませんでした。師はその念とうを清書さえしていました。老齢に達しても靈的読書によって常に極めて新鮮な輝きを放った信仰生活を養い続けました。一日中が懇願の祈りで香っていました。夜、聖なるイエスのみ名を

30回唱えなければ眠りにつきませんでした。

師は、個人の徳は犠牲によってしか開花せず、福音も犠牲によってしか普及されないことを知っていました。いずれにしても、苦行をなす時は一日だけ熱心に行うのではなく、絶え間ない、忍耐強い意志で、勇敢に行いました。そして、出来る限り外部に知られないようにしました。したがって、友人たちからは、「節度ある適切な苦行」と評価されていました(35)。それでもなお証言されているように、師は生涯の多くの時期に血を流すほどのむち打ちの苦行を行いました。このことが一番よく分かっていたのは二人の目撃者でした(36)。彼らは師の下着の世話をしていたからでした。この二人の目撃者の一人は、師が、特

に晩年、極めてゆっくり歩いていたのは足の爪が肉に食い込んでいたからで、しかし、より苦行をなすためその治療をしなかったのですと伝えました(37)。

師が14歳の時に宣立し、その後ずっと更新してきた清貧、貞潔、従順の誓願は、地上の過ぎゆく物から完全に離脱し、その心を平静に保つのに寄与しました。師は自らに託されたどのような財宝についても決して所有者と見なすことはありませんでした。「これらの財宝は主に属するものです」と書き送った通りです(38)。師にとって、自らは財宝の管理者に過ぎなかったからでした。金銭の問題はそれが自らに関係する時にしか余り心配しませんでした。相変わらずの窮乏にもかかわらず、受けるとすぐ与えたからであり、ある時などは、マドレーヌの維持費のため支払わなければならなかったコングレガニストの未払いの分担金800フラン以上の支払いを一度に取り消してしまったほどでした(39)。

師は、その住居におけるように、高価でぜい沢を感じさせるような所持品は何も持っていませんでした。すべての物が清潔で素朴、そして質素でした。師が生涯の最後の30年(40)住んでいた薄暗い、大きな部屋にはベッドと何脚かの古い家具しかありませんでした。スペインから持ち帰った数枚の聖絵と家族の思い出でもあろうか、やはり数枚の刺しゅう画のみがこの部屋の飾りでした。師はこれらの様々な信心具を靈性に関する講話の準備や訪問者の心を神に高めるために用いました。例えば、サマリアの婦人の絵はより熱烈な信仰を燃え立たせることに役立てました。「もし、あなたが神の賜物を知っていたなら(41)」と福音のくだりを説明して叫びました。

師の賢明さと節度はその靈性や神へのかかわりを支配していたとするなら、それは師の普段の行為全般に、そして、毎日の生活のさ細な点にまで大きな影響を及ぼしていたわけでした。一度身についた習慣で、押さえることが困難な習慣であっても安易に従うことはありませんでした。医者からはかぎタバコの使用を勧められていましたが、一度習慣付くと抑制することが困難なこの習慣のとりこにならないように、その上、タバコ入れを取ろうとするたびごとに立ち上がらなければならなかったので、仕事机から離れたところに置きました。ある日、ある修道者が健康上の理由から喫煙の許可を願いに来た時(42)、師は、窓際の棚の上のタバコ入れを示して、次のようにさとしました。「本当に用心して下さい。この習慣はわたしたちを情欲のとりこにするからです。」そこで、この修道者はすべてにわたって節制を説くようになりました。

師は人々が最も関心を寄せている政治問題にはかかわりませんでした。師と懇意にしていた人々で、師がこの問題に関して軽率に話すのを聞いたことはなかったからでした。しかし、政治問題に無関心であったわけではありません。

毎日、新聞に目を通し、選挙日が来ると市民の義務を忠実に果たしました。例えば、1830年の7月には、選挙に参加するため旅行を延期したほどでした(43)。師は、一度市民の義務を果たすこと、政党の不毛な議論で自らを苦しめるべきではないこと、しかし、より尊い理由があれば尽力しなければならないこと、そして、法によって定められた権限には、それがどのような種類のものであっても尊敬と服従を拒むことは出来ないことを考えていました。したがって、1809年の政府に対したように、1830年の政府に対しても、「中庸に関する明確な原則(44)」を誠実に訴えることが出来ました。

師の通信は控え目で慎重な意見等、一言で言えば、愛徳の言葉で満たされてきました。最悪の場合でも、通信相手がほのめかしたことを悪く解釈することや、その不作法を指摘することもなく、また、特に、彼らを論争や偏見の領域に追い込むことなどなかったからでした(45)。師はララン師に次のように伝えました(46)。「いいえ、あなたの手紙はわたしを怒らせませんでした。たとえ、わたしの考えや感情に反するものでも、言い訳のために今まで怒った記憶はありません。」師は確かに自らの言動をつつしみました。誤解があった時には普段の行動に訴えることが出来ました。例えば、師は秘書の誤写について次のように誤りました(47)。「わたしの考えと、だれも傷つけないようにとわたしが払っている普段の注意をよく知っているはずのカイエ師やクルーゼ士が、この誤りを疑いもしなかったことを以外に思っています。」また、他の場合には、クルーゼ士に次のように書きました(48)。「わたしが、ダヴィド士には余り手加減をしないよう気を付けるようにとカイエ師に勧めたことを、カイエ師があなたに話したということは意外なことです。あなたがお気づきのようにそのようなことはわたしの性格ではありません。」

シャミナード師はその活動においても同じ冷静さと慎重さを表していました。もちろん、神の栄光を拡大する希望に燃えていたので、例えば、オーシュのある司祭には次のように書き送りました(49)。「働きましょう、ご存じの通り、わたしたちの大望はフランス全土に神の愛の火を燃え立たせることですから。」また、同日、オーシュのコングレガシオンの会長には、「わたしは神の哀れみによって、久しい以前から尊い乙女マリアの信心を広めるためにのみ生き、呼吸して来ました」と書きました。師はすばらしい冷静さを身に着けており、書状の上でも、会員に与える訓戒の言葉遣いに注意しました。「神のみ旨は極めて明白ですので、急がないで下さい。」とある司祭(50)に伝え、更に、「仕事に心を奪われなないように用心し、冷静に対処して下さい。わたしたちの熱情が心に集中されなければならないし、そして、心が努力しなければならないことは、すべてにおいて神のみ旨にかなうことです(51)。」メール・ドゥ・トランケレオンは他の多くの点と同様、この点に関しても感嘆し、師の模範にならうよう修道女たちに次のよう

に勧めました(52)。「いいですか、シャミナード師はどのように行動したと思いますか。決して急がず、常に冷静でした。そして、多くの事業を成功させたのは、もちろん、神の豊かな恩恵によるものでした。」

このように、シャミナード師の成功の秘訣は恩恵にありました。たとえ、自ら働くことが出来なかった場合でも、聖霊がより自由に働かれたことを感じていました。そこで、クルーゼ士に次のように書き送りました(53)。「心に完全な平和を維持し、それを支え続けるのはあなた次第ですから、そのように行動して下さい。あなたが多忙であればあるだけ、よりしばしば自分自身を反省する必要があります。少なくとも朝晩の主な仕事の前に反省して下さい。この実践が十分効果を生ずるように、大切な仕事ごとに深く潜心し、他のすべての思いや感情を1分か2分、あるいは3分でも中断することです。あなたの自然にはやる心を抑えて下さい。そうすれば万事うまくゆくことが期待されます。」更に、次のように勧めました(54)。「神への愛があなたの心をすっかり支配するようにならなければなりません。この神聖な愛によって促された仕事であれば、どんなに大切な仕事も、様々な気遣いも心を乱すことはありません。その愛そのものがますます燃え盛るようになるからです。」また、他の時には、「あなたが託されている様々な仕事のことで余り気をもまないで下さい。わたしたちの聖なる保護者マリアのお助けが必ずありますから(55)。」

精神の全機能が正常でもある人、そして、仕事そのものをより早く、より効果的に処理出来る人はだれでもこの心の平和を得ることが出来るのです。師はまた、次のようにも教えました(56)。「あなたはそこに魂の平和、力、勇気、そして、特に過度の負担を負った時その力を倍加出来る手段を見いだすことが出来るに違いありません。」シャミナード師に冷静さがなかったならば、その驚くべき多様な活動に決して対処出来なかったに違いありません。師は既に帝政時代から仕事に忙殺されていたことを感じていました。そして、王政復興後は最悪でした。そこで、1815年以來、「まる1週間も手紙を書くことなく」過ごさなければならなかったと嘆いていたほどでした(57)。しかし、仕事は常に増加するばかりでした。1818年には、その手紙を口述筆記させていた何名かの秘書の援助にもかかわらず、その多忙な仕事から解放されることには成功しませんでした。メール・ドゥ・トランケレオンに次のように書き送りました(58)。「大急ぎで書いたことがお分かりでしょう。世俗のことしか頭にない者のように朝早くから夜遅くまで仕事に追われています。主はすべてにおいてたたえられますように。」仕事が煩雑を極めるにしたがって、師は、「仕事上の気苦労は減るところではありません。」と嘆息されました(59)。また、次のようにも書き送りました(60)。「わたしの仕事はますます増えていきます。これらの仕事を下さった御主のお恵みによって最後までやり遂げたいと思います。」しかし、最後まで成し遂げる

ことは必ずしも常に可能ではありませんでした。手紙の返信が数箇月も滞ることがあったからでした。このことを承知していた通信相手は、返事が遅れないように、どうぞお返信を、と一言お願いするのみでした。師はこのことで悩んでいました。「手紙と返事の催促者が何と多いことでしょう。わたしは彼らに対して支払い不能の債務者のような者です(61)。」師は夜中まで仕事に励んでいましたが時間が足りませんでした。その手紙はしばしば、夜の10時、11時、あるいは、真夜中に書かれ、「まぶたが重くなってきました(62)」とか、「眠気とつかれに悩まされています(63)」等と書き添えられていました。

師は、少なくとも自分自身を完全に抑制出来たおかげで、取り組んだあらゆる活動は立派に成功しました。次のように書き送りました(64)。「仕事について考えるにしても、仕事をしながら考えざるを得ないのです。しかし、いつもは神のことを考えて心配なく平和にしています。」師の活動はもっぱら靈的指導でしたが、そのためには長い経験が十分生かされました。しかし、師にとって何時も大変だったのは新規の創立とその発展に関する重要な世事や業務でした。師はこのことに関しては慎重でした。この慎重さこそ大革命時代やそれ以前から習得していたものでした。ある人が語ったところによると、師のゆっくりした話し方は、もっぱら実情に応じた最も適切な言葉で話すよう配慮したものだということでした(65)。

シャミナード師は何かを決定する時に極めて慎重だったので、忙しい人々や不耐な人々は困惑していました。ララン師に次のように書き送りました(66)。「あなたはわたしが目指している慎重さを臆病のように見なしています。臆病は本来真の慎重さの特徴であることを知っていますか。」師は問題のすべての局面を冷静に検討していました。それは、どのような指摘も逃さず、有益な意見は、たとえそれが会員からのものであっても、何も聞き逃さないよう用心していたからでした。クルーゼ士には次のように書きました(67)。「わたしは命令する前に、そして特に、そのことを実行しなければならない人々に相談する習慣がありました。」

師にとって最も重要な論拠は、ある意味で、あるいは何らかの意味で、普遍的で均衡のとれた論拠で、それは神の意志でした。したがって、すべての関心事は神のみ旨を確認するためのものでした。次の言葉でクルーゼ士に関心事の一つを示したのは、師の行動の独自の指針を明らかにするものでしかありませんでした(68)。「あなたも慎重であって欲しいと思います。慎重さはリーダーの最も重要な性格の一つです。しかし、あなたの慎重さは信仰の光で導かれ、同時に、理性の光を用いることを望んでいます。聖霊は、人間の考えは臆病で不確かであるとおっしゃいました。したがって、万事において神と神の特別な

お計らいを求めて下さい。」メール・ドゥ・トランケレオンにも同様な言葉を伝えました(69)。「本会の目的は完全に超自然的目的ですから、わたしはあなた方が純粋に自然的知識ではなく、神から与えられる英知によって行動していただきたいと思います。したがって、信仰の光によって御父に絶えず祈らなければなりません。それは、あなた方が恩恵の働きへの忠実さと心の深い清さを頂くためです。」

こうして、師は神の現存の念とうや潜心に全幅の信頼を置きました。ある時次のように書き送りました(70)。「わたしはみ摂理のみ旨にかなっているかどうかを検討しないでどのような施設も設立した覚えはありません。」師は、何らかの点で神の光を仰ぐ必要が生じた時、住まいと直通になっていた扉からマドレーヌの教会に下り、聖体の前に長時間ひれ伏し、正に与えられようとしていた解決策に気づきました。一度それが見いだされると、どのような障害もこれを止めることは出来ませんでした。鉄のような意志を持っていたからでした。弟子たちのだれもが伝えたことは、師は神のみ旨に従って行動したことを一度確信すると、これを絶対に撤回しなかったということです(71)。師は必要ならば何年も待つことが出来、常にその目的に到達しました。

事業の放棄を決定した場合、どのような要請を受けても決して決定を覆すことはありませんでした。ルアンの善き牧者の会創立者アンジョラン夫人が、会憲作成の協力をシャミナード師に要請しましたが、師は次のように書き送りました(72)。「正直に申し上げて、どのようにお返事していいかとまどっています。あなたは謙そんに、しかし、差し迫った様子で要請されますが、わたしにはつきり考えられることは、神が望んでおられない事業に、また、決して軽率に干渉出来ない事業にわたしが関係することを神が望んでおられないということです。」師は、更に、依頼を断る理由として、この事業に関してみ摂理から何らの指示も与えられていないこと、そして、「この事業自体の重要さ」に十分応じ得られないことを伝えました。

師はある計画に直面して、人間的な配慮から無分別に思われ、しかし、神の呼びかけに引かれることを感じた時、早速実行に移しました。このことはどのような場合でも同じでした。神のみ旨がより明確に表れる時まで、内輪の対立は自然に解消されるままにしておきました。したがって、み摂理のみ手にすべてを委ね、人間的な知識は無視したのでした。師のためらいも、イエスカノーかで示されたので、ある人々はこのことを師の器用さや鋭敏さと取り違えていましたが、それは、師が対立する動機から与えられた様々な影響の現れでしかなかったのです。このような場合師は次のように書き送りました(73)。「あなたが気づいているように、わたしはこれ以上退けないと分かった時でしか決して態度を決

めません。」更に、遠隔地域の最初の施設、セン・ルミの施設の取得について次のように書きました(74)。「わたしはこの施設を取得したいと思いますですが心配しています。言わば、み摂理のみ手によって押されるのを待つつもりです。」セン・ローランの修練院の拡大のために必要になった支払いに直面した時、同じような態度をとりました(75)。「わたしはまだセン・ローランの拡大に着手していません。出費を恐れたからでした。しかし、必要であれば当然支出します。その時はちゅうちょしないつもりです。」

いずれにしても、師は皆がためらっていた事業を恐れることなく推進していきました。揺るぎない確信を持っていたからでした。ダヴィド士に次のように書き送りました(76)。「ご存じの通り、わたしは大変試行錯誤しますが、一旦企てたことは決して撤回しません。」他の手紙によれば、より積極的でした(77)。「あなたは、わたしが始めた事業(アルボワのマリアの娘の修道院)を遂行する気持があることをバルドネ師に保証することが出来ます。わたしは今までどのような事業も放棄したことがありませんでした。この事業を放棄の手始めにするなど毛頭ありません。」この点で、師はミュンダン在住以来導かれてきた不変の規範を適用しただけでした。次のように述べました。「一度ある事業を計画する時、その事業に着手する理由がある限り、あるいは、計画を変更すべきより高度の、より強力な理由がない限り、決してこれを中断することも延期することも致しません。」

極めて慎重で控え目な態度で知られていたシャミナード師はその大胆さで人々の意表をつくことがありました。それは、超自然的な慎重さが人間的な慎重さにとって代わった時でした。師はこの選択を後悔することはありませんでした。メール・ドゥ・トランケレオンはシャミナード師について次のように述べました(78)。「ご覧なさい、神はご自分の栄光のためにのみ働かれるボン・ペールにどのように報われたことでしょう。わたしたちの人的判断からすれば、師の行動は時には不用心のように思われましたが、師が落ち込んでいるように思われた時、神は問題に対処するための仲介の労を取られました。」このことは、師が、支払いの見当もつかないままお告げの会の修道院を購入しようドゥ・ラムルス嬢に話した時、ミゼリコルド会に起きたことではないでしょうか(79)。師はみ摂理への委託がどんなに賢明であるかをしばしば自らの手紙であかししていました。会員の一人に次のように書き送りました(80)。「このクルトフォンテンの修道院はもっぱらみ摂理の恩恵によって設立されたものです。したがって、平凡な修道院だと思っはなりません。神が求めたものと信じて着手したすべての事業は最高に成功した事業です。しかし、特に必要なことはこれらの事業を運営する人々への信用や信頼です。」言うまでもなく、シャミナード師はこのような場合でも、人為的な手段を怠ることはありませんでした。次のように書き送り

ました(81)。「あなたは信仰と信頼が奇跡を起こすとはっきり申しますが、わたしは、信仰と信頼は、信仰が起こさせる手段を用いた後、信仰と信頼が必要である限りにおいてのみ奇跡を起こすと小声でつぶやくのみです。」

師は通信相手の一人にその「手段」を次のように伝えました(82)。「実際、わたしたちの財産は無尽蔵です。わたしたちはマリア会をすばらしい形で保護して下さっているみ摂理の宝庫にその財源を見いだしているからです。しかし、み摂理の神ご自身がわたしを促しておられると思われる時でなければ、それらの財源を利用することは出来ません。神がわたしに委託して下さる事業をしながら、神のみ旨に一歩一歩従うこと、これがわたしのやり方です。しばらく前から、わたしは何時もお金に困っています。しかし、時々驚くほど富裕になっています。例えば、先週、わたしは極めてわずかな金の支払いに困っていました。この窮乏の状態の中で、広大な物件(83)が提示されされた時、わたしはそこにみ摂理の計画を見たように思いました。そこで、決断を下す前に多少の時間の余裕を要請しました。ところが、24時間後には8万フランを支払うことが出来ました。しかし、この取引がすむとまたいつもの文無しにもどりました。」

こうした例は枚挙にいとまがありません。しかし、創立者が人間的な慎重さ及び超自然的な慎重さで行い、また、他の人にもそのように行わせようとして、それぞれの役割を明確に記した通信のあるくだりを記すのみに止めたいと思います。師は、資産のない志願者受け入れについて助言を求めてきたメール・ドゥ・トランケレオンに対して次の二つのルールを伝えました(84)。「修道院に彼女の資力が負担出来る以上の負担をかけないこと、また、協力を約束している人々の必要な協力を妨げないこと、これが第一の規則です。高德で特別な召命を受けた者については、優れた動機のため神がその人を受け入れることを勧められるなら、人間的な慎重さを余り考えないこと、そして、神の力強い導きに従うこと、これが第二の規則です。」わたしたちは、聖フランソワ・ドゥ・サルが、「真の用心の徳は、素直な信頼の徳がすべてに勝るように、真に実践される徳でなければなりません」と教えられた聖人の行動とシャミナード師の行動が完全に一致することに気づくに違いありません。」

しばらく展開してきたシャミナード師の精神面の特徴の描写をここで中止したいと思います。この特徴のすべての側面、すなわち、寛大さ、賢明さ、節度、慎重さ、活力等は融合されて、心と表情の温和さという優れた特徴に要約されていたからでした。あらゆる時代の思想によって提示された賢明な人の理想に、また、キリスト教によって提示された聖人の理想に近づいたシャミナード師によって体現された典型的な性格を詳細に観察することは何と感動的なことでしょう。したがって、師が自ら手紙に記され、その生涯の様々な時期に師をよ

く知っていた多くの人々に語られた師の聖人のような言葉を検討したことは驚くに足りません(85)。こうした判断を確認するか、あるいは、否定するかはわたしたちがかかわり知るところではありません。わたしたち歴史家には様々な事実関係を浮き彫りにすることの役割しか求められていないからです。

したがって、わたしたちは、シャミナード師の知的なプロフィールを描き、その教義の特徴的な原理を提示することによってまだ完成しなかった師の面影を描くことを試み、伝記の記述を続けたいと思います。



注

- (1) 70歳のヨゼフ・ドゥ・メートルは、「わたしは窓からしか眺めることの出来ない年取った囚人でしかありませんでした」と語りました。
- (2) このことは、1826年1月10日、ダヴィド士に書き送った次の手紙によります。「わたしは大司教や司教総代理のバツレス師とゆっくり談笑するために、時々、大司教館で食事に誘われることを期待していました。」
- (3) この事実はカイエ師からシャミナード師に送られた報告です。ここにシャミナード師とドンネ司教と談話(1838年7月13日)が報告されていました。
- (4) この逸話は、数箇月間シャミナード師の秘書をし、1900年2月にアジャンの教会参事会員で帰天したギヨン・ドゥ・ベルヴェユ師によって伝えられたものです。
- (5) ララン師の「歴史概要」、16ページ
- (6) 鵜についての表現。フェレ著、「伝記」、530ページ
- (7) フェレ著、「伝記」、553ページ参照
- (8) セン・ピエール・ドゥ・モン(ジロンド県)の主任司祭で帰天しました。レストラード師の自筆の覚え書き。
- (9) ララン師、「歴史概要」、3ページ
- (10) 同上、2ページ
- (11) ドマンジョン師の思い出
- (12) ララン師の思い出
- (13) 1823年6月3日、ダヴィド士へ
- (14) 1821年12月17日、ルイ・ロテア士へ
- (15) 1833年4月2日、ララン師へ

(16) 1823年にセン・ルミでダヴィド士によって起こされた障害や、1830年にセン・ルミやレーラックでララン師によって起こされた障害が特に暗示されています。この件に関してはいずれ触れる機会があると思います。

(17) 1837年、ショヴォー師へ

(18) 1837年2月3日及び4月2日、メイエ師へ

(19) ララン師の「歴史概要」、2ページ。これは1835年10月4日、コルマルでシャミナード師に公布された旅券記載の師の特徴です。「74歳、身長1メートル68、白髪、ひたい大、まつげ灰色、目灰色、鼻と口標準、あごひげ白、あご丸く引き立つ、白色うりざね顔」。なお、弟子たちは師が近眼であったことを伝えました。

(20) 同上

(21) 1825年7月23日、カイエ師へ

(22) 1830年11月26日、ララン師へ

(23) 1827年3月7日、クルーゼ士へ

(24) しばしばとても重い症状を伴った鼻かぜ。師は腕に痛みを伴う焼きごての治療をしていました。これは健康維持のために不可欠のものでした。

(25) 1823年11月18日、ダヴィド士へ、「わたしは至る所で反対を受けています。」

(26) しん言、12章21節

(27) 1819年2月、225ページ参照

(28) 1833年5月17日

(29) 1823年12月9日、ダヴィド士への手紙。シャミナード師はダヴィド士に訴え求めた忍従に彼が完全に到達出来るとは考えていませんでした。師は、「あらゆる点で悩まされていた様々な不安や障害の結果、余りにもしばしば苦しんだこと」を彼に訴えました。(1823年4月25日)

(30) 1825年7月25日、クルーゼ士へ

(31) 前記サヴォア少年救済事業参照、240ページ

(32) 1825年、カイエ師へ

(33) キリストの模範、1章、4節、2

(34) 1822年の黙想。1817年8月9日、メール・ドゥ・トランケレオンへ。「他人のために働きながら、自らを救うことが出来るよう、わたしのためにお祈り下さい。」

(35) ララン師の「歴史概要」、2ページ

(36) わたしたちは、まだ存命中のジュステン・デュモンテ士から書面と口頭で証言を得ました。ビドン士の証言はカネット士の自筆の覚え書きによるものです。

(37) ビドン士

(38) 1826年12月27日、アルボワのデュッシェール夫人へ。「わたしが所有し、今後所有出来るものはずっと以前から主に授けられています。」

(39) 1820年4月6日、評議員会記録

(40) 現在ラランド通り4番地の建物、2階

(41) ジュステン・デュモンテ士の自筆の覚え書き

(42) シルヴェン士の自筆の覚え書き

(43) 1830年6月25日、バルラン(ジュール県)の主任司祭への手紙。この地域へのシャミナード師の到着が待たれていましたが、選挙日の7月3日後しか行けませんでした。

(44) これら二つの時代の資料によれば、用語はほとんど同じでした。

(45) この点に関して、1831年と1832年のララン師との通信は極めて教育的でした。

(46) 1836年3月7日

(47) 1824年6月25日、バルドネ師への手紙。バルドネへの手紙で失礼になったのは、秘書が、「annexeé」(添付された)と書くところを、「en excès」(過剰な)と誤って書いたからでした。

(48) 1824年4月5日

(49) 1825年12月5日、オーシュの神学校長ラツリュ師へ

(50) 1838年12月29日、フリブラ師へ

(51) 1838年10月22日、メール・セン・ヴェンセンへ

(52) 1820年10月12日、メール・テレーズへ

(53) 1824年8月26日

(54) 1839年1月2日、クルーゼ士へ

(55) 1839年2月19日、クルーゼ士へ

(56) 1827年4月9日、クルーゼ士へ

(57) 1815年12月6日、ドゥ・トランケレオン嬢へ

(58) 1818年2月11日及び3月11日。「わたしの仕事が多くなったためか、手紙の発送が遅すぎるためか、また、秘書の仕事が過剰なためか多くの事柄に対して何時も遅れ

がちです。」

(59)1821年12月4日、メール・ドゥ・トランケレオンへ

(60)1817年8月9日、メール・ドゥ・トランケレオンへ

(61) 1825年1月18日、クルーゼ士へ

(62) 1823年6月10日、ダヴィド・モニエ士へ

(63) 1830年10月29日

(64) 1825年7月10日、カイエ師へ

(65) クレラックノドゥ・モンクロック氏の考察。カネット士の覚え書きによる。

(66) 1836年4月

(67) 1824年6月27日

(68) 1824年8月26日

(69) 1816年12月30日

(70) 1827年3月20日、クルーゼ士へ

(71) 例えば、カイエ師、ララン師、140ページ参照

(72) 1839年6月11日

(73) 1831年4月30日、ララン師へ

(74) 1823年5月21日、ダヴィド士へ。1832年11月30日には、ショヴォー師に、「常にみ摂理のおぼしめしに導かれますように」と書きました。

(75) 1822年4月30日、ダヴィド士へ

(76) 1822年6月21日

(77) 1826年12月、ドゥッセール夫人へ

(78) 1826年2月27日、メール・ドゥ・レンカルナシオンへ

(79) 133ページ参照

(80) 1840年7月13日、ペッロデン師へ

(81) 1837年9月14日、バイヤル師へ

(82) 1824年5月31日、バルドネ師へ

(83) ムニユ街の宿舎の移転のためラザックホテル取得の件

(84) 1817年10月15日

(85) 例えば、ジョッフル師(伝記、47ページ)、ララン師(ショヴォー師への手紙、1833年10月4日)、ルッセル師(1844年12月12日、ショヴォー師への手紙)、後にイエズス会士になったペルネ士(シルヴェン師の覚え書き)等によって。



第 25 章 シャミナード師のプロフィール： 知的プロフィールと霊性上の信条

研究心 ❖ 観察と考察の精神 ❖ 実践的傾向 ❖ 通信と説教の形式と基本 ❖ モラル問題の権威 ❖ 禁欲 ❖ 信仰 ❖ マリアへの献身 ❖ 念とう ❖ 自己放棄 ❖ 3段階の内的精神 ❖ オリエ師の霊生。

シャミナード師の生涯において、師が活動に次ぐ活動によってどんなに悩まされたか、しかし、実際のつつましい生活ではいかに自らを抑制していたかを考察する時感動させられます。しかし、ひまつぶしのひま人は、師を実業家の一人と見なすに違いありません。ところが、シャミナード師をだれよりもよく知っていた弟子の一人ラン師の証言によれば、師は、「念とうの人」であったということです(1)。

シャミナード師は勉学を好み、かなり広い領域にわたって深い知識を習得していました。したがって、ラン師はある手紙で、「シャミナード師は聖人のような人であるばかりでなく学者でもあります(2)」と書き送ることが出来たほどでした。ミュシダンで始められ、ボルドーとパリで継続された勉学は、亡命の不自由な時期にも続けられ、その後は多忙な業務にもかかわらずこれを完全に放棄することはありませんでした。

師の読書は広範囲にわたり、しかも、自分自身の考えを抑制して新しい考えを会得することが出来るような本を読むことを心得ており、作者が原作に含めた考えを取得するよう努力しました。本会は創立したばかりでしたのでわずかな資財しかありませんでしたが、師は1823年にはコスン師(3)のぼう大な文庫の購入をちゅうちょしませんでした。こうして、師はその子弟にすばらしい研究資料を贈呈したのでした。この文庫は当時最も優れた文庫の一つで、約1万2000冊を数え、自然科学、哲学、宗教学等の基本図書で科学全般に及ぶものでした。旧フランシスコ会士のコスン師は書籍収集趣味の持ち主で、大革命前は修道院の図書室を、そして、ダヴィオ大司教の下では大司教館の図書室を委託されましたが、動乱の後、自らのため優れた蔵書を取りそろえるため、あらゆる古い蔵書の散逸状態を利用したのでした。師は友人のシャミナード師に比較的安い値段でその全蔵書を譲渡しました。シャミナード師はこの蔵書を最後まで利用し続け、視力が弱まって読むことが困難になる時まで読み続けました。師が良書を取りそろえて手許に置いたのは会員に読書を要請す

るためでした。

師は自らの経験と他の人々の考えによって知識を身につけるよう努力しましたが、更に進んで自らを反省するようになりました。知識を蓄積し、その視野を広げ、自らの見解を純化し、最も確実で、最も普遍的な原理によって導かれました。現実的な理解を考えて、高度の知識から現実に戻った時、その意見は同世代の人々と必ずしも一致しませんでした。このことは師にとって余り重要な問題ではありませんでした。教会当局が不可侵権を要求する宗教上の知識の領域で活動していかなければならなかったからでした。この点に関する師の従順の精神は完ぺきでした。そのよって立つ原則、すなわち、教会当局に払うべき尊敬はより堅実に確立されていたように思われたからでした。いずれにしても、この問題に関して、師は、教会法と教会法の多少とも自由な適用を混同しないように心がけていました。師は、教会当局から提示されたように思われたすべての事項を受け入れる傾向があったように思われましたが、それは、教会法の慣習やその自由な適用が様々な時代や決められた地域で施行されていたからでした。

師は、他の様々な分野で取得した考えのとりこになることを避けましたが、しかし、そこで宣教活動が成功出来ると判断すれば、新しい道を切り開くことをちゅうちょしませんでした。この場合の原則は過去よりむしろ将来を指向することでした。師の独創的な考えは時には同時代の人々をとまどわすこともありましたが、実践の結果によってその正しさが十分証明されました。コングレガシオンや両修道会の設立及び組織に関して顕著な例が伝えられています。師のすべての計画はしばしば新鮮で、常に独創的なものとしてその頭の片隅に刻み込まれていました。

いずれにしても、師はいわゆる理論家ではありませんでした。師の理論は、決して、理論そのものを追求する抽象的真理の領域にわだかまるものではありませんでした。それは目的ではなくむしろ手段だったからでした。師の性格上の傾向は正に実践を学ぶことでした。この意味で、師は確かに何よりもまず行動的な人であったと言うことが出来ます。師の心はこの聖職に奉仕するため見事にささげられていたのです。師は貴重な資質を作り上げる基本的な良識や正しい判断を備えていました。その上、詳細を識別し、わずかな差異まで予見し、必要と状況に応じて原則の適用を調整する能力を持っていました。ララン師の伝えるところによれば、師は一つの問題についてさえ実に様々な角度から考察する明確な考えを持っていたということです。このことは師が「明敏」な知性の持ち主であったということです。確かに、師はこの性格を大いに延ばしていたように思われます。このことは、判断に誤りをきたすような理屈を巧妙に押し

進めようとするものではありませんでした。しかし、余りにも正確な分析が時には正確な決定を妨げるほど問題の多様な側面を正確に把握していました。したがって、この鋭敏な性格は重大な決定に際してとまどいをもたらすことにもなりました。特に、神のみ旨を容易にはかり知ることが出来ないことが重なった場合がそうでした。いずれにしても、このことは小さな欠点に過ぎませんでした。それが時には師の活動に支障を来すことがあったにしても、すばらしいその活動を妨げるものではありませんでした。

お分かりの通り、シャミナード師はこのような気持ちでそれほど重要でない事柄をも重視しました。師は芸術を理解し、これを好みました(4)、自分に芸術的な素質があるなどとは考えていませんでした。師の独創力は二次的な役割しか演じていなかったからでした。その文学的素養は博学でした。この点からすれば、師は完全に18世紀に属していました。それほど古典的で、古典の崇拜に忠実であったからでした。師は形式を尊び、これをおろそかにすることを残念がったとはいえ、内容を犠牲にするような決断を下すことは出来ませんでした。師の気がかりは、より多忙な業務の中で急いで書いた事業関係や指導上の手紙に対する返書の作業から解放されることでした。これらの手紙は秩序、明確さ、また、ある気遣いさえもの配慮を指摘するものでした。これらの手紙はすばらしく魅力的なものでした。巧みに表現された様々な暗示、独創的な比較、真っ直ぐで簡潔な筆跡で表現された文体の力強さや明確さ、これがすばらしい特徴になっていました。こうした特徴がそのすばらしい内容と一致して極めて魅力的な手紙になりました。これらの手紙には何ら文学的評価を求めることは出来ません。細かい部分の不正確な表現、未完成の文章、「etc」(など)による語句の継続等は、仕事に圧倒されている人や極めて重要な仕事に専念している人を表しているからです。次のように書き送りました(5)。「あなたはわたしの手紙に不確実な表現を見いだすに違いありません。わたしは絶えず手紙を書くのを中断させられ、しかも、これを読み返すひまがないからです。」

シャミナード師は説教をより丁寧に準備しました。18世紀の伝統に忠実であった師は、聴衆に対する配慮は少なくとも申し分のない言い回しが要請されると考えていたからでした。師は少なくとも偉大な古典学派の説教家たちによって養成されましたが、古典時代のスタイルに文章をまとめるような努力は致しませんでした。師の話し方は前世紀の説教家にはほとんど似通っていました。師の考えは純粹で、率直でした。したがって、哲学的なくどい説明や感情の誇張を避け、目的に向かった話を進めました。その目的は人々の改心であり、人々に気に入られることではありませんでした。師は絶えず聖書を使用しました。教父たちの模範や当時の習慣に従って厳密に文学的感覚によってばかりでなく、なお、キリスト教的伝統によって認められた様々な意味において聖書を用いることが

出来ると考えたからでした。すなわち、「司祭の説教は気取らず、率直で、出来る限り聖書から連続して取られたものでなければなりません(6)」と考えていたからでした。

シャミナード師の知的活動はいわゆる哲学や文学に限定されていなかったとはいえ、その活動は単に一人の活動家の飽くことのない熱狂的な活動ではありませんでした。極めて多忙な活動に従事していても、潜心に徹していた師は、様々な研究を再開し、絶えずこれを継続する精神的自由を持っていました。師は、当然、護教、教義、モラル、そして、禁欲的な精神を追求する宣教活動の目的に、より積極的に参加する人々と交際を続けていました。モラルや禁欲等に関する研究は師の得意分野であり、この点に関する師の熟達には異論の余地はありませんでした。

シャミナード師の優れた特徴は倫理神学でした。師の説教はしばしばイエズス会士の説教家ブルダル師に刺激されました。師は解説するより熱心に勧め方を好みました。マリアへの献身の勧めにせよ、終末を説くにせよ、また、人々の良俗風習の解説や立て直しにせよ、信念の実践的な行動を要請しました。師は心理的分析に優れていました。様々な書籍や、そして、それ以上に現実の生活に人間心理を深く研究していたからでした。師は実践的観察を明らかにした多くの興味深い覚え書きを残しました。それは様々な人々、特に、青少年や修道者をしばしば対象にしたものでした。絶えず密接に観察したのは后者の二つの領域でした。例えば、結婚前後の青年の傾向を比較することを考え、次のような考察をしました。

「彼は結婚前、おしゃれをすることを好み、結婚後はたとえこのことを好むにしてもあえてそのようにはしません。結婚前は重要な役を演ずる俳優になることを好み、結婚後はむしろ観客あるいは聴衆になること、そして、他人を批評することを好みます。結婚前は友情や愛情のあかしに敏感になり、結婚後は他人からの評価と尊敬に敏感になります。結婚前は模倣に強く印象付けられ、流行を好みますが、結婚後は大衆によってしか動かされず、流行を追うことが鈍感になります。」

師は、まれにみる慎重さと深い配慮を伴った心理分析の正確な知識によってすべての人々の信頼を勝ち得ていました。したがって、多くの司祭や信徒は師に心を開きその指導を求めました(7)。司祭館、神学校、修道院等、いたる所から困難な事件の解決のための依頼がありました。しかし、師の多忙さはそれどころではありませんでした。「モラルや教会法に関する何らかの困難な問題の解決のため(8)」、その業務がしばしば邪魔されたことをその手紙の中でした

ためていたからでした。

たびたび生じた問題は借入金の利息に関する問題でした。当時、この点に関する指示が明確でなかったため、昔ながらの教会法の文面しか知らなかった人々は解決出来ない苦境に陥っていたからでした。もちろん、シャミナード師は新しい教えを提案する資格があるなど考えたこともありませんでした。しかし、賢明さと穏健さで昔ながらの規則の解釈に努めました。このことは師を特徴付けるものであり、現代社会に通用する新しい経済条件に適する現実的で正確な手段を提示したものでした。

このことは師があらゆる困難な問題を解決する手段でした。師は、当時広く受け入れられていた理論で満足していました。しかし、問題の比較的重要性に関する正確な判断、ある神学者の意見より福音や教会の教えによって鼓吹される寛大な精神、そして、人類の不幸に対する思いやりをこうした理論に適用するよう努力しました。

師は自らの活動方法を次のように説きました(9)。「わたしは厳格主義者でも寛容主義者でもありません。わたしは教会が聖職者たちに望むようにしていますし、少なくとも、そのようにありたいと思っています。たとえ、間違っているにしてもそれは確かに善意によるものです。」その他、師は、教会によって示された明確な規則の他に、考察や経験は最も確実な案内者であること、また、モラルに関しては空理空論にふけることは危険であると考えました。それは、余りにも極端で、実際に厄介な結果をもたらす危険を犯すからでした。シャミナード師は、一見したところ、形式の「レットテル」を張られたすべての事柄に対しては嫌悪感を抱いていたように思われました。1822年ごろのフランスでは、聖アルフォンソ・リゴリの教義はまだ余り知られていませんでした。シャミナード師自身この聖人の著書は何も読んでいませんでした。同聖人についての話を聞いた時の師の最初の反応はある種の警戒心でした。次のように書き送っていたからです(10)。「福者の名で出版された著書、特にその理論は福者のものではないのではないかとされています。その理論と倫理神学に関してはそれがどのようなものであっても聞きたくありません。」

したがって、師は経験的に知り得た手段を好んで用いました。理論は議論の発端の役を果たしただけでした。いずれにしても、師は個人的な判断に従わず、むしろ、それぞれの時代に認容された規範を受け入れ、例によって、自らが育成された教義や当代の信徒の信仰の実践を規定していた教義を模範にしたのでした。

師の指導法を特徴づけるものは聖体拝領の習慣と関連づけられる霊的指

導法でした。他方、自らの指導法を尊重する余地のように確かな決まりも受け入れませんでした。マリアの娘の会の修練院で次ぎのように教えていました(11)。

「多少とも頻繁な聖体拝領は修練者の熱意のたかまりとその欠点を克服する努力に応じて修練者に受け入れられなければなりません。しかし、頻繁な聖体拝領も悪から立ち直ることがないなら益になるより害になるからです。」更に付け加えました。「反対に、この尊い食物を彼女たちから取り上げることによって彼女たちの心を弱めるのを恐れ、過度な行為に陥らないよう用心しなければなりません。」

他方、師は同時代になお忠実に守られていた18世紀の伝統を熱心に遵守しました。その伝統は極めて厳しく、特に信徒にとっては1週に1回の聖体拝領さえ頻繁な聖体拝領と見なされていました。それは、今日のように、むしろ聖体を拝領する人々の心に御主の現存によってもたらされる効果が強調される代わりに、当時は聖体への尊敬が特に強調されていたからでした。いずれにしても、シャミナード師は青少年たちが聖体拝領に1箇月も近づくことなしに過ぎさないよう激励し、またそれだけに、頻繁な聖体拝領の許可を慎重にし、特にミゼリコルド会では、いわゆる初聖体を悔悟少女たちに許可する上で厳しく指導しました。こうして師は指導していた人々の身分と必要に応じてその要請を調整したのでした。

師は修道者に対しては寛大でした。しかし、彼らに善意を認めない限り毎日の聖体拝領は許可しませんでした。師は深い謙そんによってこの聖体拝領の恩恵の対象になっていた人々を指導し激励しました。神への道に最も進んでいると思われたメール・テレーズには次のように書き送りました。

「聖体拝領に関しては聴罪司祭の意見と命令に素直に従ってください。あなたの身分の完成に到達するにはまだたどるべき大きな道程が残っているので、聴罪司祭は毎日の聖体拝領をあなたを目的に到達させるための必要な手段と考えるに違いありません。あなたは主の天使がエリアにホレブ山に行くように伝えた言葉を知っているからです(12)。」更に師は、ある修道院で犯した過ちの罰として聖体拝領を徹底して禁じていた習慣を非難していました。この点に関してある親類の中堅商人

の生涯を好んで話していました(13)。彼は少年時代から大富豪の食卓に招かれていました。ところがその富豪が死亡したので自宅に帰らざるを得なくなりました。彼は自分の家庭の生活に慣れることが出来ず段々衰弱してついに死亡しました。このように一度許可された聖体拝領が出来なくなった人々は同じ

ようになるに違いありません。

禁欲の知識は倫理神学の延長に過ぎません。シャミナード師は倫理神学同様禁欲の知識にも優れていましたし、その視野の広さには定評がありました。慣例の形式から解放されて直接福音に訴えたからでした。会員の一人が完徳を目指す修道者の義務について細心に陥った時、師は次のように書き送りました(14)。「実践的勧めに従って行動しなければなりません。キリスト教の諸徳や修道者の諸徳を実践する場合には一般に精神と心の大きな自由を維持しなければなりません。イエス・キリストのおきては、それがどのように厳しくても、奴隷のおきてではありません。それは恵みと愛のおきてです。聖パウロは、わたしたちは神の子の自由に召されていると教えました。」心の自由は師の絶え間ない配慮の対象でした。そこに心と体の健康の本質的な条件を見ていたからでした。ある病人の会員には次のように書き送りました(15)。「特にショヴォー師の心を縮ませないようにしてください。一般にさやが剣を損なうよりも剣がさやを損なうことをしばしば思い起こしてください。」

シャミナード師の霊性上の信条の本質的特徴は「信仰」の徳への絶え間ない訴えでした。一般に師はトレントの公会議の次のようなテキスト、「*Fides est initium, fundamentum et radix omnis justificationis*」(信仰はわたしたちのあらゆる義化の基礎であり、土台であり、根幹である。)また、使徒パウロの次のような書簡、「*Justus meus ex fide vivit*」(わたしの正しい者は信仰によって生きる。)(ヘブライ人への手紙10,38)等、聖書の類似のテキストを用いて教話を始めました。師は熱狂的に信仰を高揚し、「*Si scires donum Dei*」(もしあなたが神の賜物を知っており...) (ヨハネ4,10)という主がサマリアの婦人への言葉や、「どのように信仰はわたしたちを王、司祭、預言者にしたか(16)」を説明した聖ヨハネ・クリゾストムの言葉を語り始めた時、師は興奮して雄弁になりました。

もちろん、師の説いた信仰は啓示された真理に対する純粋な人間的同意ではなく超自然的な徳でした。次のように書き送っていたからです(17)。「信仰は神の賜物であり、学問によって得られるものではありません。」師が要請したのは実践的な信仰であり、「神自信の認識を通してわたしたちを取り巻く自然的、超自然的すべての事項を考察する信仰であり、このような判断で生活を導くため信仰の光ですべてを判断する信仰でした。」理性に従うだけでは不十分です。使徒は、「*Corde creditur ad justitiam*」(わたしたちは信仰によって義とされる)と教え、シャミナード師は、「理性の服従は既に神の大きなお恵みです。しかし、このことは心の信仰への前提にならなければなりません。心が従うのは愛することによってのみです。少なくともわたしはそのように思います。

実践上そのように思わないことは危険であるように思われます」と解説しました(18)。

したがって、「心の信仰」の習得を会員に要請しない一通の手紙も、一通の勧告文ありませんでした。師は救いと完徳を会員に期待していたので次のように書き送りました(19)。「心の信仰に固有なものは心の諸能力に、また、精神や意志に安定性を与えることです。わたしは新しい人の意志のことを言っています。」更に他の会員には、「信仰は、もしあなたが普段信仰の導きにしているならきっとあなたを天国に導くでしょう。また、この地上での旅路、あるいは、巡礼の間、深い平和をあなたにもたらずに違いありません(20)。」また、ある修道者について次のように力強く書き送りました(21)。「もし、信仰が彼の心に浸透することが出来るなら彼は立派な修道者になることが出来るに違いありません。」

この種の例は無数に挙げる事が出来るように思います。その中から適当に1, 2の例を挙げてみてください。師は次のように書き送りました(22)。「あなたのすべての行為が少しずつ、安心して信仰の行為になるようにしてください。あなたが冷たく、ほとんど感情がないように思われてもかまいません。わたしたちを恐るべき裁きの庭に導くのは感情ではなく信仰の行為です。」師は危篤の病人への勧めは何ものにも勝るものでなければならぬと考えました。ある病人の聴罪師には次のように書き送りました(23)。「マリア会がまったく特別な形で信じているイエス・キリストへの信仰の教えを当人の分かる範囲で教えてください。」他方、信仰が不足していることが分かっても何らかの希望を抱いていました。次のように書き送りました(24)。「わたしは、言わば、上辺だけの信心、原則的に信仰による純粋な動機を持たない信心については常に大変懸念しているからです。」

シャミナード師の霊生の他の特徴は「聖なる乙女マリアへの献身」を重視した重要な意向です。したがって、わたしたちはマリアの使徒としてその献身が大いに期待されているわけです。わたしたちに伝えられた様々の講話の内容から考えると、聖なる乙女マリアへの献身についてのテーマがしばしば取り扱われただけに、他のテーマの取り扱いはわずかでした(25)。もちろん、師はこのようなテーマをとめどなく話した訳ではなく、自らの深い確信を気くさに、しかも表現力豊かに話していました。師は聖アンセルモや聖ベルナルドにならってマリアへの献身が救霊の印であることを教えていました。マリアのしもべの手引きの冒頭にはアレン・ドウ・ラ・ロシュの次の言葉「*Signum tibi probabilissimum aeternae salutis, si perseveranter in dies Mariam in suo psalterio salutaveris*」(詩編によって毎日マリアを忍耐強くたたえることはあなたにとって永遠の救いの最も

確実な印となるに違いありません」を記しました。更に師はその講話で、「マリアへの信心を無視し怠ることは厳しい非難を受ける印になります」と断言しました。

師はマリアに頻繁に懇願することなしには真の靈生を理解出来なかったに違いありません。したがって、そのすべての通信はこの件に関する要請で満たされていました。例えば、次のように書き送りました(26)。

「神の御母マリアに対するあなたの愛はますます成長しているように思われ、そのことを主に感謝しています。あなたにこの愛を吹き込んだのはイエス・キリストであり、むしろ、キリストが至聖なる御母マリアに対して抱いておられた愛をあなたの忠実の度合いに応じて少しずつあなたに吹き込まれたのです。御母への主の愛は永遠です。それは御托身の永遠の計画によってでした。しばらく前から絶えず感嘆していることはマリアが想像もつかない愛に生かされたのは強い信仰によって御父の永遠の多産生に協力されたということです。」また、各会員には何らかの形で次のように繰り返されました(27)。「特に祈りの際には至聖なる乙女マリアに付き添っていただくようにしてください。」師はこうした努力による徳への長足の進歩を保証しました。

どのような聖母への献身の実践も無駄になるとは思われなかったからです。特にロザリオを唱えること(28)、当時代まで普及していなかった聖母月を祝わせるよう要請しました。そして、ご存じの通り、師はマリアへの信心に聖ヨゼフへの信心を緊密に結びつけ、この偉大な聖人の役割とその仲介の効果をしばしば説くことを自らの義務のように考えました。

信仰とマリアへの信心は、シャミナード師が実践し要請したものとして伝えられているように、師の靈生の特別の印、また、その靈性の固有の特徴として確立されたものでした。師の靈生のその他の点は特別なものではありませんでしたが、しかし、興味を欠くものでも独創性さえも欠くものではありませんでした。

師にとって靈生の本質は、その到達すべき完徳のどのような段階にもかかわらず絶えず継続しなければならない修養同様、実際に切り離すことの出来ない念とうと禁欲でした。したがって、次のように書き送りました(29)。「あなたが特に内的な禁欲によって犠牲を励むなら、また、あなたが念とうの人になるなら、(これは相互に相補うものです)、あなたに欠けるものはすべて補われるに違いありません。」

師はコングレガニストたちに次のように教えました(30)。「念とうの実践は最も大切です。それは救いに必要だからです。その意味で、少なくとも立派な祈り

で念とうの基本的要素に含まれないものはありません。」師によれば、「念とうは靈的生活全体を回転させる心棒である(31)」ということでした。念とうはどのような業務によっても、たとえ苦行によっても邪魔されてはなりません。師は苦行を重視する傾向のあったある会員に次のように書き送りました(32)。「業務に専念するために必要な栄養と十分な休養を取ってください。長い夜更かしは必要な念とうを邪魔することになります。様々なわずらわしきや困難を処理しなければならないからです。」

念とうが靈性への唯一の手段であることは言うまでもないことです。したがって、師は次のように書き送りました(33)。「靈性は継続的念とうに過ぎません。特に、立派な念とうをなすことなしにどのように内性に到達出来るかわたしには分かりません。」そして更に続けました(34)。

「あなたがどんなに忙しくても念とうに十分専念してください。あなたが決して失ってはならない心の平和を有り余るほど見いだすのはこの念とうによってです。また、この念とうによってあなたは大きな善を生むはずの施設で必ず出会う多くの困難や反対の中で忍従し、忍耐することを学ぶのです。」師は念とうの聖務に専念するよう力強く会員を励まし、黙想会の折り次ぎのように強調しました(35)。「立派に行われた念とうは秘蹟ではないにしても真の聖体拝領であり、イエス・キリストとの真の一致です。」

念とうの実施には固有の方法はありません。「念とうを実施さえすれば、どのような念とう法も適切なものである」と考えていました(36)。この重要な聖務の指導を会員から要請された時、師は幾つかの要点を書き残すことを考え、「念とう法にはたくさんの種類があるが念とうの人は少ない」という意義深い言葉で説き起こしました。こうして、新しい方法を示すことを差し控え、特別な方法を定めることもなく、すべての方法に適応出来る勧めを与えることで満足しました。

初心者には「混合念とう」という方法を勧めました。この念とう法は口とうと心の念とうを組み合わせ、例えば、何らかのテキストによって考察と感動を助ける手段です。この点で「使徒信経」は最高のテキストです。次のように書き送りました(37)。

「わたしたちは、このようにして念とうを習慣づけ、自分の想像を抑制しなければなりません。立派な念とうであるためには慰めを感じる必要はありません。努力して想像を抑制しなければなりません。努力しなければ何ら得るところはないに違いありません。」この最初のステップが、シャミナード師が、「もっぱら信仰の真理をめぐって展開し、信仰の唯一の光でなす念とう、すなわち、『信

仰の念とう』と呼んだ念とうに導くものです。この信仰の念とうが本当の念とうで、用いられる方法がどうであっても、師が会員にこの特色を刻み込むことを望んだ念とうでした。シャミナード師によれば、信仰の念とうは、「神の現存の念とう」によって、すなわち、念とうを持続する間、神の絶え間ない現存の雰囲気の中に心を維持するに足る信仰の増大によって完成される念とうです。したがって、念とうの最高の形式は神の現存の念とうに含まれているということが分かります。

一度、神の現存の真の念とうに到達すれば、それは世の最も散漫な業務の中で心の安らぎや潜心を維持することになります。創立者はある会員に次のように書き送りました(38)。「あなたは仕事の時にも潜心を保っているなら、その仕事のために念とうが妨げられることはありません。どのような仕事であってもそれは念とうの続きでしかないはずですから。」「*Opportet semper orare et numquam deficere*」(常に祈りなさい。決してやめてはなりません。) また、他の会員には次のように伝えました(39)。「一日中が念とうの継続であって欲しいものです。主な行動の始めに潜心の状態に戻ってください。よりよく潜心を保つことに成功するためには、念とうの開始におけるようにすべての悪い意向と腐敗した本性の傾きを捨ててください。それはあなたが行うべきすべての事柄に神のみ旨を求めるためです。最初のうちはこれらの事柄の実践のうちにあなたを不愉快にする厳しさが感じられるかも知れませんが、少し辛抱強く努力すれば深い心の平和を見いだすことが出来るに違いありません。」

念とうは禁欲の精神がなければ成功しません。心の禁欲が救いに不可欠だからです。このことは御主の教えでもあります。「*Abnejet semetipsum*」(自分を捨てなさい)。しかし、シャミナード師はこの点を十分強調したとは思いませんでした。したがって、黙想会全体を通してこの点を解き明かしました。身体の苦行に関しては、師は自分の体を傷みつけるために苦行を行い過ぎるほどでした。次のように書き送りました(40)。「禁欲、償い、屈辱の行為を非難することは聖人たちの行為を非難すること、すなわち、福音を非難することになるに違いありません。そして更に続けて、しかし、無遠慮に助言も受けないで実施するように結論づけてはなりません。」師はここでもすべての事柄にしかるべき時と場所がどのように保留されているかが分かる賢明な識別のあかしを示しました。師はある会員には身体の苦行を勧め、自己抑制の方法が分からない時には忠実なジャンにそのことを教えるよう依頼し、自らは「*Miserere*」の詩編を唱えました。(41) 一方、他の会員にはこのような苦行の実施を禁じ、神の栄光のために働くことがよりふさわしくなるため健康を大切にしよう要請しました(42)。

師はこの件に関してマリアの娘の会の長上にその一般則を次のように書き

送りました(43)。

「身体上の苦行をあなたに願ってくる修道女に対して、わたしならどのように指導すべきか、とあなたは尋ねています。極めて慎重に振る舞うことが必要です。これらの苦行は少なくとも多くの聖人たちによって一般に重んじられ、実施されたことは確かです。また、肉体は精神に従わなければならない、多くの人々にとって他の方法は不十分であることも確かです。いずれにしても慎重にしなければなりません。サタンがしばしば光の天使の姿を取るのはこうした事柄においてですからです。」したがって、この種の要請を明確にする動機を識別して行動に移さなければなりません。苦行は当人の健康状態と釣り合っていないからではないとは必ずしも言えないからです。師は次のように書き送りました(44)。「苦行の実践は体力によってばかりでなく、なお、聖霊、あるいは、イエス・キリストの霊の勧めによって調整しなければなりません。しかし、これらの勧めの真実を確かめることは困難です。このことが確かめられるのは、祈りと服従、そして、しょく罪のイエスの至聖なるみ心との一致によってです。」

霊性に専念する人は様々な徳の段階を乗り越えることが出来、浄化道、光明道、一致道と一般に呼ばれている完徳に継続的に導かれます。シャミナード師はこれらの完徳への霊性を学び、これらをテーマに小論文にまとめました。この小冊子は公表されることなくもっぱら会員専用として使用されました。これには、「準備の徳」、「浄化の徳」、「完成の徳」の名称で、内的生活の3段階の行程が区分されていました。これらの徳の名称は以前の名称とはほとんど変わりませんでした。考えの根底にはその相違を十分含んでいました。この習得方法はシャミナード師固有の考えのように思われますが、その観察をちゅうちよしてはならず、少なくともその主要な特徴を指摘しなければならないと思います。

準備の徳は、「五つの沈黙の習得から始まります。これらの沈黙はわたしたちが神の声を聞くのを妨げるあらゆる無遠慮な声を黙させるからです(45)。」すなわち、言葉の沈黙はすべての徳の修得の最も初歩的なものです。合図の沈黙はわたしたちの情欲の外的な表現を抑制し、精神の沈黙は注意散漫な心を悩ます様々な術策や執念、そして、業務の増加を抑制し、情欲の沈黙は思い上がりや怒りを抑制し、想像の沈黙はわたしたちの精神がつきまとわれる無益な幻想を散らします。このように理解する時、沈黙は従順や禁欲の受け入れに結びつく潜心を促し、恩恵の働きの心を完全に準備させます。

「浄化の徳」の働きはわたしたちの失敗の永続的原因から、すなわち、一方では、弱さ、本性的な悪癖や不確実性等、わたしたちの弱い本性の欠陥から、

そして、他方では、不満、暗示、誘惑等、わたしたちを世に引きつけるものからの解放です。これらの障害を検討してこれを取り除くことは、心を堅固な徳の熱心な習得に用意することです。

浄化の徳の後に「完成の徳」、すなわち、「謙そん、禁欲、世の放棄や清貧によって厳しく抑制される犠牲の徳です。したがって、心は信仰と希望と愛によってキリストと共に生きるためにイエス・キリストを着ることになります(46)。」追求して決して見失わず、わたしたちの努力と神からの助けによって到達すべき最終目的は、御主との親密で実り豊かな一致です。この一致はいわば、古い人を捨ててイエス・キリストを着、自らの行為をイエス・キリストの行為に変えることです。

シャミナード師は、「極めて大切な2冊のパンフレット(47)」と題するオリエ師の2冊のパンフレットに、自らの考えを正確に反映する最新の霊生の解説を見い出しました。「キリスト教要理」と、「キリスト教生活と諸徳の入門」の2冊のパンフレットは、「オリエ師の生涯(48)」の伝記作者によって次のように解説されていました。

「オリエ師は、『霊性のためのキリスト信者要理』に問答形式で、まず、アダムの命に死ぬこと、すなわち、ごう慢、肉欲、富の欲求に死ぬことの必要性と、イエス・キリストのように謙そん、禁欲、清貧を愛し、キリストの秘義の恩恵に参加することを勧めました。これが第一部のテーマでした。第二部にはこの精神を取得し維持するには祈りが主要な手段であることを示しました。」次に、「『キリスト教生活と諸徳の入門』で、御主の精神に従って古い人の腐敗した欲望を絶滅することに最も必要な徳、例えば、謙そん、忍耐、禁欲、清貧、従順のような真の諸徳を実践するよう弟子たちに教えました。要するに、情欲への禁欲、イエス・キリストの命の確立がオリエ師の霊生全体の要約でした。したがって、イラリオン・ドゥ・ノレ師はオリエ師の霊生を正に、『福音の精髓、福音の本質』と呼んだのでした。」

師は、多くの人々にとって多分強制的で、確かに期待はずれの解釈を強調した最初の失敗の理論の影響を受けていた小冊子の第一部には捕らわれず、すばらしい言葉で御主との一致を取り扱った第二部を選び弟子の司祭たちに次のように書き送りました(49)。「このように、わたしたちはこの同じ霊性を持つことはふさわしいと思います。わたしは、『キリスト信者要理』及び『キリスト教生活と諸徳の入門』の小冊子に含まれているオリエ師の霊生をほぼ取り入れています。しかし、この霊生は初心者あるいは余り品行のよくない人々や浄化道に十分進まなかった人々のためにははかなり掘り下げる必要があると思います。

また、これらのパンフレットを使用する前には準備が必要になると思います。その念どうの方法は光明道に入った人にしかほとんど役立たないと思います。ただ、たやすくその精神をくみ、それを浄化道に役立てることは出来ると思います。」

シャミナード師は御主と親密に一致する靈性によって神秘的領域に入るための一般的靈性の限界を乗り越えていました。もちろん、靈性の神秘的領域に没頭するまではいきませんでした。このことに関する記録は何ら伝えられていません。師は靈性の神秘的領域を知らなかったわけではありません。聖テレジアを深く研究し、特別な魅力で聖人に引かれていたからでした(50)。いずれにしても、師には精神上的の素質もさし迫った要請にこたえるべきものがなかったにもかかわらず、靈性に関する活動の努力が促がされました。師は神から呼ばれている人々を完徳の頂点に登らせるよう権威を持って導くことで満足していました。その優れた指導は、こうした困難な事柄においてさえ、わたしたちに伝えられたこの種の何通かの音信によってばかりでなく、なお、師に寄せられた評価によっても、明らかにあかしされました。ジャクピー司教がカルメル会修道女の指導を引き受けるよう久しくシャミナード師に要請されたのもこの評価のためでした。しかし、師は多くの業務のためこの指導を引き受けることが出来ませんでした。

わたしたちは師の靈生の最も興味深い優れた特徴を考察するよう試みましたが、もっぱら福音の勧めの実践に関する靈生には触れることが出来ませんでした。したがって、この重要な考察には次章で触れることにしたいと思います。ここで修道者や修道女の身分上の徳を養成するよう努力した創立者の姿に接することが出来るからです。



注

- (1) 1842年2月13日の覚え書き
- (2) 1833年10月4日、シュヴォー師へ
- (3) コスン師は1823年にはダヴィオ大司教の聴罪師でした。師は神学部でモラルを教えていましたが1825年に帰天しました。「神学校史」、2巻、15ページにその略歴が見られます。
- (4) 「わたしは音楽が好きです。才能のある生徒にはこれを教えて欲しいものです。」(1832年7月15日、ラン師へ)。シャミナード師は、また、同じような言葉で絵画についても述べました。

- (5) 1825年7月10日、カイエ師へ
- (6) 不幸にして、シャミナード師によって完全に記録された説教の断片しか伝えられていません。1809年、師の書類の中から説教のプランを押収した警察に対して師は次のように伝えました。「わたしはモラルや信仰について話す必要がある時、その考えをルーズリーフにメモしました。しかし、主題を把握したらメモを取るのを止めました。注意を集中するためにしか講話も教話もメモしませんでした。集中した考えを多くの時間をかけてメモすることはありませんでした。」 いずれにしても、師の個人的な考えや乱読を非難する草案の大半が伝えられています。
- (7) 師は償いとしてしばしば教皇クレメント11世聖下の、「天使祝詞」を唱えさせました。
- (8) 1830年12月22日、ララン師へ
- (9) 1841年3月17日、ラヴァルのミゼリコルド会の院長へ
- (10) 1822年1月25日、ルイ・ロテア士へ
- (11) ボルドーのマリアの娘の会の修練院長への助言
- (12) 1818年8月3日
- (13) アルボアのマリアの娘の会の共同体での教話
- (14) 1837年1月3日、ジャンル士へ
- (15) 1831年9月22日、ララン師へ
- (16) 1821年の黙想会
- (17) 1825年7月23日、カイエ師へ。「実直な気持ちでなす勉学は立派なガイドになります」と付け加えました。
- (18) 1833年1月23日、ララン師へ
- (19) 1833年1月23日、クルーゼ士へ
- (20) 1827年11月29日、クルーゼ士へ
- (21) 1832年3月29日、クルーゼ士へ
- (22) 1839年1月17日、受取人不明
- (23) 1844年5月5日、レオン・メイエ師へ
- (24) 1834年9月3日、レオン・メイエ師へ
- (25) いずれにしても、乙女マリアの祝日には、マドレーヌに多くの信徒を引き寄せるために外部の説教師を呼ぶのが習慣でした。

- (26) 1843年3月1日、ペッロデン師へ
- (27) 1836年11月9日、クロード・ムーシェ師へ
- (28) シルヴェン師の覚え書き
- (29) 1836年11月18日、ショヴォー師へ
- (30) シルヴェン師の覚え書き
- (31) 1839年2月4日、クルーゼ士へ
- (32) 1824年5月17日、カイエ師へ
- (33) 1839年3月19日、クルーゼ士へ
- (34) 1827年4月9日、クルーゼ士へ
- (35) 1821年の黙想会
- (36) シルヴェン師の覚え書き
- (37) ボルドーのマリアの娘の会の修練院長への勧め
- (38) 1834年3月3日、レオン・メイエ師へ
- (39) 1835年12月28日、プロス士へ
- (40) 1825年7月5日、シャルル・ロテア師へ
- (41) シルヴェン師の覚え書き
- (42) ショヴォー師への多くの手紙の中で
- (43) 1828年2月27日、メール・セン・ヴェンセン院長へ
- (44) 1832年6月26日、レオン・メイエ師へ。ボルドーのマリアの娘の会の修練院長への勧めと同じ。
- (45) ボルドーのマリアの娘の会の修練院の院長への勧め
- (46) ボルドーのマリアの娘の会の修練院長への勧め
- (47) 1831年12月5日、クルーゼ士へ
- (48) フェイヨン著、「オリエ師の生涯」、4版、2巻、256ページ。シャミナード師は基本的にオリエ師の霊生を発展させたトロンソン師の、「特別糾明」をししばしば読み、念とうしました。
- (49) 1833年8月11日と8月30日、ショヴォー師へ。同じ考えを1833年7月30日、クルーゼ士へ

(50) 師はこの聖女に対する特別の尊敬を、ドゥ・ラムルス嬢やドゥ・トランケレオン嬢のような特に親しくしていた人々と分かち合っていました。



第 26 章 修道者の養成

養成に関する見解 ❖ マリアの娘の会の修練院 ❖ マリア会の修練院 ❖ マドレーヌの小神学校 ❖ 修練院視察 ❖ セン・ローランの志願者 ❖ 修練院の指導 ❖ 禁欲の強調 ❖ 清貧 ❖ 半端な修道者 ❖ 司祭への要請 ❖ 院長への要請。

シャミナード師の禁欲に関する得意分野は修道者の身分に関する知識でした。

師がこの領域にもたらした力強い支えは生涯にわたる修道生活の経験でした。すなわち、師は修道者であった兄によって養成され、14歳の時から修道生活の諸徳及び基本的な義務の実践を誓約しました。そして、み摂理はサラゴサの啓示的な呼びかけによって祖国の信仰の復興のみならず、なお、修道会の復興のために働くよう師を促し準備させました。師の使命の最高の極致は修道者の養成でした。師は福音の勧めが初代教会から当時代まで教会で実践された様々な形式について好んで熱心に研究しました。修道会の会則は余りまとまったものがなく、そして、数少ないものでしたが、これを自ら図書室に集めました。また、フランスやスペインの修道院で共同生活の実践を体験し、旅先で出会った古参の修道者の経験を学びました。

この問題に関する師の専門的知識はあまねく知られていました。したがって、ボルドーやその周辺地域に、師に相談なく修道院が創立、あるいは、再建されることはありませんでした。後のセン・ブリュックの司教で、ボルドーの司教総代理に任命されたマルシアル師が教区共同体の指導管理を委託された時、師は教会規定の視察を有益になす方法をシャミナード師に学びました。また、アジャンのジャクピー司教も、シャミナード師のマリアの娘の会の指導のすばらしさを賞賛し、他の修道会の指導も師に委託しようとしたほどでした。このような話題の他にも、シャミナード師はその助言によって、また、新生の修道会の強化確立への協力によってその協力が求められていたことが伝えられています。更に、時には1832年のように、福者グリニヨン・ドゥ・モンフォール設立の聖霊の宣教会のような古い修道会でさえも、その存立に関する困難な問題を解決するため師の忌たんのない助言が求めたことさえ伝えられています。

これらの人々は、シャミナード師自身が福音の勧めの道に自ら入っていった

修道生活の実態に関するまれにみる経験に明るい光を求めたのでした。在俗で既に修道生活を意図していた人々に対して師は優れた養成を与えるよう努力しました。いずれにしても、両修道会の創立以来、師にとって最も緊急で、最も実り多い養成の業務になるべく専念するため少しずつ他の業務から解放されるようにしていました。また、どのようなさ細な事柄も見逃さないようアジャンのマリアの娘の会との通信を持続しました。ボルドーでは小さな本会への配慮が他のすべての配慮に優先しました。すなわち、会員への配慮が優先したので、創立者によって行われた評議員会等はいつも真の霊的教話に変わりました。

師は両修道会が少しずつ発展するにしたがってその活動を管理面と霊生面に区分することを余儀なくされました。このことを遺憾に思い、使徒たちのように会員の聖務や信仰教育に関係しない他のすべての業務から解放されるよう願いました。こうしたジレンマを次のように書き送りました(1)。「セン・ルミにはこれほどたくさんの手紙を書いているのに、霊的なことについてはほとんど話していないので、わたしが感じている悩みを述べることは困難です。」こうしたことで、自責の念にかられるほど気後れした師は次のように書きました(2)。

「わたしが驚き、時々不安を感ずるのは、聖パウロの次の言葉です。『*Nemo militans Deo implicat se negotiis saecularibus, ut ei placeat cui se probavit*』(兵役に服している者は生計をたてるための仕事にわずらわされず、自分を召集した者の気にいろうとします。)(テモテアへの手紙、二、2-4) わたしの立場、そして、神のためにわたしが努力しなければならない戦いで、わたしは確かにしばしば世俗との折衝に入らなければならないのです。世俗との折衝に介入するという義務は、この戦いが神のみ旨にかなっていないことを示すのでしょうか、難しいのはこの点です。ずっと以前からこの点で思案に就いています。多少とも心の安らぎが得られるのは次の点に用心する時です。1、神が求めていると思われる業務によってのみ交渉に入る時、2、出来るだけ最小限に止める時、3、わたしの精神と心がこれらの交渉に現実に巻き込まれないよう神に向かうことを止めない時です。もし何か付け加えること、わたしに伝えることでもっとよいことがあれば遠慮なく伝えてください。」

師の通信は、たとえ重要な業務上の事項を取り扱ったものでさえ正に信仰の精神で満たされていました。その超自然的な考えは、時には、段落に、あるいは、全文にふえんされた一般に高潔で力強い文面にはしらせたペン先から自然にわき出たものでした。いずれにしても、通信の末尾は世の関心事から解放され、より潜心の領域に心を高めるよう熱誠の形をとっていました。

その上師は修道者の養成のために教会から課された様々な方法の中で、修道生活の規則的、体系的な訓練の場である修練院を効果的な手段として活用しました。師は当初からマリアの娘の会のために修練院を設立し、優れた修練長のメール・マリー・サクレール(3)にその指導を委任しました。そして、この小さな修練院を信仰の精神で活気づけ、通信によって指導しました。師は、この小さなグループが体験した気持ちや勝ち得た成果を心から喜びました。不満を訴えることがあったとすれば、それは熱誠の行き過ぎでした。そこで、次のように書き送りました(4)。

「わたしもあなた同様、評議員会が志願院あるいは修練院に入ることを希望している少女たちに余りにも完璧さを要求しているように思います。最も申し分のない修道会ではこのようなことは行われません。志願者や修練者たちが従い、善意を表し、そして、特に自ら反省する努力をするたびに彼女たちの過失は大目に見るべきです。かえって大げさな要求の方が反対の過失よりも好ましいとさえ思います。このことは修道会の創立当初には幸先のよいことです。経験が積まれるとやがてほどよく調和がとれるようになると思いますから。」

メール・ドゥ・トランケレオンは優れた養成を確保するため修練院をシャミナード師の近くに移転することを望んでいました。師自身もこのことを歓迎しましたが、それはメール・ドゥ・トランケレオンからの多くの通信が省かれることが考えられたからでした。そこで、師は、1824年に、ボルドーのマドレーヌのすぐ側のマザレン通り(5)にあった1軒の家屋をマリアの娘の会のために借用しました。メール・ドゥ・トランケレオン自ら修練院設立のためにボルドーを訪れ、従姉妹のメール・マリー・ジョゼフ・ドゥ・カステラを修練院の院長に、メール・ルイ・ドゥ・ゴンザグ・ポワトヴェンを修練長に任命しました。それは、トンネンの修道院では、若くして帰天したメール・テレーズに代わってメール・デゥ・サクレールが就任していたからでした。

小さな本会の会員は長い間アジャンの修道女たちより恵まれていませんでした。最初の7名がセギュールの袋小路で修練期を終えた時、これら新会員は、3年間、会の宣教事業の要請に全力を傾注しなければならなりません。ところが、養成の不足に関する不満が徐々に表れ、やがて養成に関する大きな危機が感じられるようになったからでした。彼らの一人はシャミナード師に次のように書き送りました(6)。

「神父様、わたしは時々あなたの指導を受ける必要を感じています。やっと修道会に入り、新しい霊的生命にあずかるための手ほどきを受け、わたしのよちよち歩きを支えるひもがはずされて、もうすっかり大人にでもなったかのように、

独り立ちするように促されているからです。」

シャミナード師は有能な人がマリア会に入会することを望んでいることが分かれば分かるほどこのことを心配していました。

コングレガシオンは志願者をマリア会に送り続けていました。例えば、ボルドーでは著名な家庭の出身でスペイン戦争の元将軍であったゴーサン氏やアルザス出身の好青年でボルドーの富豪の家庭で商業の初歩を学んでいたルイ・ロテア氏等(7)、シャミナード師と親しくなり全面的に師に協力するようになりました。なお、ルイ・ロテア氏はアルザスのセント・マリー・オーミヌ教区の小教区の主任司祭の兄弟でした。使徒のアンドレアが主に出会うとすぐ兄弟のペトロを呼んだように、「天使のように敬けんな司祭シャルル・ロテア師は弟の呼びかけに従うことを少しもちゅうちょしませんでした。マリア会で献身するためにすべてを置き、至聖なる乙女マリアをたたえ、マリアに奉仕することを早速表明しました。ロテア師はポルレンツリュイ出身で敬けんな司祭カイエ師とブザンソン神学校の同僚でした。彼らは信仰に生きる考えや希望を互いに打ち明けていました。」ルイ・ロテア師はカイエ師にマリア会への入会を勧めていました。そこで、「カイエ師はボルドーに赴きました(8)。」他の司祭たちも神の声を聞き、これに従うことを望みましたが、アジャンのセルレス師やオーシュのラツリュ師のように多くの司祭たちは所属の司教によって足止めされました。

正式の修練院の設立の時期になっていたのも、それは1821年の10月中にセン・ローランで開設されました。当初の修道者の一人ドミニク・クルーゼ士が修練院付き司祭のルイ・ロテア師と修練院の責任を委託されました。ただ固有の霊的指導は創立者に保留されていました。

セン・ローランのぶどう畑やプラタナス林、そして、小さな家屋については既に触れた通りです。恐怖政治の不吉な時代を思い、キリスト教教育修士会の最初の修練院の模範、小さな本会のスタートとなった親密な集会、そして、使徒たちの熱誠を会員に活性化させた毎年の黙想会等を想起する時、セン・ローラン修練院には数々の思い出が満ちあふれていました。セン・ローラン修練院はマリア会の揺らん、信心と犠牲的精神の香り漂う真の祈とう所、新生の本会の最初の修練院として予定されていた場所でした。しかし、こうした敬けんな伝統に満たされていたとはいえ、生活上の諸設備は整っていませんでした。四つの部屋、倉庫のはずれの質素なチャペルと炊事場、これが居住区画の全体だったからでした。家具も極めて粗末で、最初、修練者にはいすさえなかったほどでした。食糧を含め、その他は言わずもがなでした。本会草創期のすばらしい会員たちは次のように伝えました(9)。「多くの物的資源が不足していたと

はいえ、靈的事柄は同じではありませんでした。彼らの熱誠はそれらの不足を補って余るほどでした。清貧こそが修道院の基本だったからではないでしょうか。」

ロテア師は後ほどつつましい本会の草創期の思い出を楽しく想起し、創立者に好んでこのことをしのばせました(10)。

「ボン・ペールはわたしにセン・ローランに修練院を開設しなければならないとおっしゃいました。修練者のわたしと兄弟のオリヴィエは晩の9時にセン・ローランに着きました。そこにはわずかばかりのわらしかありませんでした。何という極貧。しかし、わたしたちは喜びにあふれて詩編を歌い(11)、満足でした。ボン・ペールが視察に来られた時、差し出すものが何もないほどわたしたちは貧困でした。ボン・ペールはわたしの側のトランクの上に座られました。お考えを聞かされたわたしは満足でした。わたしたちは修練院を4人で始めましたが2年後には30名になっていました。」それから建物の一部が1階増築されました。そして、特に中等教育の生徒のため第二の修練院がマドレーヌの側に建てられました。シャミナード師はチャペルの右手にこれまで住んでいた家と対をなす家を購入しました(12)。師は不在の時(13)、この家屋の新しい目的のための必要な補修の管理をドゥ・ラムルス嬢に委託しました。この施設は「小神学校」と呼ばれ、生徒たちはマドレーヌにほど近い王立高等学校に通っていました(14)。しばらくしてこの修練院は人数も増え、盛んになりました。こうして、創立者は1824年には三つの施設を取得しました。一つはマリアの娘の会のため、他の二つは小さな本会のためでした。修練者の修練期間を最低2年間と定め、この期間をいわゆる修練者の養成と俗学の習得に区分しました。詳細な規則を作成し、慎重に彼らを指導しました。

創立者のプレゼンスは規則以上に彼らの熱誠を持続させました。師は業務に支障がない限りしばしば、そして長く修練院に止まっていたからでした。家庭の優しい父親のように、時には小さな本会の会員と食事を共にすることを喜んでいました。例えば、ご公現の祝日とその慣例になっていました。伝えによれば、王様の権利が創立者に当たるよう豆の入ったおきまりのお菓子が欠かされなかったということです。しばしば会員たちを訪れたのは師の方からでした。チャペルのため自分の住まいからわずかに隔たっていた小神学校をほとんど毎日のように訪れ、またしばしば、マザレン通りのマリアの娘の会の修練院に赴き、毎週木曜日は終日セン・ローランで過ごし、ムニユ通りで懸命に働いていた会員たちと会談していました。

シャミナード師が一日の業務をどのように配分していたか、当時の目撃者の

話しによれば次の通りです(15)。師は10時に修練院に到着しましたが、立ち居振る舞いが大様でしたので共同体に迷惑をかけないように前もって朝食は済ましていました。一人の修練者が食卓でボン・ペールのために読書をしました。その後の時間は修練者たちのための時間でした。休憩時間中は修練者が皆ボン・ペールの周りに集まりました。話題がほとんど常に信心と教育であったにもかかわらず修練者たちと愉快に談笑されていました。恐怖時代の貴重な経験の思い出や個人的な思い出やその他の話が交えられていたからでした。休憩時間後すぐ霊的講話の時間が設けられていました。ボン・ペールはいつも熱心に聞き入っていた修練者たちにその霊性を感銘づけることになりました。その落ち着いた話しぶりは彼らの心にこれを浸透させ、消すことの出来ない信念を植え付ける助けになっていたからでした。それから、個人的対話を望むすべての修練者を自由に迎え入れるばかりでなく、小さな志願者に至るまですべての人々を丁寧に受け入れました。彼らの一人は次のように述懐しました(16)。「わたしたちはいつも親切に迎え入れられ、決して追い返されませんでした。わたしは面談の終わりに、『どうぞ頑張ってください』と言いながらわたしを抱擁してくださったことを決して忘れませんでした。」ボン・ペールの部屋には絶えず訪問者が押し掛けていました。こうした人々の熱意を満たすため夕方ずっと遅くなってからしかマドレーヌには帰りませんでした。

ボン・ペールのセン・ロレン修練院来訪は修練者たちを喜ばせ、修練の意欲を高めました。そのプレゼンスが彼らの霊的働きや修養の進歩の刺激剤になっていたからでした。当時のある修練者が次のように述懐しました。

「ボン・ペールと修練者との間には様々な苦しみを喜びに変えるすばらしい親愛の情がありました。わたしたちの質素な修練院は地上の天国になりました。それは、わたしたちが分からないこと、また、わたしたちの嫌悪感のために不快な思いをしている様々な事柄を快く、忍耐強く説明し、教え、興味を持たせるために何時間も終日わたしたちと一緒に過ごされたからでした。ボン・ペールはわたしたちに召命に対する真の熱意を吹き込まれました。マリアの宣教師という資格には何ものも比較出来ないと思われ、また、本会の3部門、すなわち、司祭修道者、教育信徒修道者、現業信徒修道者がすばらしい1本の樹木を形作っているように思われたからでした。「cor unum et anima una」(体は一つ、霊は一つ)。わたしたちに与えられたこうした指導は霊性のもう一つの光であり、その基本でした。したがって、わたしたちは、ボン・ペールの好意によって与えられた熱い熱意、謙そん、信頼の諸徳を成長させることが出来たこと、また、休憩時間の時でさえ神の様々なことについて楽しく談笑したこと、更に、わたしたちは霊性への進歩しか考えなかったこと、生涯にわたって乙女マリアを人々に知らせ、愛させることが出来る幸せより他の幸せを望まなかったということが出

来ました。」

こうした修練院の熱意が円熟した修道者を生み出したということは驚くべきことでしょうか。もう一人の修練者が次のように語りました(17)。

「わたしは、すばらしく模範的であった若い修練者の幸いな目撃者でした。わたしはエピナという修練者が聖人のように帰天するのに立ち会ったからです。彼は修練院でわずかな期間しか生活しませんでした、規則を忠実に守り、その慎みは彼に接する者を皆感動させるほどすばらしいものでした。彼は臨終の時、同修者の一人もやがて自分の後を追うに違いないと伝えましたが、果たして、デフュイという修練者が間もなく帰天しました。この修練者はコルマル出身の代議士の甥で、修道者志願への反対はありましたが、大きな財産と世間的に言えば輝かしい将来をなげうった人でした。エピナ修練者の帰天後シャミナード師はこの若い修練者が御主イエス・キリストと一致の内に帰天するために用いた手段についてしばしばわたしたちに説明されました(18)。」

先に触れたように、セン・ローランの修練院には修練者たちより若い数名の子供たちがいました。彼らは志願者として修道生活の準備が許可された者たちでした。シャミナード師は、「修道会は男子の会であっても女子の会であっても、幼少の時からその会員を養成した時でなければ決して盛んにならない」ということを確信していました(19)。シャミナード師は訪れる少年の志願者を快く受け入れていました(20)。修道生活の召命は一般に考えられているよりももっとしばしば輩出するはずだと考えていたからでした。ある説教で次ぎのように述べました(21)。「イエス・キリストが一人の青年に、『行って持ち物を売り、そしてわたしに従いなさい』とおっしゃったことを神の霊がある人に伝える時、この霊の導きに従うことはいかにも当然なことではないでしょうか。この人には福音の青年と同じ義務がないとだれが言うことができるでしょうか。」したがって、修道生活を希望する子供たちの資産上の家庭環境を決して考慮してはなりません。もちろん、創立者は善意を要求しました。たとえそれが得られていないように思われても、少なくともこれを受け入れる意向のあることを要求しました。そこで、次のように書き送りました(22)。「受け入れた志願者については、彼らが到達した徳の程度を詳細に検討すべきではありません。しかし、徳を実践するための力や活力があるかどうか、彼らの精神力を検討しなければなりません。」

シャミナード師はたとえ志願者を容易に受け入れるにしても、細心の注意を払って指導する必要について次のように強調しました(23)。「若い者はどんなに立派でも、火にかけたミルクを見張るように常に見張っていなければなりません。」

ん。」したがって、召命や適性が十分認められない志願者は即刻送り返すことを了承していました。この点に関してマリアの娘の会には極めて明確な指導をし、次のように書き送りました(24)。「志願者が善意を示し、必要な性格を持っているように思われるならこれを受け入れるにやぶさかであってはなりません。しかし、それらの印が欠けている場合はき然として送り返すべきだと思います。」この件に関して次のように指示していたからでした(25)。

「従順で率直な性格が必要です。志願者の数を増加することを急がないでください。また、御主の働きにふさわしくないように思われたら恐れることなく送り帰してください。一般に、このことは志願院での生活の当初から気づかれるはずだからです。もし、あなたが強情で移り気のわがままの志願者を何らかの理由で留め置いたら、あなたは彼女の悪い習慣によって他の志願者をだめにするに違いありません。これらの善意の志願者は、もし、善意のある模範的な志願者たちで囲まれているならきっと立派な修道女に成長するに違いありません。」

師は院長に、「どうぞ、母親に、母親の中でも最も優しい立派な母親になってください。いずれにしても、もっぱらあなたの娘たちの母親になってください。あなたはまだ志願者たちを修道精神を受け継ぐ者にはしておらず、あなたの愛によってはぐくんだものでもありません。」

シャミナード師は指導者が志願者たちに修道生活の真の姿を指導するよう要請しました。次のように書き送りました(26)。「わたしの指導方針の一つは志願者を修道生活の快い面から引きつけるのではなくむしろ神の霊の働きを示すことです。」師は、志願者の気持ちが全然超自然的でないように思われるような思い上がった者に出会った時、彼らを正式に受け入れる前に長い間試みました。ある会員は次のように語りました(27)。「わたしはボン・ペールが何名かの志願者に与えていた試練が極めて厳しいものであったことを思い出します。一人の志願者を受け入れる前にボン・ペールは彼をヴィルヌーヴ、ロゼルト、カステルサラゼンの3施設に相次いで送りました。もちろん、このことは、それぞれの施設がしぶしぶでも彼を受け入れるよう前もって指示していました。ボン・ペールはこのことをわたしに話してから、彼には彼を変えることの出来る大人や若者が必要なのですと述べられました。」

シャミナード師は養成施設を委託した院長たちに、委託された志願者や修練者たちを、彼らが修道精神を習得する前に家庭に送り帰してはならないことを厳しく指導しました。師はマリアの娘の会のある院長に次のように書き送りました(28)。「修練者たちが十分養成されない限り彼女たちを活動の部署に使

用しないでください。さもないと、あなたの所には半端な修道女しか残らないでしょう。したがって、会も休息に衰退するに違いありません。」また、修練者について問われた時には、「どうぞ忍耐してください。修練者を第一線で働かせる前に十分養成しておかなければ、わたしたちは発展する代わりに衰退するに違いがないからです」と答えました(29)。経験はそのことを師に十分過ぎるほど教えていたからでした。それで、次のように付け加えました。「今までわたしたちは彼らを早く働かせ過ぎたために幾人かを失いました。わたしたちが修練者を半端に養成するならわたしたちはやがて滅びるに違いありません。」

もし、わたしたちが、修練院は平凡な一人の信徒を内的で靈的な人に、すなわち、世俗の人を修道者に変えることを目的にしていると考えたら、こうした師の厳しさや要請が理解されると思います。シャミナード師は力強く、「靈的でない修道者は怪物か亡霊です(30)。」また、「生まれつきの才能が何だというのですか。最も大切なことは内性です。誠実にこのことに専念しなければなりません。その他のことは、神がわたしたちに与えようと望まれることを頂くだけです」と教えられました(31)。

シャミナード師はこの靈生を教え込むためにセン・ローランで自ら模範を示した「一貫した指導(32)」を両修道会の修練院長に要請して、次のように書き送りました(33)。「長い忍耐が必要です。あなたは小さな修練者に修道生活の生き方を教えなければならないからです。彼らは靈性の領域においては小さな子供のようなものですから。『quasi modo geniti infantes』(あたかも生まれたての幼児のようだ)。」彼らにとって必要なことは精神も心も意志も同時に働かすことです。また、次のようにも書き送りました(34)。

「あなたが修練者に与えるべき靈的指導において、あなたは内的生活の原理によって精神を教え照らすと同時に、常に感情を抑え、意志を鍛えなければなりません。信仰と愛以外に、意志がどのように神に捕らえられるかわたしたちには分かりませんが、神の審判に対する恐怖が意志を有益に揺さぶり、これを神に向かわせなければなりません。しかし、このこともまだ最初の段階に過ぎません。信仰と愛のみがわたしたちを進歩させることが出来るのです(35)。」

修練者には完全な素直さと持続的な努力が要請されます。したがって、彼らの一人に次のように書き送りました(36)。「そのためにはただほんの少しの勇気が必要です。このことはどうしようもないことです。ご存じの通り、だらしのない者は天国には決して入れません。」修練者側からの善意と、修練長側からの賢明さによる一貫した指導という、この二つの要素の一致は、修道生活の原理を、同時にまた、本会の靈生の特別な影響を彼らの心に深く刻み込ませるという

確実な効果をもたらしたに違いありません。

シャミナード師にとってこれらの原則は、靈的生活のすべての教師たちにとってそうであったようにこれと異なるものではありませんでした。それらの原則は福音自体の直接の適用だったからでした。わたしたち読者がシャミナード師に感謝しなければならないことは、師が幾つかの音信でもっぱら注意を集中した原則、あるいはまた、修練院長に注意させた原則が何であったかを指摘して下さったことです。「それは禁欲で、禁欲は師にとって修道生活全体を回転させる軸(36)」だったのです。次のように教えたからでした(37)。「修道者の身分は木材のような固い2枚の木片、すなわち、償いと従順によって作られたイエス・キリストの十字架に似た十字架です。」すなわち、償いは清貧と貞潔の誓願の対象であり、従順は修道誓願の第三の要素だからです。シャミナード師は、個人の意志の放棄である従順について、あらゆる機会に熱弁を振りました。「わたしは、自分を抑制出来ず常に陰気で落ち着きのない半端な修道者には用がありませんでした。神が彼らを喜ばれないのに、どうして自分自身満足出来るでしょうか(38)」と教えました。

貞潔の必要性は極めて明確でしたので、師は清貧の必要性を強調しました。大革命によって破滅させられた古い修道会の清貧の例によって清貧の最高の価値が教えられたからでした。師は、修道者が団体としてでも所有者であることを主張したり、あるいは、そのように考えることを望みませんでした。「財産は修道者のものでも、長上のものでも、共同体のものでもない。それは神のものである。『*Domini est terra et plenitudo ejus*』(主の支配は世界に及び、そこに充ち満ちている)。修道者は従順の指導の下でのみこれを使用する(39)。」師は本会の将来に対するあらゆる期待の根拠を清貧の実践に置きました。本会の創立当初次のように書き送りました(40)。

「神は清貧を守らない修道者を厳しく罰します。すなわち、神は彼らから恩恵を引き上げ、彼らを見捨てます。反対に、本当に貧しくなった修道者には格別の恩恵を豊かに与えます。もし、わたしたちが清貧を守るなら、わたしたち会員は限りなく増加し、本会は熱心の面でも、会員数や施設の数の面でもすばらしい発展を遂げることになります。わたしたちはすべての人々の耳目を集めています。したがって、わたしたちは世間で、極めて厳しい質素な生活を送っている修道者と思われています。もし、わたしたちが物事を世の人々が使用するように使用するなら、また、便利さを世の人々のように求めるなら、そして、何か不足した時世の人々のように嘆くなら、人々は驚きと軽蔑の眼で、『彼らは我々と少しも変わらない』と言うに違いありません。」

師は後になって清貧の精神が衰えて来たのに気づいた時、次のように書き送りました(41)。

「富の本質には人間の心を腐敗させるものがあります。大革命前、大半の修道会の墮落はどこから来たのでしょうか。富からではないのでしょうか。本会が会憲を正確に守り、その精神を堅持するなら、本会は熱心な状態に保たれるに違いありません。神は本会の活動を祝福し、本会は世の人々を教化するに違いありません。もし、わたしたちがその精神から遠ざかるなら混乱と墮落、そして、様々なみじめな結果をもたらすことになるに違いありません。」

師は、この点に関して便法を許しませんでした。1830年の革命が混乱をもたらした時次のように書き送りました(42)。

「本会に入れば何も不足するものがないという期待と確信のみで会との契約、むしろ神との契約を結ぶ者は、受け入れる側の会にも、まして、神にもふさわしくないに違いありません。終生誓願を立てながらみ摂理の配慮に完全に身を委ねることの出来ない小心者が見いだされるなら、しかるべきことを検討するに違いありません。そのような人が、どうして主の戦いのために選ばれたかわたしたちにはよく分かりません。大革命は、自らを主のしもべであると自称する人々を選び分けるために主が用いられた選別機になったわけです。」

いずれにしても、師は次のように教えられました(43)。

「たとえ一介の信者でも決して見捨てられることがないという固い信頼をみ摂理に対して抱かなければならないとすらなら、苦しみを伴う清貧によってすべてを犠牲にすることを決意したわたしたちはどうあるべきでしょうか。み摂理はわたしたちを忘れられることがあるのでしょうか。わたしたちは毎日の糧を請い求めなければならぬほど、神はわたしたちを清貧の中に置かれることさえ予想しなければなりません。しかし、揺らぐことのないわたしたちの信仰はそこに神の恩恵を見出すことが出来るに違いありません。わたしたちが本当に貧しいなら、本会は発展し繁栄するに違いありません。」

したがって、マリアの娘の会の財務局長への励ましに驚かされることはありません(44)。

「わたしがトネンに立ち寄った時、メール・セン・テスプリは別々の機会に2度ほど金庫にはもう5フランか6フランしかないことをわたしに伝えました。しかし、わたしは、わたしが彼女たちを初めてトネンに伴った時、彼女の持ち物について、また、彼女たちには必要なものが皆そろっていたかどうかを尋ねました。すると、彼女はトネンに到着時には何も持ってなかったこと、しかし、皆今まで何も

不足するものはなかったと答えました。そこで、彼女に別々に2回ほど、あなたの将来への不安はみ摂理の計らいを押し止めはしないか心配です、もし、わたしたちがいわゆる世間的な打算で行動するなら、大したことは何も出来ず、神のみ業に用いられることさえふさわしくなくなるに違いありません」と答えました。

修道生活を志す志願者は修練院で意図している新しい身分の一般原則ばかりでなく、なお志望する修道会でこれらの原則によって与えられる特別な精神、すなわち、シャミナード師が「修道会の特質」と呼んだ特別な精神をくみ取らなければなりません。シャミナード師は養成のその他の側面についてももちろん強調しました。この点に関する創立者の考えは十分理解されたと思いますので、ここではこの点には触れないことにしたいと思います(45)。しかし、師の最も頻繁な要請の対象が信仰の精神であったことには言及しなければなりません。創立者が強調した「真の信仰の精神は神に対する全幅の愛と自らの完全な放棄を目指し、修練院で養成されたこの精神が本会の全共同体に徐々に浸透することを目指すものでした(46)。」

修練院を出たばかりでは修練者の修道者の身分の養成は完全ではありません。土台のみは設置されましたが建物は建て続けられなければならないからです。修練院は言わば無数の職業に道を開くとびらに過ぎず、その目的は養成の完成です。最初の一步に止まることはその目的を見失うことになるからです。したがって、創立者は充実した修練院を会員に保証したにもかかわらずその努力がまだ実っていなかったことに気づいていたのではないのでしょうか。師は会員が増加しても、あるいは遠くに離れていても、出来る限り熱心に彼らを支え続けました。多くの指導の手紙によって絶えず会員に、その身分が目指すべく義務づけられた聖化を想起させるよう努力したのでした。ある会員には次のように書き送りました(47)。「あなたが聖人になることをどれほど望んでいることでしょう。聖人とマリアの子供という表現を同義語にしてください。」また、次のようにも伝えました(48)。「半端な修道者であってはなりません。このような修道者は修道者ではなくなってしまうからです。彼らが天国に入ることは期待出来ません。義人しか天国には入れないし、義人と聖人は同義語だからです。」したがって、靈性に達しないからといって休んではなりません。靈性はこの世では達成されないからです。すなわち、「靈性に進歩する望みは朝の目覚めと共にあって、夜休む時もその望みを抱いていて欲しいものです(49)。」

創立者は会員に靈性、すなわち、神への真の寛大な愛に導く道を刻み込みました。彼らとその熱情を、「神へのたぐいえない愛の実践よりも感覚的熱情」に置き換えはしないか恐れていたからでした(50)。彼らが自分自身及び自分

の弱さに信頼しないよう指導し、次のように教えました(51)。「もし、聖テレジアや聖フランシスコ・サビエールがもう一度神に仕えるためにこの地上に降りて来られるとします。そしてもし、会員が自分自身を信用し神の恩恵がなくても何事も出来ると確信するなら、どんなに完全であっても、聖人方は落胆するに違いありません。」確かなことは、彼らが自分自身の力など信用出来ないのに神とマリアの助けによってより強くなろうとしないからでした。そこで、次のように書き送りました(52)。

「わたしは、あなたが狭い考えや気弱な気持ちで神のみ業を損なわないよう成長する時が来ているように思います。成功の真の秘訣はあなた自身を完全に空にし、主の霊にすべてを委ねることです。この二つのことに関しては至聖なる乙女マリアのご保護があなたにとって最高の助けになるに違いありません。」

また、「わたしたちがすべてを主の霊に寛大に委ねるなら、平和と最高の幸せがもたらされるに違いありません(53)。」とか、「神への愛があなたの心のすべてを支配するよう努力しなければなりません。この神聖な愛によって命ぜられるどのような心遣いや仕事もあなたの心を乱すことはありません。この愛自体がますます燃えるようになるからです(54)」と書き送りました。

修道者たちの中には二つのカテゴリーがありました。一つは特別な配慮を要する信徒修道者のカテゴリーと、出来ればより高度の理想を勧めることの出来る修道者のカテゴリー、すなわち、司祭や修道院長たちでした。創立者は司祭を本会の修道者の精神や伝統の基本的な保持者と見なしていたからでした。したがって、司祭の養成に特別な関心を寄せていました。また、マドレーヌの小神学校の生徒の成長を注意深く見守りました。創立当初から最も熱心な司祭の一人を病気で失う恐れがあったので、最も親しい会員の一人クルーゼ士にその悲しみを打ち明けました(55)。

「もし、司祭たちの中で最も若い司祭がわたしたちから取り去られるなら、それが聖なる本会の伝統を担うでしょう。そのためには司祭が必要です。でも、思い違いをしてはなりません。創立当初の会員たちが老齢に達した時、最初のオリーブの幹のような会員たちの側に、新芽すなわち若い会員を成長させているという確信を神がわたしたちに与える時のみ安心出来るのです。」

いずれにしても、創立者は司祭たちに何を期待していたのでしょうか。次のように書き送りました(56)。

「もし、本会で養成された司祭や本会に入会した司祭が真の修道者でないなら、わたしは本会は滅びたものと見なします。司祭が本会に増加することは

望みますが、もし彼らが信徒修道者の模範にならないならむしろ少ない方がましです。」

創立者は司祭たちに神学や聖書、教会史その他宗教の学問の研究を切に要望しました。そして特に望んだことは靈的指導の道に長ずることでした。次のように教えました(57)。「指導者は他の修道者を指導するために、自らの靈性の道、特にその道を尋ね、あるいは、その勧めを得ることが出来る数少ない指導者に会うことが出来る靈性の道を目指さなければなりません。」また、聖ベルナルドが弟子の教皇ユゼーヌ3世聖下に伝えた言葉、「Concha esto, et non canalis」(貯水池にはなっても水路にはならないように)を繰り返し伝えました(58)。貯水池は水を豊かにたたえますが、水路は流れ来る水をすべて流すからいつも空のままです。

院長は本会の管理者であり幹部です。兵士も指揮官と似たり寄ったりと言われます。次のように書き送りました(59)。「わたしがほとんど至るところで一般に観察したところでは、部下の修道者もその徳の実践と規律の遵守に関しては一般に長上たちの水準に達していたということです。生徒と教師との間でも大体同様な比較が出来ました。いずれも最高指導者次第です。どうぞ神の前に身をつつしんでください。」創立者は知的素質同様倫理的素質を持つべきことについてどのように教えられたのでしょうか。次のように書き送りました(60)。「全く分別のない長上は多くのスタッフの助けがあっても物事を予見し判断することが出来ません。しかし、優れた長上は極めてわずかで、不適切なスタッフではあっても事を適切に処理することが出来るものです。ことわざに、上手な騎手は木馬を歩かせることが出来る、と言われます」。

創立者はすべてにおいて、「家庭における権威は、権威によって支えられている人々のためではなく、権威が与えられている人のためのみの支配でなければならない」というマッシュョンの格言による父親のような管理を望みました。そこで次のように要請しました(61)。「話し合いですむ事柄については命令による手段はまれでなければなりません。一般に言えることは、優れた長上は自らの優位を感じさせないものです。アーチの頂上のかなめ石を容易に見分けることが出来るでしょうか。長上という者は共同体のすべての部分を、少しも動揺しないように、しかも、極めておだやかに、そして、効果的な影響力によって、しかし、自らの地位に迫られて何かをなしているように思われぬように支えていなければならない。」

確かに強さは命令には欠くべからざるものです。しかし、師は次のように教えました(62)。「その強さは柔和と忍耐、そして、愛徳によって常に和らげられな

ければなりません。それはもっぱら聖書に靈感を見いだす強さだからです。」

したがって、長上自信真に温情に満ちた指導によって部下の修道者に優れた模範を示し、自由に自ら進んで近づく彼らの告白を聞くことを長上の司祭に許可し要請することを恐れてはなりません。そこで、次のように書き送りました(63)。

「許しの秘蹟は、人々の救霊のために働くよう主がわたしたちに与えた大切な手段の一つです。わたしは、長上は出来るだけ多くの人々の告白を聞いた方がよいとの考えを持っていました。この良心のもっぱらの指導はその他の手段の使用に大変役立ちます。以上わたしが話したのは経験と理性によって学んだことのみです。」

創立者によれば、院長は各会員の靈性に対する特別な配慮に一身をささげなければなりません。メール・ドゥ・トランケレオンには次のように書き送りました(64)。「長上はすべての修道女をイエス・キリストのものにするために、彼女たちのすべてにならなければならないことを考えてください。」また、マリアの娘の会の他の長上には次のように伝えました(65)。「あなたは、あなたのすべての修道女の優れた優しい母になってください。彼女たちの救いや徳への進歩ばかりでなく、その健康にも絶えず配慮してください。」ララン師には次のように伝えました(66)。「長上は部下の修道者を共同で導くばかりでなく、なお別個に、そして、特に多少ともその必要に応じて指導しなければなりません。」他の院長には、「あなたは共同体全員の声を親切に聞いてください。すべてを打ち明けて話そうとする彼らを受け入れることを止めることなく、また、彼らが慰められないであなたの下を引き下がることのないようにしてください」と繰り返し伝えました(67)。

これほど重大な義務を果たすには優れた英知、しかも、超自然的な英知が不可欠でした。次のように指導しました(68)。「長上が超自然的で、全く神的な慎重さによって決定するよりも、自然的で全く人間的な慎重さで判断するならば、それは大変不幸なことです。『義人は信仰によって生きる』というこのすばらしい言葉を決して忘れてはなりません。」また、「あなたは慎重であって欲しいと思います。慎重さは靈生局長の重要な資格だからです。しかし、わたしはあなたの慎重さが信仰の光によって導かれると共に、理性の光も用いるようにして欲しいものです。聖霊の語るところによれば、人間的な考えは臆病で不確かなものです(69)」と伝えました。創立者は自ら見事に実践してきたこと、すなわち、完全な自己抑制、絶えず神の助けを祈り求めることを長上たちに要請しました。次のように書きました(70)。

「あなたが義務の範囲をよりよく果たすことが出来るのは、あなたがよりよく祈り、より深い潜心と信仰によって信心の勤めを果たす時だけです。しかし、あなたはそんな時間がどこにありますかと答えるに違いありません。それを見いだすよう努力しなければなりません。あなたが決然とした態度と慎重さでそれを探すなら、確実にそれを見いだすことが出来るに違いありません。あなたが自制し、信仰の精神を持って行動するなら、あなたはより多くの時間を見いだし得ることを断言します。そこで、あなたは業務をより迅速に処理し、しかも成功りに処理出来るに違いありません。」

以上のことは容易に気づかれるように創立者が自らの経験によって指導された事柄でした。

創立者が修道生活の義務についてそれほど熱心に会員の養成に専念されたのはいうまでもなくその第一の目的が会員各人の聖化だったからでした。もちろん、事業の成功に配慮しなかったわけではありません。次のように教えるのが常だったからです(71)。「わたしたちは聖人たちとならば何事も成し遂げることが出来るに違いありません。平凡で不完全な修道者とではほとんど何もなすことが出来ないでしょう。」

わたしたちは、創立者が獲得された結果によって、与えられた養成のすばらしさを判断出来るに違いありません。したがって、わたしたちは本伝記の続きを再開し、創立者の監督と指導の下に両修道会が実現していった創立当初の活動を考察する時になってきているように思います。



注

- (1) 1833年6月17日、シュヴオー師へ
- (2) 1824年6月16日、カイエ師へ
- (3) メール・ドゥ・トランケレオンの幼少の友人アガツ・ディシュ嬢
- (4) 1821年5月6日、メール・ドゥ・トランケレオンへ
- (5) 1番地は現在は2番地になっています。
- (6) 1821年3月23日、ロジェ士
- (7) ゴーサン・ルクレルク家を話題にしているのが、同名の二人の司祭を出したゴーサン家と混同してはなりません。
- (8) ララン師の「歴史概要」、17ページ

- (9) セルマン士の覚え書き
- (10) 1829年作成の覚え書き、1835年12月9日の手紙
- (11) ロテア師は音楽家で、老齢になるまで歌ったり、詩編を歌わせることが好きでした。手許にピアノやオルガンがある時、これで伴奏しました。
- (12) 当時のラランド通り3番地は今日8番地、10番地でしたが、この番地もデュッフル・デゥベルジェ開通によってなくなりました。
- (13) 1823年6月
- (14) 王立高等中学校はヴィクトル・ユゴー通りの現在の大学の敷地の一部を占めていました。
- (15) セルマン士、シルヴェン士、デゥモンテ士等
- (16) デゥモンテ士
- (17) シルヴェン士の自筆の覚え書き
- (18) エピナはマドレーヌの修練院で、デフェイはセン・ローランで帰天しました。
- (19) 1816年9月30日、メール・ドゥ・トランケレオンへ
- (20) パリの大司教のドゥ・ケレン司教は甥の一人をシャミナード師に依頼しましたが、シャミナード師は彼に召命が見いだされないことから志願院に残しませんでした。
- (21) シャミナード師は養成所の院長であったレオン・メイエ師に次のように伝えました。(日付不明)「神がわたしたちに送って下さったすべての人々を、たとえ、彼らが無一物であっても迎え入れてください。」また、1835年には、「財政面上の不如意の理由だけで立派な志願者を決して送り返してはなりません」と書き送りました。
- (22) ボルドーのマリアの娘の会の修練院のメール・ドゥ・カテラ院長への勧め。ある日セン・ローランの修練院で、シャミナード師は志願者を簡単に受け入れたことで非難されました。師はどのように答えたのでしょうか。「み摂理によって送られた志願者の修練院への受け入れについてわたしが後悔していると思いますか。もし、彼らが恩恵にこたえないとしても、それはわたしの過失でしょうか。わたしは自分の義務を果たしました。気の毒な彼らが修練院を去ってどろぼうの仕事をはじめたとしても、彼らがいまわの時修練院で行った善行を思い出し、また、そこで受けた教育や立派な模範を思い出しても、彼らを後悔させず、彼らの魂の救いの原因にならないとだれが言えるでしょうか。また、こうした立派な行為が彼らにとって全くの損失になったとしても、神のおぼし召しにかなうこと、また、あらゆる手段、特に愛徳によって魂の救いのために働いて神の祝福を頂くことが唯一の目的であるマリア会にとって損失になるでしょうか」。ロジェ士は以上のような言葉を聞いた通りにシャミナード師に想起させました。(1841年7月12日の手紙)
- (23) 1825年10月4日、カイエ師へ
- (24) 1821年12月20日、メール・ドゥ・トランケレオンへ

- (25)1818年12月、メール・ドゥ・トランケレオンへ
- (26) 1817年12月7日、メール・ドゥ・トランケレオンへ
- (27) シルヴェン師の自筆の覚え書き。創立者の好意にしばしば感動させられたこと、志願者を送り返すことは容易に受け入れなかったことを付け加えなければなりません。ボン・ペーレは胸の内を明かして、「ここにはまだ立派な志願者がいる」と語られました。
- (28) 1838年12月3日、メール・セン・ヴェンセンへ
- (29) 1825年11月30日、クルーゼ士へ
- (30) 1822年の大黙想
- (31) 1819年12月2日、マリア会での教話
- (32) ボルドーのマリアの娘の会の修練院院長のメール・ドゥ・カステラへ
- (33) 1836年12月27日、レオン・メイエ師へ
- (34) 1832年6月25日、シュヴォー師へ
- (35) 1834年7月10日、ジュステン・デュモンテ士へ
- (36) 1836年1月10日、レオン・メイエ師へ、また、1839年2月10日、シュヴォー師へ
- (37) 1822年の大黙想
- (38) 同大黙想
- (39) レタの重要な会則
- (40) 1822年の大黙想
- (41) 1837年11月7日、ロテア士へ
- (42) 1835年11月22日、ララン師へ
- (43) 1822年の大黙想
- (44) 1822年8月16日、メール・セン・ヴェンセンへ
- (45) 第23章上(323ページ)
- (46) 1835年11月4日、セン・ローランの修練院で、修練者たちは毎日信仰の行為を増加していたことを創立者に伝えて喜ばせることが出来ました。
- (47) 1822年1月25日、ルイ・ロテア士へ
- (48) 1838年9月21日、クルーゼ士へ、1833年11月20日、シュヴォー師へ

- (49) メール・ドゥ・トランケレオンは創立者のこの言葉をメール・ドシテに伝えました。
- (50) 1837年2月23日、シュヴオー師へ
- (51) マリアの娘の会での教話
- (52) 1837年5月17日、レオン・メイエ師へ
- (53) 1798年12月8日、ドゥ・ラムルス嬢へ
- (54) 1839年1月7日、クルーゼ士へ
- (55) 1825年5月8日、クルーゼ士へ、創立者は危険な状態にあったロテア師について話しました。
- (56) 1833年8月11日、シュヴオー師へ
- (57) 1836年11月11日、シュヴオー師へ
- (58) 1836年11月4日、レオン・メイエ師へ
- (59) 1833年1月23日、ララン師へ
- (60) 1830年12月3日、ルイ・ロテア師へ
- (61) 1824年6月29日、カイエ師へ
- (62) 1833年1月19日、シュヴオー師へ、また、1824年8月22日、メール・ドゥ・トランケレオンへ
- (63) 1834年2月25日、シュヴオー師へ
- (64) 1819年2月6日
- (65) 1824年8月22日、メール・ドゥ・トランケレオンへ
- (66) 1833年1月23日
- (67) 1823年9月9日、クルーゼ士へ
- (68) 1816年12月30日、1820年2月18日、メール・ドゥ・トランケレオンへ
- (69) 1824年8月26日、クルーゼ士へ
- (70) 1828年1月28日、クルーゼ士へ
- (71) 1818年6月10日、メール・ドゥ・トランケレオンへ

第 27 章 マリア会の主要事業：学校（1818—1823）

マリアの娘の会の最初の事業 ❖ マリア会の最初の事業 ❖ 教育専念の理由 ❖ ムニュー通りの中学校 ❖ 教育原理 ❖ セント・マリー寄宿学校の成功と移転 ❖ マリアの娘の会のトネンとコンドンの寄宿学校 ❖ アジャンのマリア会小学校 ❖ 意外な成功 ❖ ヴィルニュヴの高等中学校と公立学校。

ララン師はマリア会の創立を生き生きと描いた後次のように続けました(1)。「世の人々はこれらの青年が何をしようとしているのか不審に思っていました。だれにも彼らの意図していることが分らなかったからでした。彼ら自身にさえそのことは具体的に分かっていませんでした。彼らはみ摂理のおぼし召しのままに」創立者が命ずる所にはどこへでも飛んでゆく覚悟が出来ていました。ただ、創立者も彼ら同様そのことはよく分かっていませんでした。創立者自身確実に分かっていたことは、本会の唯一の目的はキリスト者の信仰の普及ということでした。活動の手段は状況に応じてみ摂理によって指示される手段でした。創立者は「レタ」の会則に次の項目を規定しました。「本会の目的と両立出来るいかなる活動も無関係なものとは見なしてはならない。」したがって、創立者は神のみ旨の刻印が押されているなら、提供されるいかなる活動も引き受ける用意が出来ていました。

既に採択された活動の一つはコングレガシオンの活動でした。両修道会は、言わば、コングレガシオンの完成であり完全な開花だったからでした。したがって、創立者はマリアの娘の会に最初の計画を指示しました。早速ジャクビー司教の要請に応じて修道女たちに貧しい人々の子女のための無償学級の開始を許可したからでした。更に、この無償学級に続いて、共同洋裁室、貧者の集会、婦人のための黙想会等が追加されました。そして、当初から立派な家庭の子女に教えることさえ許可し、次のように書き送りました(2)。「あなたは、コングレガシオンを通じて少女たちに接することが出来ないなら、通学生としてフランス語やイタリー語の文法を教えることによって、彼女たちの教育を完成出来ることを提案して、彼女たちに接するよう試みてください。あなたは、この方が信心によってよりも彼女たちを引きつけることが出来るに違いありません。」いずれにしても、本会の創立当初から、修道会の目的を達成することが出来る手段に各種レベルの教育が含まれていました。このことは驚くには当たりません。それは、「レタ」の会員が列挙した優れた活動には既に、「貧者及び富者の子弟の教育が計画されていたからでした。

創立者は、このように列挙された活動計画の終わりに、「寄宿生に注意」と簡潔に記入しました。この懸念が提起されたのは、恐らく、会員に提起された活動の中に寄宿学校の設立が許可されていたためではないでしょうか。そして、創立者がこのことをちゅうちょしたのはその他の宣教活動、特に、コングレガシオンの活動を損なう恐れのある寄宿学校の多忙な活動に会員が没頭することが不安に思われたからではないでしょうか。したがって、マリアの娘の会の創立の目的に関してドゥ・トランケレオン嬢に示したアウトラインには寄宿学校の運営を明確に除外し、1820年までその開校を許可しませんでした(3)。師が断固として反対した事柄は本会の目的を特殊化し、あるいは、変更する活動を引き受けることでした。したがって、修道女たちが孤児や悔悟少女たちの奉仕に従事することを承諾しませんでした(4)。この種の活動が提案された時、創立者は、メール・ドゥ・トランケレオンへの手紙で次のように強調しました(5)。「本会で大切なことは一人あるいは何人かの公の罪の女性を改心させることではなく、ほとんどすべての人が迷っている世の人を引き寄せ改心させることです。」

小さな本会に対する創立者の態度は不変でした。まず、他の目的よりコングレガシオンの活動に会員の努力を集中することを要請し、会員が働くべく召されている他の領域を確立する配慮を時とその状況、むしろ、神のみ旨に委ねました。セギユル通りの袋小路での数年の試行錯誤の間、各会員はこれまでの活動の奉仕に従事していましたが、コングレガシオンの活動をより積極的に援助し、評議員会の委員を継続し(6)、集会の成功に貢献し、宣教活動、特に、小さな本会の会員コリノー士に委任された煙突掃除の少年たちの指導に参加していました。

神への献身の意図が祈りの中で成熟し、決定的に明らかになった時、一度、俗事の活動から解放された暁には、その時間と能力によって奉仕出来る活動を創立者に要請しました。そして、様々な意見が分かち合われました。大半の会員は、フレッシュヌー司教が前年カテドラルで行った教育に関する講話に強く感動し、このことが当時何かにつけて緊急事項であったため、司教の聴衆への熱心な呼びかけに耳を傾けていました。幾つかの宣教修道会が当代の人々を福音化するために各地に創立されていました(7)。しかし、彼らの実り豊かな活動も信仰のすばらしい感化には最も柔軟で素直な新世代の人々への献身の効果には比較出来ませんでした。ずっと後に創立者に次のように書き送ってきたロッテーガロンヌ県のある主任司祭の考えもフレッシュヌー司教の見解にほとんど一致するものでした(8)。「幼年時代から与えられた立派な教育によってしか信徒の群を救う以外の他の希望はありません。衰え行く世代は悪と無知、そして、不信仰の忌まわしい人々で、自分の墓に横たわる本当のしか

ばねです。したがって、神の哀れみの奇跡以外には何も期待出来ません。」

セギュールの袋小路の小さな共同体も同じく教育について議論していました。彼らは会員のオギュストとララン師の二人が子弟の教育に確かな経験があることを知っていたので、ボルドーに学校を設立する計画が彼らの考えに自然に芽生えていました。ダヴィドも全幅の信頼をもってこの考えを支持し、オギュストを校長にする寄宿中学校の設立を提案しました。小神学校を指導し、通学生のみを受け入れていたイエズス会以外には、ボルドーには信徒のための学校はほとんどなく、その唯一の学校であったエステベネ校は立派な教育の確かな保証を与えていました。中産階級の子弟のキリスト教教育を容易にするため、修道者によって指導されるこの種の教育施設は無駄にはならないはずだったのです。

問題は大学と競争することではありませんでした。そのようなことは不可能だったからです。教育の分野ではフランスは常に横暴な独占権によって苦しめられ、王政復興も帝政フランスが残した支配の道具をあえて放棄しようとしなかったからでした。「私立学校」や「寄宿学校」では納付金が高額で、充実した教育が出来ませんでした。ただ、教育課程に関しては大学の不足をある程度補充出来るに違いありませんでした。この点に関してその重い責任を果たすための大学の努力も実りのないものでした。王政復興下にあっても大学は帝政下時代より恵まれていなかったからでした。しかも、彼らは、例えば、ドラムを鐘に、三角帽子を山高帽子に、帝国立高等中学校を王立高等中学校に変更するという形式上のある変更を導入することで満足し、建学の精神を見直していなかったからでした。また、教職員を向上させることを目的に実施されたひそかな試みも全然成功しませんでした。それから数年後、フレッシュヌー司教が大学の学長の資格で招へいされた時、ラ・ムネーは多少緊張して、しかし、一抹の真実をうがって次のように司教に伝えました(9)。「由緒ある名士の保護の下に子供たちは実践的な無神論とキリスト教への憎悪の中で教育されて来ました。神が空しく召しだしたこれらの若者に対して大学は厳しい教育を求められましたが、それは無駄でした。」

シャミナード師はこれらのことを皆承知していたので、キリスト教学校がボルドーで最も有益な事業の一つであると考え、更に、大学との立派な競争は結果として王立高等中学校自体に教育の改善をもたらすことが出来るに違いないと考えました。しかし、学校設立の計画を早急の実現することを妨げるただ一つの考慮すべき事項がありました。それは師自身提示した本会の一般的目的を妨げる恐れのある寄宿学校の設立に関する不安でした。したがって、み摂理がその意向をより明確に示して下さるよう期待していました。

創立者はシャンギール氏とバルディネ氏の二人のコングレガニストからの資金提供の申し入れにみ摂理の呼びかけを感得しました。彼らは、「本会の最初の施設設立の費用を援助するための莫大な資金(10)」を自由に提供したからでした。1818年8月1日、師はシャンギール氏あての次の書簡を保証にして、早速、計画の実施を考えました。

「オギュスト・ブルニョン士はロニャックの邸宅を検討して来ました。彼の報告によれば、この邸宅はわたしたちが活動することを考えている事業にふさわしいように思いました。もしかしてみ摂理がマリア会に予定している建物かも知れませんのであなた自身で確かめて下さい。急いでマリアの子供たちを住ませるようにしていただきたいと思います。彼らはきっと天国であなたの栄冠となる子供たちですから。」

本会が所望したロニャックの邸宅は非売のものでした。ところが、ある買い手と出会った時、その買い手は他ならぬエステブネ師でしたが、耳にしたミライ通りのデュフル將軍の邸宅のための折衝に入りました。しかし、マリア会は親しい友人に迷惑をかけないように引き下がりました。エステブネ師はこうした配慮のお返しとしてムニユ通りの師の住居に隣接していてすぐにでも入居出来る空き家のあることを本会に

伝えて来ました。そして、師はみずから指摘したこの家屋と現在生徒たちが休憩時間に使用している運動場を使用してもよいことを約束しました。それはデュフル將軍の邸宅に学校を移転した暁にはこれらの場所は不用になるからでした。

交渉を成功させる使命が聖ヨゼフに託されました。会員は聖ヨゼフの光栄のために水曜日の大齋に加えて金曜日にも大齋をなすことにしました。エステブネ師との購入契約が1818年11月14日に調印されました。数日後会員はセギユールの袋小路からムニユ通りに移転しました(11)。ダヴィド士も早速彼らと合流しました。教員研修修了書をエステブネ師から受領したオギュスト士は、早速、ドゥセーズ大学区長(12)に、大学の規定によって予想される条件に基づいて中学校を開校する許可を申請しました。大学区長の認可決定には6ヶ月を要しました。この間、会員の養成は続けられ、新加入の会員がこの小さなグループを増加し、宣教活動に専念する熱望は遭遇する障害にもかかわらず燃え上がっていきました。そこで、創立者は次のように書き送りました(13)。「今ここで必要なことは絶え間ない大きな忍耐です。おかげさまでわたしたちはいつも神から保護されています。すべては労苦や反対、障害によって浄化され、強固にされるものです。続けてお祈りください。」

1819年5月11日に学校設立認可証を受領致しました。年度末に当たっていたとはいえ会員は次年度の新学期準備のため生徒を何名でも受け入れることを決めました。6月15日、グードゥレン師は、「長髪の2位の天使像の間(14)」、で聖霊のミサをささげ、15名の生徒と共に学年度を終了しました。

残念なことに、不足の事態が生じたので当初から事業を中止せざるを得ませんでした。エステブネ師がデュフル將軍の邸宅の購入を中止したからでした。そこでエステブネ師は寄宿学校として新しい家屋を取得するか、避けがたい競争者の不都合を口にしないまでもシャミナード師の新設の寄宿学校の運動場以外に土地がなかったのも、友人のシャミナード師の寄宿学校の側で生活するか、二者択一にせまられました。このような状態では両者にとって問題の解決が不可能になることが分かったので、二つの寄宿学校の統合が満場一致で決まりました。エステブネ師は極めてためらいがちでしたが、学校教育から手を引くか、友人のコングレガニストたちの側に残るか、さもなければ、他の場所に学校を開校するか、様々な代案に迷っていました。したがって、寄宿学校統合の条件を決定することが問題になった時困惑したのでした。シャミナード師はこの忠実な弟子のエステブネ師にその意向をより自由に表明させるため交渉の代理をドゥ・ラムルス嬢に委任しました。こうして、エステブネ師はドゥ・ラムルス嬢との間で、マリア会が1000フランの年金を提供することで話がまとまりました。しかし、エステブネ師は1500フランの年金を要求してきたので、契約書へのサインは延期されました。ただ、この要求額はマリア会にとって法外でしたが、エステブネ師はまだ比較的若く、他の新しい地域(15)に学校を設立しないということも約束出来なかったのも、シャミナード師は司教総代理のバツレス師の要請をいれて、1819年10月29日にオギュスト士によって契約に調印させました(16)。しかし、この契約はやがて本会に重大な財政上の困難をもたらす結果になるに違いありませんでした。いずれにしてもこのことは、最も古い、しかも、ポルドー市内ではより評判の高い私立学校を本会が取得する特典に恵まれることになったわけでした。エステブネ師はしばらく自宅に残りましたが、寄宿学校はオギュスト・ブルニョン・ペッリエールという校名に変更され、エステブネ師と本会会員のスタッフによって運営されることになりました。

シャミナード師はミュシダン時代のあらゆる経験を生かして会員を援助しました。師の忠告によって上級生徒は原則的に極力受け入れないことになりました。最低年の学級から同じ子供たちを少しずつ教育して家庭の精神を植え付けることが得策と考えていたからでした(17)。同時にまた、教師の増加は教育に役立つより教育を妨げるということから、厳密に必要な外に教師や生徒監督を増加することも不都合であると考えたからでした。そこで、次のように書き送りました(18)。「使う人が少ないほど事はうまく運ぶということがわたしの若いころか

らの原則でした。わたしはこのことを大革命まで体験していました。」

師は同一事業に従事するすべての教職員間に及ぶべき親密な一致を強調し、会員全体に事業全体の成功に関心を抱かせました。したがって、学校の全体的な進展、同時に、教職員の職務の遂行について報告を求めました。また、生徒を厳しく指導する場合でも温厚な配慮と極度の用心を要請しました(19)。次のように書き送りました(20)。「どのようなことがあっても学校に不平を忍び込ませてはなりません。それは取り除くのに大変厄介な『伝染病』だからです。」師が特に望んだのは子供たちの心がキリスト教の基本的な徳で培われ、宗教教育が丁寧に与えられることでした。次のように書き送りました(21)。「厳格であっても親しみに満ちた規律があり、特に、少年たちがほとんど必然的に有徳な信者となり、その徳と信仰が堅固な宗教教育の土台となって欲しいと思います。」こうして、子供たちの中から宣教師が生まれることになるのです。また、「あなたは熱意のある生徒を見いだすことが出来るに違いありません。その生徒を他の生徒に対する小さな宣教師として役立てることが出来ると思います。わたしはかつてこのようにして大成功を収めた人を目にしたことがありました」と伝えました(22)。こうした指導に助けられ、その若さと才能、そして、固有の経験に支えられたオギュストとララン師の天性の二人の教育者は、パリのリオタル師(23)のすばらしいキリスト教学校で敬服した建学の精神とキリスト教的生活習慣を寄宿学校に導入するよう努力しました。もちろん、彼ら自身もこのことに尽力しました。彼らは古典の教科の他にボルドーのような都市には好効果をもたらす商業の教科を導入しました。こうして、ララン師自ら描いた次のようなプロフィールを学校に提示しました(24)。

「この学校は教育に新しい道を開くもののように思われなければならない。もし、他の学校と違った、そして、より優れたことをなすよう努力しないなら、新しい学校を作るには及ばない。わたしたちは家庭の精神がどのように呼ばれるにしてもこれを誇る事が出来る。もちろん、げん学趣味や営利主義は除外しなければならない。この家庭の精神は福音の精神と呼ばれなければならないからである。また、この精神は当然誠実で、啓蒙された宗教的献身の実践から生ずるからである。他の学校で普及した幾つかの改善策は大胆で、時宜を得た自発性によって再現されたものに違いない。中でも、それはアカデミー賞や優等賞の授与であった。

アカデミー賞は品行方正で、気だてのよさ、更に、才能を表彰し評価するものだった。このアカデミー賞の授与は、教員の古典研究の単調ではあっても落ち着いた雰囲気と、ある宗教学校の気晴らしや無気力による情けない模倣による現代教育の大衆演劇的な華やかさと軽薄さ間の欠くべからざる仲介役を

提供するものであった。優等賞名簿への登録に関しては、生徒の学習意欲を有利にする競争原理を導入した。ほとんど一般的には勉学自体より努力による成功が表彰されていたからである。世間一般におけるよう本校においても、不測の事態や人間性の気まぐれから世の悪の敏感な精神に結びつくなら、こうした悪意や悪徳が賞賛を期待するようになるからである。教職員は、マリアの保護の下に育成された子供たちを、だれでも欲しがらる賞状や優等賞、また、最も熱望される賞状を立派な品行に結びつけることによって早熟のつまづきから擁護しなければならない。見識者は会員の教育の特徴や優秀性に気づき、保護者もわたしたちの教育上の経験に確信を抱くに違いない。したがって、本校は聖職者の活動に対する極めて厳しく、今日流布されている偏見にもかかわらず、やがて信頼と好評を博するに違いない。」

こうして、この寄宿学校は100名から120名の生徒を数えるようになりました。修辞学級や上級クラスも無く、大学のあらゆる拘束に従属し、また、後期中等教育において、王立高等中学校の通学生のように生徒を指導することを余儀なくさせたこの種の宗教学校としてこの数字はすばらしいものでした。

ダヴィオ大司教はこの寄宿学校に最高の共感を示し、毎年、そして、生涯にわたって賞状授与式を司会されたほどでした。コングレガシオンの集会と共に開催された学校祭は真の文化祭でした。シャミナード師も市の名士たちと共に出席し、当時の新聞にも報道されました(25)。こうした評判に寄与したのは生徒に対する教師の良心的な監督や生徒の立派な態度でした。したがって、1824年には学校は手狭になり、ムニュ通りでは不便を来すようになりました。そこで、創立者はミレル通りのすばらしい建物、ラザック邸を早速購入しました。この建物は、大革命の間、カルメル会修道女の聖ヨゼフ大修道院共同体(26)として祝別され、また、ガッシオ師が常時祈とう所として管理していた建物でした。

1824年から、寄宿学校ではこのラザック邸の中庭で卒業式が行われましたが、次年の御復活節までそこに完全に落ち着くことは出来ませんでした。寄宿学校が聖マリアの校名を名乗ったのもこの同じ日付でした。この校名は決して変更されず、マリア会の学校の特徴的な校名になりました。どこでも他の校名で呼ばれる特別な理由はなかったからでした。このように隆盛に赴いた寄宿学校は修辞や哲学のクラスを設置する権利を大学から取得するよう試みましたが無駄でした。ボルドーの大学区長は王立高等中学校に不利益をもたらすことを恐れて常にこの件に反対していたからでした。

マリア会はマリアの娘の会にならってようやく最初の寄宿学校を開校したわ

けでした。1820年末、創立者はCongregationalと無償学級の他に宣教活動に充当する新規の学校をトネンに設立することを許可しました。また、この時期に、マリアの娘の会をボルドーに呼ぶ考えさえ持っていました。それは、すばらしい評価を博していたグラマニャック嬢の寄宿学校の後を継ぐためでした。しかし、イエズス会がみ心の修道女会をボルドーに招致するための運動を開始していることを聞いたのでその計画を中止し、ダヴィド士に次のように書き送りました。「このような状況下でなすべきことが何であるかを検討するため熟考したわたしは、競争する代わりに寄宿生も教師も、そして、彼らに属するすべての物をイエズス会とみ心の女子修道会に譲渡し、マリアの娘の会の修練院を移すための建物だけを保持することがよいと考えました。」この決定はやがて実行に移されました。

ボルドーに計画されていた施設は、マリアの娘の会の創立者メール・ドゥ・トランケレオンの従姉妹シャルロット・ドゥ・ラシャペル嬢のマリアの娘の会入会によってコンドンに設立されました。従姉妹のメール・ドゥ・トランケレオンから既にスール・ドゥ・レンカルナシオンと呼ばれていた彼女は、つながれていた様々なきずなからようやく解放されることが出来たのでした。シャミナード師は彼女に次のように書き送りました(27)。「自分の鎖を断ち切ることを望むどれい取るような勇敢な、決然とした態度をとってください。あなたはもう十分苦しみました。あなたのご両親は条件付きであなたの修道院入りを許可しましたが、あなたはずっと以前からそれらの条件は果たしました。」彼女の両親は彼女が生家を去った時ようやくあきらめました。両親は彼女を自分たちの側に留め置きたい一心から、「ピエタ」と呼ばれた苦しみ of 聖母の巡礼所の古い修道院をコンドンに購入していました。こうして、シャミナード師はこの建物に寄宿学校を設立することを承諾しました。この寄宿学校は隆盛を極めるようになりましたが、実質的にはメール・ドゥ・レンカルナシオンにこれを委任しました(28)。

マリアの娘の会では、子女の教育はまず無償学級が導入され、これに寄宿学校が続きました。マリア会では反対でした。寄宿学校から始められ、庶民子弟の学校が続きました。

当初だれもこの種の事業を考えていませんでした(29)。1820年の夏、マリアの娘の会の年の大黙想会のためにアジャンに赴いたシャミナード師は、この滞在を利用して、1816年の当初から廃止されていた熟年男子のCongregationalをダヴィド士の協力で当市に復興することにしました。この計画は完全に成功しました。最も熱心なCongregationalの県会議員のラコスト氏と寄宿学校の教師のダルディ氏は、こうしたすばらしい成功を収めたことに満足せず、マリア会をアジャンに導入するようシャミナード師に強く要請しました。マリア会はコン

グレガシオンを指導して信仰の熱意を維持し、また、宗教教育や道徳教育がほとんど放棄されていた庶民の子弟の教育に専念出来るに違いなかったからでした。ジャクピー司教は同市にキリスト教教育修士会の導入に努力しましたが成功しませんでした。彼らを住まわせるためにロザリオ会の旧修道院の取得権利さえ得ましたが、これも無駄でした。以前にコングレガシオンを解散させていた自由党派がキリスト教教育修士会の進出を妨害したからでした。彼らの修道服が進出反対の口実でした。ラコスト氏とダルディ氏はマリア会の進出に賛成でした。外見的に何ら禁欲的な服装をしていない、「ボルドー紳士」のマリア会員はキリスト教教育修士会が出来なかったことが出来るに違いないと考えたからでした。ジャクピー司教や教区の聖職者たちもこの提案に十分賛成していました。この件を検討した市長も異議ないことを示しました。この寛大な提案に熱心なダヴィド士はシャミナード師にこの件を決断させることを引き受けました。しかし、ことは困難でした。

小なる本会は新生の全く弱小な会で、まだ正式な修練院さえ設置していなかったからでした。本会が揺籃の地から他の地域に転出することは賢明だったのででしょうか。提案された事業はいかにもすばらしいものでしたが、反対意見が提示されました。また、シャミナード師も予想もしなかったことでした。特にその事業が司祭から離れて生活することになる信徒修道者の部門のみを含む時、創立の目的を特定化する恐れがあったからではないでしょうか。その上、特にこの目的に献身する他の修道会、中でも、シャミナード師がボルドーへの復帰を準備していたキリスト教教育修士会があったからでした。他方、シャミナード師は、アジャン市は既にマリアの娘の会の居住地であり、隆盛に赴いたコングレガシオンの本拠地であったこと、そして更に、厳密にはマリア会に属していませんでしたが、極めて親密な関係で結ばれていたムーラン師やローモン師のような司祭さえいたことを考えていたからでした。こうした条件の下で、会員がシャミナード師に求めている施設の創立は何ら不都合もなく、立派な善が提示されていました。シャミナード師は熟考し、熱心に祈った後、神のみ旨が自らの承諾を求めていることを確信しました。そこで、この件を了承し、10月の新学期までに施設の設立を会員に約束し、ボルドーに帰るとすぐムニュ通りの共同体にこのニュースを伝えました。

会員は驚きと喜びの入り交じったような気持ちでこの知らせを受け取りました。お驚きというのは、彼らは会員が余りにも少数であることが分かっていたからでした—15名以上はいなかったのです—また、この種の事業はだれも予想しておらず、直接準備もしていなかったからでした。そして、喜びというのは、巢から飛び立った最初の蜜蜂の群のように、神の最大の光栄と無原罪の乙女マリアの誉れのためその活力を新しい地域にもたらすことが出来ると思ったからでした。

院長としてロジェ士、メメン士とその兄のアルムノー士の3名の信徒修道者がアジャンの無償学校設立のために任命されました。やがて、ゴーズン士が彼らに合流しました。彼らは1820年11月半ばごろ、イエス・キリストの真の貧しい弟子のように徒歩で出発しました。アジャン到着後、ロジェ士が早速心情を込めてボン・ペールに書き送った最初の手紙に耳を傾けてください(30)。

「先週の火曜日、わたしたちは聖母マリアが親しく迎えて下さった巡礼所(ヴェルドレの聖母聖堂)で聖母に身をささげ、聖体を拝領する幸福を得ました。み摂理の恵み深いご配慮によって、その日は聖母の御清めの祝日にあたっていました。わたしたちは御子にわたしたちをささげて下さるよう聖母に祈りました。それは、御子のご自分の光栄のためにわたしたちの心を熱誠で燃え立たせて下さるため、また、わたしたちを特別なお計らいによって自由に使って下さるためでした。わたしたちの旅行は何の障害もなく無事でした。夕方近くなって多少足の疲れを感じた程度でしたが、足を休ませて疲れをいやすことにしました。翌日、足の疲れも順調に回復しましたが、『小さな荷物も遠くに行けば負担になる』という格言の正しいことに気づきました。わたしたちは小さな荷物のように小さなグループでしたが、多くの障害から守られたという確信を得ました。神のために何事かを耐えることは何とすばらしいことでしょう。木曜日の晩6時ごろ、罪人のより所なる聖母修道会の祈とう所に到着しました。わたしたちを迎えるための準備が前晩からすっかり整えられていました。わたしたちはすばらしい歓待を受けました。ダルディ氏はわたしたちに最高の友情を示しました。わたしたちに何も不自由をさせないようにとの彼のあらゆる心遣いや思いやりについて、わたしはどうしても語らなければならないと思いました。ダルディ夫人もわたしたちを母親のように歓待するのが当然のように思っていたようです。彼女はわたしたちをご自分の子供のように取り扱ったからです。

わたしたちは見聞したあらゆる事柄によって目覚めさせられました。旅行中神に祈るために立ち寄った教会でも感銘を受けました。トンネンやアジャンではマリアの娘の会の修道女たちのつつましきによって、また、若い司祭たちの熱誠や信徒の信心に心を打たれました。コングレガニストたちは毎日曜日罪人のより所なる聖母修道会の祈とう所に集まっています。集会はボルドーのコングレガシオンと同じように行われています。ラコスト氏が集会を司会し、わたしたちは彼の側の席に案内されました。」

ロジェ士は司教館と二つの神学校で受けた歓待を感謝した後次の言葉で締めくくりました。

「わたしたちは遠く離れている兄弟たちと心と精神で結ばれている暖かいき

ずなをこれほど強く感じたことはありません。毎日、ささやかながら彼らのために神に祈っています。同様に、彼らもわたしたちのために祈ってくださるようお願いしたいと思います。マリアの子供たちの上に神のお恵みを頂くにはこれ以外の方法はないと思うからです。」

人々は新来の修道者に対して歓待の言葉を惜しみませんでした。日和見主義の態度に止まり、だれも結果が予見出来ない事業とのかかわり合いを望みませんでした。したがって、「住居及び設備や維持の何らかの費用の負担を援助するために協力する人はいませんでした。そこで、ダルディ氏は修道者たちを臨時に宿泊させました(31)。」

修道者たちは世の評判を気にすることなく、マリアの娘の会が修道女が立ち去ったばかりの罪人のより所なる聖母修道会の修道院跡にひっそりと居を構え、実直に活動を開始しました。完全に無償となる学校の開校を簡単な趣意書で発表しました。修道者たちはだれの名前も挙げませんでした。新設学校の建学の精神はマリアの娘の会の無償学級の精神を継続するものであることのみを発表しました。こうして寄宿学校が1820年12月中に開校されました。修道者たちはボルドーで活用していた競争原理の手段を採用し、また、当時、自由党派が学級委員システムを勧めていたので、一斉授業にこのシステムを併用しました。それは、けんそうさを余り引き起こさないためでした。

結果は予想以上でした。このことは無理にでも賞賛されなければならない、「市会議員や行政官、そして、農業団体や芸能界のお歴々の敵対心」を完全に封じました(32)。ジュルダンとかいう最も強力な反対者の一人は単なる授業参観の結果改心しました。彼は、「すばらしい」という言葉しか口にしませんでした(33)。

アジャンの人々の満足と驚きについて、ロジェ院長から創立者への報告に耳を傾けてください。院長は4箇月後次のように報告しました(34)。

「人々は、教会でも往来でも黙々とつつましく一列に並んで行進する生徒たちに感動するほど目覚めさせられています。この同じ子供たちは学校の開校前往来で殴り合いをし、通行人を、司祭でさえものしっていたからでした。ところが、今日、彼らは司祭に出会うとむぞうさに帽子をとってあいさつします。帽子をかぶっていない場合は、そうしたしぐさでなく、挙手をしてあいさつします。また、わたしたちがミサに行ったり、帰ったりする時、人々はわたしたちが並んで歩くのを見るためか往来に立ち止まっています。時々、わたしたちに近づいて、『生徒たちをこのように指導するのにどのようにしていますか。苦悩と困難が強いられるに違いありません。あなた方はどれだけわたしたちの街の役にたってい

ることでしょう。どれほど感謝していいか分かりません』と言う人さえいました。」

1箇月後ロジェ士は次のように報告を終わりました(35)。

「神の祝福が学校の上にどれほど豊かに注がれているかを見るのは素晴らしいことです。生徒たちは、読書、書き方、計算に素晴らしい進歩を遂げています。入学時には文字も書くことが出来なかった生徒が今では『キリストの模範』さえ読み始めています。最もすばらしく感動させられることは、低学年の生徒から上級学年の生徒に至るまで反抗的で悪に走っていた子供たちが、羊のように従順で率直になったこと、そして、神と聖母に関するわたしたちの話を喜んで聞くようになったということです。」

ロジェ士は更に驚くべき事実をあかししました。

「当初、わたしたちは、無償学校という学校名やわたしたちが所持を求めた貧困証明書のために、富裕な家庭出身の子弟は遠ざかり、下層社会の貧しい家庭の子供たちしか入学しないに違いないと考えていました。ところが、決してそのようにはなりません。大多数の子供たちは富裕な商人の家庭の出で、中には素晴らしい家庭の子供もいます。これらの子供たちはわたしたちの学校に入ることを熱望し、保護者たちもまた優れた教科と道徳上の原理を教えていただきたいことを希望して、世間体を捨てて貧困証明書を求めて主任司祭や助任司祭の下に嘆願に行くほどだったからです。何人かの司祭がわたしに話したところによると、彼らは身体上と精神上的の2種類の貧困を自覚しており、実のところ、身体上の貧困者より精神上的の貧困者の証明書を交付しなければならないのではないかと考えていたということでした。市内の人々は皆、立派に指導されているばかりでなくお繁栄し発展している学校を見て驚嘆しています。彼らは、わたしたち4人の貧しい修道者がどのようにしてこれほど多くの子供たちを指導教育することが出来るのか理解出来ないようです。それは、神の計らいが分からず、働いているのはイエスとマリアであることを知らないからだと思います。」

いずれにしても、成功の秘訣は会員の教師たちの真の宣教精神にありました。彼らは自分たちの疲れなど何ものでもないと考え、苦しい生活にもかかわらず、会則によって規定された苦行に新たな苦行を加え、更に、毎月の初金曜日には聖体の前で徹夜する許可を創立者に願うほどだったからでした(36)。

生徒数は300名を越えていました。ジャクピー司教はこの上なく満足し、自ら卒業式を司会しました。強固な自由主義の市議会も少なくとも出し惜しみすることを止め、多少とも好意をもってわずかながらも補助金の支給を決議しました。

修道者の教師に対してより好意的であった県会議は本校の活動を全面的に賞賛し、3000フランの補助金を承認しました。そして、県下のすべての郡に本校と同様な施設の設立を促進する用意のあることを声明しました。ミュニエ・ドゥ・ラ・コンヴェルズリ知事は自ら本校を視察し、「ここで行われている善は全く期待以上のものである」と断言しました。また、自由論調のロッテ・ガロンヌ紙は長い間無償学校の存在に気づきませんでした。ある時そのことに気づき、長期の沈黙を撤回するかのように、かなりの賞賛の言葉で3回にわたって長文の記事を公表しました(37)。この新聞記事の編集者は自らすべてを観察してすっかり驚きました。彼は一日の生徒の授業を見学し、教育法、「競争グループや幼きイエスのグループ」の運営、規律や設備等について理解を示しました。これほど詳細に観察したこの視察者は最後にこの模範的な学校の先生方はどんな方だろうかとのように自問自答したということです。

「世のことにかかわらない4人の修道者は神に全的奉獻をし、生徒たちのために献身している。生徒の教室、修道院の個室のみが修道者たちが通っている場所である。一彼らは修道者に違いないが、多分熱狂的な修道者ではないだろうか一確かに、彼らは修道会に属しているようだが、彼らの落ち着いた顔つき、特徴となっている朗らかさに比べられるものは何もない。その服装はどうかといえば、服の色の画一性を除けば、生地の高品質や服のスタイルは教養ある人の服装に近く、ほとんど変わらない。一彼らの生計手段はどうであろう一生きるためにだけ食べる人はいないはずだ。教育に関する支出がすべてで、個人的支出はほとんどない。さすがにすばらしい。彼らはマリア会の一員といわれる。その会員が今日刷新を試みているのは復興されたキリスト教会にとって現代の重要な要請に対する極めて重要で適切な課題である。したがって、彼らは、まだ悪に汚染されていない世代の若者から始めて、フランスのモラルを回復するすばらしい活動に協力するため、私財も才能も、そして、意欲もすべて共同体に提供しているのである。」

これが一般の反響のようで、シャミナード師の下には類似の学校の設立の要請が殺到するほどでした。もし、多くの会員がいたら、そうでなくても、ダヴィド士の熱意に耳を傾けていたなら、マルマンドやネラックに、トネンやレクツールに直ちにこの種の学校の設立を了承したに違いありません。しかし、設立後ようやく1年しか経たない修練院しかない修道会でこのような冒険を試みることは狂気の沙汰だったのです。当時、創立者の関心はフランスの北部地方に向けられており、神はそこに本会に対する大きな計画を用意されていたように思われたからでした。

いずれにしても、創立者はマルマンド市とトネン市と直接交渉に入りました。

学校管理に任命される信徒修道者とコングレガシオンを指導する司祭を、設立する学校のそれぞれに配置する考えを持っていたからでした(38)。こうして、既に、ボルドーとアジャンに実施している事業を同時に運営しようとしていたのです。創立者は施設の創立を望んでいただけにヴィルニュヴ・シュル・ロット県の当局を待たせるわけにはいきませんでした。この小さな都市はロッテ・ガロンヌ県の県議会のヴァッサル・ドゥ・モンヴィエル氏を市長代理としてシャミナード師の下に派遣していたからでした。しかし、師は余りにも緊急な要請への譲歩を気兼ねしていませんでした。公立高等中学校と小学校を同時に提供するとの申し出でしたが、巡霊所ヴェルドレのノートルダム聖堂の管理の件についてボルドーの大司教と折衝中だったので、この要請の受諾をちゅうちょしました。師はこの巡礼所の管理責任を熱望していたからでした。しかし、ダヴィオ大司教当局はこの計画の申し出には好意的でなかった(39)、師はヴィルニュヴの高等中学校のために校長の派遣を約束し、1822年の新学期のために実際に校長を任命しました。ようやく2年前に叙階されたコリノー師がこの高等中学校を急速に発展させることになりました。しかし、学校のみじめな経営状況はシャミナード師を深く心配させました(40)。それというのも、学校の当事者は7年前から年間1万1000フランの支出を無駄にしていたからでした(41)。コリノー師はコングレガシオンを指導し、自ら説教師としても高い評価を得ていました。アジャン教区のある司祭は次のように語りました(42)。「コリノー師は、やさしく、おだやかで、軽快なアドリーヴの才能の持ち主です。アジャンの婦人たちはヴィルヌーヴの高等中学校の校長について、校長神父は孝行息子が最愛の母について話すように神について話されるので、わたしたちはこの孝愛と感動に満ちたすばらしい話しが好きでしたと語っていました。」

翌年、信徒修道者のグループは公立小学校の取得のためヴィルニュヴにいたコリノー師に合流しました。ロジェ士はその指導に任命されたので、アジャンの学校はメメン士に委ねました。やがて、ロジェ士は300名もの生徒の募集に成功したので、ヴィルニュヴのこの新しい学校の評判はアジャンの学校の評判にも劣らないようになりました。この学校は最初の二人の修道者アルムノー兄弟の様々な思い出と共にその後80年間存続しました。この修道者の兄弟は生涯ヴィルニュヴの本校に奉仕し、その一人はロジェ士の後を継いで40年近く本校の指導に当たりました。彼らはセン・ルーベスの出身で平凡な環境に育ったにもかかわらず、創立者が会員に与えた養成の特徴、すなわち、謙そんで愛想のよさ、礼儀正しさ等、完全な修道精神を備えていました(43)。

要するに、創立者の子弟による最初の宣教活動の驚くべき成功に帰せられるべきものは、彼らの宣教精神の力強さであり、その評価と栄誉が帰せられるのは神に続いて確かに創立者でした。既にこの時点で、小さな本会の活動は

拡大し、他の地域でも同じ様な成功を収めていました。



注

- (1) 歴史概要、10ページ
- (2) 1816年10月10日、メール・ドゥ・トランケレオンへ
- (3) 286ページ参照
- (4) 300ー301ページ参照
- (5) 1817年10月15日
- (6) コリノー氏は1818年のコングレガシオンの会長であり、小さな本会の共同生活の最初の一人でした。
- (7) フランス宣教会、マリアのオブラート会、多くの教区司牧宣教会
- (8) 1837年1月5日、ネラック近郊のメゼンの主任司祭からの手紙
- (9) 史家ランボーによる。「白旗」でヘルモホルス名義司教への手紙。「現代文明史」、368ページ。
- (10)「修道会辞典」、4巻、746項
- (11) 46番地は今日ムニュー通り53番地
- (12) ポール・ヴィクトル・ドゥセーズはルイ16世国王の名高い支持者の兄弟でした。
- (13) 1819年3月29日、メール・ドゥ・トランケレオンへ
- (14) ララン師、「歴史概要」、13ページ
- (15) 確かにその数年後エステブネ師は自らの責任でラビラ通りに新しい学校を設立しました。
- (16) その後、イエズス会に入会したエステブネ師は最初の年金額1000フランに減額しました。(1837)
- (17) これが師のいつもの方法でした。1838年3月7日、ショヴォー師に次のように書きました。「10歳から11歳の子供は試験をしてからでないと原則的には受け入れてはなりません。」
- (18) 1831年9月22日、ララン師へ
- (19) ある日、会員が教話の席に集まり、生徒が望まないにしても、あくまで処罰しなければならぬかどうかを尋ねた時、ボン・ペールは、「医者には病人が薬を飲むと熱が下

がることを知っている場合、その薬を処方することが出来るかどうか」をわたしに尋ねるのと同じす、とはっきり答えました。(シルヴェン師の自筆の覚え書き)

(20) 随所に、そして、1834年5月13日、ショヴォー師へ

(21) 1830年3月3日、ララン師へ

(22) 1834年2月7日、ショヴォー師へ

(23) 「修道会辞典」、4巻、747ページ

(24) 「歴史概要」、25-26ページ

(25) 特に、「メモリアル・ボルドー紙」、「ルシュ・ダキテーヌ紙」

(26) H・ルリエーヴル著、「ノートルダムの修道女」、118ページ

(27) 1821年7月6日

(28) コンドンの寄宿学校はシャミナード師とメール・ドゥ・トランケレオンによって1824年7月に設立されました。同時期に、マリアの娘の会の修練院がボルドーに設立されました。

(29) ララン師、「歴史概要」、10ページ

(30) 1820年11月29日

(31) ララン師、「歴史概要」、15ページ

(32) 「修道会辞典」、4巻、748ページ

(33) 1822年1月16日、ロジェ士よりダヴィド士へ

(34) 1821年4月28日

(35) 1821年5月30日

(36) 1821年12月16日、ロジェ士よりシャミナード師へ

(37) 1823年4月9日、19日、5月24日発行

(38) シャミナード師は1821年3月20日、トネンのドゥ・アラッコサド氏に次のように書き送りました。「住居に関しては7、8名の修道者と学校と男子青少年コングレガシオンのために十分な広さがあることを確認しなければなりません。修道者のためには少なくとも一人の司祭が必要です。」

(39) 1819年末、シャミナード師は、少年時代のけがの回復のお恵みを頂いたヴェルドレの聖母聖堂の側に会員を定住させる榮譽を熱望していました。1822年に、ダヴィド大司教はセレステン会の旧修道院を取得しました。それは、教区の老齢の司祭や病弱な司祭を収容するためでした。シャミナード師が次ぎのような書簡で1819年の計画を

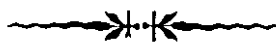
大司教に想起させたのはちょうどこのころでした。「大司教様、数日前からわたしは絶えずヴェルドレの教会の昔のすばらしいたたずまいと、その復興の必要性について、そして、そのためにいかにも微弱なマリア会ではありますが、マリア会の奉仕をこの件に提供する義務についての考えを思いめぐらしました。」

(40) 1822年9月16日、フレッシュヌー司教への書簡

(41) ララン師、「歴史概要」、16ページ

(42) デルリヴ氏著、「デュプユイ師に関する覚え書き」、12ページ

(43) ヴィルニュヴ市の住民はアルムノー兄弟と同僚の修道者への感謝として、「三世代よりマリア会員への感謝」という碑銘を刻んだ墓地祈とう所を設立しました。



第 28 章 マリア会のフランス北東部地方進出 (1823 —1826)

メルシアン師との関係 ❖ リボヴィレのロテア士 ❖ コルマルの創立 ❖ フランシュコンテへの誘致 ❖ バルドウネ師 ❖ ダヴィド士とセン・ルミの取得 ❖ セン・ルミの共同体 ❖ 試練 ❖ カイエ師の派遣。

シャミナード師は、ヴィルニュヴにおける二つの施設の創立を成功に導く交渉の間、無原罪の乙女マリアのおぼし召しに全面的に頼らないなら自らの影響の範囲が謙そんのために控え目にしていた限界を超えて拡大するに違いないことを感じていました。ところが、摂理的な働きを考えずにはいられない一連の事態が生じたので、師はその計画の明らかな危険性にもかかわらず、会員のグループを新生の共同体から手放すことを決断しました。ボルドーから200キロ離れたアルザスやフランシュコンテの未知の地域に会員を派遣するためでした。

シャミナード師の諸施設創立の将来に極めて重要な結果をもたらすことになるこの事業はルイ・ロテアのマリア会への召命にも関連していました。由緒あるランゼン家(上アルザス)出身のこの青年には多くの有力者との関係がありましたが、その召命は人目には気づかれませんでした。その後間もなく、セント・マリー・オーヌヌでよく知られていた弟の主任司祭がボルドーに行ったことによって、シャミナード師とその活動に一部のアルザス人司祭の関心を促すことになりました。特に、アジャンのマリア会の学校の評判は宣教に熱心なメルシアン師の耳にも達していました。このメルシアン師は大きな商家の出身で、メルシアン家とロテア家は業務と友情の面で親しく交際していました。イグナス・メルシアン師は同じく司祭の兄ブリュノ師から重荷の遺産を受け継いでいました。それは荒廃から再建された教育修道会のみ摂理の姉妹会でした。メルシアン師はこの重荷に更に他の重荷を加えたところでした。いわゆるキリスト教教育修士会を設立したからでした。この修道会はみ摂理の姉妹会に類似し、同じように教区の子弟の教育を目指したものでした。修道会の創立者にはそう簡単になれるものではありません。メルシアン師は少なくともさしあたって新設の修道会を堅固な土台に安定させるための力がないことを認めていました。リボヴィレの修練院の維持も危うくなってきたので援助と助言を求めるため周囲に目を注ぐことになりました。

メルシアン師がシャミナード師のうわさを聞いたのは1821年の初頭で、こうした困難な状況の時でした。そこで、師はシャミナード師を率直に信頼して、リボヴィレの修練院に必要な刺激を与え、新生の修道会の将来を保証出来るマリアの会の修道者の派遣方を要請しました。メルシアン師は、その要請がどのように特異なものであっても、シャミナード師は何らの反対も表明しないように思われたからでした。シャミナード師は北部地方の事業の創立のために任命していた会員の一人ルイ・ロテア士をリボヴィレに派遣することを約束しました。ルイ・ロテア士はあらゆる試練に耐えられる優れた節操に恵まれた分別のある、そして、あらゆる点でメルシアン師の要望に応じられる修道者で、しかも、アルザスでは不可欠のフランス語とドイツ語の2箇国語の教師だったからでした。シャミナード師は最大の援助を必要とする時も、その貴重な援助を差し控えていました。しかし、内心こうした援助を急いで断るべきではないとも感じていました。正にこの任務は宣教師を養成し、真のキリスト者を増加するというマリア会の目的を見事に目指していたからでした。

1821年10月の黙想会の折り、創立者はルイ・ロテア士の終生誓願を受け、彼を祝福して生まれ故郷に派遣しました。この温情に満ちた祝福が奇跡を生むことになりました。リボヴィレの修練院は立ち直り、瞬く間に改善されました。このことはシャミナード師とマリア会会員に、メルシアン師の修道者の養成とその後の指導を委託する望みをメルシアン師に呼び覚ますことになりました。創立者の祝福がもたらした第二の成果はその時点でマリア会が従事しなければならない働きでした。それはルイ・ロテア士によってマリア会が極めて有利にアルザスに紹介されたからでした。幾人もの青年が、そして、司祭でさえもマリア会への入会を希望してボルドーへの長い旅行を試み、セン・ローランやマドレーヌの修練者を増加させることになりました。こうしたことばかりではありませんでした。1822年二月以来、様々な施設創立の正式の要請がシャミナード師に寄せられたからでした。

最も緊急な要請はコルマルの主任司祭メンバー師からの要請でした。メンバー師はオーレン県全域で正に司教のような影響力を持ち、ロテア士の表現によれば、「県の様々な権限を完全に独占している(1)」ような実力者でした。メンバー師は、マリアの娘の会がコルマルの近郊に共同体を設立して欲しいこと、マリア会の修道者が高等中学校と公立小学校を指導して欲しいことを同時に要請してきました。当時、高等中学校では優れた校長のみが必要で、他の教員は徐々に更新していくことでした。公立小学校については、すべての人の期待はずれになっていた学級員システムの授業の廃止が緊急事項ということでした。

こうした多くの要請が同時になされたのは、ちょうど無償学校がロッテ・ガロンヌ県に展開して発展していった時だったからでした。シャミナード師は当惑していました。1822年5月9日の日付でメンバー師に次のように慎重に回答しました。「マリア会がアルザスで、また、アルザス全域で有益な活動をなすことが出来るとの何らかなの希望を持っているにしても、マリア会の共同体からの支援も援助も少ない遠隔地に施設を設立する計画、特に、女子の修道院の設立には密かな不安を感じています。」創立者が慎重な態度をとるように動かされたのは大事をとってのことでした。自由になる会員が極めて限られていたので、将来遠隔地域で適切に、思い切って活動するためには、目下ボルドー近郊にその力を集中することが賢明であると判断したからでした。創立者は、メルシアン師に示した次のような助言通り、もっぱら整然と慎重に事を進めることを望みました(2)。「わたしたちが中途半端なことしか行わないならば、これほどの心遣いをする価値はありません。わたしの考えでは、学校を増加することではなく、そこで真に善が行われるよう配慮すべきだということです。」

いずれにしても近い将来、特に、アルザスから提供されるという人材の協力によって、メンバー師の計画達成が可能になることを期待して、シャミナード師はその実施方をメンバー師と検討し始めました。メンバー師は極めて教養のある才覚の持ち主だったので、シャミナード師の考えをなかなか承知しませんでした。そこで、シャミナード師は次のように書き送りました(3)。「確かにご判断のように、当地から100キロも離れた所に、しかもわたしの年齢で、その上、厳格な規律が維持出来るという希望を持って、そのような学校を創設するにはわたしの勇気が必要になるように思われます。」メンバー師はロテア士に励まされて忍耐して待っていました。ロテア士はメンバー師に、「シャミナード師は、主義として、計画を実施に移すか、何もしないか、どちらかです」と繰り返し伝えていたからでした(4)。その上、ロテア士は任務を終えて(1822年10月)シャミナード師の下に帰りましたが、アルザスの実情を熟っぽく主張する立派な弁護士のようになっていました。次のように強調しました(5)。「至聖なる乙女マリアに全的奉獻されたアルザスは、マリアにささげられた本修道会に予定された土地であることには間違いありません。」ロテア師の弟で在俗にあったが、シャミナード師や会員たちを心から尊敬していたクサヴィエ氏は、兄のロテア師以上にこのことを強調して、「アルザスはマリア会の温床になることが出来るに違いありません」と兄に書き送っていました(6)。

待望の2年間はメンバー師を落胆させませんでした。1824年10月、最初のマリア会員を受け取った時、その忍耐は報われました。しかし、その時、コルマルの高等中学校の問題は取り上げられませんでした。シャミナード師は、ヴィルニュヴの施設の創立のためコリノー師を任命したばかりで、校長のポストには

手許にだれもいなかったからでした。しかし、メンバー師は公立小学校だけで満足し、シャミナード師に次のように書き送りました(7)。「今月16日のあなたからの手紙は当市の市長や主任司祭を大変喜ばせました。わたしたちが耐え忍んだ労苦など何ほどでもありません。依頼の件が聞き届けられたことだけでうれしく思っています。」ルイ・ロテア士は会員を率いて現地に着いた後、次のように創立者に書き送りました(8)。「わたしたちの学校についてボン・ペールに伝えることが出来ることは、あなた方にはいつまでも心から感謝致します、というコルマルの主任司祭の一言です。」こうして、学校の生徒は450名に達しました。学校はますます繁栄し、学校が存続する限り、すなわち、ドイツによってアルザスが統合されるまで、その発展は進展していきました。

シャミナード師は信徒修道者に委託された公立小学校を引き受けると同時に、コルマル近郊にあったトロワゼピの巡霊地を管理する希望をあたためていました。その巡霊地から司祭が信徒修道者を助け、コングレガシオンのような他の事業も指導出来ると考えたからでした。しかし、こうした手はずも他の多くの活動同様会員の不足から成功しませんでした。それでも、創立者は、近い将来、アルザスへのマリア会の活動の拡大、そして、マリア会の完全な存在が示される共同体の設立を常に熱望していました。事実、その時期は程なく訪れることになりました。2年後、マリア会はこの見事なカトリックの地域全域に展開するすばらしい活動を開始しました。この遠距離の地域のコルマルに最初の共同体の設立が要請されましたが、最初の共同体の設立には至りませんでした。他の修道者のグループはまる1年共同体設立の計画実施を先行し、それがオート・ソーヌ県のセン・ルミに決定されました。それは偶然の事情によってというより摂理的な事情に導かれてのことでした。

新生のマリア会に入会するため教区を去ったセント・マリー・オーミヌの主任司祭の模範は、その友人の一司祭で、ジュラ・ベルノワ出身のカイエ師に受け継がれたことは記憶に新たなことと思います。カイエ師は1822年の秋、セン・ローランの修練院に入りました。ちょうどその数週間前ごろでしょうか、カイエ師の神学校の同僚の一人でブザンソンの助任司祭であったドメ師(9)は、教区の司牧担当で、フランシュコンテ地方にマリア会を誘致することを熱望していたバルドゥネ師の申し出をシャミナード師に伝えることを要請されたところでした。バルドゥネ師は城館及び付属建物を含む150ヘクタールの広大な敷地の使用をマリア会に一任したいということでした。それは、マリア会がこの広大な地所を信仰と善のために利用することを望んでいたからでした。なお、バルドゥネ師は、教区の司牧司祭たちで「世から引退することを望んでも、引退の施設が不足しているためそのことが出来ない司祭があちらこちらにいる」ことを知っているということ、また、セン・ルミ(当該地所の地名)は彼らの引退の場所にふさわしい

ように思われる」とも手紙に書き添えてきました。

いずれにしても、シャミナード師は、こうした提案から大きな善がもたらされることを否定しませんでした。アルザスの場合に表したほどの熱心さを示しませんでした。ロッテ・ガロヌ県や他の地域同様、このアルザス地域からは多くの要請がなされていたことを認めていたからでした。しかし、率先して提案した人々はそのようには考えていませんでした。ドメ師がバルドゥネ師の伝言をシャミナード師に伝えてから1箇月後、バルドゥネ師は自らブザンソンの司教総代理タレン師の指導の下にシャミナード師に催促の手紙を書きました。タレン師もバルドゥネ師の申し出を受諾するよう促し(10)、ドウ・フレッシュニー大司教(11)の了承を保証して司教自身の氏名で次のように書き送ってきました。「わたしはマリア会の修道者がイエス・キリストのすばらしい香りを本教区に発散させるに違いないという確信を抱いて、今から喜んでいきます。」なお、バルドゥネ師はその手紙で、セン・ルミの地所について詳述し、すばらしい善が行われる環境であることを説明して、心から期待している返事が遅れないようシャミナード師に要請していました。

バルドゥネ師は平凡な司祭ではありませんでした。フランシュコンテ地方全域に各種の慈善団体を誘致する等、正に実業家同様に評価されていたからでした。バルドゥネ師は、1763年にシャッシ・レ・モンボゾン(ホート・ソーヌ県)で、その地域で最も由緒ある一家庭のジャン・エティエン・バルドゥネ家(12)に生まれ、学校の運動競技でしばしば競争したクラスメートのピシュグリユ氏とアルボワの高等中学校で教育されました。優れた才能に恵まれた師は、なお、不屈な意志の持ち主でもありました。司祭として、また、アルボワ近郊のメスネーの主任司祭であった叔父の後継者として、その精神力と体力のおかげで地域のジャコベン党員からさえ一目置かれ、生涯その教区を離れることはありませんでした。

バルドゥネ師の事業管理運営の敏腕には驚かされました。師は自ら次のように話すのが常でした。「神はわたしを世俗に残さなかったのも、わたしはとても幸せです。世俗にいたらわたしは容易に金持ちになり、その財産のために人々の魂の救いや自分の魂の救いさえも忘れていたに違いありません。」師は司祭であってもその才能を教会や貧者の財政の再建に活用しました。師は国有財産を購入して教会を建立し、修道院を設立する等、これを本来の用途に還元しました。毎年、家族からの年金一万二千フランから1万五千フランは全額こうした目的に使用していました。また、将来の何らかのすばらしい計画を考慮して、「金の卵を産むめんどり」、すなわち、この年金を2,3年分貯蓄して、再度思い切って活用するようになりました。

バルドゥネ師はまずメスネー教会の再建から活動を開始しました。ここで、師は出資者、建築家、建築請負師、そして、主要な労働者でもありました。続いて、ブザンソン近郊の学校村に同僚の司祭や教区の司牧司祭のために快適な教会付きの司祭館を設立しました。この事業は自由党の非難の対象になりました。それは、わずかな事にこだわらない「立憲政党」にとってバルドゥネ師が、「イエズス会員」であり、学校の施設が「選挙宣伝センター(13)」になっていたからでした。師の活動によって自由党に財政上の被害をもたらしたという非難に対して、バルドゥネ師はダルジャンソン侯爵(14)によって売りに出されていたドゥ・ロザン家の旧所有地セン・ルミの地所の取得によって応じました。城館は未完成だったとはいえすばらしく、この敷地の森林、牧場、畑、ぶどう園等からは様々な収益が得られ、不足するものは何もありませんでした。しかし、完全に放棄された状態だったので活用するためには大変な努力が必要になっていました。

バルドゥネ師はここに修道院の設立を望んでいました。しかし、師は今まで全然認識のなかったシャミナード師の信頼をどのように得ることが出来たのでしょうか。確かなことは、善に対して極めてたくましかったこの二人のきずなは正に摂理的であったと考えられることです。二人は20年間親密に協力して活動し、今日なお存続するほど堅固な男女の修道院をフランシュコンテ全域に設立しました。彼らはかなり違った性格に恵まれていたので時には理解し合うのが困難でした(15)。それは、相互に相補っていることを感じていたものの、その協力一致は結果の評価次第であることも感じていたからでした。シャミナード師は人々を信仰に育成し、指導することが使命でしたが、バルドゥネ師は財政への配慮を抱き、建築工事や設備を監督し、自分たちのため、また、人々のため神の国を求める人々に物質的な生活必需品を保証することでした。二人の協力の第一の目的はセン・ルミの創立でしたが、やがてお分かりになるように、それは二人にとって困難な事業でした。

シャミナード師がこの件について承諾することを決意したのは、バルドゥネ師の最初の提案から1箇月後の1822年11月21日でしかありませんでした。シャミナード師は司教総代理のタレン師に次のように書き送りました。

「司教総代理殿、わたしは頂いた書簡に回答するため幾日も迷っていました。施設の重要性、わたし及びマリア会の他の施設からの遠距離、少数のマリア会員、そして、他の施設の設立のため多方面から受けるかなり頻繁な要請、以上がわたしのちゅうちよのもっぱらの理由でした。しかし、信仰のために大きな善がもたらされるという考えに内心駆り立てられましたのでようやく神の前に決心しました。」

シャミナード師はコルマルとセン・ルミの事業を現地で検討し、最終調整の使命を帯びて、近々、ダヴィド士がフランス北部地方に出発することを伝えました。

しかし、ダヴィド士は健康を害し、神経痛に日々悩まされたので出発を春まで延期し1823年3月10日ようやく出発しました。ダヴィド士の旅程の最初はフランシュコンテでした。そして、ブザンソンではドゥ・フレッシュニー司教(16)に歓待されました。次に彼はバルドゥネ師の案内でセン・ルミを訪れましたが、そのすばらしさに魅了されました。いずれにしても、「弁護士出身のダヴィド士は司牧司祭のバルドゥネ師と完全に意気投合することになりました。いずれ劣らぬ賢明な彼らはこの荒れ果てた地所が将来どのようなようになるかをかいま見たからでした(17)。」ダヴィド士はアルザスでの任務を果たすためバルドゥネ師に別れを告げましたが、ボルドーに帰る前に再会することを約束しました。彼は次の年にコルマルに学校を開設することをメンバー師と契約した後、バルドゥネ師との約束を果たしました。2回目のセン・ルミ滞在中で完全にセン・ルミのとりこになったダヴィド士は、早速、土地取得契約の最終草案起草にバルドゥネ師と着手することになりました。

シャミナード師は協力者ダヴィド士の熱狂的な意見を余り信用しませんでした。その意見が大仰で空想まがい、その上更に、神経過敏になった健康状態はその想像力を刺激していると考えられたからでした。また、創立者はダヴィド士の出発の前に次のように極めて明確な支持を与えていたからでした(18)。

「わたしたちは同じ馬車につながれているようなものです。一致して引かなければうまく進まないに違いありません。あなたは前に進むのを好みますがわたしもそうです。残されたわたしたちの寿命はわずかですから、わたしたちは協力しなければならぬのです。わたしたちは至る所で事業を始めながら何も成功させないで終わりたいはありません。実のところ、わたしたちが行ったすべてのことには大きな不完全があるのです。それを改善するにはどうしたらよいでしょう。わたしはそのことをとても苦しめています。また、わたしが、あちらこちらと人々を支えるために用いた時間は事業の発展のためにもっと有益に用いることが出来たに違いないということも分かっています。」

したがって、重要なことは、セン・ルミの事業のような実質的に請け負い事業については、完全な分別によってしか実施しないこと、また、既に存在する事業を妨害しないという確信を持ってしか契約をしてはならないということでした。

ところで、この事業目的の達成には二つの条件が求められました。それはまず、新しい施設に要請されるのは限られた人員のみであること、ゆとりを持って

地味に事業を促進すること、次に、主要建物のすべての設備費が支出されることでした。こうしたことは、シャミナード師が司教総代理のタレン師への手紙で、「わたしの権限の限界」と呼んでいた事柄でした(19)。負債に苦しんでいましたが、「賢明な創立者はその地所、特に、城館が新たな出費の源となることがよく分かっていたからでした(20)。そして、この出費は、この地所がそれなりに評価される時期になった時にしか対処出来ないものだったからでした。ダヴィド士の出発の前後、創立者が繰り返して止まなかったこと(21)は、「わたしたちはセン・ルミの施設のために何ら出費が出来ないことを忘れないでください。かえって、やがてこの施設は他の施設を援助するようになることが求められています」ということでした。その後しばらくしてまた次のようにさとししました(22)。

「もし、わたしに自由になる資力があるなら、わたしは素直に、必要な金額でだれも協力してくれないなら、どうぞわたしに願ってくださいとあなたに答えるでしょう。しかし、あなたは、今まで設立した施設を維持するため、現在雇用している人々のため、そして更に付け加えれば、どんなに施設の発起人たちが寛大であっても、わたしがセン・ルミのために支払わなければならない無理な支出のため困った状態にあることを知っているはずですよ。あなたは、わたしが、旅行に必要なものを何も持たせないで、すなわち、各人にわずかな衣類も下着も与えないで子供たちを出立させる勇気があると思いますか。子供たちの誰かと別れる時、父親であることを一層身にしみて感ずるのではないのでしょうか。」

したがって、創立者は、セン・ルミの施設の創設は教区の司牧司祭たちがそこで活動し、マリア会の会員は少なくとも当初から話題になっていた召命の取得のためにのみ彼らの協力者となるという条件でのみ許可されるということを了承しました。その他の業務は人員と資金の許す限りこの事業に付け加えられることになりました。

ダヴィデ士の懇願にもかかわらず、創立者は、彼が遠く離れていて冷静な判断で行動出来ない行為に安心出来ませんでした。そこで、次のように書き送りました(23)。「あなたのこととこの事業のことについて毎日考えない日は一日もありません。わたしはあなたとあなたの働きの上に御主と尊い御母のご保護を祈っています。わたしの気持ちはあなたに伝えてから少しも変わっていません。わたしはこの事業を望んでいますが大抵不安です。」創立者がこの事業をひどく恐れていたのはもっともなことでした。それは、バルドゥネ師が教区司祭たちと仲違いして別れたばかりであったこと、また、バルドゥネ師はこの地所の購入のためにほとんどの資金を使い果たしていたこと、それに、鏡や貴重な羽目板、城館の壁から取り外すことの出来たすべてのもの、ダルジャンソン侯爵の残したものをすべて売却したこと、更に、バルドゥネ師はダヴィド士の膨

大な計画を信用して、マリア会を豊かな財源の提供者であり、目覚ましい事業計画の可能な修道会であるかのように見なしていたということ等をダヴィド士は創立者に報告していなかったからでした。創立者は以上のすべてのことを知らず、しかも、結論を急いだダヴィド士はこれらのことを十分考慮していなかったのです。

ダヴィド士は1823年5月16日に土地の購入契約書に署名してしまいました。その翌日になって初めて自分のなしたことの重大さに気づき、すっかり落ち込んだ彼は、「だれかわたしに代わってください。この事業が恐ろしくなりました。わたしはこの事業にかかわりたくありません」と書き送りました(24)。しかし、その後悔は遅すぎたのです。それにもかかわらず、創立者は、奇妙な権限の逆転とでもいうべきでしょうか、ダヴィド士から厳しい非難を受けました。しかし、創立者はダヴィド士の決断や過度の興奮状態の結果と思われた行為についても困惑することなく、次のように回答することに止めました(25)。

「わたしがもっと広い視野を持ち、もっと神に一致していたなら事はもっと順調に運ばれたに違いありません。このことは確かだと思います。．．．神がわたしの罪をお許しになり、神の慈しみと哀れみのみ業を行うためよりよい道具を選んで下さるようお祈りしてください。」

創立者は契約した債務の履行、すなわち、土地購入契約費の支払いとセン・ルミの共同体の設置の準備に着手し始めました。しかし、ダヴィド士のボルドー帰院後も、バルドゥネ師の教区司牧司祭たちとの仲違い、同時に、師の一時的な財政窮乏、マリア会の財務状況についての誤解等についてはまだ全く知りませんでした。

7月には新共同体の要員が整いました。院長がクルーゼ士、修道院付き司祭がロッテ師で計11名の会員で構成されていました。創立者は、すべてが整った時、ダヴィド士の大げさな言葉にも何ら驚くことはないと考え、また、彼の信用を問う新たな試練を課することを考えて、新規共同体のメンバーをセン・ルミに案内してそこに定着させること、活動を準備することを委任しました。7月16日、カルメル山の聖母のご保護の下に、創立者は彼らをセン・ローランのチャペルに集めて誓願の更新を受け、翌18日朝、彼らを祝福してガロンヌ橋まで見送り、彼らを抱擁して別れ、み摂理に委ねました。

彼らはセン・ルミに到着した時、色々誤解があったことに気づきました。目にしたのはすばらしい外観の城館でしたが、器具も備品もなく、また、敷地は立派でしたが、収穫も農具もなかったからでした。また、その地に定着するため、すなわち、土地からの収益と釣り合った生活が出来る日まで、到着時彼らが

所持していた全財産は6フランだったからでした。それは、旅行の大半を徒歩でなし、節約した旅費の残額だったのです。バルドゥネ師は不満を抱いて失望し、ダヴィド士は意気消沈していました。しかし、シャミナード師だけは何ら取り乱すことなどありませんでした。クルーゼ士の問い合わせに対して創立者は次のように書き送りました(26)。「過ぎたことがどうであろうと、わたしたちは事業を始めなければならないと考えて、実際にこれに着手したのです。わたしたちの意向は純真です。どうぞ前進してください。」

創立者の弟子たちはどのような場合でも、み摂理の懐に飛び込むことをその師から学んでいました。み摂理もまた彼らを見捨てることが出来ませんでした。バルドゥネ師は彼らに出来る限りのことをし、創立者も彼らになにがしかの資金を急いで送金しました。こうした援助にもかかわらず、彼らの極貧の生活は避けられませんでした。ベットとしては、床板のないベットに敷いたわら布団、洗濯したらそれですまさないといけない2枚のシーツ、食糧としては、ジャガイモとバルドゥネ師から支給された乾燥野菜、飲み物としては発酵した果実をこした飲料水、以上が彼らの力を支えるために持っていたすべてのものだったからでした。冷たい風に吹きさらされるこの台地の冬は常に厳しく、しかも、そのその年は例年よりもっと寒さが厳しかったので、南部育ちの気の毒な会員たちは、日中は薄手の服で震え、夜は一枚の毛布にくるまって休むしかなく、暖をとるにはほとんど薪もなく、手仕事をするか、ランニングで体をあたためるしかありませんでした。

苦しんでいたのは彼らだけではありませんでした。彼らの窮乏はシャミナード師の心に深く反映していたからでした。いわゆる「父の腹の底(27)」は、断腸の思いだったからでした。そこで、次のように書き送りました(28)。「あなた方が苦しみ、困惑していることは確かです。しかし、セン・ルミによってわたしにもたらされた限りない苦しみを、あなた方に想像させることが出来るかどうかわたしには分かりません。」更に次のように述べました(29)。「確かに、皆さんの厳しい状態を知りながらそれを改善出来ないでいますが、むしろ、あなた方のすべての苦しみを自分自身で担う方が楽になるに違いないと思っています。」創立者は彼らのために出来る限りのことを致しました。そして、バルドゥネ師には次のように書き送りました(30)。「これらの若い会員の何人かは寒空に十分暖かい服装もしていないことを知って心苦しく思っています。そこで早速、600フランを為替手形でセン・ルミに送金させました。」創立者は何らかの資金が入るたびごとにこのようにしました。

創立者に負ぶさっていた他の心配の種はダヴィド士の神経質的な状態に対する不安でした。彼は極端な落胆から無分別に厚かましくなり、その動揺は

他のあらゆる理由よりも事業を危険にさらしかねなかったからでした。また、彼はオート・ソヌヌ県の知事やバルドゥネ師に決して実現出来そうもない約束をしていたからでした。もし、それらの約束が法的に有効になればマリア会は破滅しかねない契約さえ結び、そうした大それた契約を実現する手段も分からず、またしても落胆し、そのことで創立者を非難し、差し当たり従事しなければならない事業に着手し、共同体を不安な状態にしていました。

800キロも離れたシャミナード師にとっては、その実情は断片的にしか分からず、会員をどのような方向に導くべきか見当が付きませんでした。そこでまず、ダヴィド士にその理性の声、良心の声を聞かせるように試み、次のように書き送りました(31)。

「あなたは1万フランで仕事をもっと順調に進めることが出来ると言いますが、そのことはよく分かります。しかし、わたしによく分からないことは、福音的な清貧に献身し、したがって、会員のためにも神から委託された事業のためにも、神のみ摂理に献身した修道者が、気楽で富裕であるように思われる必要があるかどうかということです。これらの修道者は、この事業の誉れを自分たちが独占するのではなく、これを神に帰するに違いないということはわたしにはよく分かります。いずれにしても、わたしによく分からないことは、わたしたちがこのような気持ちでいるなら、どうして神が満足されるだろうかということです。」更に、「4箇月たっても建物が整備されないからといって、計画は成功するはずはなかった、とどのような賢明な人が予測出来たでしょう」と付け加えました。

その上、シャミナード師は、ダヴィド士の思慮分別についてより休息の必要なことに気づいていました。そこで、彼の申し立てに注意を喚起することなく、特に親切な言葉、信仰の言葉を次のように伝えました(32)。

「わたしはあなたの立場を痛いほど感じています。わたしは自分ではタッチしないであなたに代理をさせるより、自分一人で堪え忍んだ方が勝っているように思います。わたしは時々わたしたちの力以上に困難な施設の設立に同意したことを不安に思っています。．．．しかし、計画を実行に移された神のおぼし召しをたたえたいと思います。わたしたちが働くのは神のためであってわたしたちのためではないからです。」それからしばらくしてまた次のように書き送りました(33)。

「わたしの弁解なり釈明が正しければ正しいほどあなたは慰められないかも知れません。しかし、わたしが望むのはあなたが慰められることです。あなたは自分で約束しましたがそれを守ることが出来ませんでした。ところで、それはどんな約束だったのでしょうか。いずれにしても、わたしはあなたがその約束を守

ることを助けるためあらゆる努力をしたいと思います……。」創立者はこうした温情に満ちた指導によってダヴィド士の興奮気味の気持ちを幾分でも落ち着かせることに成功しました。しかし、ダヴィド士はもうこの事業には不適切であること、セン・ルミの事業が正常に実施されるためにはどうしても彼をここから引き離さなければならないと考えました。

いずれにしても、創立者はあらゆる観点からセン・ルミの施設には大きな期待を寄せていました。この期待を裏付けるのは次の二つの理由からでした。その理由の一つは、この事業は多くの反対と苦悩の事業以外の何ものでもなかったからでした。神のために計画された事業、神のためにこのように激しくもてあそばれた事業は必ず成功するからです。聖パウロにならって次のように伝えました(34)。「『Qui cæpit opus bonum』(コリント二、8、6)(この慈悲の業をあなた方の間で始めたからには、やり遂げるように。) 真の善を行うために設立を求められた施設は一般に最も苦しい混乱の中で生まれた施設です(35)。」会員の勇気を支えたのもこの同じ考えによってでした。セン・ルミの共同体には次のように書き送りました(36)。

「わたしたちは信仰によって救霊の審判者にまで心を上げ、慈愛に満ちたみ摂理の配慮をたたえました。わたしは次のように考えました。主は手にみをお取りになり、選ばれたこれらの共同体の会員を浄化されようとして、遠く離れたこの地域ですばらしい実りをもたらすべく施設の設立にふさわしい会員を識別することを望まれたのです。徳の修養に未熟な若者なので、こうした事業にはまだふさわしくないかも知れませんが、わたしは、会員のだれもが主のこの試練に負けるはずはないと期待しています。」

事実、彼らの中のだれ一人として修道者の義務を怠る者はいませんでした。これこそ創立者の慰めと希望の第二の理由でした。会員たちは、彼らが仕えていた創立者とマリアにふさわしい態度を示していたからでした。大半徒歩で成し遂げた3週間の旅行の窮乏や疲れも彼らの朗らかさや熱意を少しも変えることはありませんでした。院長の言によれば、「旅行中彼らは正に移動する共同体」を作っていたということでした。開始された事業の上にただよっていた孤独や不安の長い6箇月の窮乏や苦悩はなお決定的な試練でした。しかし、彼らの不平は創立者の耳には達しませんでした。かえって、修道者や修道女を教化していた陽気で信仰の精神に満たされたすばらしい手紙しか受け取ることはありませんでした。こうして、セン・ルミの会員たちは次年度のために、精力的な活動によって、この豊かな生産性の上がる農地で何らかなの資金を調達するよう努力していました。クルーゼ院長は会員に作業や節約の模範を示し、ロテア師は禁欲と謙そんの模範を示しました。師は北向きの小部屋で暖房な

しで冬を過ごし、毎週土曜日の晩の自白譴責では会員の前にひざまずいて彼らの足に次々せつぷんしました。彼らの一人は、「わたしは恐縮してどうしようもありませんでした」と述懐するほどでした(37)。

共同体全会員間の相互理解は完ぺきでした。クルーゼ院長は、「わたしたち会員の一致は強力です。この大きな恵みを与えて下さった主はたたえられますように」と創立者に報告しました(38)。」選ばれたこれら会員のおかげで、この共同体には平和と朗らかさがもたらされました。そして、この朗らかさは窮乏の時にあっても率直に生きる会員のためのあふれるばかりの朗らかさだったのです。この朗らかさは、そこに何かの勘違いが生じたとすれば、それは時々祈りを間違えるたということです。ボン・ペールはこのことに不安を感じたロテア氏を慰めて、「この朗らかさは会員の心にみなぎる平和の印です」と書き送りました。

創立者は誤っていませんでした。当時の会員の一人(39)は晩年になって、当時の印象を適切に「英雄的」と評価して次のように述懐しました。「わたしは王様のように陽気で幸せでした。摂食養生的な食事ではありましたが全員健康でした。病気にかかることもなく、四旬節や毎金曜日の大齋は完全に守られ、償い、むち打ち、鉄の鎖等も無縁なものではありませんでした。」したがって、それから数年後セン・ルミを訪れた創立者さえも彼らの償いの精神を抑制しなければならないほどでした。また、先の会員は次のように続けました。「当時は何という喜び、何という熱心さ、それは黄金時代の毎日でした。このくだりをしたための間、このような思い出に涙があふれました。やがて、わたしもボン・ペールや兄弟たちに会いに天国に行くからです。彼らは皆聖人のような修道者たちだったので、わたしは彼らが皆天国にいることを信じています。」

彼らの多くの徳は外部に対する最初の宣教になりました。その後、彼らはより宣教の効果を上げるために物質的手段を用いることになりました。当初、遠隔の地域から来たこれらの修道者たちの出現はフランシュコンテ地方の農夫たちに幾らかの好奇心と多くの疑念をもたらしました。修道者たちは金銀の豊かな資産を持っているスペイン人ではないかとうわさされていたからでした(40)。しかし、かつてこの地方で有名になっていたスペイン人貴族の思い出は、修道者たちの単純でよりすばらしい現実の前にうち消されてしまいました。この城館の不思議な住民は、老人たちがファベルネやクレールフィンテーヌ、及びその周辺のその他の修道院で知っていた修道者と同じ修道者以外の何ものでもありませんでした。しかし、この新顔の修道者たちはその服装から昔の修道者とは違っていました。彼らは会則の遵守に、すなわち、沈黙の規則、つつしみ、世からの離脱の遵守に、会員相互間では皆区別はありませんでした。やがて、

彼らは見直されるようになりました。「彼らは神のため、天国のために働く清廉潔白な人々だ」とのうわさが広まったからでした。(41)

召命を引きつけるためにはそれ以上の評価は必要ありませんでした。マリア自身によって最初の二人の志願者(42)が送られてきたように思われたからでした。彼らはフランシュコンテ地方の聖母マリアの有名な巡礼地の一つでモン・ローランのふもとのジューという遠隔地の村から来たからでした。1824年の1月には志願者が9名に達したので、創立者は彼らで正式の修練院を開設することをロテア師に許可しました。

このことはセン・ルミにおける創立者のあらゆる期待を裏付けるものであり、派遣された会員のための施設の建築をこれ以上遅らせないよう決意させるものでした。創立者も自らセン・ルミを訪れようとしていました。しかし、この考えはあきらめざるを得なくなったので、セン・ルミの創立に関して最初の提案をなしたカイエ師を自らの代わりにすることを考えました。1824年2月26日付けでカイエ師に詳細な指示を与え、ダヴィド士を手許に呼び寄せました。

創立者は帰ってきたダヴィド士を歓待し、過去を思い出させるような言葉は一言も話しませんでした。親密さは以前と少しも変わらなかったのです。しかし、それ以降、この協力者を自らの手許から離すことはありませんでした。それは、彼がよき指導者の意見を聞かず、孤独になり、しかし、激しい熱誠に駆り立てられたが、残念の事件によって事業を危険にさらしたからでした。

ダヴィド士に代わったカイエ師はボルドー人弁護士の魅力的な素質など持ち合わせていませんでした。外観は生まれ育った田舎者の感じを残していたからです。しかし、その知識は豊かというより堅実でした。一本気なカイエ師は障害を迂回するよりこれを乗り越えることを好み、目的に向かって一直線に進みました。誠実で献身的、真に修道者的性格の師は一般の会員より徳と信心に抜きんでており、その従順は極めて堅実でした。

創立者は以上のような理由で彼に全幅の信頼を寄せていました。クルーゼ士には彼を次のように紹介しました(43)。「カイエ師は極めて聡明というほどでもなく、世の習慣にも通じていませんが、信仰と熱誠の精神の充満した修道者です。彼は正しい判断を持ち、従順によってすべての命令を実行するために素直で、同時に堅実な性格を持っています。」

フランシュコンテ地方への宣教使命を帯びた者としてカイエ師は、聖職者、特に、教区の司牧司祭たち、そして、計画された事業の成功にだれよりも寄与した神学校の指導者たちに親しく知られていたことで恵まれていました。



注

- (1) 1822年2月3日、シャミナード師へ
- (2) 1822年6月18日
- (3) 1822年6月18日
- (4) (1822)年10月17日の手紙
- (5) 1822年7月6日、シャミナード師への手紙
- (6) 1822年5月23日、弟のシャルアルへ、司祭の兄は当時セン・ローランの修練院にいました。
- (7) 1824年9月28日
- (8) 1825年2月15日
- (9) 1822年9月29日の手紙、ドメ師はマリア会と常に親しくしていました。師はブザンソンの首都教会の正式教会参事会員として帰天しました。
- (10) 1822年10月29日の手紙
- (11) ガブリエル・コルトワ・ブレッシニ司教(1771ー1823)は大革命前、セン・マロの司教でした。政教条約以降1814年まで引退生活をおくりました。司教はブザンソンの司教座にルコズ司教の後任として招かれました。1817年国王のローマ大使でした。1821年までブザンソンの司教座に着任しませんでした。
- (12) バルドゥネ師に関するとく名の略歴(1844年、パリ)は、ブザンソン大学哲学科教授ペルロン師によるものでした。他のより正確な自筆の略歴がマリア会のジュステン・フェーヴル師によって著されました。
- (13) グランメゾンによる1819年8月19日の「政体」、「ラ・コングレガシオン」、188ページ。
- (14) マルク・ルネ・ヴォワイエ・ダルジャンソン(1771ー1842)は、ラファイエットの副官、帝国の知事、1815年からバーレン県の県会議員、次いで、ヴィエンス県及びリユール県の県議会員で、国王ルイ・フィリップの下でさえ常に進歩野党の議席に着いていました。彼は有名な徴税官及びルイ15世国王の法務大臣の家系でした。ソフィ・ドゥ・ロザンとの結婚でセン・ルミ城館の所有者になっていました。なお、ドゥ・ロザンは最初ヴィクトル・ブログリ大公と結婚していました。
- (15) シャミナード師はその協力者が神の事業についての貢献を打算的に考えないことを望んでいました。バルドゥネ師は管理の面にも参加することを要求したからでした。それは、支出を負担したからでした。彼は創立者と同じ観点から物事を見てはいませんでした。そこで、創立者は(1838年5月26日)次のように書き送りました。「もし、神父様が

神の前でわたしに代わり、わたしの責任を引き受けてくださるなら、適当と判断されるすべてのことを命令することが出来るでしょう。もし、神がお許しになるなら、わたしはいつでも管理は神父様の手にお返しするつもりです。」それでもなお、二人の友情は1844年1月19日に訪れたバルドゥネ師の帰天まで続きました。

(16) ドゥ・フレッシュヌ司教はダヴィド士の訪問の数日後帰天しました。補佐司教ポール・アンブロイズ・フレール・ドゥ・ヴィルフランコン司教によって継承されました。

(17) ララン師、「歴史概要」、21ページ

(18) 1823年1月25日の手紙

(19) 1823年3月6日

(20) ララン師、「歴史概要」、22ページ

(21) 1823年3月4日

(22) 1823年4月23日

(23) 1823年5月21日、契約書に署名された時、シャミナード師はまだそのことを知りませんでした。

(24) 1823年5月17日

(25) 1823年5月27日

(26) 1823年9月9日

(27) 1824年2月23日、クルーゼ士へ

(28) 1824年1月20日、クルーゼ士へ

(29) 1823年12月2日

(30) 1823年11月6日

(31) 1823年9月30日

(32) 1823年11月23日

(33) 1823年12月16日

(34) 1823年4月17日、ダヴィド士へ

(35) 1823年11月25日、ダヴィド士へ

(36) 1823年12月2日

(37) サルモン士の覚え書き

(38) 1824年1月14日、シャミナード師へ

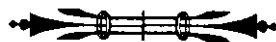
(39) サルモン士

(40) サルモン士の覚え書き

(41) サルモン士の覚え書き

(42) すばらしい修道者になったジャン・ロセットトアントワン・ギーヨは会員のセン・ルミ到着後2週間して、9月4日に申し出たからでした。

(43) 1824年4月5日及び13日の手紙



第29章 新しい教育事業:師範学校と職業学校 (1824-1826)

セン・ルミの寄宿学校 ❖ フランスの初等教育の現状 ❖ キリスト教学校の創立の提案 ❖ 最初の小学校教師の黙想会 ❖ 師範学校設立 ❖ 師範学校普及への努力 ❖ その原理、宗教教育 ❖ 初等教育の教科 ❖ 職業教育への発想 ❖ 併設学校、計画 ❖ ブザンソンの聖ヨゼフ病院。

セン・ルミの共同体はどのような事業を計画しようとしていたのでしょうか。この施設の創立を承諾したシャミナード師は、まず、教区司牧司祭たちの希望を実現すること、世事に疲れ手仕事によって聖化されることを望む老司祭たちに施設を開放することを考えていました。セン・ルミは修道院全体に沈黙と祈りが、そして、他の会員の宣教活動の上に天からの祝福を頂くためにふさわしい恒久的な懇願が確立された一種のトラピスト修道院であることを考えていたからでした。創立者はこの計画を絶対に放棄しませんでした。しかし、現業修道者の共同体設立のために必要な耕作地と農具を整えることが出来て、計画を実施に移すことが出来たのはそれから12年後でしかありませんでした。

したがって当時としては、前述のプランと相反しない、そして、広大な地所には十分なスペースが見いだされたので、教育事業から開始することが望まれました。周囲の住民は寄宿学校を要求していました。城館から4キロほど離れたアマンズの町に、数年前に著名な司祭のビュッソン師によって設立された小さな高等中学校には、少年たちのエリートグループがありました。その出身で優れた人物は後のレンスの枢機卿、トマ・グッセ大司教でした。この学校が無くなっていたのでマリア会がその跡を埋めるべく予定されていたのでした。カイエ師はセン・ルミに到着するとすぐ寄宿学校の開校の許可を創立者から容易に得ることが出来ました。まず、初等教育のみが行われましたが、1824年末前には数名のラテン語クラスの生徒がいました。これがセン・ルミの共同体の最初の活動でした。

しかし、シャミナード師はそれ以上のこと、そして、より優れたことを望んでいました。探していたのは会員が置かれていた環境での新しい条件に適合した宣教活動でした。会員はそれまで人口密集地域しか知らず、実施した学校内での宣教活動は異なる年齢の生徒のグループと接触出来たコングレガシオンとの協力によって補足されていたからでした。しかし、田園の真ん中で、小さな

部落でしかなかった農村のはずれに位置していたセン・ルミにコングレガシオンがないのは当然でした。したがってマリア会員は、真の信仰に余りにも養成されておらず、寄宿学校に対する深い、確信の信用は別として、なおにぶい、限られた信用しか持ち得ない住民に対してどのような活動の実施もあきらめなければならなかったのではないのでしょうか。他の何らかの宣教活動の手段によってもコングレガシオンの活動を補うことは出来なかったのではないのでしょうか。柔軟ではあっても一徹な創立者は祈りの中で自ら反省し、神に問いかけていました。この間、セン・ルミでは、会員たちが禁欲の内に耕作の準備に取りかかっていました。神のみことばのすばらしい実りがもたらされようとしていたのはこうした時期でした。

カイエ師の使命には確かにみ摂理の時が示されていました。創立者の心も照らされていました。教育事業が神が求めている事業であることを知ったので、代理者のカイエ師に遅滞なくこの事業に着手するよう指示しました。

この種の事業に関する最初の発想は教区司牧司祭たちによってほのめかされたものでした。彼らは宗教活動の行程で、もし、キリスト者として、また、教師としてその任務遂行の力があるなら、部落で教師が発揮出来る信仰や道徳上の強力な影響を確認していたからでした。しかし、不幸にしてその通りではありませんでした。そのことは、1824年8月20日、司牧司祭の従兄弟の弁護士バルドゥネ氏が初等教育に関する県委員会名でオート・ソーヌ県の県議会に報告した次のような状況で判断することが出来ました。

「これまで、当県の教育に適切な改善をもたらすための当局の努力にもかかわらず、未だにその分野で真の成功に到達することは出来なかった。無学、そして強いて言えば、大半の小学校教師や学校長の反道徳性は、常に増大していたとまでは言わないにしても、こうした改善に絶えず障害を与えてきた。大学区事務局が、まず、人々から非難される悪徳から小学校教育を保証しなければならない教師の採用法を規定していたことは確かである…。一般に人物証明書が容易に交付されたことは周知の通りである。それは、審議会が人物を証明するものを求めたからであった。また、教育委員会の視察官の本県の視察の際の報告書も大半の小学校教師の深刻な無能さを十分説明している。他方、審議会は本県に採用した各種教育法のテストによって、強く熱望され、そして、これに向かって当局及び教育委員会が指導努力してきた一斉教育法は十分成功を収めるにはほど遠いことが確認されている。50校がキリスト教教育修士会の教育法に従っており、3.654名の生徒が通学している。28の学級委員システム校には2.233名の生徒が通学し、424の旧教育法校には20.784名の生徒が通学している。以上のことから、次の結論が得られる。すな

わち、本県では、生徒の4分の1のみが一斉教育法の恩恵を受けていることが認められ、4分の3の生徒は十人十色の教育法に委ねられている。教育委員会が旧教育法に言及する時、画一的で固定した教育法の不足を判断するからである。また、各教員がほとんど自己流の、更に言えば、自らの習慣的教育法によっていることが旧知の事実だからである。」県の教育委員会によってオート・ソーヌ県に確認されたみじめな状況はフランス全土にほとんど共通していました。このことはギゾ文部大臣(1)の要請によって1833年に実施されたロレン氏の調査によって後ほど明確にされました。

ブザンソンの教区司牧司祭たちは自らの力量に応じてこうした不都合を改善するために当局の承認を得て毎年小学校教師を集め、黙想の修養を行わせることを提案していました。彼らは多くの教師の余りにも初歩的な養成を補充し、また、彼らに優れた教育法を手ほどきするために固有の教育理論を学ばせることを考えていたからでした。この目的のために教区司牧司祭たちはヴズールに旧カプチン会の修道院を改装しました。彼らは黙想会の指導には適していましたが、学校の教師を指導し、演習を行うことが出来る専門家でもありませんでした。したがって、こうした大きな集会のプランニング、説教時間外の過ごし方、そして特に、教育講話や各種教科の講義義務等、司牧司祭たちにとってはほとんど乗り越えることの出来ないほどの困難でした。そこで、マリア会がセン・ルミに誘致されることが話題に上った時、彼らは自分たちだけでは困難なこの企画をマリア会の援助によって実施する希望を温めていました。彼ら自身から生まれた黙想会の実施と常設師範学校設立による短期講座の実施を成功させる構想は黙想会の提案と同時に表明されたものでした。

シャミナード師はこれらの事業に魅力を感じ、1823年5月27日にダヴィド士に次のように書き送りました。「事業そのものは、全面的成功を収めるなら最も重要な事業になるに違いありません。もし、政府、特に、大学が同意するなら、他の諸教区もブザンソン教区の手本に次第に従うに違いありません。」この計画は創立者にとって一条の光にさえなりました。創立者は、年間を通じて、アルザスのキリスト教教育修士会の長上であったメルシアン師を、また、ロッレンの同じくキリスト教教育修士会長上フレッシュャール師からの要請に耐えていました。この二人の敬けんな司祭は共にその修道会をマリア会に合併させることを熱望していたからでした。教育の観点から田舎の人々の悲しい状況を嘆いていた彼らは、とりわけ合併の条件として、3名の修道者しかいない部落の小学校に一人か二人のマリア会修道者を協力させていただくよう提案していました。そのことで、彼らは、英国に信徒修道者の修道会を創立していたジャン・ドゥ・ラ・マンネ師の構想を分かち合っていました。ロテア士はメルシアン師を引き合いに出して次のように書き送りました(2)。

「アルザスには二人の修道者を奉仕させることが出来る大きな町が10箇所以上もあります。住民は、学級委員会教育法やその他の教育法を用いている教師を一般に嫌っています。それは大半の教師の指導がまずいからです。フレシヤル師も同じような気持ちです。大都市においてしか養成が出来ないことになっているなら、フレシヤル師は修道者の養成を放棄するに違いありません。」

創立者はどのような場合でもこのような方針を認めることに賛成しようとはしませんでした。この点に関しては、各学校に3人以下の修道者を決して送らなかつたキリスト教教育修士会と意見が一致していました。創立者はストラズブルの大司教に次のように書き送りました(3)。「わたしが理解出来ないことは、小さな町に若い修道者を一人か二人送り込んでも不都合がないと考えるほど善への熱意を過信出来るものかどうかということです。彼らは何日か善を行っても明らかに危険にさらされるのではないのでしょうか。また、修道共同体全体も危険にさらされるのではないのでしょうか。申すまでもなく、このことからつまずきが生ずるからです。」

したがって、かなり多くの子供たちのいる田舎の小さな部落では何もしないであきらめなければならなかつたのでしょうか。この重大な問題に対して教区司牧司祭たちは実践的にも満足出来る解決策を提示していました。それはシャミニナード師も簡単に理解出来るものでした。カイエ師は創立者に次のように報告していたからでした(4)。

「わたしが確信していることは、田舎に不足している立派な小学校教師を養成し、黙想会の期間中、彼らを再教育するために元小学校教師を招くことが出来る師範学校を設立することは、田舎の人々を刷新するために最も確実で、最も緊急な手段であるということです。言い換えれば、わたしたちは修道者の奉仕によって市町村の初等教育を刷新出来るに違いありません。」カイエ師からこのような報告を受けた時、その試みは既にセン・ルミで実施され、決定的な成果が得られるように思われました。

フランシュコンテの大学当局はこうした試みに好意を示していました。大学区長職を委任されていた視察官デジレ・オルディネール氏は小学校教師の黙想会参加を容易にするため司牧司祭と合意していました。その上、師範学校設立のプランを受領すれば、そのプランの実施の促進に同意しなければならなかつたからでした。1824年の3月にフランシュコンテに到着したカイエ師は、バルドゥネ師と教区司牧司祭との間に和解が成立したところだったので、障害が排除され、人々がより好意的になっていたことを感じました。そこで、カイエ師は

シャミナード師がこの計画に重大な関心を示していることを彼らに知らせ、早速その計画は決定されました。小学校教師の最初の黙想会は次の復活祭の休暇に行われることになり、その場所もヴズールではなくセン・ルミに決まりました。今回の黙想会はドゥー県の教師に限られました。それは設備の不足と十分な資金不足のため縮小せざるを得なかったためと、県知事のドゥ・ミロン伯爵がこの計画に特別な好意を示されたからでした。

1824年の3月31日付けの視学回章と郡委員会の選定によって各郡から2名の教師が4月27日にセン・ルミに召集されました。この回章の目的は近い将来、セン・ルミに師範学校の開設を発表し、奨学金の一部として1000フランを支給するということでした(5)。

54名の教師が召集に応じました。教師と修道者間には密接な関係が自然に生まれました。修道者はその献身のあかしを惜しまなかったからでした。教師全員のため設備が十分でなかったのも修道者たちは自分たちのベットを彼らに提供していたのです。また、休憩時間中も彼らの中に入り、その学校について懇談し、有益な助言をなし、彼らの打ち明ける悩みに耳を傾けていました。こうした親しい談話の中で、すべての過去が教師側ばかりでなく、市町村及び立法府の側にも多くの責任があることが分かりました。ロテア師はその覚え書きで次のように述べました。「小学校の教師たちは色々な市町村で教育に最も不可欠なすや机等が不足していることに不満でした。また、貧しい人々はその子供に教科書を買って与えることも望まない、余りにも教育に無関心だからだと言っていました。」

黙想会初日、ロテア師とカイエ師で別々に行われた講話によって教師たちは大変勇気付けられました。彼らは教育実習のみに従事させられましたが、その中で、ゴーサン士の講話は高く評価されました。その講話は理論的で実践的、しかも詳細に及び、こうして、短い黙想期間中出来る限り教育法の統一が目指されました。5日か6日後、ヴェルニエ師とプリュドム師の二人の教区司牧司祭が訪れ、黙想会第2週は

黙想の静修により直接的に従事させられ、落成した城館の聖堂で説教が行われました。秘蹟に近づくことを望まなかった教師は一人しかいませんでしたが、彼は黙想終結前晩退散していました。他の黙想者の熱気はすばらしく、感謝のTe Deumは感動的で、その思い出はセン・ルミに長く伝えられることになりました。

長い間音信を断ち、シャミナード師を嫌悪していたバルドゥネ師は、「小学校教師の黙想会の試みはあらゆる予想を超えていました」と創立者に書き送り

ました(6)。

バルドゥネ師は今までの沈黙を改め、「シャミナード師の人格に対して感じていた尊敬と自らがマリア会に抱いていた愛着」をシャミナード師に表明する必要を感じたからでした。事実、この日から、フランシュコンテにおける事業の進展は迅速でした。バルドゥネ師は、それ以降好んで、「わたしたちのマリア会、わたしたちの修道会」と呼んで、自らを本会の関係者と見なして本会の普及に熱情を傾けたからでした。

一方、シャミナード師は自らの前に大きく開かれた活動の領域に期待を寄せ、「わたしたちは、わたしたちの死ぬ前に現代のフランス国民の大半をこの黙想という活動で浄化出来るに違いありません。これは何とすばらしい手段でしょう。しかし、これには賢明さとき然とした態度が必要です」とカイエ師に書き送りました(7)。数日後また次のように書き送りました(8)。

「小学校教師の黙想会という活動はわたしたちにはいつも大切なものに思われました。もし一度ブザンソンの大学区を構成する3県(9)の小学校教師をセン・ルミに集めることが出来、また、大学区事務局管轄のすべての初等教育を浄化出来れば、大学と政府はこの黙想会を他の大学区事務局にも導入することに関心を示すに違いありません。ここから、信仰のためにも、また、不幸な祖国のためにもすばらしい善がもたらされるに違いありません。勇敢に働きましょう。神はわたしたちの労苦を祝福して下さいます。この労苦には神の栄光以外に他の理由がないからです。」創立者の計画はすっかり描かれていました。それは出来る限り早くブザンソン大学区に師範学校を設立すること、そして、次年度にドゥー県、オート・ソーヌ県、そして、ジュラの3県に小学校教師の黙想会を準備することでした(10)。

当時フランスでは、師範学校は余り知られていませんでした。1808年の政令でその設立が理論付けられましたが、実際には1811年、ルゼ・マルネジア知事によってストラスブールに設立された1校のみでした。しかし、王政復興の下で自由党の温床や学級委員制度校の本拠になりました。1820年にメッツ近郊のヘルドゥファンジュやバル・ドゥックで繰り返されたストラスブール師範学校の教育に関する試みはルイ18世政府を嫌悪させました。政府は師範学校の教育法が自由党に手を貸すことを恐れてこれを無視しました。1823年に創立者はルアンに師範学校を設立するようキリスト教教育修士会に援助を約束しました。しかし、実際には師範学校は1829年にしか開校されませんでした。したがって、1824年にはすべてが準備中だったのです。

ブザンソンの大司教(11)及び初等教育視察官との合意によって師範学校

設立の趣意書が作成されました(12)。その要旨は次の通りでした。

「セン・ルミの旧城館に修道院が設立されている。そこに一種の神学校ないしは師範学校が設立される。それはその身分にふさわしい徳と知識を備えた若い小学校教師を養成し、この種の教育に献身する修道者を確保出来ない田舎のために優れた小学校教師を育成するためである。本校には、立派な評判のある誠実な家庭出身で、優れた信仰、十分な能力を修得する真の希望を示し、彼ら自身初等教育への献身を意図する家庭の子弟を受け入れる。小学校教師の困難な任務であっても、その重要な責務をふさわしく果たすため必要な活力と熱誠を与えることが出来る靈的な事柄への真の信心と意欲の感覚を鼓吹するため、また、その身分に望まれる様々な知識を獲得させるために何事もおろそかにしてはならない。その教科は次の通りである。国語、書き方、つづり字法、初歩地理、初歩歴史、算数、音楽、クラス管理、規律、内外の秩序の維持手段、競争心のかき立て、授業時間や休憩時間、そして、教会における生徒監督の実施法、礼儀作法と一般に立派な初等教育、キリスト教的教育及び君主制的教育と見なされるすべての事項。必要な研修滞在による十分な知識修得後は、無為閑居を避け、その生活をより容易にする効果的手段を示すために、彼らの任務と両立出来る何らかの業務をその自由時間を利用して学ばせることが出来る。一なお、寄宿費は毎月25フランとする。」

師範学校は6月4日に開校され、生徒はドゥー県の数名の半給費生を含んで20数名を数えました。この師範学校の正規の授業はデジレ・オルディネール視察官によって定められた3箇月で終了しました。シャミナード師は視察官に反対しようとは思いませんでしたが、養成期間が全く不十分であると考えたので、次のように書き送りました(13)。「これらの少年たちを養成するためには3箇月では絶対に不十分です。3箇月では、それ以上残らない者もいるからです。また、3箇月では彼らの間に規律を確立することは絶対に出来ないに違いないからです。更に、3箇月たてば卒業出来るという考えを持つだけでも、彼らが従順になり、素直に指導を受け、学ぶ意欲を持つことさえ妨げるからです。」いずれにしてもその年度にはそのことを了承せざるを得ませんでした。しかし、次年度は養成期間が5箇月になり、次第に正規の在学期間を3年と決めたシャミナード師の理想の期間に近づくようになりました。シャミナード師は更に、「ストラスブールの師範学校では在学期間は4年である」と付け加えました。」

最初の試みはすばらしく成功しました。ドゥー県とオート・ソーヌ県は師範学校と小学校教師の黙想会のための予算を計上しましたが、その額は需要に応ずるほどのものではありませんでしたが、事業の継続の保証にはなりました。新大学区長のカルメル師(14)は師範学校を熱心に擁護し、大学区に師範学校

があることをどんなに喜んでるかをクルーゼ士に伝えました(15)。このことは大学区長次第であったにしても、師範学校の成果は早速ジュラ県にも普及しました。しかし、セン・クロード司教座が復興され、初等教育は1824年の政令によって司教の高度の管轄権に従属することになりました。したがって、ジュラ県には他の師範学校の設立が必要になっていました。いずれにしても、新大学区長は小学校教師の黙想会を奨励したので、1825年にはドゥー県とオート・ソーヌ県で継続的に8月と9月に開催されました。黙想会は主としてカイエ師と教区司牧司祭のヴェルモ師によって指導されました。これらの黙想会も最初の黙想会同様成功し、同時に、マリア会にすばらしい召命をもたらし始めました(16)。他方、師範学校はゴーサン士の優れた指導で生徒数も60名に達していました。

創立者はこの事業を大きな関心をもって継続しました。1825年にはカイエ師をセン・ルミに再度派遣し、次のような指示を与えました(17)。

「セン・ルミで行われている活動の中で、特に二つの活動、すなわち、ドゥー県とオート・ソーヌ県の小学校教師の年の黙想会とそれぞれの県の師範学校がわたしの関心を引くものです。あなた方のこの活動を助けるためにわたし自身もセン・ルミを訪れたいと思っています…。あなたは各2週間ごとに引き続き二つの黙想会を指導しなければなりません、どうぞ自信を持ってください。あなたが指導する200名の小学校教師は、黙想会でくみ取った信仰の精神を200の小教区に持ち帰り、生徒たちにその精神を浸透させるに違いありません。わたしはこの計画のすばらしい効果を考える時深く感謝し、わたしたちにその活動を与えられた御主をたたえずにはおられません。この活動は、信仰においてもモラルにおいても極めて墮落したフランスの刷新を助ける最も単純で最も強力な手段の一つだからです。」

創立者は、カイエ師のパリ旅行中、ポルトン・ダメクール氏(18)によって指導されているキリスト教学校教師協会と接触するようカイエ師に委任し、ダメクール氏について次のように書き送りました(19)。

「わたしが目指している目的が何であるかダメクール氏によく分かっていたいただきたいものです。それはキリスト教信者の増加であり、徳の真の原理を至る所に普及することです。もし、ダメクール師がこのことに注意するなら、わたしたちの師範学校の活動は、自由主義思想を都市から最も離れた田園地帯まで小学校教師によって浸透させるためにダランベールによって描かれた方針とは全く反対であることが分かるに違いありません。確かに、わたしたちの教育する教師は生徒が学ぼうとすることを教えることが出来なければなりません。しかし、実践

によってしかその手段を分からせることが出来ないこともあります。それは徳と信仰によって生徒の心を捕らえなければならない教師の賢明で分別ある熱誠です。」

こうして、創立者は、マリア会の法的認可を政府と正式に交渉していたカイエ師に、政府自体に師範学校に関心を抱かせるよう働きかけることを要請しました。創立者は、「大学区のある所、むしろ、全県にわたってこうした多くの師範学校が設立される」時期の到来を予想していました(20)。そして、更に繰り返して次のようにカイエ師に伝えました。「政府がこれを望み、大いに望む必要があるのです。フランスの出来るだけ迅速な復興のためにもこの活動の重要性を感じさせることを中止してはなりません。」

いずれにしても、創立者は師範学校の教育が最も確実な手段で目的に到達するため様々な方法を改善するよう努力していました。創立者にとっては、信仰の面が基本的な課題でした。何も驚くことはありません。小学校教師の信用は何よりもまずモラリストでなければならないことを望んだからでした。次のように書き送りました(21)。「わたしたちの教師は新生の世代の子供たちに宣教師として送られました。したがって、彼らは子供たちの弱い知性を照らし、発展させ、若い心に徳を養成することが必要です。」

したがって、創立者は様々な条件が以上のような目的への到達にふさわしくないとされた時にはこうした師範学校の創立を認めませんでした。カイエ師に照会され始めていた要請に対して次のように書き送りました(22)。「現役の小学校教師の2週間の年の黙想会と当該教師たちが施設内で宿泊出来るかどうかを検討出来ない限り、師範学校の設立を承諾してはなりません。」創立者は、セン・ルミの師範学校の校長が、生徒に対する信仰の養成に、この養成に含まれる重要性を示していないのではないかと恐れて、次のような言葉でこのことに抗議しました(23)。

「ゴーザン士はマリア会によって経営される師範学校がどうであるべきかがよく分かっていないように思われます。また、生徒たちの勉学を向上させることに全力を尽くして、生徒たちに規則を学ばせ、信仰と徳を養成することにはほとんど専念していないように思われます。知識を授けることがすべてであるなら、わたしたちはこれほど心配するには及ばないと思います。フランスでは少なくとも当分の間、作文や算数の教師が不足することはないに違いありません。」創立者は誠実な少年しか師範学校には入学が許可されていないことを承知していました。その後の趣意書には次のように提示されていました。

「本校への入学の条件は少なくとも17歳であること、これまで、品行方正であ

ったという信頼に値する証明書によって承認されなければならない。激しい欲情、軽率な気持ちでこの年齢で既に墮落した傾向を示し、小学校教師として愛され、要求されるにふさわし資質を修得した少年は極めてまれだからである。」

いずれにしても大切なことは立派な信仰教育を彼らに与えることでした。そこで次のように書き送りました(24)。「宗教は、師範学校で、たとえ他の教科の一部を省かなければならないにしても、最も主要な教科の対象でなければなりません。」教育の方法に関しては、「時代の精神と教師の立場に順応したものでなければなりません(25)。」また、詳細な実践に触れることもちゅうちょせず、次のように指示しました(26)。

「わたしが望むのは信仰のあかしの教育と教義の教育です。わたしたちは田舎の農民にまで、そして、しばしば町の召使いに至るまで理屈を言わせ、むしろ、非常識なことを言わせる時代に来ています。わたしたちの師範学校のすべての生徒はちょっとした理論家、ちょっとした哲学者にさえなる必要があります。彼らは人間的確信のすべての根源を知らなければならないからです(27)。」

世俗的知識によって信仰の持つ重要性が損なわれてはなりません。創立者は次のように書き送りました(28)。

「本会において、わたしたちは信仰、道徳、同時に、芸術や職業のために信頼を得、また、最も限られた範囲に庶民の教育を限定しなければならないとは考えていません。反対に、わたしたちは、今日、知的能力や教育の適切な高度の進展によってしか信仰とこれを原理とする徳を回復することが出来ないのではないかと考えています。」

教科課程は1824年の趣意書に記載されたものでなければなりませんでしたが。しかし、創立者が望んだのは、この教科課程に簿記、測量、法律等を加えることでした。このことについては次のように指示しました(29)。

「要するに、わたしは、これらの師範学校では、彼らの市町村を刷新出来る人物ないしキリスト者を養成したいのです。そのためには彼らが将来その生徒に教えなければならない知識によって、また、その家族に役立つ者に育成する熱誠によって尊敬される教師になることが出来なければなりません。」

このことから、創立者にとっては、少年たちを師範学校に平均3年間修学させること、初等教育の高度の教養を備えた校長を置くことが必要でした。そこで、次のように要請しました(30)。「師範学校の指導者たちは一般に中等教育を受け、概して、初等教育に関する課目で秀でるように努力しなかつたにし

ても、成熟した人でなければなりません。」更に、次のように伝えました(31)。「入学を許可された生徒たちが何らかの優れた教育を受けることが出来なかったとすれば、師範学校の優れた将来の教師を得ることは出来ないに違いありません。」

教育法に関しては、創立者はアジャンで始めた教育法のみで止めました。この教育法が極めて優れているように思われ、詳細にわたって完成することのみが問題だったからでした。実は、創立者はこれを隠そうとはしなかったのですが(32)、その方法はキリスト教教育修士会が長期にわたって決定的に経験した方法と同じだったのです。創立者は教育的な理由というより政治的な理由で強く勧められた学級委員方法の効果のないことは確信していました(33)。いずれにしても、紛争を引き起こすことではなく、自由に活動することを望んだので(34)、また他方、大きな学校ではランカッツル教育法が特定の生徒に焦点を合わせることが優れていたのも、その方法も取り入れることにし、わずかな比率であってもそれをキリスト教教育修士会の教育法に組み合わせることにしました。こうして、この方法を「混合教育法」と名付けました。同一クラスの生徒は10歳から12歳のグループで能力別に分けられ、最優秀の生徒が学級委員の役を務めました。こうした小グループでは、もっぱらある一部の生徒に集中すると同時に、クラス全体にその課題をより迅速に実施させる教師の活動を容易に出来たからでした。こうして、創立者は生涯にわたってこの指導方法を完成させるように努力しました。また、会員には様々な試みを積み重ね、その結果の報告を要求し、そうした教育法の継続的原案の起草に自らの観想を伝えました。創立者が決して態度を変えなかった点は生徒をむち打つ処罰を課してはならないことでした。したがって、会員にはこうした手段によるしつけを絶えず禁じました。

人々は、決して自らの得意分野ではなかった初等教育の領域で活動していた創立者をどのような専門家による評価も邪魔することは出来ませんでした。創立者はこの種の研究を何ら準備したわけではありませんでした。著しい知識の集中力のおかげで、用いるべき方法の重要性を確実に、瞬時に判断することが出来たからでした。ジャコト氏の教育法は大革命の終息時期には一時の流行にしか過ぎませんでした(35)。この教育法は、「肝心なことは全体にある」という奇妙な格言に根ざしており、1、2冊の教科書を使って完全な育成をなすことを主張していました。創立者はこの奇妙なでっ上げを自ら確かめて早速これを排除し、次のように書き送りました(36)。「わたしはこの前パリに立ち寄った時、この特別な教育方法について調べました。この教育方法が適用されているパウル学校の生徒に、この教育法をどこで学びましたかと尋ねてみました。そして、あなたのためにジャコト氏の万能教育法の書を買いました。こ

の教育法を見れば、あなたは学校そのものを見学する気持ちさえ失うに違いありません。」創立者は、フランス語とドイツ語の2箇国語の一斉教授が特別な挑戦を要請していたアルザスの特別なケースに関しても同じ洞察力を発揮しました。2箇国語の知識の観点と生徒の全人教育の観点から、このアルザスのケースを長い間研究してきました。その選択にはあいまいさはなく、二つのすばらしい解決策を示しました。第一の方法は、初級クラスではドイツ語しか教えないことでした。2箇国語のミックスは生徒を混乱させるしかなく、母国語であったドイツ語は彼らの心や精神の育成を教師に容易にさせることが出来たからでした。したがって、高学年でフランス語を教えることになりました。第二の方法は、最下級学年の生徒に至るまでフランス語のみを教え、ドイツ語の学習は後ほどこの知識が必要になった場合に限って、高学年のクラスに追加するということでした。創立者は最も多くの利点を含んでいるように思われた第二の方法を採用するよう指示し、たとえ、当局が反対しても、これに気兼ねすることなく、会員にその適用を要請しました(37)。

セン・ルミの施設は創設後1年もたたないうちに最初のすばらしい成果をもたらしました。師範学校が、この学校の設立が最も強く感じられる時期に開校されたからでした。創立者は、こうした教育法の件に関して、主導権者の評価以外の評価は何も得られませんでした。フランスの庶民教育の推進者としてその中に評価されるべきでした。更に、創立者の率先行動は、この点については次章で触れることとなりますが、早速大きな効果をもたらしました。もし、1830年の革命が創立者の様々な計画を妨害していなかったなら、モラルや信仰の面で大きな成果を上げていたに違いありませんでした。

創立者には、こうしたこと以上に、セン・ルミの共同体の創立から期待するものがありました。マリア会の活動に初等教育が許可された日以来温めていたある計画をそこで実現する希望を抱いていたからでした。その計画は、各地域の需要に直接応ずる職業訓練によって庶民の子弟の育成を補うことでした。この計画は二重の目的をめざしていました。それは、彼らを将来の職業により効果的に、より迅速に訓練すること、そして、教師たちによって指導される信仰及びモラルの指導に何年か従事させることでした。

職業教育の考えは新しいものではありませんでした。特に、ドゥ・セン・ピエール師以来多くの教育家がこれを評価していたからでした。しかし、彼らの中でも有名なスイスの教育家ペスタロッチが試みたように、その実践を試みた者はわずかでした。ところが、創立者は、2種類の教科課程を描いていました。一つは、創立者が、「真の工芸学校」と呼んだ最も高度で特別な職業教育を目指したより徹底した教科課程でした。他は、1816年2月29日の政令で「上級課程の

学校」の名称の下に認可された初等学校のそれぞれに加えられた最も単純でポピュラーな教科課程でした。創立者がその独創性を示したのはこの第二の教科課程でした。この教科課程、あるいは作業場を提供する学校を「併設校」と呼び、その最初の草案を1825年に決定し、政府の認可を得るために次のような趣意書を提出しました。

「これらの学校は実習校となり、特に、実施させるのは一般に農作業、園芸、各種の地域経済や地域的な技芸が教えられる。彼らは農耕に従事し、農夫の生活の需要に従事するからである。小学校及び併設校の教師の主要目的はそこに入学する子供たちを、彼らの境遇を越えた野望や野心を抱かせることなく、農業や工業、また、商業に従事する者に育成することである。そのためには、就職が限られ、成功の可能性が少ない高度の職業を苦勞して習得するより、両親によって教えられた技能により優れた方が望ましいという原則をすべての生徒に絶えず想起させなければならない。」そして更に、「併設学校で試みられる実習がどうであれ、ある時間、ある曜日を交互に、純粋に初等教育に属する教科を履修させることに専念しなければならない。」

以上が創立者がセン・ルミの施設の創立以前から抱いていた構想でした。ダヴィド士はアジャンに罪人のより所の聖母修道院の庭園の奥にあった一軒の家屋をこうした作業場に予定していましたが、そこには上級学校が開設され、併設校の試みが提案されていました。しかし、資金と教師の不足からその実施は延期されなければなりませんでした。創立者はセン・ルミへの教師の準備に着手しました。作業所には必要な設備が施されましたが、それも少しずつ整えられなければなりませんでした。そこで最も成功したのは錠前師の部門でした。

やがて、セン・ルミは最適の実習農園になりました。創立者の当初の構想の一つは、ここに地域の職業を目指した特別の職業学校を設立することと、師範学校の外に併設校の教師を育成出来ることでした。ダヴィド士がこの件に関する固有の計画を提示した手紙に創立者は次のように回答しました(38)。

「初等教育への工芸の連携はすばらしい成果を生むに違いありません。そして、このことは少年たちに信仰を普及することがわたしたちには極めて容易になります。」そして更に、「都市に持っている小学校では、職業実習のために出掛ける子供たちを悪の腐敗から予防することは困難ですが、ここではその予防手段を見いだすことが出来るに違いありません。」と付け加えました。

他の事業同様、このセン・ルミの事業を中止させた唯一の障害は資金の不足でした。オート・ソーヌ県の知事、ドゥ・フランカ伯爵は資金を探しだして計画の実施に創立者に協力しようとしていました(39)。しかし、なお数年間待たなければ

なりません。知事の善意もこの事業に必要な資金を提供するはずの県会議の無気力さに遭遇したからでした。

やがて、1826年に、この計画は他の地域で極めて大きな規模で実施されようとしていました。創立者は、聖ヨゼフ修道会がローワンプリュック師の指導の下に、ヴェルサイに創立したばかりの大きな実習施設の指導を依頼されました(40)。この実習施設は各種職業の見習工養成の学校で、設備は完備され、政府によって援助されていました。この要請は成立しませんでした。創立者は会員を直ちに派遣出来なかったからでした。また、純粹に農業高校を設立する他の提案が北部から寄せられました。それはアミアンで農村孤児院を試んでいたドゥ・レヌヴィル氏からでした。この提案もまた資金不足と創立委員メンバーの相互理解の不足から失敗に帰しました。

この間、セン・ルミではクルーゼ士の巧妙な才覚による資金集めによって施設と人材が徐々に整えられていました。創立者は細々としてではありましたが、不屈の忍耐力をもって活動を開始し、1830年には既に幾つかの実習所を設置し、一つの農業学校の設立を計画していました。その特別な人材に関しては1827年から数名の会員を派遣することが出来ました。それはセン・ルミが発点となった多くの施設の創立の最初の創立、そして、マリア会が意図した事業の中で職業学校の性格を持つことが出来る最初の学校を設立するためでした。

ブザンソンのセン・ジャック病院経営の修道会は貧しい孤児たちを収容し、彼らに各種の職業を手ほどきしていました。院長は外でもなく司教総代理のタレン師の姉妹でした。彼女はバルドゥネ師やマリア会との関係で、セン・ルミの修道者たちにこれらの孤児を委託したい考えを提案していました。彼女は修道者たちの献身を知っていたからでした。彼女はこの件を創立者にも要請したので、創立者はこれを早速引き受けました。それはこの事業が次の二重の意味で魅力を感じたからでした。それは貧しい人を助けるためであり、また、セン・ジャックの病院に最初の工芸学校の設立を試みるためでした。そこで、セン・ルミのクルーゼ士にこの件に関して次のように書き送りました(41)。

「マリア会がブザンソンのこの施設をその精神を損なうことなしに引き受けることが出来るよう配慮してください。わたしの考えでは、この施設は幾つかの都市で、特に、パリで必要とされているこの種のその他の施設の目標やモデルになるに違いないからです。」

事実、この施設には衣類、織物、木工等の職業上の設備がありました。事情に通じた人々の次のような話しを聞いて判断するにしても腹立たしいに違い

ありません(42)。

「この施設がどのような混乱、腐敗の状態にあったかを述べることは困難であるに違いありません。反抗、暴力、盗み、ののしり、そして特に、みだらな悪習が子供たちの間に横行していました。彼らを監督していた在俗教師は彼らの統制のため、むち、足かせ、彼らを矯正するより彼らを愚か者にするようなこの種の無数の他の処罰を加えることを余儀なくされていました。」

様々な優れた意欲を落胆させる理由があり、この手に負えない子供のグループを指導する任務を負わされた修道者たちは成功をあきらめなければならなかったからでした。院長は後ほど次のように語りました(43)。

「最も善良な孤児たちも誠に残念な習慣を持っていました。彼らはわたしたちを毒殺する計画を抱いていました。み摂理のおぼし召しによってクルーゼ士が突然わたしたちを訪れた時でしたか、わたしたちは職場を放棄しようとさえ考えていました。士は、聖ヴェンサン・ドゥ・ポールが愛徳会の修道女たちになした逸話を思い出させるような話をして下さいました。わたしたちは感動して、この気の毒な孤児たちを放棄しない決心をしました。」

こうした寛大な献身は次の覚え書きに見られるように首尾よく報われました(44)。

「修道者たちは殴打や下手な指導の代わりに、体面、理性、そして特に、信仰心に訴えました。彼らはこうした方法がより優れた、より有益な効果をもたらすに違いないと考えたからでした。やがて、悪は徳に代わりました。この時から救済院管理委員会は信仰が人々の心に浸透する時、その影響がいかに大きいかを理解しました。」

こうして最初の職業教育学校がスタートしました。その後この学校はブザンソンの近郊に移されて最近まで存続していました。

様々な反対と、最も期待はずれの幻滅の中で計画されたセン・ルミの事業も、創立者の期待通り少なくとも4年後には日々発展するすばらしい活動のスタート台に立っていました。そして、この時から既に教育の分野に限ってではありましたが、マリア会は社会のほとんどすべての階層に照会されていました。

したがって、あらゆる種類の必要に備えなければならなくなりました。創立者は次のように書き送りました(45)。「自由主義精神はあらゆる種類の手段を極めて巧妙に利用してあらゆる年齢の人々、あらゆる境遇の人々、そして、すべての男女を堕落させています。したがって、わたしたちは様々な事業に献身し、

その活動を十分実践出来るにふさわしい人々を育成し、また、育成させています。」



注

(1) 「フランスにおける初等教育の年表」のタイトルで1837年に公表されたもので、コンペレ氏によって「教育学史」にまとめられたものです。2巻、439ページ。

(2) 1822年4月2日、ロテア士からシャミナード師への手紙

(3) 1825年1月4日、ストラスブールの大司教へ

(4) 826年2月4日、メルシアン師へ

(5) 回章は次のように始められていました。「1822年6月1日付けで皆様に届けた回章3号の終わりに、小学校教師の刷新とその指導の下にあった学校の改善のため、久しい以前から作成されていた計画を発表致しました。問題は、地域の小学校教師を交互に召集することを望んでいる黙想会の開催の件です。黙想会において、信心の意向を彼らの心に刷新することを目指す宗教上の修業は、教育の完成を目的とする他の領域の刷新にも適用されるからです。また、学校における宣教共同体はこの黙想会を効果的にする最もふさわしい場所のように思われるからです。万一の場合は、オート・ソーヌ県のアマンス郡にあるセン・ルミのすばらしい施設で黙想会を開催することが出来ます。黙想者は修道院に住む敬けんな修道者の影響下に集められます。彼らは小学校教師を養成する主要目的を持っているからです。また、教区の司牧司祭たちの指導の下に宗教的修業が立派に行われるからです。

(6) 1824年5月18日

(7) 1824年5月17日

(8) 1824年5月31日

(9) ドゥー県、オート・ソーヌ県、ジュラ県

(10) 1824年6月29日、カイエ師へ

(11) 1824年4月8日の政令によって、教区の初等教育の直接責任者に任ぜられたドゥ・ヴルフランコン司教は、1824年4月8日の回章によって、セン・ルミの師範学校と小学校教師の黙想会を明確に要請しました。

(12) 1824年6月18日

(13) 1824年7月、クルーゼ士へ、(1824年5月17日、カイエ師への誤りでは)

(14) デジレ・オルディネール氏はストラスブール大学の学長に任命されました。

(15) 1825年3月14日

(16) 1827年の黙想会でラベという小学校教師の一人は奇跡とも見られるような病気の回復の恵みを頂き、大きな評判になりました。

(17) 1825年4月7日

(18) アントワン・ドゥ・ポントン・ダメクール氏はパリのコングレガシオンで少年の教育活動に献身していました。グランメゾン著、「ラ・コングレガシオン」、152ページ

(19) 1825年6月28日、カイエ師へ

(20) 1825年5月14日、カイエ師へ

(21) 1831年7月5日、ララン師へ

(22) 1825年9月15日、セン・クロードやナンシーに開校するはずの師範学校の件についてでした。

(23) 1829年12月30日、ララン師へ

(24) 1830年2月15日、ララン師へ

(25) 同上

(26) 1830年1月15日、ララン師へ

(27) 1830年2月22日、ララン師へ。シャミナード師は次のような表題の著書を手引書として要請しました。「感性豊かな理論作家による信仰の原理あるいは宗教哲学の原理と一致した健全な哲学原理」。創立者は、「最も新しい著書ではあっても、最も教育的著書は少ない」と書き送りました。この著書の作家はイエズス会士のフランソワ・パラ・ドゥ・ファンジャス師(1724-1797)で、この著書はその後ミーン叢書10巻に「福音の証明」として再版されるほど評価されました。

(28) 上級学校入学準備モデル校の趣意書

(29) 1830年3月31日、ララン師へ

(30) 1831年9月29日、ララン師へ

(31) 1825年7月21日、カイエ師へ

(32) 1829年3月26日、クルーゼ士へ、「要するに本会の教育は一斉授業です。」

(33) オクタヴ・グラアル氏はその著書「初等教育と教育、訓練」の35ページ以降に歴史的、教育的観点からクラス委員会による教育法の問題を見事に取り扱いました。

(34) (1830年11月22日、シャミナード師からクルーゼ士へ)。「例えば、アジャンでは、1830年の運動以来学校は安泰でした。しかし、マルマンドゥで、キリスト教教育修士会はクラス委員会による教育法に反対したという理由で追放されました。」

(35) コンペレ著、「教育史」、11巻、445ページ参照

(36) 1829年12月4日、ララン師へ

(37) 1830年12月30日、ロテア士へ

(38) 1823年4月10日

(39) 1826年7月13日、シャミナード師から知事へ

(40) 聖ヨゼフ修道会はフランスの教区司牧司祭によって1822年に、労働者の保護と就職のために来ていた地方の研修生を保護するために創立されました。彼らはやがて自ら作業場を設けました。ジョフロワ・ドゥ・グランメゾン著、「ラ・コングレガシオン」、212ページ以降参照。

(41) 1826年11月6日

(42) ゼルマン士の自筆の覚え書き

(43) サルモン士の自筆の覚え書き。この優れた修道者は、生涯最も優れた徳の香りの思い出を残し、1886年に帰天しました。

(44) ゼルマン士の自筆の覚え書き

(45) 1824年6月11日、ブリョイヨ師へ

第 30 章 マリア会の法的認可とその使命 (1825)

公式承認の危険性 ❖ 承認申請 ❖ 規約 ❖ フレッシュヌー司教の好意
❖ 公教育審議会の規定 ❖ 国務院の規定 ❖ 11月16日の国王令 ❖
保護下のマリア会の使命 ❖ 各種合併の提案、ノアイ師—ブエ師 ❖ 各種
修道会の初等教育 ❖ キリスト教教育修士会との合併の提案 ❖ フレジャ
ル師やバイヤル兄弟との折衝。

当時、マリア会はコングレガシオンの活動は別として教育活動に全力を傾注していました。ところが、政府はこの教育事業の特典に対して不快感を抱いていました。例えば、ナポレオンは教育の権限は国にあると見なしてその特権の行使を主張しました。したがって、教育に携わるすべての団体は国との合意が成立しない限り必然的に困難に遭遇することになりました。

シャミナード師は、ロッテ・ガロンヌ県に小学校の普及を要請された時こうした障害に直面する経験をしました。ヴィルヌーヴ市が公立の小学校と中学校をマリア会に委託することを提案した時、当局の係官は新設校が政府によって認可されたかどうかを問い合わせてきました。そのためシャミナード師は必要な手続きを踏むことを約束しなければなりませんでした。セン・ルミの師範学校が開校されたのはそれからしばらくしてからでした。オート・ソーヌ県の県議会は師範学校のために3000フランの補助金の支出を採択しました。ところが、内務大臣は、政府はこのように優遇された学校は認可していないことを口実に、県のこの補助金の項目を削除しました。

シャミナード師はマリア会を創立した当時、政府に会の認可を申請しないことをはっきり考えていました。常に市民権を尊重していたので、政府に不快感を抱かせることがどのような理由であっても、政府と話し合いをする意向はありませんでした。また、政府に服従すること、いつか宣教活動の自由を取り下げることが契約することに耳を貸そうとはしませんでした。当局が下す認可の契約には不信を抱いていたからでした。そこで、次のように注意するよう書き送りました(1)。「問題はその種々の学校を援助するためではなく、その活動を規制し、これを止めさせるか、あるいは、少なくとも自分たちの考えにしたがって出来る限りそれらの学校を管理するためです。」シャミナード師はマリア会の創立に先立つ談話の中で、最初の弟子たちに対してこうして実情を説明していました(2)。ダヴィド士はこうした考えに勇気づけられ、マリア会は慣習法の範囲内で学校

が設立出来ることを確信していました。優れた弁護士であったダヴィド士が司祭の高等中学校と信徒修道者の高等中学校を分離することを考えていたのはこうした目的のためでした。しかし、創立者はこのことを決して許可しませんでした。ダヴィド士の計画によれば、「信徒修道者は自らと司祭とために、もっぱら学校の現業活動に専念すべきである」ということ、また、全財産の保持に関しては、この種の組織の関係法の規定に厳密に適合する包括的な共同体を確立しなければならないということでした(3)。この計画は明確にされなければなりませんでした。そこで、創立者はこの件に関して次のように説明しました(4)。「この草案を苦勞して作成したのはダヴィド士でした(1823年8月)。わたしはこの草案を県の局長の一人に厳密に検討していただきました。彼は、民法に宗教団体が含まれることが出来るなど思ってもいませんでしたと率直に話していました。」「本会は国法に抵触することは何も行っておらず、政府とは特別なかわりなど何もありません。したがって、国法が尊重される限り本会が解散させられることはあり得ません(5)。」

創立者は政府がひたすら保留することを主張する教育の分野で政府と対立したり、政府との連携を変更しなければならないことなど考えませんでした。考えたのはそれぞれの学校に対する必要な政府の認可であり、学校を運営する教職員の生き方ではありませんでした。したがって、本会の会憲や内部の運営とは無関係で、もっぱら会の事業のみの認可を受けることしか考えませんでした。創立者はヴィルヌーヴに学校を設立する折りに、活動の中心がアジャンで、本部がボルドーにあった「無償学校」の認可を目指して、その申請の準備をダヴィド士に委任しました(6)。様々な心勞とセン・ルミの事業のことで苦しんでいたダヴィド士は1年間その申請を見送り、この間、師範学校の認可を申請しようとしていました。

それは、「デルモポリス司教が宗務大臣兼文部大臣に昇進されたことによって、政治的展望が多少明るくなって来たように思われた時期でした(7)。」そこで、創立者は申請業務をこれ以上延期しないようダヴィド士に促し、次のように書き送りました(8)。「今日わたしたちは、申請した事項の認可を最も容易に取得出来る時期にあるように思われます。それは、政府が有能なすべての学校に対して好意を示している唯一の例外的な時期であるように思われるからです。」なお、その申請を急がせた理由は外にもありました。それは、若い会員の兵役義務に大変困惑していたからでした。特に、彼らはその初期教育期間中に兵役の義務に服したからでした。もし、マリア会が政府から法人格の認可を取得出来れば、1818年3月10日の法律を会員に適用出来るからでした。それは、小学校教育への10年間の勤務によって兵役の義務が免除されることでした。

しかし、第二の目標達成は困難になっていました。それは、本会の事業のみに触れて本会自体については触れていなかったからでした。創立者は希望していた特典が要請出来る場合に限って、本会を交渉の場に引き出すことを決意していました。それは、かねてから次のように書き送っていたからでした(9)。「マリア会は絶対に認可を必要としているわけではありません。本会の存在、組織、そして、活動は少しも法律に反していないからです。実のところ、会が望んでいる認可は事業に関してで、会自体ではありません。」したがって、政府に提出しようとしていた請願書には事業のみを明確にするよう努力しました。本会自体の組織はほとんど示しませんでした。本会は一般の組織に関する法律の規定に合致していることを明確にしました。分離や除外に関する事項については一般の市民団体の規定に従いました。他方、政府によって特に認可が求められることを承知していた事業、すなわち、小学校、工芸学校、そして、師範学校については詳細に説明しました。

王政復興政府は、その時点まで、初等教育の利益と1816年2月29日の法令に基づくものでなければ、どのような男子修道会もこれを許可しなかったからでした。法令第36条は次の通りでした。「いかなる宗教団体、慈善団体であっても、当該団体が政府によって認可され、使用する規則や教育法が公教育委員会によって認められれば、適切な条件の下に教師を要請する市町村に教師を派遣することが認められる。」創立者はこの法令自体を引き合いにし、申請した許可を得るために本会が献身し、最も特徴的な活動を確立していた初等教育事業を利用することにしました。いずれにしても、この点のみを強調して、本会の真の性格を決して秘密にしようとはしませんでした。政府に提出した本会の規約には、本会の基本的構成要因としての司祭、中等教育、コングレガシオン、小学校教師の黙想会を明確に記載し、総長は常に司祭の中から選出されなければならないことを明示しました。こうした誠実さは軽率のようにも思われましたが、創立者は、「不安の中にも認可を申請したのは、『止むに止まれない気持ちからでした』」と述懐しました(10)。

49箇条にわたる請願書の案文は1924年末には用意されていました。しかし、ルイ18世の逝去(1824年9月)のためその提出は延期されました。創立者は、次の春、パリでの困難な申請業務の実施の使命をカイエ師に委任しました。カイエ師は、国王への嘆願書や多くの推薦状を持参して1825年4月にパリに赴きました。これらの推薦状は、司教方(11)や概して本会が活動している地域のそれぞれの当局からのものでした。ロッテ・ガロヌ県の県議会は1823年6月8日の会議で、マリア会に関して、次のように政府に促す決議文を発表していました。「適切な規律を回復し、信仰の原理を基本にした青少年の教育が、幾つかの上級学校を不和の温床にし、新たな革命が迫っているといって社会を

おびやかす信仰無関心と不信仰の精神を抑制するため、教育修道会を復興させ、既に存在する教育修道会を助成し、新しい教育修道会の創立を奨励するよう要請する。」

ロッセ・ガロヌ県の県知事は、1825年4月21日付けで、次のような感動的な賞賛状を送付してきていました。「この修道会がもたらした善は正に驚くべきものであり、教師の規律的な行動は教訓的で、生徒の教育法も完ぺきであると心から申し上げたい。」また、ストラズブールやブザンソンの大学区長、そして、ドゥー県知事やオート・ソーヌ県知事等、フランス北部地方からの推薦状も賞賛に満ちたものでした。創立者には、更に推薦状が必要になれば、パリには、あらゆる試練時の協力者の有力な友人、そして、社会の第一線には、ドゥ・モンモランシー公爵、アレクシス・ドゥ・ノアイ伯爵がいました。しかし、その影響は控え目にしか利用しませんでした(12)。創立者は、当然、所管に属する方々、すなわち、宗務省局長ドゥ・ラシャペル師、宗務大臣フレッシュャー司教の手にその申請を単純に委ねました。

宗務大臣フレッシュャー司教からは全面的な好意が保証されていました。同司教が1816年にボルドーに数週間滞在された時以来個人的にも親しい間柄になっていたからでした。それは、大司教館で同司教と数回面会し、それからずっと通信し会っていたからでした。創立者はカイエ師を大臣の司教に紹介して、その申請の使命をありのままに書き送りました(13)。このことについてラン師は次のように語りました(14)。

「デルモポリス名義司教への好意と信頼がカイエ師を大変勇気づけました。カイエ師にとって不利になるように思われたことがかえって役立つようになったのは、世事の処理の不慣れ、内気、人前での気後れ、長上に対して抱いていた完全な服従であったと言いたい。単なる宮廷人ではなかった大臣の司教は、カイエ師の司祭修道者としての性格を評価しました。また、司教は気の毒なカイエ師を親切に歓待し、勇気づけ、彼をくつろがせるために食事を共にし、出来る限り創立者の考えを理解するようにしました。」

49箇条の案件の国王令による認可を得ることは容易なことではありませんでした。宗務大臣の善意にもかかわらず、その権限が公教育委員会の意見によって、また、自由主義学院、あるいは、少なくとも、ガリア主義を広範に代表していた國務院の意見に制限されていたからでした。しかし、創立者は困難を除去するために本会を誠実に紹介したことにかけました。次のように書き送りました(15)。「わたしたちが表明している質朴さや素朴さ、そして、熱誠さは、わたしたちが使うべく学んだいかなる美辞麗句より効果をもたらすに違いないことを期

待しています。」しかし、宗務大臣は申請簡条の中で本質的でない条項、そして特に、信仰に対する恐ろしい自由主義者たちにその名前が知られるようになった今日のコングレガシオンにせよ、更に、かつてないほど大学の特権に愛着し、公教育審議会の自尊心を刺激した中等教育にせよ、申請書に記載することが極めて不用意に思われた条項を削除することが申請条項の認可を留意にすることをカイエ師にほのめかしました。これらの宣教活動の形式は禁止されてはいませんでした。現時点で政府は、直接に、そして、明確に認可出来る唯一の事業の初等教育についてしか触れなかったからでした。こうして、49箇条の申請条項を21箇条に縮小しなければならなくなりました。認可許可書の第1条には、「マリア会は特に初等教育に献身する」と簡単に記載されていました。

創立者はカイエ師の申請手続きが軽率ではなかったと考えて、多少心配していました。ちょうど聖霊降臨の祝日に、マドレーヌの習慣に従って聖霊の賜物のくじ引きをしました。シャミナード師は極めて都合よく賢慮の賜物を、そして、その果実として偶然に忍耐を引き当てました。オギュスト士やカイエ師も同様に賢慮の賜物と忍耐の果実でした(16)。

国王の聖別式典祭の間(17)、1ヶ月近く申請の手続きが遅れていたため、創立者は遭遇していた重要な局面において神が導いて下さるよう絶えず祈り、また、会員にも祈らせました。時々下院の討議を聞き、そこで修道会が審議の対象になっていたことに不信感を覚え、このように審議が勧められることを残念に思い、また、フラシーヌ司教が女子修道会の修道女の地位を規制していた教会法をあえて提出されたことに驚いていました。そこで次のように書き送りました(18)。「今日の政府はカトリックに関する立法に関してはボナパルトの政府以上のことを望んではいません。したがって、政府自体がカトリックの精神になることを待ち、そうして彼らのメンタリティを想定した何らかの法律を提出する方がよいのではないのでしょうか。キリスト教の真の精神を回復することを目的にした本会の存在を政府に認可させることはすばらしいことではないのでしょうか。」しかし、申請手続きは再開されていました。神のみ旨がこのことを押し進められたのだと信じました。そこで次のようにカイエ師に書き送りました(19)。「どうぞ心配しないでください。わたしたちも心配してはいません。すべては神のみ手の内にあることですから。」いずれにしても、申請書類は7月5日に公教育審議委員会に渡されていました。

審議会からの好意は余り期待されませんでした。そこで、創立者は次のように書き送りました(20)。「公教育審議委員会の意見がわたしたちにとって全く好意的でないにしても、国務院はこれを無視することが出来るに違いありませ

ん。すべては御主と至聖なる乙女マリアのみ手に委ねられています。」果たして、審議会は宗務大臣が提案した削除より抜本的な削除を要請してきました。本会における司祭の役割の何らかの根拠を条項の中に残すため、宗務大臣自ら作成された条項も削除されました。したがって、本会は小学校教師の黙想会、聖職者の育成施設について触れてはならなくなりました。本会が従事出来る事業は大学の黙認した初等教育のみになりました。

創立者は、大半の申請箇条の削除については、「余り驚かれず」、その削除も決定的なものでないに違いないと考え、次のように付け加えました(21)。「これらの条項はマリア会がその組織の目的に到達するために必要な事項です。公教育審議委員会の委員がそのことを望まないばかりか、本会がその目的を達成することを恐れているからだと思います。」数日後また次のように書き送りました(22)。「もし、削除が厳密に行われることになれば、マリア会は変質されてしまうに違いありません。もちろん、柔軟さは必要です。しかし、わたしたちはこれほど多くの条項の草案を改訂してきたわけですから、柔軟性に欠けることにはなりません。わたしたちは、会の性格を厳密に変えないことにはすべて同意しました。しかし、本会の性格でないものには同意出来ません。」

審議が国務院に移された時、なお最悪の事態が起きました。創立者が避けることを望んでいた問題、すなわち、男子修道会の法的存在の問題が提起されたからでした。習慣法の権利を回復しようとしたが無駄でした。政府が習慣法の適用を修道会に認めないことを主張していたからでした。ナポレオンは共和歴12年第10月3日の政令によって習慣法を自ら査証する条件で、修道会認可の権利を政府に与えたばかりでなく、なお、1817年1月2日の最新の法律は、いかなる教会の施設においても市民権が認められるためには法律行為が必要であることを宣言していたからでした。創立者は、「わたしたちが要請している第6条(マリア会は一般団体であると述べられていた)及び規約全体に提示されている事業を実施出来る件については決して認可され得ないものではありません。法律が認可していることを要請する考えをどうして持つことが出来ないのでしょうか」と抗議しましたが無駄でした。このことは確かに法律が他のすべての団体に許可することを政府が修道会に拒否することになるからでした。

国務院は、一般団体の現在までの全財産に関して規約で言及することは問題である。ただし、一般団体の将来の収益は別である、すなわち、以前の財産を共同体の財産とする権利は認められない。ただ認められるのは将来修道会に入る収益のみである、ということをや要請してきました。学者のキュヴィエ氏が修道者の市民権を禁止することに熱心であることが伺われましたが、彼は自ら

がプロテスタントであった時のことを想起し、その票決時の自らの票が特に重要だったからでした。また、彼は公教育委員会委員と国務院の委員でもあったからでした。更に、彼は国務院の委員として公教育審議委員会が削除した規約条項に何らかの疑わしい事項さえ見いだしたとさえ主張しました。それは司祭についての条項でした。彼はイエズス会の名を挙げ、小なるマリア会はその後ろに隠された怪しい修道会であるとさえ断言しました。こうした疑惑の目で見られたことに驚いた創立者は次のように書き送りました(23)。

「わたしたちは本会の組織内容を極めて明確に示しています。本会はありのままにさらけ出されました。わたしたちは恐れられているのでしょうか。正直に政府と対処することは罰されることでしょうか。マリア会に対して抱こうとする子供じみた恐れに対して国務院を安心させなければなりません。彼らの疑いやその動機について、わたしが子供じみたと言ったのは、例えば、わたしたちがイエズス会員の仲間であること、ボルドーにはわたしの創立したコングレガシオンがあるからだというようなことでした。イエズス会とマリア会の間にもどのような種類の関係が見いだされたのでしょうか。両修道会ともカトリック教を教えるという関係以外の関係は見いだされません。コングレガシオンに関しては次の一言しか答えられません。すなわち、ボルドーのコングレガシオンはパリのコングレガシオンより古く、相互の慣例や活動の実践は全く異なっており、そして、指導者間にはあらかじめ何の連絡もなかったということです。コングレガシオンという名称だけで思い違いをしたのかも知れません。しかし、一つの共通語にこだわってこのような重要な問題に関して、そこから結論を引き出そうとすることは子供じみてはいないでしょうか。」

かつてないほど心配した創立者はカイエ師に次のように指示しました。

「あなたの様々な意見具申にもかかわらず、国務院が無条件に規約を承認しなかった場合は、そのことをわたしに知らせることなしにあなたは同意しないでください。このようにばらばらにされたかわしそうな規約が国王の裁可を受けないよう出来る限りのことをしてください。実際はたとえ認可されたにしてもそれは真のマリア会ではなくなるからです。」

創立者は、ベッリエ氏やビルコック氏のような優れた法律学者によって保証されるなら、国務院が法律上の慣例に忠実に従う場合、また、修道会を統制する政府と和解しなければならない場合は、こうした処置には反対を強く主張しないようにしていました。創立者は公教育審議委員会によって以前に要請された修正に余り驚かないよう告げられ、また、初等教育以外の事項が認可出来ないのは形式上の立場であるという政府の善意が保証されました。こうして、

マリア会はその組織、事業に関しても修正されないこと、また、要求された削除や変更は全く形式上のことであることが保証されました。なお、「マリア会は特に初等教育に献身する」という第1条項の「特に」の語の削除にも同意しました。更に、マリア会は司祭修道者と信徒修道者で組織されているということを含めて、本会の総長はマリア会の中で、マリア会によって任命された司祭でなければならないことが認められました。また、事業に関しては、特に信徒修道者であった者、あるいは中等教育にたずさわった者は除外されませんでした。これらの事項に触れられなかったことで満足しました。

シャミナード師は2箇月間規約の擁護のために徐々に抗議していきました。規約申請の手続きが最終段階に達した時、申請事項が必ずしも許可されなかったにもかかわらず、み摂理が少なくも期待していた結果と同じような結果を与えて下さったことを心から感謝して、パリの申請委任者カイエ師に次のように書き送りました(24)。「イエスとマリアのみ名を一緒にたたえましょう。『*Sit nomen Jesu benedictum, sit nomen Mariæ benedictum ! In te, Domine, in te, Domina, speravi, non confundar in æternum.*』(イエスのみ名はたたえられますように。マリアのみ名はたたえられますように。主よ、わたしはあなたに望みをかけました。御母よ、わたしはあなたに望みをかけました。とこしえにろうばいすることはありません。)」それから数日後、「わたしは至聖なる乙女マリアが小さな本会に特別な関心を示して下さっていることを数日前から感じていました」と書き送りました(25)。

創立者は、公教育審議委員会と国務院によって示された指針に基づいて削除された19箇条を、規約上の正確な表現で、宗務大臣との合意の下に決定しました。規約は10月26日シャミナード師によって署名され、次に、宗務大臣によって副署され、1825年11月16日付けの国王令が添付されました。この規約はあらゆる点で1816年2月29日の政令以来各男子修道会を認可するために用いられた条件を完全に含むものでした(26)。

この法律上の承認は創立者により容易に善の実施を可能にしたばかりでなく、恐れられていた様々な束縛を引き起こさないことになりました。マリア会全体として、また、詳細にわたって承認した政府は規約にも、規則にも記載されていなかった事業には少しも反対しなかったからでした。かえって、認可書類への署名直後、公教育審議委員会はブザンソンの大学区長のカルメル師の要請によって、ドゥ・グレーの高等中学校の指導のため司祭一人を、同時に、コリノー師がヴィルヌーヴの高等中学校を指導することを創立者に要請するほどでした。宗務大臣の政策は大学にキリスト教教授を導入すること、私立学校そのものが健全であること、必要な場合はスタッフも変更しなければならないこと

があることを納得させることでした。こうして、宗務大臣はこの提案に基づいて、マリア会の会憲は政府によって認可され、同時に、今日出来る限り明確な形で法的に承認されたことを創立者に伝えました。創立者は規約認可の様々な手続きに関して重要な役割を演じた正直さや誠実さを後悔することはありませんでした。

この日から創立者は規約に従って総長の肩書きを使用し、霊生局長、教育局長、財務局長等、それぞれの肩書きを持ったコリノー師、ララン師、及び、オギュスト士で構成した総長評議員会を設定しました。また、ダヴィド士を総書記の職に選んだこと、その職を受けるかどうかを確かめたいこと、そして、規約認可に対する様々な印象とその認可のため一応は満足していることを要約して、ダヴィド士に次のように書き送りました(27)。

「勇気を出してください。御主と尊い御母がわたしたちと共におられるからです。国王令は極めて不本意なものでしたが、また、わたしたちはある点で政府や大学にさえ従わなければなりません、わたしはこのことを不利益なもののように見なすことは出来ません。この不幸な祖国のために、神が信仰のためになされた恩恵と見なしたいと思います。わたしたちがしなければならないことは、神のみ旨に従って行動することです。規約は多少修正されましたが、市民生活の領域、あるいは、教会の領域においても要請されることに何らの障害もありません。わたしは規約の認可を受けることになった当初からこのことには常に注意を払っていました。」そして、「わたしは勇気が増したように思います。『*Omnia ad majorem Dei gloriam Virjinisque Dei para*』(すべては神と神の御母である乙女マリアの最大の光栄のために)」。

換言すれば、創立者は規約の承認は現実的な利益をもたらしたと考え、み摂理に感謝しなければなりませんでした。それは規約の削除が恐れられていた並はずれの結果をもたらすことがなかったからでした。創立者が必死になって戦ったのはマリア会の固有の目的、組織、使命等に関する何らかの改悪に対してでした。創立者は基本的な点で勝利を収めたわけでした。すなわち、マリア会は法的認可後も以前のあるがままの形で存続することが出来たからでした。今後は以前のように、マリア会は、言わば、教育修道会、まして、初等教育修道会ではなくなり、キリスト信者の増加を主要目的として追求する男子宣教修道会、創立者の好まれた言葉によれば、「宣教」修道会となったのです。本会が採用することになる他のすべての活動同様、教育活動は本会の目的達成のための一つの手段でしかありません。創立者は今後も以前のように次に教えることが出来ました(28)。

「あなた方は真の宣教師です。青少年の教育はそれがどのようなものであろうと、確かなことは、いと尊きマリアのご保護の下に神に全的奉獻をなすことによつてあなた方が意図したはずの目的ではありません。教育はわたしたちの使命を果たすために用いられる一つ的手段、すなわち、至る所に信仰の精神を広め、キリスト者を増加するための手段に過ぎません。わたしたちが科学や技術を教えるのは同時に救いの知識を教えるためでしかありません。あなた方は皆宣教師です。その使命を果たしてください。」

マリア会は法的認可が与えられた時、創立者の考えを明らかに表明する詳細な会憲を持っていませんでした。このため、マリア会内部への規約の公表を延期することにしました。総長評議員会の意見も同様でした。それは、総長同様、認可された規約が会員を動揺させははしないかと不安になったからでした。また、規約にはマリア会が未完成な形で示されていたので、認可申請の業務にたずさわらなかつた人々は、修道会の本質が修正されたと考えるように誘発されるに違いないからでした。そこで、創立者は、規約はやがて公表されること、同時に、早速、会憲の草案に着手することを決めました。会憲は規約の解説に役立ち、その不足の点を補うことが出来るに違いないからでした。

この慎重さは創立者にとって適切でした。至る所で様々な障害に遭遇することが分かっていたからでした。また、法的認可の問題はマリア会にとって、その存在ではなくその固有の目的をおびやかす一般的な危険な一側面ではなかつたからでした。いずれにしても、創立者は、あらゆる方面からほとんど同時に、創立した修道会の本質が最も様々な考え方で修正されるよう要請されているように思われたからでした。そして、本会のある会員たちは、魅力的な活動を提案し、創立者自身の活動方針を強化するため会員を活用することを求め、また、会員に与えられた特別の武器によってその活動方針を変更しないことのみを要請しました。そこに危険がひそんでいました。創立者はそのことに気づいていました。したがって、常に警戒していたので、驚くべき良識と力を発揮しました。それは、み摂理によって託された使命を維持するためであり、また、規約を自由に修正する権利が与えられているとは考えなかつたからでした。このように、創立者は、マリアの娘の会の創立当初、今にも聖ヨゼフの孤児の修道会に変更されようとしていることが分かつた時、また後ほど、ヴィルフランシュのメール・エミーの修道会との合併の交渉が行われた時、同じように行動しました。創立者はマリア会を同じ心遣いで保護し、同じ熱意でマリア会の目的を擁護しました。

シャミナード師は、マリア会が法的認可を受けた直後、弟子でもあり友人でもあつたノアイ師が創立者であつた二つの修道会をマリア会に合併させたいこ

とを提案してきた時もノアイ師に対して同じように慎重な態度を示しました。1820年に創立された女子修道会の一つは、住居や生活の手段もなく世の危険にさらされていた少女たちの救済に献身する修道会で、「ロレットの姉妹会」でした。もう一つは、「貧しい司祭会」で、創立後3年にしかならず、ロレットの姉妹会を指導し、完全な清貧の模範によって世の人々を教化することを目指した会でした。ノアイ師は、それらの修道会が不可解な障害に遭遇し、熱心な人々が陥りやすい一時期の気力のゆるみは乗り越えましたが、親しくシャミナード師を訪れ、心からへりくだってその事業全体を恩師に委託することを考え次のように書き送りました(29)。

「これは一つの誘惑でしょうか。あるいは、聖なる乙女マリアからの勧めでしょうか。わたしはこのような悩みに陥るたびごとに心と気持ちはマリア会の方に向けられます。それは、マリア会のみが、神の栄光のためにわたしが抱いた考えと、既にわたしが始めた事業への断ち難いきずなど、わたしの心の望みを両立させることが出来るように思われるからです。」

シャミナード師は、ノアイ師の創立の精神が傷つけられないという条件の下にその提案を受け入れることにしましたが、ロレットの修道会のマリアの娘の会との合併は不可能でした。それはロレットの修道会の目的が極めて特殊で、しかも、極めて優れていたため、何らの修正も加えることなしに維持しなければならないからでした。ただ必要ならば、マリアの娘の会の長上によって指導を受けることは可能でした。一方、貧しい司祭会については、もし、マリア会に合併するなら、マリア会の特別の目的と相容れない清貧の実行を放棄しなければなりません(30)。しかし、創立者は、「形式が本質より重要でしょうか」と回答しました。貧しい司祭会は彼らが誓約した「完全な無私無欲」、及び、「絶対的放棄」の精神、また、彼らを活気付ける宣教の精神も放棄しなければならなくなるに違いありません、たとえ彼らが教育活動をいやがるにしてもそのことは大したことではありませんでした。

「確かなことは、マリア会の大半の会員は人間的な知識や文芸を教えることを目指しています。しかし、会員がこうした教育に従事しているのは、もっぱらあらゆる身分、あらゆる階層の人々の再生に必要な手段としてです。したがって、マリア会が、そして特に、司祭のある者が説教や黙想、布教、そして、あらゆる聖職を目指すことは驚くべきことでしょうか。これこそマリア会の精神です。マリア会はこの精神によってボルドー大司教やその他の数名の大司教や司教の承認を頂いたのです。したがって、各種の施設のために宣教師が基本的に必要になっています。マリア会は会員の世界的広がりから本質的に「宣教会」です。信仰の擁護、キリスト信者の増加のために働いています。」

創立者はノアイ師に対してではなく、マリア会員に対してかなり厳し過ぎるよう
に思われました。結局合併は行われませんでした。「貧しい司祭会」は生き残
ることが出来ず、次の年(1827年)には解散しました。他方、ロレットの姉妹会に
関しては、ノアイ師は自らとその使命についての自信を回復し、七つの系統を
含む在俗修道会「聖家族の会」のすばらしい修道院の設立を彼女たちに提
案しました。その繁栄は摂理的な起源をあかししました(31)。

シャミナード師には他の多くの合併が提案されましたがその態度はいつも同
じでした。会が努めてより静かに発展することを望み、完全に同じ精神を持た
ない構成員を本会に入れないようにしました。創立者のこうした配慮が想起さ
れるのは、例えば、親愛の弟子のブエ師に対する歓待でした。それは、ブエ師
が、革命によってセント・シュザンヌのトラオピスト修道院から再度追放された
数人の残留会員の長としてスペインからボルドーに帰国した1822年のことでし
た。ブエ師は最も苦しい状況の下で(32)、トラピストの共同体を導いていまし
たがその再建に失敗し、恩師であり友人のシャミナード師が健在であることを知
ってボルドーに帰って来たのでした。この師弟がそれほど長い間の離別の後再
度親しく出会った時、その感動は例えようもありませんでした。ブエ師はもう恩
師から離れないことを考え、もし、トラピストの修道院が再建出来ない場合はマ
リア会で生涯生活する恩恵を懇願しました。しかし、創立者は本会の精神を
体得するために再度修練院生活をなす条件でしか入会に賛成しませんでした。
そこで、この謙そんな修道者は他の一人の同僚と共にセン・ローランの修
練院に1822年7月に入りました。ブエ師はそこに1年しか止まりませんでした。
それは、ダイヴィオ大司教がボルドー近郊のセン・トーベンにトラピスト修道院の
設立を決定されたので(1824年)、ブエ師はその同僚と共にそこに赴いたから
でした(33)。しかし、修道院はわずか1年しか存続しませんでした。疲れと苦
行に打ちひしがれたブエ師は再びマリア会に入会することは出来ませんでした
が、その帰天(1848年)の時までマリア会の活動に協力し、ボン・ペール、シャミ
ナード師の聴罪師にさえなっていました。

シャミナード師が不動の決意を発揮しなければならなかったのは、様々な教
育修道会から合併の提案を寄せられた時でした。王政復興下で、キリスト教
教育の恩恵を田舎の人々に与えることを目的とした多くの学校が設立されて
いたからでした。プロエルメル兄弟会に加えて、マリアの小さな兄弟会が、有徳
であるばかりでなく、なお、経験と才能のある会員によって人々の関心を呼び
(34)、他の余り恵まれない修道会は堅固な土台の確立に努力していました。こ
れらの会の創立者たちは、修道会の創立のためには熱情だけでは足りず、修
道者の身分の実践的知識、更にその上に神からの使命が必要であることを確
信していました。こうした観点から幾つもの修道会がその活動の将来の保証を

希望し、外部に協力者を求めている理由が理解されるわけでした。

会員が教育の成功と内的精神によって評価されるようになると、創立者は人々の注意を集め、修道会の創立者たちは各方面から合併の提案を持ちかけてきました。例えば、1822年にピュイの近くのソグに男子修道会を創立したオート・ロワール県の主任司祭、また、セン・エティエンヌで他の男子修道会を指導していたラ・ロワール県の主任司祭、そして、1825年ごろセン・ヨゼフ会の総長や十字架の修道会の

総長のポワリエ師、そして最後に、フランシュコンテに類似の修道会を創立したペツレ師等でした。シャミナード師は、たとえ、マリア会との提携があるはずはないにしても、合併の考えを避けながら彼らに助言を与えることで支援しました。しかし、本会の目的が不用心のため急激に特殊化される恐れのある要請に対しては断固頑固になりました。

ストラズブール教区やナンシー教区のキリスト教教育修士会とは一貫した折衝が続けられていました。その折衝は部分的には成功していました。会員の宣教活動の発端はリボヴィレにおけるルイ・ロテア士の宣教活動に関連するものでした(35)。メルシアン師はようやく、修道者の養成をシャミナード師に完全に委託することを考えて修練院に吹き込まれた新しい刺激によるすばらしい成果の証人になりました。しかし、1821年の終わりに問題が起きました。それはメルシアン師が指導していたみ摂理の修道女会がまずマリアの娘の会との合併交渉に含まれたからでした。その交渉はほとんどすぐ中止されました。マリアの娘の会と一つになるためにはその目的が余りにも特殊だったからでした。

シャミナード師は原則として、条件を明確に提示してロテア士に次のように書き送りました(36)。

「あなたが働いている修練院の男子修道会とであれ、み摂理の女子修道会とであれ、マリア会との合併契約は極めて重大な事項であり、また、ボルドーから遠隔地の地域であること、また、アルザスで話される異なる言葉からも、このことは困難で難しい問題だと思います。しかし、このことから信仰上大きな善がもたらされるように思われるので、もし、本会の精神によってこれらの地方に現実に善をもたらすための適切な行動を取りうる契約が結ばれるなら、わたしはこれらの二つの契約のどちらも反対しません。わたしが述べたことは本会の精神に基づくものです。わたしは、わたしたちがキリスト教の道徳を確立し、信仰の精神を普及し、自由主義の魅惑的で墮落した奔流に対して強固な堤防で対応する手段を見いだしたことを強く確信しているので、本会の精神が改変され、修正されることを決して耐えることが出来ないからです。したがって、最も簡単

な手段は、キリスト教教育修士会やみ摂理の女子修道会をマリア会に合併させ、マリア会がマリア会のやり方でこれら二つの修道会の意向を果たす任務を負うことです。メルシアン師がどのように決定されるかわたしには全く関係がないように思います。ただ、神のみ旨が完全に行われ、その最大の光栄が神に帰せられることを願っています。単に一時的ではあっても、この合併が完成するのを眺めることが出来れば超自然的には喜びを感じますが、自然的にはメルシアン師がわたしたちを思いのままにしようとしているのではないかと不安になっています。」スノンのベネディクト会士で、当時、ロッレーヌ県のコッロワの主任司祭であったフレッシュナル師(37)は、メルシアン師が修道会の設立を試みたように、故郷の教区のために修道会を設立しました。フレッシュナル師は1822年に会員の修練院を設立するためナンシー近郊のヴェゼリズにあったカプチン会の旧修道院を購入したところでした。しかし、メルシアン師同様、優れた修練院長を持っていませんでしたので、ボルドーのマリア会のことを考えました。そこで、メルシアン師と親しくなり、マリア会との提携に関する計画の作成をメルシアン師に依頼しました。1822年2月6日付けで創立者に届けられたこの計画は独創的なものでした。この計画は23箇条からなり、最初の13箇条はここに掲載する価値のあるものでした。メルシアン師は創立者に次のように伝えました：

あなたはボルドーに修練院を設立し、そこで、信徒修道者の修練院で霊生部長、修練院長となる会員を養成すること。

わたしたちの教区にもそうした修練院があり、また、この復活祭にはナンシーの小教区にも同様の修練院が設立されるように、各小教区にも信徒修道者の修練院を設立すること。

各修練院に二人の長上を配置すること。それは精神の統一を図るためであり、わたしの考えではこのことは必要条件で、また、養成センターがある限りすべてのリーダーが養成出来る事項である。

この養成センターで毎年各修練院から訪れる修道者を養成しなければならない。その目的は各修練院間の相互関係を強固にし、精神の統一を図り、このことによって修道会を強化するためである。

優れた才能のある志願者を擁する教区立修道院は修道会の指導者として養成するために彼らをボルドーの養成センターに送る。この件に関しては当該修道会総長が判断する。

信徒修道者の教師は常にその小教区に止まらなければならない。

各小教区立の修道会の院長は修道院を管理し、新しい学校を設立し、そのために必要な配慮をこうじなければならない。

8. 教区立修道会の修道院長はそれぞれの司教によって任命される。

全修道院長は二人の長上を加えて構成した評議員会によって教区立修道会を管理する。

教区立修道会が評議員数の増加を要請する場合は1名か2名の信徒修道者の補佐を加える。

ボルドーで決定される教育法を厳しく採用しなければならない。

教区立修道会のすべての修道院は同一会憲を同様に採用しなければならない。

全修道院はある地域での特別な点を除いて、同一の会則を同様に採用しなければならない。その例外はボルドーによって承認されなければならない(38)。

以上は、お分かりの通り、初等教育のために設立された全教区立修道院間の連携の計画でした(39)。シャミナード師はこの修道会を活気づける精神を指導する極めて名誉ある役割を伝えられたのでした。メルシアン師はこの同じ手紙の末尾に次のようにしたためていました。「前記の23箇条で、わたしはその内容には全然触れなかったことがお分かりのことと思います。わたしがロテア士に渡したこの手紙をきつと読んでいただけるものと確信しております。したがって、わたしよりも十分その内容を理解して下さることを信じてこのことをあなたに依頼することにしました。」

シャミナード師が認めたように連携の計画は「巧妙」でしたが、実践的ではありませんでした。それは実施上の越え難い困難、特に、異なった2種類の養成所から管理者が出るという管理体制に困難が暗示されていたからでした。そして更に、シャミナード師と他の二人の創立者間に原則の不一致があったからでした。

二人の創立者の提案は、キリスト教教育修士会によって残された空白を埋めるために最も小さな部落まで一人ないし二人の会員を派遣して欲しいということでした。キリスト教教育修士会は一度に3名以下の会員を派遣することに賛成しなかったからでした。ところで、メルシアン師とフレッシュナル師は、いずれも

この目立たない使命を帯びた信徒修道者は修道者としての完徳に養成されることも、1日2回の念とうをなすことも、そして、「完成の徳(40)」に養成されることも必要でないと考えていました。以上の2件のいずれについても彼らはシャミナード師と合意することは出来ませんでした。シャミナード師は会員を単独に派遣するやり方に賛成せず、「半端な修道者(41)」と呼ばれる者に何らの善も期待出来なかったからでした。

この計画に対する主要な反対はシャミナード師側からの異論によってでした。たとえその計画がどのように有益であっても、これを適用することはマリア会をその本来の目的から逸脱させることであり、マリア会を、その存在と活動を関連づける特別な活動にもっぱら永久に献身させることだからでした。メルシアン師はこのことをよく理解していました。そこでロテア師は次のように書き送りました(42)。(1822年月2日)「メルシアン師の希望は、マリア会がもっぱらキリスト教教育修士会の会員の養成に従事することであり、自らは信徒の司牧、高等中学校、コングレガシオン及びイエズス会士によるこの種の活動を放棄することです。」しかし、このことはしばしば確認されたように、創立者は、マリア会の使命を極めて広い範囲の意味で理解していたこと、また、他の修道会が類似の事業でマリア会と提携出来るという口実で、マリア会を特殊な事業に限定すべきでないということを考えていました。確かに、創立者はそれがどのような修道会であろうとこれと競争することを主張しませんでした。そこで、次のように書き送りました(43)。

「わたしたちは決して他人の収穫にかまを入れることなど致しません。それは、収穫のため他の労働者に与えられた主の収穫であると考えからです。しかし、主の収穫は何と豊かで、広範に及び、様々な分野にわたっていることでしょう。キリスト教教育修士会士たちは自分たちが果たしている重要な使命について何も恐れることはありません。わたしは彼らのフランスにおける普及とその援助に協力しました。損害を与えることなど考えていません。神の霊がご自身に反対するはずもありません。マリア会が、もし、そんなにみじめな結果を生ずるなら神意からのものではないに違いありません。学校について話したことは、修道会についても話すことが出来、また、話させなければなりません。イエズス会とは決して争いや競争はありません。ましてや、卑劣なしつとによる陰謀などあつてはなりません。」

創立者は低級な競争心には反対でしたが、会員の競争心を過度に制限すべきではないということも考えました。そこで、更に次のように付け加えました。

「わたしたちはイエズス会士やキリスト教教育修士会士のかまと異なつた

かまを持っています。したがって、わたしたちは既に収穫に従事していた労働者に損害を与えることなく主の収穫に従事することが出来るのです。わたしたちはまだ揺籃期の弱さを持っていますが、尊い御母に対するわたしたちの信頼は揺るぎないものです。」

このような方針のためメルシアン師やフレシヤル師との合意は不可能になりました。ドゥ・クロワ大公で、同時に国王の聴罪師でもあったストラスブールの司教は1822年の秋の終わりに教区に着任し、メルシアン師の修道者がそのまま残ることを決定して、合併の折衝を中止させました。メルシアン師が1822年12月22日の手紙で、「たとえわたしたちの修道会が合併出来ないにしても、少なくとも、祈りの中で一致していきましょう」との結論によって、この交渉は終止符を打つことになりました。

しかし、メルシアン師はあきらめていませんでした。ロテア士がリボヴィレを去った後、修練院は早急に以前の状態に戻ってしまいました。創立者のメルシアン師が悪戦苦闘する中で、困難は毎日のように重なりました。メルシアン師は避難港を求めるようにボルドーの方に忍耐強く救いのまなざしを向け続けていました。

1823年、どのような合併の誘惑にも明らかに反対されていたクロワ大公はルアンの大司教職に昇任し、後継者としてストラスブールの司教座には、フランシュコンテにマリア会を招致することに寄与されたブザンソンの司教総代理であったタレン司教が着任されました(44)。メルシアン師とシャミナード師はこの任命を幸せな前兆として歓迎し、シャミナード師は次のように書き送りました(45)。「タレン師のストラスブールの司教職への任命はマリア会に対するみ摂理の大きな計らいに違いありません。」シャミナード師は間違っていないでした。マリア会をコルマル教区に招致し(1824年末)、メルシアン師とシャミナード師の二人の創立者の決定的な接近を容易にしたのはこのタレン司教だったからでした。

この間、メルシアン師はその事業の再興に最後の努力を傾けていました。司教は、メルシアン師とその実情を擁護していた仲間の聖職者あてに特別な通達を送付しました。メルシアン師は、修練者を安心して定住させるために、オーレン県とバーレン県の境界線に位置していたセン・イポリットの城館を購入しました。そして、1825年には、ストラスブールの師範学校にその会員を入れようとしていましたが知事によって反対されました。

いずれにしても、1826年の春には、メルシアン師の立場はかつてないほど困難になりました。その修道者は30名ぐらいしか残っておらず、全く危機的な状

態でした。そこで、最終的に決断し、コルマルの学校を指導していたルイ・ロテア士に実情を訴えました。そこで、ロテア士はボン・ペールに次のように書き送りました(46)。「メルシアン師はその男女修道会の指導には手が負えなくなっています。男子修道会から繰り返しもたらされる腹立たしさですっかり疲れてしまったとのことです。メルシアン師はこれらの修道会を廃止するか、全面的にボン・ペールに委託するか決心したとのことです。どちらかといえばボン・ペールへの委託を心から望んでいます。」

創立者はタレン司教が仲介を取られた再度の折衝をカイエ師に委任しました。ところが、次の7月に、メルシアン師は、その修道者たちが新しい会則を選ぶか、身を引くかを自由に選択させ、セン・イポリットの城館をシャミナード師に譲渡しました。マリア会に入会した修道者は3、4名しかいませんでした。彼らは立派な修道者でした。他の修道者たちは還俗することも好まず、また、マリア会の会則を守る勇気もなく、自主的な生活を続けました。

以上が長期に及ぶ合併折衝の結末でした。この交渉はマリア会の目的も使命も無傷にし、教育に献身する男子修道会が全然無かったアルザス地方に、マリア会が最も重要な活動を委託される結果になりました(47)。

ローヌ地方でも合併の交渉が続けられていました。1830年、様々な政治的な事件におびやかされていたフレッシュ師は、その小さな修道会を完全に分散させてしまったのでした。この修道会は、3年後、バイヤル兄弟によって復興され、ナンシー近郊の名高い巡礼所のシオンの聖母修道院の建物に修道者を住ませました(48)。

バイヤル師たちは復興した修道会の指導をシャミナード師に委託するため最も折り入った交渉を再開しました。しかし、合意は不可能でした。バイヤル兄弟は強固な考えを持ち、たとえそれがどのように空想的であっても、そうした考えを何ら失うべきではないと強調していたからでした。彼らはシャミナード師に次のように書き送りました(49)。

「わたしたちの計画は決定されました。わたしたちはこの実効的プランが修道会に大きな効果をもたらすことを確信しています。マリア会がこのプランを完全に適用しない限りはこれをマリア会に委託することは出来ません。出来ればローヌの修道院のために会憲の改訂をあなたに依頼したいと思います。」

このことは正に差し迫った要請でした。しかし、創立者は返事を避けました。バイヤル兄弟は、1839年以来、わたしたちが触れることの出来ない苦しい状況下でその大半の計画を放棄していたからでした。そこで、フレッシュ師はまた自

ら小さなキリスト教教育修士会を指導することになりましたが、この修道会は今日なお存続しています(50)。

このことがわたしたちの全交渉を中止させる方向に導くことになりました。これらの交渉は、前述の出来事のように、創立のまだ浅い年月に今にもマリア会を変質させ、また、正常で摂理的な道からマリア会をそれさせるようにした試みに関連したものでした。創立者の用心や慎重さに救われたマリア会は発展の時代に入りました。したがって、これからこれらの最も顕著な出来事を考察することになります。



注

- (1) 1825年7月26日、カイエ師へ
- (2) 313ページ上参照
- (3) 民法9、2章1節、1836項以下
- (4) 1833年4月9日の覚え書き
- (5) 1841年8月14日、オギュスト士の覚え書き
- (6) 1822年8月16日、ダヴィド士へ
- (7) 1825年7月26日、カイエ師へ。フレッシュヌ師は1822年に文部大臣に、1824年には宗務大臣に任命されました。
- (8) 1823年6月16日
- (9) 1825年7月26日、カイエ師へ
- (10) 1825年7月26日、カイエ師へ
- (11) ダヴィオ大司教は1823年12月8日の無原罪の御宿りの祝日にシャミナード師に推薦状を送る細やかな心遣いを抱いていました。司教総代理のバウルレ師は総立者に、「聖母マリアの祝日の一つで、特にコングレガシオンの保護の祝日に、このすばらしい機会にマリア会の認可を届けることはすばらしい機会になりました」と伝えました。
- (12) 1825年4月4日付けドゥ・モンモランシー公爵への書簡には信仰についてしかのべられていませんでした。
- (13) 1825年4月7日
- (14) 「歴史概要」、31ページ

- (15) 1825年5月2日、カイエ師へ
- (16) 1825年5月24日、カイエ師へ。聖霊降臨の祝日は5月22日でした。
- (17) 国王の聖別式は5月29日にレンスで行われ、国王のパリ帰還は6月6日でした。
- (18) 1825年6月23日、カイエ師へ
- (19) 同上
- (20) 1825年7月15日、カイエ師へ
- (21) 1825年7月21日、カイエ師へ
- (22) 1825年7月26日
- (23) 1825年7月28日、カイエ師へ
- (24) 1825年8月11日
- (25) 1825年8月18日
- (26) 政府がマリア会を法的に認可したのは、1825年11月16日の法令ではありませんでした。その後の幾つかの政令によって批准されました。すなわち、贈与や遺産を直接受け取ることを本会に認可した1857年4月18日の政令、本会の本部をボルドーからパリに移転することを許可した1860年8月18日の政令、総長の重病、逝去、辞任あるいはひ免の場合、臨時交代に関する条項をマリア会規約13条に挿入することを許可した1876年9月20日の政令等によってでした。
- (27) 1826年1月9日
- (28) 1834年2月17日、シュヴォー師へ
- (29) 手紙には日付がありません。しかし、多分、1826年2月初旬に書かれたものと思われる。シャミナード師の返事は1826年2月15日付けでした。
- (30) ノアイ師は貧しい司祭会の会員について次のように述べていました。「貧しい司祭会はその規則によれば、修道院で受け入れることを余儀なくされる仕事も、報酬も受けることは出来ません。彼らは団体としても個人としても何も所有しません。ミサをささげて得られる毎日の施しを除いて、彼らの実施する聖職による何らの報酬も受けません。」
- (31) 各修道会の使命が異なる七つの修道会から成る聖家族の会は、ボルドーの唯一の本部によって管理されていました。この種の修道会では特異な創立で、明らかに神から祝福されていました。七つの系列は次の通りです。ロテットの聖母会（裕福な階層の師弟の教育）、聖ヨゼフの姉妹会（養老院、裁縫や刺しゅう）、無原罪の御宿りの姉妹会（中産、庶民階層の子女の教育）、農耕姉妹会（田園教室）、希望の姉妹会（病人の介護）、観想姉妹会（観想生活）、聖マルタ姉妹会（系列姉妹会の内部での業務）。
- (32) シャミナード師がスペイン滞在中親しくしていたセント・シュザンヌのトラピスト修道

院訪問に関するリガニオン師の覚え書きのくだりを忘れないよう再録したいと思います。リガニオン師は次の覚え書きが作成された時(1844年)、まだ存命中のブエ師からこの逸話の詳細を聞いていたに違いありません。リガニオン師は次のように述懐しました。

「セント・シュザンヌの共同会は1810年には最も熱心な修道院でした。修道院がフランス軍によって分散させられたので、修道士たちは避難所を他に探すことを余儀なくされました。ボルドーのある司祭が共同体の一部分の会員を集め、ヴァレンシアの近郊に定住し、1815年まで出来る限り創立者の精神を生きていました。その年、フェルディナン師が全修道士をそこに収容しました。したがって、ヴァレンシアのトラピスト修道院は熱心な共同体として繁栄しました。1821年に、スペインの法律で修道院の廃止が再度決定したので、例のボルドー人の司祭はまずバルセロナに、次にマヨルカ島の首都パルマ市に引っ越すことを考えました。ちょうどその時、ペストが猛威を振るい始めました。同胞間ではヨゼフ師、世間ではブエ師と呼ばれていたヨゼフ師は、約2箇月間、この不幸な人々を襲った悲劇の悲しい証人になりました。これほど悲惨な事件はありませんでした。家族は悲嘆にくれ、通りには人の気配もなく、歩き回る幽霊のような人しかいないほど、不幸は全市に及び、住民は茫然自失の様相を呈し、母親たちは亡くなった親しい人々の写真や飾りピン、そして、宝石、刺しゅうの服に、在りし日の姿を想起していました。この世にも悲惨な状況の中で、聖職者たちは持ち前の使命を發揮し、様々な聖人たちに奉献した祭壇をそれぞれの通りに備え付けました。それは伝染病の猛威のために信者が教会にも集まれずミサにもあずかれなかったからでした。

ヨゼフ師がある日、通りの奥に備え付けられた祭壇の前を通り、祈りをささげたある日、次のように話しかける声を聞きました。『多くの人々があなたの側で倒れるかもしれない。しかし、そのことはあなたに及ぶことはない。』こうした恐怖に対して強くなったヨゼフ師は修道士たちにその成り行きを保証することを伝え、彼らの生活を配慮し、彼らを市内から引き離し、災害から非難させることを熱心に考えました。そこで、彼らは山の上に住居を構え、そこかれ静かにペストの猛威に打ちのめされた町を眺め、永遠に生きる神に静かな祈りをささげました。しかし、彼らはそこに永住は出来ませんでした。革命によってその地を追われた彼らはまずバルセロナに避難しました。そこには、セント・シュザンヌの修道者ジャン・バプティスト・ドゥ・マルトル師がいたので、彼らは一緒にボルドーに行く計画をたてました。ボルドーで初めてトラピストの修道服を着用出来るに違いないと考えていました。ヨゼフ師はなおバルセロナに止まっていたましたが、昔の友人で指導者であったシャミナード師が健在であることを聞いて、しばらくしてバルセロナを発ちました。」

セント・シュザンヌのトラピスト会士の避難に関する他の詳細は、アントワン・ドゥ・ラントネ著、「ボルドーの十字架の修道院及びラ・レオルの聖ペトロ修道院院長」、119ページ以降、1884年、ボルドー、及び、「信仰の友」、28巻、348ページ、34巻、88ページ、参照。セント・シュザンヌの大修道院はアングレム公爵の遠征後、すなわち、1823年に再建されました。しかし、この修道院は3回、最終的には1833年に閉められました。修道者たちはフランスに避難し、セント・シュザンヌの最後の司祭はボルドー近郊で帰天しました。「革命中のドゥ・レストランジュ師とトラピスト修道者」、78ページ、1898年、大トラピストで印刷。

(33) 「ダヴィオ大司教の生涯」、2巻、75ページ以降参照。それはコングレガシオンと音楽愛好協会が大きな役割を演じた修道院設立の感動すべき逸話です。

(34) 第一にジャン・マリー・ドゥ・マンネ師、第二に、シャンパイニャ師。

(35) 416ページ参照

(36) 1822年一月25日

(37) スノン(ヴォージュ県)近郊のプティ・ラオンに1765年に生まれたジョゼフ・フレッシュャル師はカルメ師が帰天したばかりのスノンの有名な大修道院のベネディクト会士でした。フレッシュャル師は大革命後、コルロワ・バンリュの小教会を司牧し、1817年ごろ男子修道院を設立しました。マルトン師著、「フレッシュャル師の略伝」、1890年、ナンシー。

(38) 最後の10条は有期誓願者と服装を取り扱いました。

(39) メルシアン師はみ摂理の修道女会と各小教区間に類似の連携を計画していました。

(40) このことはシャミナード師の霊生に対する当てつけでした。1822年2月11日、ロテア士からシャミナード師への手紙。

(41) 389ページ、435ページ参照

(42) 1822年4月2日

(43) 1825年5月19日、カイエ師へ

(44) タレン司教は1787年にブザンソンに生まれました。勉学をセン・シュルピスの神学校で終了し、ベイユの神学校の指導に任命されました。やがて故郷の教区に帰りましたが、そこでの評判は司教総代理の資格にも値するものでした。ストラスブールの司教職を受諾した時は既にメツの司教職は辞退していました。1826年にはボルドーの公爵の教育を依頼されたので司教座を去り、1845年にパリで帰天しました。

(45) 1823年9月30日、ダヴィド士へ

(46) 1826年1月13日、ロテア士からシャミナード師へ

(47) メルシアン師には二人の兄弟がいて、彼らは立派な境遇にありながらもメルシアン師が選んだ決定に不満を持って生活していました。いずれにしても、地域や小教区の事業の設立に専念し、兄がそうであったように、小さな部落に修道者を送ることを望んでいた彼らは、アルザスの幾つかの修道院をシャミナード師から引き離すことを試みましたが失敗したので、アルザスの施設の行政権を取得するため交渉しました。しかし、シャミナード師は彼らを退け、マリア会の事業を分離し、変質させることには賛成しませんでした。そこで、イグナス・メルシアン師の死後、彼らはキリスト教教育修士会の事業を再度復興することを促した甥の一人にぼう大な財産を自由にさせました。1843年に改革された修道会は余り発展しなかったとはいえ、なお、存続しています。その本部はマッセンハイム(バス・アルザス県)にあって、ドイツ政府の許可の下に1874年、マリア会が退却することを余儀なくされる前、アルザスでマリア会がなしていた事業を補充していました。

(48) バイヤル師3兄弟のうち、長男はファヴィエールの主任司祭で、次男は助任司祭でした。3男はソールスクール・レ・ヴァンヌの主任司祭でした。彼らは既にマッテンクルの修道院やセント・オディルの巡礼所の活動に従事していました。

(49) 1837年5月30日、シャミナード師へ

(50) フレシャル師はシオンからヴェズリーズに修道者を連れ戻しましたが、1849年7月24日、同会修道者に見とられて帰天しました。奉献の修道会はシオンの巡礼所を取得しました。



第31章 王政復興晩年時におけるマリア会の発展(1826-1830)

ダヴィオ大司教の帰天 ❖ 実姉リュクレス・シャミナードの帰天 ❖ メール・ドゥ・トランケレオンの帰天 ❖ アジャン訪問 ❖ モワサックとロゼルトへの創立 ❖ 北部地方の視察旅行 ❖ マリアの娘の会、アルボワ、ラインナケルン、アーシェの創立 ❖ マリアの娘の会の法的認可 ❖ アルザスでのマリア会の発展 ❖ レオン・メイエ師 ❖ 後期中等教育 ❖ グレーの高等中学校長のラン師 ❖ セン・ルミの校長 ❖ 師範学校に関する創立者の考え ❖ パリに師範学校計画 ❖ クルトフォンテーンに師範学校設立 ❖ すばらしい発展。

マリア会はダイヴィオ大司教及びメール・ドゥ・トランケレオン総長の二人の主要な支持者を失った時、強化確立の途上にありました。

ダイヴィオ大司教は本会の揺籃期を不動の好意を持って援助し、会員をその手厚いご保護の下に置かれました。というよりむしろ、司教総代理バルレス師の表現によれば、「マリア会員を老境の養子と呼び、彼らに惜しみない愛情を注がれた(1)」ということです。シャミナード師にとって大司教は、帝政没落の直後、シャミナード師が大司教にしたための書簡で表明したように、不変の助言者、友人、あるいはそれ以上の父親でした。次のように書き送りました(2)。「わたしの心の内をはっきり打ち明けることによって、大司教様を巻き添えにすることなく、より親しく大司教様のお勧めを頂くことが出来る現在、最良の父に対する子供の信頼をもってすべてを大司教様にお伝え致します。」

1822年6月、呼吸器の突然の障害によって大司教の危篤を知った時、シャミナード師は悲嘆にくれ、そのことについて次のように述べました(3)。

「この聖人のような大司教様がどんなに愛されていたかが分かりました。すべての教会で深い関心のあかしとなる熱心な祈りがささげられたからです。神はこのような願いをかなえられないはずはありません。教会では9日の祈りが続けられています。各修道共同体はそれぞれの信心に促されて大司教様のために祈りました。ミゼリコルド会はヴェルドレの巡礼所に代表を送りました。くじで選ばれた二人の長上は約束の義務を果たすため裸足で巡礼に出発しました。」

シャミナード師は、大司教の回復のためヴェルドレの聖母への巡礼を約束したことはこの話には付け加えませんでした。ヴェルドレの聖母の巡礼所は、シャ

ミナード師がほとんどすぐ願いが聞き入れられ、少年時代から常にお恵みを頂き、感謝の祈りに赴いたところでした(4)。

1825年、再度、大司教の危篤が案じられましたが危機はまたしても回避されました。幸いに次の年には同様な危機は訪れませんでした。

大司教は90歳になっていました。ちょうど教皇レオ12世聖下に承認された世界的な大赦の公布が準備されていた時、全く予期しない事故で死の危機にさらされたのでした。それは、1826年3月8日から9日の夜、ベッドのカーテンが燃え上がったのです。大司教は炎から助け出されましたが、その夜の興奮と受けたやけどから回復しませんでした。4箇月の間毎日少しずつ危篤状態が進み、ついに7月12日神の下に旅たちました。

その日の前日、シャミナード師は、15年前から一緒に住んで住居の世話をし、慈善と宣教活動を共にしていた姉のリュクレース・マリーの野辺送りに行ったところでした。同時に起きたこの痛ましい出来事はシャミナード師の心に深い悲しみを与えました。姉の帰天は全く個人的なことではありましたが、肉親上の家族のつながりを結んでいた唯一のきずながほとんど断ち切られたことになりました。大司教の帰天は創立者自身よりむしろ修道者たちに深い悲しみを与えました。彼らは大司教の帰天によって最良の父、最も確実な助言者、最も力強い保護者を失ったからでした。

人々が大司教の帰天を悲しんだにしても、その帰天は、少なくとも突然でも、時期尚早でもなかったのではないのでしょうか。それはちょうど戦いを終わった戦士が戦場から退いて当然の休息を取るように、大司教はその聖職を全うして帰天されたからでした。マリアの娘の会の創立者メール・ドゥ・トランケレオンの場合は全く異なっていました。彼女は働き盛りに、様々な業務上の戦いによって疲れ果て、また、多忙な業務と苦行によって押しつぶされて帰天したからでした。

シャミナード師は、数年前から、彼女のデリケートな健康をいたわるよう指示し、また、休息を取り、難色を示した熱誠と苦行の緩和を従順によって要請しましたが、その健康ははかばかしくありませんでした。彼女は何事にも子供のように率直に従いましたが(5)、彼女の生来の虚弱な健康は損なわれ、優れた介護も更に寿命を延ばすことは出来ませんでした。時々、体力が回復したように思われ、そのため、回復の何らかの希望が感じられました。1824年には、コンドンとボルドーの新修道院の取得にはシャミナード師と共にかかわることが出来ました。1826年には、フランス北部にマリア会の娘の会の最初の修道院を創立しようとしていた修道女たちを激励するため再度ボルドーに赴くことが出

来ました。それからすぐ、彼女はまた衰弱状態に陥りました。シャミナード師によって両修道会の全修道院(6)に要請された病氣回復の熱心な祈りも彼女をこのよに引き留めることは出来ませんでした。

彼女の身体は油の切れたランプのように息絶えましたが、心は永遠の幸せの反映によって照らされたように生き生きと輝いていました。シャミナード師は、マリアの娘の会創立当初、徳への渴望を高く掲げるよう彼女を激励して次のように書き送ったものでした(7)。

「あなたに与えられ、あなたを浄化し、聖化するためにすばらしく配慮されたお恵みに忠実であってください。不信仰で充満し、腐敗し、墮落した世に、福音的の完徳の模範をあかしするために創立された本会の長上が聖人でないとしたら、どうなるでしょう。どうぞ勇気を出してください。神のおぼし召しにこたえ、お恵みに、あなたに与えられるすべてのお恵みに忠実であってください。」

こうした勧めに素直であったメール・ドゥ・トランケレオン総長は完徳の道をまい進しました。それから数年後、彼女の熱望の対象であった天国への準備はすっかり整えられていたのです。1827年8月、アジャンの修道院でシャミナード師が指導された黙想会の集結に当たって彼女は修道女の一人に次のように書き送りました(8)。「わたしは大変慰められました。わたしは静かに生きているとはいえ、いつも孤独でいるからです。」彼女は天国への旅たちを口にし、マリアの娘の会の最良の友人の一人ローモン師(9)が引退した修道院で死を迎えるのではないかと考えていました。ローモン師引退の当日から彼女は急速に衰弱したように思われたからでした。医者は彼女にピレネの温泉行きを勧め、シャミナード師は彼女の自由にまかせましたが、彼女は承知しませんでした。余り期待出来ない回復を試みてこの世に踏みとどまることを望まなかったからでした。

いずれにしても彼女の最後は近づいていました。10年来彼女の多くの徳の証人であったアジャンの人々はこの報に接して涙をながしていました。コングレガニストたちもこぞってボナンコントルの巡礼地を訪れました。ある勤労者は、「わたしは総長様を助けるためなら喜んで献血します(10)」と大声を上げていました。一方、相変わらずおだやかな表情のボンヌ・メールは、「皆さん、天の浄配のおぼし召しの実現以外には何も願わないでください」と修道女たちに願っていました。」

天の浄配のおぼし召しはこの忠実な配偶者のこの世からの近い解放でした。彼女の子心の信頼と禁欲は最後まですばらしいものでした。1828年1月9日の晩、8時、「ダヴィドの子にホザンナ」と叫びながらその魂を神のみ手に返しまし

た。これは勝利の叫びでした。彼女はやっと38歳でしかありませんでした。

シャミナード師はこの新たな悲しみにひどく打ちひしがれましたが、修道女たちの悲しみを和らげるために自らの悲しみを抑えていました。そこで、修道女たちを魅了していたボンヌ・メールのすばらしい徳の模範を想起させ、母親の心遣いで天国からマリアの娘の会を見守り、その発展を促進し続けているという暖かい希望を抱かせるようにしました。

王政復興の最終年ごろの時期は、こうした苦しい試練に見舞われていたとはいえ、両修道会にとっては、繁栄と正常な発展の時期でした。そこで、マリア会員が要請されたのはアメリカの同胞(11)や大洋州諸島(12)への遠国への宣教でした。しかし、賢明な創立者は、既に設立されている地域での両修道会の発展を望んで、この時期尚早の面目を遠ざけることにしました。誕生後なおひ弱な両修道会は固有の強さを維持するために、長期の豊穡な収穫に備えてまず土台を固めなければならなかったからでした。

創立者は自らの指導の及ばない地域への会員の進出を許可しなかったばかりでなく、彼らの身近にいるように努力し、正に思慮深い存在として彼らに接したのでした。それは、彼らの初期の養成を危険にさらすような障害を排除する用意を常に整えておくためでした。創立者は、もっぱらこうした配慮によって、初期の熱誠と創立の精神を維持発展させたのでした。

創立者は、創立当初から恒例になっていたアジャンのマリアの娘の会の毎年の訪問を一度欠かしましたが、それは、1825年のマリア会の法的認可の申請中でした。修道女たちの意見によれば、創立者の滞在がいつも短か過ぎていたので、その訪問が待ち遠しく思われていたのでした。彼女たちは、「お話全体が聖霊に導かれているように思われるこの新しいフランソワ・ドゥ・サルのようなボン・ペールの側では何と時間がたつのが早いことでしょう」と書き送っていました(13)。長上たちは共同の教話や個人的対話だけでは満足せず、創立者が修道院に滞在している限り離しませんでした。また、彼女たちは次のようにも書き送りました(14)。

「ボン・ペールはご自分の昼食や夕食の間も、わたしたちに会則について、わたしたちの身分上の諸徳について、修道女の教化事項についてお話して下さいました。更に、わたしたちがやっと許しの秘蹟を受けられるほど多忙を極めておられました。昨晚、ボン・ペールが告白場を後にされたのは夜の10時でした。」

創立者は、マリアの娘の会の修道院、コングレガシオン、アジャンに設立さ

れて以来の小さな本会の会員間の分かち合いを余儀なくされていたからと言わざるを得ません。

ヴィルニュヴやトネン、そして、コンドンに設立された共同体はその後毎年数日間、創立者の滞在に恵まれました。その滞在は宣教活動の聖なる熱誠を刷新するためでした。マリアの娘の会の修道女たちはこうした配慮を大変喜びました。例えば、メール・ドゥ・トランケレオン総長はドゥ・ラシャペル嬢に次のように書き送りました(15)。

「わたしは、ボン・ペールの18日に及ぶ滞在で、神がわたしたちに与えて下さったお恵みを、あなたが分かち合うことが出来なかったことを大変残念に思います。ボン・ペールはほとんど毎日ミサですばらしい説教をなし、また、全体の教話や特別の講話で優しい父親としてわたしたちを激励して下さいました。しかし、わたしたちに手心を加えませんでした。本気でわたしたちをしかりました。わたしたちがより徳に進歩しなければならないことを考えられていたからではないでしょうか。ボン・ペールはちっ居の規則をより厳格にし、応接室の出入りをより少なく、より短くする、沈黙を一層遵守する等、多くの改善を図られました。」また、他の時には次のように書き送りました(16)。

「ボン・ペールの滞在は、ボン・ペールによってもたらされた安らぎのため、また、行われたすばらしい教話のため、わたしたちのためになされた熱心な祈りのため、機会のあるたびごとの小さな犠牲の実施のため等、真に豊かな恵みの時でした。ボン・ペールがわたしたち全員と面接が出来なかったのは仕事に忙殺されていたからだと思います。入会を希望する多くの少女たちによって手一杯だったからでした。」聖人のようなメール・ドゥ・トランケレオン総長は最後の黙想会参加後、ボン・ペールについて次のように書き送っていました(17)。「ボン・ペールは神の栄光に関する熱誠に燃えていました。わたしたちはボン・ペールにふさわしい子供になりましょう。そして、もう一人のエリシャ予言者として、信仰と創立の精神の二重の精神を願いましょう。」

一般に、創立者の視察旅行は訪れた各種施設の活動の何らかの発展の機会に行われました。例えば、1828年にアジャンにマリアの娘の会の寄宿学校の開校を決定した時でした。また、ほとんどいつもコングレガシオンを設立した時でした。時には、新規の創立を決定した時でした。このように、1826年から27年にかけて、「上流地域」への視察は、マリア会の二つの学校をロゼルトと、亡命時代の友人の主任司祭のエンベル師がずっと以前から創立者の到来を願っていたモワサックに開校することを決定したからでした。

マリア会がフランス北部地方に発展した時、創立者は共同体を会員自身の

手に委ねないことを決心しました。会員の孤立が指導上の心遣いの理由になっていたからでした。また、口伝がなおほとんど唯一の決まりであった時代にあつて、そして、マリアの娘の会の会憲が、会員の活動がより拡大するにしたがつて不十分になってきたので個人的な指導が絶対に必要になっていたからでした。

1824年から25年にかけて、免れることの出来ない多くの事業のためボルドーに足止めされた創立者は、北部地方の視察にカイエ師を選び、詳細な指示と広範な権利を文書にして渡しました。この委任がどんなに有益であったにしても、本会の総長の代理を十分果たすことは出来ませんでした。会員たちは創立者が視察旅行を延期しないようしきりに促しました。そこで、1825年の新年のあいさつに答えて、願いをかなえる望みをセン・ルミの院長に次のように書き送りました(18)。「皆さんがわたしに会いたいと思つているように、わたしも皆さんに会いに行きたいと心から願つています。たとえ頭髪が白くなり、高齢に達したとはいえ、旅の疲れなど少しも心配してはいません。引き留められるのはみ摺理のおぼし召しのみです。そして、このみ旨を常に配慮しなければならないことを皆さんにお伝えください。」

次の年から、創立者の希望が実現することが明らかになりました。ダヴィド大司教の帰天後、創立者はアジャン及びその周辺に短期間赴き、それからすぐ、グレーの高等中学校を指導することになっていたララン師を伴つて北部地方の大変な視察旅行に出発しました(19)。その出発はボルドーの人々の注目の的になりました。翌日の新聞はふざけ半分に、「シャミナード将軍は幕僚を伴つて巡視に出た」と報道したからでした(20)。創立者はパリに立ち寄り、マリア会の協力者たちにあいさつし、新たな、そして、敬けんな好意を示し、同時にまた、本会への召命をも得ました(21)。

この最初の視察旅行は短期間で、セン・ルミが最初の主要な行程でした。容易にお分りの通り、セン・ルミでの歓待は熱狂的でした。ロテア師の覚え書きには、「城館は照明され、三つの鐘が鳴らされ、皆でAve maris stellaの賛歌を歌い、ボン・ペール万歳の叫びは虚空に響き、自制することが出来ないほどでした」との言葉で要約されていました。創立者はセン・ルミにしばらく滞在して後、フランシュコンテやアルザス地方を素早く視察し、友人でナンシーのドゥ・フォルベン・ジャンソン司教の下に滞在し、10月中旬には年の大黙想会開始のためボルドーに帰省しました。1827年の北部地方への第2回目の視察旅行はよりゆとりを持って出掛けられました。しかし、1828年にボン・ペールに会うことが出来ず慰められなかった会員にとっては、それでもなお短か過ぎる滞中に思われました。したがつて、彼らは次年度の来訪を切に要請していました。

創立者は彼らの願いを了承しました。1829年1月19日付けのクルーゼ士への手紙の次のくぐりでこのことが明らかです。

「コルマルの共同体の会員は新年にわたしのアルザス視察旅行への費用として1000フランから1200フランの金額を預金しておくことを申し出ました。わたしは、会員が健康を害するまで節約しないという条件でこの申し出を受け入れました。それで、復活祭後まず両修道会のすべての施設を視察するため出発し、会員や施設に関するすべての事項を調整するためそれぞれの施設に滞在することは適切であるように思われます。」

したがって、創立者はいつもより早く出発し、各共同体で十分時間を割くことが出来ました。ただ、施設が増加していたので各共同体での時間はなお限られたように思われました。

創立者の視察旅行を詳細に記述することは長くなり、また、単調になるに違いありません。そこで、この視察旅行の行程で得られた成果の幾つかを検討することがより肝心なように思われます。わたしたちは、創立者が新規の創立の基礎を固め、その事業を発展させ、会員の霊的生活を活性化させたことに気づくに違いありません。そして、この必要性はやがて訪れる試練の時期に早速明らかになるに違いないからです。

創立者は、第1回の視察旅行の時、フランシュコンテにマリアの娘の会の修道院を設立することを決定していました。また、本会の男子会員がセン・ルミに定着して以来、北部地方にマリアの娘の会をこれに続かせるように考えていましたが、その機会が都合よく到来したように思われました。アルザス地方やフランシュコンテ地方、そして、スイス等からのすばらしい召命によって、マリアの娘の会の修練院の開設の計画が確認されたからでした。ボルドーから遠距離の旅行をなす代わりに故郷の近くに彼女たちの潜心の場所を設立することがふさわしいと考えたのではないのでしょうか。

創立者はまずコルマルに着目しました。しかし、み摂理の修道女会が町の公立学校を指導していたので、人々から勧められるままにその近郊に寄宿学校を設立することをちょうちよしていました。それはコングレガシオンの活動さえ断念していたからでした。イエズス会がコルマル市のほど近くのキンツハイムに聖母のみ心の会の設立を準備していることが分かった時、この計画は全面的に放棄しました。

そのうちに、バルドゥネ師は、セン・ルミに最も近い町でオート・ソーヌ県の県庁所在地ヴズールにマリアの娘の会を誘致してきました。バルドゥネ師は旧カ

プチン修道会の修道院の購入を提案していました。もともと、この修道院は教区の司牧司祭たちが小学校教師の集会を考えていた場所でした。カイエ師とバルドゥネ師の間で行われていた交渉は順調に進んでいるように思われましたが、様々な障害が起きたのですべてを放棄せざるを得なくなりました。そこで、創立者は交渉代理のカイエ師に、「み摂理の時期がまだ来ていないように思われます。しかし、ヴズールのマリアの娘の会の施設は最初に考えられた以上に重要なものです。わたしは女性の刷新のためにセン・ルミの施設と対をなすものにしたいと思います」と書き送りました(22)。

バルドゥネ師は困難を恐れる人ではありませんでした。ヴズールから手を引いた時、他の地域を探し、極めて有利な条件で売りに出されていたカプチン会の他の修道院をジュラ県のアルボワに探し出しました。バルドゥネ師はシャミナード師をそこへ案内し、その修道院の購入を承諾させました。ボルドーではある共同体が間もなく設立されようとしているところでした。創立者がようやく帰られたのでこの修道院の祝別式に間に合いました。(1826年10月)

北部地方におけるマリアの娘の会の最初の創立は各種の試練に見舞われました。それは、最もみじめな馬車に揺られた3週間の不愉快な旅行から、創立者の姪メール・ドゥ・カステラ新院長をやがて奪い去ることになる病気に至る試練でした。新院長は修道院設立の数週間後、腸チフスにかかり長い間生死の境をさまよっていたからでした。ララン師はグレイから、クルーゼ士はセン・ルミから悲嘆にくれたマリアの娘の会の共同体を慰め助けるために駆け付けました。メール・ドゥ・カステラ院長は修道女たちの祈りによって助けられていました。涙の内に開設されたアルボワの修道院は、コングレガシオン、無償学校、寄宿学校、修練院等、豊かな成果を収めることになりました。1827年、ボン・ペールはこの遠距離地域の最初の共同体を祝別するために来訪し、彼女たちの年の大黙想会を指導しました。

シャミナード師は低アルザス地方に第二の創立を準備していました。ストラスブールの司教総代理のリベルマン師がワッセロヌ市とマルムティエ市の間で、聖母巡礼地の側のライナケルンに一修道院をシャミナード師に提供したからでした。そこで、1828年にはマリアの娘の会の修道女がそこに移駐して来ました。しかし、何か不可解な気まぐれによるものでしょうか、現地の主任司祭は修道女たちをマリアの娘の会から離脱させようとして他の会則を押しつけようとしていました。主任司祭の提案に驚かされたシャミナード師はその提案から得るものは何もないことが分かりました。建物が同主任司祭個人の所有だったので、平和な雰囲気では生活することは不可能ではないにしても、困難に思われたからでした。したがって、1829年に同共同体を視察した創立者はこれ以上がまん出来ない

状況にあることが分かりました。そこで、次のように書き送りました(23)。「信じられません、キリスト教の誕生以来、修道会の創立にこれほど奇妙なことは決して見られなかったことです。」マリアの娘の会の手腕を評価していた地方当局の要請にもかかわらず、創立者は彼女たちをライナケルンから立ち退かせ、フランシュコンテのアセの旧大修道院に移しました。この修道院は、当時、バルドゥネ師の所有で、豊かなオイニョン峡谷に位置するすばらしい地所にありました。彼女たちはそこで寄宿学校を開校しました。修道女たちの近くに身を落ち着けたバルドゥネ師は帰天するまで修道院付き司祭として奉仕しました。

こうして、シャミナード師はマリアの娘の会の修道女に新たな発展をもたらす一方、パリに何日か滞在する間に、マリア会が既に享受していた法的認可をマリアの娘の会にも確保させるよう専念しました。1825年にカイエ師は、マリア会両修道会の法的認可の手続きを並行して進める任務を受けましたが、ちょうどその時、女子修道会の認可に関する法律はまだ準備中でした。1825年5月に可決されたこの法律は創立者を失望させました。創立者は、「このような法律が余り早く出過ぎたようで残念でなりません」と書き送ったほどでした(24)。果たして、この法律にはカトリック精神は含まれておらず、終生誓願さえ除外しているように思われました。こうした状況下で創立者はマリアの娘の会の法的認可の手続きを急ぎませんでした。しかし、シャミナード師は同法立の施行方法を決定した政令によって政府の意図を確認したので、1826年と27年の2回のパリ滞在を利用して、マリアの娘の会の法的認可を準備し、創立者メール・ドゥ・トランケレオンの帰天2箇月後の1828年3月23日にその認可を取得しました。

シャミナード師の第一回北部視察旅行の直接の目的はこの地域へのマリアの娘の会の進出ばかりでなく、なお、アルザス地方におけるマリア会の発展とメルシアン師との合意の成立でした。マリア会はメルシアン師からセン・ティポリットの城館とメルシアン師の数名の修道者を受け入れた時、キリスト教教育修士会の修道院の散逸の補充と教育事業、特に、小学校教育の刷新についての事実上の契約を約束していたからでした。

シャミナード師はアルザスの肥沃な地域を巡り、人々の信仰とマリアへの信心に感銘を受けました。ルイ・ロテア士が創立者に伝えたところによると、「フランスでもこれほどのマリアへの優しい信心を持っている地域は他にはありません。何世紀も前から、教会で、そして、冬の間はほとんどすべてのカトリック信者の家庭で、毎晩公にロザリオを唱えています。」このすばらしい地域で、マリアがマリア会を祝福してくださるに違いないことが分かり、早速、セン・ティポリットに寄宿学校を、アンメルスヴィルに小学校を開校することにしました。この二つの

町にはメルシアン師の修道者たちが働いていました。翌年、二つの新しい学校が、一つは以前メルシアン師の修道院があったリボヴィレに、もう一つはロテア師が主任司祭をしていたセント・マリー・オーミヌに開校されました。創立者は教育事業の完成を目指して各地に青少年のコングレガシオンを設立しました。不幸にして、マリア会の司祭の不足からこれらの事業を創立者が望んでいたようにしかるべく進展させることは出来ませんでした。創立者は、日々発展を続けていたコルマルの学校に特殊学校を追加しました。その一つは高等小学校で、もう一つは、その地域で既に重要になっていた産業の将来の管理職者を養成するための併設学校と呼ばれた特殊学校でした。アジャン出身の若い学校長クスツー士の評判はコルマル市外にも広まりました。校長の書道の才能は特に評価され、その書法は数年後普及してしかるべき評価を得ました。

マリアの祝福が学校によってばかりでなく、召命の数と質によっても明らかになってきました。こうした召命の評価は、単に話題に登ったばかりでなく、その召命を受けた人に保留された役割と、み摂理がその召命をマリア会に導かれた方法の特異性によって評価されたからでした。そこで、マリア会員の熱誠を北アメリカに普及することを目指したレオン・メイエ師について触れたいと思います。レオン・メイエ師はコルマルから4キロほど離れたエギスハイムの出身でした。司祭叙階後(1823年9月)、タレン司教はメイエ師をスヴェーデンのカトリック者の女王の下に聴罪師として任命しました。師は任地に出発しようとしていましたが、家族の不幸によって引き留められたため、決心を変えて修道生活を意図することのみを考えました。1827年の秋、イエズス会の修練院が置かれていたスイスのフリブールに赴く途中、書類を忘れたことに気づき、早速それを届けてくれるよう家族に伝え、その間、セン・ルミに立ち寄りました。それは、セン・ルミの寄宿学校の寄宿生として弟の入学許可を得るためでした。

セン・ルミで学友の一人であったロテア師に遭遇したのは何という驚きだったでしょう。ロテア師は早速メイエ師に近づき次のように話しました。「あなたをここに送ってくださったのはみ摂理です。黙想中の200名の小学校教師の許しの秘跡を手伝ってほしいのです。このように多くの先生方に対して、司祭は教区の二人の司牧司祭とわたしの3名だけなのです。」メイエ師はこの申し出を承諾し、マリア会員とその会則を紹介され、見聞することにすっかり目覚まされ、会員たちの中にいることの幸せを感じたので、彼らから離れたくないことを申し入れました。セン・ルミの場所を確かめに来たブノワ士の兄弟もやがてマリア会に入りました。また、すばらしい現業会員となった忠実な下男であったマキシミアン・ジャンも入会し、更に、メイエ師の姉妹もアルボワのマリアの娘の会の修道院に入りました。メイエ師はボルドーの修練院に入り、そこで、創立者と親しくなり、生涯創立者から離れようとしませんでした。

アルザスでは、小学校の発展と完成が、そして、フランシュコンテでは、中等教育と師範学校が創立者の配慮の対象として指摘される状態でした(25)。

この地方では、古典学科の進歩に重要な役割を演じた評価が特にラン師に帰せられました。ラン師は1826年の創立者の北部地方の視察旅行に随行し、グレーの公立高等中学校の指導に当たっていました。この学校は大革命前はイエズス会士によって経営されていましたが、その後、久しい間衰退していました。ラン師は就任時次のように書き送っていました(26)。

「この高等中学校は、地下室から屋根裏まで改装し、寄宿学校も作らなければなりません。住民の最も恵まれた素質や当局の誠実さ以外には何もありません。わたしにとって特に慰めになるのは、この地方では聖母マリアへの優れた信心があることです。グレーの聖母がこの近隣で特に崇敬されています。」ラン師はそこでマリア会の最初の事業であったコングレガシオンを再開しました。このコングレガシオンは昔イエズス会士によって作られた職人の華やかなコングレガシオンで、ラン師はこれを指導しました。

ラン師は高等中学校ですばらしい成功を収め、第一級の教育者として評価されました。そのすばらしい能力は経験によって円熟していたからです。師は、まず、ボルドーのセント・マリー寄宿学校で、また、ランド通りのマリア会の小神学校の校長としてその能力は試験済みだったからでした。師は、ボルドーでの競争システムばかりでなく、教育観察の成果と同様、生来の才能であった教育感覚をグレーの学校に伝えました。師は、少年たちの過失や能力に関する知識の不足に対して、少年たちにこれを引きつける特別な素質を与え、常に新鮮な話題で彼らを引きつけ、魅了し、しかるべき時に正確な判断で賛辞や非難を区別させ、相互に愛し愛させ、一言で言えば、少年たちの知的、道徳上の成長の最大の利益のために好意をもって指導しました。優れた教育者であると同時に、熟練した教育者であったラン師は、その教育法を活性化させ、最も困難な題材も自然にあふれ出る詩的な魅力でカバーするようにしました。常に生き生きとしていた想像力は自然のあらゆる印象に敏感でした。したがって、文学的好みを持っていたにもかかわらず、自然科学に強く惹かれていました。ボルドーでは好んで自然科学を研究し、当市のリンネ協会の設立に寄与し、昆虫学概論の出版が出来るよう研究を推進しました。すべて気高く美しいもの(27)に本能的に惹かれていた感受性の強い、優しい性格のラン師は、50歳にして、なお、学生の晩学を再開出来、そして、より多くの善をなすために必要であった資格取得のため、臆することなく青年たちのための試験に挑戦するという大きな犠牲の可能な強い意志に恵まれていました(28)。

生徒はその全地域からグレーに集まり、やがて、ララン師は200名の生徒を数えるすばらしい高等中学校の校長になりました。ニームのブッソン司教は次のように語りました(29)。

「数年後、人々がこの若い校長についてうわさしていたことは、少年たちを惹きつける技術、成長していく少年たちを掌握するのにより困難な技術を信じがたいほど高い程度に備えていたことでした。1846年にわたしはグレーの高等中学校付き司祭でしたが、この学校は校長の魅力的な指導とその成果に満たされているように思いました。ララン師は本校を3年間指導しましたが、それから16年たってもその名声はすべての人々の思い出になっています。」

ララン師はやがて大学の束縛によって窮屈を感じるようになりました。師が創立者にも伝えていたように、師は、政府がこの高等中学校をマリア会に譲渡することを期待していました。しかし、この期待は文部大臣ヴィレールの大失態によって消え去りました。この時から、ララン師はより自由な活動を続けるためセン・ルミに注目しました。1829年、創立者の承諾の下に提出された辞表は受理されました。教区の司祭たちは何名かの例外を除いて、マリア会と大学間の協力を快く思っていないでした。ララン師は、「高貴な人々はマリア会が何らかの形で大学の事柄に干渉することを好まないようです(30)」と書き送りました。1828年6月の例の政令は、国の制度への大きな反対であり、私立学校の非弱体化への反対でした。

ララン師がセン・ルミで感じたことは、1825年の開校以来、非能率的な形で運営されていた後期中等教育でした。師はある制度の設置許可を政府から取りつけ、極めて興味深い教育法を試みることに専念しました。グレーの高等中学校の生徒の大半は校長に従ってセン・ルミに移転していました。こうして、既知の生徒たちの獲得と父兄側からの確実な、そして、全面的な信頼の二重の利益を享受していました。

ララン師の基本的計画の一つは、従来置かれていた観点より重要な観点を体育に置くことでした。したがって、その実施には空き地、新鮮な空気、広い運動場が必要でした。セン・ルミではこれらの条件は十分備わっていました。すなわち、芝生で区切られた広大な公園、果樹園や森、どのような町や工場によっても近隣を汚染しない新鮮な空気、一方はヴォージュ山脈の遠い、規則的な連山によって遮られ、他方はソーヌ河の河川を縁取るより近い丘によって遮られたすばらしい遠望がありました。

ララン師はこれらの条件を利用し、散歩や体操を増加し、プールを設置し、乗馬を導入しました。教育そのものが戸外生活の利用でした。また、自然の観

察に熱情を傾けることが出来た教師によって地質学、植物学、天文学がいとも簡単に教えられました。時には、実証科学が具体的で明白な事例で教え込まれました。城館の前に広がっていたすばらしい芝生は、地形や県境、河川や都市のある大きなフランス地図に変えられました。こうして、この庭園は、人々が遠くから見学に来、今日なおこの芝生の地図はすばらしいデッサンの広がる場所をしのばせるセン・ルミの名所の一つになりました。

カリキュラムは教育の一般的システムに劣らず新鮮なものでした。ララン師は古典文学に大胆に挑戦して、師の言葉によれば(31)、「現在までラテン語のみに残っていた中等教育の教育法の基本を、いわゆる基礎の文学と自然科学に移転することによって、」中等教育を現代社会の要請により適用出来ることを主張しました。ラテン語が学問的用語であったためラテン語に与えられた優位性がその存在理由でしたが、この足かせから解放される時が来ていると考えたからでした。したがって、師はカリキュラムを「三部門すなわち、数学、実証科学、人文科学」に区分し、次のように指示しました。

「それぞれの分野は、周知の通り、同じ重要性を持っている。能力と教育の進歩がこれを要請し、認められる限り我々は相互の分野に優位性を持たせて断固これを推進しなければならない。したがって、こうした分割によって今日の時代がそれほど望み、しかも、中等教育のカリキュラムによってそれほどおろそかにされていた数学と実証科学に重点を移さなければならないからである。」

ギリシヤ語は選択科目になりました。ラテン語の教科には、「文学に関する趣味を解釈する」特性しかありませんでした。母国語のフランス語は人文科学で最重要課目になり、現用語のドイツ語とイタリー語はフランス語とラテン語の学習に役立ちました。芸能科目は新しいカリキュラムの中で選択科目以上に重要になりました。ララン師は次のように指示していたからでした。「芸能科目はあえて自然科学や人文科学と同列に置かれるものではない。しかし、この教科は少なくとも自然科学や人文科学と共に促進させなければならない。中等教育の観点からすれば、教育課程の完成のためである。」

セン・ルミの寄宿学校は間もなく有名になりました。地区の当局者はこの学校を視察し、保護者たちは城館から離れた所に居住していましたが、学校の様々な式典に参加していました。もちろん、演劇の上演などありませんでしたがボルドーのセント・マリー寄宿学校のように、コングレガシオンや文芸協会よりの資金援助によってささやかな催しが行われていました。その最も興味を引いたプログラムは、フランスの歴史やその他何らかの古典的題材から脚色した対話劇でした。その構成は校長の才能にかかっていた。保護者は学年末の

試験によって子供たちの学力の向上を確かめることが出来ました。

こうした大胆な改革について、創立者はどのように考えたのでしょうか。原則的にはこのことに同意しましたが、余り大げさで、急ぎ過ぎと考え、次のように書き送りました(32)。

「わたしが、ほとんどすべての老人のように、自分で見聞したことしか評価しないとあなたが考えるなら、あなたは考え違いをするに違いありません。わたしは、カリキュラムや教育法は最高度の完成を目指すことが出来、また、与えられた期間内によりよく学ぶことが出来ることを確信しています。建物の用地が立派に整地されていなければ、建物のプランがどんなに科学的に作成されていても、決して立派な、しかも、堅固な建物は建てられないことにどうぞ注意してください。」

創立者はララン師に余り急進的でないように、特に、教育改革については衝動的でないよう要請しました。ララン師はやがて創立者が正しい判断をされたことを認めなければなりません(33)。しかし、全体として、その成功はララン師の努力によるものでした。また、その巧みな指導によって、マリア会のために若い教員が養成されると共に古典教育の発展にも対応させたからでした。確かなことは、大学がこうした発展をいちじるしく妨害し、当時、中等教育をマリア会の副次的事業とすることを余儀なくさせたことでした。

創立者はこうした状況を理解して師範学校に全勢力を注ぎました。クルーゼ士に「師範学校こそ現時点のわたしたちの事業です」と書き送りましたが(34)、更に、次のように伝えました(35)。

「師範学校と教師の黙想会の成功のために、また、ブザンソンの施設(病院の建物)のためにもあらゆる用心をしてください。本会の他の学校がどうであっても、もちろん、み摂理のおぼし召しによるものですが、わたしはこれらの事業を神の霊によって直接鼓吹されたもの、マリア会の基本的な事業でなければならぬと思っています。」それから数箇月後、また、次のように要請しました(36)。「あなたの計画を説明してください。ご存じの通り、これは本会の主要な事業で、わたしが非常に心にかけて、全会員にとっても最もかかわりの深い事業だからです。」創立者はセン・ルミの視察のたびごとに何らかの改善を実施するよう勧めました。また、地方当局の協力を当てにしていました。ドゥ・ブランカ知事は地方自治体の費用で1, 2名の志願者をセン・ルミに送り込む約束を県のすべての市町村長から取り付けるよう努力しました。創立者の考えでは、セン・ルミは中間駅に過ぎませんでした。しかし、この初期の師範学校が一年前からスタートすると、創立者はこのすばらしい学校の普及に手を染めていたことが分かりま

した。会員が驚かされたことは、あらゆる状況に控え目で謙そんであったにもかかわらず、こうした壮大な計画にもちゅうちょせず、しかも、慣れない熱誠の実現に突進する創立者の姿を見ることでした。創立者は革命のぼっ発が近いことを予測し、神の罰を遠ざけ、あるいは、悲惨な結果を和らげることが出来る教育をフランスに保証することを急いでいたように思われました。

創立者の計画は、1825年に、パリから始めることでした。パリでは、ドゥ・ケラン司教やドゥ・シャブロール警視総監がこの種の学校のための施設を強く望んでいたからでした。彼らは望ましいあらゆる条件が備わっているように思われた大きなリシュリウ邸宅(37)に注目していました。創立者はその建物を購入ことにして次のように書き送りました(38)。

「大きなリシュリウ邸宅はパリに必要と思われる修道会の施設には極めてふさわしいように思われます。わたしたちの主要な、直接の事業が初等教育のための師範学校であり、教師の年の黙想会が実施出来るためでなければならぬからです。この師範学校にはセーヌ県の若い教師のみならず、より近くの学校よりもこの学校を選ぶ他の地域のすべての教師を受け入れることになるに違いないからです。また、こうした学校の立派な管理によって多くの庶民を向上させることが出来るに違いありません。これがマリア会の一つの目的でもあります。わたしがパリに大きな施設について話すのは、問題となっている重要な事業に、また、至る所で特に有益になっているコングレガシオンの事業にも立派な影響を与えるからです。」そして、更に次のように付け加えました(39)。

「もし、神がわたしたちがパリに行くことを望まれるなら、わたしたちには何の心配もかけず、自由に、わたしたちをお呼びになるに違いないからです。」

神はこの時代にこうした計画の実現を望まれなかったのでしょうか。あるいは、ただ人々のみがこれを邪魔したのでしょうか。確かなことは、創立者がリシュリウ邸宅購入のため必要な20万フランのねん出を援助する人がだれも現れず、計画が放棄されたことでした。

セン・ルミにより近いジュラ県はドゥー県やオート・ソーヌ県が既に享受していた師範学校の恩恵を求めていました。1823年に復興されたセン・クロードの司教座に着任された極めて活動家のドゥ・シャモン司教(40)は教育事業に関心を示し、学校の全生徒を収容出来る建物を探していました。教区の北端に位置していたフルトフォンテーヌ(42)の部落にあった戒律修道会(41)の旧小修道院が司教に贈呈されました。司教は、早速、同小修道院をマリア会とシャミナード師に提供する事を伝えてきました。創立者はずっと以前から同司教の評判は知っていましたが、その事業のことはまだ知りませんでした。

シャミナード師は直ちにこの問題にかかわることを了承しませんでした。それは、ちょうど、バルドゥネ師が旧カプチン会のアガタンジュ師と県庁所在地ロン・ル・ソールニエに師範学校の創立を交渉していたからでした。そこで、しびれを切らした司教はバルドゥネ師やマリア会はさておき、司教総代理のリヴィエール師に次のように書き送りました。「わたしの悩みはバルドゥネ師がこの事業にかかわり合っていることです。彼は宮廷や市の人々を震え上がらせる莫大な、驚異的な無駄遣いのプランしか持っていないからです。」司教はこうした事業をより早く、より安価で実施することを企てたいからでした。司教はクルトフォンテーヌの近郊の村に最近設立されたダミアンの聖ヨゼフ会の旧会員をクルトフォンテーヌに居住させていました。また、後に、永続性の修道会創立で知られることになる同修道会のガブリエル・タボレン士(43)の協力を得て師範学校の経営の出来る小共同体の設立を試みましたが、しかし、熱心なタボレン士ではありましたが、移り気の性格は、準備された計画、そして、何よりもまず忍耐を要する計画には不向きだったからでした。タボレン士の修道会創立数箇月後、司教が見たものはも抜けの殻の修道院でした。タボレン士は姿を消し、そこには共同体も学校もなかったからでした。司教は後ほどこの事件を思い出し、ある日、クルトフォンテーヌの修道院を訪れて次のように述懐されました(44)。「わたしは、ここに、この建物に、学校を運営する聖ヨゼフ修士会を創立するつもりでしたが、成功しませんでした。修道会の創立には司教であっても役に立ちません。皆さんの創立者シャミナード師のように聖人のような人であり、神から召された人でなければなりません。」

ドゥ・シャモン司教はまたシャミナード師と親しくなり、1827年、シャミナード師が北部地方の視察旅行をなした時、個人的に再会を果たし厚い友情を交わしました。そして、シャミナード師の晩年の最も苦しい時期まで友情をあかししました。1829年6月23日の政令によって、セン・ルミの師範学校と同時にあらかじめ認可されていたこの師範学校は、各種の理由で同年11月にしか開校出来ませんでした。県当局の好意によって設立が許可されたこの師範学校には、セン・ルミの経験が活かされて、カリキュラムと教師の黙想会が確立されました。

創立者がより広範な計画を考えていたのはこうした時期でした。マルティニャック内閣が続く限り、キリスト教師範学校の普及計画は麻痺していました。主要都市に「普通学級」の設立を奨励していた政府は、ストラスブールのモデル学校(45)のように自由主義の導入を勧めていたからでした。ちょうど新内閣がカトリックになったので、ポリニャックとモンベルはこれまでの政策の危険性と時の必要性を意識して、学校の立派な教師の募集を容易にするため、政府の通達や政令を公布しました(46)。この時期は適切でした。したがって、政府が少しでも県当局に誠実な支援を与えるなら、キリスト教師範学校の迅速な普

及が保証され、また、このことによってフランスの再生が保証されるに違いなかったからでした。このことはシャミナード師の確信でもありました。そこで、次のように書き送りました(47)。

「わたしの推論は次の通りです。すなわち、フランス国民の4分の3以上は庶民階級です。したがって、新しい世代の人々全員に真の教育を施す手段があれば、フランスの大半の青少年はモラルと精神を変えることが出来るに違いありません。ところで、マリア会が理解しているような師範学校は、現役の教師を矯正し、大部分の子供たちが大人になってからも維持出来る力強い教育を施すことにふさわしい新しい教師を養成することです。」更に付け加えました(48)。

「確かなことは、あらゆる面からフランスをおどす革命に勝利を得ることが出来るにしても、これから表れる世代を救わなければフランスは自滅します。全く腐敗しきった当代の世代をどのような手段で救うことが出来るでしょうか。子供は両親に似て、彼らの道徳上の原理と生活習慣を身につけています。この父にして、この子ありと言われます。両親がいなければだれがその代わりをなすことが出来るでしょうか。主任司祭でしょうか、助任司祭でしょうか。彼らが子供たちに接するのはまれで、子供たちに対して余力がありません。子供たちの近くに立派な教師がいなければ彼らはだめになります。」

そこで、創立者は政府と交渉して、他の修道会、特に、ルアンに師範学校を開校したばかりのキリスト教教育修士会との協力を提案しました。要点は師範学校の急速な普及でした。それは、無宗教を常により深く浸透させている悪の回復に立ち向かうのは今この時期しかないと考えたからでした。

創立者は政府の決定を考慮しながらも、ずっと以前から要請されていたオーレン県への師範学校設立を早めることにしました。この創立はシャミナード師にとって重要でした。メルシアン師の事業の継続を承諾しながらも、メルシアン師のように遠く離れた部落へ修道者を派遣することは了承しませんでした。それは孤独な共同体になるからでした。したがって、出来るだけ早くアルザスに信徒教師を提供するよう配慮しなければならなかったからでした。セント・イポリットとコルマル間に師範学校の設立をちゅうちょした後、コルマルを選ぶことに決定しました。コルマルの市長がその全費用の負担を申し出たからでした。開校は次年度の秋(1830年)になりました(49)。創立者は同時に、かつて設立を要請されたが不愉快な思いをさせられたツール教区の代わりにナンシー教区に師範学校を設立することをフォルベン・ジャンソン司教と合意しました。また、ツールズの大司教の枢機卿から、カルヴェール・ミッション会の建物を同じ目的、

すなわち、師範学校設立のために使用するようとの提案を頂きました。更に、キリスト教職業教育の恩恵を女子教師にも普及することを考え、アセーのマリアの娘の会で、女子青年のための師範学校設立の手段を研究していました。

以上がすべてではありませんでした。1830年の4月末には新しい、そして、より広範の展望が創立者の熱誠を目覚まししました。アレックス・ドゥ・ノアイ伯爵が、「かつての敬けんな友情」に期待して、コルレーズ県に師範学校の設立を援助するよう創立者に依頼し、最初に好意的な返事を受け取った後、次のように書き送ってきました(50)。

「わたしの願いがかなえられ、あなたに最高にふさわしい種類の学校をノアイに設立していただくことを考えるとうれしく、胸がどきどきします。どうぞ、わたしを会員の一人としてお使いくださるようお願い致します。わたしたちは、あなたが満たされている神の敬けんな息吹にかられて自由に行動されることを期待しています。わたしがあなたに要請することを特に刺激されたのは文部省であったことを喜んでお伝えします。わたしはあなたが従事している事業ほど現代で有益で適切な事業を知りません。」伯爵自身ボルドーを訪れ、この件についてシャミナード師と打ち合わせ、創立者の必要とした全費用の支出を了承し、そして、伯爵の力によって、ロット県、ラ・トルドーニュ県、そして、カンタル県に、近い将来、師範学校の設立を保証し、その配慮と指導をシャミナード師に委託しました。ドゥ・ノアイ伯爵は政府に対して大きな影響力を行使出来た議員で、個人的にも富裕な人でした。こうして、資金に関する主要な障害は解除されました。

創立者は神の栄光をもたらす大きな期待の内に心から願っていた目的が達成されたので感動したのではないのでしょうか。そして、どのような障害もこの計画の実現を阻止しないように願い、フランス全土にこのキリスト教教育を普及出来る師範学校を確立しようとしていたように思われました。これらの師範学校はキリスト信者居住の中心地帯から確実に信徒の教師を提供するに違いなかったからでした。創立者は既にゴーザン士を現地に派遣していました。それは、革命のあらしがフランス全土に吹き荒れ、これらのすばらしい計画を一気に覆す時、迅速な措置が準備出来るためでした。神はそのしもべ創立者の善意に満足されたに違いありません。



注

(1) 1826年9月11日、セント・マリー寄宿学校の卒業式の講話

- (2) 1814年6月4日
- (3) 1822年6月21日、ダヴィド士へ
- (4) 師は20年後1844年9月付けの手紙で、このことをドンネ大司教に伝えることとなります。
- (5) 例えば、しばらく業務を差し控えることを要請されましたメール・ドゥ・トランケレオンは、次のように答えました。(1820年5月22日)。「わたしにとってボン・ペールの希望は従順によって命令されることと同じように思われます。わたしがこの試練にあっているのは神のおぼし召しに従うことだと思えます。わたしが14年前から手がけてきた事業の中止はわたしにとって本当の犠牲です。」
- (6) 1827年1月29日
- (7) 1819年2月6日
- (8) 1827年8月17日、ボルドーの院長へ
- (9) 1827年9月5日
- (10) 1827年9月19日、ボルドーの修道院の院長であったメール・セン・ヴェンセンへの手紙
- (11) 1826年5月23日、クルーゼ士へのシャミナード師の手紙による
- (12) ドゥ・ソラジュ師は南太平洋諸島に従事していた宣教の援助をシャミナード師に急がせました。(1830年2月15日と22日のララン師からシャミナード師への手紙)
- (13) 1817年7月14日、メール・ドゥ・トランケレオンからドゥ・リッサン嬢へ
- (14) 1817年7月17日、メール・ドゥ・トランケレオンからドゥ・ラシャペル嬢へ
- (15) 1818年5月7日
- (16) 1821年8月6日、メール・テレーズへ
- (17) 1827年7月16日、ボルドーのマリアの娘の会修道院院長へ
- (18) 1825年1月18日、クルーゼ士へ
- (19) 1826年8月24日
- (20) ララン師、「歴史概要」、32ページ
- (21) 1830年2月3日のララン師への手紙参照
- (22) 1825年6月7日、カイエ師へ
- (23) 1830年3月10日、クルーゼ士へ

(24) 1825年6月23日、カイエ師へ

(25) シャミナード師は、例えば、1827年のオルジュレでのように、小学校の設立の機会が訪れた時邪魔されませんでした。

(26) 1826年9月21日、コリノー師へ

(27) 後になって、ララン師は、こうした性格で、古典作家の要求に従うことを拒否したことが分かりました。その著書、「教育」(1870年、パリ)にルイ・ヴォイヨへの宗教的回答が見られます。366ページ。師は多くの著書、特に、当時代を評価した修辞学概要を著しました。

(28) 学士の資格と文学博士の資格

(29) 著書、「スタニスタス高等学校」、「歴史概要」、269ページに記載。

(30) 1826年9月12日、シャミナード師への手紙

(31) 1832年、古典教科のカリキュラム

(32) 1930年3月9日と1932年8月23日

(33) 1870年に出版されたその著書、「教育」に披れきされた理論、慎重な態度で示されていました、によって判断されました。

(34) 1831年12月5日

(35) 1827年5月15日

(36) 1827年12月27日

(37) ベテューヌの河岸

(38) 1825年7月10日、カイエ師へ

(39) 1825年7月23日、カイエ師への手紙で、一度パリに施設が出来れば、マリア会の総本部をパリに移転することを考えていました。

(40) ドゥ・シャモン司教は1767年7月25日、ヴォージュ県のビュルネヴィルに生まれました。1789年に司祭に叙階され、ドイツに移住していました。1815年にブザンソンに帰り、ある軍隊の聴罪司祭に任命され、1818年、カルカッソンのドゥ・ラ・ボルト司教の司教総代理になり、政教条約前にはボルドー教区の旧管理者でした。1823年7月13日、セン・クロードの司教に聖別され、1851年5月28日に帰天しました。

(41) 戒律修道会はオグスチノ会の会則をしゅうとうし、ブザンソンの聖パウロ修道院所属でした。小修道院には小さな建物しか残っていませんでした。純粋なロマン式教会は元のままでした。今日なお賞賛されています。

(42) 岩から流れ出るとすぐ地下の穴に消えた豊かな泉の名で呼ばれていました。

(43) 1799年11月1日、ビューゼ(エーン県)の山で生まれたガブリエル・タボリン士は、ダミアンの聖ヨゼフ修士会の志願者になりました。彼は1824年にセン・クロード教区と1826年にセン・クロード市に、2回、信徒修道士会を創立しようとしたが成功しませんでした。そこで、故郷のベッレ教区に帰りました。そこで、聖家族の修道士会を設立しました。この会は現在も続いています。1844年11月24日 帰天しました。

(44) 1841年、共同体の全会員の前で。ブノワ・メイエ師の覚え書き

(45) 1828年5月6日と8月19日の政府通達

(46) 1829年12月19日の通達と1830年2月20日の政令

(47) 1830年2月15日、ララン師へ

(48) 1830年3月4日、ララン師へ

(49) 1830年4月、ララン師への手紙。前年、シャミナード師はストラスブールの師範学校を視察し、案内した大学区長の誤りを指摘しました。(1830年2が流22日、ララン師)

(50) 1830年五月19日

第 32 章 試練の開始 (1830)

1830年の革命 ❖ ボルドーの反響 ❖ 暴動、シャミナード師の住居の家宅捜索 ❖ アジャンへの出発 ❖ 革命への態度 ❖ 修練院の分散 ❖ 師範学校の廃止 ❖ マリア会の財政難 ❖ 修道者の不安 ❖ その不満、統治 ❖ 新会憲 ❖ コリノー師とオギュスト士2補佐の不满。

1830年7月末、シャミナード師はマリアの娘の会の総長の選出のためジャクピー司教と共にアジャンを訪れていました。ある日の正午ごろ、修道院に帰ると、シャミナード師の部屋の前で待っていた若い秘書のギヨン・ドゥ・ベッルヴ師(1)が、「神父様、パリに革命が起きました。国王が勅令を撤回したからです」と伝えました。老齢の創立者は、信頼していた国王の権威の失墜を深く悲しんで、「国王が譲渡したのですか」と叫びました。創立者は、宣教プランの実現に感動していた時に、すべての宣教プランの崩壊の苦しい展望、また、自由主義に対抗する最後の障壁の崩壊、そして、はかり知れない結果をもたらす信仰のかい滅を一瞬感じたからでした。

フランスには、ずっと以前からこのような災難の到来に遭遇しても動じない良識の人がいませんでした。シャミナード師の通信はこの動乱の予感が満たされていました。こうした事件の起きる6箇月前、ララン師に、「わたしたちは火山の上を歩いていること、多分極めて近い将来動乱を体験するかも知れないこと、を忘れてはなりません。ひたすら用心して前進しましょう」と書き送っていました(2)。1830年の4月、政府の強硬な抵抗によって将来に何らかの希望がもたらされた時、創立者はララン師に、「国王の親切な態度にもかかわらず、わたしたちは残念な事件から逃れることは出来ません」と過信を用心させました(3)。パリがバリケートで覆われ、革命のあらしがフランス全土に及び、ヨーロッパのあらゆる国に影響を及ぼして、社会秩序の根幹さえ揺り動かし、王位や教会を憎しみで混乱させたように思われた時、創立者の直観が明らかになったのでした。

シャミナード師は、創立者メール・ドゥ・トランケレオンの帰天後、既にマリアの娘の会の総代理であったメール・セン・ヴェンセンを新総長に就任させる期間しか滞在しませんでした。取るものも取りあえず、活動の中心地ボルドーに帰り、その数日後、次のように書き送りました(4)。

「今日まで、ボルドーではすべてが平穏です。ということは、わたしたちの施設には不都合なことが何も起きていないわけです。しかし、今度の事件は見かけにもよらず多分重大なように思われます。その結果を予測することはほとんど困難です。今日はっきり言えることは、どこの施設でもこれまでと同じように続け、出来る限り自分たちのことは話さず、そして、出来るだけ目立たないようにすることです。神が至る所でたたえられますように。神の恐ろしい正義のおぼし召しに忍耐して従ってください。」

創立者は信仰の光で革命の結末を予測して、「この革命は明らかにフランスに対する神の罰です。わたしたちは皆罪人であり、皆罰を受けるにふさわしいからです」と書き送りました(5)。創立者が、通信で満足して指摘したボルドーの平和もつかの間の平和だったからでした。「3月12日」のボルドー市内は、正統派王朝の人々であふれ、革命派の人々がその勝利を安心して享受出来る雰囲気ではありませんでした。したがって、自由党派員たちは反動の首謀者として指令された人々を入念に監視することも出来ませんでした。ところが、シャミナード師もこの反動者の数の中に数えられていたのです。シャミナード師はその主要なつながりが正統王朝派であり、また、地域の聖職者や一般信徒とは異なり、正に信仰の人であることが知られていたからでした。また、ボルドーの名士たちとの関係ばかりでなく有名な政治家、ドゥ・マルセルス伯爵(6)、ドゥ・モンモンランシー公爵、ドゥ・ノアイ伯爵、ベッリエ父子(7)、ドゥ・フォルモン・ジャンソン司教(8)、そして、法律学校の講義が中断されたドゥ・ポルテ氏(9)等、との友情があることが非難されてきたからでした。これらの人々は皆国王シャルル10世の明らかな支持者だったからでした。その上、コングレガシオンの指導司祭という資格のみで疑いの目で見られていたことは十分でした。当時、コングレガシオンは、旧制度に反対するすべての敵に対して団結させる力を持っていたからでした。自由主義者たちはこの旧制度に対して共通の嫌悪感を抱いていたからでした。

創立者はこうした状況の中で、何事についても用意が出来ていました。それでも、慎重のうちにも多少ろうばいしていたのではないのでしょうか。1831年1月30日にはラランシに次のように書き送りました。「わたしたちは全く新しい世界のまっただ中にでもいるようです。フランスにいてもなんだか外国にでもいるような気持ちです。何を話し、何をしたらよいか分かりません。わたしが心に決めていたことはもめ事を起こさず、むしろ事件に直面しないようにすることでした。毎日聖母にお助けを願う以外他に手だてがありません。」やがて新しい試練が訪れようとしていた時だけにこのことは賢明な選択でした。

パリとボルドーの正統王朝派の合意によって、2月14日、ベッリー公爵の暗

殺の命日の行事が準備されていました。2月11日、白色のリボンを着けて熱狂した人々が過度に興奮してポルト・ビジョー通りのミラク宝石商店に押し入りました。式典はセン・ミシェル教会で行われる予定でした。この教会は1814年に最初の白旗が掲げられた所で、シャルル10世党の温床として指摘されていた、いわゆるモンテウゼ信徒団体が集結した教会でした。しかし、式典は中止されました。そして、日曜日の前晩、興奮した群衆は晩課が終わった時教会に押し入り、聖歌隊がいつもの聖歌、「Domine, salvum fac regem」(主よ、わたしの王を安全に守りたまえ)を歌い始めると、彼らはその後、「フィリップ王を」と叫びながら付け加えました。このことから、教会は騒然となりました。こうして、その翌日には、市内で賑やかなパレードや、没落政体の記章狩りが続き、公共の建物はユリの花で飾られました。2月14日同日、パリで起きた暴動はボルドーにも伝えられ、司教館や教会が略奪されました。こうしたことはシャルル10世党の秘密計画であったという結論になりました。その結果、前回よりもおだやかなデモ行進が行われました。セン・ミシャル教会内のモンテウゼのシャペルが略奪されるほど教会の尊厳が完全に傷つけられたからでした(10)。シャルル10世党の著名人の所に警察の捜査が入りました。当時の新聞(11)は、その著名人を、「ドゥ・ゴンポー、タファール・ドゥ・セン・ゼルメン、エステブネ、そして、シャミナード」と報じました。

シャミナード師が、かつて、ブルボン王朝の復帰を準備したドゥ・ゴンポー氏やタファール・ドゥ・セン・ゼルメン氏等の政治家と混同されることは不見識の限りでした。シャミナード師は、ほとんどこの同じ時期に、政治家を全く人間的な関心から引き離すよう努力して、熱心なある正統王朝派の人に次のように書き送りました(12)。「既成の政党に対しては何もなしてはならないというのがわたしの原則です。わたしはこの原則の実施によってすべての革命を乗り越えながら聖職に従事し、隣人に役立つ者になりました。」数日後、シャミナード師は、ある判事にこの同じ考えを表明することになりました。「既成の政府当局に従うこと、これを倒壊することを目指すいかなる者にも協力しないことがわたしの信仰と良心の原則です。したがって、あなたが指摘するようなこの種の陰謀が存在することを知ったなら、わたしはこれを非難するに違いありません。」

したがって、創立者は、些細な嫌がらせにさらされても少しも心痛を覚えませんでした。かえって、冷静であったことは、その後次のようにしたためられた表現によって判断することが出来ました(13)。

「わたしは知らなかったのですが、パリで行われた重大な騒動のためでしょうか、わたしは大がかりな捜索を受けました。家屋内の捜索は順当に行われましたが、屋外では大衆が終日ラランド通りを占領していました。その数は300名か

400名だったということでした。投石や棒切れ等で壊された3番地(14)の窓ガラス以外、他の被害はなかったとのこと。話によると、おせっかいな隣人がはしごや棒切れを彼らに与えたとのことでした。家屋内の捜索は3時間半ぐらいでした。」

裁判所の家宅捜索の詳細は次の通りでした。それは、2月18日、朝の10時ごろからでした。リモージュという検事代理が一団の兵士を従えて表れ、すべての出口に歩哨を立てた後、マドレーヌの教会に入りました。シャミナード師が告白場でミゼリコルド会の院長(15)に許しの秘蹟を授けていた時でした。検事代理は家宅捜索の実施に関する令状を提示しました。何ら驚いた様子も示さなかったシャミナード師は自分に従って来るようにと彼らに合図しました。警察の公式報告書には次のように記されていました。

「彼はわたしたちをその家屋の正面にあった寝室に案内した。戸棚と机のかぎが渡されたので、そこで発見することが出来た書類や手紙等、すべての書類の綿密な調査を実施した。我々は捜索の対象と関係する書類は何も見いだせなかった。様々な書類はシャミナード師の個人的関係書類及び彼が総長になっているマリア会関係の書類でしかなかった。その他に我々が見いだしたものは聖母マリアの肖像で、小さな「無原罪の御宿りのマリア」の銘のある4枚のメダイだけでした。この4枚のメダイは我々の手で封印し、勝手に変更しないよう裏にシャミナード師によってサインされた。」

これら4枚のメダイは警察がシャミナード師の家屋で不審なものとして探し出したすべてのものでした。このメダイはエステブネ師の所でも同様に発見されていました。同様に市内のすべての熱心な信徒の所でも発見されるものでした。ボルドーでは特にコレラが猛威を振るって以来、この小さなメダイを身に着ける習慣があったからでした。ところが、やがて、不思議のメダイがこのメダイに代わって着けられるようになりました。しかし、警察はこのメダイは王党派共和制参加の印ではないかと疑って、至る所から急きょこれを没収しました。シャミナード師の家宅捜索の調書には、この没収の実施状況には触れていませんでした。ところが、その翌日から、ボルドー中の人々がこのことを物笑いにしました。検事代理が、例の疑わしいメダイを示して、「これこそ王党派参加の印だ」と勝ち誇ったように叫んだからでした。当時、シャミナード師は検事代理を着座させるように促して、「このメダイの意味を説明しますから聞いてください。世界創造の初めにアダムとイヴが幸福な状態で地上の楽園に置かれたことを知りませんでしたか」と答え、いつもの落ち着いた根気強さで、原罪についての教義、マリアに与えられた優れた特典の説明に取りかかりました。当惑した検事代理は、「でも、神父さん、本題に入ってください」と叫び出しました。そこで、シャミナ

ード師は、「あなたが遮るなら、話は長くなりますよ」と答え、没収されたこのメダイは2箇月前からここにあったので、現在の陰謀とは何ら関係がないことを更に説明したので、抗議にお手上げの検事代理は、よく分かりましたと答えて立ち去ったということでした。

外部からの進入がより危険であったと言わなければなりません。群衆が教会や3番地の建物の門を鉄棒で打ち壊そうとしたからでした。しかし、このことは失敗し、建物からの略奪もしぶしぶあきらめました。警察に散らされた群衆は、ドンデゥ通りに他の「enchaminadés」(シャミナード支持者)(16)がいたことを想起して、早速そちらに移動しました。彼らはセン・ローランの建物を投石で襲いました。小銃さえ打ち込みました。たまたま通りかかった警察の一団が彼らを解散させました。恐怖に襲われた修練者たちは修練院を立ち退きました(17)。」

いずれにしても、危機的な状況にありました。司祭たちはスータン姿で公に姿を見せることは出来ませんでした。シャミナード師は大革命の時のように努めて市民服を着用するようにしました(18)。将来が脅かされているように思われました。そこで、フランス全土が舞台になった動乱のため用心の策を講ずるよう要請されました。シャミナード師は業務の関係でしばらくボルドーを離れることを決意しました。費用の不足から中止するか休廷にしなければならないエステブネ師及びリガニオン師関係の訴訟の証人を努めるため、なおしばらくボルドーに止まりましたが、1831年3月10日、この不在は数週間にしかならないだろうと考えて、アジャンに赴きました。ところがこの不在はまる5年間続くことになりました。

シャミナード師はボルドーを離れる時、この7月の事件及びその結果に関してまだ決定的な考えを持っていませんでした。1830年8月、セン・ルミの卒業式の講話が人々を感動させたというララン師の楽天的な考えには賛成しかねたのではないのでしょうか。ララン師は、「アヴニール誌」が開始しようとしていたキャンペーンに備えて、当時は逆説的に思われていた自由と信仰を合わせ持つことが出来ることを主張していたからでした。シャミナード師は次のように書き送りました(19)。

「あなたがこの論文を書いたのは極めて純粋な考えでのことだと思います。あなたは今日の思想と信仰上の諸徳の必要性を近づける手段を考えたからだと思います。あなたが理解しているような自由や平等はすべての人々を悪に向かわせる毒薬とは違うはずです。」

ララン師が、ラ・ムネやラコルデルと同じ見解で革命を考え、動乱から生じた新しい社会の建設に強力な役割を演じ、新しいイデオロギーを支持すること

を夢見ていた時、シャミナード師はララン師の多少子供じみた熱狂に苦笑しながら次のように書き送りました(20)。

「計画は大胆です。それは信仰と正義に献身する強い人にはふさわしいことです。わたしはあなたの性格を知っているので、あなたがわたしになした提案には少しも驚きません。しかし、それは時宜に適しないことも考えられるし、年度末前にあたたも分かると思います。あなたはこの混乱から新しい世界が生まれることが出来ると言います。確かに、全能の神は混沌から新しい世界を造り出すことが出来ました。全能の神は偶像崇拜の中にキリスト教を作られたのではないのでしょうか。しかし、創造主が太古の昔、混沌から引き出した自然界を作られたのとは同じ方法ではありません。いかにもマリア会はこの幸いな再創造に協力するよう召されています。このことはご存じの通り、わたしの心からの望みです。しかし、『omnia tempus habent』(21)、何事にも時があります。)

多くの事業と多くの人々の上に責任を負わされていたシャミナード師は、世の動乱に無鉄砲に飛び込む代わりに、事件の真相が明らかになるのを待っていました。それが最も賢明な手段だったのではないのでしょうか。そこで、状況の許す限り、「sutatu quo」(現状維持)をいずこでも勧め、次のように書き送りました(22)。

「わたしたちは進めば進むほど、障害が増えているように思われます。神は祝されますように。神に仕え、また、人々に仕えさせるために出来るすべてのことを行ってください。不用心をしないように努力し、落ち着いてください。わたしたちは余り動き回るべきではなく、会員の移動も最小限に止め、革命前と同様、現在あるものを維持することに限るべきです。どこかで、聖なる者たちの忍耐の必要な時が語られています。(黙示録14-12)。わたしにはそれが現在の時代に当たるかどうか分かりませんが、そのように取ることは危険を犯すことでしょうか。」

当時の大部分の通信には同様の要請が繰り返されていました。例えば、多少向こう見ずの気持ちが極端な行動に導く恐れがあったララン師に、7月5日、次のように要請しました(23)。

「み摂理がわたしたちの歩んでいる地面を固めるまでは、どのような問題も検討しないでください。あなたはみ摂理の働きの早さに気づいているはずです。会員の移動も、改革も、わたしたちの注意をひくものは何もありません。これが11箇月前からのわたしの方針です。わたしは両修道会のすべての施設が一般にこのことを受け継いでいることを思って満足しています。皆さんは潜心のうちに信心に励んでください。」

宣教活動を妨げるのは革命そのもので十分でした。不用心や時宜に適しない手段によるその他の障害を更に加えることは慎重でなければならなかったのではないのでしょうか。既に、コングレガシオンは、少なくとも、成人男子のコングレガシオンはボルドーやその他の都市から退去することを強制されていたからでした。しかし、創立者にとっては宣教活動に関するみ摂理の導きをたたえる機会になりました。それは、マリア会員が、み摂理によって原則的にコングレガシオン活動に専念することを許されていたとはいえ、また、少なくとも臨時的とはいえ、その活動を指導していた他のコングレガシオンと共に退去することを余儀なくされたからでした。マリア会員たちも新政府が冷酷に追放したフランス司牧宣教会と同じ運命を耐えなければならないように思われました。しかし、マリア会の学校は教育活動のおかげで、容易に理解可能な苦しい状況にあったにもかかわらず生き延びることが出来ました。

1830年10月から、創立者はボルドーのマリアの娘の会の修練院を一時的に閉鎖し、修練者をアジャンに移すことを慎重に考えました。1831年2月の動乱後、セン・ローランとマドレーヌの修練院も閉鎖しました。それは、必要不可欠と考えた苦しい判断でした。いずれにしても、動乱が続く限り、召命は望めなかったのではないのでしょうか。信仰への憎しみが現実の話題になっていた当時代に、新しい創立を試みることが出来たのでしょうか。ところが、ベルフォールが新規創立の注目の的になりました。ベルフォールには、1830年9月に修道共同体が派遣されていましたが、暴動のため会員はセン・ルミに避難しなければならなりませんでした。

したがって、創立者は現在の施設をそのまま維持することが一番無難な策だと考えました。しかし、幾つかの施設が脅かされ、いずれも安全ではありませんでした。例えば、セン・ルミの施設は近隣の市町村の扇動者たちによって危険にさらされましたが、後にオート・ソーヌ県の知事になったブザンソンの大学教授アメデ・ティエッリ氏の毅然とした態度によって保護されました。確かなことは、だれもが、大学の不誠意、あるいはむしろ、自分たちの思潮に納得しない人々を抑圧するためにこれを利用して政府のやる気のなさを感じていたことです。

政府の意向は私立学校の優れた教科及び他の評判の課程を公表させることでした。それは、大学の権利を擁護するためと、国が私立学校後期中等教育の落ちこぼれの資格を無効にするという口実のためでした(24)。政府はそれ以上のことをしました。これまで、修道者は服従書を提示するだけで、校長の資格を享受していた権利を1831年4月18日の政令で抹消し、修道者の初等教育さえ非難したからでした。それ以来、すべての人々にとって、公式の

試験が義務化されました。こうした要求を推進した政府のねらいは、要求自体よりもその目指す人々に対する迫害でした。創立者は、「陶器の鉢は鉄の鉢に勝てない(25)」、すなわち、とても勝負にならない、という格言を会員に想起させて、政府の指示に従うよう要請しました。

シャミナード師の師範学校が提示する信仰上の目的は自由主義者たちの理解を超えたものではありませんでした。したがって、彼らをつまづかせないよう熱心に努力しました。当局の不誠意は様々なわずらわしさと生徒数の減少の現れでした。シャミナード師はこうした権力の姿勢に対して会員が自らのポストを放棄して信仰の敵を利することのないよう要請しました。「わたしたちは互いに助け合っていることだけでも大したことです。まだまだ目的には達していません。まだ足りません」と会員を激励していました。

果たして、当局の攻撃は学校の弱点に向けられました。すなわち、彼らは補助金を削除したので、学校は維持出来なくなりました。1831年11月11日、ジュラ県の知事は、「クルトフォンテーヌの教師は模範的な生活者であり、従順な教師で、また、寄宿学校では厳しい規則が守られているように思われます。しかも、約18名の教師がその学校から卒業しています。学校の運営に当たっている修道者たちは何ら不満を抱かず、彼らが県の教育に奉仕することをだれも否定しません。しかし、この学校は教育法や内部の制度が体制とは調和していません」ということは確かです、と県議会に報告しました。こうして、知事は割り当てられた補助金の撤回を要請し、了承されました。彼らはキリスト教の師範学校を持つより、師範学校なしですますことを選びました。セン・ルミの師範学校は、各県に公立の師範学校の整備を義務付けた1833年6月23日の法律の施行まで多少長く生き延びました(26)。

かつて余儀なくされた亡命、すべての活動の遅滞や減少、ある施設の廃止等は極めて著しい試練でした。しかし、これらの苦しみも創立者が当時味わった独自の、そして、最も残酷な苦悩ではありませんでした。それは一過性のものであり、政治的な展望によって安心がもたらされた時には解消されました。ところが、他の苦悩はより深刻で本会の内部まで浸透して来て、本会の存立を危機にさらすほどでした。創立者は久しい以前からこのことを予見し、恐れていました。1821年8月26日の手紙で最初の会員の一人ロジェ士は創立者に次のように書き送りました。

「神父様、わたしは、神父様がほとんどすべての修道会は本会同様急速に創立されたように思われるとおっしゃったことを思い出します。ところが、彼らには対立する様々な困難がありました。そして更に、当該修道会が行った善が

著しかったので、その発展を見た悪霊は憎しみで震えおののかざるを得ませんでした。そこで、わたしたちは悪霊から厳しい攻撃を受けることを覚悟しなければなりません。悪霊が時々光の天使に変わることはほとんど疑われず、しかも、わたしたちを混乱させる術策を用いることを欠かすことがないからです。」シャミナード師は、神はそのみ業の試金石である試練を何ら出し惜しみされず、たとえ教会外であってもそれは同じく神のみ業の最初の働きであるということを知っていました。したがって、これらの試練を信頼をもって、平静に受け入れました。試練に合っても少しも苦しませんでした。1829年には、「わたしの抱いている苦しみは墓まで続くに違いありません(27)」と書き送ることが出来ました。このことは余りにも真実でした。

久しい以前から、マリア会の財政状況は悪化し、政策的なことでこれが改善される性質のものではありませんでした。この件に関して、創立者の行動は確かに普段の賢明さによって、そして、特に、み摂理への絶対的な信頼の原則によって導かれていました。出費が人間的手段の結果によるものと思われ、まして、それがぜいたくや満足感の傾向の結果でしかないように思われた時、創立者は断固たる手段でこれに反対しました。これに反して、その支出が神のおぼし召しのように思われた時、すべての不安を抑え、目的達成の手段のみ摂理に委ねました。したがって、決して期待が裏切られることも、必要な正確な時期に救済されないことも決してありませんでした。こうした例は前述の逸話(28)の中に見いだされましたが、その音信の中にも数多くありました。ある人もこのことをたまたまあかししましたが、創立者は次のように書き送りました(29)。

「神は時々ご自分への信頼を試すことを望まれます。約束手形1000フランの支払いは先月2月28日になっていました。ところが、前日になってもその支払い方法が分かりませんでした。わたしが1000フランを受け取ったのは前日27日、支払いの1時間30分前でした。5月5日に支払うべき3000フランについては神は何ら動かされませんでした。ところが、わたしの知り合いの人を通じて3000フランを既に送ってくれた人は、わたしの恩人というよりむしろわたしの債権者でした。」これらの活動をどのように実践し、実践させるか何も分からないほど浅はかな人の考えでは、「途方もない負債(30)」に見なされるにしても、み摂理は常に創立者に関心を示されたのでした。

いずれにしても、創立者の手段としては、人間的用心に目覚めている時でも、常に超自然的用心に委ねることでした。時にはたくさんの未払い金が残っていたとはいえ、その金庫はいつも空でした。より人間的な観点から物事を考えていた協力者たちはこの点について創立者に忠告していました。創立者は謙そんにこれに従いましたが、自らの行動手段が神のみ旨にかなっていること

を心から確信し、批判された時にはみ摂理によって擁護されることを考え、その手段を変更することなく、聖ヴェンセン・ドゥ・ポールやその他の多くの聖人たちのように向こう見ずに前進していました。ララン師やデアップシュ師、あるいは、ダスヴェン師のような生まれつきの性質の人の行動には何ら驚かされませんが、ミュンダンの会計係のシャミナード師のように、秩序の人、思慮深く、賢明で、節度があり、慎重な人からは、シャミナード師のすべての計画がそうであったように、それほど超自然的理由によって考慮され、正当化された行動は説明出来ないに違いありません。

セン・ルミの出費について、創立者はダヴィド士に次のように書き送りました(31)。「あなたはわたしが多くの借財をし、久しい以前から一方の借財を他の借財で返済していると非難しています。そのようにわたしは他人を余り信用し過ぎる傾向があったかも知れません。しかし、これまで、セン・ルミのような後の創立についてよりもっと大きな理由があったように思われたからでした。」ラザック城館の取得の折り、創立者はここにかかる整備費に関する報告をカイエ師に求めました(32)。

「あなたはわたしたちの施設を増加し、あるいは既存の建物を維持し、拡張するために、わたしが負う負債のためにつらい思いをされていると思います。あなたがわたしに伝えた不幸が起きないように、また、わたしが、み摂理のおぼし召しと信じている事業について、み摂理の命令に先んじないよう熱心に祈ってください。今朝、わたしは、わたしたちが進んでいる特別な道を考えてたじろぎ、ろうばいしたように思いました。しかし、神がご自分への信頼を増させるため、また、恩恵への完全な信頼に生かすためこのように働かれたのだと考えた時、幾らか慰められ強められました。」

それからしばらくして、また、カイエ師に次のように白状しました(33)。「わたしたちは男子の施設にしても、女子の施設にしても、多くの負債を負っていない施設はありません。わたしは借財をするたびごとに、わたしたちに対するみ摂理のおぼし召しから、わたしがそれではないということを信じない限り、これらの負債全体に身震いします。」

何名かの院長が正当な権利なしに行った無益な失費のためその地位を危うくしました。マリア会の施設を取得するためなされた最近の出費は創立当初よりも創立者を心配させました。そこには神からの罰が恐れられるモラル上の悪、不従順、あるいは清貧への違反があったように思われたからでした。

いずれにしても、ララン師は大革命の終息時ごろのことを次のように述懐しました(34)。

「ボルドーの寄宿学校が活動の利益を上げた唯一の施設でした。最初の建物の建築費と借金の利息の返済のため大きな負担を耐えなければなりませんでした。いずれにしても、自らの需要に応じられる限り返済能力は残っていました。しかし、当該施設が各方面から、例えば、セン・ローランの修練院、アジャンの学校、そして、本部施設の建築さえ引き受け始めた時、あっという間に赤地になってしまいました。オギュスト士はすべての収入、及び、財産からの利益を本会のために積み立てると同時に、施設の維持費としても必要な資金を本会から引き出し、ある年には、その支出が収入を超過するまでになっていました。そこで、オギュスト士は、支払いをしなければなりません金庫は空です、としばしば創立者に泣きついていました。創立者は小言を言いましたが、借金を重ねる金策にたよらなければなりませんでした。」

シャミナード師はこうした状況に無感覚ではありませんでした。それがいかに大変なことか考えていたからでした。1827年にはクルーゼ士に次のように書き送りました(35)。「何か事故が起きた場合、あらゆる手段を取らなかったにしても、少くも、自分を責めるべきではないのではないのでしょうか。この種の事故はどんなに小さなものでもドミノ効果のようなものを起こしかねません。最初のもものが倒れば必然的に他のものが倒れるようなものですから。」クルーゼ士は創立者を助け、数年後にはマリア会を借財から解放出来る期待を抱かせました。

このことは単なる期待に過ぎませんでした。したがって、1829年の初頭、創立者はクルーゼ士に次のように書き送っていました(36)。

「こちらでは困難な資金繰りがますます募っているようです。寄宿学校がどれほど金に困っているかご存じの通りです。わたしは少なくとも2倍の人々を援助していかなければなりません。食費が25%以上増加しました。何も収入がありません。でも心配してはいません。」

しかし、こうした状況は会員に不安を与えました。そこで、次のように書き送りました(37)。「事態は特別な、そして、ほとんど奇跡的なみ摂理によってしか解決出来ない点まで来ています。わたしはみ摂理を信頼して待っています。そして、差し当たり、み摂理を試みないために、また、すべての施設を維持するため自分に出来る最善を尽くしています。」

7月革命後、苦悩は日に日に募っていきました。そこで、次のように書き送りました(38)。「わたしの困難な立場について誤解しかねないことでしょう。愚痴をこぼすためこう言っているではありません。このことについてはほとんどだれにも話していません。み摂理の密かなおぼし召しを熱愛しているからです。」動乱の時代にあって、こうした窮乏や資金調達の困難さは、臨時に修練院を犠

性にすることを決定する主要な動機の一つになりました。北部地方に修練院を再建する考えはセン・ローランの地所を売却しようとするほどでした。しかし、買い手を見いだせなかったので賃貸家屋で満足しました。そこで、事業には余り影響のない小さな家屋の売却によって多少の資金を得ました。最後に、隣人への慈善や援助に関することは別にして、かつてないほどの厳しい全面的な節約を会員に要請しました(39)。

不幸にしてこの要請も十分聞き入れられませんでした。幾人かの院長が、このような時期に何ら弁明出来ない著しい失費をあえて遠慮しなかったからでした。創立者は彼らのことを考えて次のように警告しました(40)。「わたしたちが途方にくれなかったのは神の哀れみのおかげです。しかし、軽率と不従順の残念な結果は計り知れないものになるに違いありません。」ルイ・ロテア士が創立者に書き送った議論の余地のない次の言葉はこうした厳しい状況に符号するものでした(41)。「神父様、あなたが会員のために生活費さえも援助を求めることを余儀なくされることを心苦しく思います。こういうことはあってはならないことです。」

いずれにしても、この難局は創立者からその嘆きを取り去るものではありませんでした。もちろん、あらゆる場合に恩恵を豊かに恵んでくださったみ摂理に全幅の信頼を寄せていたので、自らや会員の生活費ばかりでなく、試練の中止や負債の完済を待っていました。ダヴィド士に次のように書き送りました(42)。

「あなたはそのために支払うお金はどこにありますかと尋ねます。わたしが答えたのは、そのお金はわたしが信頼しているみ摂理の金庫にあるということです。主はわたしたちを哀れんで下さいます。わたしがもっと強硬に行動しなかったことで、わたしもとがめられるべきであり、そう思います。しかし、わたしはあらゆる正義の要請に従いました。わたしは靈的に全く貧しいものでしたが、主は親切にわたしが常に主に忠実に奉仕する望みを起こさせてくださいました。」

他の十字架が創立者の肩に重くのしかかりました。それは、マリア会の靈的配慮に関することだけに一層厳しいものでした。創立者はララン師への手紙で革命のことをほのめかし、次のように書き送りました(43)。「革命は主のみです。幾人かの会員がわらのように俗世間に舞上げられていきました。会員は皆まだ浄化されていないのです。」

気のゆるみが様々な点に表れてきていました。それがどのような幻想によるものか分かりませんでした。平和で、容易な生活の修道生活に惹かれ、また、平穩な安らぎが脅かされる不安から逃れることに熱心な、平凡な会員の気のゆるみは創立者を驚かしはしませんでした。ただ、何名かの会員の信念のぐら

つきはまさしく本心からのものでした。当初、彼らの意向は極めて純真でしたが、現在の疲れ、将来への不安は彼らの気力を低下させ、落胆という危険な暗礁につまずいたのでした。彼らは時の経過によって当初の寛大な熱情が弱まるのを感じ、かつて、彼らを熱狂させた理想の魅力から離れ、未来は今日ほど厳しくはないのではないかと自問しながら、厳しい現実と格闘していたからでした。彼らは、み摂理が彼らの青春の夢に「成功ではなく、単なる協力」しか求めていなかったことを余りにも忘れ過ぎていたからでした。彼らは、「神はすべてにおいて栄光、貧しい協力者のわたしたちにはすべてにおいて苦勞と当惑がありますように(44)」とか、「わたしたちを道具として使ってくださいった誉れに対して、また、わたしたちの愛と忠実をあかしするためにわたしたちに与えられた様々な手段に対して十分感謝することを考えなければなりません(45)」というようなことについて創立者と十分話し合いをしなかったのではないのでしょうか。

マリア会に課せられてこれらの莫大な財務負担は、こうした会員にとって落胆の最大の理由でした。7月革命が到来した時、彼らは本会が解散させられるのではないかと漠然とした危険を感じ、神のためにすべてを捨てたその信仰には不安とためらいが表れていました。

彼らの他の悩みの種はマリア会の事業の控え目な特徴と極めて遅々とした地味な発展でした。しかし、宣教活動の開始は幸先よく彼らの期待を膨らませ、彼らにその無限の領域を目指させました。ところが、彼らが夢見ていたものは未だに何も実現していませんでした。彼らの活動は魅力的な輝きの代わりに、ささやかで目立たないデビュー、見栄えのしない事業であることがあかしされたからでした。当初、極めて立派に組織されていた養成施設も十分な養成者不足のために苦しみ、ルイ・ロテア士の表現によれば(46)、そこからは「お化けの修道者」しか巣立っていませんでした。善意に満ちた会員は、落胆し、マリア会が養成に苦勞していることにもっばら驚き、イエズス会やその他の修道会により堅固な土台の修道会を求めようとしていました(47)。

彼らにはマリア会の管理運営さえ欠陥があるように思われ、会員の風采さえも彼らの非難のふさわしい対象になりました。1824年ごろから、完全に誠実な会員たちも創立者に次のように丁寧に意見を述べていました(48)。

「全会員はただ一人の長上に委ねられています。しかし、その長上はどのような能力があるにしても、常に増加していく様々な問題に悩まされ、多くの業務によって疲れ果て、年を重ねるにしたがって判断が鈍っていきます。この長上は本会の創立のために神から選ばれたことは確かですが、モーゼさえも神から選ばれました。しかし、神はモーゼに援助と勧めが必要であることを知らせまし

た。」

創立者はいつもの優しさで次のように答えました(49)。

「あなた方が有益に思う意見はすべてわたしに伝えてください。恐れずあなた方の意見と助言をください。あなた方は誓願宣立によって本会の長兄になっています。従順があなた方に要求することは一旦決定されたら自分の意見に固執しないことです。」

当時、創立者は自ら実施していた事業以外の事業に着手することも会員に援助を求めることも困難でした。ようやく出来上がったばかりのマリア会の管理運営をだれに委任することが出来たのでしょうか。また、オギュスト士やララン師のような若い会員に委ねることが出来たのでしょうか。その幻想がセン・ルミの創立に危険をもたらし、危うくマリア会を破滅に導きそうになったダヴィド士に委ねることが出来たのでしょうか。創立者の北部地方の長期の視察旅行の間、会員は、創立者一人で会を運営しているのではないかというしことに明らかに気づきました。しかし、それは必要で余儀ないことでした。この間、評議員会が創立者の代わりに統治していました。このことはいずこにおいても不平不満の種ではありませんでした(50)。

したがって、創立者は業務に専念出来たわけではありませんでした。生来の動作の緩慢さ、重大な事項の決定に直面した時のちゅうちょ、常に拡大する事業への会員不足の対処への困難等は、創立者の困惑を増し、それらのことをみ摂理に委ねるにしても、しばしば必要な事項に極めて不完全にしか対処出来ないことを余儀なくされていました。人間的な観点からしか判断しない彼らの心に浮かぶのは、次のようなダヴィド士のギャグを繰り返す誘惑でした(51)。「神が世界を創造したように彼もマリア会を創立した。ある会員には、あなたは料理人だったから、料理人になりなさい、と言い、他の会員には、あなたは教師だったから、教師になりなさい、と言った。しかし、彼の言葉は創造主の言葉ほど効果的ではなかった。」このことに対して創立者はどのように答えたのでしょうか。次のように答えました(52)。「会の統治に欠陥があるのでしょうか。原則的には欠陥はありません。わたしはそのことを働きの上で証明せざるを得ません。わたしは自分の不手際を確信しているので、わたしの行いが非難されても決して驚きはしません。」いずれにしても、創立者は世の中で最も手際のよい人であり、必要な活動にはあらゆる手段を活用出来た人でしたが、様々な業務の重荷に押しひしがれたのではないのでしょうか。秘書の協力にもかかわらず、記録簿の正確な記録にも、また、会員に絶えず要請した「行政上の真の命令」の維持にも困難を感じていたのではないのでしょうか(53)。

その当時の主要な不満は、会員が新会憲と呼んでいた会憲についてでした。創立当初、創立者は特別な会憲をマリア会に与えなかったことが想起されます。1818年、ダヴィド士によって作成された数ページの会憲は、その一部がダヴィオ大司教と創立者自身によって承認されましたが、会憲と見なされるほどのものではありませんでした。創立者は、み摂理によって本会の進むべき道が明確に示されるまで、マリアの娘の会の会則に含まれていた基本的な会憲で新生の本会には十分であると慎重に考えていたからでした。ところが、本会の進むべき道がすこしずつ暗がりから日の目をみるようになり、創立者にとってかなり明確になりました。そこで、1824年から会憲の草案に着手する時が来たことを考えるようになりました(54)。市民憲章が承認されて以来、会憲作成の作業は緊急になりました。最も緊急な北部地方の視察以外これを延期することは出来ませんでした。しかし、1827年の旅行でパリに立ち寄った時、ランブリュッシニ教皇大使は、両修道会の会憲が聖座よりの認可を極めて好意的に受け入れられることを約束して、このことを強く創立者に要請しました(55)。そこで、創立者は会憲の草案に着手し、その作業の終わりごろ、1829年の夏、グレーのララン師の下に滞在しました。ここからマリアの娘の会総長メール・ヴェンセンに次のように書き送りました(56)。「グレーでは、わたしは黙想会に出席しているようなものです。もっぱらマリア会の娘の会とマリア会の会憲と会則の作成に従事しています。追加することも、多少の変更もあるかも知れません。多くの改善を期待しています。」

こうして、会憲はマリア会の現状と事業を考慮した、そして、本会の設立された基本原理を維持しながら全体として十分調整されて作成されました。確かに、この会憲は1818年の草案とは異なっていました。その定款が第一の理由でした。というのは、定款が、会員が予測もせず希望もしなかった市民社会の構成をとったからでした。本会の自然の発展がその第二の理由でした。1818年の草案では問題にならなかった統治機構を規定しなければならなかったからでした。更に、この統治機構はマリアの娘の会の機構を適用していたので、基本的な変更がなされていなかったからでした。本会の活動は確定していました。原則的には宣教活動の領域に含まれるいかなる活動も除外しないこと、そして、今まで承認された活動は続行することでした。最後に、今まで一定していなかった共同生活の詳細が規定されました。

シャミナード師は創立者の資格で作成し、終了したばかりの会憲を公布し無条件に会員に課することが自由に出来ました。節度といつもの賢明さに促された創立者はその作業を会の中堅会員の検討に委任しました。このことは先に触れた既に気難しくなった会員のためであり、きっかけとなった厳しい非難のためでした。彼らの言い分は、彼らが初期の会憲と呼んでいた会憲を厳守し、

本会にとって弱さと不和の原因でしかなかったにしても、当初の統治組織を維持しなければならないということでした。また、当初は予測しなかった初等教育の領域にこれ以上深入りすべきではないということでした。彼らは規定の詳細にわたって、しかも、信徒修道者の黒ネクタイを白ネクタイに換えるよう、最も取るに足りない事項にまで言いがかりをつけました。こうして、創立者の次のような指摘の正しさをあかしすることになりました(57)。「外面的な事柄全般にわたって規定することは一般に極めて困難で、また、それが一番かかわり合いのあるものです。」

マリア会が定着し強化されたのが分かって、これらの不平分子の会員はこれを喜ぶ代わりに、自らの幻想でかいま見た危険が早速到来するのを恐れるかのように、苦悩に満たされているように思われました。果たして、彼らは宣教活動への信頼を失い、彼らの考えによれば、それは将来性のないものであり、強化すべき性質のすべての宣教活動は、彼らが下手に受け入れたものであり、したがって、彼らの即断は裏切られたようなものでした。

そこで、彼らは新しい会憲の草案をこぞって拒絶しました。彼らの中の一人は、創立者がある日セン・ローランで修練者に、また、ボルドーの共同体の会員になした教話に反論し中絶するまで横暴な態度を示しました。しかし、創立者はいつものように冷静さを保ち、自らに帰せられるべき尊敬の不可解な忘却を悲しむような一言もなく、このことが感づかれるような何らの素振りも見せませんでした。

こうした事件に立ち会った創立者は、共同体にもたらずに違いない動揺や混乱を恐れて、最も適切な時期まで会憲の公付を延期することを決意しました。そして、これ以上会憲について議論することを禁じさせました(58)。更に次のように書き送りました(59)。

「この会憲は真に修道精神を求めようとする会員、また、少なくともこれを生きようと努力する善意の会員にしか役立たないでしょう。清貧、貞潔、従順の精神、人々の救霊のための熱誠の精神、そして、至聖なる乙女マリアへの献身の精神を少しずつでも生きようと努力しない会員は、組織や管理の条項に常に理屈を付けるに違いありません。それは、まず、彼らは常に原理の適用を思い通りにするからであり、次に、その自尊心が多少とも傷つけられるからです。」

創立者はこうしたことについて筆舌に尽くし難い悲しみを感じていました。ひどく心配したのは、創立者を動かした至聖なる乙女マリアに託された本会の事業のためではなく、むしろ、名誉ある戦闘と労苦に召されたにもかかわらず、勝利の寸前に責任を放棄する会員たちのためでした。二人の中堅会員の反対

者は創立当初からの会員であり、特に親しかった補佐のオギュスト士とコリノー師であっただけにその悲しみは大きかったのです。

指摘されるにふさわしい何か奇妙な二人でしたが、創立者個人に対してはかつての敬意や尊敬は抱いていました。しかし、事業の安定性を信用せず、マリア会との関係を断つ望みと、それほど誠実に誓約した尊い誓願を破りはしないかとの不安で動揺していました。

オギュスト士は退会の不安よりむしろ落胆していました。彼の不満、すなわち、初期の計画の放棄や自ら擁護していた中等教育の負担に小学校の継続についての不満(60)、そして特に、ミレール通りの施設の財政難やセント・マリー寄宿学校からの自立に関する常日頃の固執の結果でした。1829年に彼がその職務を離れることを拒否したのは、セン・ルミで師範学校を指導するためだったのではないのでしょうか。

コリノー師は、いずれにしても、全面的に教育活動を拒絶しました。そして、自分には特に説教が求められていると信じ、その道に定められていると考えていました。ヴィルヌーヴの高等中学校長職は彼にとって一見苦悩にしか過ぎませんでした。そこで、1827年には創立者によってその職は解かれました。ボルドーに帰ってからも彼は修道生活の厳しい義務に適応出来ませんでした。創立者は1830年当初彼について次のように書き送りました(61)。

「コリノー師は2,3月前から寄宿学校に住んでいます。そこでは多少役にたっていますが、全然落ち着いていません。常に多くの説教をしています。ヴィルヌーヴから帰って以来、より自由に過ごしたいことを望んでいます。共同体では友人のようではかありません。黙想会では誓願も更新しませんでした。」

創立者はこの両会員が当初の意向に帰ることを常に期待して、極めておだやかに、そして、限らない思い遣りをもって対処していきました。オギュスト士については次のように書き送りました(62)。「彼の気持ちはまだわたしたちの所にあります。彼を神の下にまだ引き戻すことが出来るに違いありません。」創立者は動揺する彼らを見る限り不安は募りました。しかし、他の会員の誓願を心から受け、ララン師には次のように書き送りました(63)。「わたしはあなたの献身をうれしく思います。わずかな慰めでも心から感動させられるからです。」不従順な会員の気持ちに関する不安は創立者がアジャンに出発するまで続いていました。しかし、そうした不安もやがて来る厳しい苦悩のスタートにしか過ぎませんでした。



注

- (1) ギヨン・ドゥ・ベルヴー師は後にアジャンの教会参事会員になり、長い間、マリアの娘の会の聴罪師でした。この逸話は師に伺ったものです。
- (2) 1829年12月4日
- (3) 1830年4月12日。警鐘は1826年の日付でした。当時シャミナード師のパリの通信相手は熱心な信徒の活動家のオロンベル氏でした。彼は、ドゥ・ラシャペル師にドゥ・ベッリ公爵の暗殺された場所にキリストのみ心にささげられた教会の建設を提案していました。その資金提供の申込書はフォワ將軍の名誉を望んだ自由党のものとは対立したものでした。ドゥ・ラシャペル師は計画の実施をためらい、この計画はオロンベル氏に思い止まらせました。(1826年1月20日、オロンベル氏からシャミナード師への手紙)
- (4) 1830年9月3日、クルーゼ士へ
- (5) 1830年9月18日、ルイ・ロテア士へ
- (6) 1830年、シャミナード師の伯爵への手紙は確かな友情を示していました。
- (7) 1831年3月27日クルーゼ士への手紙でベッリエ家との関係が伝えられています。
- (8) ド・フォルベン・ジャンソン司教は、司教に対する先入観が激しかったので、ナンシーの司教座の町に帰ることが出来なかった事が伝えられていました。
- (9) 有名な法律家ノドゥ・ポルテ氏はマリアの娘の会の一會員の父兄でした。両修道会に多くの奉仕をしました。
- (10) ジュステン・デュプイ著、「セン・ミシェル教会主任司祭ドゥ・デュプール師の生涯」参照。2月14日当日、「主よ、王を救いたまえ」の詩編が誤って適用されたものでした。この事件に関する手がかりは情報源からくみとられたものです。
- (11) 1831年2月19日の情報提供者
- (12) 1813年3月2日にドゥ・リュベール受勲者への書簡。アドロフ・ドゥ・リュベール氏は熱烈な論客でした。シャミナード師の親切な勧めにもかかわらず、政治家として残り、「ブルボネ紙」や「ガゼット・オヴェルニュ紙」を監督しました。ルイ・フィリップの政府によって監禁され、出獄直後の1843年10月、車両事故で死亡しました。
- (13) 1831年3月2日、ララン師へ
- (14) 現在の8番地、それは修道会の修練院でした。
- (15) わたしたちは数年前に帰天したミゼリコルド會員のメール・セラフェンからこの詳細を聞きました。
- (16) カネット氏によって残された逸話にあった表現
- (17) 当時修練者で事件の目撃者であったデュモンテ士の覚え書き。道路が占領され

た時、ラン通りの小神学校には修練者はいませんでした。彼らは王立高等中学校で授業を受けていました。放課後、道路が占領されたのに気づいて、ミレー通りのセント・マリー寄宿学校に避難しました。

(18) ミゼリコルド会のセラフェン嬢によれば、シャミナード師は時々国民軍の服装をしていたということです。

(19) 1830年12月22日

(20) 1831年6月3日

(21) シャミナード師は論説がラン師を惹きつけたアヴニール紙を次のように批評しました。「サルディニア王はアヴニール紙の同国活動については慎重であったということです。アヴニール紙には何もよいものはないという意味ではありません。しかし、この新聞はうぬぼれの強い、頭の弱い神学者のようなものです。まず、同紙への過剰反応があったと思います。多少有能なわずかな聖職者がまずこれに惹きつけられました。わたしは彼らの何人かに合いましたが、彼らは少しは真剣な議論も30分も出来ませんでした。」なお、当代の他のカトリック紙について次のように付け加えました。「コティディエンヌ紙やガゼット・ドゥ・フランス紙は一般により成熟し、より理論的に整理された考えを持っているが取捨選択を心得なければなりません。コレスポンドン紙は余りよくありません。あなたは、それはキリスト教教師を標榜する若い文学者のようなものだと思いますが、あなたの一言が同紙をよく特徴付けているように思います。(1831年7月5日、ラン師へ)

(22) 1831年4月30日、ラン師へ

(23) 彼らはやがて慈悲の司祭会という会名で再建されました。

(24) 1831年4月15日、ラン師へ

(26) ヴズール県の師範学校は1834年に開校されました。しかし、ジュラ県では、師範学校は1835年11月によくサレンに開校されました。この学校は共産主義の温床になったということで1849年に廃校になりました。代わりに研修校が開校されました。これらの学校の中で、マリア会によって運営されたクルトフォンテーヌの師範学校は、他の師範学校を廃校にした当局を満足させていました。1852年に本校はロン・ル・ソールニエ県に移転され、常にマリア会の経営の下にありましたが、1862年にマリア会自体の合意により会員は本校から退去しました。これらの情報は1900年の万国博覧会に初等教育に関する回顧展示のためロン・ル・ソールニエ県の師範学校長の報告書から得られたものでした。

(27) 1829年12月30日、ラン師へ

(28) 354ページ参照

(29) 1834年4月16日、ダヴィド士へ

(30) 1829年7月24日、ベッシンという商人からドゥ・シュウルス司教への手紙(司教館資料室)

- (31) 1823年9月30日
- (32) 1824年6月16日
- (33) 1825年8月20日
- (34) 「歴史概要」、20ページ
- (35) 1827年1月10日
- (36) 1829年1月19日
- (37) 1830年1月4日
- (38) 1831年2月12日、クルーゼ士へ
- (39) 例えば、セン・ルミにおいて、創立者は食糧の不足によって窮地に追い込まれた周辺の貧しい労働者に仕事を与えるようクルーゼ士を励ました。(1831年1月14日)
- (40) 1830年1月4日、クルーゼ士へ
- (41) 1831年5月12日
- (42) 1833年1月7日
- (43) 1831年7月5日
- (44) 1827年3月20日、クルーゼ士へ
- (45) 1830年2月30日
- (46) 1839年5月24日、シャミナード師へ
- (47)それはペリギューの司祭グードレン師及びその他の人々の場合でした。
- (48)1824年8月1日、オギュスト士及びララン師よりシャミナード師への手紙
- (49)1824年8月3日
- (50) 特に、クルーゼ士からシャミナード師への手紙(1827年3月7日)にその証拠が見いだされませんがここに記載するには余り長過ぎます。
- (51) ララン師の覚え書き、「歴史概要」、19ページ
- (52)1827年3月7日、クルーゼ士へ
- (53) 1823年8月3日、メール・ドゥ・トランケレオンへ
- (54) 1824年6月29日、カイエ師へ
- (55) 教皇大使ランブリュッシニ枢機卿の極めて好意的な正式の提案は、1835年12月

24日創立者からララン師にしたためられたように、文書によって繰り返し要請されました。

(56) 1829年6月13日

(57) 1830年11月22日、ララン師へ

(58) 1831年末

(59) 1830年11月6日、クルーゼ士へ

(60) 彼が理解していたのはいわゆる中等教育、今日のいわゆる後期中等教育及び現代教育でした。

(61) 1830年4月12日、クルーゼ士へ

(62) 1830年3月3日、ララン師へ

(63) 同前



第 33 章 より厳しい試練への直面 (1831—1833)

アジャンの創立者 ❖ ララン師の反抗 ❖ 1832 年試練の蓄積 ❖ アジャンの特殊学校 ❖ コリノー師とオギュスト士の退会 ❖ ドウ・シュヴルス司教の偏見 ❖ マリアの娘の会とのトラブル ❖ コリノー師の仲裁 ❖ ジャクピー司教の仲裁と危機の回避 ❖ ララン師の悔悟 ❖ ボルドーのセント・マリー寄宿学校の校長に任命 ❖ オギュスト士との和解 ❖ 第一回回章 ❖ 会則と会憲一部の公布。

シャミナード師は、かつてアジャンで、旧罪人のより所の聖母修道院でマリアの娘の会を創立したのですが、今回彼女たちの所に身を寄せました。修道院のはずれの小部屋に住み、傍らの廊下の奥が小さなチャペルに改造されました。創立者はそれからの2年間、襲いかかろうとしていた試練に耐えるために神の絶え間ない現存の慰めが極めて必要になりました。ボルドーを離れる時、その苦渋を感じていました。そこで、機会のあるたびごとに親しい人々に祈りを願っていました(1)。「この困難な時代にわたしが自分の責務を果たすため必要な光と勇気を主が与えて下さいますように、また、他人に教えながら自分自身が神から非難されることがないようにわたしのために祈ってください。」「キリストの模範(2)」の霊的生活により進歩すれば十字架はより重くなるという言葉通り、その試練の時は到来していました。創立者は苦しみのるつぼに投げ込まれるのです。そして、聖パウロの表現に従って、天使と人間の前に見せ物になり、心は激しい火によって精錬される金のようにその寛大さを表すことになるのです。

創立者がアジャンに赴いたのは、革命、施設創立による財政の悪化、ある会員の不満という三つの不安事項の処理で、この最後のものが最も深刻で、ちょうど伝染病のように伝染する恐れのあるものでした。既に、残念な徴候がセン・ルミに表れていました。

ララン師は立派な教育者ではありましたが、財政面では下手な管理者でした。どのような出費も自らの教育法に貢献することを目指すものであればこれを恐れませんでした。会計のクルーゼ士は、革命の終息時、創立者によって極めて厳格な言葉で与えられた指示をたてにとつて、資金の範囲内でしかララン師に協力が出来ませんでした。このことから、創立者も引き留めることが出来ないほどの争いが起きていたのです。ララン師の不満は、1830年12月から、創

立者あての意地悪な手紙に表れていました。しかし、戦いの真の領域が不利に思われたので、オギュスト士やコリノー師が既に争っていた領域に移ったのです。こうしてラン師は彼らと共に新会憲を非難し始めたのです。

しかし、グレイで会憲の草案作成に協力し、最終案さえ提示したラン師が新会憲をどのように非難出来たのでしょうか。抑制を待ちきれない情熱的な性格のラン師は、権限の中央集権化、特別な上長の権限に不満を抱いていました。彼の考えによれば、特別な上長は少なくとも財政の問題に関してはほとんど完全に独立の権限を持つべきであるということでした。

ラン師のこうした利己主義的な弁解はいつも創立者を苦笑させていました。ラン師がボン・ペールに反対して他の二人の補佐の仲間入りをしたらどんなことが起きることでしょう。したがって、ラン師に送られた創立者の手紙には次のように悲しみが込められていることが分かりました(3)。

「こうしたすべての実情から、わたしの心は締め付けられる思いです。大革命はそれほどわたしを苦しめませんでした。ただあなたに言いたいことは、わたしの心には苦しみも痛みもありません。新年にあたり、あなたの方の上に神の豊かな祝福を心からお祈り致します。」また、次のようにも書き送りました(4)。

「わたしは神があなたを照らして下さるよう心からお祈りします。また、ラ・ムネー師のように与えられた才能を乱用することをお許しにならないようお祈りします。」

創立者はアジャン滞在の最初の週間にラン師から受け取った、「わたしの心は疲れ、打ちひしがれています(5)」との一言によって、かすかな期待を感じました。創立者はこの言葉に実は親しく結ばれていた魂の後悔を理解したからでした。不幸にして、ラン師のいらだちはいつまでも続き、絶えず不従順と不平の下心をよみがえらせていました。

創立者はラン師を特別な親しみを持って懇意にしていました。したがって、その行為については大変心を痛めていました。そこで、まず、道理をわきまさせるよう試みましたが、その後もずっと創立者と争うことを止めませんでした。創立者はラン師の感情が容易に理性に先立つことを知っていました。物事のより健全な評価をなすよう優しく導くよう努力して、次のように書き送りました(6)。

「あなたがどのように不満で、悔しがっているのかを知って、わたしは心から嘆いています。しかし、あなたはあなたが苦しんでいることをよくわたしに伝えてくれました。心が悩まされる苦しみを発散させる時、多少の慰めがあるものです。わたしは、わたしより他にこのことを慎重に行うことが出来る人は誰もいないこと

を知っています。あなたの心に安らぎを与えることが出来ればと思います。もちろん、このことが出来るのは神以外にはありません。わたしはもうあなたの慰めの道具にもなれません。あなたをいらだたせているのはわたしのやり方でしたから。」

創立者は想像のまことしやかな要求に屈服するララン師の理論に冷静に対応して次のように書き送りました(7)。

「あなたは、わたしたちの昔のプランでは事態はうまく運ばれないと考えていますが、それはあなたに別の考えがあるからだと思います。一般に、わたしたちは自分の考えを一人っ子のように高く評価し、愛するものです。一人っ子としての自分の考え以外には優れたもの、合理的なもの、賢明なもの、そして、整然としたものは何も持ち得ないということです。したがって、わたしたちは多くの悪習に気づき、何でもがまん出来なくなるのです。」

創立者は、特にララン師の良心に訴え、信仰の言葉を書き送りました(8)。

「もし、あなたが自分の聖化に努力し、そのために神から求められるあらゆる犠牲をなすよう本当に決心しているなら、そして、あなたが全くキリストに仕え、キリストのものとなり、キリストの霊によってあなたの余生を生きるなら、わたしはあなたを助けるためにどのような犠牲も払います。あなたが、生涯あなたのために、あなたの力で生きるなら、バビロニアの捕囚から帰還したユデア人に預言者が、『種を多くまいても、刈り入れは少ない』と教えたことを恐れなければなりません。」

創立者の忍耐はどのような失敗にもくじけませんでした。クルーゼ士には、不正や愚かさによらない限りは、無視出来ない原則を維持しながら、心から親切に忠告することを止めませんでした。次のように書き送りました(9)。

「わたしたちは、ララン師が善だけを求めているものと信じています。ララン師の主張は一時的な幻想に過ぎないことを期待して止みません。残念なことは、これらの不和はわたしたちが平静に団結しなければならない時に起こったことです。しかし、神がこのことをお許しになったのでしょうか。こう考えることで、わたしたちはみ摂理のおぼし召しを謙そんにたたえなければなりません。たとえこの考えがわたしたちの本性や考えに反してでもです。」

それからしばらくして、より慰めになる新たな返事に対して、同様な考えを繰り返し伝えました(10)。

「あなたがララン師と親しく話をしたことを大変うれしく思います。あなたもララ

ン師も正直者だからです。ララン師は真心から善を望んでいます。あなたも同様心から善を望んでいます。どうして理解し合えないことがあります。わたしは、何が善であるか、何が秩序正しいことか、そして、何が適切なことかのみを求めていることをあなた方二人が理解してくださるよう望んでいます。このことはわたしにとって厳然たる義務ですので、あなた方に対する愛情が、わたしのこの節を曲げさせるにはいかないのです。したがって、会員の一人が、特に先輩の会員の誰かに小言を言わなければならない時、これがわたしの最大の苦痛です。」

その上、創立者の苦しみは日に日に増していくばかりでした。ララン師はその幻想によって、絶え間なく生ずる障害に影響され、自らに対する創立者の権限の合法性の疑問に鼓吹されて興奮していたのでした。こうした疑いは、マリア会は宗教団体としてダヴィオ大司教によってのみ、したがって、ボルドー教区でのみ明確に認可されたものであるという単純な口実に基づいたものでした。このことについて創立者は次のように答えるだけに止めました(11)。

「あなたは、総長としてのわたしの権限を疑っているようです。それでは、セン・ルミでのあなたの権限はどうだったのでしょうか。わたしは自分が持っている権限しかあなたに与えることは出来なかったからです。このようにすべてを問題にしてしまえば、動きがとれなくなるだけです。」

ララン師はその異様な発想を追求し、奇妙な推論に固執し、創立者が自分の計画のこの上ない障害になったという理解によって悩まされ、極めて無謀な計画をたてたのでした。他方、オギュスト士とコリノー師は、自分たちはマリア会にはふさわしくないと、ただ退会する気持ちになっていました。ララン師は思うままに会をあしらいながら、すなわち、踏み越えることが出来なった障害を嫌々ながら避けながらも、会に忠実であると主張していました。ララン師は創立者への手紙にそのおどしをのぞかせましたが、創立者の忍耐強さや精神の強さを動揺させることは出来ませんでした。創立者は次のように書き送りました(12)。

「あなたの手紙の末尾の鋭いおどしについては、わたしは神のみ栄えのみを期待し、どのようなおどしであろうと、わたしが自分の義務と信じていることから決してわたしを離脱させることは出来ないという考えしかあなたに答えることは出来ません。」確かに、ララン師は周囲の反響に合わない計画は遂行しませんが、創立者への反対の態度は持ち続けていました。創立者はララン師について次のように書き送りました(13)。「ララン師はとても興奮しています。もう論ずることは出来ません。それは無駄のようです。去年さんざん言い聞かせまし

たから。」

1832年の初頭のことでしょうか、創立者は冬の間しばしばかかっていたいつもの不具合からようやく回復していました。しかし、セン・ルミではその展望は日々悪化し、混乱があらゆる所に起こり、創立者の重荷になっていました。

また、創立者はアジャンのマリア会の共同体では、悲しい不忠実の光景を目にしました。そのため数名の会員は動揺していました。自らの成功とわずかな知識を自慢していた特殊学校(14)の信徒修道者は思い上がった様子をしていましたが、それは不吉な前兆でした。彼らは凝った服装をし、無償学級と同僚からは嫌われ、信心業は怠り、創立者の忠告には耳をかさず、極めて取るに足りない口実のもとにその教話にも欠席していました。こうした不適切な信徒修道者に代わる手空きの会員が不足していたので、創立者は静かに忍耐し苦しむことになってしまいました。

この同じ時期に、創立者はボルドーでは、すべての懸念がなくなったことを知りました。すなわち、オギュスト士とコリノー師はマリア会と結ばれていたきずなを決定的に断ちきりました。ミレール通りのセント・マリー寄宿学校の校長であったオギュスト士はその職が解かれ、自ら負っていた負債から解放されることをしきりに願っていました。こうした退会の実情は退会そのものよりも情けないものでした。ボルドーの大司教はこの退会の件について何ら反対も反論もされず、二人の修道者の誓願を免除する恩恵を与えました。大司教は彼らを励まし、その好意を明らかにするかのようコリノー師を首都大司教座教会の名誉参事会員に任命しました。このことは創立者と同じ地位に任ぜられたことになりました。そして、マリア会を退会したあかつきにはカテドラルの説教台に上がることさえ許されました。

ドウ・シュヴルス大司教(15)の意向は正しかったにしても、ことが大司教のことだから、だれも気づかなかつたのではないのでしょうか。大司教は聖人のような評判で、モンターバンからボルドーに赴任し、その評判をあかし続けていました。その是非はともかく、修道者よりも教区の聖職者(16)により好意を示しているように見なされていました。確かに大司教はマリア会に対してはほとんど好意は示されませんでした。大司教がマリア会をほとんど知らなかつたことは確かであり、しかも、マリア会にとって不利な状況下ではなお更でした。ダヴィオ大司教の帰天後、ほとんどボルドーを留守にしていたシャミナード師にとってドウ・シュヴルス大司教は無縁な方だったからでした。オギュスト士やコリノー師の事情しか理解しなかつた大司教は、マリア会は事業に失敗した修道会であり、その公共性が認可されていて、地味で、悪評がなかつたにしても、やがて解散が要請

されるということを信じていたに違いありません。大司教の最も従順な評議員の一人で大神学校校長のアモン師も大司教と同意見でした(17)。大司教の行為は自ら抱いていた確信に応ずるものでした。したがって、オギュスト士とコロノー師の誓願の免除は容易だったのです。また、1832年の春、すなわち、二人の補佐の退会が確定した時、そして、創立者が若い会員フォンテーヌ師の叙階を大司教に依頼した時、大司教の回答も同様の確信から来たものでした。大司教は若い聖職を擁するマリア会は不安定であるということを挙げて反対し、その許可を与えるのに不承不承だったからでした(18)。

ボルドーの大司教から見放されたシャミナード師は少なくともアジャン教区からは常に好意的に迎えられたのでしょうか。神は教区からの支援の不足を許され、更に、こちらでも著しい反対に出会いました。

創立者は、アジャンに到着してから、マリアの娘の会の修道院で修道女たちの異常な態度に気づきました。メール・ドゥ・トランケレオン総長がシャミナード師の助言を心待ちにしていただけに、新総長は、かえって自らへの不当な干渉として気を悪くしていたからでした。そして、マリア会とマリアの娘の会両修道会の会計規定及び会計の完全な分離から要請し始めました。彼女の要請は合法的であり、両修道会の会計の分離は避けることが出来ず、マリアの娘の会の会計は司教の管理下に置かれました。シャミナード師はこのことには反対することなく受け入れました。こうして、1831年10月、会計の分離は決定され確立されました。

このことは本格的な抗争前の前哨戦に過ぎず、より完全な分離の予備交渉でしかありませんでした。実のところ、抗争の火ぶたが切られたのは修道院からではなく、司教総代理のシャンブレ師(19)からでした。シャンブレ師は確かに好意的ではありましたが、マリアの娘の会をシャミナード師の指導から引き離し、司教の直轄下に置くことを推進していたからでした。シャンブレ師は修道女の聴罪師にセツレス師を依頼していました。司教は、セツレス師をアジャン教区に留め置くことはしませんでした。彼は以前何年かマリア会員ただだけにこのことは一層奇妙でした。高齢になり、疲れたジャクピー司教は、1825年以来、司教座の退任を教皇聖下に申請していました。従順によって教区の管理を継続していたとはいえ、次第に司教総代理に管理を委任し、重大で緊急な場合にしか干渉しないという習慣を忠実に守っていました。したがって、司教は、マリアの娘の会の共同体関係について密かに企てられていたことについては原則的には多分知らなかったように思われました。

事件は1832年2月2日に突然起きました。マリアの娘の会の総長は、シャミ

ナード師と自らの間に起きた詳細な事項の不一致の件を、シャミナード師の知らない間に司教に相談していたのです。驚いたシャミナード師は、創立者としての忠告を彼女に与えましたが、結果は司教総代理の強い干渉を招くことになりました。マリアの娘の会の創立以来、シャミナード師は彼女たちの共同体に自由に入り、共同室で教話をなす習慣がありました。こうしたことについてはだれも難癖をつけず、教会当局も何らの忠告もしなかったのに、シャミナード師にとってはもう何事も当然のことではなくなっていました。シャンブレ師は突然シャミナード師を憤慨させるような態度に出ました。それは、以後、司教の許可状なく、また、だれか他の司祭を同伴することなく、マリアの娘の会の共同体に入ることを司教の名によって厳禁すると、通告してきたからでした。こうして、マリアの娘の会の共同体に関する創立者シャミナード師の権限に関する最初の打撃がもたらされました。

このことを聞いたボルドーのドゥ・シュヴルス大司教は、「たとえ、シャミナード師が自尊心の持ち主ではなかったにしても、どんなに苦しまねばならなかったことでしょうか(20)。」と語られました。シャミナード師は2週間静かに沈黙を守るほど自尊心の抑制が出来ていました。創立者はジャクピー司教に回答しましたが、それは抗議するためではなく、変質されようとする修道会に対する創立者としての義務を司教に要請することを決定する前に、納得出来る説明をなすことの出来る司祭の任命を要請するためでした。

こうした方針を実施に移す前に、創立者はメール・セン・ヴェンセン総長による調停者の訪問を受けました。ところが、その調停者は彼女に選ばれたコリノー師以外の何者でもありませんでした。コリノー師はヴィルヌーヴの高等中学校の校長で、マリアの娘の会に多大な貢献をなし、シャミナード師が北部地方の視察の時は彼女たちの指導を委任されていました。彼は、単なる調停役でも、いわば、創立者に不従順な会員の中でも退会した会員でした。したがって、尊敬すべき老齢の創立者の徳に対して、余りにも買いかぶりのように思われました。しかし、創立者はコリノー師をいつものように親切に迎え、その仲介を了承し、司教の要請情報を伝えてくれるようお願いしました。やがて創立者に伝えられた回答によって問題の本質が明らかになりました。創立者は、マリアの娘の会に対して、「マリア会の総長の権限についての見解を書面で提出するよう」要請されていたからでした(21)。司教からの回答を待っていましたところ、これまで通り修道院の事務室及び共同室に入ることが出来るよう許可されました。

当初の成果を収めたコリノー師は、この仲介の働きの中で、シャミナード師に対するこれまでの好意とマリア会の事業に関する正確な認識によって、同時にまた、その誠実な性格によって極めて正直な態度をとり続けました。コリノー

師は、シャンブレ師の主張に明らかに反対する個人的な意見を司教に伝えた後すぐ、シャンブレ師の同僚で司教総代理のドウ・トレンコー師(22)に、自らの意見を長文にしたためて送付しました。その主要なくだりは次の通りです(23)。

「わたしの用件に立ち戻ることをお許しください。わたしはあなたと別れてから、わたしたちが引き受けた問題に関して考え、理解し、申し上げることが出来ることはすべてわたしの見解として確認しました。もし、司教が、本教区に創立された(マリアの娘の会)の共同体に対するマリア会総長の統括指導の代わりに、司教直属に変えようとするなら、共同体の精神を本質的に変更し、宣立された誓願を無効にすることになります。一会憲は総長について何ら規定していません、とおっしゃるかも知れません。しかし、もし、マリアの娘の会がマリア会の総長によって設立され、絶えずその指導を受けていたとするなら、また、今日、マリア会の総長の権限を疑問視さえしようとする当人からすべての会則及び会憲を共同体が採用しているとするなら、「本会は総長を置く」と言うことを、大事をとって、(将来容易に提示出来るから)提示しなかったからでした。どうしてもわたしに納得出来ないことは、シャミナード師に対して起こされた争いは、コップの中の争いでしかなかったのではないかということです。確かに、総長の各共同体に対する権限は地域教区の司教から頂いています。また、確かなことは、地域教区の司教は聖なる教会法に反する混乱がどのような過失によっても忍び込まないよう監督しなければならないことです。しかし、司教の直轄下に共同体を置くために総長のあらゆる行為を金輪際、永久に拒絶することは、修道会の基本的な要素に触れるものと思います。したがって、新修道会を作るためにこれまでの誓願を無効にすることになるからです。神父様、わたしははっきり次のように申し上げたいと思います。これまでのことを許したのはセルレス師であって、こうしたほとんど類似の発想は、しかも、誤解された発想はセルレス師によって修道女たちにたきつけられたもののように思われます。」

こうしてすべてが丸く収まったように思われましたが、これまでのような考えは以前から彼女たちに吹き込まれてためでしょうか、また、新たな混乱が起きました。次の日曜日、シャミナード師が従順に関してなした教話が総長の権限の確実な当て付けとして受け取られたのでしょうか、不幸にもまた彼女たちを怒らせることになりました。早速、「修道女たちの中に混乱を引き起こした」かどで、司教に通告されました。翌日、3月13日、ある修道女の退会を取り決めるため、共同体の本部室にいた時、修道院出入りの新たな禁止としたためられた司教からの封書が手渡されました。そこで、創立者は無言で引き下がりました。

創立者は激しい屈辱を感じました。修道者から、そして、修道女からも見放され、教会権力によって反対され、他の修道会創立者のように、自ら創立した

修道会から除外されるという極端な屈辱を受けたのではないのでしょうか。こうして、あらゆる協力、あらゆる慰めが断たれ、あらゆる方面からの試練の重圧に圧倒されましたが、くじけることなく、心の平和と冷静さを保っていました。わたしたちは創立者の手紙の中に、その嘆きや意気消沈の苦悩の跡を探しましたが無駄でした。事件の当事者外の人々には与えられた苦渋を気づかせさせませんでした。共に生活していた会員たちも何も知りませんでした。彼らは創立者の顔にも言葉にも、その心にあふれていた苦痛の片りんにも気づかなかつたからでした(24)。どのような苦痛であっても神への信頼は確固たるものでした。人々から苦しめられれば苦しめられるほど、自らへりくだり、自らの過ちと会員の過ちのために償いの犠牲としてこれをささげたのでした。会員の過ちといえば、例えば、ある会員から一撃を受けて寝室のカーテンにまで血が飛び、老いた肩が血だらけにされることがあったとのことでした(25)。まして、同情する人には次のように答えました(26)。「神がそのことを許されたので、わたしたちは沈黙しなければなりません。」また、「わたしは神の望まれることしか望みませんので、み摂理に対するわたしの服従はわたしの心をこの上なく冷静にさせています(27)。」創立者はこのように同一時期に多くの試練に出会ったことを不可抗力と見なすことが出来たのでしょうか。また、み摂理の英知によって与えられた時期に、このように積み重ねられた試練からの開放感をみ摂理に期待しなければならなかったのではないのでしょうか。

創立者は、こうした修道者や修道女たちからの親不孝の除外を残念がる必要はありませんでした。このことは天の御父のみ手に委ねていたからでした。したがって、あらゆる方面からもたらされていた困難な状況がすこしずつ晴れ、身に負ぶさっていた試練が次第に消えて行くのを感じました。引き起こされた最後のあらしが最初に静まりました。これまで、すべての事柄を司教総代理のシャンブレ師に委任していらジャクピー司教は、シャンブレ師が誤った道に誘い込まれていたことに気づいたからでした。ドゥ・トレンコー師によって目覚まされた司教は、シャンブレ師に委任していた業務の責任を自ら執り、シャミナード師に対する説明を自らに与えるかのように、すなわち、マリアの娘の会の統治に関して、どの点で司教の権限に抵触することになるのかということを質問する8項目の質問に回答するようシャミナード師に要請しました。

創立者は少しも困惑しませんでした。常に旧友に忠実なジャクピー司教の好意的な意向を察して、マリアの娘の会の共同体への第2回目の出入禁止の動機になった事件に触れて次のように書き送りました(28)。

「司教様、わたしは司教様が心を痛めておられる二つの事項について、ドゥ・トレンコー師に説明しました。このことにわたし個人に関することがあったこと

は大変心苦しく思っています。ドゥ・トレンコー師が司教様に説明下さったと思いますが、前の日曜日、わたしは立場上、何らかの注意を促さなければならぬと考えて、マリアの娘の会の共同室にいました。議論を招く点については全然触れませんでした。このことは何人かの修道女がお互いを結びつけていたきずなが切られたことは、革命がもたらした結果に違いないと考えるほど実践的なことだったからです。」

創立者はこの手紙に8項目の質問への回答を添えました。手紙をしたためた真意はすべて次のくだりに含まれていました。「いいえ、司教様、マリアの娘の会に関するわたしの権限は処理出来る教会法上のいかなる資格も持ちません。この権限はわたしに固有のものでも、その原因であり源である司教様の権限から独立したものではありません。」そして、このくだりは第二の質問への回答でした。第八の質問については次のように繰り返しました。「いいえ、修道女たちが救霊を危うくすることなしに司教の権限から逃れることが出来、また、たとえ、彼女たちがそのようにした場合でも、わたしが彼女たちを指導し、許しの秘蹟を授けるために個人的権限を持っている等と考えていません。」

司教はシャミナード師の回答に十分満足したことを表明し、感謝しました。しかし、シャミナード師を更に納得させるために、自ら受け取った回答に幾つかの声明を加えるよう要請しました。わたしたちは創立者の気持ちが分かる次のくだりのみに触れることにしました。

「もし、わたしの権限がこの神的根源（司教の権限）を持たないとするなら(29)、マリアの娘の会の従順はもう信仰ではなくなるでしょう。そして、彼女たちの従順の動機はもう何ら修道的ではなくなるでしょう。わたしはその他のすべての教説を排斥します。」

最も要求がましい人々は言いがかりのすべての口実を失ってしまいました。ジャクピー司教はシャミナード師に要求した事項の回答に満足して、すべての権利を直ちに返還し、シャミナード師がマリアの娘の会の共同体に入る時、非難の機会を与えないために何らかの用心をなすよう、そして、司教が彼女たちの上に持っている権限を修道女たちに明確に説明するよう要請し、反対に、マリアの娘の会の総長には、シャミナード師に内密に司教に相談しないよう気務付けました。以上が明確に確認されたことでしたが、それは単に以前の状況への復帰に過ぎませんでした。

一方、創立者はボルドーの問題の早急な、そして、円満な解決を期待することは出来ませんでした。ただ、ドゥ・シュヴルス大司教がフォンテーヌ師の叙階の許可を決定されたことを聞いて喜びました。創立者はこのことを大司教に感

謝し、マリア会が対象になっていた幾つかの先入観を晴らすためこの機会を利用して、次のように書き送りました(30)。

「マリア会は主要メンバーの退会によって崩壊するとお考えでしょうか。わたしはコリノー師やオギュスト士を高く評価してはいますが、彼らの才能と果たすべきであった職責は別として、修道生活の面では主要なメンバーと見なすべきかどうか判断しかねます。彼らがマリア会に与えた影響がどうであろうと、この痛手でマリア会が共倒れになるどころか、微動だもしないと信じています。彼らの模範は余り熱心でない何人かの会員には一時的に障害になるかも知れません。しかし、マリア会を神の事業と見ましている最も誠実な会員たちは事業の安定に関してこの退会からは何らの影響も受けていないに違いないと考えています。その上、わたしは彼ら二人はかなり小心者であったように思いますので、元の同僚を困らせるようなことはしないとします。」

事実、二人の補佐の退会は恐れられていた影響をマリア会にもたらさずはしませんでした。北部地域の会員はボルドーやアジャンで起きた事件はほとんど知りませんでした。ちょっとしたうわさを耳にした大半の会員は、自分たちを啓蒙し強化するため出来るだけの説明を創立者に急ぎ要請しました。そこで、創立者は彼らの一人に次のように書き送りました(31)。

「あなたはこの論争に立ち入ることを望まなかったのではないのでしょうか。あなたは、常に初めに決められたことに従い、賢明に行動しました。個々の修道会に起きる小さな出来事は普遍教会にもあることです。イエス・キリストの教会にさえ、異端や離教等、どんなに多くの事件が起きることでしょう。そこからもたらされた混乱で、これらの誤りから身を守る優れた手段は基本的な中心、真理の柱である聖座に忠実であることです。」

ララン師は、セン・ルミで、夏の中頃まで創立者に不信と反対の感情を抱いていましたがようやく従いました。ララン師が目覚め始めたのは、創立者が、和解のことを考えて、許可出来ないこと、すなわち、財政に関する校長の独立性ではなく、施設の他の部分の管理から寄宿中学校の管理を完全に分離することを合意した時からでした。ララン師はこの認可によってようやく落ち着き、人間関係や物事を健全に判断するようになりました。ララン師は深い修道者的な気持ちと創立者への変わらない愛着によって自制心をすっかり取り戻しました。自らの行為の醜さを感じ、そのことを激しく後悔し、福音書の放蕩息子の気持ちと言葉を口にしてその父の下に帰ってきたわけでした。1832年11月17日のすばらしい手紙で、「すみませんでした、本当にすみませんでした」と許しを願いながら、深い謙そんの気持ちで過ちを告白し、次のように付け加えました。

「わたしがこの世で望むことは神のみ旨を行うことのただ一つです。神の意志は、み摂理のおぼし召しによって、あなたを通してわたしに表されるに違いないからです。」

こうして、創立者はララン師との和解を諸手を挙げて歓迎し、次のように書き送りました(32)。

「あなたが修道精神を取り戻したことを主に感謝しています。あなたは大変間違った道に入っていたのです。神のみ恵みがきっとそのみ業を完成させるに違いありません。わたしはあなたに対して何ら悪い気持ちを抱いていないこと、また、あなたに対する信頼は決して薄れていないことを信じてください。わたしは人そのものとその発想、そして、これらを維持する頑固さを区別することを十分知っています。」

ララン師の復帰がアジャンに好影響を与えたことで、創立者の喜びは更に深められました。そこでこのことをララン師に次のように伝えました(33)。

「マリアの娘の会の総長がその着任以来抱いていた幻想は完全に消えました。わたしは大変多忙ですが、彼女の精神的な悩みによってマリアの娘の会にもたらされた著しい過ちを償うため彼女を助けています。去年の夏以来、外面的には万事解決したようですが、特に司教館を含んで、総長には、そして、総長とほとんど同じような考えを持っている何人かのメールたちにはなおかなりのしこりが残っているように思います。あなたの率直な復帰と、あなたがアルボワの修道院の院長に手紙を書いたことで総長も目覚めたようでした。」

カイエ師にはこの争いのエピソードを次のように伝えました(34)。

「昨年末、12月31日に、評議員のメールたちの出席の下に、わたしたちはこの件に関するそれぞれの書類を焼却致しました。残したのは最後の協定書だけです。和解式の前に総長は評議員のメールと共にわたしに許しを願い、書類が燃えている間に彼女たちはMiserereを歌うことを望み、わたしたちはAve maris stellaの感謝の歌で終わりました。それ以来、わたしたちは五つの修道院で秩序と熱心を刷新させることのみ専念しています。」

メール・セン・ヴェンセン総長はこの困難な時期にシャミナード師とその徳、その神からの恵みを学びました。彼女は創立者と争っただけに、その後、一層深い信頼をもって接して行きました。10年後、彼女は創立者から示された深い献身を次のような感謝の気持ちで表明しました(35)。

「わたしはこれらの助言でボン・ペールの気持ちを知りました。それはわたし

にとって大きな慰めでした。神は、このような立派な案内者をわたしの信仰を導くためにお与えになったので、このお恵の勘定をわたしに求められているに違いありません。」

いずれにしても、両修道会は救われました。しかし、この両修道会の建物の土台はこうして強化されましたが、混乱によって開かれた大きな傷口は修復されなければなりませんでした。創立者は次のように書き送りました(36)。「マリア会は与えられた大きな打撃から立ち直れるでしょうか。わたしは、神の大きな哀れみによってそれが出来ることを期待しています。もちろん、その傷口の血はしばらくは止まらないかも知れませんが。」したがって、マリア会は著しく困惑していました。創立者は次のように信仰の言葉で会員を安心させるようにしました(37)。

「すべてのものが一度に崩れ落ちたかのように思われました。主がわたしたちを改心させるために干渉されたかのように思われます。主はわたしたちを浄化するため罰されたのです。わたしたちは真剣に主に仕えなければなりません。それも、わたしたちのやり方で仕えるのではなく、神の望まれるように仕えなければなりません。神がわたしたちを罰されたのは、わたしたちを滅ぼすためではないことは確かで、わたしは、わたしたちが特に属している乙女マリアがそのようなことを許されるはずはないと確信しているからです。」

創立者はかつてないほど御主の、「*Necesse est ut veniant scandala*」(つまりきき避けられない)(マテオ、18:7)というお言葉を会員に想起させて一致を要請しました。そして、次のように重ねて書き送りました(38)。

「わたしたちがイエス・キリストの霊の導きによって、マリアのご保護の下に十分団結しているなら、わたしたちは極めて強く、地獄が協力してもわたしたちに対して何も出来ないに違いありません。『*Inimicitias ponam inter te et multierem, et ipsa conteret apud tuum*』(お前と女、お前の子孫と女の子孫の間にわたしは敵意を置く。彼はお前の頭を砕き、お前は彼のかかとを砕く。)(創世記、3:15)困難に驚かないでください。」

当時、解決すべき緊急の問題はボルドーのオギュスト土の実情でした。既に誓願が免除されていたオギュスト土は創立者への友情によって、寄宿学校の校長として臨時に新学期を開始することを了承しました。しかし、学校の負債は創立者をひどく

心配させていました。このことは理由がないことではありませんでした。創立者は、「オギュスト土はほとんどおぼれかかった人のように叫んでいます。わたし

はミサをささげ終わったところです。極めて高い超自然的な慎重さに恵まれた聖ヨゼフのみ手にすべてを委ねました」とセン・ルミに書き送りました(39)。

オギュスト士は寄宿学校を建て直し、繁栄させることが出来るただ一人の人はラン師であるということだけを考えていました。しかし、ラン師は教育実習の最中にセン・ルミを去ることが出来たでしょうか。いずれにしても、ラン師は献身のあかしを創立者に示し、オギュスト士の提案を受け入れました。その上、ラン師は自らの教育法に精通していた数名の教師もセン・ルミに残しました。この知らせを受けて創立者は希望に胸躍らせ、「一度このあらしが遠ざかれば、わたしたちが取り戻そうとする平和と落ち着きの状態が前持って感じられるように思います。聖母がわたしたちのすべての問題の結末を尊い浄配に委ねられたに違いありません」と書き送りました(40)。果たして、ラン師は、1833年の復活の祝日に移動の準備のため初めてボルドーに帰りました。秋には、確かにオギュスト士を会計にして寄宿学校の指導に着手しました。

借財の精算がはるかに困難な問題でした。したがって、まず、当日まで同一会計に個人の収入とマリア会の収入を混同し、個人の名義でマリア会のために負債を契約していたオギュスト士の財務上の職責を明確にしなければなりません。将来が不安になったオギュスト士は法規上の規定に従って退会前の給与額を引き去るばかりでなく、なお、マリア会での働きをある程度評価してくれるよう要請してきました。この要求はいずれも会則と修道会の精神に反するものでした。

創立者はオギュスト士の要求に大幅に応ずることとマリア会の利益を守る義務を調整して、ダヴィド士に、「この件はわたしたちの問題であると同時に神の問題でもあるように思います。わたしの大きな望みはわたしたちの偉大な主のおぼし召しにかなうことです」と書き送りました(41)。創立者は個人的にはこの件に決着をつけるためにどんなことも了承する気持ちになっていましたが、マリア会にとっては既に重過ぎる負担が増加していること、そして、自らの権限を越える行為をなはしないかちゅうちょしていました。一方、オギュスト士によって意見を求められたドゥ・シュヴェルス大司教は、またしても彼が有利になるような好意的な態度を示されました。そこで、創立者はオギュスト士の要請に譲歩出来ると考え、「わたしたちの間にはもう何らの争いもなく、今後も友情のうちに生きることが出来るに違いないことが分かって大きな喜びを感じています。ご承知の通り、この気持ちはわたしの心に深く刻み込まれています」といつもの寛容さ、寛大さが明確に感じられるような気持ちを伝えました(42)。創立者は不忠実になった会員をこのように取り扱いました。したがって、会員は、創立者を離れない会員に対してはどれほど寛大であるかを考えました。創立者はオギュス

ト士と最後まで親密な関係を維持し、あらゆる用件を信頼をもって委任しました。一方、オギュスト士もマリア会を、「わたしたちの会(43)」と呼び続けました。創立者がコリノー師(44)と生活を共にしたことは余りありませんでしたが、相互の友情は続いていました。尊敬して止まなかったボン・ペールに臨終の聖体拝領を授ける慰めを願ったのはコリノー師の方からでした。

創立者はオギュスト士と和解すると同時に、久しい以前から悪戦苦闘していた借財の苦境から抜け出すため全力を尽くしていました。そこで、各共同体に最も厳しい節約を命じ、決算をクルーゼ士に委任し、次のように書き送りました(45)。

「確かに賢明に、効果的に努力しなければなりません。御主はわたしたちを助けて下さるに違いありません。今や、わたしたちに示された港に到着するために勇気を倍増する時です。もし、ララン師がセント・マリーの寄宿学校を立て直し、始められた精算が成功すれば、マリア会は強化され、その発展に大きな障害を来していた苦しい気苦勞から解放されるに違いありません…。苦しい打撃を避けるためにはこうした関心を考慮しなければなりません。」

創立者は全会員の献身に訴え、1832年12月3日付けの回章で、これまで起きた事件を会員に知らせ、心を打ち明けて話すことを恐れませんでした。この回章はその後時々マリア会に当てられた回章の第1号になりました。

「会員の皆さん、年老いたわたしが沈黙を破ろうと思ったのは久しい以前からでした。どれほど多くの苦しみを被らなければならなかったことでしょうか。マリア会の二人の主要な補佐の退会はわたしの心を悲嘆にくれさせました。それは、彼らの退会によってマリア会が窮地に陥りはしないかという不安からではなく、彼らに対してわたしが抱いていた好意的な愛情のためでした。彼らはわたしたちの大先輩だったのです。コリノー師とオギュスト士はマリア会創立当初の会員で、その聖なる誓願を長年更新していました…。険悪な状態が続いている間中、わたしは起きたすべての事柄の上に愛徳と友情のヴェールを広げ、苦しみの重荷を自ら堪え忍ばなければならないと思いました。しかし、黙する時があるように、話さなければならない時があります。」それから、創立者はコリノー師とオギュスト士の辞任によって空席のままになっていた総長補佐の靈生局長にカイエ師を、財務局長にメメン士を任命しました。

数日後、創立者はマリア会を強化する可能な手段を講ずること、また、マリアへの奉仕に対する熱意、熱誠、そして、寛容さを倍加することを会員に要請して、回章の結びとして父としての温情の気持ちを、最も感動的な信頼に満ちた言葉で次のように伝えました。

「少なくともこの地上においてわたしを慰め、幸せに出来るのはあなた方だけです。マリア会が真に神の事業であることはすべての人が認めています。特に至聖なる乙女マリアの尊い保護の下に置かれたマリア会は、あなた方の手によって、あなた方の一致した手によってしか滅ぼされません。」

この回章は修道者たちに大きな成果をもたらしました。創立者自身次のように述懐しました(46)。

「ある会員はこれら中堅会員の退会でわたしが受けた苦痛を慰めるよ努め、マリア会に対する愛情と忠誠を改めてわたしに誓いました。また、ある会員は、この事件から思い遣りの気持ちも過信してはならず、いつも自分自身に目覚めていなければならないことの結論に達したようでした。一般に、全会員はマリア会に起きた善や悪を知らせ、熱心を刷新するため執るべき予防策を素直に伝えたことに満足していました。」

他方、創立者は事業の安定性の保証に貢献出来ることは何も忘れていませんでした。オギュスト士の場合は、規約を公表することによって早速彼を啓蒙することになりました。また前述の回章配布の場合にもそのようにしました。そして、出来るだけ早く会憲を公布するために、直ちに新たな検討を加えるようにしました。6箇月後、1834年の秋、マリア会の目的、会員に要請する徳とその修得手段を取り扱った会憲第一部の公布準備が整いました。その要点は会憲の正確な解釈でした。創立者は会員をこれ以上待たせることなく、愛情を込めて作成した簡単ではあっても、感動すべき語を加えて、1834年10月2日これを公布しました。そして、特に回章で次のように伝えました(47)。

「わたしはあなた方のことしか考えてしません。皆さんのためにのみ働いています。わたしの力と命は皆さんのために焼き尽くしました。わたしはこの島流しの世の巡礼の旅の全行程の間、この世でも、永遠の世界でもあなた方を幸せにするよう働いております。」

会憲の第一部の発送はもうアジャンからの日付ではありませんでした。そして、新たな、最後の北部地方の視察旅行を計画したところでした。フランス南部地方の施設の指導にはまる4年間をささげ、1832年と1833年の2回、それぞれの共同体の会員をアジャンに召集し、申し分のない状態に指導しました。年の会員集会の折りに実施された黙想会は、その手紙であかさされたように、創立者に大きな喜びを与えました。ボルドーの学校はラン師の優れた指導で立ち直りました。アジャンの学校も、創立者をひどく悲しませ、み摂理の任務のために、自ら召命の維持に何ら努力しなかった特殊学校の修道者を取り除いたことで浄化されました。こうしてようやく、創立者は北部地方の会員のような配慮

で協力される時期になりました(48)。



注

- (1) 1830年11月22日、ララン師へ
- (2) キリストの模範、1巻、11章、7
- (3) 1831年1月1日
- (4) 1831年2月9日
- (5) 1831年4月30日
- (6) 1831年8月7日
- (7) 1831年10月4日
- (8) 1831年9月22日
- (9) 1831年7月19日
- (10) 1831年12月5日、クルーゼ士へ
- (11) 1832年3月26日
- (12) 同前
- (13) 1832年3月26日、シュヴォー師へ
- (14) 特殊学校には約100名の生徒がいました。そこでは高度の初等教育が施されていました。無償学級には400名の生徒がいました。
- (15) ジャン・ルイ・アンヌ・マドレーヌ・ルフューブル・ドゥ・シュヴルス大司教(1768—1836)は、メエンヌで生まれました。まず、米国のボストンの司教に、そして、モントーバンの司教に(1823)、更に、ボルドーの大司教(1826)になりました。1836年帰天の年に枢機卿に挙げられました。その伝記はアモン師によります。(1867年、パリ)
- (16) 特に、1828年6月の政令に対する態度、ジャクピー司教をいらだたせた態度が取りざたされました。(1828年6月12日の書簡。アジャン司教館資料室)。アモン師はその態度について枢機卿の伝記で説明しました。
- (17) この事実はドンネ大司教とカイエ師の会談によります。この会談は1838年7月13日の手紙でカイエ師からシャミナード師に詳細に報告されました。
- (18) 問題になった青年はボーヴェ教区出身でした。彼はマリア会の最も有能な会員の一人で、1843年総長の補佐に任命されました。1832年の叙階試験は、神学校長が、彼を教授陣に迎えることはふさわしいとの声明を恐れないほどすばらしい成績でした。

(19) エティエン・シャンブレ師は1788年にマルマンドに生まれ、アジャン教区のために設立された最初の教区司祭司牧会に入り、1830年この会の解散後ジャクピー司教によって司教総代理に任命されました。1836年、司教は同師と離別しました。師の管理が信徒から評価されなかったからでした。パンヌの主任司祭に任命され、やがて、アジャンのノートルダム教会の主任司祭に招かれましたが、1856年7月13日帰天しました。(デュラング師の覚え書き)

(20) 1832年3月8日、ドウ・トレンコー師よりコリノー師への手紙

(21) 1832年3月6日、コリノー師からシャミナード師への手紙。この手紙の末文でコリノー師は次のように伝えました。「この手紙を終えるに当たって、あなたを活気付けている純粋な意向に関して、仲裁人として何らの疑惑にも達し得なかったことを明らかにしたいと思いました。」

(22) ツールのガブリエル・トレンコー師は1790年11月12日にローザン(ロッセ・ガロヌ県)に生まれ、ボルドーの神学校で司祭の勉強を始めました。故郷の教区でこれを継続し、1814年に叙階されました。まず、秘書として、次に、1820年から司教総代理をして教区本部に奉仕しました。師はその才能に劣らず、その親切さや謙そんによって尊敬され、1853年4月17日に帰天しました。師は常にシャミナード師やマリア会の誠実な友人でした。

(23) 1832年3月8日。手紙はコリノー師が説教をしていたラ・ロシェルからでした。その原本はアジャンの司教座の資料室に保管されていました。

(24) 当時、シャミナード師の個人的助手をしていたジュステン・デュモンテ士の証言

(25) 同前修道士の証言。創立者のフランネルの下着には血痕の大きなシミが付けられていたことを断言しました。

(26) 1832年3月29日、シュヴォー師へ

(27) 1832年3月29日、ララン師へ

(28) この手紙の下書きには日付がありません。1832年3月15日ごろかと思われます。

(29) それはシャミナード師が強調した事項です。

(30) 1932年5月21日、ドウ・シュヴルス大司教への手紙

(31) 1832年6月25日、シュヴォー師へ

(32) 1832年10月29日

(33) 1833年1月23日

(34) 1833年1月11日

(35) 1845年4月15日、シュヴォー師へ

(36) 1832年9月12日、ララン師へ

(37) 1833年2月18日、ララン師へ

(38) 1832年12月14日、シュヴォー師へ

(39) 1833年3月19日、ララン師へ

(40) 1833年3月23日、クルーゼ士へ

(41) 1833年1月7日

(42) 1833年11月5日。11月18日に合意

(43) オギュスト士は以前エステブネ師が経営していたラビラ通りの寄宿学校を最後まで指導しました。彼は1874年8月15日、取り巻きの人々に見守られてボルドーで帰天しました。最後の朝、近づいていた死去を予見させる徴候は何も見られませんでした。取り巻きの人々には、「今日は聖母の祝日です。聖母が今わたしを呼んで欲しいと思いません。わたしはこのお恵みを聖母に願っていましたから」と言い、数時間後息を引き取りました。

(44) コリノー師はまず小教区を去り、友人のボーヴェの司教総代理ギヌー師の申し入れを受けることを考えていました。ボルドーに止まることを決心して、1835年7月、市内で最も美しい司祭館、セン・ルイの司祭館をドゥ・シュヴルス大司教から頂きました。説教の趣味は失っていませんでした。イタリア、スイス、スペイン等にしばしば旅行し、聖地巡礼の途中、1852年8月28日 ベイルートで帰天しました。

(45) 1833年5月24日

(46) 1833年12月31日、クルーゼ士へ

(47) 9月8日のものは回章で、会憲の送付は次の10月2日、守護の天使の祝日で、マリア会の創立記念日でした。

(48) わたしたちは参事会員モーレン師の好意で、アジャンの司教館の資料室で、本章の記述に用いた資料の一部を拝借できました。なお、深く謝意を表しなければならぬデュボワ師の好意によってその資料の要約に努めました。

第 34 章 施設の最終回総視察 (1834—1836)

北部地方への出発 ❖ 正式修練院の組織 ❖ エベルスマンステル❖ クルトフォンテーヌ ❖ マラストの創立 ❖ 現業修道者の共同体 ❖ レーラックの創立 ❖ ララン師の再度の無謀 ❖ アジャンへの帰省 ❖ ララン師、レーラックの高等中学校を引き受ける。

1834年当初、シャミナード師は会員の一人に次のように書き送りました(1)。

「わたしの健康は保たれているとはいえ、わたしの生涯がなお長く続くことを期待出来るはずもありません。間もなく72歳を終えることになります。すばらしい働きが不足したわたしのみじめな過去を償うために必要と思われるにしても、余り長く生きることは当てにならないようです。あなたは若く頑健ですが、命を粗末にしてはなりません。常に死の準備をしていてください。わたしの年齢に達すれば、いずれあなたもそうなりますが、神への奉仕に最善を尽くせなかったことをわたしが感じているように、後悔しないようにしてください。」

また、「わたしはだれよりも死について考え、死の準備をしなければなりません」とも書き送りました(2)。創立者がアジャンで感じた気苦勞よりも、気苦勞の少ない他の地域にマリア会の本部の移転を期待して、このことを促した会員に対しては、単に次のように答えました(3)。

「セン・ルミに定住するようにとあなたが伝えてくれた急ぎの要請に対して心からお礼申し上げます。ロテア兄弟はエベルスマンステルのすばらしい建物への移転の要請を繰り返しました(4)。高い身分の何人かの友人はわたしがパリに定住することを望んでいるようです。この件に関して、神がそのみ旨をわたしに知らせて下さるまで、マリア会の本部としてボルドーの建物を常に残して置きたいというのが実情です。わたしの個人的好みなど何もありません。いずれにしても、なお、何があるにしても、この世のすべての住みかは、それがどれほど立派で、どれほど快適であっても、わたしには真に流たくの場所でしかありません。」

創立者は、多分やがて神に召されるのではないかとの予想の下に、すべての共同体に出来る限りの完ぺきさと堅固さを保証するための視察旅行の熱意を起こしたに違いありません。1833年末、クルーゼ士に、「わたしはマリア会を強化し、正常化し、出来る限り各会員を浄化するよう常に努力したいと思っています」と書き送りました(5)。また、数日後、新年の折りに全会員に当てた回

章では次のように結びました(6)。

「皆さん、わたしはあなた方皆のためにしか生きようとは思っていません…。わたしはこの生涯をあなた方のためにささげながら、しかし、多くの時間をあなた方のためにささげることが出来なかったことも分かっています。あなた方のある者が考えている以上にわたしは年を取りました。神の事業であるマリア会を完成し、拡大しようとする急ぐのは、その理由の一つではないでしょうか。わたしたちの保護者、尊いマリアのご保護の下でわたしたちは何も出来ないことはありません。どのような徳の段階にも到達出来ないことはありません。」

創立者は、目的達成のためにはいずれ劣らず効果的で、不可欠の二つの手段、すなわち、全施設の総合視察と会則と会憲の最終起草の手段を用いることを考えました。創立者にとって最も緊急事項に思われた最後の業務、すなわち、会憲の起草に着手されたことは先に触れました。その作業が終わるとすぐ出発することを考えたのは、このような旅行には、そして、特に高齢者には避けられない疲れで旅行が中止されてはならないためでした。

創立者が秘書のボヌフォワ士を伴って北部地方の視察の途についたのは至聖なる乙女マリアの誕生の祝日(1834年9月8日)ころでした。フランスの中部地方を通るのがその旅行コースでした。最初の宿泊地はノアイ(コルレーズ県)で、そこでアレクシス伯爵と1830年の革命によって覆された思い出の計画について談笑しました。創立者はノアイには師範学校の代わりに最も重要な事業の先駆となった質素な小学校を開設していました。将来を悲観せず、7月の動乱によってもたらされた自由を有益に過ごしていた伯爵でしたが、不幸にして、次年1835年3月14日、若くして帰天しました。伯爵の様々なすばらしい計画も共に消え去りました。

創立者はリオンを通過して旅行を続けました。自らの用件ばかりでなく、その助言が様々な所からも求められたので、しばしば遅れがちになりました(7)。ブザンソンでは、当市の大司教座にわずかな期間しか止まれなかったデュブル大司教の思い出が生き生きと思い出されました。大司教の帰天は創立者にとって個人的な悲しみでもありました。ボルドー出身で、ニューオルレアンスの旧司牧司教であった大司教は、「様々な機会に創立者に敬意と好意を表されました(8)。」ボルドー滞在の折には、コングレガシオンの集会に出席されるのを誇りにされていました(9)。大司教はフランスに帰ってモンターバンの大司教座に着任された時、同教区に創立されていたマリア会の二つの施設、モワサックの施設とロゼルトの施設を保護して下さいました。ブザンソンでも大司教はマリア会に好意を示して下さいました。マリア会を特別な保護の下に置き、

その土地取得に関してはバルドゥネ師の熱誠と、「マリアの子供にふさわしい献身」に敬意を公に払うべきだと考えられました。(10) 大司教は2箇月後(1833年12月)に帰天されました。創立者がブザンソンを通過された時には大司教座はまだ空席でした。同市に入ることを準備していたマティユ新大司教(11)も前任のデュブル大司教同様マリア会に対して好意を示されるに違いありませんでした。

創立者はブザンソンからセン・ルミに赴き、相次いでマリア会とマリアの娘の会のそれぞれの施設を訪れました。北部地方の滞在は1834年9月から1836年5月まで1年半続きました。1835年の良好な季節をアルザスで過ごし、残存期間をフランシュコンテの各共同体の視察に割り当てました。

最も緊急な問題は立派な養成施設をこの地域に設立することでした。セン・ルミから絶対に修練院を無くすべきではありませんでした。しかし、ララン師は1828年に残念ながらマリア会の志願者を一般生徒のクラスに加えました。このことは、前の召命を危険にさらすようになり、より評価出来る後からの召命を確保出来なくするからでした。やがて、問題の本来の秩序が回復されましたが、7月の動乱後、修練院はもう正規の形で機能しなくなっていました。したがって、若い修道者の養成はその被害を受け、この状態が少なからず長引いたので、会員の養成の問題はマリア会に不幸な結果をもたらすことになりました。創立者は後ほどクルーゼ士に次のように書き送りました(12)。

「わたしたちがマリア会で嘆かなければならない不幸の原因は、会員を養成すべき配慮が足りなかったことにあります…。わたしたちが本会を維持し、前進させようと思うなら、わたしたちの力を修練院に結集することから始めるのが適切ではないでしょうか。ある特殊な施設が苦しむにしても、全共同体を充実させることを目指す養成所が評価されるのではないのでしょうか。」

北部地方にこうした養成所を再建し、ボルドーやセン・ルミで得た経験を養成組織に利用しなければなりませんでした。

修練院に入るために許可される年齢の前に子供たちを受け入れる原則は、セン・ローランで習得した成績の結果によって承認されました。職業訓練同様、修道者の養成は修練院でしか得られないので、創立者は次のように書き送りました(13)。

「マリア会は修練院が必要です、学生修道院のような研修共同体も必要です。わたしたちは最も古い、また、最も尊敬する修道会にならって、両親の意向とその財力によって、また、わたしたちが持っており、あるいは、提供出来る

協力手段によって、信仰心のある何人かの子供たちを修道者に養成しなければならないと考えてきました。わたしたちはこの子供たちをいつも『志願者』と呼んできました。」

こうして、この原則はラン師の反対意見にもかかわらず、北部地方の修練院の再建に承認されました。また、修練院において、「勉学が信心を害した」ということも確認されました(14)。創立者は、「こうした状況下で、修練期の2箇年を2期に区分することを決定しなければならないことが考えられます。厳しい修練の第1期で、修練者は修道生活の知識の習得と信心の実践に従事し、彼らとその身分の徳を習得したと見なされる時、残りの修練期で、その能力によって実務に採用されることも、あるいは、十分勉学に専念させられることも出来るに違いありません」と結論しました(15)。

北部地方に複数の修練院を設立すること、また、同一施設に修道生活を望む志願者を集めることがより有益だったのでしょうか。創立者は、原則的には修練院の増加の賛成者ではありませんでした。それは次の二つの理由からでした。第一の理由は、養成されなければならない会員があちらこちらに分散した時、マリア会の中での一致の精神の不足は危険であるということでした。こうした理由のため、創立者はマリアの娘の会の修練院は修練者の数からみてアジャンの修練院で十分であると考え、アセーに正規の修練院を設立することには反対していたからでした。更にまた、セン・ヴェンセン・ドゥ・ポールの愛徳修道女会が、「無数の修道院にとって、修練院がどれほど遠くになっても一つの共同の修練院を設立した」という例を引き合いに出しました(15)。第二の理由は十分根拠のあるものでした。それは、何名かの優れた修練長を見いだすことが困難だということでした。創立者は、「どのような修道会でも、一人か二人の優れた修練長を持つことは大きな宝です。もし、この職務にふさわしい会員を見いだすことが出来なければ、修道会は変質し、やがて会則もゆるんでしまいます」と書き送りました(16)。

こうした一般的な考察にもかかわらず、創立者はアルザスとフランシュコンテの2箇所に修練院を設立することを了承しました。それは両修練院に配置する十分な会員を確保出来たからであり、そして特に、アルザスでは2箇国語の使用が必要だったからでした。

政治的な出来事にもかかわらず、常に隆盛に赴いていたアルザスの共同体にはスール、ケゼルバール、そして、エベルマンステルから3名の会員が合流してきました。エベルマンステルは養成施設として使用するために決められた共同体でした。その果たすべき役割はあらかじめ決まっていたということが出来ま

す。エベルマンステルのこのベネディクト会の旧大修道院は、アルザスにとって、長い世紀にわたって信仰と文化の感化の中心であったという歴史を持っていました(17)。革命勢力はそこに正規の共同体(18)を見つけ、修道士たちを四散させましたが、すばらしい修道院と東洋風ドームの三つの鐘楼が全地域を圧倒するほとんど真新しい教会は大切に保存しました。祭壇、パイプオルガン、聖遺物も保存されていましたが、ドームの絵画のみは塗りつぶされていました。教会堂を除いて、教区教会の所有になっていた全体と幾つかの付属建物が3万フランというお話にならない価格で1830年売却に付されました。創立者はこの地所の取得と、この荒れ果てた建物に再び会員を住ませたいとの熱意にもかかわらず、これを放棄せざるを得ないと考えました。創立者は立たされていた苦境の中で、どのようにしてこの新しい地所の購入契約を慎重に結ぶことが出来たでしょうか。ロテア家の人々は創立者のこの犠牲をあきらめることが出来ず、自費で大修道院を購入し、創立者に寄贈しました。創立者は1838年に会員を入居させ、そこに寄宿学校を開校しました。創立者はこの広大な修道院やすばらしい回廊の状態を調べていた時、ここに真にふさわしい目的を与えることにしました。ここに来た時、「アルザスのためにすばらしい修練院を設立するのに必要な計画を立てることが出来ることを期待しています」と書き送っていたからでした(19)。

間違いはありませんでした。それは、成功のすばらしい前兆とも思われる修道生活の環境があることを確認して、「わたしたちがアルザスで強力になるとすれば、それは一致と服従があるからです(20)」と書き送っていたからでした。やがて、ロテア兄弟が創立者に繰り返して止まなかった真の理由が分かりました。ルイ・ロテア士は「わたしはいつも信じていましたが、なお、哀れみ深い神はこのアルザス地方に全く特別な目的や計画を持っておられることを確信していました(21)」と語っていたからでした。

創立者は全生徒をセント・イポリットの寄宿学校に転校させるとすぐ、エベルマンステルを養成施設として独自の目的に転換しました。この施設は急速に拡大し、昔風の修道者フランソワ・ジラルデの優れた指導に託された日から特に発展しました。幾つかの年代の修道者を養成したこの神の人の思い出はマリア会にとっても、エベルマンステルの思い出として忘れないものになりました(22)。

フランシュコンテの修練院はクルトフォンテーヌの共同体の側に設立されました。マリア会は極めて異なる物質的環境にもかかわらず、レオン・メイエ師の指導で昔の修道者の熱心を刷新しました。召命の数が増加することは予想されましたが、財政は厳しく、住居も狭く質素でした。修道院の寄贈者クードル嬢

の計り知れない献身にもかかわらず、当初は困難を極めました。しかし、創立者はこうした状況下でいつも励ましていたように、信仰の言葉で勇気を鼓舞するよう努力し、次のように書き送っていました(23)。「わたしたちは、同時に、セン・ルミの修練院の建物のような粗末な建物を建てることは出来ません、神はわたしたちを慰めようとして施設創立という大きな事業を与えてくださったのです。まず、わたしたちが気づいたのは大きな混乱でしかありませんでしたが、神がお作りになったすばらしい計画によってその混乱は次第に解決されていってることが分かりました。」そして、メイエ師には、「頑張ってください。主のみ業の中での苦痛、困難、反対等はすばらしい印だからです」という励ましの言葉を伝えていました(24)。

事実、障害は次第に取り除かれていきました。2年の後に、創立者は、「クルトフォンテーヌとエベルマンステルの二つの修練院はわたしに喜びと希望を与えました。いずれの修練院にもすばらしい熱意が見られるからです(25)」と達成された成果を喜びました。養成された最初の会員は、久しい以前から学校の指導のために会員を要請していたドゥ・シャモン司教の司教座のある町セン・クロードに予定されました(26)。養成第2番目の会員は、ドゥ・ジェルファニオン司教の要請に応じて、ロッセヌ地方、ヴォジュ県側のセン・ディエへ最初の会員として派遣されました。このことは後ほど触れることになるようにスタートに過ぎませんでした。

セン・ルミは師範学校と修練院を同時に失いました。クルーゼ士の忍耐強く賢明な指導のおかげでこのすばらしい地所から著しい財源を得ただけに、この事業の短縮はその賠償が求められることになりました。創立者にとっては、長い間大切に抱いていた二つの計画を同時に再開する時期が到来したように思われました。第一は、セン・ルミの地所の購入を決定することでした。ご記憶の通り、教区司牧司祭たちは黙想会によって教化される大人や青少年たちのために黙想会の場所を作ることを考え、また、祈りとささやかな労働の生活を送るために世俗を離れることを考えていました。しかし、財政難からこうした考えの実現は妨げられていました。同様に第2の計画がありました。この計画は当初から計画されたもので、修道者のための工芸学校、あるいは、地域の青少年のための併設学校にせよ、セン・ルミに農業及び職業養成センターの設立を目指すことでした。

創立者は、後者の計画に関して1833年に、「マリア会は当初から工芸の教育を意図してきました。もちろん、この部門は他の部門よりも、難しさと、出費と、指導者不足のため困難に出会うことは確かです(27)」と自らの考えを伝えました。これらの障害は次第に取り除かれたので、クルーゼ士は必要な様々な設

備の設置が出来るに違いないと考えました。セン・ローランの修道院では、修練院が閉鎖されたにもかかわらず、業務を継続していた作業所には優れた指導者のスゲン修道士がいました。創立者は1835年にスゲン士を作業員共々セン・ルミに転勤させることを了承しました。また、1万2000フランで購入し、大変役立っていた金属細工用の大きな機械も同地に運ばせました(28)。

人々を教化し、工芸学校の指導者の養成を目指すこの新しい宣教活動はどのようなタイプの宣教活動だったのでしょうか。また、この宣教事業で働く会員をどのような生活様式に、また、どのような特別則によって活動に専念させることになったのでしょうか。創立者がセン・ルミに滞在中解決に努力したのはこの問題でした。このことは当時マリア会で、教師と呼ばれていた信徒修道者と現業修道者の共存というより全体的な他の問題と密接に関連していたからでした。

創立者は手工芸に従事する現業会員の召命を高く評価していました。したがって、次のように書き送りました(29)。「一般に修道者の身分の召命は特別なお恵みです。しかし、手工芸に従事する会員を決定するみ摂理のおぼし召しは好意的なお恵みです。この召命は世をより遠ざけ、すべての善意の修道者を鼓舞する神との一致をより容易にするからです(30)。」また、セン・ルミ滞在時に、マリア会ではこの召命によりふさわしい養成に関してまだ決定されていないことを認められ、「マリア会の第3の部門、すなわち、現業会員の部門について最終的なご意向はまだ神からたまわっていません(31)」と話されました。いずれにしても、創立者はその当時から現業会員を一緒にし、出来る限り他の会員から引き離すようにしていました。クルーゼ士には、「現業会員を多少離れていても正規の共同体にまとめないなら、彼らの中に真の修道者を養成することに決して成功しないと思います(32)」と書き送りました。そして、数箇月の試みの後、この考えを強調して、「今でもこのように考えています(33)」と伝え、次第にクルーゼ士をこの考えに導いていきました。

創立者は、2年後、この点に関して極めて積極的になり、何らちようちよすることなく、次のように書き送りました(34)。

「ご存じの通り、マリア会全体はこれらの3種類の会員からなっています。すなわち、司祭修道者、信徒修道者、そして、耕作及びその他の業務の現業修道者です。現業修道者を様々な施設に分散させても、また、他の種類の修道者と混合させてもよくありません。彼らはマリア会の共同体とは別の共同体、同じ敷地の共同体とは異なる共同体を作らなければなりません…。この種の共同体は初期のベネディクト会の共同体にかなり類似し、また、トラピストの共

同体に近づくことになると思います。しかし、熱心さの維持とその増大に適切な様々な修正を加えなければなりません。それは、明らかに命を短命にしたり、労働の維持のために必要な力を取り去るようなある種の苦行を緩和しなければならないからです。そして、一度これらの共同体で誓願を宣立した現業修道者はマリア会の他の部門の共同体への移動を要請することは出来なくなります。もし、総長がある現業修道者を他の部門の共同体で他の業務を行わせるために転勤させなければならないと神の前で考えるなら、当該修道者はこれに従わなければならない(35)。」

この試みはセン・ルミで行われ、満足な結果を得ました。ただ、この目的のために改修された部屋がなかったので1年間模索しなければなりませんでした。創立者はこのことを嘆いて次のように書き送りました(36)。

「特にわたしがつらい思いをしているのは、何度かあなたに示したように現業修道者の共同体についてです。確かに、彼らの共同体の設立の時期はまだ来ておらず、恐らくわたしの死後になることでしょう。何事も急ぐことなく、万事において神のみ旨をたたえましょう。」

いずれにしても、創立者は失望することなく、このすばらしい現業修道者の共同体は、「神のご計画に、また、マリア会の当初の計画に極めて歴然としていられるように思われます(37)」と伝えて、その実現方をクルーゼ士に促すことを忘れませんでした。そして、次のように付け加えました。

「この共同体がいかにわたしたちの当初の目的にかない、また、わたしたちが生きているこの不幸な時代に、いかに教会に模範を示すことが出来るかを次第に感ずるようになりました。マリア会のこの第3の部門が発展し、他の二つの部門がこの第三の部門を支えるように、他の二つの部門を支えるために強力な助けとなることはほとんど疑う余地がありません。」

果たして、クルーゼ士はこのことに熱心に努力しました。小学校と中学校の二つの寄宿学校の統合以来、現業修道者を城館に移し、その一室を自由に使用させました。創立者はこのことを大変喜び、1838年の初頭には、「あなたの善意にわたしは慰められました。わたしはマリア会の第3の階層ないし部門が発展することを少しも疑いません(38)」と書き送りました。万事順調に進み、召命にも不足しませんでした。クルーゼ士は10棟の作業所を引き続き作ることが出来、ついに創立者が極めて熱望していた現業会員の共同体を設立することが出来ました。この共同体の真価が証明された時、創立者は1838年11月に特別な規則を与えました。次のくぐりは、創立者からクルーゼ士に送られたものですが、ここにこの規則の精神が説明されていました(39)。

「現業修道者はマリア会の全般的政策、そして、特に、全般的会則に従います。特に違っている点は、彼らはマリア会全体が追求することを意図している聖ベネディクトの規則の精神をよりよく取り入れることが出来たことです。また、現業修道者はアダムとその子孫に課せられた、『お前は生涯ひたひたに汗してパンを得る』という償いをよりよく果たすことが出来るのです。更に、彼らはより深い潜心とより厳しい沈黙(40)、より厳しい清貧、より親密な一致と兄弟愛に生きることが出来るのです。その生活はほとんど隠とん生活になります。彼らは一日の労苦によって生活必需品として何を提供し、どのような慈善をなすかを判断しなければなりません。」

これらの善意の修道者の熱意は創立者の期待にこたえることが出来ました。次のような新たな報告を受けたからでした(41)。

「わたしたちの現業会員の共同体は極めて順調です。かなりの会員が禁欲の道にかけ入ろうとさえしています。一般に彼らはほとんどぶどう酒を飲まず、昨年彼らが食べたパンは3分の1以下でした。肉を全然食べない会員、待降節に大齋する会員もいます。しかし、わたしは完全にこうしたことが出来る会員にしかこれを許可していません。また、夜中に聖体訪問をなすために起きる会員もいます。シュヴォー師はそのことは既に許可していました。わたしも、彼らがシャペルに残るのは15分だけであること、そして、そのことが会則の実施を妨げないことを条件に続けて許可しなければならぬと考えています。」

こうした寛大な配慮にも何らかの無理があることを多少心配し、恐れた創立者は次のように書き送ってクルーゼ士を安心させました(42)。「確かに、わたしは現業修道者の共同体で禁欲についての説明が不十分だったと思います。この禁欲はもっぱら自発的な行為です。わたしはいつものよう苦行を許可しましたが、パンはいつも十分食べさせました。」

クルーゼ士が、「小さなトラピスト」と時々呼んでいた現業修道者の共同体は創立者に多くの喜びをもたらしました。彼らの共同体は創立者によって聖ヨゼフの保護の下に置かれ、特別な配慮によって援助されました。作業上の長は特に配慮や心遣いが求められました。たとえそれが作業場の長の義務だとしても、「彼らは大きな熱意で共同体を支えることになり、その模範が全く幸せな反応を起こし、聖人さえ作ることになるに違いありません」とクルーゼ士は創立者に書き送ってきたからでした。(43)この新しい現業修道者共同体の創立は早速普及していきました。フランシュコンテにおけるマリア会の発展を期待していたバルドゥネ師は、現業会員の活動地としてクルトフォンテーヌのような、オート・ソーヌ県のヴィルスゼル(44)の近郊でマラストの部落にあった教会参事会員

の旧小聖堂をマリア会に提供しました。マリア会はそこに寄宿学校を開校しました。また、マリア会の「第3部門」が組織され、現業修道者の共同体が設立されました。1838年に火災によって建物の一部を焼失したにもかかわらず、共同体は繁栄し、当時、すなわち、カルキスト党が挫折した時、フランシュコンテに亡命したスペイン人の司祭たちを避難させることさえ出来ました。創立者はスペイン人司祭たちに奉仕出来ることで幸せに思いました。この亡命者のことについて、「最高に歓待してください。かつてわたしたちを極めて寛大に受け入れてくださったこれらの気の毒な司祭方をわたしたちが歓待するのは当然だからです(45)」とクルーゼ士に書き送りました。こうして、セン・ルミとクルトフォンテーヌの共同体はしばらくの間スペイン人司祭を宿泊させました。

現業修道者の組織は、彼らの養成のための特別な修練院の設立と聖人のような人であったシュヴォー師(46)にその指導を委任することで整っていきました。シュヴォー師の極めて謙そんで、禁欲的な特性はこの重要な聖職に適切でした。師はロラン山のふもとのジュー部落の出身で、1823年にセン・ルミに最初に送られた二人の志願者の中の一人でした。師は特に修道院の清掃を願って共同体を尋ねて来ました。ところが、創立者がそれから数箇月に初めて気づいたことは、師は既に勉学を完全に終了し、ブザンソンの神学校で神学さえも終了していたということでした。創立者は師に司祭職に進むよう要請しました。師はだれよりも創立者の精神を体得しました。創立者も師の修得に配慮し、自ら完徳の道に導いたからでした。師の虚弱な健康には若い司祭の禁欲の精神を適性にする配慮が求められました。そこで、創立者は禁欲を適性にすることを要請し、「あなたは自分自身の健康を大切にしなければなりません。神は限りない愛によって、むしろ、限りない哀れみによってあなたにその健康を与えられたからです」(adhuc longa via restat tibi)(列王期9:7)(あなたにはまだ長い旅が残っている)とすばらしい言葉で論しました(47)。確かに、師の健康は虚弱でしたが、絶え間なく続く多くの活動を生涯支えていきました。師はマリア会の第3代総長に選任され、80歳に達した1875年12月27日に帰天しました。

セン・ルミの聖ヨゼフ現業共同体の側に建てられた現業修道者のための修練院は共同体全体の模範になりました。創立者によれば、それは、「正に小さなテバイドの隠とん所(48)」でした。この修練院は信徒修道者のためのクルトフォンテーヌ及びエベルマンステールの修練院、そして、少数ではあってもマリア会の司祭修道者(49)を養成し続けてきたボルドーのマドレーヌの修練院と競争していきました。

創立者はこれらの地方を去る前に個人的に負っていた財政問題の処理を

しました。この旅行が最後になるような予感がしていたからでした。また、アシェに行くためバルドゥネ師と別れる時、「これが最後になるかも知れません(50)」と伝えました。セン・ルミの地所は総長名で取得されました。創立者は二人の総長補佐と共に購入契約書に署名しました。また、南部の共同体が常に不安になっている財務状況について北部の会員にも関心を持たせるようにしました。クルーゼ士によるすばらしい節約による年間1万2000フランから1万5000フランの減価償却にもかかわらず、「負債の淵」は埋まりませんでした。しかし、ボルドーのララン師は財務の危機を避けるような人ではありませんでした。自暴自棄になって、気前よく消費し、他の会員によって補充される資金に穴を開ける始末でした。しかし、その地位はそれ事態優れた教育活動であっても用心のない行動のため批判されることになりました。ここで、セント・マリー校をボルドーからレーラックに移転させる件について触れたいと思います。

ララン師はラザック邸が手狭になったと考えました。自らの評判と熟練によって定数を越えた生徒で学校が満杯になったからでした。そこで、より大きな学校を望んだのです。しかも、自分自身ボルドーから出ることを望んでいました。それは、これまでの教育活動にもかかわらず、王立高等中学校を支援するボルドー市に残る限り当局から寄宿学校への「充実した教科課程」の特典は決して得られないことを確信していたからでした。しかし、田舎ではこの特典が期待出来、同時にまた、セン・ルミで試みた教育プランの再開が期待出来ると考えたからでした。

1835年の春、1820年にアジャンの学校の創立に協力したマリア会の旧友ダルディ氏はアジャンの近郊でレーラックの旧大修道院を極めて手ごろな条件で取得出来ることを創立者に提案し、「ララン氏の手によれば、レーラックは他のソレーズ校(51)になるに違いありません(52)」と書き送って来ました。

当時、アルザス滞在中の創立者はセント・マリー寄宿学校の移転の利益を理解しましたが、ララン師を信用せず、ボルドーから遠く離れた地域での決定を望まず、ボルドーの総長評議会に問題を委任し、当該学校の移転を了承する場合、「厳密に必要かくべからざる」費用以外の修理費等は支出してはならないことを命令しました。しかし、このことは聞き届けられませんでした。移転の件に夢中になっていたララン師は移転のために不必要な支出をするまでになっていました(53)。会計報告を求めた創立者に対して、ララン師は驚くほどぞんざいに次のように答えました(54)。

「わたしたちとわたしたちの移転手続きの上にあなたの祝福を下さい。現状では自発的に行動せざるを得ません。どうぞご安心下さい。わたしたちには分

別があります。わたしたちの心の正直さと純真さを見ておられる神はその助けを拒まれることはありません。」

この言葉が賢明な創立者を安心させる性質のものでなかったことはだれにも分かりました。そこで、創立者は、厳格な指示を与える会計係をラン師に付けました。ところが、任命されたメメン士はラン師のような校長の大きな計画をストップ出来るような修道者ではありませんでした。ラン師と共にレーラックに行き、用心深く提案した様々な考えにも耳を貸さないばかりか、成功に有頂天になっていたラン師に歯止めをかけることは出来ませんでした。ラン師は、早速、セン・ルミで体験したような評判を得ることが出来ました。ここでの教育活動もより目立っていて、同じような原則で行われたので、地域の良家の父兄は子供たちを争って入学させるようにしました。ところが、金庫はいつも空でした。何ら貯蓄が出来なかったからでした。そして、創立者からの親切な忠告の言葉もその耳には届きませんでした。しかし、次のような警句は受け入れていました(55)。「光陰矢のごとし。時のたつのは早い。時の流れは老人のようなものだ。その時は瞬く間に過ぎ去る。若者は年を取るのが極めて遅く感じられるからである。」

これらの失礼な言葉は創立者の寛容さを失わせることなく、かえって、その思慮分別を強固にしました。創立者はその忠告を倍加しました。1830年の初頭、ラン師がボルドーでの未払い金さえも精算不可能になったことに気づいた時、き然としてその会計報告の提出を要求しました。ラン師は自らの責任を、そして、マリア会に対する責任を取るために自ら報告する義務があり、正直にマリア会に報告しなければならなかったからでした。創立者はセン・ルミから次のように書き送りました(56)。

「あなたが、ここで、また、ボルドーで過ごした数年来、あなたの改心のわずかな期間を除いて個々の修道院の院長が総長への従属の義務に常に異議を唱えて来ました。そして、あなたは独立して実施することが必要と思われる計画を持っています。こうしたことはマリア会の精神ばかりでなく、すべての修道会の精神にも反する何ものでもありません。あなたが抱いているぼう大な計画を完遂することは醜聞の代価を払うことになるのではないのでしょうか。」

事実、ラン師は計画が成功したことで有頂天になり、自らの計画を常に阻む障害にいらだって、セン・ルミの分裂の誘惑を再現する以外には何も考えていませんでした。「もし、マリア会が崩壊することにでもなれば、マリア会の財産は引き受けます(57)」と豪語していたほどでした。こうしたおどしの言葉で何ら動揺することのなかった創立者はある手紙で次のようにほのめかすことに止めまし

た(58)。

「あなたはわたしをボン・ペールと呼んでいます、これで最後ですと言っています。ダヴィドは、アブサロンが刃向かい、王座が奪われ、王座から引きずり下ろされることを余儀なくされたにもかかわらず、いつも父の愛情を持っていました。」

ラン師はしばらくの間反抗に揺れ動いた後、当然、極めて強い信仰を取り戻し、同時に、創立者との深い親交に復帰する決心をしました。創立者に譲歩し、会計報告をなし、自らの過失を忘れていただくために愛情のあかしを重ね、出来るだけ早くレーラックを訪れてくださるよう創立者に懇願しました。1836年3月24日、次のように書き送りました。

「お出で下さい。あなたがこちらにお出で下さって、あなた自身わたしの監督者、指導者になって下さい。このすばらしい施設を受け取りになって、久しい以前からあなたが苦々しくわが子と呼んでいたわたしの全面的で決定的な服従をお受け取りください。平和で平穏な日々、永遠の眠りの前の安息の一時が、あなたが純真で、敬虔な揺籃を生きたフランス南部のこの同じ空の下に約束されています。この上遅れることなくお出でください。絶好の季節です。あなたの部屋も出来上がるところです。あなたの友人が皆待っています。あなたと和解し、わたしの心の愛情と誠実さを現すことが出来ることを期待しています。」

ラン師が提出した財務報告書は創立者を安心させるにはほど遠いものでしたが、創立者も早速レーラックを訪れる気持ちになっていました。そこで、北部地方の視察を終えるとすぐ、リオン、ツルーズを経てアジャンへの行程をたどりました。

5月22日にはマリアの娘の会の修道院に宿泊し、早速、ラン師にレーラックへ赴く旨を伝えました。もちろん、それはラン師が前もって修道院の院長と会計係の権限や相互関係を規制した覚え書きに署名して、自らの善意の積極的な保証を創立者に示すことが条件でした。ラン師はある日ちゅうちょしましたが、アジャンに駆け付け、ボン・ペールの前にひれ伏して全面的で余すところのない服従を誓いました。創立者はラン師を起こし、レーラックに伴いました。

負債を調べた創立者はそれが恐れていた以上に多額であることに気づきました。少なくとも同額の負債であったボルドーの負債に加えて、この新たな10万フランの負債をどのように処置出来たのでしょうか。創立者の厳しい当惑に気づいたラン師は自らの気前のよさと自立への熱情にかられて繰り返し述べてい

た解決案を思い切って申し出、自ら建物の責任を取ることを提案しました。したがって、この負債はマリア会の責任ではなく、ラン師個人の責任になるということでした。レーラックの学校が繁栄した状態でマリア会に返還出来る日まで収入も支出もラン師の責任になるということでした。

創立者はこの解決策を了承しました。他によりよい手段が見つからなかったからでした。このことは確実に迫っていたマリア会の破滅を予防出来る一案だったからでした。その上、ラン師は、自ら負うことになる個人的な責任によって、より賢明に、より用心深くなり、この経験によって利益が上げられることが期待出来たからでした。(1836年7月)

問題を解決した創立者はその事業全体の完成を目指した最後の創立、すなわち、これから触れることになるマリアの娘の会の在俗修道会の創立に着手しました。この創立の件は次章で取り扱うことになります。



注

- (1) 1834年1月20日、レオン・メイエ師へ
- (2) 1835年10月26日、クルーゼ士へ
- (3) 1833年12月31日、クルーゼ士へ
- (4) アルザスにありました。本章の後半参照
- (5) 1833年12月31日、クルーゼ士へ
- (6) 1834年1月4日
- (7) 1834年9月、シャミナード師の手紙参照
- (8) 1833年3月14日、シュヴォー師へ
- (9) 220ページ参照
- (10) 1833年10月6日の大司教教書
- (11) 1834年11月6日、マティユ大司教については後ほど触れます。
- (12) 1839年10月18日
- (13) 1830年11月22日、ラン師へ
- (14) 同前

(15) 1837年7月、バルドゥネ師への手紙の草案

(16) 1830年11月22日、ララン師へ

(17) この大修道院の創立はダゴルベル王によります。Aprimonasterium(エベルマンステールのいのししの大修道院)は、王子が非業の死を遂げた狩りの事故が想起されます。66名の大修道院長が連続して大革命までこの大修道院を継承してきました。

(18) なお、21名の修道士と5名の修練者がいました。大修道院長はドン・エグズベル・イルンでした。

(19) 1835年5月17日、クルーゼ士へ

(20) 1835年1月20日、レオン・メイエ師へ

(21) 1838年2月23日

(22) この聖人のような修道者は1844年から1868年までベルマンステルの修道院を指導しました。後にマリア会の総書記に任命されました。1892年1月25日、同僚の会員にみとられて帰天しました。ジュラ山地の出身でした。

(23) 1830年11月22日、ララン師へ

(24) 1835年8月20日

(25) 1837年1月15日、バルドゥネ師へ

(26) 1833年からセン・クロード教区のサレンに他の施設が設立されました。

(27) 1833年1月14日、シュヴォー師へ

(28) 1830年12月9日、クルーゼ士へ

(29) 1833年1月14日、ショヴォー師へ

(30) 創立者はある日手仕事を大事にしないように思われたある修道者に厳しく接し、次のように教えました。「あなたは、マリア会には卑しい身分は全然ないこと、また、兄弟に奉仕する会員は、わたしにとっては、信仰の観点からと同様、教育に従事する会員と同様であることが分かっていないようです。伝え聞いたことによると、幾つかの修道院で、現業会員の仕事を使用人の仕事のように見下げているのではないか不安です。彼らを正規の会員と見なすことを恥とし、外部に対しても同じ会員として伝えたり、認めようとせず、また、内部でも、下男のように取り扱っているように思われるからです。わたしはこのような大きな間違いにあなたの注意を喚起します。このような悪習がわたしたちの内に忍び込み広まるなら、神の祝福が無くなることを確信してください。会員に奉仕する兄弟を軽べつし、自分たちと同一修道会に属するからといって自分たちが見下げられると考える修道者を神はどのような目で見られるでしょうか。そして、尊いマリアはこのように思い上がった人を喜ばれるでしょうか。わたしたちの内にこのようなことがあるなら、こうした精神を無くすようにしてください。」(1839年10月18日、クルーゼ士へ)

(31) 1836年12月26日、クルーゼ士へ

(32) 1836年7月30日

(33) 1836年12月26日、クルーゼ士へ

(34) 1838年12月29日、フリブラ師へ

(35) この制限は1839年の会憲、373条で次のように提示されました。「総長はマリア会の必要のために、例えば、教育のため、または、他の共同体の奉仕のため、他の業務を果たすためより適切に思われる現業修道者を、現業修道者共同体から移動させることが出来る。また、彼らを耕作、園芸、工芸の教授のために移動させることも出来る。しかし、当該修道者はもっぱら総長の意向に従う意志を持たなければならない。決して移動を要請してはならない。」

(36) 1837年10月31日、シュヴオー師へ

(37) 1837年12月23日、クルーゼ士へ

(38) 1838年2月3日。創立者はセン・ルミに老齢の会員のための隠居所を作ることも考えていました。「やがて、マリア会のすべての老齢会員や病弱の会員のための別の共同体が出来ることになります。そこでは、会則は緩和され、あらゆる必要な援助が与えられることになります。わたしは目下この業務を検討中です。」(1837年11月20日、クルーゼ士へ)

(39) 1838年11月14日、クルーゼ士へ

(40) 「現業修道者は食事の後、いわゆる休憩はありません。彼らのそれぞれの仕事は十分な休憩になっているからです。しかし、彼らにも時々休憩というより休息が必要です。例えば、真夏において、あるいは、必要な労働が起床前などに要請される時等です。」(1839年の会憲、377条)

(41) 1838年12月23日、クルーゼ士から創立者へ

(42) 1839年2月1日

(43) 1839年2月12日、クルーゼ士へ

(44) マラストの旧小聖堂はしばらくの間ブザンソン教区の小神学校として使用され、それから、ルクジョール村に譲渡されました。バルドゥネ師が取得させたのはそのころでした。

(45) 1840年11月1日。シャミナード師はボルドーにおいてもスペイン人亡命司祭たちに協力するよう努力しました。長い間、市内には亡命司祭がいっぱいでした。彼らは遅い時間にミサをささげていました。このことはフランス人亡命司祭たちがスペインで行っていたのと同じでした。サラゴサのベルナル・カバレロ大司教もまたボルドーに避難していて、1843年12月に当地で帰天しました。

(46) ジャン・シュヴオー士は1796年9月4日に生まれ、1825年10月9日にセン・ルミに

入りました。

(47) 1837年2月13日

(48) 1839年1月1日、ロテア師からシュヴォー師に伝えられた言葉

(49) 1865年、マリア会構成の3部門の共同の修練院設立をマリア会総長に要請した司教及び聖職者協会の非難。

(50) 1836年4月14日、ペッロダン師からの手紙

(51) 1835年4月

(52) ソレーズの学校はラコルデル師が指導を再開する前から有名校でした。「ラコルデル師伝」、2巻、244ページ以降にこの学校の歴史概要が見られます。

(53) 1835年7月31日、ララン師はクルーゼ士に、「莫大な修理費を使ったことを白状しました。」

(54) 1835年7月31日

(55) 1835年8月12日

(56) 1836年1月20日

(57) 1836年2月6日、ララン師への手紙参照

(58) 1836年2月6日

第 35 章 マリアの娘の会の在俗修道会 (1836)

田園地帯での在俗修道女会の必要性 ❖ み摂理の姉妹会との合併計画
❖ オーシュのシュヴァリエ師 ❖ 在俗修道女会の創立 ❖ その発展 ❖
コルシカ島での創立 ❖ 在俗修道女会の会則 ❖ ドゥ・ラムルス嬢の病 ❖
創立者のボルドー帰着。

シャミナード師は20年前から創立者としての使命を完了することを待っていました。最後にこの事業に着手するため20年間待っていたのです。したがって、聖アウグスチヌスが、「主人の意志を常に先取りすることを目指す危険で、性急な召使」に比較した、このあわただしさや性急な軽率さは納得出来ないものとして常に創立者の考えにあったことが知られています(1)。創立者がマリア会の第三分野と呼んだもの、すなわち、現業修道者の共同体を創設したのは北部地方の最後の視察の時でした。したがって、シャミナード師は、マリアの娘の会の創立当初からその効用が認められていた補足的な組織によって、同会をささえる事業が残されていると考えていたのです。

確かに、マリアの娘の会にはある不備な点が認められていました。ちっ居の誓願とその要請はマリアの娘の会に田園地域での宣教活動を不可能にしていたからでした。また、大都市での宣教活動を制限することも彼女たちが目指した目的を弱めることであり、彼女たちの使命として主張する資格のあった宣教活動の大きな役割の主要な部分を除去することになるからでした。シャミナード師とメール・ドゥ・トランケレオンはこの点に関して意見の一致を見、相互に神から提示されるに違いない手段によってこうした不備が埋められることを期待して、み摂理による指示を伺っていたのです。記憶される通り、メール・ドゥ・トランケレオンは最初から生涯を地域の宣教活動にささげること考えていただけに、田園地域での宣教活動に従事する熱意に燃えていたのです。

在俗修道会は1817年及び1820年にアジャンとトネンに創立されました。当該修道会を構成する会員は在俗で生活しながら、修道会の共通目的、宣教活動を追求し、会員が自由に出来る時間に限って移動許可書を受け取るための「宣教委任状(2)」を要請しました。この在俗修道会は田園地域で、マリアの娘の会を補充するための手段だったのではないのでしょうか。メール・ドゥ・トランケレオンはそのことをほぼ考えていたようでした。彼女は、1821年10月12日に、トネンに次のように書き送っていたからでした(3)。

「わたしは、在俗修道会の修道女がラツリボー師によって指導されることを望んでいます。そのことが大変有益に思われるからです。もし、彼女たちがラツリボー師によって指導されれば、多くの善がもたらされるに違いないからです。わたしはこの小さな苗が田園地帯にその木陰を広げるすばらしい樹木にまで成長するに違いないと思っています。そして、この在俗修道会は懐かしい田園地帯でマリアの娘の会の事業を実施するために予定されたものと考えます。しかも、この在俗修道会は御主が都市や田園を通して宣教された足跡をたどらなければならないマリアの娘の会の一連の修道会だからです。以上のことを親愛なるドジテ嬢にお伝えください(4)。」

メール・ドゥ・トランケレオンはそれ以上うまく説明出来なかったかも知れませんが、シャミナード師と彼女は在俗修道会に関する考えを完全に分かち合っていました。しかし、計画実施には大きな困難があることに気づいていました。いずれにしても、創立された在俗修道会は確かに田園地域の宣教活動を互いに負担することが出来、実際にこれを負担していました。しかし、この宣教活動に規則性と持続性をどのように与えることが出来たのでしょうか。真に永続的な宣教結果を期待出来たのは、もっぱら、世俗の業務から解放された人々、また、統一された規則に従う人々、言い換えれば、正規の共同体の在俗修道会の会員からでした。これは創立者の確信でした。もちろん困難な点もありました。創立者は原則的には、この件に関しては何ら決定的な考えを持たなかったからでした。かえって、実施上の困難を予測していました。そこで、かつてないほど神からの照らしを忍耐強く待つような気持ちになっていました。シャミナード師のこうした迷いや不安は、マリアの娘の会の創立者メール・ドゥ・トランケレオンへの手紙で表明され、次のように書き送れていました(5)。

「在俗修道会は狭い地域で学校を経営する教職員を確保出来るのでしょうか。わたしは出来ると思いますし、数年前からそのことを期待しています。しかし、取るべき用心があります。善意があるにしてもまだそのことに取り組んではいけませんので。マルマンドを通った時、ある主任司祭がその小教区に類似の学校を設立するために、場所、庭園、若干の資金、一人の優れた人物を提供する用意があることを申し出て来ました。期待は持たれましたがまだ全然着手してはいません……。時が来れば、わたしたちは何らかの手段でこの種の施設を設立出来ると思います。事態が順調に進むことを望む時には、まず、最初に考える以上に難しいからです。この事業には10種類のみ摂理の修道会が従事しているように思います。しかし、それらの修道会も絶えず後退しているようです。アルザスで、アルザスのためにメルシアン師が再建した修道会のみがどうにかうまくいっている唯一の修道会のようなのです。」

確かなことは、メルシアン師のみ摂理の修道女会とマリアの娘の会の合併の問題が提案されたのはこのころからでした。しかし、この合併は問題の解決にはならなかったのではないのでしょうか。み摂理の修道女会はその誕生の地域を越える活動領域を拡大していたので、ちっ居の誓願が会員の期待の障害になっていたマリアの娘の会の精神によって、マリアの娘の会の使命の一部を果たす責任を彼女たちに負わせることは出来なかったのではないのでしょうか。マリアの娘の会は一般的な指導と丹念な養成を維持していたので、その刺激を受けるみ摂理の修道女会を自らの活動の延長として、言わば、マリアの娘の会の一系列となすことは出来ました。これがシャミナード師のおおよその考えで、メルシアン師にこの計画を披れきして次のように書き送りました(6)。「両会の会憲を何ら変更せず、実際上の協力関係や従属関係があり得るかどうか神の前でお考えになってください。例えば、総長や総長補佐の合意の下で、マリアの娘の会がみ摂理の修道女会の会員を育成し、養成し、統治し、業務から引かせ、また、派遣することです。」このような形で、両修道会の目的は確実に達成されるに違いありません。

両修道会の合併計画の件はいつになっても合意に至りませんでした。一方では、両創立者が主要な点、特に、小さな部落に修道女を一人か二人派遣する問題に関して合意に達しなかったからでした。シャミナード師は、修道者に対してより修道女に対してはこの点を了承することを望まなかったからでした。他方、メルシアン師は、み摂理の修道女会を地域の宣教に止めて、アルザス以外の地域に拡大しないことを熱望したからでした。こうして、合併の問題は放棄されましたが、シャミナード師は、もし、神からその様式や手段が示されるなら、メルシアン師に提示したようなプランによって在俗修道会を設立する考えを断念することはありませんでした。この点に関するシャミナード師の堅固な意向は、1822年末のトランケレオン嬢への手紙のくだりで明らかにされました。彼女はトネンに次のように書き送りました(7)。「在俗修道会は順調ですか。ボン・ペールは、本会のこの分野に深い関心を抱いておられることをムーラン師がわたしに伝えてきました。どうぞ、この貴重なぶどう畑を耕すようにしてください。真に謙そんで完全な服従の基盤の上に立てられた堅固な徳をこのぶどう畑ではぐくんでください。」

1825年、シャミナード師の協力を求めて、田園地域に修道者及び修道女の共同体を設立することを試みていたある熱心な司祭は、修道女に関する次のような回答をシャミナード師から得ていました(8)。

「田園地域のあなた方の女子の生徒のための小さな学校は、それが立派に組織され、より堅固な基盤を持ち、これを支持することが出来る他の学校と連

携しているなら、すばらしい学校のように思います。例えば、昨日、わたしはオーシュ教区のモンフォールに設立された学校を引き受けました。しかし、それは、そこにマリアの娘の会の正規の在俗修道会の共同体が作られているという条件の下によってでした。なお、この在俗修道会は、常にマリアの娘の会の長上に従い、マリアの娘の会に従属するということです。こうした賢明な処置を講じなければ、堅固なものは何も作れず、危険を犯すことになります。」この篤信の司祭ペツレ師は忍耐強く計画を推進し、近い将来の実現を期待していましたが、同市の弁護士娘のジレル嬢によってモントーバンに準備されていた創立は不幸にして様々な障害に遭遇し、事業の発起人たちがマリアの娘の会に入会したので、活動は1826年から27年にかけて中断し、ついには失敗に終わりました。メール・ドゥ・トランケレオンはこの最も大切な事業の完成を自ら最終的に確認することを望みましたが、その喜びは与えられませんでした。それは様々な他の多くの犠牲に加えられた最後の犠牲でした。しかし、彼女が熱望して止まなかった在俗修道会の創立によってその犠牲はきっと報いられたに違いありません。

シャミナード師は以前の失敗で嫌気を起こすことなく、期待されていたオーシュ教区に関心を寄せていました。メール・ドゥ・トランケレオンの帰天後すぐ、彼女の思い出の共通の使命に忠実であったという証拠を示す時期を早めることを望むかのように、彼女の後継者として選任されたマリアの娘の会の総長に次のように書き送りました(9)。「あなたに立派に思われる何人かの人を見いだすことが出来るなら、彼女たちを特別なノートに記録していただくことが出来ればと思います。そして、彼女たちがマリアの娘の会の正規の在俗修道会の会員に加えることが出来るかどうか検討していただきたいと思います。」この結果新しい召命がもたらされ、1830年6月に、同じオーシュ教区のバルカンの町に最初の在俗修道会の創立が了承されるようになりました。こうして、創立者が、「遠隔の地(10)」、すなわち、北部地方の視察の折りに提案していた事項がすべて実現しようとしていました。創立者は政治的事件が起きないことを念願していました。その視察旅行は実施されましたが、7月末にシャルル10世の王座を転覆させた革命をアジャンで知ったので、早速、ボルドーに引き返さなければならぬと考えました。こうして、またしても在俗修道会創立は妨げられました。

創立者は落胆するような人ではありませんでした。時は神の計画の実施において常に最も力強い援助の一つだったからでした。果たして、最後の失敗から6年後、長い間の忍耐ともっともな期待による成功によって有終の美を飾ることが出来たことを体験しました。マリアの娘の会の在俗修道会は1836年に、その期待と考えが常に向けられていたオーシュ教区に設立されました。

創立者はオーシュ教区の数人の司祭との交流があり、特に、大神学校の校長の一人シュヴァリエ師(11)とは親交がありました。すばらしい才能の持ち主の司祭であったシュヴァリエ師は、全くの慈善家、疲れを知らない司牧司祭、十字架の道の信心の使徒、そして、信仰の普及の使徒でした。また、同僚のラッリウ師と協力して、同市や大神学校にコングレガシオンを誘致することに貢献しました。創立者がオーシュに行き始めてからシュヴァリエ師は個人的な友人としてコングレガシオンの誘致の折りに友情のきずなを固め、創立者を高く評価しました。

シュヴァリエ師の指導に委任されていた種々の共同体の中に、救護施設と呼ばれていた施設、すなわち、県からの助成が疎外された施設を管理している所がありました。実を言うと、この厳しい奉仕に献身していた信心深い婦人たちは、いわゆる修道共同体は作ってはいませんでした。彼女たちの献身が修道共同体の活動であったにしても、会則も服装も、誓願もなく、彼女たちを結びつけるものはまだ何もなかったからでした。しかし、彼女たちは自分たちのきずなを固める必要を感じ、会則を与えて下さるようシュヴァリエ師に要請していました。しかし、師はこれを了承しませんでした。マリアの娘の会の在俗修道会の創立についてのシャミナード師の意向を想起して、この擁護施設の婦人たちを新しく創立した在俗修道会の最初の会員としていただくようシャミナード師に申し出ました。オーシュの大司教ディゾアル枢機卿はシュヴァリエ師の活動を全面的に承認し、シャミナード師が時宜に応じて判断し、賢明に実施するようあらかじめ許可を与えました。

創立者はこうした計画の承諾を急ぎませんでした。しかし、その計画の実施時期の到来が迫っているのを感じていました。1636年の春、フランス南部に帰るのを急いだのはこの計画の実施のためレーラックを訪れるためでした。6月末、ララン師との最初の対談の後、ディゾアル枢機卿及びシュヴァリエ師、同時に、当事者の救護施設の婦人たちと協議するためオーシュに赴きました。創立者は全面的に善意を有する枢機卿やシュヴァリエ師、そして、救護施設の婦人たちからもっぱら激励を受けました。これらの婦人たちはマリアの娘の会の修道女になる望みしか持ちませんでした。シュヴァリエ師は既に彼女たちにマリアの娘の会の精神を吹き込んでいました。そこで、創立者はマリアの娘の会への志願者がかなりの数に上ったので、彼女たちのある者を田園地方の事業に派遣することが出来ることを確認しました。

創立者はアジャンに帰ってマリアの娘の会の総長と最後の調整をなし、オーシュに帰りました。1836年8月24日の大災害のため、問題の結末は数日持ち越されました。その地域が暴風雨に襲われたからでした。滝のような雨で著しく

水かさが増したジェル川は河床からあふれ出し、下町とこれを取り巻く田園地帯に被害を及ぼしました。創立者は次のように書き送りました(12)。

「災害はひどく恐るべきものでした。わたし個人は何の被害も受けませんでした。が、市内と周辺に被害損害額は200万フラン以上にも上ります。わたしは死者やでき死者については触れませんが、今日、マリアの娘の会が経営している県の救護施設の損害は3万フランに見積もられました。修道女たちの修練院は菜園の収穫を全部失いましたが、それも著しい被害に上りました。」

9月1日、枢機卿と創立者は、在俗修道女会がマリアの娘の会の総本部の下に、そして、ディゾアル枢機卿とその後継者のオーシュ大司教の管轄と保護の下に創立されるという提携文書に署名しました。やがて、この目的に適合する会則が創立者の手によって提示されました。マリアの娘の会の新しい系列となる在俗修道女会の統治は、当時、アーセのマリアの娘の会の修道院の院長であったメール・レオカディに委任されました。シュヴァリエ師によって救護施設の正面に獲得された建物には、早速、修練院が開設されました。そして、修練志願者も多数駆け付けました。

ボルドーに帰った創立者は新規創立の在俗修道女会を注意深く見守り、そのすばらしい成果を期待していました。したがって、通信によって、更に毎年の視察によって、マリアの娘の会の精神が志願者に教え込まれているかどうかを確認するようにし、そこでその精神がどのように正確に実施されているかを詳細に把握するようにしました。1837年には最後の修道女の初誓願を受け、ジェールの主任司祭側からは多くの生徒の入学の要請が寄せられる喜びを味わいました。

修練院は順調でしたが、間もなく最初の建物が手狭になり、早晚拡張しなければならなくなったので、各方面から寄せられた要請を早急に満足させることは出来ませんでした。創立者は在俗修道女会の件についてクルーゼ士に、「わたしは十分養成されていないどのような修道女も修練院から出るのを望みません(13)」と書き送りました。このことは創立者の原則に一致する英知の処置でしたが、その他の創立には余り適用されていなかったのではないのでしょうか。この養成は在俗修道女会には厳密に行われ、最初の3年間はこの救護施設の他には1830年に約束され、1837年に実施されたバッランの唯一の在俗修道女会の修道院しか創立を承認しませんでした。

しかし、1839年から在俗修道会の創立は急速に相次いで行われました。1839年にはパヴィ、カゾーボン、フリュランスの共同体が、1840年にはモンテリアル、オーの共同体が創立されました。創立者の帰天まで毎年一ないし数個

の在俗修道共同体の設立が見られました。これらの在俗修道女会は早速オーシュ教区の境界を越えて発展していったわけでした。1849年にはアジャン及びボナンコトル教区に誘致されました。1840年からはコルシカ島に創立され始めていました。そして、最後にこの在俗修道女会の評価はアジャンのマリアの娘の会に帰せされることになりました。

アジャッシオのカザネル・ディステイリア司教(14)はオーシュ教区の元司教総代理でしたが、新生の在俗修道女会を司教の保護の下に置きました。司教は最初の着衣式を司会し、その折りに、コルシカ島にマリアの娘の会の派遣方をシャミナード師に承認させました。数年前から出身教区の担当者になった司教は、霊性生活の緊急な必要性を確認していたからでした。基本的に訓練が未熟で、経験豊かな司祭が至る所で不足していました。田舎の信者の信仰の無知はみじめでした。一度ぐらい刷新されたにしても、外的には少しも実践的な信仰として持続されなかったからでした。こうした現状の刷新を望んだ新司教は急いで教区に修道者や修道女を誘致することにしました。また、司教は、ドゥ・マズノ司教にオブラ・ドゥ・マリー会を要請し、シャミナード師にはマリアの娘の会の派遣を申し入れました。最初の着衣式から2年が過ぎましたがオーシュからは一人の修道女も希望者は現れませんでした。司教はそのことを静かにシャミナード師に訴え、合意した要請を放棄しないよう想起させました(15)。そこで、創立者は1840年の夏、在俗修道女会から募った共同体を準備して、アジャンのマリアの娘の会から選んだ修道女をその院長にしました。それほど遠距離で困難な使命を委任するにはオーシュの在俗修道女会からは早過ぎると判断したからでした。シュヴァリエ師は修道女たちを伴い、ルス島の最初の修道院に定住させました。修道女たちは特別な歓待を受けました。そして、カザネリ司教が新しい共同体の迅速な派遣方をシャミナード師に要請した配慮を高く評価しました。

事実、1840年の年末前に創立者はビドン修道士に伴わせた第二の共同体を派遣しました。この共同体も第一回の在俗修道女会の共同体同様、在俗修道女で組織され、院長も同じくアジャンのマリアの娘の会から選ばれました。この共同体の住居はオルムトに定められました。創立者は新しい修道院に在俗修道会がコルシカ島全域に普及するための養成施設の創立を申し入れました。しかし、ちっ居の誓願を熱望し、それぞれの修道院にその誓願の宣立を要請する二人の院長の意向による障害に遭遇しました。このことはコルシカ島のような地域では、在俗修道会が住民とより親密に接触することが出来、ちっ居の修道院よりももっと奉仕活動が出来ると判断していた創立者の意向を修正することでした。創立者はこのような考えであっただけに変更には反対でしたが、状況の仲裁をアジャッシオの司教に委ねました(16)。司教は二人の院長

の申請書を受領しなければならないと考え、コルシカ島における在俗修道女会をマリアの娘の会に従属させました。教区の中心地であったアジャッシオにはやがてマリアの娘の会の共同体が招致され、創立者に極めて親しい事業としての師範学校の運営が委ねられたのはマリアの娘の会の修道女たちでした。創立者は1840年に女子の師範学校をアセーに創立するため最大の努力を傾けたのではないのでしょうか。修練院もアジャッシオに設立され、引き続き新しい施設の創立が許可になるよう発展していきました。

創立者は在俗修道女会にもたらされた全く特別なお恵みを隠しませんでした。最新の在俗修道女会に示されたお恵みに包まれて、その遅なりの成果が認められたことをマリアに感謝しました。そこで、在俗修道女会の院長に、「マリアは子供たちにとって本当に優しい方です。ご自分は不変の平和の場所に住んでおられますが、いつも子供たちのことを心にかけていて下さいます(17)」と書き送りました。そして、この優しい母が、「マリアの娘の会の外的な活動に与えられた発展」を死の直前に実現させて下さったことを、すなわち、マリアが創立者の晩年に大きな慰めを与えて下さったことを喜びました。

創立者は他の事業の組織同様、在俗修道女会の組織も作りました。最初は何も決めませんでしたが、新しい在俗修道女の特別な身分にふさわしい、そして、不可欠の会則は別でした。その他すべての事項はマリアの娘の会の会憲を適用しました。1839年、マリアの娘の会の会憲の草案が決定された時、次章で在俗修道会に関する条項に触れるように、しばらくの間、その他の規則は提示しないという一節を挿入しました。

更に、1840年、在俗修道女会がフランシュコンテへの誘致が問題になった時、新生の在俗修道女会の目的や精神がどのように定義されたかは次の通りです(18)。

「これらの修道女はマリアの娘の会の真の修道女です。ただ異なる所はマリアの娘の会の助修道女のようにちっ居の誓願を宣立していないことです。しかし、宣教活動の実施の上ではちっ居の修道女に保留されているすべての規則が義務付けられています。彼女たちの宣教活動とは何でしょうか。それはまず、女教師の活動、病人の在宅介護等の活動です。一般に、彼女たちは医師や薬剤師の訓練を受けています。彼女たちの中には教師になることが不向きで、特に、病人の介護に向いている修道女がいます。人々の集まりが多い場所には、日曜日や祝日に、女子青年たちの集会を指導させるために可能な修道女を任命するよう努力します。在俗修道女はどのような場所でも決して3人以下のことはありません。彼女たちは病院での介護も委任させられていま

す。」

在俗修道女会の統治はオーシュのマリアの娘の会の院長の下にありましたが、アジャンのマリアの娘の会の総長の全体的な従属下に置かれました。ちっ居の誓願の修道会の系列に、ちっ居の誓願のない修道会の系列を結び付けるこの極めて親密なきずなは、在俗生活の本質的な危険性を予防すると同時に、十分な修道女の養成を保証することを目指したものでした。シャミナード師はこうした保証なくしては決してこの種の創立に同意することはありませんでした。メルシアン師との通信や折衝はこの点に関する考えを明確に示していました。この点はイゾアル枢機卿とも理解し合っていました。枢機卿からも完全に認められていたからでした。

オーシュの大司教が修練女に関する調査の実施を要請してきた時、創立者はアジャンのマリアの娘の会の総長メール・セン・ヴェンセンの不安に同調することなく、枢機卿の考えと自らの考えの独自性を保証して、次のような言葉でアジャンの総長を落ち着かせました(19)。

「マリアの娘の会は教会法の長上によって直接に統治される多くの修道会の一つです。本会は評議員の協力を得て統治する総長に直接従い、また、聖座から委任された霊的上長及び本会の施設の位置する教区の司教の管理下にある一般的な修道会を形成しています。全く小さく、その名にふさわしくない修道会ではありますが、これが神の教会の中での本会の地位です。わたしより聖なる教会法に精通されている大司教様に信頼してください。オーシュの教区におけるあなたの全般的統治を停滞させないようにしてください。在俗修道女会の天成の保護者で、わたしたちの聖なる会則の最高に熱心な擁護者である大司教様は、出来る限りマリアの娘の会を援助しようとされています。このことが大司教様の最も好意的なお望みだと思います。わたしは、大司教様がボルドーに滞在しておられた折り、そのことを確信していました。大司教様がマリアの娘の会の修道女の召命を確かめたいと望まれるのは本会の利益のためでしかありません。その上、司教総代理のベック師も教区の上長の資格で修道女の召命の調査に参加し、決定のための会議を司会します。ベック師は大司教とわたしの代理として出席することになります。こうして、トレントの公会議による教会法上の長上によって、直接統治される共同体は司教の管轄権と保護制度を除外されることが出来ません。」

在俗修道女会の創立当初、何らかの障害が生じた時、創立者の存在は迅速な解決をもたらしました。その年齢にもかかわらず、1842年まで、召命への識別と熱意を通して修道女の人精神と心を堅固にするため、また、困難な問題

を解決し、現行の会則を改善するため毎年オーシュを訪れていたからでした。

その上、修道女たちは、創立者によって激励され、創立者を交えないでは何らかの重要な問題のどのような点も調整しようとはしませんでした。次のくだりは1838年にシュヴァリエ師が創立者の来訪を緊急に要請した事項です(20)。「神父様、全く心配で、不安な事柄を簡単に述べさせていただきます。そのためにオーシュでは皆さんがお待ちしています。皆さんある種の不安に陥っています。やがて行われるに違いないと期待していた善が行われていないからです。」シュヴァリエ師は調整すべき問題を列挙して次のように付け加えました。「神父様、心からお願い申し上げます。どうぞ、出来るだけ早く来てください。皆さん、神父様の来訪を願っています。ベロック師とバツレール師の二人の司教総代理も熱心に待っています。」そこで、創立者はその年極めて長期間オーシュに滞在したばかりでなく、シュヴァリエ師の仲介によって両修道会の会憲をローマに申請するため再度オーシュを訪れました。会憲の件に関しては後ほど触れる機会があると思います。

創立者は、それ以上オーシュを訪れることが出来なくなった場合でも、そこで起きた事柄の詳細にかかわり続け、決して失うことのなかった配慮を修道女たちにあかししました。他の両修道会自体の発展より敏感であった在俗修道女会の発展には、その生涯の最後まで特別な心遣いの対象になっていました。しかし、創立者はその帰天の時まで完全に作成された会則は与えていませんでした。

在俗修道女会の創立は1834年から1838年にかけての総合視察の最後の事業になりました。困難な状況下で、創立者が導かれたのは、アジャンではなく、オーシュでした。しかし、新しい創立の詳細を調整する前にはボルドーに帰らなければなりませんでした。

ずっと以前から会員は創立者のボルドーへの帰りを待っていました。引退生活を送っていたダヴィド士も創立者の帰りを待ちわびていました。1836年の6月に、カイエ師は創立者に次のように書き送りました(21)。「わたしたちは待ち遠しかった5年5箇月を忘れて、今後も敬けんな忍耐をもって待たなければならないのでしょうか。そこで、わたしたちは、『fiat, fiat』と願っています。」しかし、創立者にはそれほど関心のあった在俗修道会の事業がようやく姿を見せて来たので、これを彼女たちに委ねるため長い滞在のより強力な動機があったのでした。

ドゥ・ラムルス嬢が危篤に陥っていました。長年前から病弱だった彼女は7月になっていつもより病気が重くなるのを感じていました。そこで、聴罪師のカイエ

師を通じて「ボン・ペールの熱心な祈り」を願っていました。8月初旬、周囲の修道女の不安は高まっていきました。カイエ師は創立者に次のように書き送りました(22)。

「この手紙は、ドウ・ラムルス嬢の病状が次第に重くなり、臨終が懸念されることを特にお伝えするためのものです。大司教の帰天以来、彼女はそのことを大変悲しんでいましたが、彼女の容態は着実に悪化してきています(23)。時々熱も出ています。彼女は死と主の審判の恐怖のためしばしば動揺しています。修道女たちが安心させるようにしても長続きはしません。全身の苦しみを感じ、苦痛の悲鳴を上げています。しかし、最後の秘蹟を授けるほど危篤が迫っているとも思われません。」

オーシュでの用件がそれほど緊急でなければ、創立者は危篤の病人を信仰の言葉で励まし支えるためにボルドーに早急に帰ることを望んでいました。8月は危篤が重なることもなく過ぎましたが、9月になって彼女の心身の力が次第に衰えていきました。そこで、カイエ師は創立者に次のように書き送りました(24)。「彼女は調子のよい時にはいつもあなたのことを思い出しています。そして、あなたによろしく伝えるようにと願い、あなたの熱心な祈りを願っています。あなたにお会い出来ることをこの上ない喜びとしています、より落ち着いた状態でお会い出来ることを望んでいます。」このことは、危篤の病人のせん細な心遣いでした。2日後、絶望的な知らせが伝えられました(25)。

「パプタン医師は、彼女がもう立ち直ることが出来ないことをわたしに正式に伝えてきました。それで、わたしは、彼女が余り恐れることなく、深い信仰と完全な意識をもって臨終の聖体拝領と病者の秘蹟を授かれるよう急いでいます。彼女の姪のロール嬢は彼女が帰天する前にあなたにお会いする慰めが得られるよう熱望しています。」

シャミナード師はもうがまんできませんでした。オーシュの問題をそのままにして急いでボルドーに帰りました。ドウ・ラムルス嬢は天の御父にその魂を返すため創立者を待つてもいるかのように思われました。彼女は9月14日水曜日、聖なる十字架の称揚の祝日に、ボン・ペールに見守られて息を引き取りました。彼女の葬儀はがい旋のようなものでした。その帰天1箇月後、バックス司教総代理は追悼演説で彼女の徳をたたえましたが、それは真の賞賛演説でした。

協力者メール・ドウ・トランケレオンもドウ・ラムルス嬢も主に召されたので、シャミナード師のみが生き残りました。この協力者の相次いだ死別の悲しみは、創立者にその事業の完成を急ぐよう求めているように思われました。このこともボルドーに帰った考えでした。シャミナード師はミゼリコルド会の新総長の選出

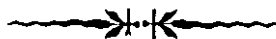
を司会しました。創立者ドゥ・ラムルス嬢が以前自らの後継者として予定していた姪のロール・ドゥ・ラボルデル嬢が選出され、就任しました(26)。シャミナード師は故人の帰天のために驚かされたにしても、創立したそれぞれの施設を将来繁栄する状態に残すため最後の努力を傾けることに専念しました。このことが次年度から創立者の継続する活動になります。



注

- (1) アウグスチヌスの告白録、X章、c、31
- (2) コングレガシオンを設立しようとし、ボルドーで黙想の婦人会に貢献したベロック夫人の例。
- (3) メール・テレーズへ
- (4) 特に在俗修道女会に委任されました。
- (5) 1822年9月24日
- (6) 1821年12月17日
- (7) 1822年12月12日、メール・ドジテへ
- (8) 1825年1月5日、フランシュコンテのベッレ師へ
- (9) 1828年5月27日、メール・セン・ヴェンセンへ
- (10) 1830年6月25日、バッランの主任司祭バツレール師へ。「わたしはマリアの娘の会の総長とアジャンで用件を処理し、バッランの修道女たちのために会憲と会則を準備出来るに違いありません。」
- (11) ルイ・アントワン・シュヴァリエ師は、1820年9月12日アヴァンサックに生まれ、1823年に司祭になり、続いて大神学校の哲学及び神学の教授、教会参事会員、そして司教総代理になり、1840年から大神学校の校長になりました。1875年に帰天しました。
- (12) 1836年10月11日、クルーゼ士へ
- (13) 1837年10月23日
- (14) クサヴィエ・ツッセン・ラファエル・カザネッリ・ディスティリア司教は1794年10月24日コルシカ島に生まれ、当時ローマの宗教法院長であったディゾアル司教によってローマで認められました。ディゾアル司教と共にフランスに帰り、オーシュの司教総代理になり、同司教によって、アジャッシオの司教に任命されました。(1833)長い司教在職期間、教区の面目を刷新し、1869年10月2日帰天しました。
- (15) 1839年9月25日及び1840年3月27日の手紙

- (16) 1840年12月7日、カザヌリ・ディステイリア司教へ
- (17) 1836年10月26日、メール・レオカディへ
- (18) 1840年6月26日、ペッロデン師へ
- (19) 1841年12月10日、メール・ヴェンセンへ
- (20) 1833年6月21日の手紙
- (21) 1836年7月18日
- (22) 1836年8月8日
- (23) ドゥ・シュヴリュス司教は1836年7月19日 帰天しました。
- (24) 1836年9月3日、シャミナード師へ
- (25) 9月5日
- (26) 1837年2月6日



第 36 章 会憲とマリア会賞賛の教令 (1837—1839)

当初の会憲 ❖ 会員聖化の規則 ❖ 事業 ❖ 会憲第2部の公布を急がなかった理由 ❖ ララン師の新たな反抗 ❖ その最終服従 ❖ 会憲第二部草案 ❖ 会の組織 ❖ その統治 ❖ 中央集権 ❖ 3部門 ❖ マリアの娘の会の会憲 ❖ 両修道会認可のローマ申請 ❖ その賞賛の教書 ❖ 創立者の喜び。

マリア会会憲の起源と漸進的な発展に関しては前章までに触れてきました。わたしたちは、創立者が1817年の談話で最初の弟子たちに新生のマリア会の目的とその主要事業を説明し、次の年に、マリア会会憲の名称で最初の草案を会員に提示し、暫定的にこれを使用させるようにしたのを見てきました。時の流れが、そして、経験が確立することになる様々な点を時期尚早に決定することを避けようとしたからでした。更に、1829年には、会憲の全文執筆に着手しましたが、会内部事情のためその公表を延期し、1834年ようやくその一部を公表したことが分かっています。

創立者は会憲全体を二部に分けて配布しました。その一部はマリア会員個人の義務に当てられ、第二部はマリア会の組織構成に当てられていました。この会憲は1834年に公布された最初のもので、創立者にとっては最も基本的なものでした。創立の精神を定義し、その目的と手段を提示したからでした。

次のくだけは第1条に定義された本会の目的です。

「尊いマリアの保護の下に神と教会に微力を貢献する小さな本会は次の主要な二つの目的を提示する。その第一は、神の恩恵によって各会員をキリスト者の完徳に育成すること。第二は、時代の要請と精神の適切な手段によって支えられ、福音の教え、キリスト教の諸徳、カトリック教会の実践を維持し、普及して、世において人々の救霊のために活動する。」

これらの第一の目的、すなわち、各会員を聖化に導く手段として、マリア会は他のすべての修道会同様福音の勧めの実践と、また、大半の修道会同様、共同生活を会員に提供します。創立者はまず、マリア会が、清貧、貞潔、従順、堅忍の誓願(1)、そして、信仰とキリスト教良習の教授の誓願の五つの誓願によって結びつけられることを意図する意義を簡潔に説明しました。次に、共同生活については出来るだけ完べきであるよう要請して、詳細にこれについ

て述べました。この点については、他の点と同様、創立当初から実施されてきた事項を成文化することに止めました。睡眠についても食事についても、特別な削除は要求しませんでした。しかし、共同生活の厳しい義務、清貧の誓願の厳しい解釈、宣教活動のための苦しい犠牲(2)は規則全体に厳しい特質を与えました。こうして、控え目で、適切な会憲は、これを検討したすべての司教に評価されました。極めて高度な完徳の理想を会員に示す会憲は、容易で、しかも、確実な手段で善意のすべての会員を完徳の理想に導くものでした。あらゆる機会に、そして、すべての面において要請される信仰の精神がその土台となっていたので、創立者は、会憲の第一部の最後のページに列挙された福音の諸徳の実践を会員に養成しなければなりませんでした。

創立者は、たとえ、マリア会の会憲が決定的認可を受ける前に幾つかの条項が改訂の対象にされるにしても、禁欲と共同生活の規則は将来手直しされ難いということをおある専門家に検討させていました。教育事業の疲労と両立しない何らかの規定を緩和すること、会憲というより慣例集にあった余りにも詳細な規定は削除することに止めました。

人々の教化という第二の目的に達する手段をマリア会に与える事業に関しては、各種の会の創立者や何人かの会員(3)に対してさえも度々対立しましたが、自らの考えには忠実でした。どのような種類の事業も厳密に範囲を制限することを拒否しました。かえって、次のことを断固として主張しました。

「マリア会はどのような種類の事業も除外しない。すなわち、本会は、本会が意図する目的に到達するため、み摂理から与えられたすべての手段を採用する。

『Quodcumque dixerit facite』(この人が何か言いつけたら、その通りにしてください。)(ヨハネ2:5)これがそのモットーである。この教訓はマリアがカナの召使いたちに与えた指示によるものとして各会員に乙女マリアによって与えられたものである。」(6条)

いずれにしても、創立者は会員を特に、「教育」に専念させることを意図してその考えを明確にしました。この教育という語には、「人々の精神と心に信仰を浸透させ、幼年期から老年に至るまで、真にキリスト教に熱心で忠実な職業に彼らを養成することが出来るすべての手段を含んでいる。」(251条)ということでした。そして、「人々を救うためには二つの手段、すなわち、悪の感染から予防する方法と、既に悪に感染した者を回復させる方法があるように、本会は、この二つの方法のうち、その最も確実で容易な方法を好んで採用し、特に、悪を予防する方法を採用することを意図する。」こうして、創立者は子供たちへの

愛を強調し、御主の模範にならって、会員が貧者に特別な愛をささげることが望みましたが、マリア会は老境に入った人々、より上層階級環境に属する人々も除外するものではないということを明言しました。ただ、一見して、制限されるように見える目標は、事業を他のどのような方向というより、一定の方向に導く上に何らかの制限を受けることになるからでした。

一度、会憲の第一部が公表されると、創立者はその業務を続ける前に、個人的に会員の下を尋ね、基本的な規定を生ので説明し、その精神を教え込むことにしました。もちろん、修道会の真の習慣を永続させなければならない修練院の再建も不可欠であり、急を要するものと思われていました。マリア会の組織と統治を知ることが待ちわびていた会員には、「マリア会の会員はその身分の精神を浸透させなければならないこと、また、反修道会体制の強化ほど不幸なことはないということをあらかじめ考えておくことは望ましいことである」と答えました(4)。更に、これらの統治の規定に過度に執着しないよう要請し、「わたしたちの真の力は内的に自由にならなければならないことです。そのためには規定の防御線や賢明に確立された組織の側面は必要ではないとは言いません。しかし、これらの組織の側面は堅固な塔のようなものであっても、もし、その内部がうまくいっていいなければ何の役にもたたないからです(5)」と答えました。

1829年にラン師に委託した事業のように、困難な事業を判断する場合は、性急さを避けるべきだということがもう一つの理由でした。創立者はラン師に次のように書き送っていました(6)。「わたしは教師、修道会の創立者であっても、会則や会憲を作る能力では、自分を常に初心者と見なしています。立派な規則を作ることほど難しいことは何もないと思います。特に、多くの様々な個人を完徳に到達させ、生涯にわたって導かなければならない時はそうです。」創立者は出来るだけ長く時の印を利用しようと思っていました。セン・ヴェンセン・ドゥ・ポールは、その形態が教会にとって新規なものになる会則の作成に、自らの能力よりむしろ経験を考慮して、宣教司祭や愛徳姉妹会の組織を決定するのに晩年まで待ちました。組織の刷新を試みた創立者は同じような原則で自らの行為を律していきました。創立者は、熟考の上、当初から、組織や統治の詳細を決定することに注意しませんでした。そして、事業が決定的に、そして、堅固な形で導かれる継続的な段階を経て、会事体が組織されるようにしました。

いずれにしても、創立者はその視察旅行中、会員のある不安を認めました。彼らは創立者が老齢に達しているのを見て、最も大切な会憲作成の働きを完了する前に創立者を失いはしないかと心配していたからでした。その不安は、

1834年に会憲の第一部を発表することを決定した動機の一つでもあったし、同様に自ら書き送った手紙で、このことを次のように述べていたからでした(7)。「総長のわたしは、この会憲の草案を終了する前に、この世から取り去られはしないかと不安になっています。マリア会にはなお何らかの混乱が訪れるかも知れません。したがって、会憲の完成に努力しなければならないと考えています。毎日、業務から割くことの出来ない時間を死の準備として会憲作成に当てています。」

1834年に確かであったこと、更に、1837年にもっと確かであったことは、会員は、ボン・ペールには自分たちのどのような考えも隠さない習慣があつて、出来るだけ早く会憲作成の業務を終えるよう創立者に願っていたことです。例えば、ロテア師は会員を代表して次のように書き送りました(8)。「ボン・ペールの下でわたしがくみ取った考えによれば、マリア会は真の修道会でなければならず、やがて全世界に普及されなければならず、あらゆる種類の慈善事業を意図し、すべての人々に対してすべてとならなければならないということでした。もし、ボン・ペールの存命中に何も決定されず、その死後にすべてが成り行きまかせの危険にさらされるとすれば、どうなるでしょう。もし、不幸にして、ボン・ペールが急に死に襲われてもすれば、わたしたちはどうなるでしょう。『quod absit』(どうかそのようなことになりませんように)。各会員はマリア会の会則や精神を勝手に解釈することになり、崩壊は避けられないに違いありません。」

弟のルイ・ロテア士も同じような言葉で創立者に次のように書き送りました(9)。

「ボン・ペールの存命中にすべてを決定し、決めて下さるよう厚かましいことを申し上げることをお許し下さい。それは、他の会員同様、わたしもボン・ペールがなくなられた後に会員の間で不一致や仲違いが起きるに違いないことを大変不安に思っているからです。」

創立者は、たとえ、述べられた理由が絶対的な説得とは思われないにしても、会員の忠告を快く受け取りました。自ら導いていた事業が自らのものでないことを承知していたので、こうした会員の不安にも動揺しませんでした。それらの不安がみ摂理への信仰と信頼の不足の現れだと感じていたからでした。したがって、次のように簡単に回答しました(10)。

「わたしの死がかなり近づいているように予想させていただいて感謝していません。聖パウロは生まれたばかりの教会にとって必要欠くべからざる方でしたが、わたしはマリア会にとってそれほどのものではないですけれども。聖パウロは死を勝利と見なしていました。神は、事業がみ心によるものであれば、事業を行う

のにだれの手助けも必要ありません。しかし、このことは、わたしたちが全身全霊を傾け、何も不安なく、生涯のすべての時間を傾けなくてよいと言おうとするものではありません。」

この最後の言葉が創立者の考えの表現になっていました。創立者は会員から好意を寄せられることを拒みませんでした。純粋に人間的な配慮より神からの照らしを期待していました。その上、会憲を作成している時、会員から求められていた公表をこれ以上延期しないことを決心していました。それは、施設の創立の迅速な保証を要求するようと思われるある事件が起きていたからでした。それは、ララン師からの創立者の権限に対する新たな、そして、より重大な違反でした。

1837年4月以来、レーラックの施設の管理に関する件で、マリア会を離れていたララン師は、この施設のためにマリア会の負担にしていたある借財に関して創立者と紛争中だったからでした。7月末、もっぱらララン師の良心の義務としてその要求を耐えていた創立者は、マリア会のものではない権益を保護するため、また、和解のためとその要求を取り下げさせるため、誠実なビドン士を通じて温情に満ちた気持ちを次のように書き送りました(11)。

「既に、かなり前に、どの位前かは分かりませんが、わたしが聖体の前で御主の柔和な性格について念とうしていた時、わたしがあなたに送った照会の覚え書きを追求しないとの考えが突然起きました。そこで、わたしはあなたの回答がどうであろうとそのように決心しました。このように決心させたのは次の言葉です。『*Arundinem quassatam non confringet et linum fumigans non extinguet, donec ejiciat ad victoriam judicium*』(正義を勝利に導くまで、彼は傷ついた葦を折らず、くすぶる灯心を消さない。)(マテオ、12:20) わたしはすべてをあなたの良心に委ねます。」

ララン師は、この手紙を受け取る何日か前、久しい以前から考えていた大胆な行動に正に打って出ようと決心していたところでした。それは、創立者がマリア会に決定的な会憲を長期間待たせていたということ。口実に、自らの施設指導の権限が創立者の権限と同一であるとして、それは、自らが第一の、そして、主要な創立者の協力者であったとのことで、マリア会の総会に創立者を召還し、レーラックの問題ばかりでなく、マリア会全般の組織管理を総会に従属させるということでした。ララン師はその機会を利用して、マリア会の組織の問題について自らの考えを了承させることを考え、出来れば創立者を組織から排除することを決意していました。そこで、2回にわたって続け様に通知状をすべての院長に送付しました。第2回目の通知状には次のようにしたためたありまし

た(12)。

「1. わたしに関係する問題のためにも、マリア会の全般的な状況のためにも、総会を召集する理由があると考えますか。2. 創立者がこの召集に反対した場合、あなた方の良心を安心させるためあらゆる条件を備えて正式に行われる召集に応じられますか。」

このことはマリア会全体にとって創立者弾劾の叫びであり、ララン師の不当な創立者の告発でした。彼は全会員から支持されていると思われることで十分だと考えたのでした。しかし、その幻想は彼が創立者と争いを始めた時からくじけてしまっていました。8月26日付けの総長回章は最後の打撃を彼に与え、最後のためらいを会員から取り去りました。この回章は断固たるもので、このような状況下での何らの令状もない、不適切に扇動された総会の召集は正式に取り消されました。あらゆる所から会員の子心の服従の手紙が寄せられました。それは、変わらない忠実のあかしとして創立者を安心させました。このことはロテア師の手紙の次のくだりにすべて要約されているということが出来ます。

「わたしたちは、何名かの不忠実な会員が、ボン・ペールに負わせた苦痛をお察ししています。しかし、彼らも放蕩息子のたとえのように、同じような悔悟の念をもって帰って来ること、そして、マリア会を試みた様々な動揺にもかかわらず、マリア会はこれまで以上に評価され、発展するに違いないことを期待しています。」

ロテア師は間違っていないのでした。マリア会はこの動揺を二重に克服したからでした。その一つは、マリア会はローマから緊急に承認される必要を感じたこと、もう一つは、マリア会員としての身分を失った何名かの会員の除名が明らかにされたことでした。この中の一人はアジャンの学校を自由に管理することを主張し、修道精神に反する要求に加担することを創立者から遠ざけられたララン師の元会計のメメン士でした。アジャンのマリア会の学校はその折りにマリア会から離れました。このことは大きな不幸でしたが、マリア会の不和の種が残るよりましでした。

一方、ララン師を知っていた人々の予測によれば、放蕩息子の彼はもう一度父の下に帰るはずでした。彼は、創立者に対しては深い尊敬の念を持っており、極めて真っ直ぐな良心の持ち主だったからでした。しかし、自らを制御出来るという欲望にかられてしばしば無分別な行動に走りました。ただ、お手上げになるような仲違いにまで追いやられることはありませんでした。彼は学校長を辞任した時、絶望に襲われ、創立者に、「さようなら、もう二度とマリア会には帰りません」と書き送って深く落ち込みました。そこで、創立者は次のようす

ばらしい返事を致しました(13)。

「あなたは少し黙想してください。もし、主の霊があなたを照らして下さるなら、真理と正しい権利は、あなたが考えているような大騒ぎを起こさせることはなかったことがはっきり分かるに違いありません。わたしはあなたの『退会』、なおさら、『この世ではもう二度と会わない』というようなことは受け入れません。あなたはわたしの反対者ではあっても、いつもわたしの子供です。わたしはあなたの父親としての愛情を持ち続けているからです。絶対的な別れは永遠の世界でしか起きません。それは、わたしたちが幸せに入った狭い道をお互いに歩まなかった場合のことです。」

ラン師の「さようなら」は長くは続きませんでした。ボン・ペールとの和解を急いで望んだ彼は、ボルドーに駆け付け、仲介の労を新ドンネ大司教にお願いしたからでした。創立者もラン師に対して温情を示しましたが、ラン師が要求していたこと、特に、マリア会が責任を負うことになっていた多くの施設の中に、レーラックの学校を受け入れることを合意することだけでけりをつけることは考えていませんでした。創立者がラン師に望んだことは心からの改心でした。それは、ラン師の誠実な気持ちに対してばかりでなく、なお改心の効果に強い不安を感じていたからでした。1838年3月17日付けの手紙を受け取った時、多くの過失が償われることが出来ることが考えられて安心しました。ラン師は次のようにしたためていました。

「わたしはアジャンに着きました。わたしたちの友人のムーラン師がわたしのために許しの秘蹟を快く与えて下さいました。まず、神に許しを願わなければなりません。ボン・ペールにも許しをお願い致します。でも、今日の福音で読まれた次の言葉を申し上げた方がよいように思われます。『*Jam non sum dignus vocari filius tuus. . .*』(わたしはもう息子と呼ばれる資格はありません)(ルカ、15:21)。わたしもひざまづいて許しを願いたいと思います。わたしはボン・ペールに従います。わたしの迷った弱い考えに翻ろうされたわたしはどうなるかも分かりません。神の正義の厳しさに値するからです。わたしは自分の魂を救うことが出来さえすればその他のことはどうでもよいと思っています。この手紙はボン・ペールの霊名の祝日に着くと思います。速達便にはしませんでした。わたしの心からの祝辞がボン・ペールを喜ばせるにふさわしくないにしても、どうぞわたしの悔悟の気持ちをお受け取り下さい。」

ラン師は約束を守り、悪意というより軽率さで犯した過ちを出来る限りの手段で悔悟を示しました。例えば、会員に当てた公の手紙でこれまでの前言を取り消し、後ほど、8月14日、次のような手紙をドンネ大司教に届けなければな

らないと考えたからでした。

「わたしの不平が傷つけたに違いない老創立者の慎重さと熟練の評価を大司教様の下で回復させていただくことはわたしが果たさなければならない義務だと思います。わたしは、創立者の統治に対して寄せられた多くの非難はわたしの行為によるものが多かったことを認めなければなりません。もし、わたしが全体にわたって修道者の従順に忠実であったら、他の会員もより従順で、より謙そんであったに違いありません。創立者は多くの障害に遭遇せず、マリア会の事業をより容易に、より迅速にその目的に導くことが出来たに違いありません。」

創立者は自分を最も中傷したララン師からこのように弁明されたのです。最も愛する弟子からこれほどの苦しみを受けることを許された神は、創立当初からのこの協力者を少なくとも堅忍させる喜びを創立者に与えられました。その人生はまだ長く、豊かでなければならなかったからでした。そこで、創立者は、「わたしたちが相互に理解出来るなら、どのようなみすばらしい善をも一緒に行うことが出来るのではないのでしょうか」と書き送りました。」

ララン師のその後の全生涯は軽率で、過ぎ去った過失に対する敬けんな反省のあかしでした。様々な事業、特に、スタニスラス高等学校をその荒廃から復興する等の困難な任務に専念して最後までマリア会に奉仕し、次のように書き送っていました(14)。「マリア会は、最近、わたしが他の会員と共に自らを救うために作った箱船です。わたしはマリア会と共に生まれました。わたしの存在は靈性上、信仰上の意味においてマリア会に結び付けられています。そこから離れることは死を意味します。」ララン師はボン・ペールに対して犯した過去の過失を嘆きながら、もっぱら優しい感情と深い尊敬をもって話したボン・ペールの思い出を忠実に想起していました。師の伝記作家の一人は次のように述懐しました(15)。

「ララン師は常に避けることのなかった困難を好んで他の人々にも知らせていました。わたしたちは師が取り消されたある意見、しきりに悔やんだある行為について涙ながらに話すのをしばしば聞きました。師がもっと長く生きていたとしても、人間的な事柄との関係で与えられた心の傷をだれが認めることが出来たのでしょうか。師の弱点を知ることが出来、最も根を張った偏見や、長い間親しんできた教育法について、そのどちらを選ぶかについて十分真相を知ることが出来る人は幸いです(16)。」

創立者は会憲の作成に最後の努力を傾け、マリア会の認可を聖座に申請する時期が到来していると感じていました。内外から何らの障害も認められなかったからでした。政治的な情勢も緩和されていました。マリア会にまた平

和が戻りました。最後の混乱からの幸いな脱出によって、また、混乱の張本人であったララン師の改心によって平和と信頼が増大したからでした。したがって、創立者は何らかの反対が起きはしないかと気にすることなく、マリア会の組織と統治を取り扱った会憲の第二部を公表することが出来ました。

組織の章の草案は明らかにデリケートな作業でした。そこには、マリア会の組織上の各要素、すなわち、司祭修道者、信徒修道者、そして、現業修道者の相互関係を決定しなければならなかったからでした。創立者は、会員の身分がどうであれ、相互関係を決定することを原則的に用心していました。1818年にダヴィド士が示した全く理論的概念は採用しませんでした。しかし、他に代わる名案ありませんでした。いずれにしても、創立者の考えは次第に固まっていきました。司祭修道者と信徒修道者の関係の主要な問題に関しては、1829年までには進展していました。ただ、現業修道者の組織にはまだ難点が残っていましたが、前述のように、北部地方の最終視察旅行の折り、これも決定されました。

創立者は、1829年の会憲草案作成作業の時のように、会憲の最終案の作業で、ダヴィド士による、高等中学校の司祭修道者と信徒修道者間の区別、また、オギュスト士が確立することを夢見ていた高い教養の信徒修道者と小学校教師の信徒修道者間の相違さえも再度退けるようにしました。創立者は、「すべての信徒修道者間には、彼ら与えられた任務以外の相違はない」と規定しました。(362条) 現業修道者は、創立者が会憲のなかに彼らのために特別な要請を規定し、分離された共同体での生活様式に適合した会則を提示したとしても、マリア会において、他の部門の会員同様、本会のすべての権利に参加することが認められました。

創立者はマリア会のすべての構成員の親密な一致を言明しながらも、一致した会員の能力によって要請される職権上の相違を認めました。司祭修道者はマリア会の「塩であり、光」でなければならず(361条)、総長、霊生局長、教育局長、管区長、修練院長、大きな共同体の院長は司祭修道者の中から選出され、任命されなければなりませんでした。(359条) また、大きな共同体においては、司祭修道者は、「能力に応じて」霊生部長や教師の職務を果たさなければなりませんでした。(348条) 更に、司祭修道者は、例えば、コングレガシオンや黙想会の指導を要請された場合にはその指導任務を果たさなければなりませんでした。

当時、マリア会が従事していた活動で、公立小学校の指導はもっぱら信徒修道者の活動として保留されていました。(361条) あらゆる教育法の下での

教育、あらゆる段階の教授法は彼らの専門に属しましたが、会憲は司祭修道者と信徒修道者間の相違を確立してはいませんでした。(362条)

創立者はこれらのいずれの点に関しても刷新を試みることはしませんでした。したがって、現場で実施されていたことを認容し、1834年から組織に関する章を支障なく公表することが出来ました。ある関連が提示されていた統治の章には、これらの組織事項を加えることを望まなかったからでした。マリア会におけるそれぞれの会員の協力には確かにほとんど何らの障害もありませんでした。いずこにおいても、一致は自発的に行われ、相互の愛徳のきずなによって固められていたからでした。セン・ルミの修道院で、ある会員が、司祭のロテア師が信徒修道者の院長に従っているのを見て憤慨した時、創立者は、こうした修道院では院長は必ず司祭修道者でなければならないことはなく、そして、この場合、司祭修道者は会員の個人的指導のためには信徒修道者の院長に従わなくてもよいということを理解させました(17)。コリノー師やオギュスト士の非難は、マリア会を退会するための何らかの口実を利用することを望んだ言いがかりにしか過ぎませんでした。いずれにしても、創立者はマリア会で、それぞれの部門の会員が相互に協力することに関しては何らの不安も示しませんでした。ご存じの通り、創立者は当初からこうした点について完全な自信をもって話していました。「マリア会はあらゆる階層の人、あらゆる才能の人、司祭修道者、信徒修道者で組織されているとはいえ、会員が規定された会則を厳密に守るなら、堅実に維持されるに違いありません」と書き送っていたからでした(18)。創立者は正しかったのです。多くの人にとって実現不可能な幻想であることを実感していたからです。創立者が自ら作成した基本的な会則は、その後不十分であるとのことで、明確と正確の補語が必要になったにしても、経験によって要請された改訂は構成上の原則を何ら改悪するものではなく、反対に、堅実な継続を保証する改善でしかありませんでした。

創立者が本会の将来を保証したものは人間的観点からも確立することを望んだ統治の形態でした。すなわち、強力な中央集権的な統治は、共同の活動に全会員を協力させることが出来るように、それぞれの部門の会員間の一致を保持するのに不可欠で唯一適した手段であるように思われたからでした。この点に関しては、会員間で満場一致の賛成が得られたわけではありませんでした。何人かの院長やララン師は創立者の総長に強力な権限が確立されることを恐れたからでした。彼らが修道院長に望んでいたのは、特に財政と人事の問題に関するある程度の独立性でした。彼らは旧大修道会の修道院長にならって、マリア会の共有財産でも修道院に帰属させるという多少とも完全な自主独立権を夢見ていたからでした。

創立者はこうした主張に対して最後の力をふりしぼんで戦っていました。こうしたことに関するあらゆる幻想を予防するために、修道者はどのような考えを持たなければならないかをある日クルーゼ士に指摘し、同時に幾つかの原則を示して、次のように書き送って指導しました(19)。

「自らの身分の精神に少しずつ浸透するよう努力しない会員は、組織と統治の条項に関して理屈を言う手段を見いだすに違いありません。まず、原則の適用に関して勝手な解釈をするからであり、更に、多少とも自愛心が傷つけられたことが分かるからです。本会の組織と統治に関しては、わたしは常にカトリック教会の組織と統治に出来るだけ近づけようとの考えを持っていました。会員がこうした意図から離れば会は堅固さと持続性が弱まるに違いありません。」

創立者は、教会の権限の傾向が現代の必要に応じて中央に集中されていることを指摘しました。同様に、現代のすべての修道会もその必要性を感じていました。活動生活に献身した旧修道会は新しい力を回復するためには、それぞれの修道者を結び付けるきずなを強固にするより効果的な手段を見いだすことが出来なかったからでした。ところで、新時代に一般的に要請されていたこと、また、意志の疎通の多様性と迅速性の重要性は、異なるカテゴリー組織のマリア会にとっても緊急な必要事項でした。マリア会にとって生死の問題があったことは、弱体化された中央集権の統治によって短期間であっても会の崩壊にも至る会員の分裂をもたらしたことでした。創立者は通信によって自らの考えを会員にしばしば披れきしました。例えば、会憲の最終草案の作成時、クルトゥフォンテーヌの共同体に次のように書き送りました(20)。

「わたしたちは皆、各人委ねられたポストによって信仰の維持とその普及のために全力を尽くして活動する同じ目的、同じ意図しか持ちません。したがって、わたしたちは常に極めて親密に一致していなければなりません。考えや感情の不一致はマリア会を滅ぼしかねません。したがって、カトリック教会には最高主権者としては教皇しか存在しないように、マリア会には一人の総長が最高主権者として存在するのはこのためです。すべての下級上長はどのような高い段階に上げられようともその考えと感情を常に総長に従わせなければなりません。」

創立者がこの原則を強固に主張したのは、その後しばらくして、当時、エベルマンステルの修練院長であったレオン・メイエ師に次のように書き送った他の理由があったからでした(21)。

「あなたの行動において、出来る限り独断を避けてください。独断は会則そ

のものより中庸であるように見えても、常に悪い結果をもたらし、会に害を及ぼすことになるに違いないからです。(メイエ師が論文の根拠として引用した)旧大修道会において、この種のいかに多くの悪習が共同体の院長の怠慢によってもたらされたことでしょうか。彼らは善意はあっても、時には、弱く、部下に引きずられるままになっていたからでした。神が改革者を送られた時、改革者はどれほどの困難を感じたことでしょうか。多くの場合、おだやかに妥協せざるを得なかったのではないのでしょうか。わたしはこのように断言したことを一冊の分厚い本にまとめることが出来るようにさえ思います。わたしが、マリアの娘の会にせよ、マリア会にせよ、その会憲の草案に着手しようと思った時、わたしはこうした会則のゆるみの原因を検討調査する義務はなかったと言えるのでしょうか。」

シャミナード師はこうした原則によって、総長に最も広範な権限を与えました。「総長は会全体の長であり、核心であり、きずなである。総長に一致し、従順の下に生きる会員は総長と一体をなす。」(396条) 総会によって選出される総長は、「総長補佐を除くすべての院長及び特別上長を任命する。」「総長は終生誓願を許可し、誓願を受け、マリア会の名の下に作成されたすべての文書に署名し、会員の除名を宣言する。また、いずれの場所、いずれの時においても、修道者を配置し、配置転換をなし、派遣し、召集する。」(397条)「いずれにしても、不動産の売却と取得、政府あるいは聖座に関する重要案件、総長自身の文書の公表、既に受け入れていた会員の除名等の問題に関しては、総長評議員会の意見を仰がなければ何も実施しない。総長評議員会が総長の意見と対立する場合はこれを実行に移してはならない。」(398条) 創立者は、この最後の条項に関しては、総長の絶対権に対する緩和策を用心深く検討しました。更に、政府が市民法によって総長の在任期限を10年に制限しなかった場合は、シャミナード師は総長職に生涯止まるとの意向でした。しかし、創立者はこの考えを修正することを認めて、緩和策を示し、総長の被再選資格を宣言しました。

創立者は、霊生部、教育部、財務部の3部門の区分原則をこの権限集中の概念に結び付けていました。総長自身に全面的に統合されたこれら3部門は総長補佐の間で分割されました。それは、総本部の一致した刺激と指導によって、会全体の活動のスムーズな運営を保証するためでした。創立者がセン・ルミの共同体の特別な統治に適用し、ショヴォー師に説明された考えが伝えられています。地域の共同体の統治は総本部の統治に従わなければならないからでした。次のように書き送っていました(22)。

「共同体の統治に関しては、あなたが言っているように、万事、『per modum unius』(一人によってのように)、すなわち、真に一致して行わなければならない

いこと、また、院長はたとえ自らの権限下に部長がいたにしても、真にすべての活動の中心、また、何らかの特別な活動の中心であることがよく分かることが出来たと思います。それは、宇宙における神の創造のみ業と同じではないでしょうか。神はこの宇宙にすばらしい秩序を見事に支える普遍的な法則を確立されました。もし、会員が修道生活及び、キリスト教生活の一般則を守るならば、一度理解されたこの種の統治はわたしたちにすばらしい秩序をもたらすに違いないことを確信しています。わたしは、統治が違った形で組織されることが出来ないと言うつもりはありません。いずれにしても、この統治は旧会憲によってマリア会に導入されたものです。したがって、もし、慎重に現行の統治を遵守するならば、そして、原文を改ざんすることがなければ、各共同体の性格によって要請されるすべての修正を受け入れることが出来ます。」

この原則が認められることによって、統治全体に関する他の原則も導き出されることになりました。創立者が経験上の教訓によって明確にしなかった本章のある部分はあまり完ぺきではありませんでした。例えば、修道院の全院長が召集されるという総会の組織形態がそうでした。その後、総会の頻繁な召集及びその効果さえも不可能にするこのシステムは放棄されなければなりませんでした。

創立者はマリア会ばかりでなく、マリアの娘の会の認可をローマの聖座に申請することを考えていました。したがって、マリアの娘の会の会憲も改訂していました。マリアの娘の会の会憲は1816年には完成していましたが、早速、聖座に提出出来たに違いありませんでしたが、伝えられていたように、そのことを急ぎませんでした。次のように書き送っていたからでした(23)。

「ダヴィオ大司教様の存命中、わたしにはマリアの娘の会の会憲の認可を聖座から頂く好機がありました。そこで、わたしは大司教様に相談しました。(大司教様の存命中、わたしは大司教様に意見を求めることなしには本会にとって重要なことは何も決定しなかったからです。) 大司教様は、必要なことはわたしの方で取り計らうつもりだと親切にお答えになりました。それで、その申請はなお延期するように勧められました。それは、会の発展によって何らかの箇条を変更し、あるいは追加しなければならないことが可能になるに違いないからでした。アジャンの司教様もボルドーの大司教様の勧めを知られた時、喜んでそのことに賛成されました。」

創立者はこの申請書提出の延期を喜びました。それは、まず、1816年の会憲の形式が不備だったからでした。それはダヴィド士によって起草されたもので、重苦しい分かりにくい文体でしたし、また、経験によって重要な修正が指摘さ

れていたからでした。

1832年にアジャンの司教と創立者間の不合意によって、会憲の主要条項の修正は予想されていました。創立者はマリア会の両系列の修道会の統合に執着していました。また、分離することを望まなかったのはボルドーのコングレガシオンの二つの系列でした。創立者は、同一の長上が無原罪の御宿りの乙女マリアのご保護の下に男女青年のコングレガニストの生活を指導し、類似の善の実践を可能にすることを意図していたからでした。創立者の考えでは、両コングレガシオンの統合は、ラザリスト会と愛徳修道女会、福者グリニヨン・ドゥ・モンフォルの宣教師会と賢明修道女会、そして、より最近では、グードレン師によって創立されたみ心の司祭会、あるいは、ドゥ・ピクピュスの司祭会と同名の修道女会と同じように親密でなければなりません。しかし、1832年の事件によって、こうした統合を保証するためには調和のとれた精神によって、簡単に言外に表明出来るように思われる事項でも会憲に明記しなければならないと学びました。それは、一方では、マリアの娘の会が熱心にそのことを求め、自らもそれとなく賛成していただけに無理に強制しませんでした。それは、創立者はその年齢でより長生きを望めるべくもなく、総長職の近い辞任が個人的な影響を及ぼすことの出来る時期の終わりがより早まっているように思われていたからでした。

そこで、創立者は、「霊生局長による本会の統治」に関する新たな条項を会憲に次のように記入しました。

「霊生局長は、本会の統治において、いずこにおいても会員の精神と行動の一致を維持することが委任される。霊生局長は、それぞれの教区において、司教の共同体への要請の受認者の一般的な代表者である。その代表権は会憲同様聖座の認可を受ける。」

「マリアの娘の会の霊生局長はマリア会の総長である。両修道会は同一の創立者を有し、同一の精神、同一の目的を意図するからである。」(415条)

総長及び霊生局長の権限は念入りに規定されていました。マリアの娘の会の総長は同会において、マリア会において総長が享受していたすべての権限を保持していました。

マリア会の総長は、「教会から代表権を受領した霊生局長同様、マリアの娘の会の総長の権限とその総会の権限の上に特別な権限を行使する。」(417条)

「特別な上長の任命、財政に関する重要案件、新創立、特別則の追加と

修正は靈生局長の権限に属する。靈生局長の同意がなければ無効である。」(418条)

もし、ある程度厳密に実施された場合には、その調整がマリアの娘の会の総長によって妨げられない限り認められました(24)。

1816年の会憲にもたらされた他の主要な改訂は、本会の創立の当初にさかのぼって導入された刷新の規則でした。創立者は教育の任務に耐えることが困難であったメールの修道女に「補佐」の名目で、彼女とほとんど同じ権限を有した、しかし、彼女より下級の修道女に援助させました。会憲では、この補佐のグループはメールと助修道女間にランクされ、教育活動に参加しました。

最後に、旧会憲と新会憲草案第三の相違は、当時、オーシュに創立された在俗修道女会関係の1章の追加でした。創立者は彼女たちに特別な会則を提示する代わりに、彼女たちが適用出来る範囲においてマリアの娘の会の会憲を適用することを表明するに止めました。マリアの娘の会の会憲には次のように提示されていました。「オーシュに移された力強いマリアの娘の会の系列の在俗修道女会は常にその母院に従属し、マリアの娘の会と唯一、一体の修道会を形成する。」(336条)

「在俗修道女会を構成する助修道女はマリアの娘の会の真の修道女であり、今日まで、それぞれの共同体に派遣された修道女と基本的に何ら異なるものではない。彼女たちはマリアの娘の会の会憲とその総本部に完全に従属する。」(337条)

「オーシュの中核共同体はそこから巣立っていくすべての在俗修道女を直接指導する。いずれにしても、中核共同体は彼女たちをアジャンのマリアの娘の会の総本部に従属させる。」(338条)

「中核共同体の院長は個人としても、管理の業務にしても、マリアの娘の会の総本部に従属する。」(335条)

要するに、創立者は、マリアの娘の会そのものをマリア会の総長に関連付けたのと同じ方法で、在俗修道女会をマリアの娘の会に従属させました。こうした協力体系によって相互に補い合いながら、唯一で同一の精神によって、唯一で同一の目的を目指す完全に調和のとれた修道会の確立を考えたのでした。

創立者は会憲の草案作成が終了すると、それぞれの共同体の所在地の教区の司教にこれを提出しました。そして、すべての司教から極めて明確な認可

を得ました。これを綿密に検討された司教、例えば、ブザンソンのマティウ大司教、アジャッシオ

のカザヌツリ・ディステイリア司教は会憲に、「神のみ旨」を認められました。オーシュの大司教イゾアル枢機卿は創立者とその働を特に評価され、マリア会の会憲に対して次のような賛辞を与えられました。

「マリア会の会憲は、マリアの娘の会の会憲に対する功績ばかりでなく、社会のすべての階層を効果的にいやすため、また、司祭の尊い使命の基本精神によって、彼らを刷新するため、また、教育の厳しい働きで世の人々を聖化し、彼らを宣教活動に協力させるため、そして、労働者を聖化し、彼らを永遠の幸福に導くため等に取り組む計り知れない利益をもたらしました。」

在俗修道女会の創立以来、イゾアル枢機卿はシャミナード師に対する好意をますます深くされました。両修道会の会憲をローマの聖座に申請し、その認可が得られるよう自ら手伝われることをシャミナード師に申し出られました。20年以上もローマの聖座の裁判所の判事であった枢機卿はこの種の申請を指導するためあらゆる便宜を計ってくださっていたからでした(25)。

1838年7月、創立者がオーシュを訪れた時、イゾアル枢機卿からの申し出を受け入れ、なすべきすべての申請手続きを枢機卿との間で了承し、在俗修道女会側の創立者代理者として枢機卿の司教総代理シュヴァリエ師がローマを訪れ、申請手続きをなすことが取り決められました。

そこで、創立者は両修道会(26)に特別な祈りを要請し、両修道会のために、その創立を決心した動機の概要を記した2通の嘆願書を作成しました。また、極めて正確な、そして、謙そんに満ちた言葉で自らの全宣教活動の概略もこれに記入しました(27)。これらの2通の嘆願書と司教の認可書(28)を、「マリアの巡礼者」のシュヴァリエ師(29)に委託しました。そして、グレゴリオ16世教皇聖下の聖座の書記官で、同枢機卿が教皇大使であった時しばしばその手をわずらわしたランブルシニ枢機卿に保護を嘆願しました。そして最後に申請の結果をみ摂理に委ねました。

ローマでは申請手続きの委託者は歓待され、申請書は受理されました。申請手続きは1839年1月から開始されることになり、3月末ごろ終了しました。その結果は1839年4月27日付けの教皇の推奨令のみに提示され、ジユスティニアニ枢機卿によってシャミナード師に次のように伝えられました(30)。

「わたしはこの書簡によって教皇聖下が、あなたが創立された二つの修道会の認可を宣言することを望まれた賞賛の推奨令をあなたにお伝え致します。あ

あなたはそこに、あなたとあなたの弟子たちに対する教皇聖下のご好意を認められるに違いありません。教皇聖下は、主のぼうどう畑にあらゆる階層の新たな、そして、熱心な働き手を集める計画をあなたに鼓吹された刈り入れ主に喜んで感謝されました。これらの働き手は細心の配慮と熱意をもって道徳と諸徳の豊かな実りを至る所に増大させるに違いありません。しかし、あなたが提出された会憲の特別の認可がある理由のため認可が布告されていないことに気づかれたにしても、また、そのために二つの修道会に対しても、何も懸念されるに及ばないことをお考えになってください。ご覧の通り、二つの修道会は、かえって聖下のみ心にかない、高い評価の賞賛によって推奨されました。」

推奨令自体は慣例によって、申請書を披れきすることから始められ、次のように続けられていました。

「教皇聖下はすべてを好意をもって受け取られ、請願書を司教聖職者省に渡された後、同聖省の数名の枢機卿によって、多くの気配りないし配慮をもってこれを吟味検討させました(31)。次に、1839年4月12日の教皇謁見の祭、副書記官から提出された報告に基づき、教皇聖下は、教令によって両修道会を十分賞賛し、認可することを宣言されたように、両修道会が推奨に値するものであることを好意をもって決定されました。したがって、教皇聖下はそれぞれの会員が教会に役立つことを確信して、意図した修道生活に、マリアのご保護の下で、毎日喜んで前進するよう、極めて敬けんな修道会の精神を教え込むよう望まれました。」なお、「教皇聖下の特別なご厚意のあかしとして」、教令には免償及び特典の霊的恩恵が付加されました。

創立者はこの貴重な教令を頂いて喜びを抑えることが出来ませんでした。感激と尊敬をもってこれに口づけし、この幸せな知らせを急いで全会員に伝達すべく次のように書き送りました(32)。

「わたしはこの貴重な教令を受け取り、聖座から公布されたすべての事柄に対して尊敬と子心の感謝をもってこれを読み、読み返しました。わたしの心は恐縮し、有頂天になりました。皆さんがまず認めることになるのは、教皇聖下が両修道会を同一の教令で、同一の賞賛、同一の奨励によって同一視されたことです。それはわたしたちが並行した2本の線に沿ってそれぞれ男女に適した道を同一の目的に向かって共に進み、違っはいても一致し、神と至聖なる乙女マリアの栄光をもたらすために熱誠と愛と努力を競い合わなければならないことをあくまで教えられるためでした(33)。次に、教皇聖下がどれほど本会に満足されたかを力強い言葉で表現されたか、また、どれほどの親愛の情と温情をもってわたしたちを祝福し、激励し、忍耐を促されたかが分かるに違いあり

ません。」

この最後のくだりは、シャミナード師が教皇グレゴリオ16世聖下に差し上げたすばらしいお礼の書簡に、聖下がご自身で返事されることを望まれて、8月21日の日付の書簡で特に確認されたものです。

「とりわけ、私はあなたとあなたの親愛な修道者、修道女が、あなたが計画した信心と博愛の事業に不屈の熱誠をもって働くよう、また、今日の不信仰の時代に聖座の重責に圧倒されている弱い私のため子心の愛をもって熱心に祈っていただくよう、あなたとあなたの修道者と修道女を激励するためにこの返書を送りたいと思いました。」

創立者は、確かに、望んだすべての事項の認可をローマから得ることが出来ませんでした。そして、自らの生存中にこれ以上望めないことも感じていました。両修道会が、「教会法上の修道会」と呼ばれること、すなわち、修道会と会憲の最終認可を懇願していましたが(34)、新しい教会法に従って申請書の審議が開始されたことを知りました。それは、教会に新しい修道会を許可する前に、また、特に教会の最高権の公式の証印である会憲の認可前に、克服しなければならない様々な段階として教会に継続的な検討期限が課されていた新しい規則による審議でした。そこで、創立者は今日まで自らや会員に対してそれほど慈悲深い方であったみ摂理にすべてを委ね、会員に期待の言葉を次のように伝えました(35)。

「教皇聖下は両修道会を賞賛することを望まれましたが、その認可はわたしたちの希望をまだ完全に満たしていません。しかし、この認可はわたしたちが教皇聖下のご厚意に期待していることの実確な保証、最高に可能な保証になっています。したがって、聖座に対するわたしたちの強力な保護者の一人である司教、ジュスティニアニ枢機卿は、本会に対する激励を知らせて下さったローマの推奨令を開かれ、ご自分の評議会で、『これは列福だ、やがて列聖になる』と叫ばれました。この点でわたしたちの望みは目下のところ聖座への信頼による期待です(36)。」

こうして、会憲全体が確実に公布されるようになってきました。創立者はそれぞれの修道会のためにこれを複写し用意が出来次第、1839年11月5日、各共同体に送付しました。そして、聖座からの認可によって与えられた期待の展望によって、全く安心した気持ちを表明した短い回章を添えました。

「ただ今、わたしの心を有頂天にさせている喜びと希望の思いを皆さんに表明しなければならないと思います。皆さんはこの会憲をわたしの愛情のあかし、

皆さんの幸福のためのわたしの感謝の宝として、また、心から皆さんを愛する父の遺言として、この会憲を喜んで受け取ってくださるものと思います。そうです、皆さんはこの会憲を愛情をもって受け入れるに違いありません。一方、皆さんの院長がその任務の義務として会憲を正確に遵守出来るよう、祭壇の前で誓う時、皆さんは最後まで会憲に忠実であることを決心するに違いありません。皆さん、わたしはもう皆さんの間にわずかしか生きられないほど高齢に達したことが分かります。どうぞ、わたしが神のみ名によって皆さんに渡した会憲の実践のために熱心と努力を競う皆さんを眺めさせてください。こうして、皆さんはこの老人を慰めることが出来、また、特に、聖座と尊いマリアを慰めることが出来るに違いありません。」

この敬けんな感動すべき言葉は尊敬すべき老創立者の、「nunc dimittis」(今こそしもべを安らかに逝かせてください)の言葉のようでした。この言葉は、創立者がこの世での生涯の活動ばかりでなく、与えられた聖なる使命を責任をもって果たされたことについて深い思いを致した言葉でした。



注

- (1) 堅忍の誓願によって、会員はマリアのしもべの身分に永続的に、取り消すことのない仕方です。自任することを意図する。このことは、マリアの知識を広め、出来る限り、自ら、また他者によってどのような生活環境にあっても、その愛と信心を永続させる敬けんな意図をもった乙女マリアへの固有の献身である。」(19条)
- (2) 毎週の大齋の日、常に夕食は控え目で、四旬節には緩和されません。
- (3) 司祭になったエステブネ師は、シャミナード師が、「中等教育」のみを意図していたオギュスト士の考えに満足していなかったことに残念な気持ちを述べ、そのため共に活動しないことを伝えてきました。しかし、「詰め込み主義的な好み」は持っていないことを付け加えました。しかし、エステブネ師は普及を望んでいた教育法に注目させることは出来なかったのではないのでしょうか。カイエ師自身は多くの活動に従事していた創立者に会うことを苦にしていました。カイエ師は創立者に、「マリア会の目的は余りにも広大で、普遍的、そして、余りにも漠然としている」ということを心配していると書き送りました。(1836年9月5日)
- (4) 1838年5月1日、コルマルの共同体へ
- (5) 1832年1月10日、ララン師へ
- (6) 1829年12月30日
- (7) 1838年1月23日

- (8) 1837年8月19日
- (9) 1838年3月13日、レオン・メイエ師へ
- (10) 1837年7月28日
- (11) 1837年8月17日
- (12) 1837年8月17日
- (13) 1837年9月22日
- (14) 1838年4月10日、カイエ師へ
- (15) 「スタニスラス高等中学校に関する歴史概要」の著者ララン師。329ページ
- (16) ララン師は1845年までレーラックに住んでいました。その財政事情のため、より長くそこに止まることが出来ませんでした。師は、その修道誓願によってマリア会の一員で、その借財から実質的に解放されたあかつきには、マリア会に帰ることを願っていました。そのために、パリに行き、ルブシェル師と共にテルン通りとボナパルト通りの二つの学校の指導を委託されました。1852年にボナパルト通りの学校をマリア会で取得するようにしました。シーブル司教によって認められたララン師はカルメル会の学校の宗教部長に任命されました。マリア会がスタニスラス高等中学校の経営を受諾した時、ララン師はそこで教えていました。そこで、ララン師はこの学校の復興の使命を託されました。(1855年1月) その成功は完べきでした。スタニスラス高等中学校の復興はララン師の生涯の最高の業績だったからでした。ララン師は老いの身には余りにも重い負担を下ろさなければならなかった時まで、そこに15年間(1855-1871)年まで働きました。師のスタニスラス高等中学校における詳細な教育の推移については、わたしたちが参照した、「スタニスラス高等中学校の歴史概要」と、後継者であったドゥ・ラガルドゥ師の伝記(1887年、ルコップル社)によって何うことが出来るに違いありません。ララン師は老年になってからの数年をカンヌの学校の指導と、視学の資格でマリア会の後期中学校の指導に任命されていました。1879年5月27日、ブザンソンの学校視察中帰天し、クルトフォンテーヌ(ジュラ県)の物故会員の中に埋葬されました。
- (17) 1825年7月5日、ロテア師へ
- (18) 1822年1月25日、ルイ・ロテア士へ
- (19) 1830年11月6日
- (20) 日付なしの手紙、ただし、当時代の秘書の記録によります(1838年-39年)。
- (21) 1844年2月8日
- (22) 1831年11月23日
- (23) 1835年12月24日、ララン師へ
- (24) 創立者がマリアの娘の会の統治に関して、二人の総長の協力をメール・セン・ヴ

エンサンにどのように説明したかは次の通りです。「あなたとわたしは理解し合っていないですが、院長や他の会員は(例えば、施設の創立については)あなたに申請することになります。あなたはそのことをわたしに伝えてください。あなたがどのようになすべきかあなたに伝えます。重大問題の件に関しては二頭だての馬車の馬のように一緒に進まなければなりません。もし、一頭の馬が右に、もう一頭の馬が左に行くなら真っ直ぐ進むことが出来ないからです。」(1838年2月3日)

(25) 旧ドーフィネ家出身のジョアセン・ジャン・クサヴィエ・ディゾアル枢機卿は1766年にエクスに生まれ、エクスの小神学校で学び、そこで、後のフェシュ枢機卿と出会いました。ディゾアル枢機卿はフェシュ枢機卿によって1803年にローマの聖座の裁判所判事に任命されるはずでした。ディゾアル枢機卿は帝国の野望に対して教皇の権利を擁護するため強固な態度を示していました。復興政府によってその地位を維持した枢機卿は1817年の政教条約の締結に寄与しました。ピオ7世教皇聖下は特に枢機卿を重く用い、遺言執行人の一人に任命しました。

当初、細心のため1825年まで聖職者の第一歩に止まっていたましたが、遂に司祭になることを決意し、1827年に枢機卿の資格に上げられました。1827年にフランスに帰り、オーシュの大司教座に就任しました。その後、エクスの大司教を、そして、1836年にはボルドーの大司教を2度にわたって辞任しました。旧友のフェシュ枢機卿の帰天後、リオンの司教を承諾することを考えましたが、そこに就任する時間はなく、1839年10月7日、パリで帰天しました。パリでは教皇の教書を期待していたところでした。

(26) 1838年8月30日の回章

(27) 教皇グレゴリオ16世聖下への創立者の書簡の要約は次の通りです。

「教皇聖下、聖下の足下につつましんで平伏することが許されるならば、心からの親愛の念を明らかにしたいと思います。私は子心の謙そんな気持ちで次のことを申し上げたいと思います。そして、久しい以前から、現代の合理主義、神の教会の崩壊を企てたプロテスタント教会の不信心の恐るべき勢力を考えることは何と大きな苦しみであったことでしょう。神は悪の奔流にふさわしい力で対抗するため、今世紀の初頭、教皇派遣宣教師の資格を聖座に申請するようとの考えを起こさせて下さいました。それは、あらゆる年齢及び男女、そして、うぬぼれることなく、世間体も気にせず、全く純粋な教義とモラルによる聖なる信仰を實踐する特別な団体を構成するあらゆる階層のカトリック信徒の圧倒的な集団を驚いた世界に示して、信仰の尊い炎を到るところで回復させ、点火するためです。わたしはこの考えに満たされ、また、敬けんな司教様方に勧められて、私の願いをご厚意をもって聞き届けられ、1801年の教令によって、私にすばらしい権限を与えて下さったピオ7世教皇聖下の足下に、私の心からの願いを提出させていただきました。教皇聖下、それ以来、フランスの幾つかの都市に設立された男女の熱心なコングレガシオンはすばらしい善を行っています。しかし、私はこの手段だけでは不十分と思います。．．．。聖下、私は神の前に二つの新しい修道会、一つは女子青年のため、もう一つは男子青年のために創立しなければならないことを考えました。それは、キリスト教は古びた宗教ではないこと、福音は1800年前のように今日も実践出来ることを彼らの立派な模範による行動によって世にあかし、様々な外観に隠れた有害な宣伝と戦い、あらゆる階層の子弟のために全課程と全科目の教授の学校を開設したいと思ったからでした。

聖下、マリア会の会憲とマリアの娘の会の会憲は聖ベネディクトの精神によって、その目的、手段、そして、人事組織及び両修道会の統治を発展させ、現世紀のぼう大な要請に出来る限り適応させたものです。両修道会は尊いマリアのすばらしいみ名を頂きました。彼らはマリアのみ名を全世界に知らせ、たたえさせ、愛させることが出来るに違いありません。私は、御主が今日教会を特に支えるための榮譽を至聖なるマリアに保留されていたことを心から確信するからです。

聖下、取るに足りない道具にしか過ぎない私が、様々な事業について何らかの実情を申し上げるため聖下の尊い時間をご厚意にあまえてお邪魔した私の個人的な不遜をご覧にならず、かえって、聖下のみ下に提出されたマリアのみ名をご覧下さい。マリアのみ名は私の栄光のすべて、私の力のすべてになっているからです。」

(28) オーシュの枢機卿、ボルドー及びブザンソンの大司教、アジャッシオ、アジャン、セン・クロード、セン・ディエ、ローザンヌ、ジュネーブ、ストラスブール、及び、モントーバンの司教の認可書。

(29) 1838年9月、イゾアル枢機卿からの書簡

(30) ジュスティニアニ枢機卿は司教聖職者省長官で、しばらくして帰天されたソラ枢機卿の後任に当てられていました。マドリードの教皇大使としてのジュスティニアニ枢機卿は、1823年の動乱の時ボルドーに避難せざるを得ませんでした。ボルドーには数箇月滞在されたので、シャミナード師と懇意になることは不可能ではありませんでした。

(31) 特にボルドーの枢機卿によって

(32) 1839年7月22日の回章と、それから少々遅れた郵便で、4月30日の発送で、ボルドーには7月にしか着かなかった教令を発送しました。

(33) ローマは同一の総長の下に両修道会が極めて明確に統一されていることを認めました。教令はこの二重の責任についてシャミナード師の後継者についても触れました。

(34) 創立者は、教会は現代の修道会にこれ以上類似のものを認めないことを知らないうで、「公式誓願」の修道会になることを望んでいました。

(35) 1839年7月22日の回章

(36) 1830年末前、ローマからの新しい恩典の権限と免償が聖座の好意の新しい保証として両修道会に与えられました。それは、例えば、マリア会のすべての総長のための、「教皇派遣宣教師」の資格、十字架の道行きを設置する司祭の権限等。聖座の恩恵の伝達者であった聖座の書記官ランブリュッシニ枢機卿はこれらのことを告知し、次のように創立者に伝えました。「神父様、ご存じの通り、神父様とマリア会の敬けんな事業に関することに常に関心を寄せています。あなたの尊い祈りの中で私を忘れないでいただきたいと思います。わたしに出来るすべてのことは心からお役に立ちたいと思います。」(1839年12月12日)

第 37 章 総長職の辞任 (1841)

将来への信頼 ❖ 新規創立、クレラック及びカステルサラゼンー ❖ ブザンソンとフリブール ❖ マドレーヌのコングレガシオン ❖ ドンネ大司教の意向 ❖ セン・フランソワ・レジス活動とセン・ヴェンセン・ドウ・ポール会議 ❖ 創立者の回章 ❖ 総長辞任の意向 ❖ オギュスト士の問題 ❖ 創立者の辞任。

創立者は会憲の草案の最終決定の時が近づくにつれて、会の将来についてより大きな自信を示しました。困難や反対によって苦しめられて落胆させられることが少しずつ少なくなってきたからでした。先般 マラスに創立された施設の建物が火災によってほとんど全焼し、莫大な損害を被りましたが、信仰と子心の信頼の言葉で次のように書き送りました(1)。

「神はわたしたちの働きに苦悩と苦難の種をまかれました。その聖なるみ名はたたえられますように。マリア会に対する悪魔の憎しみにもかかわらず、マリア会は真の刷新に向かって前進し、また、これによって、もっぱら強化の一途を進んでいます。万難を排して前進しましょう。そして常に、わたしたちの保護者のマリアを信頼をもって眺め、安全な港に到着いたしましょう。」

何箇月もたたない内に、果たして安全な港が目前に迫り、試練の時は終わっていないにもかかわらず、マリア会は聖座の認可を頂き、会憲のテキストには堅忍を保証する救いのいかりを頂くことになりました。期待に高鳴る心で創立者は、「多くの心痛と働きの中でわたしは大きな慰めを感じています。マリア会の霊的、物的事項はかなり迅速に改善に向かっていているからです(2)。そして、マリア会の様々な事柄を目に見えない形で導いて下さっている御主と御母に心から感謝致したいと思います(3)」と書き送りました。

果たして、天から現れた祝福がマリア会の事業の上に広がりました。施設設立の要請は創立者がその選択にとまどうほど多数に上りました。自らに期待を寄せているように思われるすべての善を行うことが出来ない無力さを感じる事が最大の悩みの一つでした。1837年9月3日、ジャクビー司教に、「2年ほど前から、私は会員の不足のため類似の施設の設立を断るため恐縮に思った週間は少なくありませんでした」と書き送りました。また、自分自身の望みと無欲と戦いながら、「マリア会との関係で、それ自体重大な理由がなければどのような新しい創立にも賛成しません」と書き送りました(4)。余りにも急速な拡張によ

ってマリア会が弱体化することを恐れたからでした。この不安は十分根拠のあることでした。少なくとも、以前から修練院が正式に復興されていなかったほどだからです。

しかし、クルトフォンテーヌやエベルスマンステールの修練院が多くのすばらしい召命(5)で満たされていたのを見て、創立者はより寛大な態度を示し、1838年から、マリア会に、少なくとも、施設の創立を規制し、調節するように努力するより積極的な活動を浸透させるようにしました。適当に施設を分散させないこと、ただし、既知の地域では徐々に拡大すること、そして、相互に規則を正確に守りながら共同体関係を密にした共同体を維持するよう要請しました。フランス南部地方では、セン・ローランの修練院が再開されていなかっただけに、著しい進展を考えることは出来ませんでした。1837年にクレラックのすばらしい施設を受諾したとはいえ、それはメメン士の背反によって崩壊したアジャンの施設の代替施設になすことが目的でした。

信徒の黙想会の結果設立されたクレラックの新しい学校は、多くのカトリックの生徒と新教の生徒が入り交じった地域で、また、いずれの子供たちにも宗教がほとんど教えられていなかった地域で、クラス委員制の学校の代わりをするのが目的でした。この学校の創立は、創立以前からさえ多くの障害を乗り越えなければなりません。創立者はその穏健さと慎重さのおかげでこうした障害に打ち勝ちました。そこで、プロテスタントの生徒を排除しなよう会員に指示し、この学校の重要な恩人であったドゥ・モンクロック師にこの学校に適用することを目指した原則を次のように説明しました(6)。

「授業時間以外でも、もともとカトリックの児童はプロテスタントの児童を非難すべきではなく、また、逆の場合も同じです。児童たちは区別のあることを認めたり、気づいたりしてはならないのです。もし、学校がこのように運営されるなら、不都合が生じないことは確実で、大きな利益を得られるに違いありません。党派心と呼ばれることを指摘するものはすべて避けるようにしてください。どうぞ、わたしたちの血の最後の一滴を流すまで堅実にカトリックであるようにしてください。また、常に、謙そんで、控え目であるように、すなわち、聖パウロの表現通り(7)、すべての人に対して真に慈悲深く、一片のとげもない優しい人であるようにしてください。」このことは理解され、かつては樽職人であった校長のビドン士は少しずつ修養を積み、その才覚と素直さによって十分な教養を積み、すばらしい賢明の徳の模範をクレラックの人々に示しました。このため学校はプロテスタントの人々に対しても完全な成功を収め、今にも信仰が消えそうになっていた地域(8)に信仰の光をかき立てることに寄与しました。1839年、創立者は、元市長で、サジェ市の代議士、そして、ボルドーのコングレガシオンの最初

のの会長の兄弟であった方の要請によって、カステルサッラゼンに新しい学校の創立を受諾しました。しかし、近い将来、ボルドーの修練院の再建が予定されていたこともあって、それ以上フランス南部地方に事業を拡大しないようにしました。

アルザスヤフランシュコンテにおいては、活動の進展はより著しく、一ないし数校の学校の設立の要請がもたらされない年はありませんでした。これらの地域の中でもフランシュコンテの事業の発展が特に目立ちました。デュブール大司教の後継者としてブザンソンの司教座に着任されたマティユ大司教は、当時の司教の中では最も著名な方でした。着任以来、マリア会とシャミナード師に特別な好意と完全な信頼をあかしされました(9)。大司教は、大学が許可する限りにおいて、後期中等教育を施すために大司教座のあるブザンソンにマリア会を誘致するよう教会参事会員のドゥニゾ師を激励しました。1838年には寄宿学校が開校され、間もなく、創立者の愛弟子で信仰と活力の人フィドン師の指導の下にすばらしい発展を遂げました。フランシュコンテにはその他の幾つかの学校が設立されていました。

こうして、1839年には、この地域から熱誠に満ちあふれた最初のグループがフランスの国境を越えて巣立つことになりました。王政復興最終年には既にフランスの国外に、そして、海を越えてマリア会の活動の展開が要請されてきました。創立者はこれに同意することに慎重でした。1840年には、ドイツのババリアや米国から寄せられてきた新規の緊急の要請にも、同じような断りを申し述べなければならなかったのでしょうか。しかし、このたびも揺籃の地からそれほどの遠隔地に会員を派遣することをちゅうちょしたのです。一方、スイスから寄せられた要請の提案にはより好意的に耳を傾けました。スイスはフランシュコンテに隣接していることで、創立者を安心させからでした。また、当初、スイスから数々の召命がもたらされていたので、恩返しの義務があったこの国への奉仕を断らないことを決心していたからでした。そこで、カトリック州のフリブール市に最初の修道者のグループを派遣することを了承しました。学校の創立には苦労がなかったわけではありませんでした。ベルンの新教の過激派によって執念深く攻撃されましたが、問題が負託されていた国務院によって有利な決定を得ました。創立者は外国での最初の学校の創立の成功とローマによるマリア会の認可が符合したことに気づき喜ばずにはおられません。「Ibi digitus Dei est」(それは神のみ旨の印でした)と叫ばれたのもうべなるかなでした(10)。やがて、第二番目の学校がローザンヌに設立されました。この地方はプロテスタント教徒の多い所でした。こうした事業はスイスにおけるマリア会の最初の学校に過ぎませんでした。

ローマからの賞賛の推奨令を頂いた一年後のことでしたが、コルシカ島のマリアの娘の会及びオーシュ教区の在俗修道女会の発展はマリア会の発展に呼応していたので、創立者は、マリア会にもたらされた全体的なはずみと最も安定した将来の前兆のあかしをすることになりました。

当時、以前に創立した学校も各地で繁栄していましたが、師範学校の進展のみは、その反復努力にもかかわらず例外でした。会員不足のためその復興に成功しなかったのです。師範学校そのものは禁じられたわけではありませんでしたが、わずかの年月の後、マリア会もマリアの娘の会も共に、ロン・ル・ソールニエ、スイスのヴァレ州のシオン、そして、アジャッシオの師範学校が負担になっていたからでした。しかし、7月革命前に意図されたその他の事業で最も危ぶまれていたものも、ボルドーのコングレガシオンのように新しい力を回復していました。

創立者とマリア会員の活動が最も著しい後退を被ったのはボルドーの事業でした。コングレガシオンや修練院の四散やセント・マリー寄宿学校がレーラックに移転した後、マリア会はカイエ師の個人的な聖職活動やマドレーヌの数名の司祭の聖職活動によってしか、市内にはマリア会のプレゼンスの影響はなくなっていたからでした。こうした活動の中断は臨時的であったにしても、創立者には思わしくありませんでした。世の風潮は無関心や悪感情さえ引き起こすことになりかねないからでした。創立者の長期の不在は過去の評価を忘れさせ、人々は遠隔地の事業の成功には関知せず、また、彼らにはマリア会は発育不全の事業としか見えず、無力な残骸としか考えられなかったからでした。このことは、ご存じの通り、ドゥ・シュヴルス大司教や一部の聖職者の気持ちでした。

しかし、状況が少しずつ改善されてきていたことは確かでした。1834年に、熱心なカイエ師は、コングレガシオンを無原罪の御宿りの会の名称の下により危険性のない形で刷新したからでした。男女青少年コングレガニストたちはその集会を再開し、やがて、父親の会のアグレガシオンも彼らを見習うことになったからでした。中高年男女信徒の黙想会も復旧され、1834年以来、カイエ師は、中高年男子信徒の黙想会が、「期待以上(11)」であったことを確認していました。ドゥ・シュヴルス大司教は黙想者を激励し、セント・ユラリ教会の修復に関する新たな不平にもかかわらず、マドレーヌの教会にすべての特典を維持させました。たとえ、黙想者激励の説教の中で、マリア会の名を挙げられなかったにしても、シャミナード師はマリア会に対する大司教の好意に心から感謝し、対象になっていた自らと会員に対する軽視や非難を進んで受けるようにしました。

1836年、ボルドーに帰った創立者は、コングレガシオンの活動が再開されていたにもかかわらず、これが非難し続けられていることに気づきました。それは、彼らの活動が余り見栄えのしないことで非難されているということでした。人々は、「ずっと後に創立された修道会であるにもかかわらず、既にかなり普及し、発展途上にある他の修道会を見てください。リオンのマリスト会を見てください。彼らは幾つかの県で活動し、広範囲にわたって学校を設立している(12)」とわざわざいたからでした。創立者は、セント・マリー寄宿学校の跡を補うかのようにより市内に司祭マリスト会の導入に努力が払われていることを知りましたが、沈黙を守っていました。かえって、何らの利害も考えず、新任のドンネ大司教にミレール通りの建物の借用を、「(リオンのマリスト会は、私が実現出来なかった善を実現出来るに違いないことを考えて、本当に心から喜んでいきます(13)」と謙そんな言葉で申請しました。

いずれにしても、新任の大司教(14)は前任の大司教のように先入観は持っていませんでした。大司教は間もなく創立者とその活動を知るようになりました。ご存じの通り、大司教はナンシーからボルドーに赴任されてから、シオン・ヴォーデモン(15)にマリア会を導入するため努力を試みられました。また、フレッシュル師の後継者のバイヤル兄弟との交渉について創立者の力量を評価し、ドゥ・フォルベル・ジャンソン司教やその他の方々による創立者個人の評価やフランシュコンテ及びアルザスでの活動に関する適切な判断については既に承知されていました。大司教は、当初、創立者とは異なる意向で熱心に働いていましたが、このことには耐えられず、創立者と会員に好意を示すようになり、その活動の拡大を恐れるどころか、フランス南部にマリア会を普及するためにセン・ローランの修練院を出来るだけ早く再開するよう要請しました。大司教の希望はやがて満たされることになりました。このことについてはいずれ触れることになると思います。

いずれにしても、創立者は新たな刺激をコングレガシオンに与えました。その老齢と業務による負担にもかかわらず、王政復興当時の評議員会や集会を模範にして再組織した評議員会や集会を自ら出席することによってこれを刺激しました。その成功は期待するまでもありませんでした。もちろん、以前の繁栄とは比較になりませんでした。以前の活動の特徴や思い出をあかしして、その刷新をコングレガシオンにもたらしめました。往昔の習慣が再確立されましたが、マリア会の若手の司祭ルッセル師は、「熱誠と堅忍の委員会」の設立によって熱心を刺激していました。アントワン、フェイ、テシュエールやその他の先輩会員もこの活動に従事しました。

1839年から1840年にかけて、創立者の全活動は、他のすべてのコングレガ

シオンの母院であったボルドーのコングレガシオンの活動を含めて実り豊かなものでした。新しい開花がコングレガシオン内にもたらされたばかりでなく、ボルドー市に与えることに寄与した活動のリストに二つの新規の活動が加えられたからでした。それは、特にコングレガシオンのおかげで1840年の公式論文(16)で伝えられたように、結婚生活の更正(17)のためのセン・フランソワ・レジスの運動及び、セン・ヴェンセン・ドゥ・ポール会議(18)をボルドーに誘致することでした。セン・フランソワ・レジス運動の最初の全体集会は、1839年1月25日、大司教館に召集され、セン・ヴェンセン・ドゥ・ポール会議はセン・ポール教会が最初の発端を祝うことになって、同年の12月8日に開催されました。

当時、以前よりも不完全であったこれらの二つの事業の活動者のリストを確認することは出来ませんが、その活動の創始者の中にコングレガシオンに属する人がいたかどうか。しかし、両活動者の中心人物がコングレガニストであったことを確信しています。例えば、セン・ヴェンセン・ドゥ・ポール会議の最初の会計であったヴェジヤ氏、ルー氏兄弟、ラクラヴェリ氏、そして特に、両活動の創立に名を連ねていたアントワン・フレイ氏等がコングレガニストでした。セン・ヴェンセン・ドゥ・ポール会議の最初の会議の書記であり、セン・ポール教会の書記は、やがて、コングレガシオンの会長に就任しました。彼はセン・フランソワ・レジスの運動でも同じ役割を果たしました。そして、生涯の最後まで両活動に献身し、言わば、これらの活動、特にセン・フランソワ・レジス運動では30年以上もの間運動の中心人物になっていました。

創立者は、以前の活動も、現在の活動も至る所で神の祝福によって成功を収めていたので大変慰められ、両修道会が置かれている強固な基礎を出来る限り更に堅固にする望みしか持っていませんでした。まず、総本部を正常化しました。既に役職の期限が来ていたクルーゼ士の代わりに財務局長としてメメン士を交代させました。教育局長のポストは空席のままにしておきました。ララン師は既にその職を辞任していましたが、将来再度その職に復帰させる考えがあったように思われました。そして、しばしば総長評議員会を開催し、クルーゼ士の遠隔地を考慮して出来る限り定期的な開催に努力するよう要請しました。また、新たな熱意をもって財政状況の改善に努力し、最後に、修練院に関する詳細な指示を与えました。

創立者が両修道会から受け取ったすべての報告は、両修道会がすばらしい精神によって活気づけられていること、会則の正確な遵守と他のあらゆる善よりも創立者が喜ばれる会員間の一致が行き渡っているということを競って知らせたものでした。ロテア師は、「会員間に一致が浸透していることが感じられるのは何とうれしいことでしょう(19)」と創立者に書き送りました。『O quam

bonum et quam juncudum』(いかに快く、いかに楽しいことか)。創立者は、会員がこの一致を維持し強化することについて、キリストの愛する弟子ヨハネの言葉を想起させる言葉で会員を促し新年のあいさつの共通の返事として両修道会の修道者修道女に次のように書き送りました(20)。

「皆さんは、ただ一つの家族として、ただ一つの心、ただ一つの精神をもって兄弟、姉妹として愛し合わなければなりません。一致は力です。昔の人々によって理解されたこの真理は、キリスト教の中でしか完全に実現しません。それは、イエス・キリストのみがわたしたちの力と命だからです。皆さん、イエスと聖なるマリアのなかにおいてこそ一致は力なのです。どうぞ、老いたあなた方の父に一致し、わたしがあなた方を愛するようにわたしを愛してください。そして、マリアの誉れと皆さんの幸せのみを望むわたしの考えを理解するよう努めてください。どうぞ、信仰と皆さんの尊い使命の精神に成長するようにしてください。皆さん、これがわたしの新年のあいさつです。もちろん、あなた方はわたしがあなた方のためにのみ生きています。わたしが身命を使い果たしたのは皆さんのためでした。わたしの血によって選ばれた人々の至福を皆さんに保証することが出来れば何と幸いです。」

創立者は、「父から親愛の子供たちへの遺言として」会憲を両修道会に贈りました。会則の正確な解釈と同時に真の修道精神を確立し、保証するものとしてこの遺言書の完成に努力したのでした。また、両修道会で宣立された誓願、すなわち、清貧、貞潔、従順、堅忍、そして、信仰とキリスト教良俗の教授の誓願を取り扱ったすばらしい四つの回章を続いて公布したのもこの目的のためでした。

清貧に関する回章は(21)、創立者にもたらされた昔の修道会の崩壊に対する深い印象によるものでした。創立者は会員間にあらゆる堕落の原因である富と安逸が浸透しないように要請し、この点に関しては修道精神を弱め、団体の存在さえ危険にさらすものとしてのあらゆる規則の緩和を恐れていました。

従順と禁欲を要請し(22)、また、貞潔とその戦いを要請した(23)他の二つの回章は、より力強く、より教義的でした。

次に、堅忍の誓願とマリア会に固有の教育の誓願の解釈は年の大黙想会(24)の説教師への手紙の形で公表されました。これは、すべての修道会にとって多少とも共通である他の誓願の解釈より、会員にとっては重要でした。老齢の創立者は常に若い魂の息吹とマリアへの奉仕のために用いた生涯の深い確信をこれらの手紙に吹き込んでいました。そして、マリアへの奉仕に保留した役割を述べた時、その語調は最高に達していました。次に述べるのはこのすば

らしい手紙の何箇所かのくだりです。

「ご存じの通り、本会は、修道会の大家族の中であって、他の修道会とは本質的に区別される一つの家風を持っています。その特徴を詳述し、『文字』に関する点と『精神』に関する点を出来るだけ明確にしたいと思います。

どの時代にも教会を特徴付けたものは、尊いマリアの戦いと輝かしい勝利でした。御主がマリアと蛇の間に敵対関係を置かれて以来、マリアは絶えず世と地獄に勝利を収めてきました。教会は、すべての異端が至聖なる乙女の前に屈服し、マリアはそれらを徐々に沈黙させ、消滅させたとわたしたちに教えています。ところで、現代を風びしている大異端は宗教無関心で、これは人々の心を麻痺させ、利己主義と情欲の渦の中に向かわせようとするものです。この宗教無関心の底なしの井戸は真っ黒い悪臭の煙をもくもくと吐き出し、全地球を暗黒の暗闇で包み込もうと迫り、すべての善を枯渇させ、すべての悪をはびこらせ、言わば、正義の太陽の輝かしい光線を遮ろうとしています。こうして、キリスト教国では、信仰の聖なるたいまつのはきはきは薄れゆき、消え果てようとしています。ますますまれになった徳は、遂に陰を潜め、悪徳は猛然と荒れ狂っています。今や、わたしたちは全体的な脱落、事実上、ほとんど世界的な背教という預言された時期に到来しているようです。

現代についてのこの残念な、あるがままの描写は、わたしたちを決して落胆させるものではありません。マリアの力は衰えてはいないからです。わたしたちは、マリアが他のすべての異端同様、この異端に対しても勝利を得られることを確信しています。それは、マリアが今日でもかつてのように、卓越した婦人、蛇の頭を踏み砕くために約束されたあの婦人だからです。そして、マリアをこの偉大な名でしか呼ばれなかったイエス・キリストは、マリアがわたしたちの希望であり、喜びであり、教会の命であり、地獄の恐怖であることをわたしたちに教えられました。したがって、マリアには現代に対する偉大な勝利が保留されています。そして、わたしたちに迫る信仰のざ折からこの信仰を救う榮譽がマリアに託されています。ところで、わたしたちは天のこの考えが分かったので、マリアの命令に従って働き、その足下で戦うため、わたしたちの非力な奉仕をいそいそとマリアにささげることになりました。わたしたちはマリアの兵士、その助手として、そのみ旗の下に登録されました。また、堅忍の誓願という特別な誓願によって、地獄に対するマリアの崇高な戦いを全力を尽くして、命の続く限り手助けすることを約束しました。わたしたちはマリアのみ旗とみ名を頂き、マリアによって人々にその崇敬と神の国を広めるため、マリアがお呼びになるところにはいずこへでも飛び立つ用意が来ています。

これがわたしたち両修道会の固有の性格と家風です。すなわち、わたしたちは風俗の刷新、信仰の維持と増強、そして、その結果、隣人の聖化という偉大な事業に従事することによって至聖なる乙女マリアの特別な助手となり、道具となりました。マリアのほとんど無限の愛の活力と息吹の受託者であるわたしたちは、終生、マリアに忠実に奉仕すること、マリアに帰すべき力と命をその奉仕に役立てることが出来ることを幸せにし、マリアがおっしゃるすべてのことを忠実に実行することを誓いました。そして、そこにこそわたしたちの最も優れた理想があることを信じています。したがって、わたしたちは、他の修道会の会則を選び、これを受け入れる権利を請願によって固く自粛しています。」

更に、同じ訓令の中で、創立者は、会員が宣立していた教育の誓願について解釈し、次のように説明しました。

「様々な修道会の創立に対する聖なるみ摂理の導きをたたえてください。時代の様々な要求に常にそれぞれ適切にこたえる修道会の精神は救い主の次のみ言葉に要約されています。『Mandavit unicuique de proximo suo』(神は各人に隣人に対する任務を与えられた)。ある修道会は自己放棄やキリスト教的禁欲のすばらしい模範を世に示すことを唯一の使命にしました。最初の修道会はテバイドの砂漠に設立され、そこを揺籃の地としてそこから少しずつ世界に普及していきました。あなた方は皆、天使と人間にそのすばらしさを示した清貧と苦行の英雄者たちを知っています。他の修道会は遅れて創立され、敵によってまかれた毒麦を引き抜くことを目指し、同時に、それぞれの方法で自己放棄と苦行の働きを続けることを目指して様々な働き手を御父の畑に増加しました。

あらゆる時代、あらゆる環境で創立されたこれらの数多くの修道会の中で、ある修道会は特別の目的に、そして、他の修道会はその他の目的に召されているのです。ところで、他のすべての大修道会の最後に生まれたわたしたち、そして、今世紀の最大の異端に対するマリアの戦いを全力を尽くして助けるべく、マリア自身によって召されたと信ずるわたしたちは、会憲に宣言しているように、『何でも、あの人の言うとおりにしなさい』とカナの召使いたちにおっしゃったマリアのみ言葉を標語にしています。わたしたちに与えられた使命は、わたしたちの弱さにもかかわらず、熱誠と慈善のあらゆる事業を隣人に対して実施することであることを確信しています。したがって、わたしたちは、キリスト教良俗の教授という一般的な名目で、悪の感染から彼らを予防し、また、彼らをいやすためのあらゆる手段を講ずることを意図し、この精神によって、このことを特別な誓願の対象にしているのです。

それで、わたしたちの宣立する教育の誓願は、わたしたちにとっては他の修道会と共通のものであっても、マリア会とマリアの娘の会においては、他の修道会より広範囲にわたるものです。『この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください』とおっしゃったマリアのみ言葉の実現を目指すこの誓願は、あらゆる階層、あらゆる男女、あらゆる年齢、特に青少年及び貧者を対象にします。したがって、この誓願はこの同じ誓願を宣立する他のすべての修道会から真に本会を区別するものです。そして、わたしたちを『マリアの宣教師』になすものです。」

これらの四つの回章は、創立者の一種の最後の教訓の反映でした。「皆さん、子心の服従によって、わたしの消えゆくような、力のない言葉、ボン・ペールの言葉を受け入れてください。あなた方に対するわたしの愛情の遺言としてこれらの教訓を聞いてください」と心にふれる別れの言葉ともいえることを会員に伝えた時、これが最後の教訓になるような予感がしたのでした。

もちろん、創立者はその働きが終わったとは考えてはいませんでした。1839年には、ある手紙で、「もし、あなたが、わたしたちが計画した事業がわたしたちにもたらすこの種のぼう大な働きをさが存じでしたら。わたしは絶えず働いています。死が突然わたしに訪れる時もお働き終わっていないだろうと確信しています」と書き送ったほどでした(25)。1840年、この四大回章の最終回章には(26)、「時は過ぎ、年月は矢のように飛び去ります。わたしは皆さんの幸せのためにまだなすべきことがたくさん残っています」としたためていました。創立者は特に指導の手引きの起草とすべての施設の再度の総視察を望んでいました。しかし、み摂理は他のことを用意されていました。み摂理は創立者の外的活動の終わりを示していたのです。「皆さんの幸せのためになすべきことが残っている」という、残された活動を創立者は予見することも、人間的な知識で予感出来るものでもありませんでした。

創立者は80歳になりましたが、苦労をものともしませんでした。1835年、クルトフォンテーヌで創立者は、その年齢を笑いものにして、ベッドに置かれていた厚毛の毛布を断り、「あなた方が年取った時のために取って置きなさい」と繰り返し話していたということです。また、72歳になる叔父の老司祭と別れて来たとき創立者に話したいという会員の一人に、「彼はまだ若い」と繰り返しほほえんでいたということです。果たして、しばしばかかっていた頑固な風邪にもかかわらず、身体はかくしゃくとしており、1838年5月に、流行性インフルエンザがボルドー全市を襲い、死亡者が増大した時、マドレーヌの住人の中で創立者のみが流感にかかっていなかったということが分かりました。

しかし、身体が精力にあふれていたとはいえ、五感は次第に衰弱に向かっていた。視力や聴覚は低下し、記憶はより衰え、仕事はより苦しく、より遅くなりました。毎日増していく業務の重荷はその肩にのしかかり始めていました。この肩がこれまでのすべての業務の重荷を担い続けてきたからでした。

青春時代からほとんど一人で複雑で多くの事業を指導することに慣れていた創立者も、晩年になって、少なくとも、他の責任者とその負担を分かち合うことの必要性を感じていました。たとえ、そのことを望んでいたにしても、事は容易ではありませんでした。あらゆる所から新しい施設の創立の受諾を要請されても、いつも会員が不足していました。常に傍らにいた補佐のカイエ師のみがマドレーヌとミゼリコルドの事業に専念していました。クルーゼ士はボルドーにはまれにしか来ませんでした。セン・ルミ及び近隣の施設で大変多忙だったからでした。したがって、行政の気苦勞は創立者のみに負わされていました。

協力者によって支えられることを考えなかったわけではありませんでしたが、管理職を退く考えは一度ならず心に起きていました。後継者を得ること、業務を素早く行うこと、正式の管理部門を設立すること、潜心の内に引きこもり、よりまとまった、より賢明さをもって事業を導くため高所からこれを観察すること、このことが数年前から考えられ、1835年から親しい人々に打ち明けていた希望でした。

このことを明らかにすることは何らかの不安を引き起こすに違いありませんでした。修道会の基礎がまだ固まっていないように思われ、会員は極めて困難なこの遺産の相続者をシャミナード師の周辺に探していましたが、思う通りにはなりません。そこで、会員はマリア会とマリアの娘の会がローマによって認可される最良の日まで、少なくとも計画の実施を延期しないよう創立者に要請していました。次のくだりは1835年11月8日のカイエ師からの創立者への手紙の一節です。

「総長職を辞任したいとわたしに話すたびごとに、ご自分のご苦勞について話しておられます。しかし、わたしは、ボン・ペールが差し出して受け入れられる辞表を、言わば、マリア会がその揺籃の地において襲われた不幸として、また、近い将来の残念な崩壊の印と見なさざるを得ないように思われます。たとえ、創立者が会において、事業を開始したり継続するために、そして、生涯の最後の日までこれを指導する職務上の恩恵を無くされたにしても、ボン・ペール以外にだれがこれを担うことが出来るでしょうか。」

シャミナード師は、マリア会が決定的な後継者を見いださない限り、また、会憲が完成して承認されない限り、そして、ローマが公式文書によってマリア会

の創立を批准しない限り、この言葉を理解しこれに従うようにし、その職を辞任することは出来ませんでした。1837年の動乱はどんなに創立者の存在が不可欠であったかをあかししていました。

しかし、1840年にはすべての障害が取り除かれました。すなわち、会憲は公布されて遵守され、ローマはマリア会とマリアの娘の会をすばらしい賛辞をもって賞賛したところだったからでした。平和と一致が両修道会内に浸透し、外部においても事業の進展はあらゆる期待を越えたものでした。ところが、会員がこぞってすべての事業計画の実施を容易にするため創立者に協力していたその同じ時期に、今度は創立者自身をそこに巻き込むような不足の事件がぼつ発しました。

それは、表面的には余り重要でないように思われた財政の問題でした。オギュスト士の退会に便宜を計ったドゥ・シュヴルス大司教は、マリア会に対してオギュスト士が負っていた負債返済の義務について、そして、特に、オギュスト士がマリア会の共同体に入る前の、また、マリア会が彼のために精算した個人の負債のマリア会への返済義務について、彼を無罪放免にしました。シャミナード師は教会の長上の権限の決定には従わなければならない、そして、既にマリア会に負わせた多くの負債のために、しかも、市民法には余り適合しない負債返済のために有償の契約書への署名によってこれを保証しなければなりません。精算が直ちに行われる状況であれば問題はすべて決着していたはずでしたが、オギュスト士名義で契約した重い負債は徐々にしか軽減していくことが出来ませんでした。セント・マリー寄宿学校をレーラックに移転したランラン師は、直接寄宿学校に関係するこれらの負債をオギュスト士に委ねていました。ランラン師はすべての負債を返済しませんでした。1840年窮地に陥った時にはその返済を延期しなければなりません。利害関係者たちはオギュスト士に返済を迫り、オギュスト士はシャミナード師にこれを要請してきました。

債権者から返済を求められたマリア会は債務に関してはもっぱらランラン師に重要な責任を負わせていました。この状況は1833年の会計決算に注意するよう創立者の側近を促しました。カイエ師やクルーゼ士、その他の会員が負債の正確な返済期限を知った時、要するに、オギュスト士名義の残額の返済を終えるようボン・ペールに注意を促しました。オギュスト士は、1833年、会則によって合法的に認容されたものとして、債務が認められたものと考えていました。ところがこの債務契約は創立者個人の行為になっていました。総長評議会はこの事を批准するよう創立者に求めることも出来ず、その有効性も疑っていました。

評議員たちは、30年来シャミナード師と友情の深かった法律学者のラベ氏に意見を求めました。ラベ氏は問題を総合的に検討した結果、1833年の契約は時効になっていると判断し、オギュスト士の負債については、オギュスト士と共に負債返還の正常化を計ることをマリア会が責任を負うよう勧告しました。しかし、これには前提条件が課されました。それは、シャミナード師が総長を辞任するということでした。1833年の契約が調印された時、シャミナード師は個人的な署名を拒否出来ませんでした。したがって、この件に関する抗議は契約に無関係であった評議員か、後継総長か、他の異なる権限者によるしかありませんでした。こうして、シャミナード師の退任の問題が全然予期しない形で決着されることになりました。

総長補佐たちは1835年にしかこの偶然の出来事を同じ気持ちで検討することが出来ませんでした。彼らは創立者の退任を希望しないまま、その考えを了承しました。その後、マリア会は創立者の辞任によって重大な危機にさらされることがなかったので、十分評価されたように思われました。そこで、補佐たちは会憲の公布と両修道会のローマからの認可はその将来を保証したこと、したがって、マリア会は、より強固で、より継続的な、より活力のある指導を求めていると彼らは考えました。このことを隠しだてすることは不可能でした。また、当時の総本部には多くの不備が現れていました。会憲による統治は強力に中央集権化されていましたが、総本部は力不足のためあらゆる期待に応ずることが出来ませんでした。周知の通り、ボン・ペールの緩慢な動作は毎日募っていき、日常業務の規則的な遂行に障害を来していました。しかし、マリア会が業務の進ちょくが妨げられて残念な状況の中で苦しんでいた時でも、その発展は恵まれていました。これが、補佐たちが引き出した反省でした。一度その驚きから目覚めると、彼らは問題をより詳細に検討し、創立者自身についても打診しなければなりませんでした。

創立者の最初の反応は驚きの態度でした。総長職を辞任する考えには関心がなかったわけではありませんでした。こうした状況の中で伝えられた辞任の申し入れは、いずれにしても多少ともうばいせざるを得ませんでした。創立者はこうした状況以外でしたら喜んで辞任するに違いありませんでした。それは、新たな障害が生じたまさにその時、業務の指導を去らなければならないことを考えた不都合についていうのではなく、多分合法的な手段に同意しながらも、確かに手遅れ過ぎたために落ち込むのを感じたからでした。個人的には既に過ぎ去った契約を取り消す考えではなく、むしろ、約束を守ることを好んだからでした。

いずれにしても、創立者は自らの権限の限界を超えることを恐れていたので、

ただ一瞬ちゅうちょしましたが、人々の善意に従って評議会員の意向に自らの判断を委ね、評議会の意見に従う用意があることを明らかにしました。その上、今明日中に辞任すること、辞任は自分にとって余り大切なことではないことも表明しました。創立者が大変必要を感じていたのはマリア会に指導の手引き書があるということでした。辞任後はその作成に余暇が利用出来るのを幸せに思っていました。オギュスト士との間で意見の衝突が生じた不幸な状況については気にかけていませんでした。創立者は従順の価値を十分理解していたし、その謙そんはこの問題からもたらされた様々のことで傷つけられた自尊心を補って余りありませんでした。

創立者は若いルッセル師に教育局長の資格を与えて評議員会を完全なものにしました。ルッセル師は2年前から既にその職を果たしていました。また、1841年1月7日、クルーゼ士をボルドーに呼び、彼が到着したその日、最初の評議員会を開催し、そこで重要な問題が討議されました。創立者は、たとえ、自らの責任ではないにしてもオギュスト士になした約束は取り消すことはないこと、退任を有効に利用したいこと、評議員会の決定には従うことを表明しました。評議員会は満場一致で総長の辞任を決定しました。創立者は賢明に行動したのでしょうか。あるいはむしろ、創立者を導いた賢明さは余りにも近視眼的な賢明さではなかったのではないのでしょうか。このことは、わたしたちをこのように思わせるように仕向けた事件のように思われました。いずれにしても、創立者の意向は確かに純粋で、健全でした。良心の光にのみ従い、自らが代表していたマリア会の利益のままに働くことしか考えていなかったからでした。

創立者は会員の決定に異議を唱えませんでした。彼らの中の一人は、数日後、「ボン・ペールは他の多くの事柄におけるように、こうした状況の中でもすばらしい方でした(27)」と述懐することが出来ました。創立者はその翌日正式に辞表を提出することにしました。そして、1841年1月8日、決定的な評議員会が開催されました。「わたしの辞任は純粋で正直でしょうか」との創立者の問いに、「純粋で、正直です」の答えが返ってきました。創立者がこのように話されたのは、自らの行為を反省して、補佐に許しを願うためでした。創立者はやがて、純粋で正直な辞表を自らの手でしたため、これに署名して平静に動揺することなく評議員に渡しました。

創立者はこの重大な出来事を自ら会員に通知しました(28)。しかし、総長職辞任については一言も触れませんでした。それは、会員が皆出来る限りオギュスト士とのいさかいには触れないよう合意していたからでした。したがって、会員は会の中で意見の聴取を準備してこの過度期に備えることを望んでいました。会員はボン・ペールと直接対話することに大変慣れていたので、ボン・ペ

ールがこのような大きな出来事のために総長職を辞任することのないように丁寧をお願いしました。そこで、創立者は、たとえマリア会を指導する配慮を全面的に補佐に一任したとはいえ、長い経験によって、評議員会を援助する用意が出来ていることを会員に伝えて会員を安心させました。そして、使徒たちが宣教に関する普段の活動の重荷を下ろすため、そして、自由に祈りに従事出来るため、協力者を作ったといわれる聖書のくだりを想起させました。創立者は総長職辞任の撤回のないことを大司教に知らせてあったので、大司教との間に何らかの配慮をなす必要はありませんでした。

1月8日の評議員会の後、評議員は本会の将来への調整に専念するようには見えませんでした。評議員は解決の機会が与えられたこの事件をまず解決しなければならないと考えました。しかし、「現状」は補佐にとって気に入らないものでもありませんでした。それは、第一に、行政機構の立派な運用を保障する主導権が十分残されていたからでした。他方、補佐たちは創立者に尽くすべき尊敬を守っており、困難な事態が生じた場合には創立者の援助が約束されていたからでした。このように補佐たちのすべての要求は満足させられていました。

こうした状況下で、会憲はまずまず遵守されていました。総長の純粹で正直な辞任の場合には、「早急に」新総長に選出のため総会を召集することが会憲に規定されていたからでした。そして、「状況の許す限り早急に」総会を召集しなければならないということが記載されていたことも確かでした。しかし、未解決の問題の解決前の状況では、総会の召集は出来ないのではないかと考えていました。問題の解決が長期に及ぶ可能性のあることをだれも予測せず、最も悲観主義者たちさえ、その解決がまる3年に及ぶことをあえて認めることが出来なかったのではないのでしょうか。



注

- (1) 1838年11月25日、レオン・メイエ師へ
- (2) 1839年8月8日、ペッコデン師へ
- (3) 1840年7月25日
- (4) 1839年9月10日、レオン・メイエ師へ
- (5) クルトフォンテーヌの召命の中には、アーセ大修道院のバルドゥネ師の助手の若い司祭で、数年前からマリア会への入会の許可をドゥ・シャモン司教から要請されていたこの召命を指摘しなければなりません。この司祭はジュール・セザール・ペッコデン師で、

創立者が自ら師に召命の精神を養成する指導をしました。師は長年月にわたって、ボルドーのマドレーヌの事業を指導し、1900年8月26日、94歳で帰天しました。

(6) 1837年11月29日

(7) ヘブライ書、12-15

(8) クレラック(ロッセ・ガロンヌ県)の出身で、セン・ピエール・ドゥ・モン(ジロンド県)の主任司祭として帰天したレストラド師の証言。この学校は今日なお存続しています。ビドン士は1841年まで指導し、ボルドーのボン・ペールの下に帰りました。ビドン士は聖人のような評判で、1854年2月24日に帰天しました。

(9) ジャック・マリー・アディリアン・セゼール・マティエウ大司教は1796年にパリに生まれ、1828年お叙階後7月革命までコングレガシオンを指導しました。1832年にラングルの司教に着任しましたが、次の年にブザンソンの大司教座に転任されました。優れた才能で教区を管理しました。1850年に枢機卿に昇進し、ヴァチカン公会議の時には教皇無謬権宣言の反対側に位置していましたが、最も明確で最も教訓的な言葉で教義の宣言に同意しました。大司教は1875年7月9日帰天しました。大司教は1867年教皇特派視察員として目立った奉仕をマリア会に致されました。ニームのボツソン司教著、「大司教伝」、2巻。プレイ及びルトー出版、1882年、パリ

(10) 1839年8月8日、ペッコデン師へ

(11) 1834年12月10日、シャミナード師へ

(12) これらの言葉は、1838年7月13日にカイエ師からシャミナード師への手紙の中に記入された、ドンネ大司教とカイエ師の談話によるものです。

(13) 1838年8月14日、ドンネ大司教へ。マリスタ司祭会はヴェルドレの巡礼しか受け入れませんでした。

(14) フェルディナン・フランソワ・オギュスト・ドンネ大司教は、1795年11月16日にブル・アルジャンタル(ロワール県)に生まれ、ツール教区の信徒の指導に優れ、出身教区のリオンに呼ばれ、ヴィルフランシュの主任司祭に任命されました。次に、ナンシーのドゥ・フォルベン・ジャンソン司教の補佐司教になり(1835年)、1836年11月30日、ボルドーの大司教になりました。その生涯は、その名を止めた多くの慈善事業や芸術関係の事業によって当時の司教団の中で最も優れた司教の一人でした。1852年に枢機卿になり、1882年に帰天しました。

(15) 496ページ参照

(16) シャミナード師によって署名されたこの論文には1840年12月14日の日付で、「セン・ヴェンセン・ドゥ・ポール及びセン・フランソワ・レジスの事業は、マドレーヌから出て、その主要メンバーもマドレーヌに負っています。」と述べられていました。この論文はセント・ユラリ教会の修復についての新たな非難の機会になりました。シャミナード師は和解のために自ら譲歩することを申し出、出来れば和解の仲介をドンネ大司教に依頼しました。そして次のように書き送りました。

「多くの敬けんな人を悲しませることを考えるより、むしろ、和解に同意したいと思います。わたしたちを争わせたセント・ユラリ教会の修復工事はもう40年にもなります。これ以上争うことなく和解の時だと思えます。」

(17)1825年、ゴッセン師によってパリに創立され、1828年教会によって認可されました。

(18)1833年、パリの数名の青年によってパリに創立されました。その中で一番知られている人はオザナン氏です。

(19) 1839年12月25日

(20) 1840年1月12日

(21) 1840年3月20日

(22) 1840年5月12日

(23) 1840年6月8日

(24) 1839年8月24日

(25) 1839年6月21日、ルアンの善き牧者の修道会のアンジョルラン院長へ

(26) 1840年六月4日、貞潔に関する回章

(27) 1841年1月21日、クルーゼ士からシュヴォー師へ

(28) 1841年1月9日の回章



第 38 章 創立者の晩年、病気と帰天 (1841—1850)

創立者の業務と計画 ❖ レアルモンの創立 ❖ セン・ローラン修練院の再開 ❖ 創立者と修練者 ❖ 修練院のセン・ターヌへの移転 ❖ 病弱と良心の不安 ❖ 補佐の当惑 ❖ 司教の勧め ❖ ローマへの上訴 ❖ 聖座の回答 ❖ 1845年の総会、カイエ師の総長選出 ❖ 良心の不安 ❖ 祈りと犠牲の精神 ❖ 脳卒中 ❖ 帰天 ❖ 葬儀 ❖ 墓地。

創立者がこのようにマリア会の指導から好意的に身を引かれた時、80歳に達していました。しかし、人間的な活動から見る限りまだかくしゃくたるものでした。天からの呼びかけに素直であった創立者はみ摂理のあらゆる計画に専念してきました。み摂理の道具だったからでした。たとえ、活動に伴う反対が、活動の成功、と同時に、教会の最高権限の公式認可によってもたらされたものと判断しても、その活動はみ摂理に受け入れられていたものでした。したがって、創立者は合法的な休息の権利があったわけです。

いずれにしても、創立者の望みは、その年齢で、幾多の労苦の後にももかかわらず休息ではありあませんでした。この世での休息を期待してはいませんでした。もし、神がその寿命を延ばしてくださるなら、自らの聖化ばかりでなく、会員の幸せのため最後の一息までささげることを決心していました。そこで、「わたしがまだ役にたつなら、この世でのわたしの琉たくの生活を服従と喜びをもって耐えていきたいと思えます」と書き送りました(1)。果たして、創立者に残された最後の9年間は実り豊かな年月でした。特に、疲れを知らない活動の連続であった創立当初の3年間、そして、モラル上での殉教とも言える最後の6年間は、あらゆる人間的な活動より評価される効果的な活動でした。

総長職辞任後、創立者は引退ともいべき隠れた生活で、自らの活動によって実現した事業の発展を手助けすること、また、新しい境遇と自らの力が許す限りこれに協力出来ることを喜びました。創立者はいつもの謙そんと質朴さで補佐の前から完全に退き、権限の実施と責任を事実上彼らに委任するよう配慮しました。もちろん、自らの協力が補佐への奉仕以上であること、そして、マリア会との関係で自らの協力無しでは済まされないということに余り慣れていなかった補佐たちにはその協力の必要性が分かっていたので、父性愛の命ずる熱意で彼を援助し、彼らの意向に従って自由な協力を申し出ました。公式にはいずこにも姿を見せなくなりましたが、実際には、創立者無しには何も行わ

れませんでした。創立者は重要な評議員会には出席し、今まで通り、会に最も影響力のある会員と連絡をとり、最も困難な交渉は一般に補佐によって委任されることも分かっていました。責任を退いて引退の生活に恵まれた創立者は継続実施すべき善である限りすべての要請に同意しました。

創立者の心身の力は保たれ、クルーゼ士の言によれば(2)、「ボン・ペールは1834年よりも健康で、少なくとも、同じように頭の回転は敏感です。」健康状態が満足であったので、1841年からでも、マリア会、マリアの娘の会、そして、在俗修道女会等の新たな総合視察を計画する考えさえ浮かんでいました。それは、すべての共同体で熱心を促進し、聖なる召命の精神にますます忠実になっていた修道者や修道女に会う慰めを得るためでした。セン・ルミにはより長く滞在すること、多分、そこに視察の本拠地を置くことさえ決めていたのかも知れません。

しかし、この計画は1841年にも、1842年にも実現されませんでした。様々な理由から、創立者が、「上流地方」、と呼んでいた地域のいつもの巡回しか出来なかったからでした。在俗修道女会の長足の進歩のためには創立者のプレゼンスが必要だったのです。わたしたちに想起されるのは、創立者の威厳のある風采によるばかりでなく、なお、その年齢と徳によって、明るく、魅力的な優しさに品位が特徴付けられた風ぼうによってすべての人に尊敬の念を起こさせながら、現役活動の最良の日のように、業務に悩まされた80歳には見えない軽快なスータン姿で、最後に創立されたオーシュの在俗修道女会への旅行でした。

この旅行は創立者がボルドーを不在にした最後の旅行になりました(3)。しかし、北部地方視察の最初の計画はあきらめていませんでした。したがって、1843年末にエベルマンステルの共同体の院長レオン・メイエ師に次のように書き送っていました。

「わたしは本会のすべての施設の総合視察をなしたい気持ちでいます。この視察にはマリアの娘の会とマリアの娘の会の在俗修道女会の幾つかの主要な施設も含めたいと考えています。わたしは、ある用件のためボルドーに引き留められていなかったら、この旅行は昨年実施していたに違いありません。この遅れは当然神のみ旨であったと思っています。マリア会は様々な動揺を感じているにもかかわらず、常により深い根を張っているように思われます。わたしたちはあらしの海を航海していますが、わたしたちを導く海の星の聖母に常に目をそそいでいるなら、すべての暗礁を避けることが出来るに違いありません。『*Respice stellam, voca Mariam*』(星を眺め、マリアを呼びなさい)。」

創立者が評議員会に足止めされていた用件で最も重要なものは、新しい施設の創立の件でした。こうした新規の創立は日々増加していたからでした。セン・ローランの修練院を失うことになった賃貸契約は、1841年末期に期限切れになっていたのです。直ちに修練院を再建しなければならなかったのも、この件はドンネ大司教にも明確に申し入れていました。このことは、南部フランスにおける一連の創立の合図になりました。アルビ教区での最も重要なリアルモンの施設は直接創立者によって交渉されたものでした。

数年前から、創立者はこの教区へのマリア会の導入が要請されていました。ドゥ・ガリ司教の司教総代理は、外でもない、セン・ルミ及びクルトフォンテンヌの師範学校の設立を心から援助したカルメル師その人でした。カルメル師は1837年にアルビ教区に、政府の公立学校の存在にもかかわらず、同様の師範学校の開校を創立者に要請していました。創立者はこの要請にこたえることが出来なかったのも、ドゥ・ガリ司教はドゥ・ラ・マンネ師の修道者に照会し、リアルモンで創立者に提供することになっていた建物をこの修道者のグループに提供しました。しかし、この修道会は旧ブルターニュ州にしか政府の認可を受けていなかったのも、修道者は退去せざるを得ませんでした。そこで、その長上であったデーセ師とアルビのドゥ・ジェルファニオン新大司教(4)は共々、リアルモンの施設を引き受けるようシャミナード師に要請してきました。ドゥ・ジェルファン大司教はセン・ディエの司教であったころシャミナード師とその事業に対して正直に感歎の意を示し、その教区にマリア会を招致したのでした(5)。

創立者はこの緊急な要請を逃れることは出来ませんでした。そこで、1843年末、このリアルモンの建物を取得しました。ところが、そこには修道生活を意図する希望者のかなり多くの若者が集っていました。また、すっかり整った養成施設もあったのも早速数名の修練者をセンターヌの修練院に送ることが出来ました。創立者はそこに師範学校の設立を考えていました。この種の事業を熱望していたのも、同じころ、ボルドー市内にさえ、師範学校の設立をドンネ大司教と交渉していたほどでした。この件では、実習校の名目でリアルモンの学校を取得するという一部しかその計画を実現することが出来ませんでした。しかし、この創立は成功し、マリア会にとってはこの地域の召命の温床になり、発展の中心になりました。

創立者はアルザス、フランシュコンテ、スイスに増加した創立に関心を示していました。これらの北部地域は創立者の主要な通信地域でさえありました。いづれにしても、創立者の通信は問題の悩みからの解放、特に、敬けんな信心に満ちた霊的指導になることを目指していました。そして、心のひらめきのまま自由に筆をはしらせ、修道生活に、また、御主とのより完全な一致に、そして、

マリアへの絶対的信頼への激励を繰り返していました。このことは自分自身の心を完全にする聖化の働きのようなものでした。

真の修道精神を会員に成熟させる配慮はそれぞれの養成施設に特別な注意を払うよう目指したものでした。辞任後1箇月たつたない内に、志願者の受け入れを調整するため、セン・ルミとクルトフォンテン及びエベルマンステルの3養成センターあての回章を署名のないまま発送することを考えました。極めて優れた規則を提示しましたが、それは数年後、「ローマ聖座」の教令によってすべての修道会に注意が指摘されることになっていた規則と同じでした。

同じく1841年末にセン・ローランに修練院が再開された時、創立者は細心の注意を払ってこれを援助し、ここに、あらゆる点で修練者に模範を示すことが出来る修道者のみを配置しました。まず、厳格で美しい心の持ち主、謙そんにおいて、自らを愛させる術においてだれも傷つけないミショー士、当時の修練者の一人が(6)、「謙そん深く、いつも気持ち安定し、65歳(7)とは思えない素早い従順、神との対話を決して中断しないと言われたほど絶え間ない祈りの生活にあった人」と語ったビドン士、そして、聖体の前で夜を明かしていたアジャンの共同体の最初の院長であったロジェ士でした。

修練者たちが何よりも喜んだのは創立者自身の身近な存在でした。最初の修練院院長であったショベン師は1週間たつたない内にたまたま帰天してしまいました。そこで、ルッセル師がその代わりを努めました。修練院院長の義務を果たす余裕は全然ありませんでした。創立者は修練者たちのために修練長の代わりを申し出ました。心身の最後の力を若い修練者のためにささげること、そして、乙女マリアの宣教のために生涯の最後を準備することを感じて喜びを隠しきれませんでした。最初は、修練者とは日曜日を過ごすだけでしたが、1週間の間には時々姿を見せるようになりました。そして、次第にこの平和で敬けんな滞在を好むようになり、修練院のあるセン・ローランとボルドー間を往来するようになりましたが、セン・ローランに最良の時間を割き、最後には、マドレーヌには水曜日と木曜日の評議員会に出席する以外は行かなくなりました。

創立者は1週間に2回、修練者たちを自分の小さな個室に集め、信心の事柄について彼らに話しました。その教話は若い彼らの心に消し難い印象を刻み込みました。教話の出発点はいつも信仰とマリアへの献身で、それは段々「膨らんで」いきました。創立者の表現によれば、「CredoとMagnificat」を中心に膨らんでいきました。

確かに同じ考えを度々繰り返しましたが、その確信のアクセント、信心への

熱情は、深い、そして、忘れ難い印象を与え、全力で努力した禁欲の模範によって増していきました。修練者の一人は次のように述懐しました(8)。

「教話の間、ボン・ペールは両手を机の上に置き、レコツレ修道者のものであった十字架像を眺め、足は少しも動かさず、まるで銅像のようでした。頭や顔にアブが止まっても全然これを払いのけようとはせず、顔を刺され傷つけられるままにしていました。」

その上、こうした教話以外の場合でも、その表情は深い尊敬の念を抱かせ、当時のある修練者の一人は、「ボン・ペールは威厳のある容姿で、背は高く、長い白髪が整った顔を囲んでいました。鷹揚な態度で、極めていんぎんな雰囲気でした。わたしがこれまで会ったことのない威厳のある老人の一人でした(9)。」創立者のいんぎんな優しさはすべての人を惹き付け、年齢による体力の衰えや、その動作の緩慢さにもかかわらず、かえって、抵抗出来ない魅力で惹き付けられるのを感じさせる熱情的な性格を失っていなかったからでした。そして、こうした性格を利用して、修練者たちにより高度の徳を静かに修得させるために、修道的完徳の最高の言葉でも話すかのように自己放棄と禁欲への愛を教えたのでした(10)。

創立者は共同の生活をしていましたが、確かなのは、動作の緩慢なためか、極めて質素な共同の台所からでしたが、食事は別にしていたということでした。貧しく古びた衣服を着けていました。小さな部屋に住んでいましたが、「その部屋は、とても貧しく、しかし、清潔で(11)、小さなベッド、何脚かのわら張りのいす、古い肘掛けいす、年代ものの机、2,3枚の信心画、十字架像付の聖水入れ等しかありませんでした(12)。」以上がその個室の全備品目録でした。

この貧しさはセン・ローランでも例外ではありませんでした。この点に関して、1841年の修練院は1821年の修練院を忠実に再現していました。善意は変わらなかったのです。そして、すばらしいことは、創立当初の修練者に感じられたものとほとんど同じ表現、同じ考えがこの第2期の修練者の音信に見いだされたことです。この当時の修練者の一人は次のように述懐しました(13)。

「わたしたちにはたくさんの物が不足していました。しかし、年輩の人も若い人も朗らかな気持ち、善意に満たされていました。」そして、当時の印象を、「セン・ローランでも生活はおだやかに、敬けんに送られ、だれも規則をゆるがせにせず、朝の聖務にも、日中の聖務にも遅れれるものはだれもいませんでした。そして、しばしば聖体拝領を致しました…。過ちがあったにしてもそれはわずかでした。毎金曜日の自白譴責は月の自白譴責より負担を感じました。したがって、長上の配慮はわたしたちの良心がためらわれないように寛大な優し

さで導くことでした。」このことは創立者の手によって刻み込まれたセン・ローランの修練院の姿でした。創立者は晩年になってマリア会創立当初の懐かしい感動をここに復活させていたからでした。

1843年、この地上の小さな天国はより整備された地所に移転されました。そこはセン・ジュネスへの途中で、ボルドーにより近い位置にあって、昔そこにあった小聖堂名で、セン・ターヌと呼ばれた所でした。ぼだい樹やくましでの並木道がすがすがしい環境にしていました。建物は、移転したセン・ローランの貧しい建物に比べて豪華に見えました。創立者には一階のすばらしい部屋の一室が用意されました。しかし、余り豪華過ぎると思われたので容易にその部屋に落ち着こうとはしませんでした。すべての部屋が割り当て済みであることを伝えた後でしか創立者を承諾させることが出来ませんでした。

チャペルは応急に間に合わされ、絵画の才にある程度恵まれた修道者によって装飾されました。創立者は聖ウルベンの銘があったカタコンブの聖骸をランブリュッシニ枢機卿から頂いていたので、この聖遺物にふさわしい遺物箱を祭壇の下に準備し、1843年9月初旬、多分、マリア会の保護の祝日であるマリアのみ名の祝日当日に、最も荘厳にこの聖遺物の安置を行いました。ドンネ大司教ご自身で式典を司式され、創立者とは極めて懇意で、当時ボルドー滞在中の、ボーヴェンのジヌー司教とナンシーのドゥ・フォルベン・ジャンソン司教(14)の二人の司教も出席されました。ジヌー司教は、創立者の最も親しい弟子の一人で、ドゥ・フォルベン・ジャンソン司教は長い間の友人で、マリア会をナンシー教区に誘致するよう努力された司教でしたが、長い間の宣教活動に疲れ、内心引退を訴えておられるようでしたが(15)、その翌年豊かな人生を終わられることになりました。

この式典は創立者が心から喜んで静かに出席された最後の式典になりました。数箇月後、苦しみのとばりが創立者と会員の上に広がり、その帰天まで覆いかぶさることになるからでした。創立者は会員の一人に次のように書き送っていました(16)。

「み摂理の一般的なおぼし召しによれば、神の大きな事業の創立者や共同創立者は大変苦しまなければならないことを理解してください。そして、これらの人々の汗と神の前での敬けんな嘆きは、彼らがまいた種を芽生えさせなければならない露のようなものです。『euntes ibant et flebant』(泣きながら出ていった人は...) (詩編、126-6)」

創立者は生涯の長い過程において、み摂理の定めを確かめていました。その豊かな晩年でも苦しい経験を繰り返さなければならず、言語に絶する苦悩

の6年後、神から召された宣教を中止し、同時に自らの聖化を完成しなければならなかったからでした。

宣教活動がその限界を超えたように思われてもこれに専念した幾人かの神のしもべは、その極端な苦悩と屈辱が知られています。例えば、十字架の聖ヨハネ、聖ヨゼフ・カラザン、聖アルフォンソ・ドゥ・リゴリはそのきわだった模範です。シャミナード師の時代にはその宣教活動が最も関連した類似の二人は、その晩年に同様の試練を神から与えられました。パリのコングレガシオンの創立者デルピュイ師はナポレオンの命令によってコングレガシオンが廃止されたことによってばかりでなく、なお、その能力の衰えによって晩年には暗い思いをされたとのこと。その伝記者の一人は、「師の頭の働きは弱くなり、段々衰えていきました」と伝えました(17)。

シャミナード師と親交の厚かったローザン師も当時同様の境遇にありました。その伝記はどのように伝えられたのでしょうか(18)。聖書の、「人生の年月は70年ほどのものです。健やかな人が80年を数えても、得るところは労苦と災いにすぎません(19)。」(詩編、90-10) 更に続けて、

「神はそのしもべたちに地上に長く生き残り、信仰の不滅の火が神の光によって輝き続けることを許されますが、知識の輝きは、五感が疲れ身体が衰えるにしたがって衰弱していきます。このことはローザン師にも訪れました。その晩年、師は業務の管理には少しずつ適しないようになりました。一般に気づかれるように、このような状況では、評議員に対して、より不信感を抱くようになり、自分の権限により恋々とするようになっていきました。」

このことは一部シャミナード師にも該当しました。偶然の一致がこれほど似通った生涯の二人の間に起きたことは決して特異の類似性の一つではないようです(20)。

果たして、シャミナード師もローザン師のように自らの意志を頑固に通し始める時期に達していました。その上、生まれつきの動作の緩慢さが年齢によってますます緩慢になっていました。1825年には、既に、会員が迅速で断固とした回答を待っていた時、その長い話しにがまん出来なくなっていたほどでした。そして、1843年には、この緩慢さは限界を超えていました。ミサをささげるのにまる1時間かかっていたからでした。視力も段々衰え、手紙も思うままに書くのが困難になるのを感じるようになり、やがて署名さえ出来なくなりました。聴覚もやはり難聴になりました。

そして最後に最も気がかりな幻想が現れました。良心が気がかりの対象にな

っていたのです。一種の細心によって強く動かされていたのです。単に軽い義務、そして、しばしば疑わしい義務であっても緊急の義務と思い違いしていたからです。こうして幻想は数年間の内に段々頻繁に起こっていたのですが、少なくとも用心していませんでした。ただ、その幻想は弱く、一時的なものでミサの前の念とうの間には一般に消えていました。

年齢の結果であったこの障害は毎日自然に現れるようになっていきました。よくあることと言われます。1844年から、この障害はこの尊敬すべき老創立者にも避けられず、ほとんどこの幻想に悩まされないことが無くなっていきました。このことはまた、身体の苦しみより何倍も苦しい継続的な精神の苦悩の原因になっていました。ただ、6年後しか頂上に達しないはずのカルワリオの坂をゆっくり登っていったのです。そして、このカルワリオの坂に伴っていたのはマリア会全体であり、特に、心配のあかしであり、犠牲であった補佐たちでした。

重なる試練は創立者にも会員にも手心を加えませんでした。しかし、創立者の信仰がこれほど強く、不動のものとして現れたこともありませんでした。補佐たちからの受け入れ難い決定、様々な形の束縛と要請、圧力、譲歩への懇願等に対して、創立者は反対したので、彼らは何も得ることはなく、すべてを失いました。いずれにしても創立者は最後まで反対しました。良心の要請を確信していたからでした。創立者が、覚悟は出来ているとはっきり述べられたのは、「断頭台に上る覚悟は出来ている」、これは恐怖時代の特徴的な表現でしたが、むしろ、「良心の叫び」には満足していないのだが、覚悟は出来ている、と言いたかったのではないのでしょうか。五官の衰えによって良心が狂わされていても、また、幻想的な義務に強制されても問題ではなく、良心の声に対して素直になり、その声を聞かなければならないと考えていたのです。いずれにしても、すべての犠牲に値する英雄であり、信仰と神のおきての最も小さな命令にも忠実であった生涯をふさわしく飾っていたのでした。また、人間的な全能力が不足したにしても、生涯にわたって見いだした十字架の下以外には力と忍従を外に探しませんでした。ある日、創立者は苦しい声で、「確かにわたしは十字架の下で、十字架を眺めました。そこで、多くの力を得、その力の中に幾らかの慰めを見いだしました(21)」と述懐しました。創立者は6年間、このように歩まれました。このことから、これを最後のあがきと誇張しても、心の殉教は体の殉教より苦しかったに違いないと考えることが出来るのではないのでしょうか。

創立者の病気は確かなものでしたので、総長辞任の決定的な原因であったオギュスト士の問題に関するラヴェズ氏の仲裁裁定の翌日に明らかになりました。問題仲裁の依頼人として一致して選ばれたラヴェズ氏は熟考の末、当初の意見を変更してオギュスト士の主張を認めました。しかし、ラヴェズが置か

れていた純粹に法的見地にたてば、このような結論を出すことは出来なかつたはずでした。補佐たちはこの問題に飛びついたことが間違っていたということが分かっていました。その上、この問題は法廷での論争が行われなかつたにしても、無罪を宣告されなければならず、マリア会に責任を負わせるという他の結論を下すべきではなかつたのです。

当時また、数年前のある用件に関する類似の心配が創立者にもたらされてきました。それは、創立者の通信にその痕跡が見られるものの、それは一時的なものに過ぎませんでした。今回は、その不安が総長職の辞任の対象になっていました。補佐たちは創立者に対して明らかに過ちを犯したのです。創立者は自らの辞任に関して、補佐たちの提案に従うべきであるかどうかちゅうちよしていたことを思い出し、遂に辞任したことがよかつたかどうか自問しました。この疑問は段々心に浸透し一つの確信にさえなりました。それは、み摂理によって託されたこれらの会員を放棄して辞任すべきではなく、また、辞任することが出来なかつたはずだつたということ、また、会員を他の人に委ねないこと、十分認識した上でなければ会員を委ねてはならないことが良心の義務であること、マリア会の統治を少なくとも一時的に取り戻し、創立者の犯すべからざる義務と権利を実行し続けなければならないという確信でした。

この考えはまじめな論争を招きかねないほどその心に浸透していました。補佐たちは総本部の状況を正常化する時期が来ていると考え、しかも、創立者の考え方を正確に理解出来ず、総会の召集を提案しました。しかし、創立者はこれに反対しました。そこで、補佐たちはより深刻に途方にくれることになりました。彼らは子心の愛をもって創立者の望みをかなえ、これまでのすべての権限を返還することを約束しましたが、創立者に完全な辞任をもたらした財政問題に関して行われた仲介の不調、創立者の視覚、聴覚、動作の緩慢さ、そして、その心が犠牲になった妄想等の五官の状況が補佐たちを納得させられなかつたのです。彼らはマリア会の責任者であり、その指導を委託されていたからでした。彼らは自分たちの責任を守りながら、創立者を満足させるための様々な手段を申し出ましたが成功しませんでした。彼らは創立者の要請事項の本当の理由を見失っていたし、あるいはむしろ、そのことに気づいていたにしても(22)、創立者の聖性、同時にその賢明さ、判断力を深く尊敬することに慣れ過ぎて創立者の考えを不当に遠ざけていたからでした。彼らはすべての試みが失敗したので、こうした苦しい状況に関してドンネ大司教に指導を求めました。

大司教は、マリア会に心からの献身していたことを承知していたブザンソンやアルビーの司教方にも相談されたので、三人の司教はローマの法廷に問題

を提訴することで合意しました。創立者は教会の最高権が施行された場合、それがどのようなものであれ、その決定を受け入れるのにやぶさかではありませんでした。また、会員も納得するに違いありませんでした。(1844年10月)

いずれにしても、数名の会員は争いの事情をよく承知していました。良心の命令に従ってのみ行動していたと思っていた創立者は、オギュスト士や補佐たちの間にあった不一致を隠してはしませんでした。しかし、このことが少しでも続けばマリア会の分裂や崩壊の原因となる動揺や混乱が生ずるに違いありませんでした。しかし、ローマの決定は遅く、決定がくだされる前8箇月が過ぎました。この8箇月間は、本会の宣教活動に関心のあったすべての会員、司教方、そして補佐たちにとっては厳しい試練でした。特に、補佐たちは、創立者に抱いていた愛情と負わされた任務に対する義務をどのように調和するか知らなかったからでした。それは、自分たちの辞任を大司教の手に委ねたいと思うほど苦しい試練でした。この解決法は悪いというより最悪でした。大司教がこれを拒否したからでした。彼らは苦しみのさかずきを最後まで飲みほすことを強制されたのです。後ほど、カイエ師は、「わたしは、創立者の人格に対して本当に親しみを感じていました。したがって、わたしが自分の心の中で、自ら受けなければならないすべての苦しみを感しながら、ボン・ペールと仲違いをしているという苦しみ以上の苦しみを感したことはありませんでした」と告白しました。このことは、カイエ師が受けなければならない激しい試練でした。カイエ師は自ら苦しんでいたばかりでなく、会員全体を苦しめていたからでした。したがって、後悔せずにはいられず、この苦しみを最後にするよう神に祈らなければならなかったのです。

創立者はカイエ師よりももっと悲しんでいました。マリア会がまたしても「サタンのふるい(23)」にさらされたとの考えは、創立者を悲しみに沈めたからでした。しかし、マリアへの信頼は揺るがず、これらの試練の深い意義を洞察して、「わたしは神のみ旨をたたえています。この大きな混乱はわたしを清め、マリア会を清めるものでしかないことを確信しています。この混乱はマリア会に神のみ旨を果たさせるためにより適切でついに違いありません(24)」と書き送りました。混乱がますます大きくなったにもかかわらず、創立者の信頼は堅固になっていました。「このあらしのただ中でわたしが不安になっているなどと考えないでください。マリア会は正にマリアの榮譽のための神の事業です。この事業は人間の助けがなくとも苦難によって浄化された後持続されていくに違いありません(25)」と書き送っていたからでした。

差し当たり、創立者は修練院で、修練者の配慮の下に安らぎを感じていました。1844年7月にルッセル師がリアルモンに退いたので、セン・ターヌの会員

の中に完全に身を落ち着けることが出来たからでした。それでも、その高齢と病弱のため業務を十分果たすことが出来なくなっていました。創立者はシュヴオー師をボルドーに呼び寄せましたが、シュヴオー師は、修練者の一人が、「その徳は評判以上で、天使のような人」と呼んだほど、まれにみる有徳の司祭でした。

ローマの法廷が十分調査した結果を公表したのは1845年7月末でした。マリア会と類似の状況で、ローマはローザン師の修道者たちから調査を依頼されていましたが、ローマはローザン師の権限を維持させ、修道者たちに忍耐するようにと勧告しました。したがって、ローザン師は辞任することなく、また、その活動範囲も比較的狭く、余り複雑でなかったので、修道者たちの運営で、厳密にいて、不振の数年間を維持することが出来ました。ところが、既に250名の会員を擁し、35の施設を数え、創立者が事実上辞任していたマリアはこれと同じではありませんでした。実情の相違は、奉獻・使徒的生活会省側の異なった態度によってもたらされたものでした。同省は、何らちゅうちよすることなく、新総長の選出のため総会が召集されなければならないことを回答してきたからでした。

創立者は聖座の意志に素直に従うことが考えられて、補佐たちはあれこれ誤った推測はしませんでした。創立者が、「わたしは、この敬けんな奉獻・使徒的生活会省の教令をイエス・キリストご自身の命令を受けるのと同じ服従によって受け入れます(26)」と書き送っていたからでした。ところが、不幸にして、早くから、詳細にこの問題に関係したすべての事柄を誇張して考えていたのでしょうか、創立者は、この教令を余りふに落ちない意味に解釈してしまったようでした。創立者はこの教令を、補佐たちは、創立者はすべての権限を辞任した、したがって、総会が召集されなければならないと仮定していたのだ、という意味に解釈したのです。創立者は、「非道な父親がなすように、わたしが会員を全く見捨てなければならないと、教皇聖下が考えられるなど、どうして認められるでしょうか」と書き送っていたからでした。これは創立者の特徴的な心遣いが認められたくだけりです。

ボルドー及びブザンソンの大司教とアルビーの司教はこの教令をこのようには考えず、周囲のことを意に介せず先に進むこと、すなわち総会の召集を評議員会に要請しました。10月の初旬、総会が最も共同体の多い地域の近郊、セン・ルミに召集されました。代議員の一人が、「Roma locuta est」(ローマは話した)と言ったように、修道院長たちも皆こうした言葉をつぶやきながら重い気持ちで忠実に召集に応じました(27)。2日間の祈りと断食の後、1845年10月8日、代議員はカイエ師に総長の権限を委任しました。そして、補佐として、

シュヴオー師、フォンテーン師、クルーゼ士を選出しました。既に知られていたように、カイエ師は信心と愛徳のあかしの人でした。フォンテーン師は1832年、ドゥ・シュヴルス大司教側の多くの反対を乗り越えて副助祭に叙階された聖職者でした。師は数年前からセン・ルミの寄宿学校を指導し、早速、司教や全マリア会からの評価を得ていました。クルーゼ士の事業管理能力は会にとって不可欠なものでした。会の財政状況が絶えず危機にさらされていた時、その腕前が極めて必要だったからです(28)。

創立者は忘れ去られていたのでしょうか。そうではありません。総会代議員の会合が続いていた5日間、彼らは不在の創立者のことを常に考えていました。代議員たちは新評議員に対して、創立者への最も緊急な要請、すなわち、当然の要請をしました。それは、評議員たちの創立者に対する愛と尊敬が代議員たちに心配されていたからでした。代議員たちは子心の感謝と愛情の気持ちを表明した次のような長文の感謝の建議書に署名することなく解散することを望まなかったからでした。「わたしたちの子心の願いと叫びを聞いて下さる尊いマリアは、わたしたちの負債の大半の返済義務を果たして下さるに違いありません。マリアのみ手がボン・ペールの苦しみを和らげ、心に幸せと安らぎをもたらす慰めをそそいで下さることを期待しています。」

この慰めの言葉は苦悩に悩む創立者の心にたちまち落ちつきをもたらしました。しかし、またしても、「わたしは選挙が全然行われなことを望んでいたのです」という頑固な良心の叫びが聞かされたのです。ボルドーに帰った新評議員たちが創立者にいんぎんに接したことも、また、ドンネ大司教ご自身、創立者を訪れて落ち着かせようと努力されたことも、セン・ルミで開催された総会の批准のための奉献・使徒的生活会省の第2回の告知も効果がありませんでした。こうした苦しみは精神上の不調からではなく、身体上の不調からのものであったとはいえ、理論的な働きはほとんど無力になっていたからだと思います。

長引く苦痛は拷問になりました。会員や友人たちはその苦しみを和らげてあげようと心を砕きました。友人の中でも、セン・クロードの敬けんなドゥ・シャモン司教の優しさに比べられるものは何もありませんでした。司教は80歳で病弱、そして、その聖職にもかかわらず、最も熱心な通信をボルドーの旧友のシャミナード師と時間を惜しまず精力的に交わっていたからでした。こうして、司教は最もすばらしい友情のあかしを惜しげもなく表し、シャミナード師を慰めるためにどのような方法もおろそかにしませんでした。時には、特別な友情を想起して、「わたしはだれよりもあなたに好意を寄せ、尊敬しています。あえて付け加えませんが、わたしにとっても困難な、そして、わたしの気持ちにも、あなたの多くの親しい会員の気持ちにも苦しいあなたの苦しい立場をわたしの力で和らげること

が出来れば、このことはわたしにとっても困難なことですが」と書き送っていました(29)。また時には、大きな苦しみの価値を次のように想起させました(30)。

「あなたの強い信仰はわたしを安心させ、マリアの力強いご保護に対するあなたの信頼、敬けんな忍従、神の聖なるみ旨に対する余すところのない完全な服従は、わたしに大きな期待を与えてくれます。それは、この流たくの地を数年前から、主のみ心にかなうように過ごさせていただいている苦しい試練を、あなたが喜んで、現世と永遠のための大きなお恵みとして受け入れているに違いありません。『Per multas tribulationes oportet nos intrare in regnum Dei』(わたしたちが神の国に入るには多くの苦しみを経なくてはならない)使徒行伝、14-22」

また、司教は、時には、教区にあるマリア会とマリアの娘の会の共同体に創立者のために告知したばかりの特別な祈りを創立者に伝えました。その祈りは40日の免償で豊かにされ、次の意向が明記されていました(31)。

「第一は、神の意志に従ってあなたを導くために今日必要とされる聖霊の光をマリアの力強い仲介によって主に求めることです。第二は、忍耐、勇気、身体的及び精神的な力は、あなたが置かれている苦悩の中で、あなたの温情の心に必要欠くべからざるものです。第三及び最後のものは、あなたがふさわしい創立者になっているマリア会の絶え間なく拡大する繁栄、また、敬けんな創立者のあなたにとって極めて大きな会の繁栄です。このマリア会のためにあなたは全生涯をささげ、全力を尽くして、また、出来る限りの手段によって、イエスのみ心に、また、わたしたち各人にとって極めて優しい哀れみ深い、そして、わたしたちすべての人にとって聖なる母、無原罪の御宿りの聖なる乙女マリアへの献身を普及するために献身したのです(32)。」

マリア会がこうした試練の中で支えられ、すべての会員が神の明らかな保護を感じていたことはすばらしいことでした。レオン・メイエ師は、「もし、マリア会が神の事業でないとするなら、久しい以前からマリア会は消えていたに違いないと、わたしはバルドゥネ師に進んで話しています(33)」と書き送りました。また、創立者自身もマリア会について教皇大使に、「神は哀れみのおぼし召しによって、マリア会の創立を望まれました。したがって、マリア会はふるいにかけてられなければ、神のみ旨にかなうことが出来ないに違いありません(34)」と伝えられていました。マリア会はその通りでしたし、神の祝福はその試練に応じて増していくように思われました。それは、マリア会がフランス南部、北部のアルザス、ファンシュ・コンテ、そして、スイス等、至る所で著しい発展を遂げ、また、外国から、特に、アメリカ合衆国から新規の要請が寄せられていたからでした。また、マリ

ア会の内部でもこの危機を乗り越えるために熱心の増加が求められていたからでした。そこで、会員はこの恐ろしい危機の結果が報われるように忍耐して修道生活の義務をより忠実に果たすよう努力しました。

創立者も会員と同じように熱心に祈りました。1845年10月から最後まで離れなかったラランド通りの小さな住まい(35)に帰った創立者の幸せは、マドレーヌの教会に降りて行って聖体の前で長時間過ごし、無原罪の御宿りの乙女マリアの祭壇(36)の下で、その苦痛を訴えることでした。ここは、創立者がミサをささげ、献身と信頼の気持ちで天使祝詞を小声で唱えながら、ロザリオをつまぐっていた祭壇でした。部屋に帰ると、敬けんにマリアを念とうするように、秘書に書き取らせた祈りを続けて唱えていました。創立者が好んで唱えた祈りは、多くの場合、このような苦痛の時に最もふさわしい悲しみの聖母への献身の祈りでした。

このようにして、創立者はその勇気を支え、決して忘れることのなかったマリアへの信頼を維持し続けました。マリアの祝日の一つを迎えると喜びに心を躍らせていました。1846年の聖なるマリアのみ名の祝日には、ドンネ大司教に、「今日教会がお祝いする尊いマリアのみ名に支えられて、私はこの問題に決着をつけて、マリアのみ名に榮譽をもたらすために．．．わたしが持っていると考え理由については何も申し立てないように致したいと思います。主の霊がこのような考えを抱かせてくださったのは今朝の起床の時でした(37)」と書き送りました。マリア会については次のように付け加えました。「マリアの聖なるみ名を持つ輝かしい本会は、尊い本会の初期の目的に到達するため、再び堅固に前進出来るに違いありません。」そして、最後に、この同じ書簡で、大司教がかかれたとの病気を想起して、

「大司教様が体調をくずされたとのこと、私も大変心配しています。大司教様の回復のためヴェルドレの聖母に願をおかけになれば、私は喜んで果たしたいということ、シュヴォー師が大司教様にお伝えしたかどうか分かりませんが。ずっと以前から、私はヴェルドレに巡礼するつもりで、現在の問題が片づけばヴェルドレの聖母に感謝をささげ、わたしの力に応じてヴェルドレの教会に何かを贈りたいと考えていました」と書き加えました。

創立者はまだゆっくり歩くことが出来、毎日曜日と毎木曜日には喜んでセン・ターヌに行っていました。修練者たちは創立者の側に集まり、その苦痛を忘れさせるように努めました。特に夏休みの間、管区のすべての会員が集まった時、彼らとまた共に生活していることを感じ、その重々しい落ち着いた声で彼らと喜んで話していました。その教話は年齢にしては驚くほどの活力を感じさせ

ました。時々、総長辞任のデリケートな問題に触れると、避けることが出来なかった良心の要請と愛する会員の一一致の希望によるじれんまの心の奥で耐えていた苦しい戦いの声がもらされるのでした。対話の大半は信仰と自己放棄が主題になり、地獄に勝利を博した無原罪のマリアに限りない信頼を表明することを決して欠かしませんでした。聖務の終わりにはMagnificatを喜び勇んで歌い、それから教会を出るとぼだい樹の広い並木道の奥に建てられていた無原罪のマリアの銅像の下まで行っていました。ある日のごときは、マリアの足と蛇の頭に震える手を置いて、「ともかく、マリアはお前の頭を踏み砕き、これからいっつもお前を踏み砕くのだ」と言って大きな仕草でなでていました。

次の年も、常にある考えに悩まされていた老創立者にとって悲しい年になりました。その悲しみは多分新しい総本部員によるものでした。大きな心配が補佐たちの心を奪っていたのです。主要な問題の幾つかは、すなわち、マドレーヌやミレール通りの建物等、マリア会の不動産がシャミナード師の名義になっていたからでした。ところが、マリア会にその名義を移転する公正証書の公布を待つことも賢明ではありませんでした。それは、宗教反対の裁判官が元の所有者にそれらの不動産を返還させるに違いなかったからでした。このことは驚くことではありませんでした。創立者の下にいた気まぐれで、細心の秘書が更に問題を複雑化していたからです(38)。しかし、今回は、特に親切で、常に誠実なセン・クロードの司教が仲裁に入ってくださいました。しかし、その努力も成功しませんでした。そこで、これらの財産がマリア会にどのように所属していたかを確証するために、創立者の信用のおける人を指名するよう創立者に要請してきました。その結果、創立者の帰天前に、マリア会にとって不可欠の膨大な不動産の所有権が返還されました(39)。

ところが、ボルドーのある主任司祭(40)がそれらの不動産の分割を提案したのでした。このことは他の何よりも創立者と会員を傷つけました。会員のどれもそのようなことは考えていなかったし、そのことは会員の分裂にも近かったからでした。良心の義務に基づいて相互に主張し合った争いではありましたが、会員は驚くほど仲むつまじく、なお、驚くほどの相互の信頼の中で生活していたからでした。それはあたかも自分自身を折半することが出来るとすれば、一方を論争の対象に、もう一方を変わらない愛情の側に置くようなものでした。会員は皆同じ屋根の下に住んでいたからです。会員は、その年齢と募る病弱のため不可欠になった配慮を創立者に惜しみませんでした。カイエ師はどのようにすれば創立者を安心させ、安らかな気持ちにさせることが出来るか気を配っていました。1846年末、創立者の感覚が日々ますます衰えていったので、聖マリアのミサをささげ、聖務日課の代わりに晩課とロザリオを唱える許可を与えました。それから、2年後、創立者がミサをささげることが出来なくなった時には、カ

イエ師は毎日自らの手で聖体を授けました。

こうして、1849年に及びました。創立者には、すべての旧友や協力者たちが次々に帰天していくのを感じました。ブエ師は1848年5月25日に帰天し、1849年1月16日、創立者の下で最後に帰天したのはダヴィド士でした。神は創立者の良心の要請に最後まで忠実であるという喜びの代償以外のすべての犠牲を課せられたのでした。それは、創立者が最後まで自らの良心に忠実であり、一瞬も神に背かないためでした。生涯の最後の数箇月、会員との間に新たな試練が起きていたにしても、最も感動的な言葉で和解したのは、良心から奪うことの出来ない権利を常に保留して置くためでした。会員が創立者の様々な願いを聞き届けることが出来たことは何と幸いなことだったことでしょう。彼らは創立者に寛容さ、完全な子心の愛情をあかしし、もう一度、ボン・ペールの意向に敬意を払うよう努力し、ボン・ペールの臨終が近づいた時、和解の仕方を見いだすよう考えていたに違いありません。

創立者が89歳を迎えようとしていた1850年が明けたばかりでした。1月6日の日曜日の晩、異変の前兆が現れました。脳卒中によってその右半身が不随になったからでした。言葉が話せなくなりましたが、意識ははっきりしていました。会員の間に深い不安が走り、ボン・ペールの下に集まりました。そのゼスチュアで分かったことは、会員が取り組んでいる問題の解決を出来るだけ早く実現するのを見たいという強い希望でした。会員は喜んでそのことを承知しました。翌日、危険が差し迫っているように思われました。昔の恩師の下に駆け付けたコリノー師は病者の秘蹟を授ける榮譽を申し出ました。のどのけいれんため聖体拝領は出来ませんでした。今にも臨終を迎えるのではないかと会員はかたずをのんでいました。ところが病状はすこしずつ持ち直されました。それから2週間、余命を保っていました。のどの感覚は取り戻されましたが、話すことは出来ませんでした。ただ、深呼吸をすれば聖体を拝領することが出来ました。ボン・ペールの助かる希望が失われた時、カイエ師は2回目の聖体を授けました。創立者と懇意にしていた人々が病人のベッドの側に来て、苦しみを耐えるように勧め、最後の祝福を願っていました。大司教が病人の下を訪れたのは最後ではありませんでした。臨終に望むシャミナード師の敬けんな気持ちに深く感動して帰られました(41)。

少しずつ創立者の命の火が消えようとしていました。輸血も五官の力を快復させることが出来ず、病人の力を衰えさせるだけでした。脈拍も弱まり、身振りもより少なくなりました。しかし、臨終の時までその意識は正常でした。補佐たちは病人のまくらべを離れませんでした。臨終の苦しみが1月22日の午後3時ごろから始まりました。カイエ師は次のように伝えました(42)。

「臨終の近づいたことを感じたボン・ペールは、衰えた手で十字架を取って、いねいに口づけし、信仰の行為を繰り返そうとしましたが、手に感覚が無くなっていましたので、十字架を胸の上に落としてしまいました。しかし、創造主にその魂を返すまで、十字架を胸に押し当てていました。」

カイエ師は、この時、集まった涙ながらの多くの会員と臨終の祈りを唱えました。時は午後4時ごろでした。

以上が神の人の最後でした。それはその生涯のように誠実な人の帰天でした。

翌日、信者たちが、およそ50年間疲れを知らない宣教活動のあかしの場となっていたマドレーヌの教会に安置された遺体の側に集まりました。彼らは遺体に色々な物を触れさせ、ゆかりのものを奪い合うようにしました。頭髮の一部を手に入れた人は最高に幸せに思いました。

葬儀は1月24日、木曜日、教会参事会員の葬儀の習慣に従って荘厳に執り行われました。まず、マドレーヌでの葬儀が先に行われ、遺体は公式の葬儀の行われるセン・タンドレのカテドラルに移されました。カテドラルは会葬者でいっぱいでした。特に目立ったのはボルドーの学校関係の人々、そして、それぞれの理由で何らかの奉仕にあずかった修道会の方々でした。それから、遺体はシャルトルーズの墓地に運ばれ、司祭用の納骨室に収められました。

一度、死者の葬儀が終わると人々は静かに帰途につきました。新聞の死者欄には何らの記事もなく、当時、葬儀にあずかった多くの司祭がいましたが、何らの追悼演説もありませんでした(43)。創立者が生涯喜びを見いだしていた控え目な態度はその帰天後も様々な形で表明されたわけです。そのよって来る理由は一般には分からないにしても、このことによって驚かされる当然の理由があったのでした。

その遺体にささげられた尊敬のあかしがどうであれ、ボルドーの大衆世論はシャミナード師の人格には無関係であり、むしろ、何も知らなかったのでした。創立者の帰天後20年、その個人的な活動のうわさは市内から消えていました。新しい世代はシャミナード師のことを知らずに育ち、その氏名が想起されるのは、「多くの事業を創立した(44)」尊敬すべき人という漠然とした考えでしかないように思われます。

創立者を率先して評価しなければならないように思われたマリア会も同様に沈黙の内に引きこもっていました。しかし、悲しみは深刻でした。全会員は、マリアの娘の会のメール・セン・ヴェンセン総長が(45)、「ボン・ペールはわたしが

心を奪われた父のような方であったことを強く感じていたことを素直に白状します」と述べたことを同じように感じつづやっていたのでした。しかし、創立者の生涯を優れた表現で描写したカイエ総長の感動的な二つの回章(46)によって、会員は悲しみを口にしなくなりました。会員が口をつぐんだのは、当時もたらされた試練による苦悩を和らげる配慮を時の経過に任せるためだったのではないのでしょうか。創立者によって要請された会員の一致がこの試練を要請し、そして、創立者の関心はその帰天の時まで会員個人個人に向けられていたからでした。

それにもかかわらず、創立者は忘れ去られなければならなかったのでしょうか。また、世の人々のだれよりも苦しみ、そして、神のお恵みの最後のあかしとして受けた試練に対して、人々の前に犠牲にならなければならなかったのでしょうか。この問題に関してはみ摂理ご自身が答えられるに違いありません。

一方、マリア会においては、創立者に対する思い出は丁寧に維持され、一種の家庭的な、内輪の思い出にしてしまいました。しかし、外部の人々は遠ざけられ、忘れられていた思い出を積極的に引き出すよう要請してきていました。マリア会に残ることは出来ませんでした。創立者の昔の弟子で、創立者に深い尊敬を表していた、そして、その親密さはだれも否定出来ませんでした。エティニャル師は、1871年に創立者にふさわしい記念碑をシャルトルーズの墓地に建立するためにその財産の一部を贈呈する計画を抱いていました。エティニャル師はこの計画を実行し、創立者の全生涯、すべての事業(47)をとりなして下さった無原罪の御宿りの乙女マリアの銅像のある極めてすばらしい霊廟を実現しました。1871年11月14日、マリア会の総長の代表と数名のマリア会員及び贈呈者の出席の下に創立者の遺骨がここに転葬されました(48)。

どのように申してよいか分かりませんが(49)、やがて、人々はこの墓地の所在を知り、ここにぬかずき、花をささげ、祈りをし、お恵みの取り次ぎを願いました。そして、それはしばしば聞き入れられたとのこと。こうした競争の性格や重要性を評価する権利はありませんが、このことは不思議であるばかりでなく、このことに関心を示している多くの人々は、そして、この墓地を訪れる人々は、創立者の生活も、事業も知らず、ただ、神の人としてしか知らないことを記載しなければなりません。



注

(1) 1838年1月23日、フルトフォンテーヌ共同体

(2) 1841年6月5日、シュヴオー師へ

(3) この最後の旅行は1842年5月になりました。

(4) ジャン・ジョゼフ・マリー・ドゥ・ジェルヴァニオン大司教は1796年3月8日、フユイに生まれ、遅れて聖職に入り、1835年にセン・ディエの司教に、1843年にアルビの大司教に任命されました。大司教は18世紀の司教のような欠点のない様々な長所を備えていました。その品位、信心、そして、柔和さは教区に深い思い出を残しました。1864年11月20日帰天しました。

(5) アルビ教区の司教総代理のヴェルニュ師はシュヴオー師にシャミナード師について次のように書き送りました。「わたしは、シャミナード師ほど尊敬される人はだれもいないと思います。シャミナード師は、ご自分に最も必要なこの種の働き手をマリア会に与えたことで評価され、たたえられるからです。」

(6) レストラドの自筆の覚え書き

(7) 1849年に最初の修道者が北米に出発した時、院長がじょうだんでビドン士に、彼らに同行する気持ちはありませんかと尋ねると、命令だと受け止めた老修道士のビドン士は何らの反対も考えず出発の準備にとりかかりました。

(8) カネットの自筆の覚え書き

(9) レストラド

(10) カネットの覚え書き。創立者は修練者たちに熱誠の修得を手ほどきし、要理を教えさせるため彼らを病院に送り込みました。

(11) この点では、「わたしが好むのは清貧であって、不潔さではありません」と語った聖ベルナルドの気持ちを分かち合っていました。

(12) レストラドの覚え書き

(13) レストラド

(14) シャルル・ドゥ・フォルベン・ジャンソン司教(1785-1844)は、ローザン師の最も熱心な援助者の一人でした。司教はダヴィオ大司教が申し入れたボルドーの補佐司教を断り、1823年ナンシーの司教に任命されました。宣教への活動、復興政府への親近感7月革命の勝利者の悪意にさらされました。1830年後、教区への復帰が認められませんが、1835年にボルドーの司教座に任命されました。ドンネ大司教とマンジョー司教の二人の補佐司教の代理を引き続き務めました。フォルベン・ジャンソン司教はヨーロッパやアメリカの巡回宣教を継続するため、また、幼きイエズスのすばらしい事業を確立するためその余暇を利用しました。司教は幼きイエズスの事業の真の創立者になりました。フィリップ・ドゥ・リヴィエル著、「同司教の生涯」ポワチエ、ウデン出版。

(15) 1838年5月30日、レオン・メイエ師よりシャミナード師へ

(16) 1840年11月2日、レオン・メイエ師へ

(17) 「信仰の友」、5巻、129ページ。師は79歳で1811年12月15日帰天しました。

(18) ドゥ・ラ・ポルト師著、1892年版、328ページ

(19) 詩編89。ヘブライ書のテキストはこの意味に対応しません。

(20) 異なった道ではありましたが、相互に宣教生活に献身した彼らは男女の修道会を創立することになり、同時に、悔悟した少女たちの施設を作ることになりました。ローザン師によって創立された修道会はミゼリコルドの司祭会と聖クロチルドの修道女会でした。悔悟少女の施設はアンフェル通りの善き牧者の建物でした。師は1847年9月5日、シャミナード師とほとんど同じ年齢で帰天しました。

(21) 1845年6月13日、カイエ師へ

(22) 1844年8月31日、カイエ師はレオン・メイエ師に次のように書き送りました。

「先の2月以来、ボン・ペールの3補佐に対する行為は、わたしにとって不思議で仕方ありません。．．．また、わたしに説明出来ないことは、高齢になって記憶は悪くなり、しばしば思い違いをし、精神も身体と共に衰弱していますが、他の人々が忘れてしまいそうなことを記憶に止めているということです。このことは司教方や創立者のことが分かっている人々が皆同じように考えています。ラン師も次のように述べました。「創立者の奇妙な理屈や失われた鋭敏な推論、根拠のない推理は、正式にこの問題を学んだ人々にはだれにも精神が衰え、正確な考えが失われたことを示している。」(歴史概要、73ページ)

(23) 1845年9月9日、レオン・メイエ師へ。「光の霊に代わったサタンの霊は神から大きな許可を得ました。」(inimicitias ponam inter te et mulierem)創世記、3-15。(お前と女の間にはわたしは敵意を置く)

(24) 1845年10月7日、シュヴォー師へ。一般にすべての手紙はこの時期のものです。

(25) 1845年9月9日、レオン・メイエ師へ

(26) 1845年8月21日、ドンネ大司教へ

(27) ロテア師。師の兄弟のルイは1844年に帰天しました。ロテア師は1868年まで生きていました。

(28) フォンテーン師とクルーゼ士は1861年の何箇月間の間に帰天しました。フォンテーン師は6月3日、クルーゼ士は2月27日でした。

(29) 1845年11月5日

(30) 1846年11月30日

(31) 1845年12月22日

(32) ドゥ・シャモン司教は更に次のように付け加えました。「あなたの慰めのために神に毎日ささげるこれらの祈りの代償として、あなたの会員の皆さんの力強い助けをお願い

致します。それは、多少とも近い将来の最高審判者の下に行って、この涙の谷で過ごした79年、そして、極めて重い負担であり、常に、押しひしがれていた世の不幸な生活の中で、更に、それ以上になった司教職の23年を含めた聖職の55年について厳しい、恐るべき精算をわたしの力の限りふさわしく準備しなければならないからです。」聖人のような司教は1851年5月28日帰天しました。それから1年後シャミナード師が帰天しました。

(33) 1845年11月2日、カイエ師へ

(34) 1846年2月12日

(35) 当時は2番地で、今日では4番地

(36) 右の祭壇

(37) 1846年9月13日

(38) その人は確かマリア会への受け入れを望まれなかったポール・ボンヌフでした。彼は信仰心に富んでいたもので、シャミナード師の帰天後、出身地のレキスタ(アヴェイロン)で博愛修道会を創立しました。しかし、会員はほとんどいかなかったことを伝えなければなりません。

(39) 創立者所有の財産は、創立者の遺言によって、特に除外した家族にではなく、ボルドーの救済院に寄贈されました。しかし、マリア会の危惧を弁護した原所有と救済院間で争われました。

(40) ノートルダムの主任司祭で、教会参事会員のジュドリエ師

(41) これらすべての詳細は1850年1月19日と3月21日付けのシュヴォー師からメイエ士への手紙(メイエ士は当時アメリカにいました)、また、シャミナード師の帰天後ボルドーにいたドマンジョン師やラメイ師の回想録によります。

(42) 1850年2月3日の回章

(43) 出身地のペリギューでも静かでした

(44) イエズス会士P・エロール師の証言

(45) 1850年1月25日シュヴォー師へ

(46) 1855年1月22日と2月13日の回章

(47) 1878年ボルドーで帰天したブザンソン教区の主任司祭

(48) 祈念碑に記されている記録は余り正確ではなく、エティニャル師によって固有の考えが反映されています。その上、この墓標には、その後埋葬されたダヴィド士やララン師、そして、エテツィニャル師自身の記録も含まれています。

(49) カイエ総長は、この種の行為をそそのかし、奨励することに関係しないよう会員に要請しました。

後書き

シャミナード師は、自らの使命の超自然的な起源を深く確信して、全生涯をこの使命にささげ、臨終に当たって自らの肩により重くのしかかった十字架を感じましたが、好んで福音の次の言葉を繰り返しました。「*Nisi granum frumenti cadens in terram mortuum fuerit, ipsum solum manet*」(ヨハネ、12-24)一粒の麦は地に落ちて死ななければ、一粒のままである。創立者は死の前に息をつく暇もないほどの苦痛に心身を委ねながら、最後の休みの時まで会の発展のために献身しました。多くの修道会の創立者のように、また、彼らの中の最初の創立者であった御主ご自身のように、最高の殉教によってその使命への忠誠をあかしたからでした。

創立者の犠牲は本当に実ったのでしょうか。このことを疑う者はだれもいないと思います。しかし、だれが諸聖人の通交の神秘を考え、寛大な魂の犠牲を評価する恩恵の力を評価することが出来るのでしょうか。また、外的な、具体的な活動を評価することが問題でないとするなら、み摂理のどのような法則によって宣教活動の効果的な期間や手段を評価することが出来るのでしょうか。この点に関するすべての判断は控え目にするにしても、いずれにしても、シャミナード師の宣教活動から明らかに生じた成果の記録を制限することはより賢明でしょうか。こうした考えで、マリア会の現状を一べつし、創立者にならって、会員が秘密にすることを好む秘密をいずれ明らかにしたいと思います。

シャミナード師の個人的な聖職によって行われた40年の宣教の生涯は、確かに世の荒波の航跡にさらされ、やがて、人間活動の絶え間ない波動によってうち消され、当然その帰天と共に忘れ去られることが予測されました。しかし、時代の要請に応じて修正されることを免れなかったコングレガシオンは、創立者自身及びその後継者の手によって何回か組織替えされ、初期の名称や組織形態は失われましたが、創立者の帰天後もその影響を浸透させていきました。多くの青少年に信仰を確立したコングレガシオンはキリスト教徒の家庭の増加をもたらし、宣教活動の炎をともし、初期の成果を世代から世代に更新させ、不死鳥のようによみがえらせ、増強し、普及し、倍增する多くの事業を興しました。創立者の忍耐強い考えによるものでしょうか、このコングレガシオンはゆっくりした足取りではありましたが、確実に、整然として、創立者が生涯の最後の30年間献身した修道会の創立に絶え間なく歩み続けていたのでした。このコングレガシオンはその固有の存在活動によって世に大きな反響をもたらしました。こうした反響の永続によって、ここから宣教活動の軍団が召集されること

になりました。

ミゼリコルド会、マリアの娘の会、マリア会の3修道会がシャミナード師を創立者に仰いでいます。

「ミゼリコルド会」の精神、慣習、会則は、部分的にしかシャミナード師に負うところはありませんが、ドゥ・ラムルス嬢と共に創立者としての権利を持つ者として、これらの事項はシャミナード師に帰せられなければならないと思います。第一、シャミナード師はミゼリコルド会の創立者という責任を負うことを了承しました。協力者ドゥ・ラムルス嬢の帰天後、共同事業としての配慮がシャミナード師に委ねられた時、このことはより明らかになりました。シャミナード師がマリアの娘の会とマリア会の会憲の認可の申請を伝えて、ランブリュッシニ枢機卿に次のように書き送ったのはこのころのことでした。(1838年9月)

「枢機卿様、私は第三の会にも聖座への取りなしを枢機卿様をお願いしたいと思います。この修道会はその特別な目的から他の二つの修道会とは別になっていますが、ボルドーの大都市で、前世紀末からその舞台となったみ摂理の奇跡によって他の修道会を支えるためにすばらしい貢献をしました。しかし、私は創立者ドゥ・ラムルス嬢の残した会憲に手を着けることは出来ませんでした。近い内にこれを検討したいと思っています。もし、枢機卿様にご了承いただければ検討済みの会憲の草案をお送りしたいと思います。問題は教会法上の制定でなく、修道会としての単なる認可と会則の認可だけです。」したがって、シャミナード師はミゼリコルド会の会憲に教会の決定的認可を受ける権利と義務があることを考えていました。シャミナード師は最後までこれを実現出来ませんでした。後継者のカイエ師は、シャミナード師の考えの下にこの職責を完遂しました。

シャミナード師の事業であり、メール・ドゥ・トランケレオンの事業でもあった「マリアの娘の会」は、ミゼリコルド会とは別になっていました。その活力と発展に必要なすべての手段を備え、田園地帯にまで活動を展開することが出来た在俗修道女会に支えられたマリアの娘の会は順調に発展しました。長い間、1832年の一時的な危機以外の他の停滞は感じられませんでした。しかし、試練が待っていたのは、シャミナード師の帰天後でした。会憲は改訂され、マリア会と緊密に結ばれていたきずなは断ち切られました。ローマの聖座はこの種の依存関係を奨励せず、両修道会を完全に分離するような両者の何らかの誤解を利用したからでした。当然の結果として、マリアの娘の会と在俗修道女会との関係も弱体化しました。

内部の再組織の困難によってその発展が阻害されたマリアの娘の会は、そ

の漸進的な発展を新たに回復するため、数年間内省をこらしていました。1888年に聖座から与えられた厳粛で決定的な認可によって、幾つかの外国から寄せられた招へいに応じて発展していきました。

その上、会則にもたらされた様々な改訂にもかかわらず、マリアの娘の会は両創立者の精神を聖なる遺産として維持していきました。もし、両修道会が今日のような会則を生きるなら、創立者たちの教えを忠実に再現していくことが出来るに違いありません。また、たとえ両修道会間に公式の関係がないにしても、相互の親密な関係は保証されていくに違いありません。そして、どのような会則もたとえ許可されるにしても、これに代わるものを保証しないという考えや気持ちで、すばらしい共同体の中でこれらの会則を維持するに違いありません。

「マリア会」は、シャミナード師の計画において、当初は会員が大幅に不足し、しかも様々な異論がもたらされた事業でしたが、創立者に揺るぎない信頼を鼓吹した事業でした。最も強力な試練でさえも、その使命に充当する事業でさえあれば会員に決して不安を与えることはありませんでした。不安に思う人には、ユデア人の最高法院でのガマリエルの言葉を繰り返し、次のように解説することに止めました(1)。

「もし、マリア会が神のみ業でないとするなら、そこには多くの懸念すべき事柄があるに違いありません。たとえ、よく組織されているとしても、会は継続しないでしょう。もし、神のみ業であれば、マリア会に対してなし得るすべての非難は会を強化するに役立つに違いありません。しかし、会が意図する目的から逸脱する場合、会はまだ神の事業ではなくなり、崩壊した方が有益であるに違いありません。」

マリア会は障害にもかかわらず、そして、障害によってさえも、強固になりました。会の内部において、修道会の歴史上で新規の土台に基づく会憲は、奉獻・使徒的生活会省の非難によって(1865)、最も厳しい危険がもたらされました。ローマは、修道会が司祭修道者の修道会と信徒修道者の修道会の修道会に区分されてきた数世紀の伝統に従って、マリア会をこの両者のどちらかのカテゴリーに帰属させる希望を表明しました。このことは、どちらの場合に落ち着いても、創立者が導入した基本的原理を改変することでした。また、マリア会全体に大きな衝撃を与えました。

しかし、一度ならず、試練は好転しました。創立者の友人の一人は、「マリア会の善は、各々の会員を継続的に動揺させることを求めているように思われま(2)」と1840年来、言い続けていたことをあかししました。ローマはもっぱら実

情を十分認識することを求めて、ブザンソンの大司教マティウ枢機卿に教皇派遣特使として本会の調査任務を委任しました。枢機卿はすべての終生誓願者から個人的な意見を献身的に収集し、ほとんど会員が一致して、マリア会が創立当初からそうであったように、すなわち、司祭修道者と信徒修道者によって構成された組織の維持を要請していることを確認しました。教皇派遣特使の枢機卿は、マリア会の総長やその補佐を評決する総会を司会された後、その調査任務の結果を報告するためローマに帰りました。1869年1月30日に教令が公布され、多くの動揺の原因となっていた非難事項が削除され、唯一、同一の修道会で、司祭修道者と信徒修道者の一致の原則を公式に批准しました。この両者の一致の条件は、創立者によっても、ローマの教令によっても十分決定されていませんでした。この一致の条件は1891年7月10日、会憲が最終的に認可された時改訂されました(3)。それ以来、堅固な基盤の上に確立されたシャミナード師の事業は強化され、普及し、いわゆる、からし種のように大きく成長しました。フランスでもその施設を増加し、そして様々な外国に普及していきました。創立者の存命中でさえ、最も愛された、最も忠実であった弟子の一人によって、1849年アメリカ合衆国に導入された本会の事業は発展し、この最初のグループによって大洋州の遠い諸島まで宣教の情熱にあふれた会員が派遣されました。

ヨーロッパにおいても、マリア会の事業はフランスの隣国、すなわち、イタリア、スイス、オーストリー、ドイツ、ベルギー等、多くの国に普及していきました。創立者が神からの啓示を受けたと言われるスペインでは、会員も施設も別の管区を作るほどの増加を見ました。こうして、1830年に、創立者がコングレガシオンの一人に次のように書き送った願いが実現したのでした(4)。「あなたがマドリードに滞在している間、あなたの熱誠によってマリア会の事業のためにスペイン国王から権限を頂く適切な機会があるなら、そのために、ダヴィオ大司教からのマリア会の認可書をあなたに送ります……。マリア会の事業はフランスにも極めて有益なように思われていますが、多分、スペインでもそれ以上に有益になるだろうと思います。」

1822年以来、「もし、神に呼ばれたなら、地の果てまで行く(5)」と会員に話しかけていた創立者の希望に従って、アフリカやアジア、特に、日本国に呼ばれたマリア会は、創立者がその道案内の星として与えた乙女マリアのご保護の下に信頼をもって赴き、そこに天から祝福された事業を展開していきました。

シャミナード師によって残された事業の発展をこのように一べつしましたが、わたしたちは、創立者は本当にマリア会の事業の上に生き続けており、土に落ちて豊かな実りをもたらした小麦の種だったと言うことができるのではないでし

ようか。いずれにしても、創立者の弟子であるわたしたちに課された義務は、神の道具であった創立者によって、また、神の光栄とマリアの誉れのためにわたしたちを聖化し、教会に奉仕する手段として与えられた会則によって、わたしたちにもたらされたものを神の前にも、人の前にも、創立者に感謝しなければなりません。また、この創立者の伝記の記述に当たって、詳細にわたって研究し、検討することに協力された方々へのわたしたちの義務は、ララン師が創立者の遺骸の移転会葬の際(1871年9月14日)の葬送の次の言葉を借りて、その証言に感謝しなければならないと思います。

「余りにも忘れられた故人の長い生涯は常に善行に満たされていたと述べさせていただきたいと思います。故人は御主の諸徳の念とうに耐えず専念し、至聖なる無原罪の乙女マリアと聖ヨゼフの力強いご保護の下に、御主の姿を自らの上に再現するよう努力し、また、冷静さ、素直さ、一見して、尊敬と信頼を鼓舞する威厳のある性格を、既に、生来のすばらしさ性格に、優れた性格として特徴付けるまで努力したのでした。故人の言動の証人であるわたしたちは、また、わたしたちと同じようにその証人である神の前で、故人が、それは一口には言えませんが、働き続けていた時間の一時間も、それがたとえ神に関係しないことであっても、神への道に魂を導く事に浪費しなかったことに決して驚かないことを断言します。だれも故人から信仰のためにならない文書、手紙、言葉、教訓、模範、そして、勧めを引き出すことは出来ないに違いありません。故人を、『神の人』と呼ぶ以外に定義することは不可能だと思えます。」



注

- (1) 1842年7月8日、ペッロデン師へ
- (2) 1840年2月11日、クサヴィエ・ロテア氏からシャミナード師へ
- (3) マリア会は最もうらやましい様々なローマからの認可以外に、多くの司教方による賞賛や、その評価や名声が世界的に知られている人々からの貴重な証言を頂きました。これらの証言の中に、アルスの主任司祭ヴィアンネー師の証言を記さなければなりません。ヴィアンネー師はマリア会の司祭バベ師との対話の中で、「わたしはマリア会を知っています。この会は神の教会に大きな善をなすために呼ばれたものです。この会は世の終わりまで続くでしょう。そして、このすばらしい会で死亡するすべての修道者は天国に行くでしょう」と話されました。この証言はバベ師の確実な信念の下に証言されたものです。
- (4) 1830年10月27日、オロンベル
- (5) 1822年の黙想会